

大阪市内埋蔵文化財包蔵地
発掘調査報告書

(2012)

2014.3

大阪市教育委員会
(公財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所

例　　言

1. 本報告書は平成24年度の大阪市内埋蔵文化財発掘調査の概要を集めたものである。
2. これらの調査は大阪市教育委員会の指導のもと（公財）大阪市博物館協会大阪文化財研究所が各原因者より委託をうけて実施したものである。
3. 本報告書の執筆は（公財）大阪市博物館協会大阪文化財研究所 南秀雄の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。その氏名は各報告書に記してある。
4. 本報告書の編集は大阪市教育委員会文化財保護担当において行った。

目 次

北 区	
長柄古墳発掘調査 (NR12-1) 報告書	1
天神橋遺跡発掘調査 (TJ12-1) 報告書	11
天神橋遺跡発掘調査 (TJ12-4) 報告書	33
天満橋1丁目遺跡発掘調査 (TW12-1) 報告書	45
中 央 区	
難波宮跡・大坂城跡発掘調査 (NW12-1) 報告書	55
難波宮跡・大坂城跡発掘調査 (NW12-2) 報告書	65
難波宮跡・大坂城跡発掘調査 (NW12-5) 報告書	77
難波宮跡発掘調査 (NW12-6) 報告書	87
難波宮跡・大坂城跡発掘調査 (NW12-7) 報告書	103
大坂城下町跡発掘調査 (0J12-1) 報告書	109
大坂城下町跡発掘調査 (0J12-2) 報告書	117
大坂城下町跡発掘調査 (0J12-3) 報告書	127
大坂城下町跡発掘調査 (0J12-9) 報告書	143
大坂城下町跡発掘調査 (0J12-10) 報告書	155
大坂城下町跡発掘調査 (0J12-11) 報告書	163
大坂城跡発掘調査 (OS12-3) 報告書	177
大坂城跡発掘調査 (OS12-6) 報告書	193
大坂城跡発掘調査 (OS12-7) 報告書	203
大坂城跡発掘調査 (OS12-8) 報告書	215
大坂城跡発掘調査 (OS12-9) 報告書	225
大坂城跡発掘調査 (OS12-16) 報告書	253
大坂城跡発掘調査 (OS12-19) 報告書	273
大坂城跡発掘調査 (OS12-20) 報告書	281
大坂城跡発掘調査 (OS12-29) 報告書	293
大坂城跡発掘調査 (OS12-35) 報告書	309
上本町遺跡発掘調査 (UH12-3) 報告書	321
天王寺区	
堂ヶ芝麻寺発掘調査 (DS12-1) 報告書	329
北河堀町所在遺跡発掘調査 (KC12-2) 報告書	339
伶人町遺跡発掘調査 (RJ12-1) 報告書	345
浪 速 区	
浪速元町遺跡発掘調査 (NK12-1) 報告書	365
桜川遺跡発掘調査 (SL12-1) 報告書	373
東淀川区	
三宝寺跡伝承地発掘調査 (SP12-1) 報告書	381

住吉区	
南住吉遺跡発掘調査 (MN12-1) 報告書	391
東住吉区	
中野遺跡発掘調査 (CN12-1) 報告書	397
杭全遺跡発掘調査 (KP12-1) 報告書	407
平野区	
喜連西遺跡C地点発掘調査 (KR12-4) 報告書	413
長原遺跡発掘調査 (NG12-4) 報告書	425

北区本庄東三丁目における建設工事に伴う
長柄古墳(NR12-1)発掘調査報告書

調査個所 大阪市北区本庄東3丁目10-12
調査面積 22m²
調査期間 平成25年3月13日～3月15日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、岩本正二

1) 調査に至る経緯と経過(図1・2)

長柄古墳は北区本庄東三丁目に所在すると推定される古墳である。城北公園通りの北側にある工場の敷地内で5世紀前半の家形埴輪[中村博司1975]が採集されたことにより、この地で古墳の存在が指摘された[上田宏範1988]。古墳の存在が推定される地域は、上町台地の先端から北に約3kmの位置で、「天満砂堆」と呼ばれるTP+2~6mの微高地が0.6~1.5kmの幅で北に延びており、この砂堆の北部に当る。これまでのところ古墳の存在は確認されておらず、実態については明らかでない。

また、長柄古墳のすぐ南にある本庄東遺跡では、1998年に実施されたHH97-1次調査で、弥生時代後期～古墳時代前期の溝や土壙、近世の土壙や鶴溝を確認している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999]。2001年に実施されたHH01-2次調査では、古墳時代前期の溝・土壙などが見つかった[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003]。本庄東遺跡に東接した地点で2010年に実施された本庄東遺跡B地点HH10-1次調査では、17世紀末～18世紀前半の土壙や19世紀の鶴溝を検出している[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012]。

建物建設予定地で実施された大阪市教育委員会による試掘調査で、現地表下約1.5m以下において、中世の遺物包含層および遺構面の存在を確認したため、発掘調査を実施することになった。

東西5.0m×南北4.4mの調査区を設定した。開始前に事業者によって盛土・搅乱層(第0層)が重機による除去がなされ、その後3月13日より、それ以下の層を人力により掘り下げ、遺構の検出・実測・撮影など必要な記録作業を行い、3月15日に現場におけるすべての作業を完了した。

本報告で用いた方位は図1は真北で、それ以外は現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系に基づく座標北である。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)



図1 調査地位図

で、TP+○mと記した。

2) 調査の結果

i) 層序(図4)

調査地周辺は東側が高く、南西方向に向かって低くなる。調査区東側の現地表面はTP+3.02m、西側はTP+2.81mである。

第0層：現代の盛土・擾乱層で、建物解体時のものである。層厚70~100cmである。

第1層：シルト質砂が主体で第1a・1b層の2層に細分された。第1a層は細礫を含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質極細粒～細粒砂の作土層で、層厚約20cmである。第1b層は細礫を含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質細粒砂の作土層で、層厚約15~20cmである。18世紀末～19世紀前半の陶磁器が出土した。

第2層：細礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質極細粒砂の作土層で、層厚約15cmである。17世紀後半～18世紀初頭の肥前陶磁器が出土した。

第3層：シルト質砂が主体で、第3a・3b層の2層に細分された。第3a層は細礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)ないしオリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質極細粒～細粒砂の作土層で、層厚約15cmである。上面よりSK01を検出した。層中より15世紀後半～16世紀前半の土器が出土している。第3b層は細礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質細粒砂の作土層で、層厚約10cmである。中世の土器細片が出土した。

第4層：細粒砂が主体で第4a・4b層の2層に細分された。第4a層は細礫を含むオリーブ褐色(2.5Y3/3)ないし暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂で、層厚約10cmである。12～13世紀代の遺物が出土した。第4b層は細礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒～細粒砂で、暗色化する。層厚約15cmである。第4a・4b層はともに作土層と考えられる。

第5層：河川の氾濫堆積層で、現地表下約2.4mまでを観察した。遺物は認められなかった。第5a層はにぶい黄色(2.5Y6/4)細礫が混じる黄褐色(2.5Y5/3)中粒～粗粒砂で、層厚10~30cmである。第5b層は灰黄色(2.5Y7/2)中粒～粗粒砂とにぶい黄色(2.5Y6/4)細礫～中礫からなる斜交ラミナが



図2 調査区位図

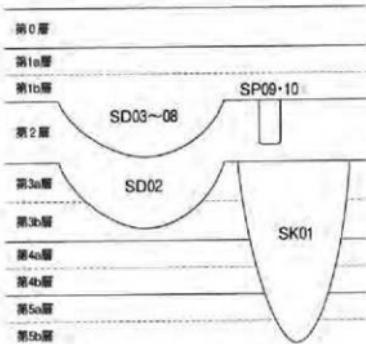
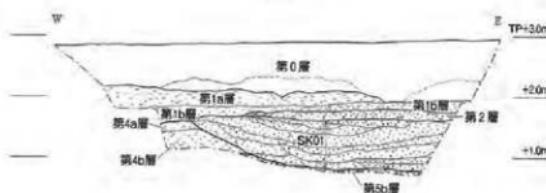


図3 地層と遺構の関係図

東壁断面



北壁断面



南壁断面

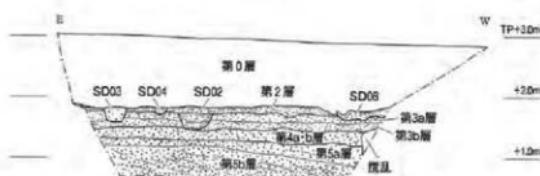


図4 東・北・南壁地層断面図

発達しており、ラミナは北西方向に傾斜していた。層厚50cm以上である。

ii) 遺構と遺物

a. 中世の遺構と遺物(図5・8)

第3a層上面でSK01を検出した。

SK01 調査区北部で検出した遺構で、現状では東西4.5m以上、南北2.0m以上、深さ1.0mの不整形な土壌である。北辺・東辺は調査区外に延びる。埋土は細礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)～オリーブ褐色(2.5Y4/3)極細粒～細粒砂が累重して堆積しており、最下部(底)には層厚約8cmの灰白色(2.5Y7/1)粘土質シルトが堆積していた。土壤としたが、全体が判明していないため、溝などの端部の可能性もある。埋土から土師器皿6、古墳時代後半～古代の土師器壺、須恵器把手・壺、瓦器碗7、瓦質土器羽釜8・9、白磁皿が出土した。また、6は口径13.8cm、外面下半部はユビオサエしている。12～13世紀であろう。7は瓦器碗で口径12.4cm、和泉型瓦器碗II-1期(12世紀前半)である。8・9は瓦質土器羽釜で、口縁部はやや直立しており、内面はハケ調整、体部外面の鈎部以下はハラケズリしている。15世紀後半～16世紀前半頃であろう。8・9の瓦質土器羽釜の年代から、15世紀後半～16世紀前半頃の遺構と考えられる。

b. 近世の遺構と遺物(図6～8)

第2層下面でSD02を、第2層上面でSP09・10、第1b層下面でSD03～08を検出した。

SD02 中央部で検出した南北方向の鈎溝である。長さ2.40m以上、幅0.60m、深さ0.25mで、埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)ないし灰黄色(2.5Y4/1)シルト質細粒砂である。土師器皿10、青磁染付碗、平瓦、鐵滓が出土した。10の土師器皿は、口径8.4cm、器高1.5cm、器表は橙色、外底面に糸切り痕が残っており、ロクロ成形である。19世紀のものである。

SD03 東部で検出した南北方向の鈎溝である。長さ3.6m以上、幅0.4m、深さ0.25mで、埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒砂である。いずれも18世紀末～19世紀前半と考えられる土器が出土した。肥前磁器染付碗11・小広東碗12・広東碗13・堆反鉢14・碗蓋15・筒形碗・丸壺・広東碗蓋・紅皿、萩焼蒸灰釉碗16、関西系陶器土瓶・土鍋、軟質施釉陶器灯明皿・灯明受皿・鬚水入れ、土師器熔熔・焜炉などが出土した。そのほか、ミニチュア土製品(五鉢鉢)17・丸瓦・平瓦が出土している。

SD04 東部で検出した南北方向の鈎溝である。長さ1.8m以上、幅0.3m、深さ0.1mで、埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂質シルトである。肥前磁器碗、土師器熔熔、平瓦が出土した。熔熔は難波分類G類で、19世紀と考えられている[難波洋三1992]。

SD05 北部で検出した東西方向の鈎溝である。長さ5.0m以上、幅0.3m、深さ0.15mで、埋土は細礫を含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質極細粒砂である。

SD06 調査区東部で検出した南北方向の鈎溝である。東西0.2m以上、南北1.3m以上、深さ0.2mで、埋土は細礫を含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質極細粒砂である。

SD07 西部で検出した方形の遺構である。西側が調査区外であるため詳細は不明だが、耕作に伴う鈎溝と考えられた。東西長0.7m以上、南北長2.1m以上、深さ0.3mで、埋土は細礫を含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質極細粒砂である。肥前磁器染付筒形碗、関西系陶器土瓶、軟質施釉陶器灯

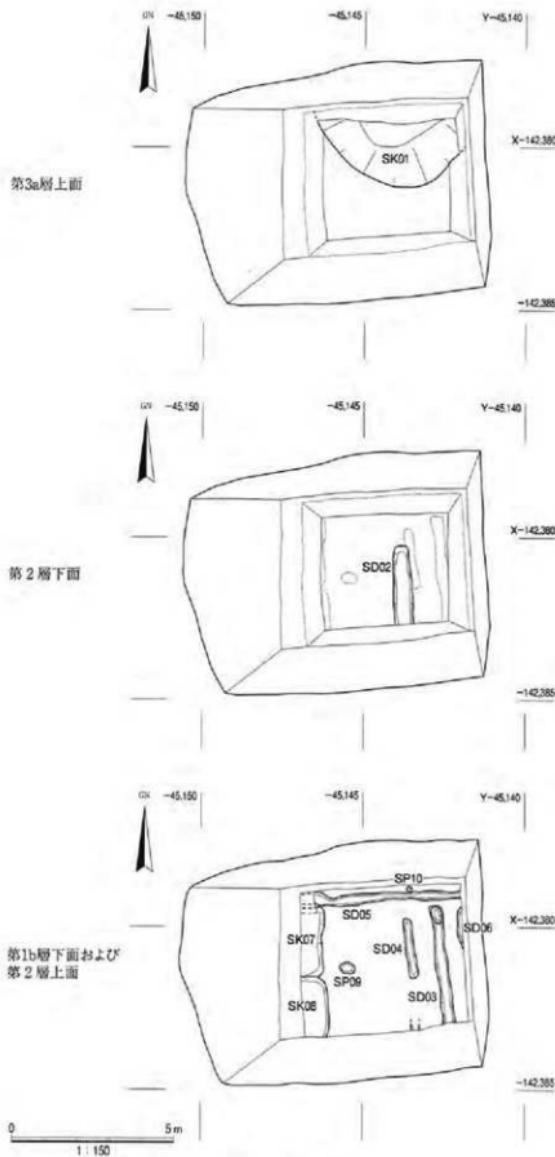


图5 造情平面图

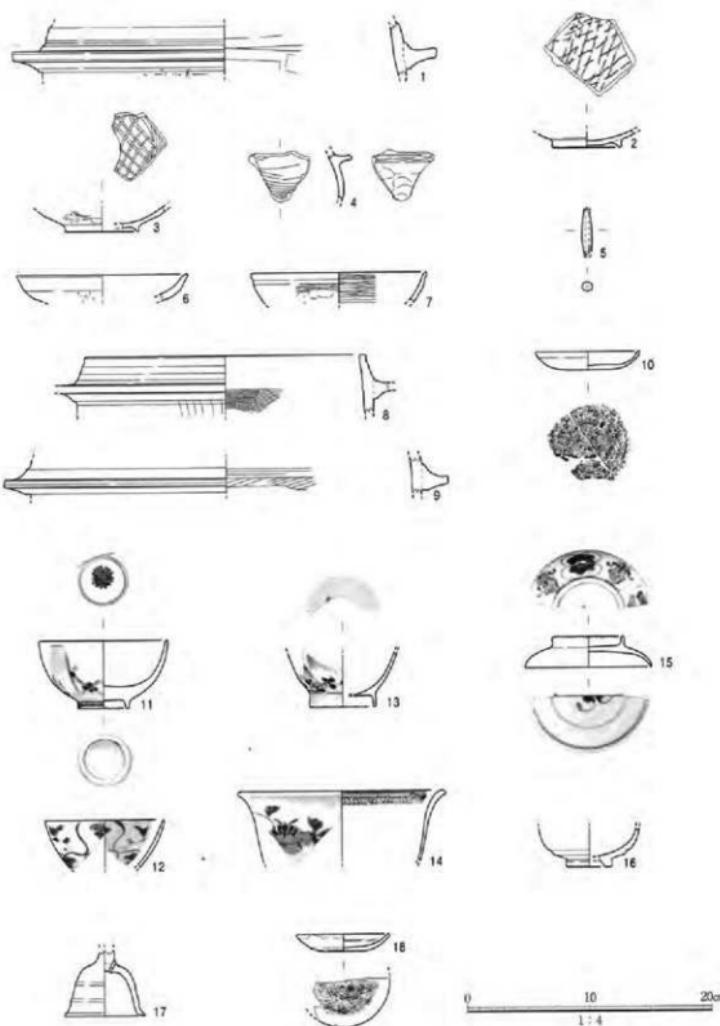


图6 出土遗物实测图
第3a层(1)、第4a层(2~5)、SK01(6~9)、SD02(10)、SD03(11~17)、SD07(18)

明皿18、丸瓦、平瓦が出土した。18は灯明皿で、口径7.4cm、器高1.4cm、内面に透明釉を施しており、器表が明赤橙色である。外底面に糸切り痕が残り、ロクロ成形である。19世紀のものであろう。

SD08 西部で検出した方形の遺構である。西側が調査区外であるため詳細は不明だが、耕作に伴う廻溝と考えられた。東西0.8m以上、南北1.9m以上、深さ0.18mで、埋土は細礫を含む暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質極細粒砂である。

SP08 北部で検出した円形の小穴である。直径0.2m、深さ0.07mで、埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質極細粒砂である。

SP09 西部で検出した楕円形の小穴である。東西0.5m、南北0.3m、深さ0.05mで、埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質極細粒砂である。

出土遺物や層位関係から、第2層下面遺構(SD02)は18世紀、第2層上面遺構(SP09・10)および第1b層下面遺構(SD03~08)は18世紀末~19世紀前半の時期であろう。また、これらの遺構は耕作に関連する遺構と考えられる。

iii) 各層出土遺物

第4a層からは、土師器皿・羽釜、須恵器甕、瓦器碗2・3、瓦質土器三足釜4、東播系須恵器鉢、備前焼播鉢、白磁皿、土鍤5などが出土した。2・3は瓦器碗で、高台径5.3~5.9cm、見込みに斜格子状暗文がある。和泉型瓦器碗II-1期(12世紀前半)である。4は瓦質土器羽釜である。鉢幅が約1.5cmで小型であり、三足釜で、13世紀後半と考えられる。5は土鍤で、長さ3.3cm、最大幅0.8cm、重さ1.7gである。

第3a層からは、12~16世紀に属する土師器皿・鉢、瓦器碗、瓦質土器羽釜1、須恵器甕、平瓦、鉄矛などが出土地。これらはいずれも細片で磨滅している。1は瓦質土器羽釜で、体部外面鉢部以下はハラケズリしており、15世紀後半~16世紀前半である。

3.)まとめ

調査地は砂堆に分類されており[建設省国土地理院1965]、建物が建設される以前の耕作面は標高約2.2mである。

この地が耕作地として開発された時期は中世前期に遡ると考えられる。中世後半以後は耕作地として本格的に開発されている。また、中世後半には土壤を検出しており(第3a層上面)、灌漑などに利用していたのであろう。以後、近代まで耕作地として継続している。

参考文献

上田宏範1988、「長柄古墳群」:『新修大阪市史』第1巻、pp.418~424

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999、「小倉商事(株)による建設工事に伴う確認調査(HH97-1)」:

「平成9年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.19~27

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003、「本庄東遺跡発掘調査(HH01-2)」:

「平成13年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.3~7

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012、「北区本庄東二丁目における建設工事に伴う柵蔵文化財発掘調査
(HH10-1)」:『大阪市内柵蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2010)』、
pp.1-10

建設省国土地理院1965、「土地条件調査報告書(大阪平野)」

参考本部陸軍部測量局1887、「京阪地方仮製二万分の一地形図」明治20年測量

中村博司1975、「大阪市内出土の埴輪鳥・家について」:『大阪城天守閣紀要』第3号、pp.2-7

難波洋三1992、「徳川氏大坂城期の炮塔」:『難波宮址の研究』第九、pp.373-400

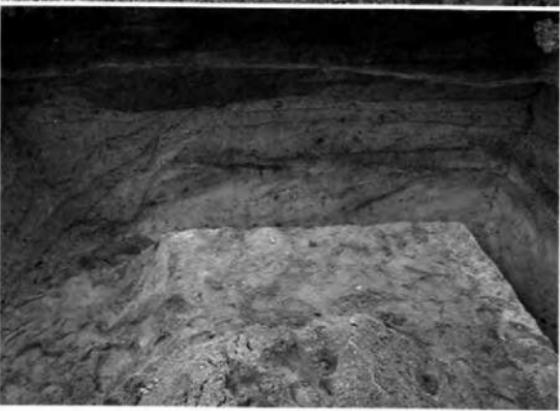
調査地全景
(第5層上面
検出状況:
東から)



南壁地層断面
(北西から)



東壁地層断面
(西から)



SK01検出状況
(東から)



SD02発掘状況
(南から)



第1b層下面の
遺構全景
(南から)



北区南森町二丁目における建設工事に伴う
天神橋遺跡発掘調査(TJ12-1)報告書

調査個所 大阪市北区南森町2丁目17-3他
調査面積 約198m²
調査期間 平成24年6月18日～7月19日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、市川創、池田研、小田木富慈美

1) 調査に至る経緯と経過

本調査地は天神橋遺跡の北端部に位置し、東南には大阪天満宮が鎮座する(図1)。天神橋遺跡は、古代には東大寺新羅江莊あるいは安曇江莊、中世では渡辺津といった、文献史学からその存在が想定される拠点的施設の推定地、あるいは近隣地域である。豊臣期には城下町として整備され、また近世には大阪天満宮の門前町として発展した。こうした脈わいは、例年行われる天神祭などによってその一端を窺うことができる。各時代における当遺跡の重要性については、これまで文献史学の成果から評価されることが多かったが、TJ00-2次調査[大阪市文化財協会2002]をはじめとする発掘調査成果の蓄積を経て、考古学的手法によってもある程度の評価が可能となっている。

今回の調査地では、事前に大阪市教育委員会によって敷地内の試掘調査が行われた。その結果、現地表下約1.8m以下で江戸前期以前の遺物包含層および遺構面の存在を確認したため、発掘調査を実施することになった(図2)。

調査は6月18日より開始し、重機によって後述する第5層まで掘削を行った。その後、第6層以下の掘削はすべて人力によって行い、遺構検出・掘下げ・記録などの作業を適宜行い、調査を進めた。現場での作業については、7月19日に機材類の撤収を含むすべての工程を完了した。

また、基準点はmagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。



図1 調査地位置図



図2 調査区配置図

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4、写真1)

調査地周辺はおおむね平坦で、標高はTP+4.0mほどである。

今回の調査では、現地表下480cmまでの地層を9層に区分した。

第0層：現代盛土であり、層厚は最大で60cmである。

第1層：盛土層であり、炭・焼土・レンガが多く含む黒褐色砂からなる。層厚は14cmであった。本層に含まれる炭・焼土は、上下の地層の時期から、1909(明治42)年に起こり北区一帯を焼いたいわゆるキタの大炎、ないし第二次世界大戦に由来する焼土層である。

第2層：含炭黒褐色中粒～極粗粒砂からなる盛土層である。層厚は最大で22cmあり、上面は一部で被熱し焼け縮まっていた。

第3層：暗褐色シルト質砂からなる盛土層で、漆喰片を含む。層厚は最大で70cmある。漆喰片を含むことから、地層の時期はおおよそ19世紀前半以降であろう。本層上面では敷地境の石列などを検出した。

第4層：オリーブ褐色シルト質砂からなる盛土層で、部分的に焼土を含む。層厚は最大で18cmである。

第5層：含炭オリーブ褐色シルト質砂からなる盛土層である。層厚は最大で32cmである。本層上面では敷地境の溝などを検出した。本層からは丹波焼・肥前磁器が出土した。

第6層：調査区西端を除く大部分で上下に2分でき、上位を第6a層、下位を第6b層と呼称する。調査区西端には第6b層は分布しなかった。第6a層は含炭黒色砂質シルトからなる盛土層で、上面は被熱し固化していた。層厚は10cmほどであり、本層上面では敷地境の溝SD602のほか、SK604などの土壌を検出した。これらの土壤のうち、SK615・621は焼瓦や被熱した陶磁器類が多く含む。第6a層上面が被熱していることも併せて考えれば、火災後の廃棄土壤である可能性が高い。これら第6a層上面の遺構からは、18世紀中葉～後半の資料が出土している。本層からは、丹波焼・肥前陶器・肥前磁

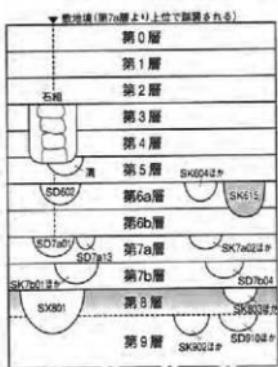


図3 地層と遺構の関係図

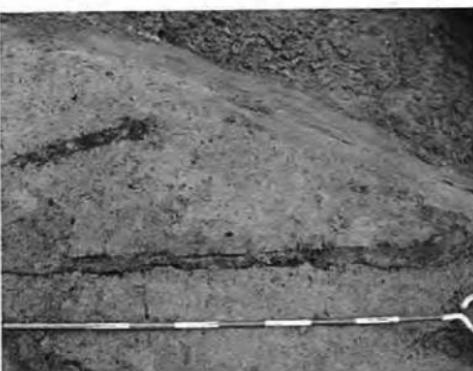


写真1 第7b層内に含まれる植物遺体

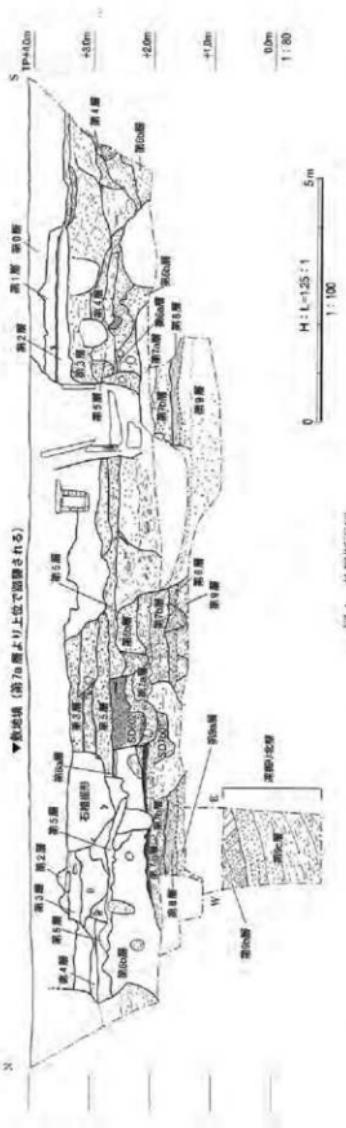


図4 地質断面図

器・関西系陶器など18世紀中葉の資料が出土した。第6b層は黄褐色細粒～中粒砂からなる盛土層で、シルトの偽礫を含んでいた。本層を構成する細粒～中粒砂は比較的分級がよく、河成層などに由来するものであろう。本層の層厚は最大で95cmある。本層上面には遺構が存在せず、第6a層と第6b層は一連の盛土であると考える。また、本層からは土師器・丹波焼・肥前陶磁器・関西系陶器など18世紀中葉の資料が出土した。

第7層：上下に2分でき、上位を第7a層、下位を第7b層と呼称する。第7a層は暗灰黄色礫混りシルト質砂からなる盛土層で、層厚は最大で24cmであった。本層の上面では敷地境の溝SD7a01のほか、SK7a02など、17世紀末～18世紀前半の遺構を検出した。当調査地において敷地の境が明確化するのは本層の段階からであり、現在までは同位置で踏襲される。また、本層からは土師器・備前焼・丹波焼・肥前陶器・肥前磁器・中国産青花・瓦など、17世紀後半までの資料が出土した。第7b層は黄褐色細粒～中粒砂からなる盛土層で、層厚は最大で32cmである。本層の層内では、竹と思われる植物が混在していた(写真1)。盛土採取地に自生していたものが混入したと考えられるが、盛土の強度を増すために意図的に加えられた可能性もある。本層の上面では、SD7b04やSK7b01など、17世紀中～後葉の遺構を検出した。また、本層からは土師器・瓦質土器・備前焼・丹波焼・肥前陶磁器・瓦など17世紀中葉以前の資料が出土した。

第8層：オリーブ褐色シルト質細粒砂～小礫からなる。第9層の上部に生成された古土壤である。層厚は18cmほどで、第9層との層界は漸移的である。本層の上面では、SX801のほかSK803など、17世紀前半の遺構を検出した。ま

た、本層からは土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・瀬戸美濃焼陶器・肥前陶器・瓦など17世紀前半までの資料が出土した。

第9層：自然堆積層であり、第9a～9c層に細分できた。このうち第9a層はオリーブ褐色を呈し、下部は礫質中粒～粗粒砂、上部は小礫質細粒～粗粒砂からなり、わずかに上方細粒化していた。層厚は90cmである。第9b層は黄褐色の細粒～中粒砂と粗粒砂～小礫の互層がフォアセット・ラミナを形成していた。層厚は最大で40cmである。フォアセット・ラミナは東に向って傾斜しており、古流向はおよそ西→東に復元できる。第9c層は明黄褐色を呈し、下部は細～中礫、上部は極細粒～細粒砂からなり、上方細粒化していた。層厚は150cm以上ある。本層の上面では、SK902・SD910などの遺構を検出した。第9層からは土師器・須恵器・瓦器が出土している。

ii) 遺構と遺物

a. 古代～17世紀前半の遺構と遺物

第9層上面において、SD903・904・910・915のほか、SK901・902・905～909・911～914・916・917を検出した(図5)。出土遺物が少なく詳細な時期は決定しがたいが、須恵器が出土したSD910などは古代に遡る可能性がある。また第8層からは17世紀前半までの遺物が出土しているので、第9層上面の遺構群の下限も該期と判断できる。以下では、主要な遺構について記述する。

SD903 調査区の東北部で検出した。北東～南西方向に延び、長さは1.0m以上、幅は0.6m、検出面からの深さは0.3mである。埋土下部には加工時形成層と考えられる含偽礫極細粒～細粒砂層があり、礫質細粒～粗粒砂で埋る(図6)。当遺構から遺物は出土していない。

SD904 調査区の東北部で検出した。東西に延び、西端はSD903によって破壊される。長さ2.1m以上、幅0.6m、検出面からの深さは0.1mである。埋土は小礫質細粒～粗粒砂である(図6)。当遺構からは須恵器が出土した。

SD910 調査区の西南部で検出した。南北に延び、南端は東へ屈曲する。長さ3.8m、幅0.4mで、検出面からの深さは0.1mである。埋土は小礫質細粒～粗粒砂であり(図6)。須恵器1が出土した(図7)。1は須恵器壺ないし横瓶の体部片である。外面には平行タタキを施したのち、カキメ調整を行う。内面には同心円文當て具痕が認められる。奈良時代後半～平安時代前葉のものであろう。なお、屈曲する溝の形状およびSK911・912との位置関係から、堅穴建物の周壁溝である可能性も考慮したが、SK911・912は断面観察から柱穴ではないと判断できる(図6)。

SK902 調査区の北部で検出した。平面形は不整形で、南北1.0m、東西は0.8m以上ある。検出面からの深さは0.3mである。遺構の下部には含偽礫極細粒～細粒砂からなる加工時形成層があり、炭を含む小礫混りシルト質細粒～粗粒砂で埋る(図6)。当遺構からは土師器・須恵器・瓦器・備前焼が出土した。

SK917 調査区の東南隅で検出した。東西1.1m以上、南北は1.0m以上あり、遺構の東・南は調査区外へ延びる。検出面からの深さは0.5mで、下部には第9層由来の偽礫を含む細粒～粗粒砂があり、含炭シルト質細粒～中粒砂で埋る(図6)。遺物は出土しなかった。

b. 17世紀前半の遺構と遺物

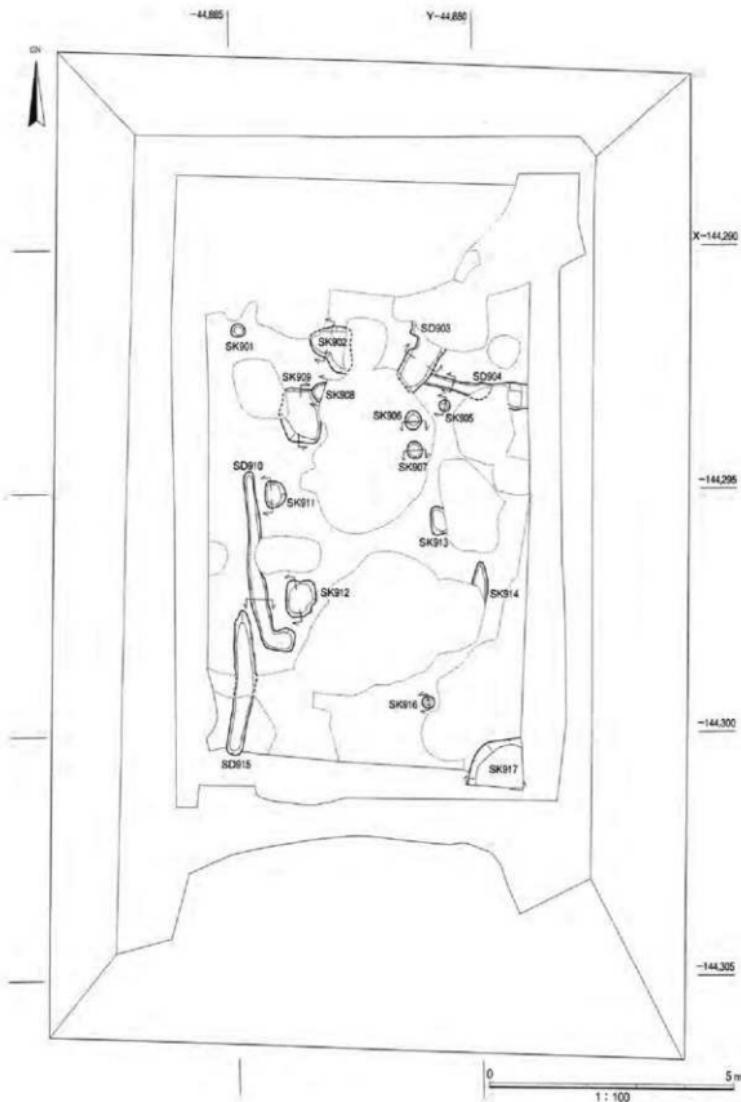


图 5 第 9 层上面造桥平面图



図6 第9層上面遺構平面図(作図位置は図5参照)

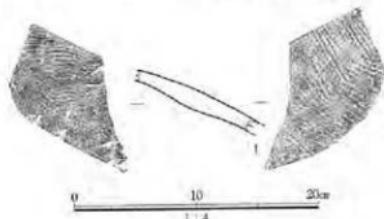


図7 SD910出土遺物

うち土師器2、肥前陶器3・4、備前焼6・7を図示した(図10)。このうち2は皿で、灯明皿として使用している。3・4は碗と皿で、4は鉄絵を施す。6は壺で、肩部に波状文を施す。7は擂鉢である。なお、当遺構から出土した丸瓦には、いわゆるコビキB類のものが含まれる。

SK803 調査区の中央部で検出した。平面形は不整形で、南北3.5m、東西2.6mあり、検出面からの深さは0.9mである。埋土は小礫混りの細粒～粗粒砂で、下半ではこれに加えシルトが混る(図9)。当遺構からは土師器、備前焼、中国産磁器、瓦・鉄釘が出土し、このうち中国産青花5を図示した(図10)。5は碗の底部である。高台最付近まで施釉し、底部内面を蛇の目釉調ぎする。胎土は陶器質に近い。中国南方産の可能性がある。

以上、第8層上面検出遺構の年代は、SX801・SK803出土遺物から17世紀前半であろう。

c. 17世紀中～後葉の遺構と遺物

第7b層の上面において、SD7b04・SK7b01・02・06などの遺構を検出した(図11)。

SD7b04 調査区の南部で検出した。東西に延び、長さ1.7m以上、幅0.5m、検出面からの深さは0.2mであった。埋土は含炭シルト質砂である(図12)。当遺構からは土師器・備前焼・肥前磁器・中国産磁器・

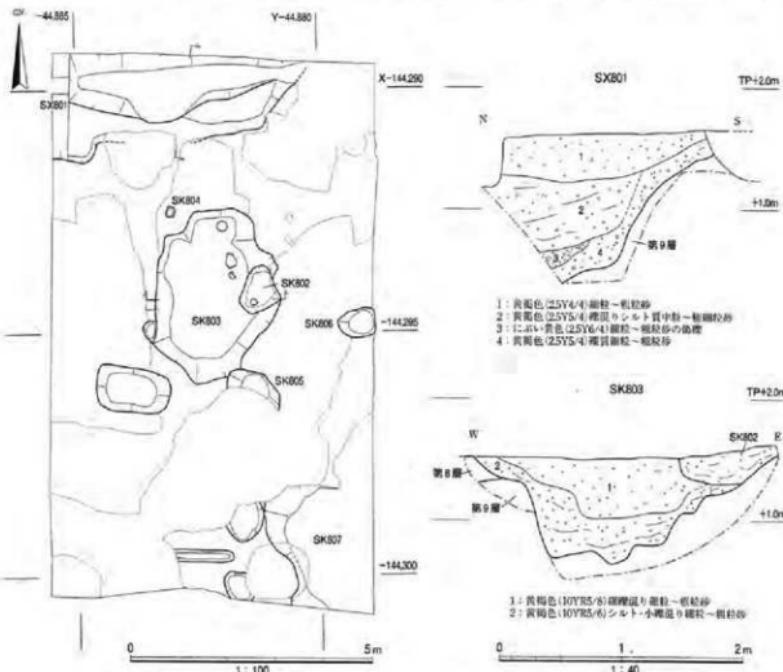


図8 第8層上面遺構平面図

図9 第8層遺構断面図(作図位置は図8参照)

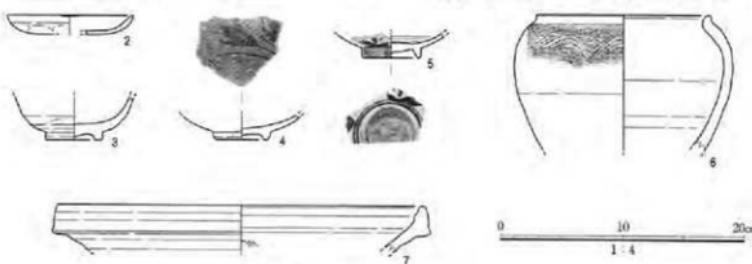


図10 第8層遺構出土遺物

SX801(2~4・6・7), SX803(5)

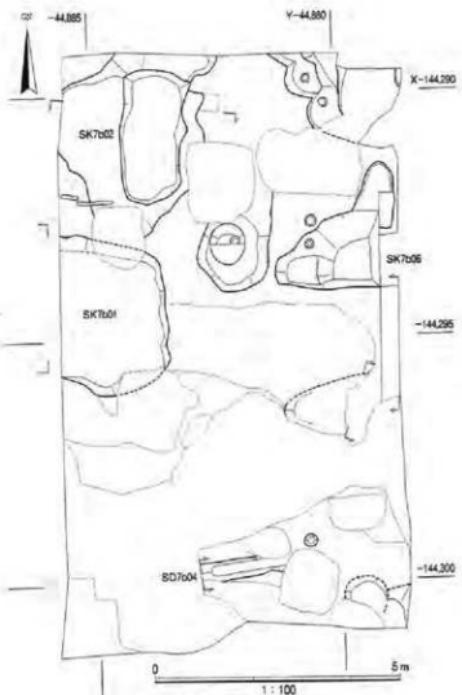


図11 第7b層上面遺構平面図

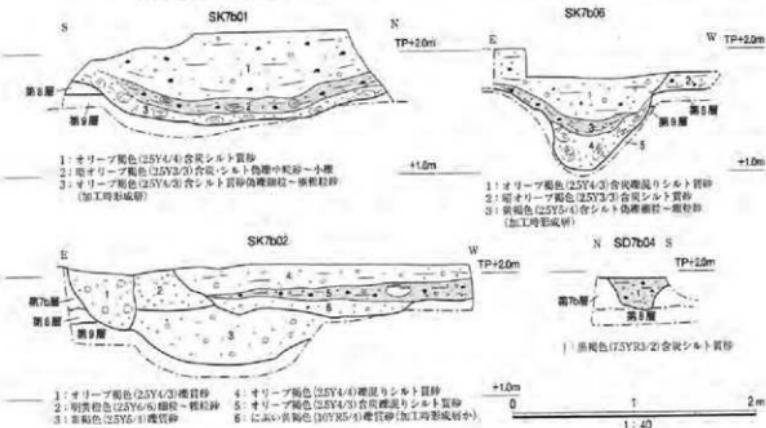


図12 第7b層上面遺構断面図(作図位置は図11参照)

瓦が出土した。このうち、肥前磁器16、中国磁器17、土師器18を示した(図13)。16は染付碗である。17は色絵鉢で、漳州窯産である。底部内面に「魁」の文字を記す。18は焰壺である。

SK7b01 調査区の西端で検出した。南北は3.0m、東西は2.2m以上で、検出面からの深さは0.8mある。埋土は下部にシルト質砂の偽構を含む加工時形成層があり、その上位に、機能時の堆積層と考えられる含炭・シルト偽構中粒砂～小粒が堆積する。遺物の大半はこの層準から出土した。最上位には、含炭シルト質砂があり、これによって当遺構は埋め立てられていた(図12)。

当遺構からは、土師器・瓦質土器・丹波焼・肥前陶器・肥前磁器・瓦・石製鏡・鐵釘・哺乳類の歯などが出

土し、このうち肥前陶器8・9、肥前磁器10、瓦質土器11、石製の硯12を図示した(図13)。このうち8・9は碗である。8は呂器手で、9は京焼風陶器である。10は染付皿で、底部内面には鹿を描く。11は火鉢である。

SK7b02 調査区の東北部で検出した。平面検出時には1基の土壌として認識したが、断面観察の結果、3基の土壌が重複していた可能性が高い(図12)。平面形は南北3.8m以上、東西3.0m以上の規模があり、検出面からの深さは0.7mである。遺物は機能時堆積層と思われる、炭を含む礫混りシルト質砂(図12-2層)から主として出土し、土師器・瓦質土器・丹波焼・備前焼・肥前陶器・肥前磁器・瓦のはか、寛永通宝・鉄釘などの金属製品や貝類、火打石として使用されたと考えられるサヌカイト

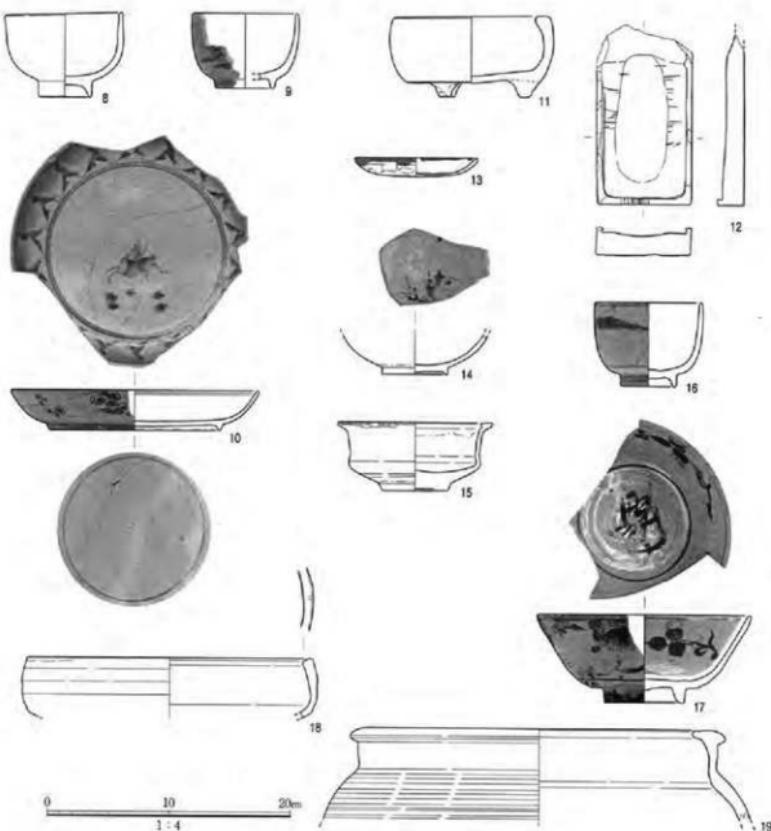


図13 第7b層上面構出土遺物
SK7b01(8~12)、SK7b02(19)、SD7b04(16~18)、SK7b06(13~15)

などが出土している。このうち、図13に示した19は肥前陶器窯である。また、当遺構から出土した土器皿の成形技法はいずれも手づくねである。

SK7b06 調査区の東部で検出した。東西2.5m以上、南北2.5mで、検出面からの深さは0.8mある。下部には加工時形成層と思われるシルトの偽礫を含む細粒～粗粒砂があり、その上位に機能時の堆積層と思われる炭を含むシルト質砂、最上位に炭を含む疊混りシルト質砂が堆積する(図12)。当遺構からは、土師器・丹波焼・軟質施釉陶器・肥前陶器・肥前磁器・ミニチュア土製品・石製品・金属製品が出土し、このうち土師器13、肥前陶器14・15を図示した(図13)。13は手づくねの皿で、灯明皿として使用している。14は平碗で、具頬による絵付を施す。15は火入れで、灰落としに転用している。

以上、第7b層上面検出遺構の出土遺物は17世紀中～後葉のものである。

d. 17世紀末～18世紀前半の遺構と遺物

第7a層の上面において、SD7a01・13のほか、SK7a02～12・14を検出した(図14)。このうち東西方向の溝SD7a01は敷地境として機能していたものと思われ、以後、敷地境の位置は現代まではほぼ同位置で踏襲される。本層より上位の報告では、この敷地境より北を敷地①、南を敷地②と呼称する。また土壤については、いずれもごみ穴として掘削されたものと考えられる。

SD7a01 東西に延び、敷地①と②を分ける溝である。長さ9.0m以上、幅1.0mであり、検出面からの深さは0.4mである。埋土の下半は細粒砂～小礫、上半は含炭シルト質砂であった(図15)。当遺構からは土師器・丹波焼・堺擂鉢・肥前陶器・肥前磁器・中国産磁器・瓦・鉄釘が出土した。このうち、20は中国産青花の小杯である(図16)。口縁部は外方へ短く屈曲させ、外面には草花文を施す。

SD7a13 SD7a01の南で検出した、東西に延びる溝である。SD7a01とほぼ並行し、調査区の西半ではSD7a01を破壊していたため、これに先行する敷地境の施設であった可能性がある。長さ9.0m以上、幅1.0mで、検出面からの深さは0.2mであった。また、遺構の底面近くには拳大～人頭の疊群を検出した(写真2)。肥前陶器・肥前磁器・瓦が出土しているが、出土遺物にSD7a01との明確な時期差はない。

SK7a02 敷地①の東北隅で検出した。東西3.0m以上、南北2.3mで、検出面からの深さは1.0mある。埋土は最下部に第7b層由来の偽礫を含む加工時形成層があり、その上位に炭を含むシルト質砂、最上位にシルト質砂が堆積する(図15)。当遺構からは土師器・瀬戸美濃焼陶器・瓦質土器・備前焼・丹波焼・堺擂鉢・京焼系陶器・肥前陶器・肥前磁器・瓦・貝殻が出土した。このうち、特徴的な資料を図16に示した。21・22は肥前磁器染付の碗と皿である。23は肥前陶器の刷毛目碗である。24は信楽焼とみられる茶入で、底部を糸切りし、外面には鉄釉を施す。25は丹波焼の擂鉢である。26は土師器熔塔である。41は唐草文軒平瓦である。

SK7a06 敷地①の西半で検出した。平面形は南北は2.5m、東西1.2m以上で、検出面からの深さは0.6mである(図15)。当遺構からは、土師器・瓦質土器・備前焼・丹波焼・肥前陶器・肥前磁器・軟質施釉陶器・瓦・輪羽口・石製品(砥石)・金属製品(鉄釘・寛永通宝)が出土し、このうち28を図示している(図16)。28は土師質の壺で、口縁部は短く直立する。外面下方には焼が付着し、被熱している。色調は灰白色を呈し、胎土は精良である。

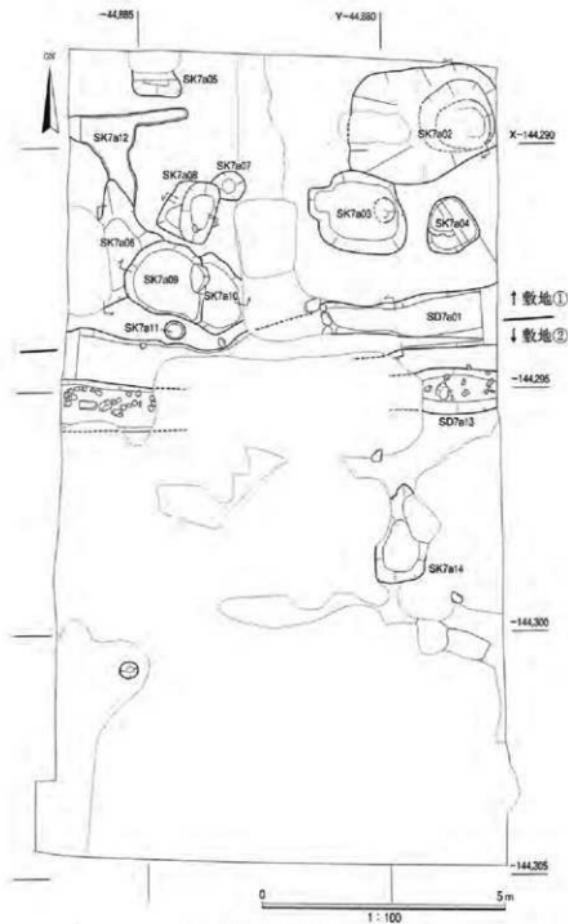


図14 第7a層上面遺構平面図

SK7a08 敷地①の西半で検出した。南北1.2m、東西1.0mで、検出面からの深さは0.7mである(図15)。当遺構からは、土師器・丹波焼・軟質施釉陶器・関西系陶器・堺焼鉢・肥前陶器・肥前磁器・ミニチュア土製品・瓦・貝類・骨角器・銭貨が出土し、このうち特徴的なものを示した(図16)。29~31は土師器皿である。29・30は糸切り底をもち、31は底部をヘラケズリ調整している。29・31は灯明皿として使用している。32・33は関西系陶器の碗である。34・35は肥前陶器である。34は京焼風陶器の碗で、底部外面に「清水」の刻印を有する。35は鉢である。36・37は肥前磁器の染付碗である。いずれも外面

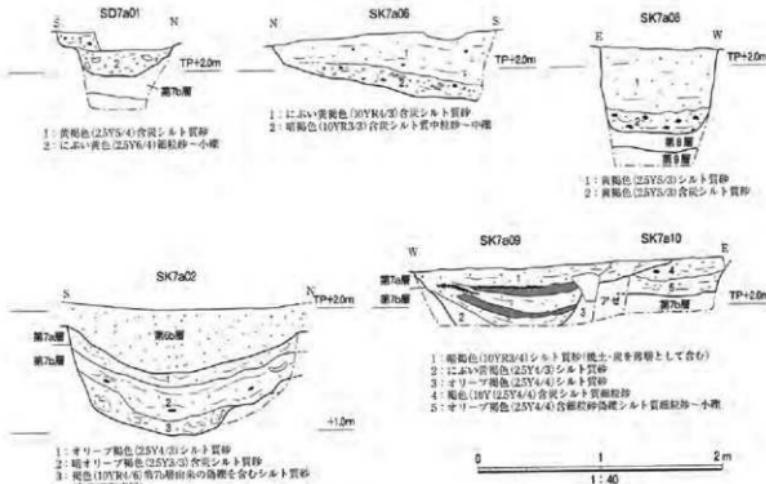


図15 第7a層上面造構断面図(作図位置は図14参照)



写真2 SD7a13検出状況

にコンニャク印判による施文があり、37は底部内面を蛇の目軸剥ぎとする。38は瀬戸美濃焼の半胴で、鉄軸を施す。40は唐草文軒平瓦である。42は骨製掉秤で、一端を欠損する。4面に目盛を刻んでいる。

SK7a09 敷地①の西半で検出した。南北1.5m、東西1.7mである。検出面からの深さは0.5m以上あり、埋土には炭・焼土が多く含まれていた(図15)。また、遺構の東部はSK7a10を、西部はSK7a06を、それぞれ破壊していた。当遺構からは土師器・軟質施釉陶器・丹波焼・肥前陶器・肥前磁器が出土し、このうち特徴的な資料を図化した(図16)。27は土師器焼成窯である。39は備前焼の擂鉢である。

以上、第7a層上面検出遺構の出土遺物は17世紀末～18世紀前半のものである。

e. 18世紀中葉～後半の造構と遺物

第6層の上面において、敷地境の溝SD602のほか、SD601・SK611・613・615～617・620・621・630・633・634などを検出した(図17)。

SD602 下位のSD7a01の位置を踏襲して掘削された敷地境の溝であるが、調査区中央部でL字状に屈曲し北へ延びる。長さは10.0m以上、幅0.8mで、検出面からの深さは0.4mである。当遺構からは丹波焼・撲搗鉢・肥前陶器・肥前磁器・瓦が出土している。

SK611 敷地①の中央部で検出した。SD602を破壊しており、平面形は南北1.6m、東西1.3mの方形を呈する。検出面からの深さは0.8mで、埋土の上部には炭を含んでいた(図18)。当遺構からは土師器・

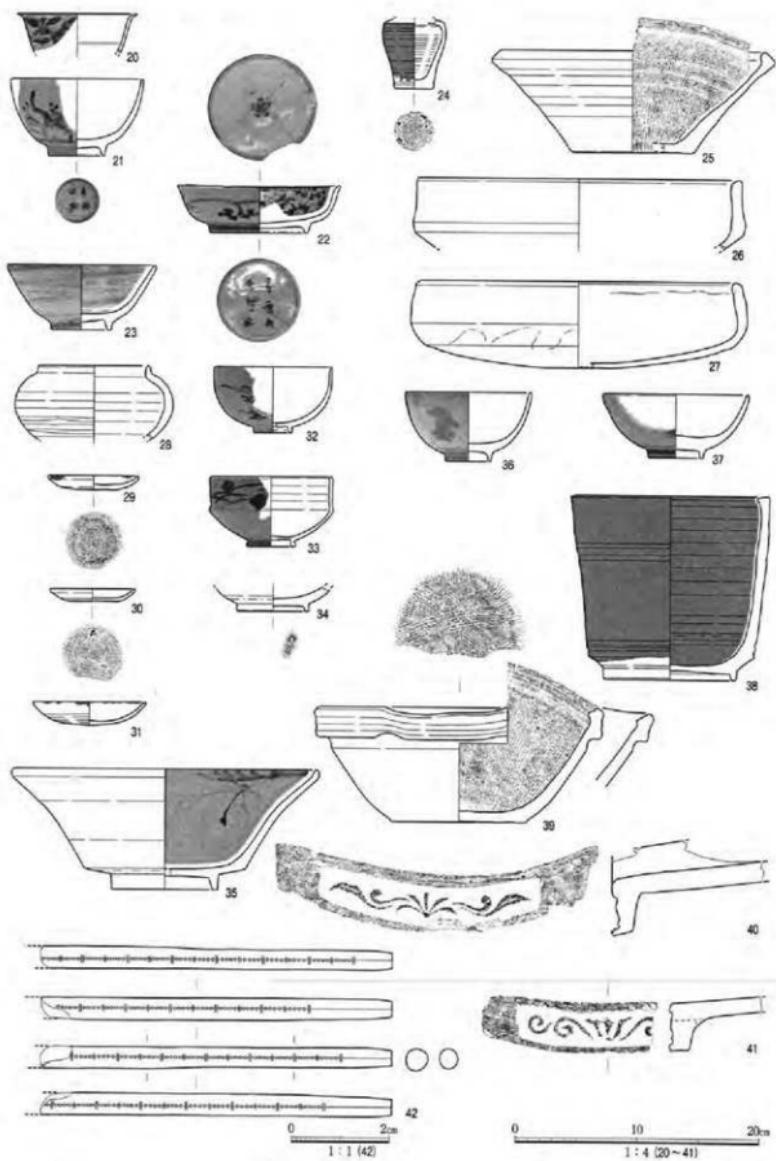


图16 第7a层遗物出土实物复原图
SK7a01(20)、SK7a02(21~26·41)、SK7a06(28)、SK7a08(29~38·40·41)、SK7a09(27·39)

瓦質土器・瀬戸美濃陶器・丹波焼・衛前焼・堺播鉢・関西系陶器・肥前陶器・肥前磁器・ミニチュア土製品・瓦・金属製品(鉄釘・銭貨)が出土し、このうち特徴的な資料を図示した(図19)。43~45は土師器皿である。43・44はいすれも糸切り底で、灯明皿として使用している。45は手づくねである。46は関西系陶器の腰折碗である。47は肥前磁器で白磁紅皿である。48・49は肥前磁器の染付碗である。48の外面、49の底部内面にはコンニャク印判による施文がある。50は土人形で、唐人を模している。

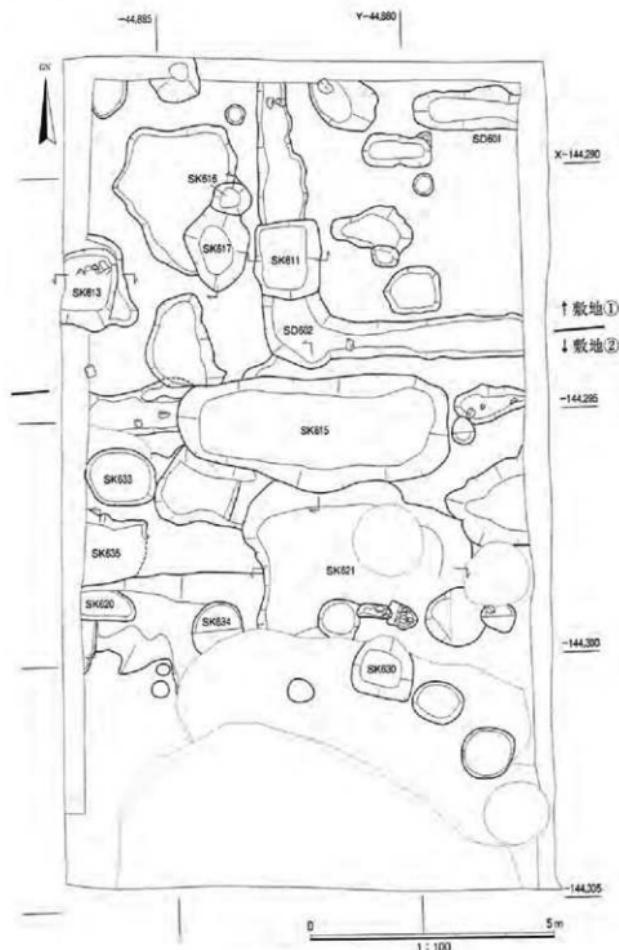


図17 第6層上面遺構平面図

SK613 敷地①の西端で検出した。南北2.0m、東西は1.3m以上で、検出面からの深さは0.8mである。埋土には全体的に炭が含まれていた。当遺構からは土師器・瀬戸美濃焼陶器・関西系陶器・肥前陶器・肥前磁器・丹波焼・堺播鉢・瓦・石製品(砥石)・金属器が出土し、このうち57・63の2点を図示した(図19)。57は引手金具で、上下に目釘孔を有する。63は堺播鉢である。

SK615 敷地②の北端で検出した。東西に長い楕円形状を呈し、長径5.5m、短径は2.3mである検出面からの深さは0.8mで、焼瓦で充填されていた(図18)。当遺構からは土師器・瓦質土器・瀬戸美濃焼陶器・丹波焼・備前焼・肥前陶器・肥前磁器・関西系陶器・中国産磁器・瓦・ミニチュア土製品・石製品(砥石)が出土し、このうち瓦56を図示した(図19)。56は軒棟瓦で、瓦当文様は巴文と唐草文で

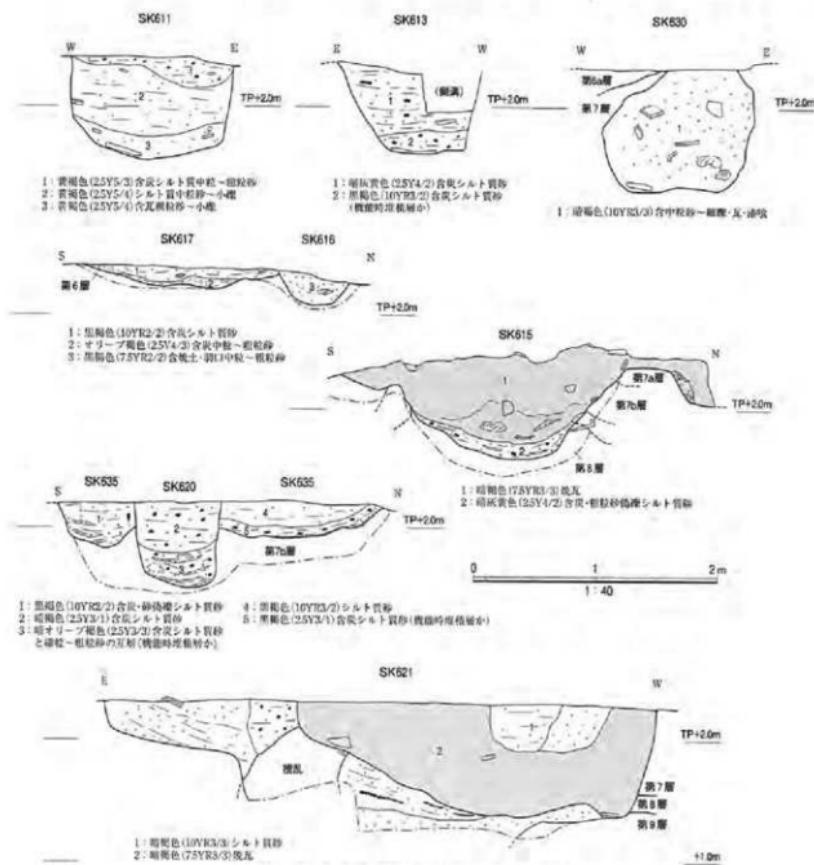


図18 第6層上面遺構断面図(作図位置は図17参照)

ある。

SK616 敷地①の西半で検出した。平面形は円形に近く、直径は約0.7mである。検出面からの深さは0.2mで、埋土には焼土および繩羽口を多く含んでいた(図18)。当遺構からは、繩羽口のほか、土師器・備前焼・信楽焼・関西系陶器・肥前陶器・肥前磁器・瓦・貝類が出土し、このうち繩羽口59を図示した(図19)。59は炉壁に接合された部分に当る。炉壁内に相当する先端部分には多くの付着物がある。

SK617 敷地①の西半で検出し、遺構の北端をSK616によって破壊されていた。平面形はやや南北に長く、南北1.6m以上、東西は1.3mである。検出面からの深さは0.2mで、埋土には炭を含んでいた(図18)。当遺構からは土師器・丹波焼・関西系陶器・軟質施釉陶器・肥前陶器・肥前磁器・繩羽口・ミニチュア土製品・瓦・貝類・骨角器・金属製品が出土し、このうち骨製の笄58を図示している(図19)。

SK620 敷地②の西端で検出した。平面形は東西にやや長く、東西1.1m、南北は0.7mである。検出面からの深さは0.7mで、埋土には炭を多く含む(図18)。当遺構からは土師器・瓦質土器・瀬戸美濃焼陶器・丹波焼・備前焼・堺播鉢・関西系陶器・軟質施釉陶器・肥前陶器・肥前磁器・瓦・ミニチュア土製品・繩羽口・石製品・金属製品が出土し、陶磁器類の一部は被熱していた。このうち、特徴的な資料を図19に示した。51・52・60は肥前磁器である。51は色絵の碗である。52は青磁染付の碗である。60は染付の皿である。53は関西系陶器の色絵碗である。61は丹波焼の甕である。54・62は土師器で、54は底部を糸切りする火入れである。外面には墨書きを有する。62は方形の火鉢で、底部内面に墨書きを有する。

SK621 敷地②の中央部で検出した。平面形は不整形で、南北3.3m以上、東西は4.4mである。遺構の北端はSK615によって破壊されていた。検出面からの深さは2.4mで、SK615と同様に焼瓦によって充填されていた(図18)。当遺構からは、瓦のほか、土師器・丹波焼・備前焼・堺播鉢・関西系陶器・軟質施釉陶器・肥前陶器・肥前磁器・石製品(砥石)・金属製品・貝類が出土し、このうち肥前磁器64・65、瓦66・67を図示した(図19)。64・65は肥前磁器の染付蓋と碗で、65は口縁部内面に四方櫛文を巡らせる。64の蓋は内面全体に茶褐色の付着物があり、この成分を推定するため蛍光X線分析装置を使って分析を行った。なお、分析は当研究所保存科学室長伊藤幸司が大阪歴史博物館の分析装置を使用して実施した。その結果、鉄を主体とし、ほかに銅・カルシウムが少量検出された。66・67は軒平瓦である。いずれも瓦当文様は唐草文である。

SK630 敷地②の東半で検出した。平面形は直径1.3mほどの円形を呈し、検出面からの深さは1.0mである(図18)。当遺構からは土師器・瓦質土器・丹波焼・備前焼・肥前陶器・肥前磁器・瓦が出土し、このうち68・70を図示した(図20)。68は唐草文軒瓦である。70は丹波焼の甕である。

SK633 敷地②の西端で検出した。平面形は直径1.5mほどのやや東西に長い円形を呈し、検出面からの深さは0.8mであった。当遺構からは、土師器・丹波焼・関西系陶器・肥前陶器・肥前磁器・ミニチュア土製品・金属製品・瓦のほか、貝類が多く出土した。

SK634 敷地②の西半で検出した。平面形は直径1.0mの円形を呈し、検出面からの深さは1.2mであった。当遺構からは、土師器・瓦質土器・丹波焼・関西系陶器・肥前陶器・肥前磁器・土製品・金

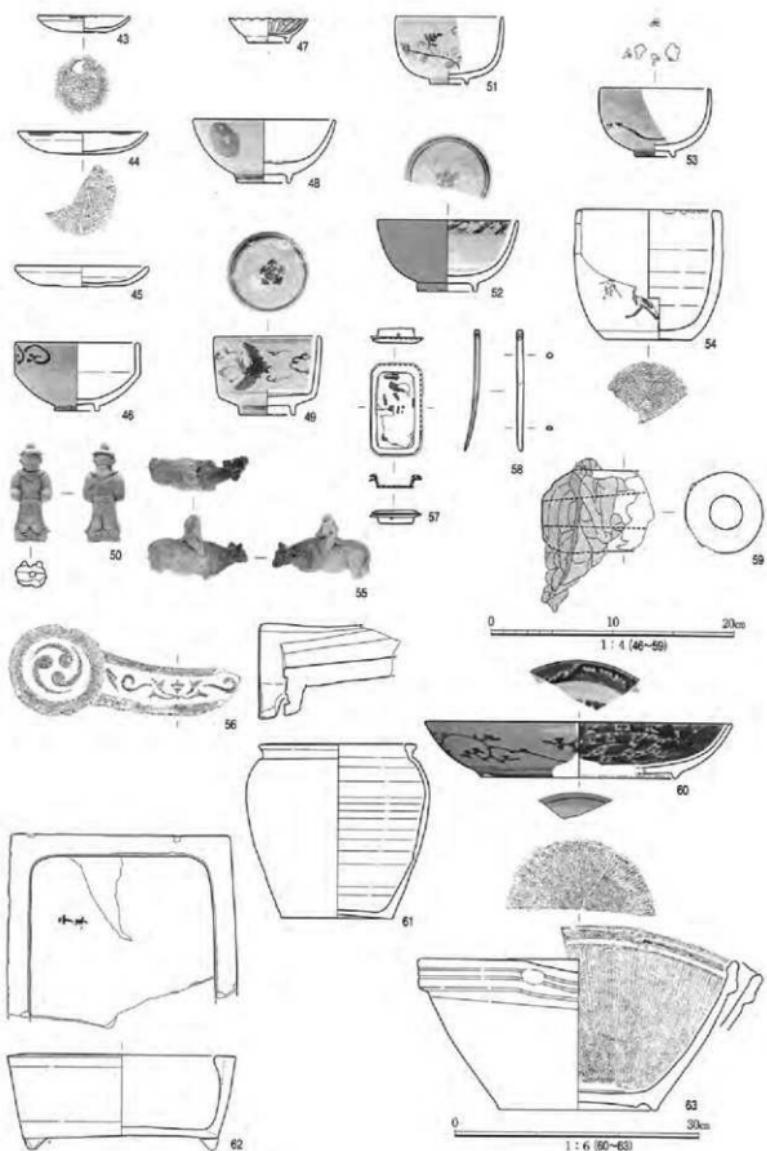


图19 第6层上面遗構出土遺物実測図(1)
SK611(43~50)、SK613(57~63)、SK615(56)、SK616(59)、SK617(58)、SK620(51~55・56~62)

属製品が出土し、このうち土製品69を図示した(図20)。69は扇形の鋳型である。外型の部分のみ残存する。同形の2個ないし別形の鋳型を組み合わせて使用した可能性もあり、製品の詳細は不明である。広島藩蔵屋敷跡でも類似品が出土している[大阪市文化財協会2004]。

以上、第6層上面検出遺構の出土遺物は18世紀中葉～後半のものである。

f. 各層出土遺物(図21)

第8層出土遺物では、71・72を図示した。このうち71は瀬戸美濃焼続の底部で、底部内外面には目痕が残る。17世紀前半のものであろう。72は北宋錢で熙寧元宝である。

第7b層出土遺物には、擂鉢73・74がある。73は土師質焼成で、74は丹波焼である。これらは17世紀前半～中葉のものであろう。

第7a層出土遺物では、75～78を図示した。75は中国産青花皿で、漳州窯のものである。76・77はそれぞれ丹波焼・肥前陶器の擂鉢である。78は軒平瓦である。これらの中で最も新しいものは76で、17世紀後半に属する。

g. 貝類

貝類は9種、235個体が出土した(表1・2)。同定作業には現生標本と図鑑[吉良哲明1954]を利用しておらず、貝類の個体数に関して腹足綱は殻口数を、二枚貝綱は左右殻頂数の多數の方を原則として採用している。また、出土個体数が多いSK621・633については個別に掲載し、それ以外の遺構・包含層については一括して掲載している。

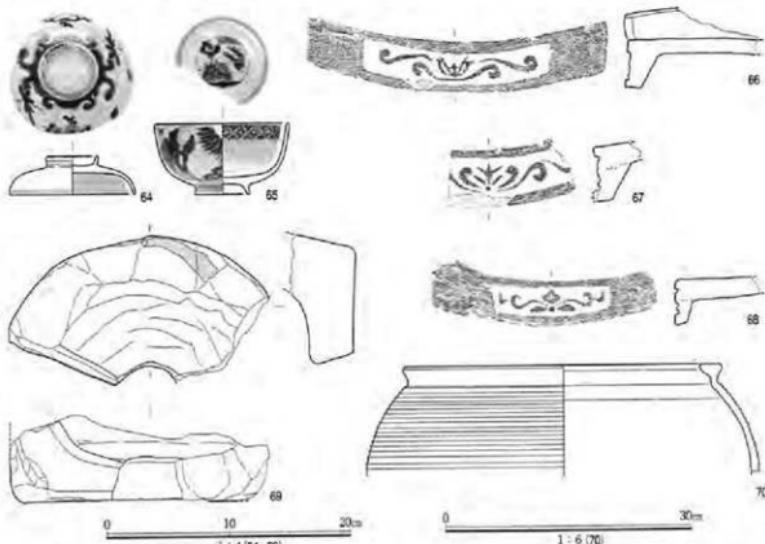


図20 第6層上面造構出土遺物実測図(2)

SK621(64-67), SK630(68-70), SK634(69)

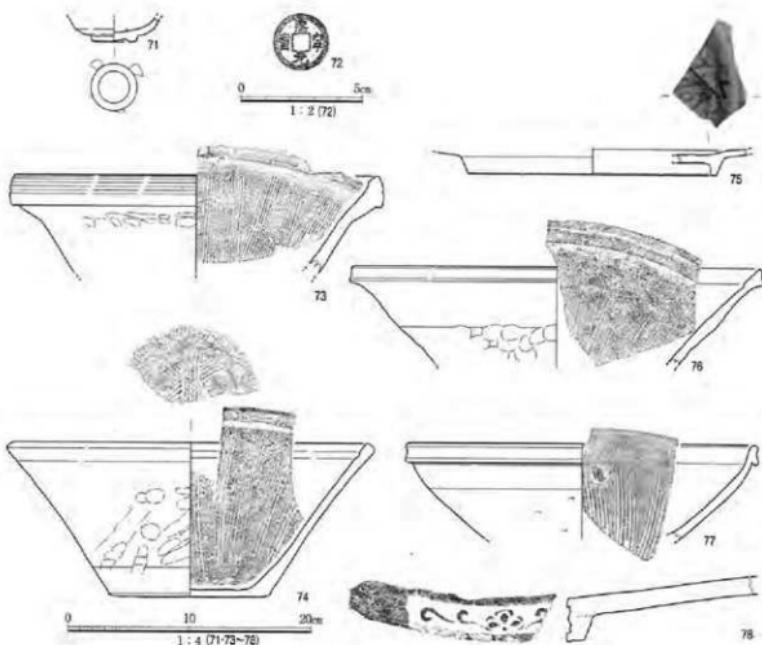


図21 各層出土遺物実測図

第8層(71・72)、第7b層(73・74)、第7a層(75~78)

SK621・633の貝種構成について見ると、

SK621は159個体のうち154個体を、SK633は

49個体すべてをハマグリが占めている。また、

SK633出土のハマグリの殻高は平均値が26.8mm

(計測数31)で、分布は20~30mmにピークをもつ

単峰形を示しており、徳川期の当遺跡における

通有の資料と同様に小型の個体が主体をなして

いる[池田研2005]。

大坂城・城下町跡とその周辺の遺跡における

貝種構成の時期的变化については、17世紀代に

8~9割程度を占めていたハマグリの比率が、18世紀代には5割前後、幕末から近代にかけては1割前後まで低下する一方で、シジミ類・カワニナなど淡水・汽水性種の占める比率が上昇することが既往の調査から判明している[池田2005・2010]。こうした一般的な傾向と比較すると、今回SK621・633から出土した資料は18世紀中頃から後半にかけてのものであるにもかかわらず、ハマグリが高い

表1 出土貝類種名一覧

腹足綱 Gastropoda

マダガアワビ *Notohalidiotis gigantea* (Gmelin)

アワビ属 *Haliotis* sp. Indet.

サザエ *Turbo (Botillus) cornutus* Solander

アカニシ *Rapana thomasiensis* (Crosse)

二枚貝綱 Bivalvia

アカガイ *Azadara (Scapharca) broughi* (Schrenck)

ハマグリ *Meretrix lusoria* (Roeding)

オキシジミ *Cyclina orientalis* Sowerby

アサリ *Tapes (Amygdala) japonica* (Deshayes)

シオフキ *Mactra veneriformis* Reeve

ヤマトシジミ *Corbicula japonica* Prime

表2 造構別出土貝類一覧

造構名	時期	アカガイ	ハマグリ	オキシジミ	アサリ	シオフキ	ヤマトシジミ	マダカアワビ	アワビ類	サザエ	アカニシ
SK633	18世紀後半		154	1	1	1	1				1
SK621	18世紀中頃		49								
その他造構	18世紀中頃～後半	3	3						4	5	3
包含層地	18～19世紀前半	4	1					1		2	1

比率を占めている点が特徴的である。

3)まとめ

- 以下に、今回の発掘調査成果をまとめる。
- ・今回の調査地で積極的な土地利用が認められるのは17世紀中葉(第7b層)以降であり、大阪天溝宮以南かつ天溝堀川以東地域でしばしば古代以降の造構が認められる状況とは対照的である。
 - ・調査地の西側には天溝堀川が存在したが、揚土など、その開削に係わる痕跡は検出できなかつた。
 - ・17世紀後半(第7a層)以降では、少なくとも2筆の敷地を確認することができた。第7a層上面で形成された敷地境の位置は、その後、現代まで継続する。但し、敷地の奥に調査地が設定されていたため、建物などは検出することができなかつた。

引用文献

- 池田研2005、「中・近世における大阪城下町出土の貝類について」：大阪大学考古学研究室編「待兼山考古学論集－都出比呂志先生退任記念－」、pp.859～886
- 2010、「堂島藏廬敷B地点(DJ08-2次)調査出土の貝類について」：大阪市文化財協会編「堂島藏廬敷跡」Ⅲ、pp.78～86
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2004、「同心町遺跡B地点発掘調査(DC02-3)報告書」：『平成14年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.3～11
- 大阪市文化財協会2002、「TJ00-2次調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告書-1999・2000年度-』、pp.181～190
- 2004、「広島藩藏廬敷跡」Ⅱ
- 吉良哲明1954、「原色日本貝類図鑑」：保育社

調査地遠景
(北西から)



東壁地層断面
(南西から)



深掘り断面
(南西から)



第9層上面の遺構
(南から)



第8層上面の遺構
(南から)



第7b層上面の遺構
(南から)



第7a層上面の遺構
(南から)



第6層上面の遺構
(南から)



SK615断面
(東から)



北区天神西町における建設工事に伴う
天神橋遺跡発掘調査(TJ12-4)報告書

調査個所 大阪市北区天神西町32・33
調査面積 130m²
調査期間 平成24年10月9日～10月27日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、高橋工

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は天神橋遺跡の南部に位置し、南には堺筋が通り、西は阪神高速道路守口線に接する。大川北岸のこの地域は、古代では新羅江莊、中世は渡辺津といった文献史料から注目されてきた交通や交易の拠点が存在したとされている。豊臣期には城下町として整備され、近世には大阪天満宮の門前町として栄えてきた。周辺における考古学的な調査成果としては、南東のTJ00-2次調査では、鎌倉～室町時代の遺構・遺物を主体に、そのほかにも古墳時代中期・奈良時代・平安時代・豊臣期・徳川期の遺構・遺物が発見されたほか、TJ94-4・WT04-2・TJ08-1次調査では豊臣期に関する成果が上がっている〔大阪市文化財協会1995、大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005・2010〕。また、南隣で行われたTJ09-1次調査では、中世の井戸などの遺構や、豊臣期とみられる遺構などが発見されている〔大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011〕。

如上の考古学的環境にある当地において、建築工事が計画され、工事に先立って大阪市教育委員会により試掘調査が行われた。その結果、地表から1.5m以下において17世紀以前の遺物包含層・遺構が発見され、本調査が行われることとなった。敷地の南西にやや偏って、南北6.5m×東西20mのトレーニングを設定し、頭書の期間で調査を行った。まず、近世の地層である第2層下面(地表下約1m)までを重機によって掘削し、以下、河成堆積である第8層の途中(同約2.5m)までを人力により、遺構面の検出、地層・遺構の掲下げを行い、適宜に写真撮影・実測図作成による記録を作成しながら調査した。

また、基準点はMagellan社製ProMark 3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。



図1 調査位置図

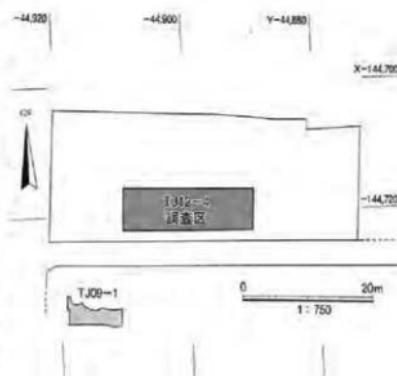


図2 調査区配置図

2) 調査の結果

i.) 層序(図3・4)

調査地の現況地形は平坦で、表土(第0層)の下位に以下の8層を確認した。

第1層：暗褐色中粒砂からなる盛土層で、層厚は最大で40cmである。近代以降の地層である。

第2層：2層に分層することができた。第2a層は褐色細粒質細粒砂からなる客土層で、層厚は約5cmである。第2b層は褐色極細粒砂で層厚は最大で20cmであった。肥前磁器などを含み、その形態からみて19世紀頃の地層である。

第3層：暗褐色細粒砂からなる客土層で、炭や偽櫻化した焼土を多く含む。下位層上面が西に高い段をなすため、段を覆うように堆積しており、層厚は最大で20cmである。豊臣後期の遺物を含むが、炭・焼土を多く含むことを考えると、大坂ノ陣に伴う焼土層を母材とした整地工事に伴う可能性が高いが、本層除去後に検出された遺構には17世紀後半に下るものがあり、年代の上限はこの頃に求められる。

第4層：2層に区分することができた。まず、下位の第4b層によって西側に高い段をなす客土が行われ、その後に、東側の低い部分に第4a層を客土していた。第4b層は明黄褐色中粒砂や褐色砂礫などからなり、層厚は約50cmであった。客土の工程を示す層理面は東に下がり、西から東へ客土工事が進行したものとみられた。岩相は調査地内ではみられない粗粒なものが多く、より深い地層から掘り上げられたものと考えられた。西側の道路は旧天満堀川(1598(慶長3)年開削)の跡とされており、天満堀川開削の排水を用いた地上げのあとであろう。第4a層にはぶい黄褐色細粒砂や褐色極細粒砂などからなり、層厚は約20cmであった。炭の薄層が挟在し、複数の生活面をなしていた。第4層からは豊臣後期の遺物が出土した。

第5層：褐色シルト～細粒砂からなる作土層で、層厚は約10cmで、調査区西部にのみ分布していた。瓦器や瓦質土器に混じって瀬戸美濃焼片が出土しており、豊臣期の地層である。

第6層：2層に分層することができ、いずれも客土層である。第6a層は褐色シルト～細粒砂からなり、層厚は約40cmである。第6b層は西側にのみ分布していた。褐色シルト～極細粒砂からなり、層厚は約20cmである。第6層からは土師器・東播系須恵器・瓦器などの細片が出土し、詳細な時期は不明であるが、下限は13世紀後半から14世紀頃とみられる。

第7層：黒褐色シルト～中粒砂からなる古土塗で、層厚は約10cmである。土師器・須恵器・黑色土器・瓦器を含み、8～13世紀に形成されたものである。

第8層：黄褐色砂からなる河成堆積層で、層厚は60cm以上である。上方に細粒化していた。本層

上面の標高はTP+1.2～1.4mで東方に向って高くなっていた。南隣のTJ09-1次調査地では、対応する河成層(第9層)上面ではTP+0.4mで、本調査地側が約1m高い。堆積時の水流の中心が本調査地東方にあったことを反映しているようである。また、本層下部では西→東への流水があった痕跡があった。

ii) 遺構と遺物

a. 第8層上面の遺構(古代～中世：図5・10)

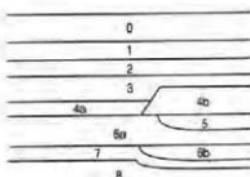


図3 地層概念図

調査区の東端付近に南北方向の溝SD71が検出され、その西側、調査区のはば全面にわたって、小穴や小規模な土壙が発見された。小穴・土壙の分布は散漫であった。時期が判明した遺構を中心に報告する。

SK65 東西0.5m以上、南北0.6m、深さ0.4mで、平面形はほぼ円形を呈する。埋土は黒褐色シルト～細粒砂で、人為的に埋められていた。本造構から出土した土師器皿4(図10)は「て」字状の口縁をもち、11世紀後半～12世紀前半頃のものである。

SP63 東西0.3m、南北0.4m、深さ0.2mで、平面形は梢円形を呈する。埋土は黒褐色砂で、人為的に埋められていた。土師器皿5は12～13世紀のものである。

SP64 直径0.3mの円形を呈し、深さは0.3mであった。埋土は黒褐色シルト～中粒砂で、人為的に埋められていた。土師器皿6、東插系須恵器7が出土し、その形態から12世紀頃の遺構とみられる。

SD71 幅0.5～0.9m、深さ0.4mの溝で、南北方向に延びる。土師器皿や瓦器碗の細片が出土し、その特徴から13世紀頃の遺構とみられる。

以上のはかにも小穴や土壙状の遺構があったが、大きさや埋土は類似していた。建物が復元されるものはなく、柱痕跡が観察されたものもなかった。古土壙である第7層からは8～13世紀の遺物が出土しており、ほぼこの期間に築かれた遺構とみてよいであろう。

b. 第7層上面の遺構(中世：図6)

調査区中央のやや西側で2条の跡跡を検出した。

SA56 南北方向の堀で、第7層上面で柱穴3個分(2.8m以上)を検出した。方位はN 9° Wで、柱間距離は1.4mである。柱穴は直径0.1～0.2mの円形で、深さは0.2～0.3mあり、埋土は暗灰色細粒砂で埋められていた。柱の痕跡はみられなかった。

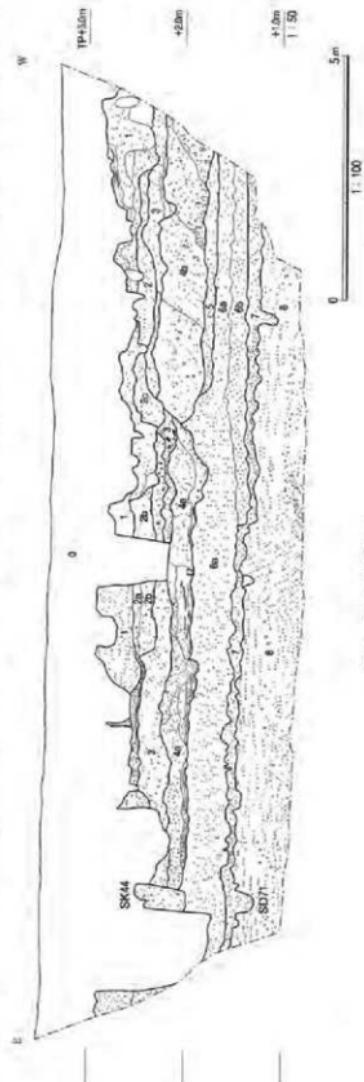


図4 両壁地質断面図



図5 第8層上面の造構

SA57 SA56の西側で、礎石2個分を検出した。方位は正南北をとり、礎石間の距離は1.5mであった。礎石は長軸0.3mほどの花崗岩で、第7層には接していたが、食い込んでいたため、上位層から掘り込んだ、礎石を据えた柱穴があつた可能性があるが検出できなかった。控え柱などの有無も不明である。

以上、2条の縫は交差する方位をもつため、同時に存在しなかつたはずである。先後関係については、SA56の柱穴は第7層を掘り込み、SA57の礎石は上位層から掘り込まれた柱穴に伴う可能性があるため、SA56が先行したと考えるべきである。詳細な時期を示す遺物は得られなかつたが、上・下位の地層の年代を参考にすると13~14世紀とみられる。

c. 第6a層上面の造構(豊臣後期:図7)

調査区東部で建物跡と数個の小穴、不整形な落込みを検出した。遺構が検出された範囲は第4層の段の下に当り、第6a層の上面で検出したが、本来、遺構の掘込み面が第4a層中にあるものも含む。主

要なものを報告する。

SB52 磐石建ちの建物で、東西方向に3間(復元4間: 6.7m)以上、南北方向に1間(1.4m)以上を検出した。東西方向の柱筋は礎石3個と礎石の抜取り穴からなり、方位は正東西をとる。中央の礎石が攪乱で失われており、本来、4間とみられる。その場合の柱間距離は1.7m(平均値)である。西端の礎石で南へ折れ、南壁の地層断面中で続きの礎石が確認された。東へ展開するか、東端で南へ折れるのかは調査区外であり、不明であった。

SP53~55は直径0.1m前後的小穴で、SX50は深さ0.1m程度の落込みであった。遺物は出土しなかった。

d. 第4a・4b層上面の遺構(豊臣後期~17世紀後半: 図8・10)

調査区の全域で土塙や小穴、不整形な落込みが発見された。主要なものを報告する。

SK22 調査区の東端で検出された土塙で、東西0.6m、南北0.7m、深さは0.2mであった。埋土はにぶい黄褐色シルト~細粒砂で埋められていた。肥前陶器碗23が出土し、徳川初期の遺構である。

SK35 調査区の西側北寄りで検出された土塙で、直径1.1mの平面円形を呈し、深さは0.5mであった。埋土は褐色粗粒砂で埋められており、多量の焼土が含まれていた。

SK36 SK35の東で検出された土塙で、東西0.8m、南北0.9m、深さは0.2mであった。埋土は褐色砂で埋められており、炭を多く含んでいた。土師器培格10、肥前陶器皿21、環状の銅製品26などが出土した。26は襖の小型の引手金具に似るが機能は不明である。17世紀後半の遺構である。

SX16 調査区の東側で検出された南北に延びる溝状の落込みである。幅は2.2m、深さは0.1mであった。埋土はオリーブ灰色粗粒砂で埋められていた。土師器皿8、同培格9が出土し、豊臣後期の遺構である。

SX19 SX16の東側で検出された不整形な落込みで、深さは0.2mであった。褐色シルト~細粒砂で埋められていた。中国青花18、肥前陶器碗19、同皿20が出土し、徳

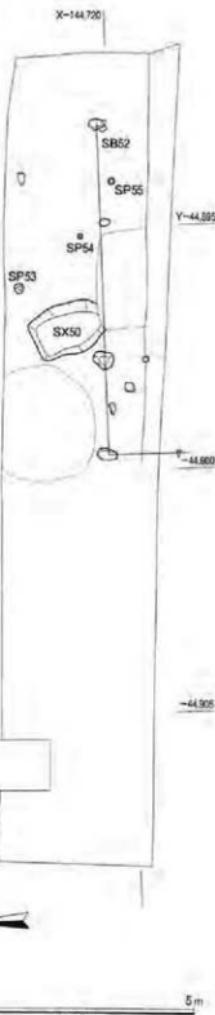


図7 第6a層上面の遺構

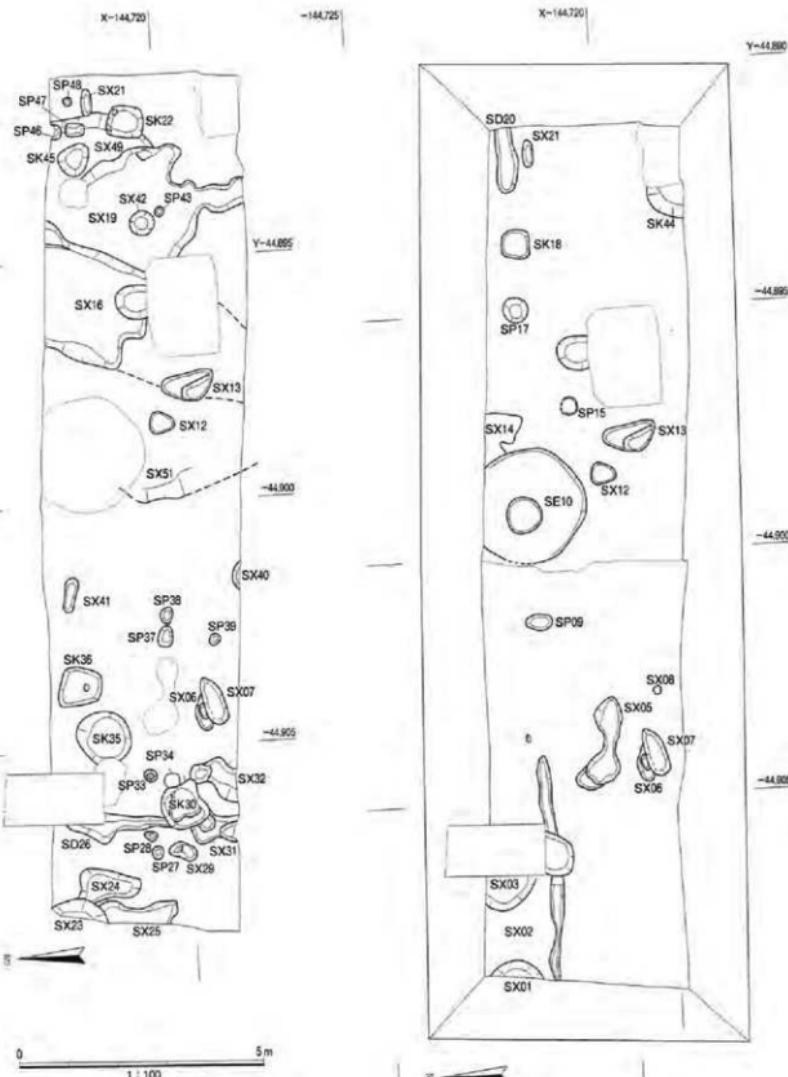


図8 第4a・4b層上面の遺構



図9 第3層上面の遺構



图10 出土遗物实测图(1)
第7层(1~3), SK65(4), SP63(5), SP64(6~7), SX16(8~9), SK36(10~21),
第3层(11~12), 第4b层(13~14), SX51(15~17), SX19(18~20), SX1(22), SK22(23)



図11 出土遺物実測図(2)
第3層(24・25)、SK36(26)

川初間の遺構である。

SX51 SX16の西側で検出された不整形な落込みで、南北は2.5m以上、深さは0.1cmで、東側の立上りは明確に確定することはできなかった。埋土は灰色細粒砂で埋められており、炭が混じっていた。瀬戸美濃焼皿15、肥前陶器碗16、

17が出土した。17は鉄絵を施す。徳川初期の遺構である。

このほかにも小穴や小規模な土壤、溝などが検出されたが、遺物が出土しないものが多く、建物なども復元される状況ではなかった。

e. 第3層上面の遺構(17世紀末以降:図9)

調査区の全域で井戸や土壤、溝などが検出された。主要なものを報告する。

SE10 調査区の中央で検出され、掘形の平面形は円形で、直径2.3mで、井戸瓦を組み合わせた井戸側が設けられていた。深さは0.8mまで掘り下がったが、底は検出されていない。出土遺物から19世紀の遺構である。このほか、SX1・SK44も、その深さからみて井戸の一部とみられた。SX1は肥前磁皿22などが出土し、19世紀の遺構とみられ、SK44は18世紀後半～19世紀のものである。

SK18 調査区の東側で検出され、平面形は東西0.6m、南北0.5mの隅丸方形で、深さは0.2mであった。柱痕跡は見られなかった。出土遺物からみて17世紀末～18世紀初頭の遺構である。

f. 各層出土の遺物(図10)

第7層から出土したものは、土師器碗1、須恵器环身2、土馬3を示した。1は9～10世紀、2は8世紀のものであろう。土馬は粘土板で頭部を挟みこんで三日月形の頭部を成形している。

第3層から出土したものは、瀬戸美濃焼皿11・12、銅鏡24・25を示した。11は草花のスタンプ文をもち、12はソギ皿である。24は元豊通宝、25は慶長通宝である。これらは豊臣後期の遺物であるが、地層の年代は前述のように17世紀後半に下る。

第4b層から出土したものは、肥前陶器碗13、中国産青花皿14を示した。これらも豊臣後期に属する。

3)まとめ

- ・現地表下約2mの河成堆積層の上に古代から現代にいたる時代の地層が良好に遺存していた。
- ・古代～中世の古土壤を検出し、最も古い遺物は8世紀まで遡ることがわかった。当地における人間活動の始まりの時期である。
- ・中世以降は盛土による地上げに伴う地層と宅地に係る遺構が発見された。そのうち、第4b層は天満堀川開削による堆土を用いた整地層であることが考えられた。

引用文献

大阪市文化財協会1995、「㈱ティーエスシーによる建設工事に伴う天神橋造路発掘調査(TJ94-4)略報」

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005、「西天満1丁目所在遺跡発掘調査(WT04-2)報告書」:「平成16年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」pp.3-6
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「天神橋遺跡発掘調査(TJ08-1)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)」、pp.10-20
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011、「天神橋遺跡発掘調査(TJ09-1)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2009)」、pp.3-12

南壁地層断面
(西部)



南壁地層断面
(東部)



第8層上面造構全景
(東から)



第7層上面SA56・57
(南西から)



第6a層上面遺構全景
(東から)



第4a・4b層上面遺構全景
(東から)



北区天満橋一丁目における建設工事に伴う
天満橋1丁目所在遺跡発掘調査(TW12-1)報告書

調査個所 大阪市北区天満橋1丁目1-3
調査面積 87m²
調査期間 平成24年11月26日～12月7日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、清水和明

1) 調査の経過

天満橋1丁目所在遺跡は造幣局から国道1号線を隔てて北側に位置する。造幣局一帯は、天満本願寺跡として1994年以来繰り返し調査が行われ、豊臣秀吉と和睦した頃如が1585(天正13)年に鷺森本願寺から移転した天満本願寺の遺構が探求されている。これまでのところ、天満本願寺に直接関係する遺構は未確認であるが、造幣局南側の大川沿いの調査では豊臣前期に遡る石垣を伴う大型屋敷地が複数検出されている〔大阪市文化財協会1995・1997・2008〕。

一方、造幣局北側の泉布親一帯では調査件数が少なく、国道1号線の拡幅工事に伴うTW08-1次調査地、TW11-1次調査地などをあげうるのみである。TW11-1次調査地では豊臣期の整地層上面に形成された溝や土壙が見つかっている〔大阪文化財研究所2011〕。また、TW08-1次調査地では盛土による堤防跡が見つかっている。この堤防は一部が検出されたのみであるが、上端面で幅7m前後、下端幅20~25m前後に推定される大規模なもので、北で東に約15°振っている。盛土層からの出土遺物は少ないが、確実に豊臣後期以降と言えるものは出土していないとされている。また、徳川期の「明暦元年大坂三郷町絵図」(1655年)に描かれた大川沿いの堤に一致するとみられることから、調査で見つかった堤防は豊臣秀吉普請による堤の可能性が高いことが指摘された〔大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010〕。

今回の調査地は、1935年に泉布館北側に建設された、旧造幣寮の金銀貨幣鑄造所正面玄関を移築復元した旧桜宮公会堂(元明治天皇記念館)の北側に接している。平成24年10月16日に大阪市教育委員会による試掘調査が行われ、調査地の東端付近では現地表面から1.6mの深さで中世に遡る遺物を包含す



図1 調査位置図



図2 調査区位置図

る地層が検出され、付近における近世以前の遺構・遺物を明らかにするため、同年11月26日から発掘調査を開始した。ただし、旧桜宮公会堂に接する側は、当時の建設工事によって搅乱されているため、当初の予定地よりできるだけ北側に調査区を設定した結果、当初計画の85mに対し、若干調査面積が増加した。

11月26日は降雨のため、翌27日から重機掘削を開始した。現地表面から深さ1.2m付近で近現代の地層直下にあって整地層とみられる浅黄褐色粗粒砂層(後述の第6層)を検出し、その基底面が調査区の西側で深く、中央付近ではごく浅くなることから、本層の下位に土手状の高まりが埋没していること、さらに試掘 sondage の断面観察から盛土によって構築されていることが判明した。調査区の南100m のTW08-1次調査地で検出された豊臣期に遡る堤防との関連が予測されたため、以後の調査の主眼を高まりの検出および築造時期の検証に置き、人力による掘下げ、図面・写真による記録作成を行って12月6日に調査区内での発掘作業を終了、翌7日にMagellan社製ProMark 3による基準点のGPS測量を行って現地における全ての作業を完了した。

以下にその結果を報告する。方位は上記測量による世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はTP値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

2) 調査の結果

調査地はTP+3.4~3.7m付近で、調査地の中央付近がわずかに高い。この高い部分は調査地からさらに北西方向へ延び、高層建築である大阪アメニティパーク(OAP)アートコートへ向かって続いているが、調査後に判明した近世堤防の頂部と方向が一致しているため、地下に堤防の継続が埋没している可能性が高いと考えられる。

i) 層序(図3・4)

第1~5層は近現代の整地層である。

第1層：黒褐色(2.5Y3/1)礫混りシルト質粗粒砂層である。層厚は10~30cm程度である。

第2層：黒褐色(2.5Y3/1)シルト質中粒砂層で塙ビ管を含んでいる。層厚は約20cmである。

第3層：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細緻質粗粒~極粗粒砂層である。基底付近で金属製の鍋が出土している。層厚は約20~60cmである。調査区西壁で本層が旧桜宮公会堂建設のための掘削を埋めていることが確認できる。

第4層：褐色(10YR4/4)シルト質中粒砂層で層厚は約20~50cmである。調査区の北壁西部では、本層の一部を掘り窪めて1辺30cm程度の直方体の石を設置している。調査区の西に接して造幣寮当時のレンガ積建物が残っており、当時何らかの造作を行ったものの可能性がある。

第5層：明黄褐色(10YR6/6)中粒砂層で層厚

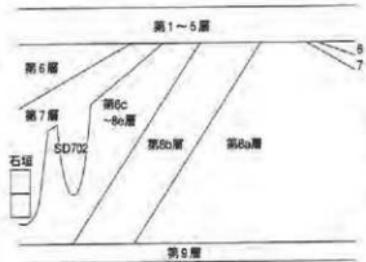


図3 地層と遺構の関係図

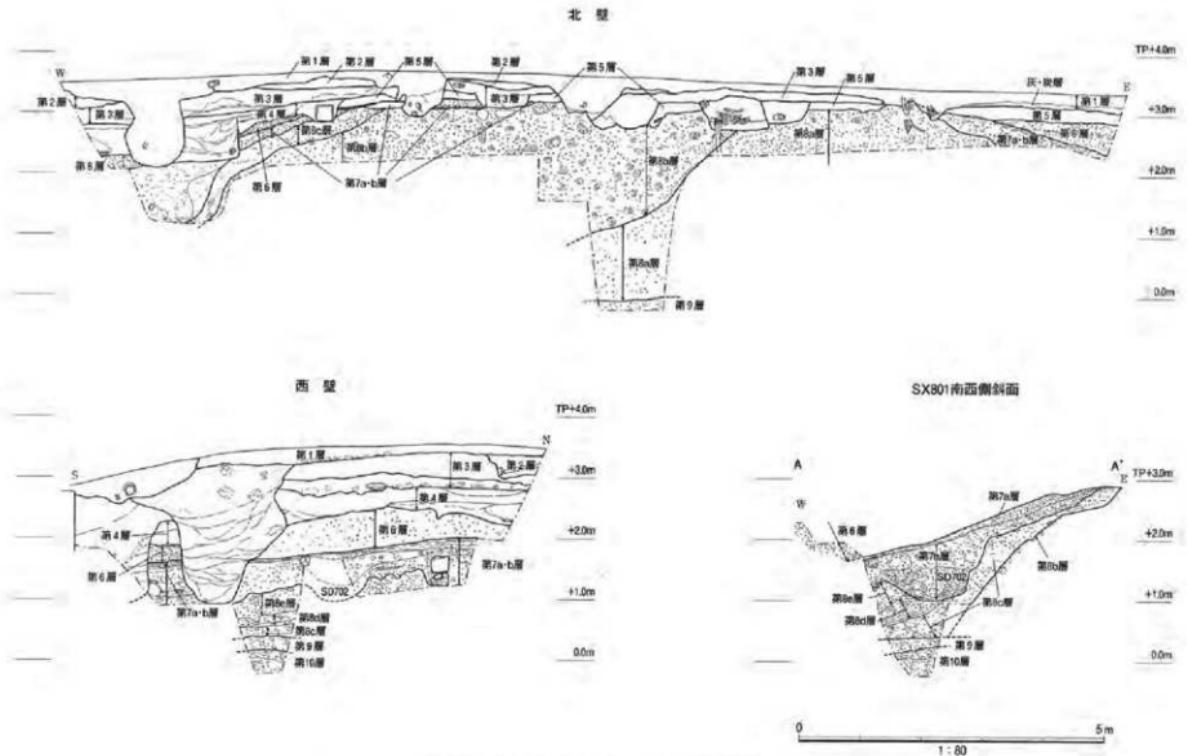


図4 調査区北壁・西壁およびSX801地層断面図

は10cm程度である。調査区の西部では第4層に切られており、また調査区北壁中央のやや東寄りではレンガ積堤の基礎によって壊されている。この場のレンガは先述の建物と同一であり、現在も造幣寮の北を画するレンガ塀の一部が取り壊され、基礎のみが埋められて残ったものと考えられる。そこで、第5層は造幣寮建設に先だって行われた整地層とみてよいであろう。

第6層：浅黄褐色(10YR8/4)粗粒～極粗粒砂層で、18世紀末～19世紀初頭の遺物を含む近世末に近い時期の整地層である。調査区の西側で厚く最大60cmであるが、東端付近でも狭い範囲で確認されており、東端部で層厚50cm程度である。

第7層：第7a・7b層の2層に細分される盛土層である。上部の第7a層は明黄褐色(10YR6/6)シルト、下部の第7b層は明黄褐色(10YR6/6)極細粒砂を主体とする。後述する溝SD702や石垣は本層によつて埋没している。本層上面で第6層とは同じ時期の18世紀末～19世紀初頭の遺物が出土している。

第8層：本層は豊臣期以前に遡る堤防本体を形成する第8a・8b層と、徳川期に増築された第8c・8d・8e層に大きく2分される。徳川期の第8c層は明黄褐色(10YR6/6)シルト質極細粒砂層、第8d層はにぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質極細粒砂層、第8e層は明黄褐色(10YR7/6)細礫質極粗粒砂層で、第8c・8d層には細粒砂質シルトの偽礫が顕著に含まれている。第8c・d・e層の順に新しく盛土されているが、出土遺物からは18世紀後葉～末の間に取まる。一方、第8a・8b層は層厚300cm以上に達する大規模な盛土である。第8a層は明黄褐色(10YR7/6)で偽礫が目立たない均質なシルト質極細粒砂を用いた盛土層、第8b層は黄褐色(10YR5/6)シルト質細粒～中粒砂層で、長径20～30cmに達する黄褐色中粒砂およびシルトの偽礫を多量に含んでいる。出土遺物からは豊臣期以前と推定される。

第9層：にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト質極細粒砂層でシルトの偽礫を含む整地層である。調査区の中央部・西端部の深掘りトレンチで第8a・8b層の下位で確認されたため、大規模な堤防を構築する作業面はこの整地層の上面とみられる。層厚は35cmで、出土遺物はない。

第10層：にぶい黄褐色(10YR6/4)極細粒砂層で、調査区西端部の深掘りトレンチでのみ確認された。調査地に堤防を構築する以前の地層と思われるが、出土遺物はなく時期は不明である。層厚は30cm以上を認め、その基底は未確認である。

ii) 遺構と遺物(図4～7)

豊臣期以前の遺構

第8a・b層で形成された大規模な堤防跡とみられる盛土SX801が検出された。調査区西部では南西方向へ、調査区東部では北東方向へ傾斜しているため、盛土の方向は北で西に31～32°程度振っているとみられる。

北東側の第8a層が先行して盛土され、後に第8b層が南西側に追加されている。地層断面の観察では第8a層の上面付近に土壤は形成されていない。平面でも両層の境界は盛土と同じ方向に延びることから、ある程度の範囲に及んで第8a層を先行して盛土し、一連の作業で第8b層を追加したものと推定される。第8b層による南西側斜面は作業面である第9層上面に対して50°以上の傾斜となる。盛土の頂部は後世に削平されているが、現在の周辺地形も盛土に沿ってわずかに高くなっているため、大きな改変は受けていないであろう。また、北東側斜面は盛土裾が調査区外になる

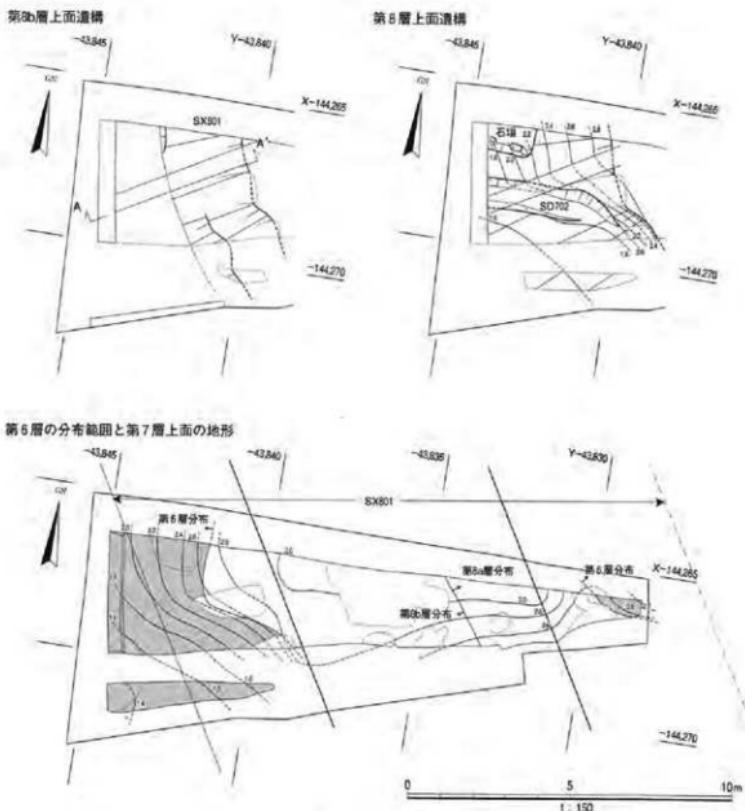


図5 各層の遺構

ため未確認だが、南西側に比して多少緩い角度をなしている。これらの点から盛土の規模を推定すると、基底幅15m以上、高さ3m以上となる。

第8b層から出土した遺物はごく少量で、土師器・瓦器の細片以外に瓦質土器鍋1、白磁皿2、灰釉陶器壺3などがあるが、豊臣後期以降になる遺物はない。また、第8a層の出土遺物はない。

TW08-1次調査地の堤防跡SX901は基底幅20~25mと推定されSX801よりも大きいが、高さが3.4mではほぼ同規模であること、東側を先行して造成した後に西側を追加していること、盛土層内の出土遺物に豊臣後期以降と言えるものがないことなど共通する点が多い。また、SX901の方針は北で東に15°振っているが、堤防が大川に沿って築かれたことを鑑みると、SX901以北では方位を北から西へ曲げていることは川筋と矛盾ないものである。

以上から、SX801はTW08-1次調査地の堤防跡SX901と一連の堤防跡と考えられる。

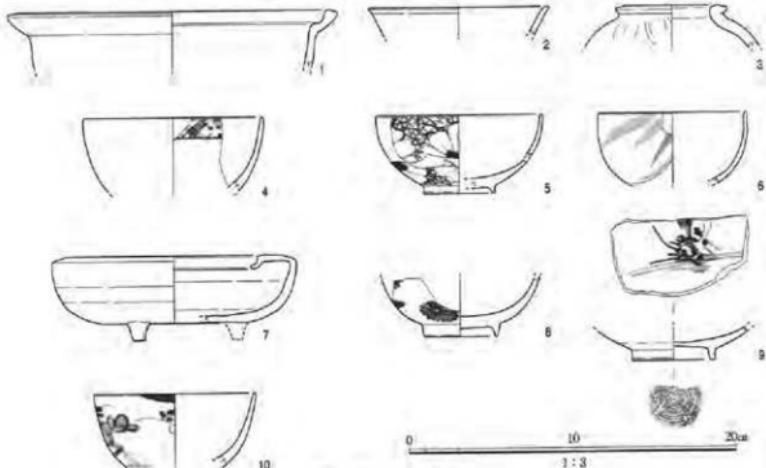


図6 SX801出土遺物
第8b層(1~3)、第8c層(4)、第8d層(5~7)、第8e層(8~10)

徳川期以降の造構

豊臣期に構築されたSX801は徳川期に補修や改変を受けている。南西側斜面でのみ確認された第8c・8d・8e層は18世紀後葉～末にかけて堤防の斜面から裾を増築・補修した際の盛土層と考えられる。第8c層の出土遺物には肥前磁器青磁染付碗4、第8d層には氷裂文のある肥前磁器染付碗5、関西系陶器の色絵碗6、丹波焼の鉢ないし香炉7、第8e層には肥前磁器染付碗10、同じくコンニャク印判のある8、肥前陶器皿9などがある。8や10のように17世紀末～18世紀中葉に遡るものも含まれるが、総じて18世紀後葉～末のものであり、第8c～e層に大きな時間差はない。

TW08-1次調査地でも堤防西側に徳川期の補強とみられる追加の盛土が確認されており、わずかな出土遺物からは概ね同時期の造作とみられ、この時期に堤防の内側に対する補修が広い範囲で行われたものと考えられる。

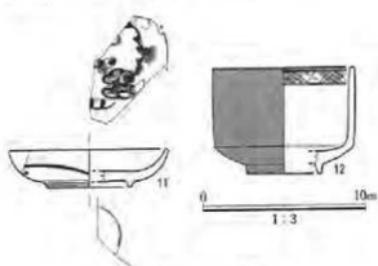


図7 SD702出土遺物

続く第7層で埋められた遺構に、SD702と石垣がある。どちらも堤防の南西斜面にある。

SD702は傾斜に対して斜め方向に掘削された東西方向の溝で、幅は約1.0m、深さは最大で約1.0m、西は調査区外に続いている。堤防への登り降りに利用された仮設的な溝の可能性もあるが、性格は不明である。出土遺物には図7-11-12の肥前磁器染付皿や青磁染付筒茶碗などあり、18世紀後葉～末頃のもので

であろう。

石垣は調査区北西隅で長さ1.4m以上が検出された。一辺が30cm、長さ50cm程度の割石や河原石を用いて4列2段が確認された。石は北側の面を揃え、南側に掘形があるため石垣は北に開いていたものである。堤防に取りつく最も東側の石は1段のみで、北側面を東に振って置かれており、堤防の盛土中に埋め込むようにしていったものであろう。堤防に取りつけられた石垣であるが、その性格は不明である。

このように、徳川期の中でも第8c～e層の盛土まではSX801が堤防として機能していたと考えられるが、その後は役目が失われていったようであり、第6層の極粗粒砂層で整地される18世紀末～19世紀初頭には堤防を埋めるような一帯の嵩上げが行われたと考えられる。

3)まとめ

今回の調査ではTW08-1次調査地の堤防跡SX901に連続する堤防跡を検出した。その時期を明確に示す出土遺物はないものの、やはり徳川期より古く、豊臣秀吉による天正期の堤防普請に対応する遺構である蓋然性が高い。

堤防は徳川期の18世紀後葉～末に補修され、堤防の内側(南西側)で確認されたが、外側(北東側)については調査区外のため未確認である。

18世紀末～19世紀初頭になると、堤防を埋めるような一帯の嵩上げ工事が行われたようである。

現在の地形でも、調査地の北西へ向かう堤防跡の延長上に微高地が続いており、堤防が地下に埋没している可能性がある。

引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「桜宮地区埋蔵文化財(天満1丁目所在遺跡発掘調査 TW08-1)報告書」；
『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
大阪市文化財協会1995、『天満本願寺跡発掘調査報告』I
1997、『天満本願寺跡発掘調査報告』II
2008、『天満本願寺跡発掘調査報告』VI
大阪文化財研究所2011、『北区天満橋一丁目における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(TW11-1)報告書』

調査区と周辺の状況
(東から)



第6層上面
(南西から)



第7層上面
(南西から)



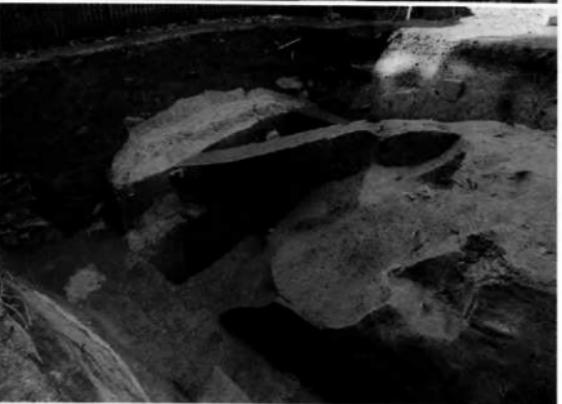
第8b層上面および
第8a層上面(東から)



堤防西南斜面
(第8b層上面:南西から)



堤防西南斜面
(第8b層上面:南東から)



中央区森ノ宮中央二丁目 7-1 における建設工事に伴う
難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW12-1)報告書

調査個所 大阪市中央区森ノ宮中央2丁目7-1
調査面積 40m²
調査期間 平成24年4月26日～4月28日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、黒田慶一

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は図1に見られるように既調査が多い地域で、難波宮東方官衙の東方に当り、豊臣氏大坂城の玉造口馬出堀の南辺部に位置すると考えられ[黒田慶一2000]、地勢は西高東低で、現地表の標高は北の歩道上でTP+16.2~17.2mである。

当敷地は東西に広く、南北に狭い台形を呈する。西側より浅く遺構が検出されると考え、図2のように敷地の中央部に南北4m×東西10mの調査区を設けることとした。

また西方のNW10-4次調査地、「森ノ宮谷」[趙・清水2011]が北谷・南谷に分かれることが確認されており[大阪文化財研究所2012]、当調査地は北谷の南縁辺部に相当する可能性がある(図3)。

大阪市教育委員会の試掘調査で地表面下1.3mにおいて、近世の遺物包含層と遺構面を確認したことから、本調査を行うこととなった。事業主が地表面下1.3mまで掘削を完了した時点で、調査に着手することとした。2012年4月26日より調査を開始し、人力と機械を併用し、遺構検出・掘下げ・写真撮影・図面作成などの作業を行ったが、出土に悩まされ、南半で灰オリーブ色細礫質粗粒砂層(第4層)上面の検出、東北部の深掘りでTP+12.3mまでの地層を確認するに留まった。また市教委から、特に第1層の遺物の採取を指示され、調査区北側に遺物探集ピットを設けて発見に努めた。4月28日に現場作業を完了し撤収した。

なお、基準点はmagellan社製ProMark 3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はTP値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。



図1 調査地位置図

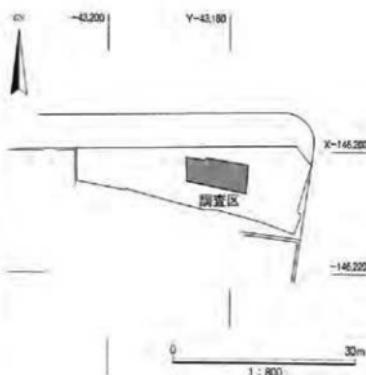


図2 調査区位置図

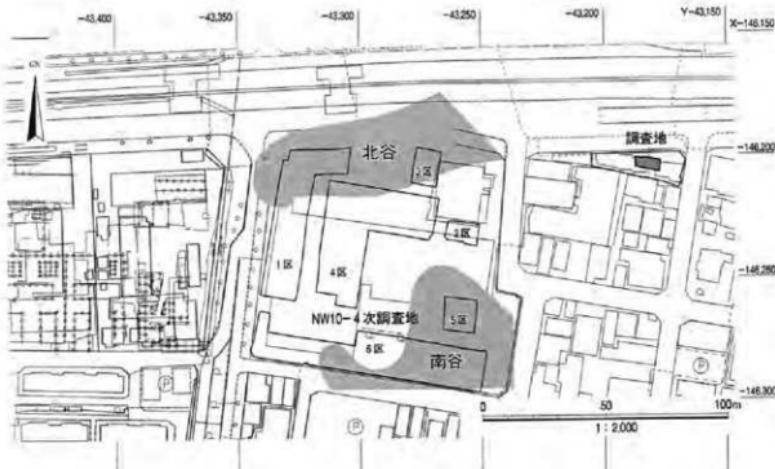


図3 調査地と北谷・南谷の関係

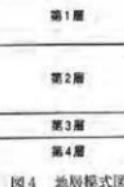


図4 地層模式図

2)調査の結果

i)層序(図4・5)

調査は地表面下1.3mまで、機械的に水平にカットした状態で着手した。第1層より上層の状況は不詳である。

第1層：層厚70~90cmの明黄褐色(10YR6/8)細礫質粗粒砂～シルト質粗粒砂の盛土層である。唐草文軒平瓦2と繩目タタキの平瓦4が出土し、古代～中世遺物を多く含む。

第2層：上面が西から東へ傾斜する層厚160~170cmの灰色(10Y4/1)粘土の盛土層である。緑灰色(10GY5/1)～暗オリーブ灰色(5GY4/1)粗粒砂の薄層がほぼ水平に分布していることから、盛土作業は層厚10cm単位で、均しながら行うという計画性がみられる。最下部には薄い中粒砂層が堆積する。遺物を含まない。

第3層：層厚20cmの有機物を含む暗オリーブ灰色(7.5GY3/1)シルト質粗粒砂層で、瀬戸美濃焼青織部向付1と薄い焼し平瓦3が出土した。

第4層：層厚40cm以上の灰オリーブ色(7.5Y5/2)細粒砂質粗粒砂の自然堆積層である。

ii)遺構(図7)

第2・4層上面の遺構

第2層に含まれる直径0.2~0.3mの河原石3個を検出した。第4層上面には遺構が見られなかった。

iii)各層出土遺物(図8)

a. 第1層出土遺物

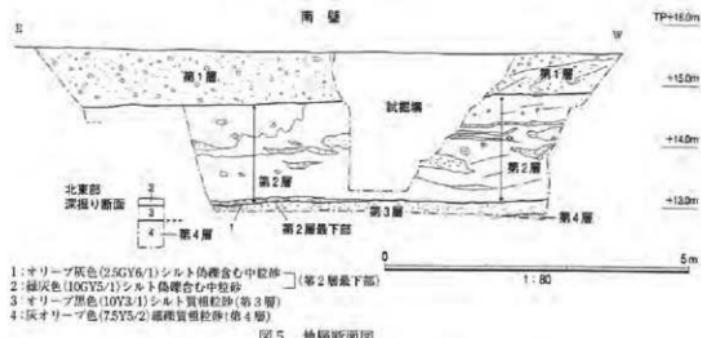


図5 地盤断面図

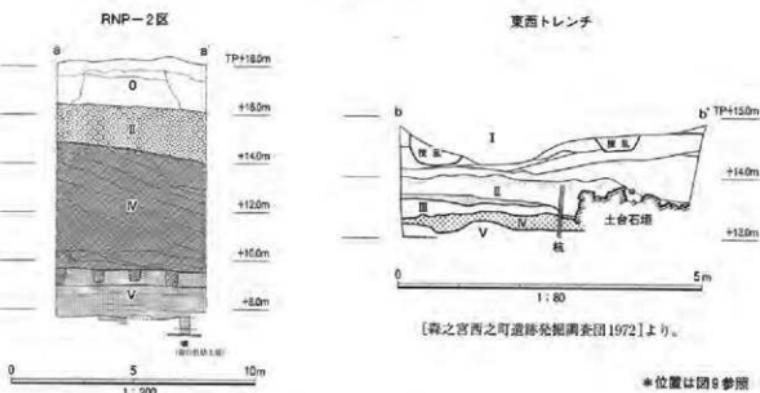


図6 森之宮西之町遺跡地盤断面図

唐草文軒平瓦2は側区が幅広く、左端の唐草は上向きで強く巻き、1回転して梢円形を作る。文様区に離れ砂が付着する。平瓦凸面の瓦当際は、瓦当に平行に溝状に凹み、瓦当面施工時の當て具痕跡の可能性がある。

平瓦4は凸面に平行の縦目タタキを施し、端縁際4cmはナデ調整を加える。凹面に模骨の幅2.5cmの板材と布目の圧痕が残る。厚さ1.4cmと薄く、灰白色を呈する。

b. 第3層出土遺物

瀬戸美濃焼青織部向付1は、平面が多角形で、小粘土板をV字形に折り曲げて成形した脚が付く。

平瓦3は凸面に凹面台座痕が残り、厚さ1.2cmと極めて薄い焼し瓦である。堺環濠都市遺跡では慶長大地震(1596年)以降に現れることから、地震の被害を避けるため屋根の軽量化を図ったものという指摘がある[近藤康司1997]。大坂でも同様の薄手の平瓦は、大坂町中屋敷替え(1598年)の盛土直下

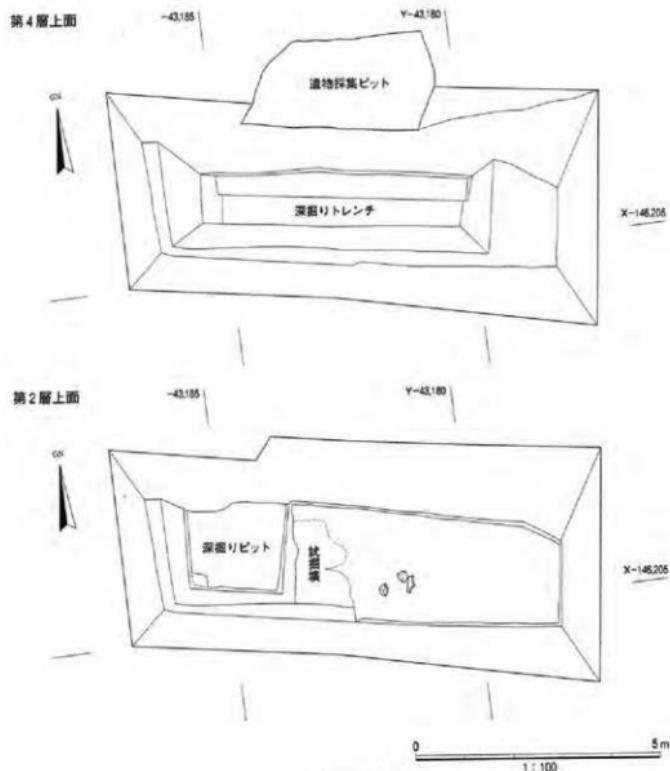


図7 調査区平面図

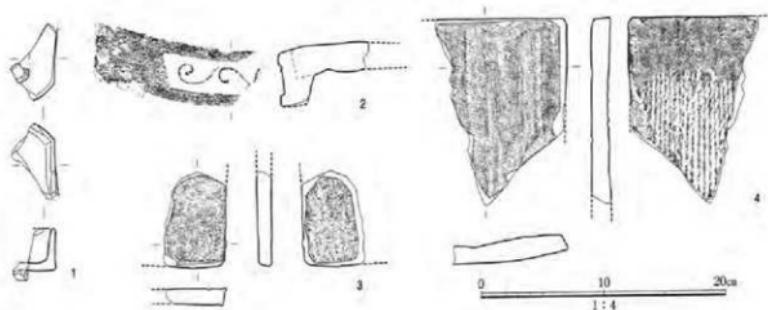


図8 出土遺物実測図
第3層(1・3)、第1層(2・4)

や大坂ノ陣(1614~15年)の焼土層に見られる。

iv)森之宮西之町遺跡との関係(図6・9)

阪神高速道路東大阪線建設に伴い、近隣地は森之宮西之町遺跡という遺跡名で調査されている[森之宮西之町遺跡発掘調査団1972・大阪市文化財協会1981]。特に土台石垣を検出した東西トレンチは、当調査区の北西4mの至近であり、地層を対比するには絶好の資料なので、以下検討を加える。但し、[森之宮西之町遺跡発掘調査団1972]と[大阪市文化財協会1981]とでは、同一層に異なる層名を与えており統一した。後者のⅢ層は前者のⅡ層に、V層はIV層に、VI層はV層に相当するから、前者に合わせて言い換えた。また以下では近年の報告書では用いない土質名を含むが、引用文であるから、そのまま用いることにした。

西之町I層：須恵器・土偶器、飛鳥時代の格子タタキ平瓦、難波宮瓦、豊臣期の軒平瓦を含む黄褐色砂質土の盛土層で、第1層に相当する。

西之町II層：暗灰色粘質土の盛土層で遺物は少ない。東西トレンチでは層厚100cm、上面はTP+14.8mを測り、東部の集石は本層に一部突き込むように置かれていた。RNP-2区では層厚150~200cm、上面はTP+16.0~16.5mである。第2層に相当する。

西之町III層：種々の貝殻が混入する青灰色砂質土層で、東西トレンチでは層厚20~30cmを測るが、RNP-2区には分布しない。上面は固く、出土品はワラジのほか手焼きや瓦片があった。

西之町IV層：黒褐色土の盛土層で焼灰、焼壁、焼木を含み、肥前陶器・瀬戸美濃焼・備前焼・丹波焼・中国産青花などの陶器が混じり、被熱したものが多いた。東西トレンチでは層厚10~30cm、上面はTP+13.4mを測り、上面に土台石垣が築かれている。RNP-2区では層厚450~530cmを測る。第3層に相当する。

西之町V層：青灰色砂質土層で、部分的に層厚5~20cmの貝層が存在した。上面の標高は東西トレンチでTP+13.2m、RNP-2区でTP+9.2mで、第4層に相当する。

以上の検討から、第4層は地山の可能性があり、第3層と西之町IV層は夏ノ陣後の地形を平坦化するための整地層だが、上面に築造された土台石垣は、西之町II層で埋没する。第2層と西之町II層は層厚1~2mに及ぶ計画的な盛土層で、第2層上面が西から東へ低く傾斜していることは、整地工程の中途である状態を示すから、時間をおかず、上町台地上の遺物包含層を客土として用いた、層厚1m以上の第1層と西之町I層による整地作業が行われたと考えられる。

3)まとめ

今回の調査区は狭く深いため、平面調査には困難が伴ったが、既調査の森之宮西之町遺跡の成果を鑑みる時、いくつかの大きな発見があった。

一つは西之町遺跡の土台石垣廃棄後の整地のあり方である。土台石垣は夏ノ陣直後の大坂藩主松平忠明が構築し、徳川秀忠による大坂城再築時に埋められたことは、以前から指摘されてきたが、秀忠による再築時と思われる第1・2層(西之町I・II層)による整地は、同一工程として捉えるべきであること。

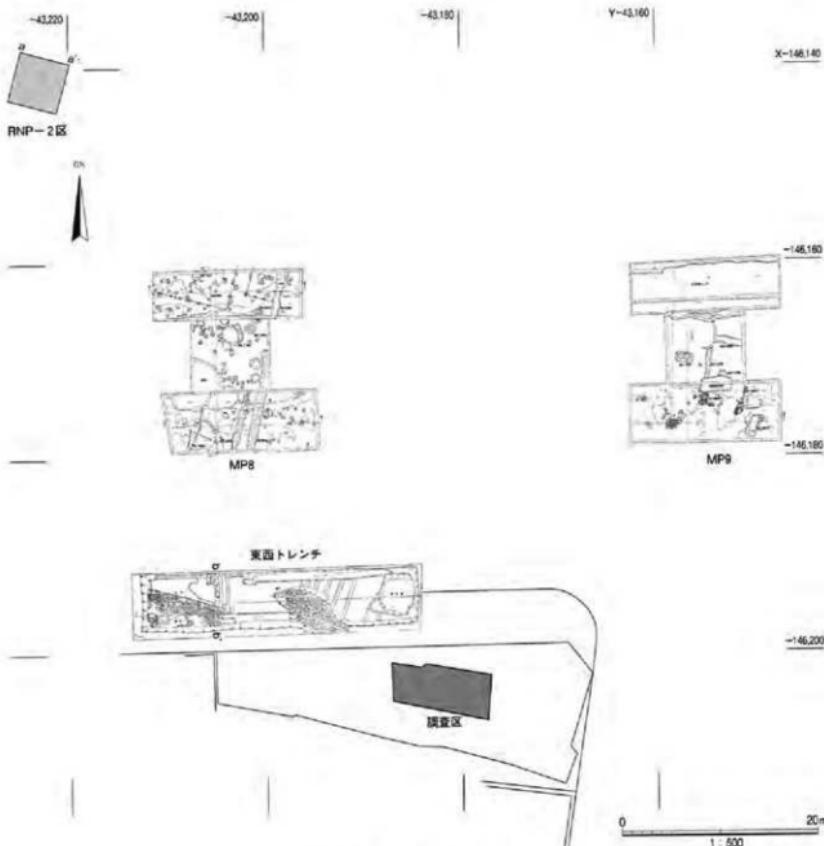


図9 周辺部の調査地との関係図

二つは第3層上面(西之町IV層)の標高が、東西トレーニチと当調査区では0.4mほどの高低差をもち、土台石垣が周辺部より一段高いところに構築されていることが確認されたこと。

三つは夏ノ陣で投棄された遺物を多く含む西之町IV層は、RNP-2区で特に分厚いことから、RNP-2区に掘のような深い遺構が想定されること、などである。

図9に示したように、阪神高速道路の橋脚であるMP8とMP9の建設に先行する調査では、豊臣後期の北で東に振る方位をもつ礎石建物や溝・土壤が多く検出されている。ここは玉造馬出曲輪内に相当する可能性が高く、馬出堀の位置、特に東側の堀の位置確定作業は、これから課題である。

引用・参考文献

- 大阪市文化財協会1981、『難波宮址の研究』第七 報告篇
- 大阪文化財研究所2012、『難波宮址の研究』第十八
- 黒田慶一2000、「豊臣氏大坂城三の丸再考－玉造馬出(算用曲輪)を中心として」：『攝都城郭』第7号、pp.187-199
- 高速大阪東大阪線難波宮跡調査会1978、「大阪府道高速大阪東大阪線の通過に伴う難波宮跡発掘調査概報」
- 近藤康司1997、「堺環濠都市遺跡出土の瓦について－慶長年間に製作された瓦の検討－」：『堅田直先生古稀記念論文集』 pp.715-724
- 趙哲済・清水和明2011、「上町台地でも起こっていた歴史時代の地すべり」：大阪文化財研究所編『葦火』155号、
pp.6-8
- 森之宮西之町遺跡発掘調査会1972、「森之宮西之町遺跡第1次調査概報」

調査区全景
(東から)



第2層上面
(西から)



南壁地層断面
(部分)

第一層
第二層
第三層
第四層



中央区上町1-5他における建設工事に伴う
難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW12-2)報告書

調査個所 大阪市中央区上町1-5・1-6・1-7・1-8・
1-9・1-14・1-15・1-16

調査面積 48m²

調査期間 平成24年7月18日～7月25日

調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所

調査担当者 次長 南秀雄、高橋工、谷崎仁美・小田木富慈美

1) 調査に至る経緯と経過

本調査地は、大阪市域を南北に延びる上町台地の北端部付近に立地する。大阪市中央区の西部にあって、上町筋の東、史跡難波宮跡の南に接している(図1)。難波宮跡は大化改新に伴う難波遷都で設置された宮殿の遺跡である。宮に関する造構は7世紀の前期難波宮(孝德朝)と8世紀の後期難波宮(聖武朝)の2時期のものが重複しているが、調査地は、前期難波宮朝堂院回廊西南隅の西約60mに当り、周辺では殿舎は発見されていない。後期では朝堂院回廊同位置の西約100mに当り、大極殿院西方に設けられた「五間門区画」の南方に当る。また、万葉仮名文字を用いた「はるくさ」木簡が出土した谷は調査地の約80m西に当る(NW06-2次調査地[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008])。

当地で計画された建築工事に先立って大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、現地表下約1mで地山層が発見され、その上面で造構がみとめられたため、本調査が行われることとなった。調査区は敷地の南側に設定し、40m²を調査する予定であったが、柱穴状の造構の一部を発見したため、その続きを追及するために北側を拡張して頭書の調査面積となった(図2)。近世後半の遺物を含む客土層(後述の第1・2層)を、地山層が検出される高さまで機械掘削によって除去し、それ以下の造構精査・掘下げ作業は人力で行った。途中、写真撮影・実測を行って記録を作成した。また、基準点はmagellan社製ProMark 3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標化を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。本報告の遺物と考察の記述は小田木富慈美が行い、それ以外は高橋が行った。

2) 調査の結果



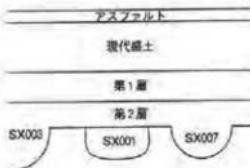


図3 地層と遺構の関係

i) 層序(図3・4)

調査地は駐車場として利用されており、調査はアスファルト舗装を撤去した現代盛土層上面から調査を開始した。開始時の地表面標高はTP+21.2m前後で平坦であった。現代盛土層の下位で、以下の3層を確認した。

第1層：暗褐色～黒褐色シルト～砂からなる盛土層である。層厚は20～60cmで、19世紀前半までの遺物を含む。また、本層からは少なくない数の輪羽口(写真1)と鉢底が出土した。

第2層：暗オリーブ褐色粘土質細粒砂からなる盛土層である。層厚は20～60cmで、南方に向って層厚を増していた。19世紀初頭までの遺物を含む。

第3層：明黄褐色砂～シルトからなる地山層である。上方に細粒化していた。上面は激しく削剥を被っているが、最も高く遺存する個所でTP+20.1mである。遺構はすべて本層上面で検出した。

ii) 近世の遺構と遺物(図4～6)

遺構はすべて第3層の上面で検出し、いずれも年代は徳川期に属するものである。以下、主要な遺構を報告する。

SE002 東壁際で検出され、SX003に切られる。東西1.1m以上、南北1.2mで平面形は円形を呈する。明褐色細粒砂で埋められており、検出面から深さ0.6mまで掘り下げたが底は検出されなかつた。井戸とみられる。

肥前陶器・磁器のほか、土師器・丹波焼・瀬戸美濃焼・瓦、輪羽口、鉄釘、骨片が出土した。1は肥前磁器染付碗である。2は丹波焼鉢で、口縁部は軽く折り曲げて外反させる。寸目は1単位8条である。3・4は土師器である。3は皿で、口縁部に煤が付着する。4は焰烙である。以上は17世紀後葉に属する。

SE005 東壁際で検出され、近代の土壤に上部を搅乱されていた。東西1.1m以上、南北1.2m以上で、平面形は円形を呈する。暗褐色細粒質細粒砂で埋められており、検出面から0.7m掘り下げたが底は検出されなかつた。井戸とみられる。

肥前陶器・磁器ほか土器類・国産陶磁器、および土人形、瓦類、輪羽口、砥石、金属製品が出土した。なお、SE005上層からは19世紀初頭に降る遺物が出土しており、井戸廃絶後の窪みを廃棄土壤として利用した可能性がある。以下では下層出土の遺物について述べる。5は肥前白磁の皿である。型打整形であり、口縁部は輪羽となる。6・7は肥前磁器染付碗である。以上の遺物は17世紀中～後葉に属する。8は骨なし角張の双六駒である。片面の中央部分を欠失する。文様は中央に大きな円、その周間に小さな円を配して六角星形としている。厚さは1.0cmである。大坂城下町跡OJ92-24次調査出土の駒と形状や文様が類似する[大阪市文化財協会2004]。また、近年OJ11-5次調査地[大阪文化財研究所2012]で出土した完成品の平均値0.4cmと比較すると約2倍の厚さで、文様も複雑である。

SE004 南壁際で検出され、東西1.4m、南北0.8m以上で、平面形は円形を呈する。深さは0.9mまで掘り下げたが底は検出していない。オリーブ褐色細粒質細粒砂で埋められており、井戸とみられる。

年代を特定できる遺物は出土しなかった。

SX008 調査区中央で検出され、東西0.9m以上、東西1.7m、深さ0.4mである。SX006に切られる。暗褐色地山偽縦質粗粒砂で埋められていた。土採り穴であろう。

肥前磁器ほか土人形、骨片が出土した。9は肥前磁器の染付碗で、外面には一重網目文を施す。17世紀後半であろう。

SX001 調査区南西隅で検出され、東西2.4m以上、南北2.5m以上で、平面形は方形を呈するもの

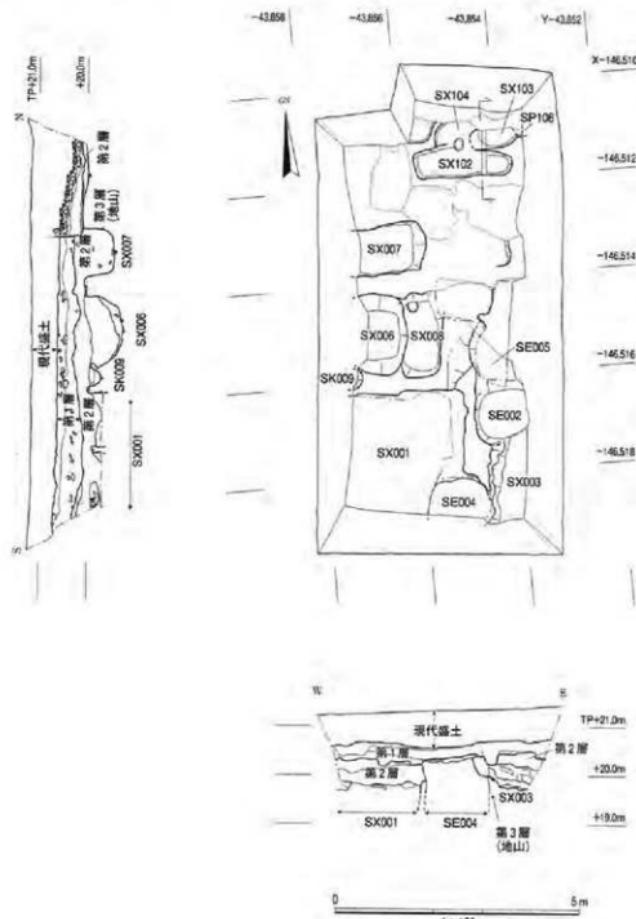


図4 地層と第3層上面平面図

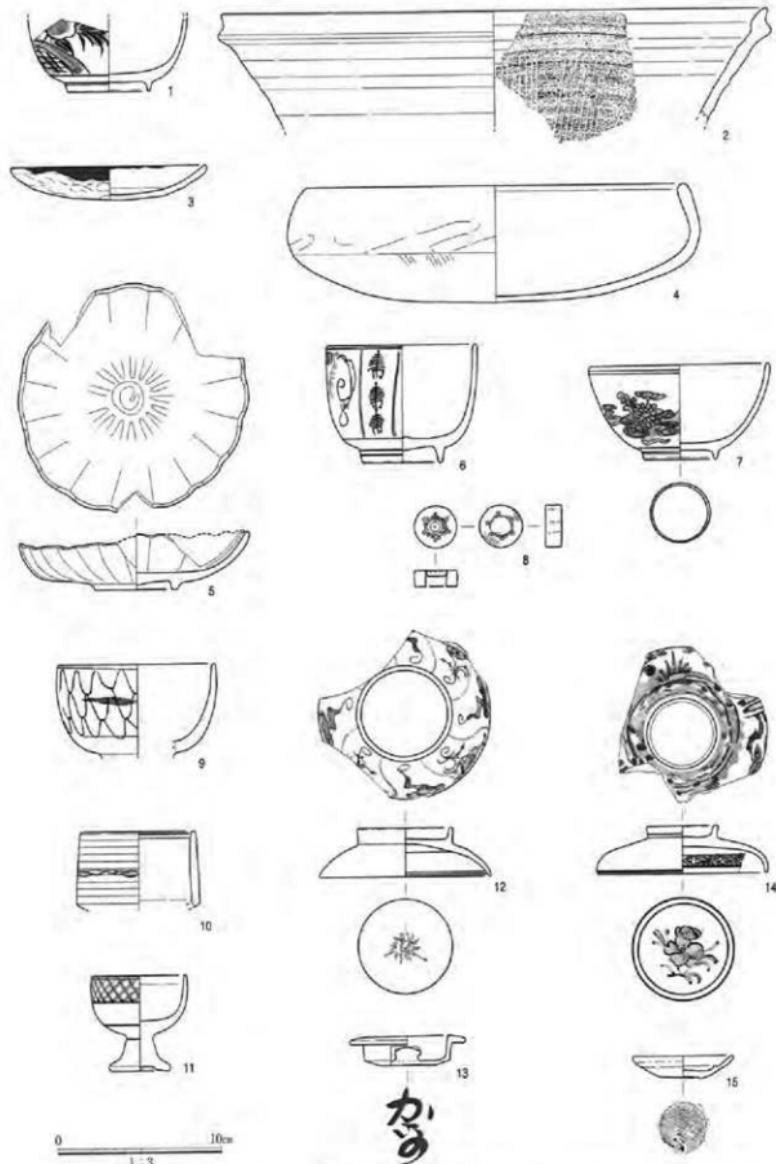


图5 出土遗物实测图(1)

SE002(1~4)、SE005(5~8)、SX008(9)、SX001(10~11)、SX006(12~13)、SX007(14~15)、SX008(9)

とみられる。暗オリーブ褐色砂で埋められており、0.6mまで掘り下がたが底は検出されなかった。本遺構からは多数の培塿が出土した。

肥前磁器のほか、土師器・丹波焼・瀬戸美濃焼・関西系陶器・堺焼鉢・軟質施釉陶器・瓦が出土した。10・11は肥前磁器染付である。10は筒茶碗、11は仏壇器である。このほか難波洋三氏による分類のD類に属する土師器培塿がまとまって出土し、16~25を図示した[難波洋三1992]。16~25はいずれも口縁部が屈曲し、端部を丸く收めている。底部は型作りであり、口縁部と底部の境はヘラケズリによって調整する。底部には口縁部との屈曲部から約2cm底寄りの箇所に円孔を1個穿つ。16~18は焼成後穿孔で、19~25は焼成前に筒状の工具で穿孔している。いずれも底部外面には煤の付着は見られないが、内面に灰白色ないしは茶褐色の付着物が認められる個体もある。16の口縁部外面には黒褐色の付着物がある。以上SX001出土遺物は18世紀末~19世紀初頭のものであろう。なお、土師器培塿についてはSX006・007出土遺物と特徴が共通しており、後でまとめて検討する。

SX006 西壁際で検出され、東西1.1m以上、東西1.6m、深さ0.8mである。暗オリーブ褐色地山偽砾質砂で埋められていた。土採り穴であろう。

肥前陶器・磁器のほか、土師器・丹波焼・関西系陶器・軟質施釉陶器・土人形・鶴羽口が出土した。12は肥前磁器染付で広東碗の蓋である。外面には蓮文を施す。13は関西系陶器で土瓶の蓋であろう。鉄輪を施す。内面には「か□□」の墨書きがある。これらは18世紀末~19世紀初頭のものであろう。このほかSX001出土遺物と同じ特徴を持つ土師器培塿26が出土した。26は底部の1箇所に焼成前穿孔を有する。

SX007 西壁際で検出され、東西1.4m以上、南北1.0m、深さ0.6mである。暗オリーブ褐色粘土質細粒砂で埋められていた。土採り穴であろう。

肥前磁器のほか、土師器・丹波焼・信楽焼・関西系陶器・軟質施釉陶器・土人形・貝が出土した。14は肥前磁器染付で碗の蓋である。口縁部内面には四方櫛文を巡らす。15は軟質施釉陶器の灯明受皿である。底部は糸切りしている。27・28はSX001出土遺物と同じ特徴を持つ土師器培塿である。27は口縁部外面に「大」の墨書きを有する。28は底部の1箇所に焼成前穿孔を有する。これらは18世紀末~19世紀初頭のものであろう。

SX003 東壁際で検出され、東西0.8m以上、南北2.8m以上を測り、近世の土壤に切られていた。深さは褐色地山偽砾質細粒砂で埋められていた。土採り穴であろう。時期を特定できる遺物は出土しなかったが、SE002を切り、SE005に切られるので17世紀後葉以降、19世紀初頭以前ということになる。

SX102~104 北壁際で検出された。いずれも東西に長い平面形を呈し、深さ0.1mほどと浅い。土採り穴の上部が破壊されたものであろう。時期を特定できる遺物は出土しなかった。

3) 考察 SX001・006・007出土の土師器培塿について

上記の遺構からはSX001を中心に土師器培塿が出土した。中には完形に近く復元できるものもあり、何らかの目的で使用されたものが一括廻棄されたと考えられる。これらの底部には口縁部へ屈曲する部分近くの1箇所に円孔を有し、底部や口縁部外面に通常の培塿に見られるような煤の付着が全く認

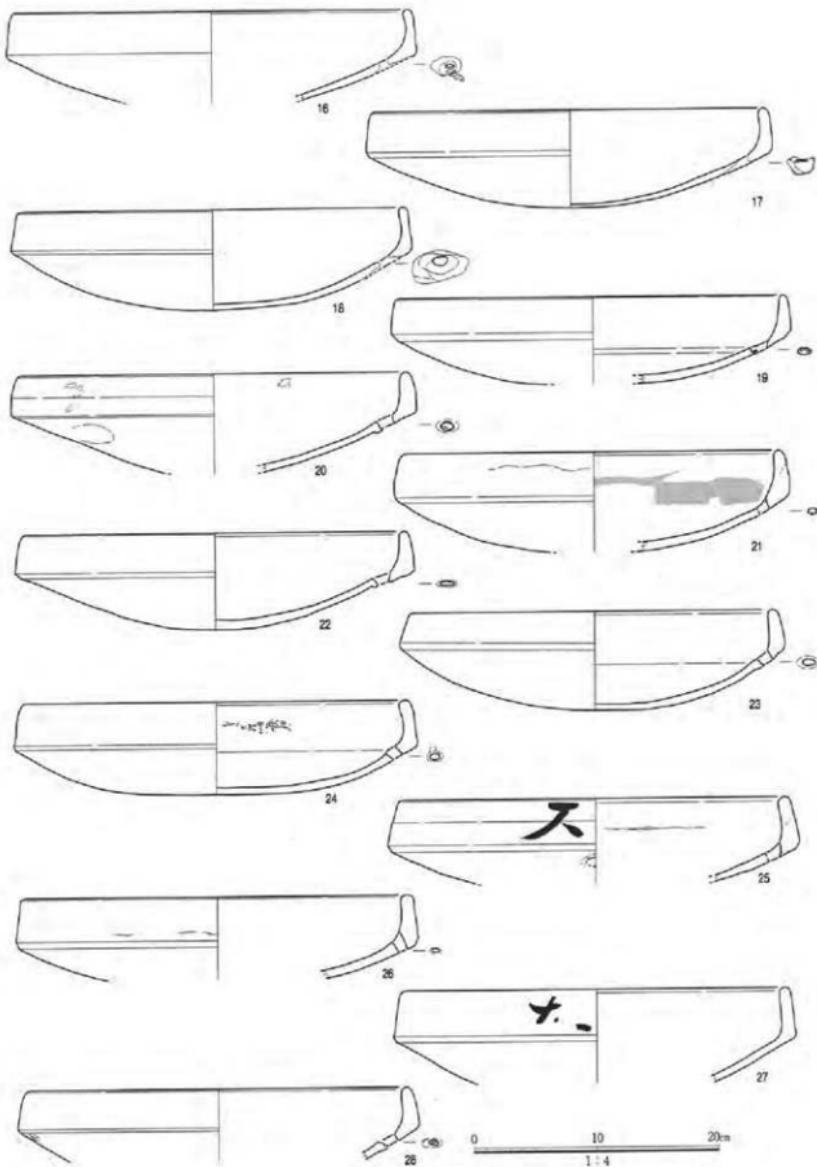


图 6 烧格实测图

SX001(16~25)、SX006(26)、SX007(27·28)

表1 始燃計測表

個体識別番号	報告番号	口縁残存率(8分の)	穿孔(焼成前・後)	平均孔径	孔端までの距離	内面付着物の量・色	備考	個体識別番号	口縁残存率(8分の)	内面付着物の量・色
088	16	2.20	後	0.8	2.5	多・茶褐色		030	0.90	-
089	17	1.00	後	1.1	2.2	多・白		031	1.00	-
094	18	6.70	後	1.2	2.1	多・茶褐色		032	1.10	-
023		1.00	後	0.8	2.2	中・茶褐色		033	1.25	-
087	19	3.00	前	0.9	2.3	少		034	1.10	少
090	20	3.60	前	1.1	1.9	中・茶褐色		035	0.80	-
091	21	3.50	前	0.8	2.1	中・茶褐色		036	0.80	-
086	22	5.00	前	1.0	2.3	多・茶褐色		037	1.00	-
096	23	6.50	前	1.0	1.7	少・白		038	1.30	-
095	24	2.60	前	0.8	1.5	中・白		039	1.40	-
098	25	1.80	前	1.5	1.9	少・白	墨書き「大」	040	1.90	-
101	26	1.20	前	0.7	1.1	少・白		041	2.70	-
099	28	1.50	前	1.0	3.0	少・白		042	0.25	-
001		1.00	前	0.8	1.6	少・白	墨書き「大」	043	0.25	-
002		0.90	前	1.2	2.5	少・白		044	0.50	-
003		1.50	前	1.1	2.5	多・茶褐色		045	0.60	中・茶褐色
004		0.60	前	1.3	1.9	-		046	0.70	-
005		1.20	前	1.5	1.9	-		047	0.70	少
006		1.10	前	0.6	3.1	-		048	0.30	-
007		0.90	前	0.9	2.2	中・白		049	0.50	-
穿孔合計		20	(焼成後穿孔数: 16, 焼成後穿孔数: 4)					050	0.80	少
孔径・孔端までの距離平均値				1.1	2.1			051	1.00	-
100	27	4.50	-		-	墨書き「大」		052	1.00	-
092		2.60	-			多・白茶褐色		053	2.00	-
093		3.30	-			少・白		065	0.50	多・茶褐色
097		3.00	-			少・白		066	0.30	少
008		0.80	-			多・茶褐色		067	0.30	少
009		0.80	-			多・茶褐色		068	0.40	少・白
010		0.25	-			中		069	0.60	少・白
011		1.00	-			中		070	0.70	-
012		0.60	-			多・茶褐色		071	0.80	少
013		1.10	-			多・白		072	0.90	中・白茶褐色
014		1.10	-			少		073	1.10	茶褐色
015		1.25	-			少		074	1.30	少
016		1.40	-			多・茶褐色		075	1.00	少・
017		1.40	-			少・白		076	0.55	少・
018		1.60	-			少・茶褐色		077	3.30	多・茶褐色
019		3.25	-			-		078	0.70	-
020		2.30	-			少		079	0.80	-
021		1.80	-			少		080	0.90	-
022		2.00	-			-		081	1.70	-
024		0.40	-			多・茶褐色		082	2.00	極少・白
026		0.60	-			-		083	3.00	中・茶褐色
027		0.70	-			-		084	4.00	多・白茶褐色
028		0.75	-			-		085	4.00	中・茶褐色
029		0.80	-			-		口縁部合計		136.80
上/8=推定個体数								17.10		

孔径・距離の計測にはカーボンファイバーノギスを用い、1 mm未満を四捨五入した。(単位: cm)

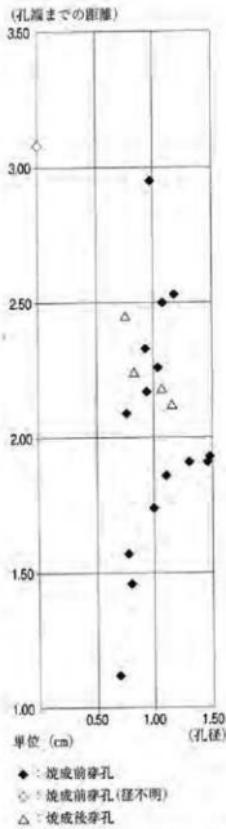


図7 土器器物の穿孔箇所と孔径

められないことが特徴である。なお、内面に白色や茶褐色の付着物が観察される個体も複数ある。以下では個体ごとに各部位の計測や付着物の分析を行い、用途を明らかにする手がかりとしたい。

まず、捨てられた焙烙の個体数を明らかにするため、口縁部片89点について口縁残存率(8分の1を単位として換算し、8分の8で1個体とする)とともに孔の開いた個体数を計測した(表1)。口縁残存率からは17個体の存在が導き出されたが、孔の開いたものは20点であった。SX001の一部が調査区外であることを考慮しても、1個体に1箇所の穿孔があったと仮定して、出土した焙烙は約20個体で、すべてが穿孔されていた可能性が高いといえよう。

次に穿孔された20点について、穿孔が焼成前か後かと、穿孔箇所、孔径について調べた。この結果、焼成後穿孔されたものは4点で、残り16点はすべて焼成前穿孔であった。焼成後穿孔はすべて外面を打ち抜いている(図6-16・17・18)。焼成前穿孔は内面から筒状の工具によってなされるが、19・20・28に見られるように穿孔時に内側にはみ出た粘土が孔の内部に残り、これを再度調整して表面を整える作業は行わない(図6)。孔の径と位置を図7に示した。孔径は最大径と最少径の中間値で計測すると、0.7~1.5cmで、平均すると1.1cmであった。なお、1.5cm近くなるものは長径のみの値で、本来これより径が小さくなる可能性がある。また穿孔箇所は、各個体の最大径を測る箇所から孔の中央となる箇所までを計測した。この距離は1.1~3.1cmで、平均2.1cmである。なお、3.0cm前後ないしは1.5cm前後になるものは少なく、7割が1.8~2.5cmの範囲に収まる。焼成前・焼成後穿孔の間で孔径や位置に大きな差異はなく、焼成後穿孔は焼成前穿孔品を補完するために行われたことを示唆する。なお、両者の器形や胎土・焼成状態にも明らかな違いは認められない。また、口縁部外面に「大」の墨書きを有するものが3点確認された。これらについても口径・穿孔状態をはじめとする諸特徴は他の個体と変わりなかったため、「大」の意味するものは不明である。

最後に焙烙内面の付着物について、その成分から用途を推定するため蛍光X線分析装置を使って分析を行った(註1)。選択した資料はいずれも底部内面の破片で、A:白色付着物の付着したもの、B:茶褐色付着物の付着したもの、C:肉眼では付着物が観察されないものの3点である。分析の結果、3点ともにカルシウム(Ca)・カリウム(K)・鉄(Fe)・マンガン(Mn)のほか、微量の銅(Cu)・亜鉛(Zn)が検出され、その量比に特徴的な傾向はない。このような成分分析の結果から、比較した3種類の土器器物には色調など肉眼で認められる差異を裏付ける成分的な違いは確認できず、物質の種類を特定するには至らなかった。

以上、SX001・006・007出土の土師器焰烙について、様々な視点から検討を行った。焼成後底部に小孔を開けた焰烙の例は大阪市内では散見されるものの、焼成前穿孔された焰烙がこれほどまとめて出土したのは本例が初めてであり、他地域でも現在のところ類例をみない。穿孔については孔径や位置がほぼ揃っており、同一規格品であろう。また、焼成前・後穿孔の製品に器形や胎土・焼成の違いはなく、これらは1箇所の製作地よりもたらされた可能性が高い。焰烙の用途については、焰烙内面に付着物があり、穿孔が底部端の1箇所にしか認められないので、水築作業に関する可能性が考えられた。このため付着物から用途の特定を試みたが、同一の物質が付着している可能性が推定されたのみで、他に用途に関する手がかりは得られなかった。その一方で、焼成前穿孔のものに孔表面の調整を行わない例が多いことと外面に煤の付着がないことから、祭祀や儀礼に関わって使用された可能性も否定できない。なお、今回の例と類似する焰烙が調査地北西150mに位置するNW12-1次調査地(現在調査中)でも出土しており、周辺で出土例の増加が期待される。今後は各地の類例を含めて資料を調査し、用途についての検討を行う必要がある。

註)

(1)蛍光X線分析は当研究所保存科学室長伊藤幸司が大阪歴史博物館の分析装置を使用して実施した。

4)まとめ

今回の調査では、難波宮に関する遺構は発見されず、17世紀後半から19世紀初頭にかけての遺構が発見された。井戸や土探し穴が多く、当地は、屋敷地の裏手や居住地以外であったものとみられる。多くの焰烙や蘭羽口の出土は、周辺で何らかの手工業生産が行われたことを示しており、その内容の解明が今後の課題となろう。

引用文献

大阪市文化財協会2004、「大阪城下町跡」Ⅱ

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW06-2)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2006)」、pp.61-82

大阪文化財研究所2012、「中央区道修町三丁目における建設工事に伴う大坂城下町跡発掘調査(OJ11-5)報告書」

難波洋三1992、「徳川氏大坂城期の焰烙」:「難波宮址の研究」第九、大阪市文化財協会、pp.373-400



写真1 出土した窯口

西壁地層断面
(東から)



第3層上面全景
(北から)



SX001、SE002など
(北から)



中央区玉造二丁目における建設工事に伴う
難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW12-5)報告書

調査個所 大阪市中央区玉造2丁目24-2
調査面積 100m²
調査期間 平成24年9月3日～9月11日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は難波宮跡の東縁で、かつ豊臣期大坂城跡の懸構内にある。豊臣期には周辺に大名屋敷があったとされ、調査地は細川忠興邸であった可能性がある。江戸時代になると、絵図には「岡山町」「左官町」といった名の町屋に描かれている例が多い。

調査地は難波宮跡や大坂城跡の重要地点であるが、聖マリア大聖堂と越中公園、城星学園の区画は周辺に比し発掘調査が多いところではない。調査地から西約100mのNW06-4次調査では大坂夏ノ陣の焼土層〔大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008〕、北約50mの難波宮跡127次調査では、「江戸時代後期の埋土層と石置場の残石と思われるものおよび溝」〔大阪市文化財協会1981〕が検出されている。残石と思われるものは南東約50mの難波宮跡48次調査でも出土し、矢穴をもつ長さ2mの花崗岩切石があった〔難波宮址顕彰会1974〕。127次調査担当者は、明治21年出版「大阪実測図」に「清堀村字石置場」という地名があることを指摘している(清堀村の飛び地)。

本調査は、地表下1.5~1mの地山上に近世の地層があるという、大阪市教育委員会の試掘の所見をうけ着手した。南北20m・東西5mを対象に、第2層上面で近代の柱列などを検出した後、第3層上面では調査区の全域を覆う遺構を調査した。基準点はmagellan社製ProMark3iにより測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はTP値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

2) 調査の結果

1) 層序(図3)



図1 調査地位置図



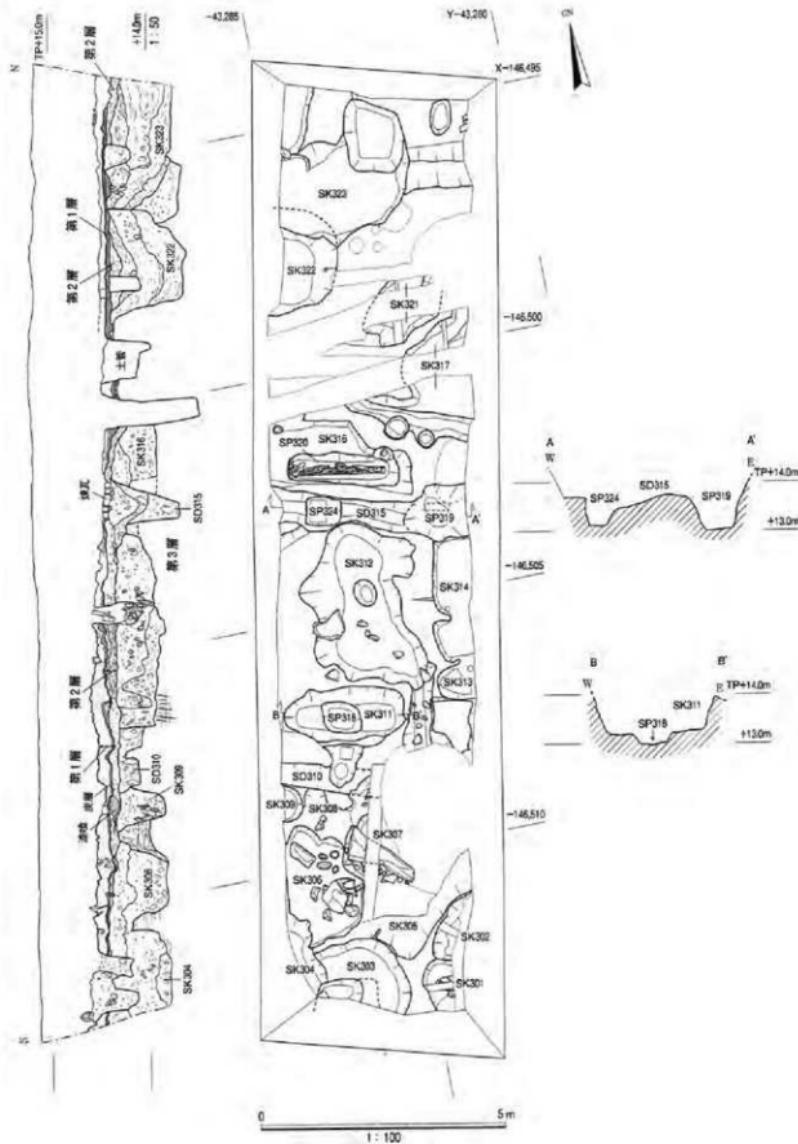


図3 西壁地層断面図および第3層上面平面図

厚さ約60cmの表土下に以下の地層がある。

第1層：焼土層で下面に炭層がある。最大層厚は20cmである。第二次世界大戦時の可能性がある。

第2層：黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂層で、最大層厚は12cmである。19世紀と推定される整地層である。

第3層：明黄褐色(10YR6/8)細粒砂層で、当地のいわゆる地山である。サンドパイプが多数ある。

ii) 遺構と遺物(図3～7)

第3層上面では、南半は土採り穴と推定される土壤に覆われ、北側にゴミ穴、中央に溝や柱穴があつた。時期はすべて18世紀後半以降で、一部は明治時代まで下るもののが混じる。以下、特徴的な遺構を中心に報告する。

a) 土壌群 南端のSK301～304から中央部のSK312・314・316に至る土壌群は、連続する土採り穴と推定される。出土陶磁器の時期は、18世紀後葉を中心に18世紀後半～19世紀初めと共通する。深さは0.4～0.6mで、南端のSK303のみはやや深く0.9mある。

これらの土壌には2箇所にまとまって石が捨てられていた(写真図版)。南側のSK306～308と中央部のSK312である。石の多くは10～30cmであるが、まれに50～60cmのものがある。とくにSK307の石は、石垣に使用できる長さ1.6mの花崗岩切石で、矢穴を有する(図4)。矢穴は幅7cm前後、深さ7～12cmである。矢穴のある石材は他に少なくとも2個あり、矢穴幅は約10cmであった。周辺で同様の石材の出土が相次ぐことから、18世紀後半以降に石屋が近辺にあったとか、字名のごとく石置き場であった等の可能性が考えられよう。

以下、出土陶磁器等について報告する(図5)。

1・2はSK303、3～5はSK304、6～10はSK305、11・12はSK306、13・14はSK309、15・16はSK312の出土である。8は三田青磁の色絵輪花皿、9は土師器羽釜、16は関西系陶器碗である。8は見込みの蓮弁を赤く縁取りし、体部内面に同色で菊花を描く。他はいずれも肥前磁器の碗・皿で、1・7・13が青磁染付、残りは染付である。10は刻印のある平瓦である。

b) ゴミ穴 北端にあるSK322・323は多量の陶磁器が出土し、ゴミ穴と推定される。上述の土壌群より深く、時期は19世紀中葉とやや新しい。SK323は東西4m以上、南北3m以上、深さ0.9mで、埋土は灰黄色(2.5Y6/2)シルト質細粒砂などである。SK322はSK323を切っており、南北2.3m、深さ0.75mである。埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質中粒砂層などで、ごく僅かに水漬きの地層がある。

以下、SK322・323の出土陶磁器について報告する(図7)。

17～34はSK323から出土した。17は中国産青花碗、18・21～24は肥前磁器小杯・碗・鉢、19・20・25・26は瀬戸美濃焼磁器碗、27～30は関西系陶器碗・土瓶・蓋、31・32は信楽焼盃、33は

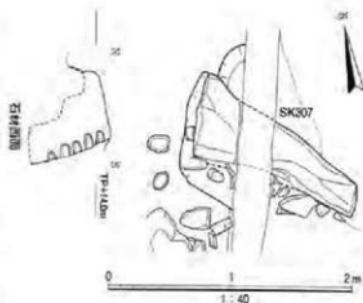


図4 SK307 石材出土状況

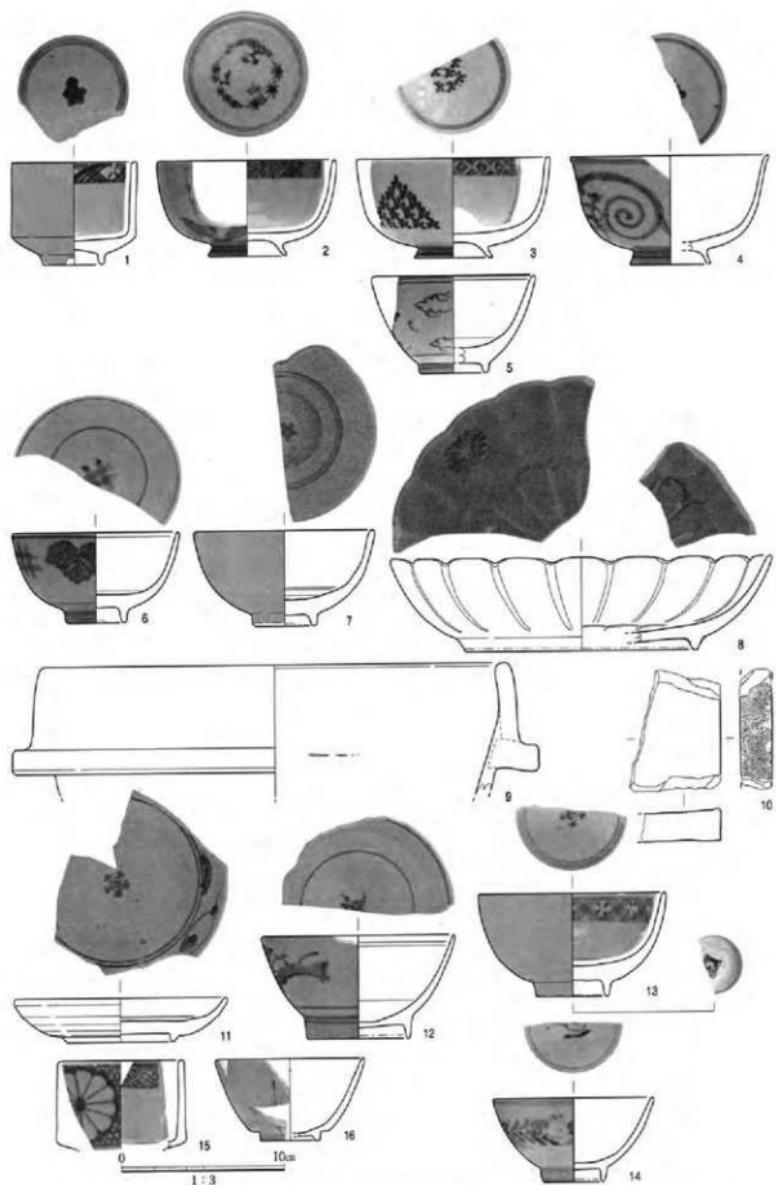


图5 出土遗物实测图(1)

SK303(1·2)、SK304(3~5)、SK305(6~10)、SK306(11·12)、SK309(13·14)、SK312(15·16)

備前焼鉢、34は土器器涼炉である。17の中
國産青花は豊臣期から徳川初期のもので、
当該期の出土遺物は本調査では極めて少
ない。18・21~24の肥前磁器では24が青磁染
付、他は染付である。22は粗製で底部が厚い。
19・20・25・26の瀬戸美濃焼磁器は、土採
り穴と推定した土壤群では出土していない。
27~30の関西系陶器では、27は薄い褐色の
釉が掛り、28・29は外面に飛びカンナが付
けられる。31・32は同巧の壺で、31は四耳、
32は三耳と推定される。下3分の1は白色、
他は薄い褐色に釉を掛け分け、耳の間は釉

を流し掛けする。34の涼炉は三足で、底と反対の足外間に「乾」の刻印がある。

35・36はSK322の出土で、35は関西系の陶胎染付碗、36は関西系陶器壺である。

c)溝・柱穴 SD310・315は西北西から東南東へ続く平行した溝である。SD315は最大幅0.8m、
深さ0.5m前後で、一段と深いSP319とSP324がある。地山面からSP319は深さ1.2m、SP324は深さ
1.1mあり、SP319の底には柱の沈下を防ぐ角材が敷かれていた。SP319・324には柱が立ち、SD315
は布掘の跡と推定される。

SD315から心々で約5.5m離れてSD310がある。SD310は長さ1.8m以上、幅0.5~0.7mで、深さ0.15m
である。検出した間に一段深い部分はない。

SD310・315は西壁断面ではSK309・316を切っており、土採り穴群より新しい19世紀代で江戸時
代におさまると推定される。

次に、SP320は柱を通す根太を横たえ、支柱で支えた頑丈な柱である(図6)。丸釘を使用している
ことから、明治時代以降に下る。釘は非常に軟らかく、現代のものとは違う。材はないが、SK311・
SP318も形態と規模から同様の構造であったと推定される(写真図版)。SK311からのみ瀬戸美濃焼磁
器の転写染付碗が出土しているのも証拠の一つである。SP320の柱とSP318中心の間は約5mである。

SD310と[SD315・SP319・324]の関係は、北にずらせば[SK311・SP318]とSP320の関係になる。
19世紀代にこの場所に堀(や道?)のような東西方向の区画施設があり、それが明治時代に継承された
可能性が想定される。

3)まとめ

期待された豊臣期の屋敷などに關係する遺構がなかったのは、江戸時代以降に削平されたためと推
定される。地山の残存状況などから、周辺に当該期の遺構が広がっており、見つかる可能性は十分に
ある。また過去の調査成果に加え、江戸時代以降の区画・町割や石材加工などの生業をさぐる資料が
得られた。

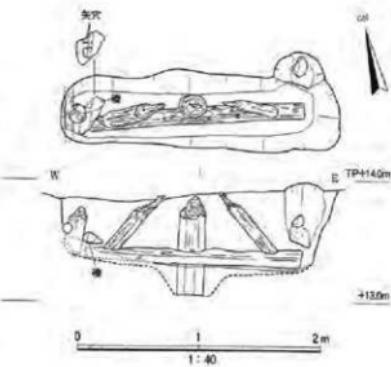


図6 SP320 平立面図

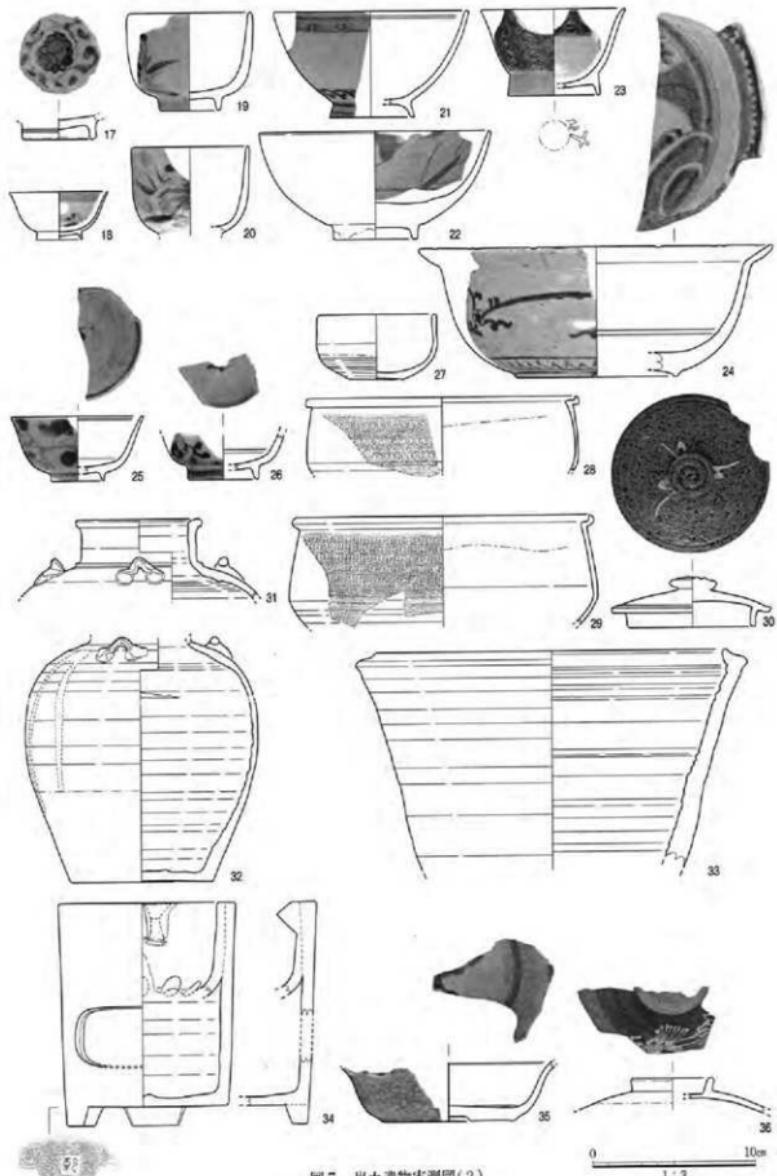


图7 出土遗物実測図(2)
SK323(17~34)、SK322(35・36)

参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW06-4)報告書」:「平成18年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.19-25
- 大阪市文化財協会1981、「第127次発掘調査概報」:「難波宮跡研究調査年報1975~1979.6」、pp.61-65
- 難波宮址顕彰会1974、「第48次発掘調査概報」:「難波宮跡研究調査年報1973」、pp.26-28



第3層上面全景(北から)



第3層上面全景(南から)



第3層上面遺構検出状況(南から)

SK306・307
石材出土状況
(南から)



SP320・SD315・
SP324・319
(西から)



SK311・SP318
(北西から)



平成24年度難波宮跡整備事業にかかる

発掘調査(NW12- 6)報告書

調査個所 大阪市中央区法円坂1丁目 史跡難波宮跡
調査面積 140m²
調査期間 平成24年10月29日～平成25年1月25日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、高橋工

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は史跡難波宮跡東側、旧市営法円坂住宅敷地内の西北部に位置する(図1)。後期難波宮大極殿院の東側に当り、第1~4次調査など、50年以上も前に最初期の調査が行われた地域である。調査区の東側ではNW30・80-9・82-10・82-44・04-5・05-9次調査などが行われ[大阪市教育委員会1969・大阪市文化財協会2004・2008]、前期難波宮東方官衙が展開し、その東端には「樓閣風」とも考えられる高い格式をもつ一画があったことがわかつてきている。南側では平成21~23年度に調査を行い、後期でも新しい時期と考えられる建物基壇の残渣を発見し[大阪文化財研究所2010~2012]、孝謙天皇の「東南新宮」との関係も考えられている[大阪文化財研究所2012・高橋工2008]。

こうした研究状況に鑑み、今回調査の目的(①~④)と調査区の設定状況は次のとおりである。

①調査地近辺では、NW2次調査E地点(以下、NW2-E次のように略称)・4-H次[難波宮址顕彰会1956](旧法円坂住宅31号棟およびその西部)、7-L次[難波宮址顕彰会1958](同32号棟西部)が行われている。NW2-E・4-H次では、大量の瓦の堆積とそれに伴う盛土が発見されており、その連続が東西40m以上に及ぶことがわかつてきている。[大阪文化財研究所2012・高橋工2008]で復元したように、これは瓦葺の区画施設の構造である可能性があり、既往の調査成果との関係を明らかにしながら区画施設の実態を確かめる。

②NW7-L次では石敷きを伴う基壇状の高まりが報告されており、できるだけこれに近づいて石敷きを捕捉する。

③瓦葺の区画施設を巡らせた建物群は、後期の中でも新しい時期に位置付けられる可能性があり[大阪文化財研究所2012]、難波宮の遺構群の中で層位的にこれらを分離できるかをさらに確認する。



図1 調査地位置図

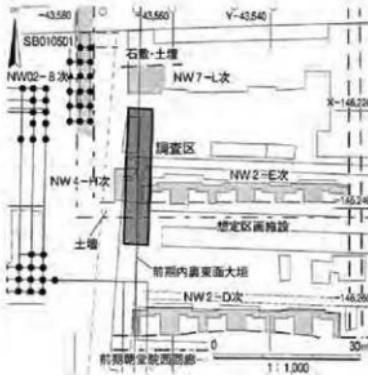


図2 調査区位置図

④前期朝堂院東面回廊から棟通りの柱が北へ延びて一本柱塀となり、内裏の東面大垣となる復元がなされているが、この遺構の連続を確かめる。

如上の問題点を解決するため、31号棟(NW 2 - E・4 - H次)西端部を南北に横断し、32号棟(NW 7 - L次)になるべく近づけるように、東西5m×南北28mのトレンチを設定した(図2)。本調査区と旧調査区との位置関係は、本調査区中央から南側に、南北幅約8mのNW 2 - E次調査区の西端が約1.5m重複し、その西に幅0.6mの未調査部分を挟んで、南北幅約9mのNW 4 - H次調査区の東辺が約3.0m重複している(いずれも調査区上端での数値)。

調査は平成24年10月29日から開始した。機材の搬入や現況測量、調査区設定などの準備を行い、11月1日より重機掘削を行って近代以降の地層を除去した。11月2日からは人力による掘下げ作業を開始し、以後、地層ごとに遺構検出と掘下げおよびその記録を行った。12月14日には後期難波宮の遺構を検出した状態で一旦調査を中断し、報道発表・現地公開の体制が整った平成25年1月13日に作業を再開した。1月15日に報道発表、1月20日に現地説明会を開催し、市民約400人の参加を得た。その後、調査は1月21日まで行い、1月25日に埋戻し・撤収を含むすべての作業を終了した。なお、調査には大阪歴史博物館より交替で李陽浩・杉本厚典の参加があった。本報告書については、高橋を含む3者が現地で行った検討をもとに高橋が執筆した。

調査に用いた基準点は、史跡難波宮跡内設置の1級基準点を与点とした閉合トラバース測量に従り、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はTP値(東京湾平均海面値)で、TP+○mと記した。

2) 調査の結果

i) 層序(図2・3)

調査区の現況地形は中央が高く、四周へ下がるが、これは住棟解体工事後の整地によるもので、本来は概ね平坦である。調査地の層序は以下のとおりである。

第0層：近・現代の整地層である。大部分は本年度に行われた法円坂住宅解体工事による擾乱をうけ、コンクリート殻を含む。北部でごく一部にのみ近代の整地層が遺存したが、これは旧陸軍被服支廠造営時のものである。層厚は50~150cmであった。

第1層：偽礫を含む暗褐色細粒砂からなる作土層で、層厚は最大で20cmである。江戸時代末頃までの遺物が出土した。

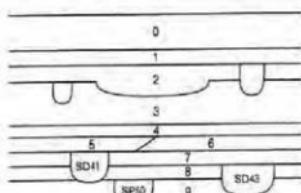


図3 地層と遺構の関係

第2層：偽礫質にぶい黄褐色細粒砂などからなる客土層で、層厚は15cmである。薄く客土をして生活面を整えた形跡がみとめられる部分もあった。本層からは豊臣後期の遺物が出土し、地層の形成年代を示している。大坂ノ陣による焼土層はみられず、削平されたものとみてよい。

第3層：細礫質褐色細粒砂からなる整地層で層厚は40cmである。本層出土の遺物は少量の瓦器片が含まれており、

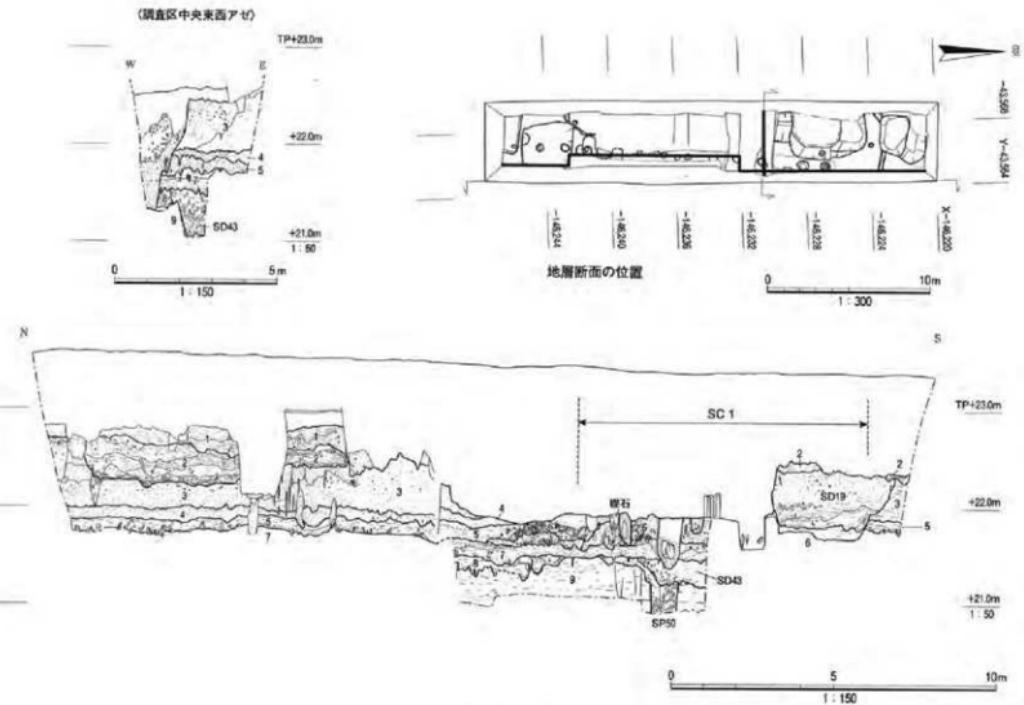


図4 地層断面図

中世以降に形成された地層ではあるが、上面で戦国期の遺構が築かれており、その形成時期が同期にまで降る可能性も考えられる。

第4層：褐色シルト質細粒砂からなる作土層で、層厚は15cmである。12~13世紀の瓦器片を含み、中世の地層である。

第5層：後述するSC1以外の部分に分布する。黄褐色粘土からなる古土壤で、層厚は15cmである。奈良時代の瓦や3~5cm大の礫を多く含み、後期難波宮廃絶後に形成されたものである。

第6層：褐色細粒砂混り粘土質シルト（地山層）偽礫からなる客土層で、層厚は最大で25cmである。調査区南部に分布し、凝灰岩片・瓦片を含む。後述する後期難波宮新段階の区画施設SC1の基礎である土壌を形成する。

第7層：にいぶい黄褐色シルト～細粒砂からなる整地層で、層厚は10cmである。上面で柱穴SP41などが検出され、奈良時代の瓦の一部は上面に密着していた。前期難波宮期の整地層で、後期難波宮新段階の遺構も本層を基盤に造営されている。NW11-2次調査では、後期難波宮新段階（第5A層）、同古段階（第5B層）、前期難波宮（第6層）が層位的に分離できたが、今回調査地ではそうした状況ではなかった。

第8層：黄褐色地山偽礫混りシルト～極細粒砂からなる整地層で、層厚は10cmである。上面で小穴・溝が検出された。難波宮下層遺構群の建造に伴うものである。

第9層：明黄褐色シルト質粘土からなる段丘構成層で、いわゆる地山層である。断面観察によつて、本層上面で柱穴SP50が確認された。本来、本層の上部を構成した褐色粘土質シルトからなる部分（SC1やSP41の埋土にみられる）は遺存せず、削り取られたものとみられた。難波宮下層の遺構群が築かれる際に、本層上面を一度切土してから整地（第8層）を行った可能性がある。

ii) 遺構と遺物

a. 難波宮築造以前の遺構（図5）

第9層上面と第8層上面で検出した遺構で、前者にはSP50、後者にはSP44・48、SD42・43がある。いずれも前期難波宮築造に伴う整地層（第7層）の下位にあるのでそれに先立つ遺構群である。なお、SP48は近世の遺構による破壊でどちらの検出面に属するか不明であったが、後述の理由で第8層上面として報告する。いずれも遺構保存の観点から平面的に検出したのみで掘下げを行っておらず、垂直方向の情報は既掘箇所に露出した断面観察による。

SP50 調査区中央のやや南側、NW4-1次調査区東壁の断面および壁沿いに掘られたサブトレーナの底面で検出した。平面形は南北0.75m、東西0.25m以上の隅丸方形を呈するとみられ、深さは0.55mまでは確認できた。上部は一部がSD43によって破壊されていた。直径0.10mの柱痕跡が検出された。掘形部分は地山偽礫によって埋められ、柱痕跡は暗色シルト質粘土によって埋っていた。出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

SP45 調査区中央西壁際で検出され、平面形は東西0.5m以上、0.6mの隅丸方形を呈する。埋土は人為的に埋められた地山層偽礫を含む灰色細粒砂で、柱痕跡などの有無は中央部をSD42で破壊されていたために不明であった。

SP44・48 いずれも0.3mほどの小穴で、地山偽塚で埋められていた。両者は類似する特徴をもつため、同じ第8層上面から掘り込まれたものと考えた。遺物は出土しなかった。SP44はSD42に切られる。

SD43 調査区中央を縦断するとみられる溝である。北部では近世の大型遺構内での断面が確認され、先述のNW4-H次のサブトレーナにはほぼ重なり、南部では後期難波宮SC1の土壇遺構の下位に続いており、延長約20m以上にわたる。幅は1.0m、深さは0.9mであった。溝の方位はN3°Eで、ほぼ正南北方位をとる。埋土は概ね2層に分かれ、下層は機能時堆積層で暗灰色粘土が自然堆積し、上層は地山層偽塚などで埋められていた。北部では上層が溝を完全に埋めておらず、埋め残った窪みに黒色粘土質シルトが流入して埋没していた。土器が出土したが、詳細な年代が知れるものではない。ただし、下に述べるSD42に切されることから古墳時代に属するものではある。

NW4-H次調査では、本遺構から約2m西で特徴の似た南北溝が発見されている。両者は平行するようにもみえ、同時期のものであれば、なんらかの区画をなす溝であるのかもしれない。

SD42 調査区やや南側、SD43の西肩を切って検出された溝で、SD43とはほぼ同じ方位で南北に6.5m延び、南・北側でそれぞれ西へ屈曲して逆コ字形を呈する。幅は0.3~0.5mである。埋土は灰色細粒砂である。前期難波宮の遺構SP41に切られる。須恵器杯H身ないし長脚有蓋高杯の身部である1、低脚高杯の脚部3が出土した(図7)。6世紀後葉~7世紀初頭のものであろう。第5層から出土した須恵器2も本遺構が属する遺構群からの混入であろう。

b. 前期難波宮の遺構(図5)

SP41・46 調査区やや南の東壁沿いに検出され

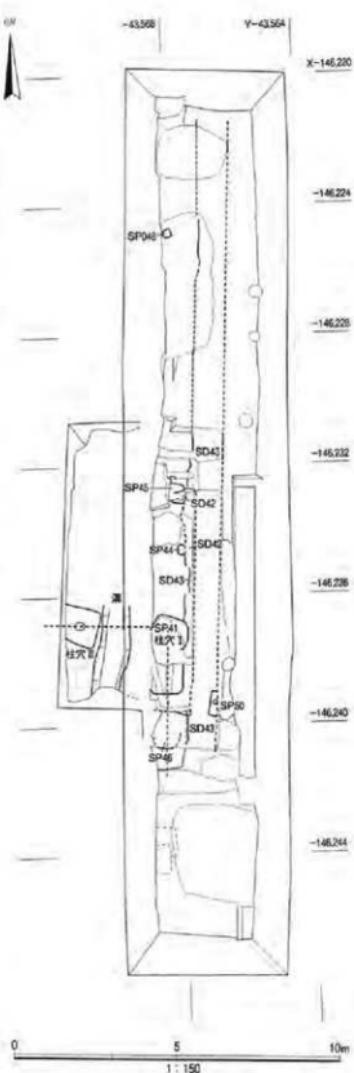


図5 難波宮下層遺構および前期難波宮の遺構

た柱穴である。SP41の平面形は不整な円形に近く、東西、南北ともに1.1m以上、深さは0.7mである。NW 4 - H次調査の際に発見された2基の柱穴のうち東側の「柱穴Ⅰ」で、褐色粘土質シルトの地山層偽縛で埋められていた。SP46はNW 4 - H次調査区の南壁にわずかにかかっていた。東西0.6m以上、南北0.1m以上、深さは0.3m以上で、柱穴掘形南部のごく一部が残存したものである。埋土はSP41と同様で、地山層の偽縛で埋められていた。いずれも柱痕などは見られず、遺物も発見されなかった。

SP41(柱穴Ⅰ)の西側にはNW 4 - H次調査で「柱穴Ⅱ」が既に発見されており、上記3基の柱穴は直角をなして配列されていることになる(図5)。柱の位置がわかるのは柱穴Ⅱのみなので、正確な柱間寸法はわからないが、各々の中心間は約3mで10尺程度のものであろう。これらことから、3基の柱穴は掘立柱建物の北東隅部分に当る可能性がある。南方への連続(SP46の南)は調査区内にあるが、後期難波宮SC1盛土の下位に当るため確認できなかった。これらの柱穴は、前節で調査の目的③に掲げた前期難波宮内裏東面大垣の位置に近いが、それとの関係は次節で述べる。

c. 後期難波宮の遺構(図6)

SC1 調査区南部で東西に延びる盛土を検出し、NW 2 - E次をはじめとする既往の調査成果に照らし、区画施設の基礎をなす土壇と判断した。土壇は第6層である細粒砂を含む褐色粘土質シルト(地山層)偽縛からなり、北部はNW 2 - E・4 - H次調査区間の狭い未調査部分で、南部は本調査内の全域で検出された。断面形は概ね台形をなし、南・北端は緩やかに斜面をなして高度を減じ、低くなつた部分には後期難波宮廃絶後の古土壤(第5層)が形成されていた。盛土の上端での幅は7.2m、基底での幅は8.9m、高さは0.3m前後である。盛土の中には瓦片・凝灰岩片が少量含まれていた。北の上端の内側には長軸で55cm、短軸で35cmの上面が平坦な花崗岩が据えられていた。断面観察でも掘形は確認されず、盛土を行う過程で据えられたもので、礎石とみてよい。土壇南・北の外側、第5層中からは、一部その斜面に重複して、北側で南北約3m、南側で同約1m以上の稠密な瓦溜りが検出された。調査区の北側でも一様に瓦が散漫に出土したが、その密集度の違いは明らかであった。稠密な瓦溜りは、東西に延びる盛土の南北に、これと平行して帯状に分布していたものとみられる。

SC1の土壇からは須恵器13が出土した。細片ではあるが8世紀のものであろう(図7)。SC1の時期については、瓦を伴うことから、当然、後期難波宮の時期であるが、第5層の出土遺物がSC1による区画内の造構群の機能時~廃絶時の年代を反映すると考えるならば、それも参考にするべきであろう。第5層の出土遺物は須恵器5~12、軒丸瓦14~20、磚21を図示した(図7)。須恵器はいずれも細片であるが、杯B6・7は高台が低く、底部の外側に寄っており、杯A5は底部から口縁部への立上りが直線的である。こうした特徴は奈良時代でも比較的新しい段階にみられ、8世紀中葉以降で長岡京の時期まで降らない間のものとみてよいであろう。これらから得られる年代は、後期難波宮の存続時期にはほぼ等しい。蓮華文軒丸瓦14は6303型式である。15~20は重圓文軒丸瓦であるが、いずれも細片で、型式などは明らかでない。

SC1の瓦堆積と土壇の関係は、そのまま東のNW 2 - E次調査区、西のNW 4 - H次調査区にも連続している。NW 2 - E次では、瓦出土密度の粗密はあるものの「帯状部分が(調査区を:高橋註)東西に貫通するものである事は、先ず疑いのないところ」とされている。土壇については、地

層断面図(報告書図版23)には瓦堆積に一部重複し、斜面をなして立ち上がる「赤褐色粘質土」の記載があり、後述する建築遺構の基壇として認識がなされていることが報文から読み取れる。報告書地層断面図の断面位置は、今回調査地東壁の約60cm東側にあたり、今回の土壇とNW2-E次、の赤褐色粘質土が一連のものであること、さらには瓦堆積も一連のものであることが容易に知れるのである。これはNW4-H次調査地についても同様である。さらには、NW2-E次調査において、瓦堆積の南限に接して花崗岩が4個発見されている。NW2-E次西方(II区)の状況を参考にすると、礎石の間隔は3.28m(図上既定値)で、11尺の完尺値に近似する(報文では13尺と記載するが、報告書の図では11尺が適当である:後期難波宮(大極殿)の1尺(0.296m)×11=3.256m)。花崗岩は土壤をなす「赤褐色粘質土」に底部が「少し埋没」した状態であると報告されており、出土状況は本調査の礎石と酷似する。報文で礎石と判断していないものの、調査者は瓦堆積の南に「建築遺構の存在が推測される」としており、最終的に山根博士は朝堂院を取り巻く複廊を想定されている。花崗岩のうちの3個は瓦堆積の南限、土壤北側の落ち際にあり、今回発見のものと同様な位置を占めている。これらは礎石とみられるのである。

以上の状況をまとめると以下のようになる。NW4-H次・今回調査・NW2-E次調査地に、東西47m以上にわたって連続する瓦堆積があり、その南側には土壤がある。土壤の幅は基底部で8.9mあり、南

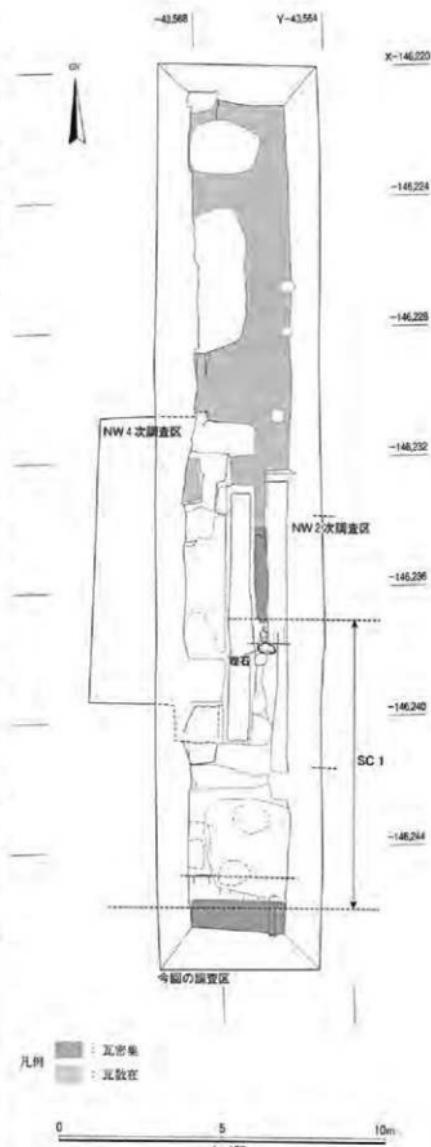


図6 後期難波宮の遺構

側にも瓦堆積が存在する可能性が高い。土壇の上面には花崗岩を用いた礎石が据えられていて、土壇北側の斜面の上端の線上に4個が位置し、その線から2.5mほど南にも1個がある。

NW14次調査で明らかなように、帯状の瓦の堆積は、建物を解体する際に瓦を下に滑り落とした状況と考えられる〔雑波宮址顕彰会1964〕。加えて、如上の土壇と礎石配列の状況があることから、やはり何らかの建築遺構があったと考えて然るべきであろう。そして、それが幅に比して長さが卓越する特徴をもつことから、建築物は区画施設であり、土壇の幅などからみて廊的な機能をもつ可能性が高いとするのが妥当である。このようにして、SC1を区画施設の一部とするに至ったのである。

d. 豊臣期以降の遺構(図8)

第3層の上面で、大規模な土壇、区画施設などを発見した。主要なものを報告する。

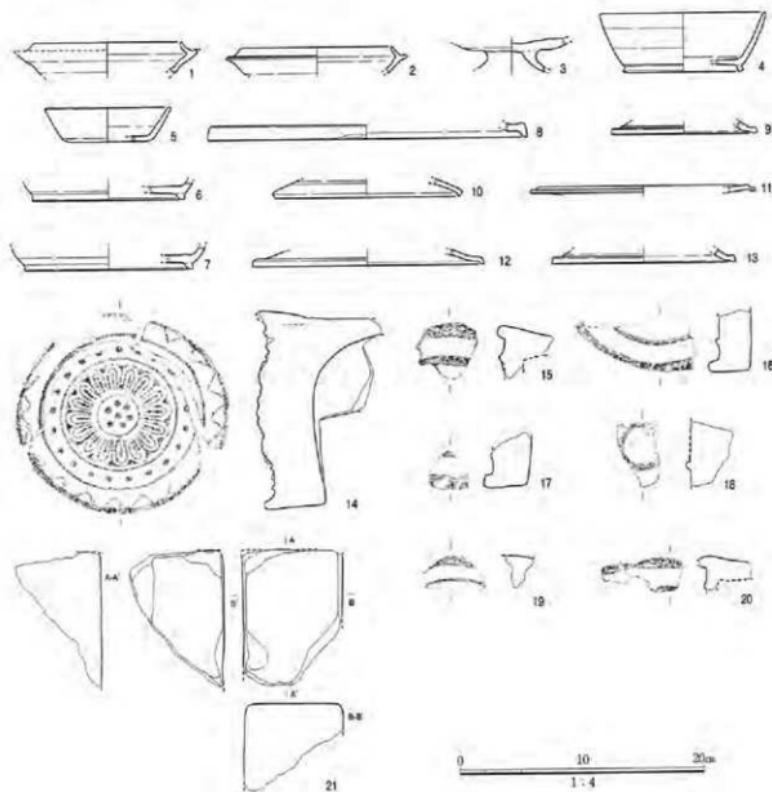


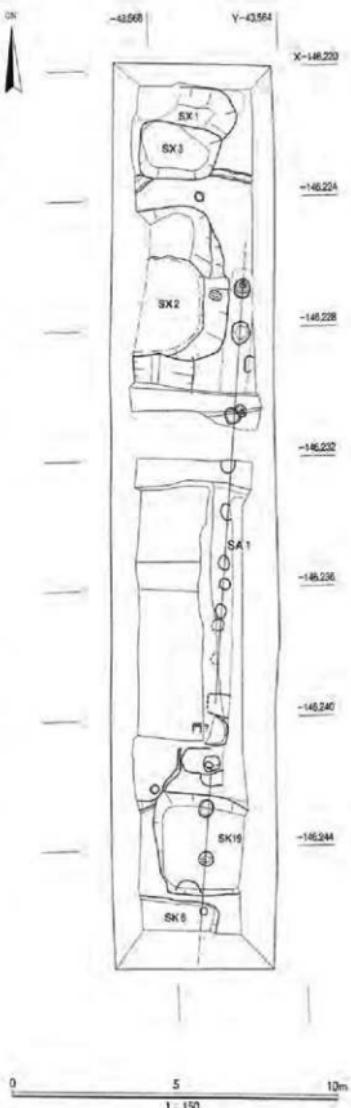
図7 出土遺物実測図(1)
SD42(1・3)、第5層(2)、第5層(5~12・14~21)、SC1(13)

S A 1 調査区の東壁沿いに検出された一本柱跡である。方位は N 5° Eで、延長19.5mの間に13基の柱穴を検出した。擾乱で失われたであろうものを補うと14基があったはずで、平均柱間寸法は1.5mである。南から4・5基目の柱穴は他より大型で、中には30cm前後の根石が据えられており、この間が出入り口で、襖門形式ないし東に控柱をもつ門であった可能性が高い。豊臣後期のSX6に切られるので、それ以前の遺構である。

S X 1 調査区北端で検出された土壤状の遺構で、東西2.5m以上、南北1.7m、深さは0.4mであった。オリーブ灰色細粒砂で埋められていた。土師器・須恵器片のほかに青花・肥前陶器・同磁器、一石五輪塔の破片などが出土した。17世紀中頃の遺構である。年代から判断して、本来は第2層より上位の地層から掘り込まれたものである。

S X 3 SX1に切られる土壤状の遺構で、東西2.5m、南北1.7m、深さ1.2mであった。暗オリーブ褐色シルト～砂で埋められしており、所々に流入した炭や砂の薄層が挟在した。時間的間隙をもちながら少しづつ埋められたものとみられ、ゴミ穴と考えられる。土師器・中国産青花・丹波焼・瀬戸美濃焼・肥前陶器・ベトナム産長胴瓶などが出土した。土師器焼塩壺24、丹波焼捕鉢27、中国産青花碗22・23、瀬戸美濃焼志野皿25、同黒織部碗26、肥前陶器天目碗33を図示した。33はSX2出土のものと接合し、両遺構はある時期同時に存在したものとみてよい。豊臣後期～17世紀中頃の遺構である。

S X 2 調査区北部で検出した土壤状の遺構で、東西2.9m以上、南北4.7mで、深さは1.3mまで掘削したが底は検出できなかった。暗褐色～黒褐色砂などで埋められており、所々に流入した炭や砂の薄層が挟在した。SX3と同様に少しづつ埋められたものとみられ、ゴミ穴と考えられる。土師器・



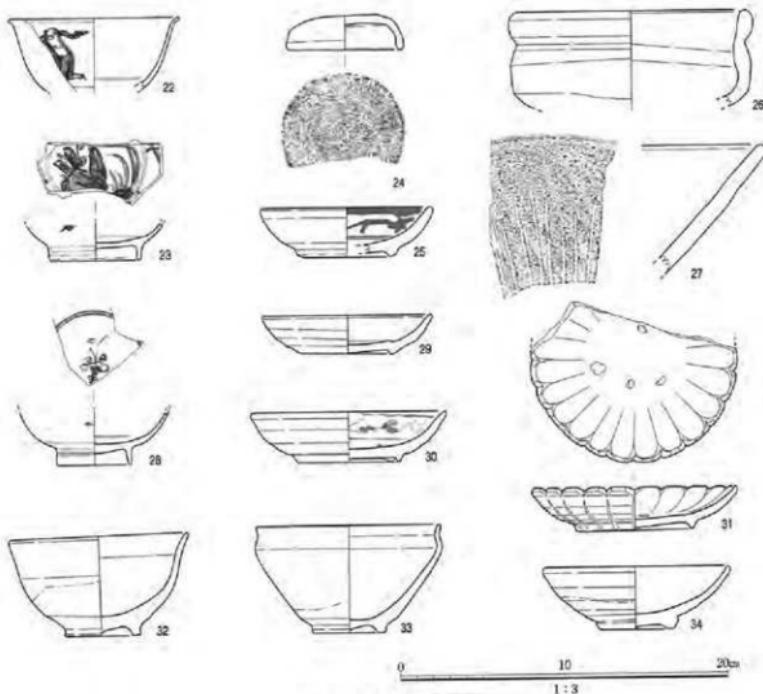


図9 出土遺物実測図(2)
SX 3 (22~27・33)、SX 2 (28~34)

丹波焼・備前焼・瀬戸美濃焼・肥前陶器・肥前磁器などが出土した。瀬戸美濃焼29、同志野皿30、志野菊皿31、肥前陶器皿34、中国産青花碗28を図示した。豊臣後期の遺構である。

SX6 調査区南端で検出された土壤状の遺構で、東西2.5m以上、南北1.1m、深さ0.3mであった。埋土は2層に分かれ、下層は黒褐色炭混じりシルト～砂が自然堆積し、上層は灰黄褐色粘土質シルト偽縛で埋められていた。出土した土師器皿より豊臣後期に属するものである。

Ⅲ) 考察

以下、調査の目標ごとに今回の調査成果に基づき考察する。

①瓦葺区画施設の実態把握

[高橋工2008・大阪文化財研究所2012]で復元した後期難波宮新段階の遺構群(図10)のうち、区画1の外郭区画施設の南面部分の実態を明らかにできた。まず、土壇の南北にある帯状の瓦堆積、今回判明した土壇の幅8.9mに対して延長が47mを越える長さから、NW 2-E次調査で想定されていたようにこれが区画施設である蓋然性が高まった。そして、土壇の幅は後期大極殿回廊(複廊)【大阪市文化財協会1995】のそれには等しく(北面西回廊の推定地覆石外面間での距離=8.9m)、一本柱帰や

祭地壇ではなく、やはり瓦葺きで、廊の機能をもつたものと考えられる。その土壇北端付近に4個の花崗岩礎石が並ぶことも明らかになった。また、土壇の幅は、北・西面部分のそれ(NW24・19次：幅約4mで祭地片庇廊と想定)に比べて広く、南面のみがほかより高い格式を備えていた可能性がある。

次に、この区画施設の構造について考えてみたい。NW2-E次調査の成果で、礎石間の寸法が11尺であったことがわかっているが、今回発見の礎石とNW2-E次で最も西の礎石との間隔は図上で計測して約10mであり、これをさきほどの礎石間寸法で除すると、ほぼ正しく3間に割り付けることが可能である($10m \div 3.28m \approx 3.05$)。のことから、礎石列は原位置を保ち、区画施設の北側(行)の柱通りを構成するものとみられる。この柱通りの2.5~3.0m南側にも花崗岩が発見されているので、これを棟通りとして、NW2次調査時の復元案のように複廊を想定することが可能である。しかし、この場合、今回調査地の中で、中央と南の柱通りに当る部分を捉えているにも係らず、礎石ないしその抜き穴に相当するものが発見されなかった。また、仮に今回の狭小な調査区の中でたまたまそれらが遺存していなかったとして、仮に梁行を2.5m(大樋殿院回廊を参考)前後としても、土壇上で北側に大きく片寄ってしまう。のことから、現状では複廊に復元することに迷走を覚えるのである。そこで、中央の柱通りの位置にある1基が元位置を保つものでないとして、祭地に庇のついた祭地回廊または祭地片庇廊を想定することも可能であるが、祭地の痕跡は発見されていない。つまり、今回の調査で、区画施設であること、北・西面に比べて大型なものであることが判明したが、その構造の解明については次回以降の調査に委ねたいと考えるのである。また、礎石と瓦堆積との間の距離が短く(約1m)、軒の出幅が短く考えられる点、地覆石など基壇外装の痕跡が見つからない点、礎石が小型である点など、今後の課題は少なくない。

最後に門が存在する可能性について述べる。南面の区画施設にはその中央部分に門が存在した可能性が十分に考えられる。現在の想定で、その中央はNW2-E次調査区のV-VI区の中間辺りであるが、報文によれば、それに近いIV-VI区での瓦堆積の南限はほかよりも北側へずれるという。門の奥行き(梁行方向)は区画施設のそれよりも深いのが普通であるから、門に伴う土壇も広くなっているはずである。瓦堆積が北へ寄ることは土壇が北へ張り出し、奥行きが深くなっていたことを反映している可能性があり、この部分で門の検出が期待されるのである。

②北方石敷き遺構の探索

NW7-L次で検出された石敷きを伴う基壇状の高まりの連続は捕捉できなかった。ただし、調査区北端部では第5層中の瓦の分布がかなり稠密になっており、北側になんらかの構造物があることも考えられる。また、原位置を保つものはなかったが、第5層中より拳大よりやや小さい川原石が少なからず出土した。石敷きを伴う遺構の探索は、次回以降における調査の課題である。

③後期難波宮新段階の層位学的確認

SC1など瓦葺の区画施設を巡らせた建物群が後期の中でも新しく位置付けられるかについては、後期難波宮造営に伴う整地層は発見されず、今回の調査では層位学的な新知見を得ることはできなかつた。ただし、西面区画施設(祭地を伴う)がNW02-8次調査で瓦を含む後期の建物を撤去した後に

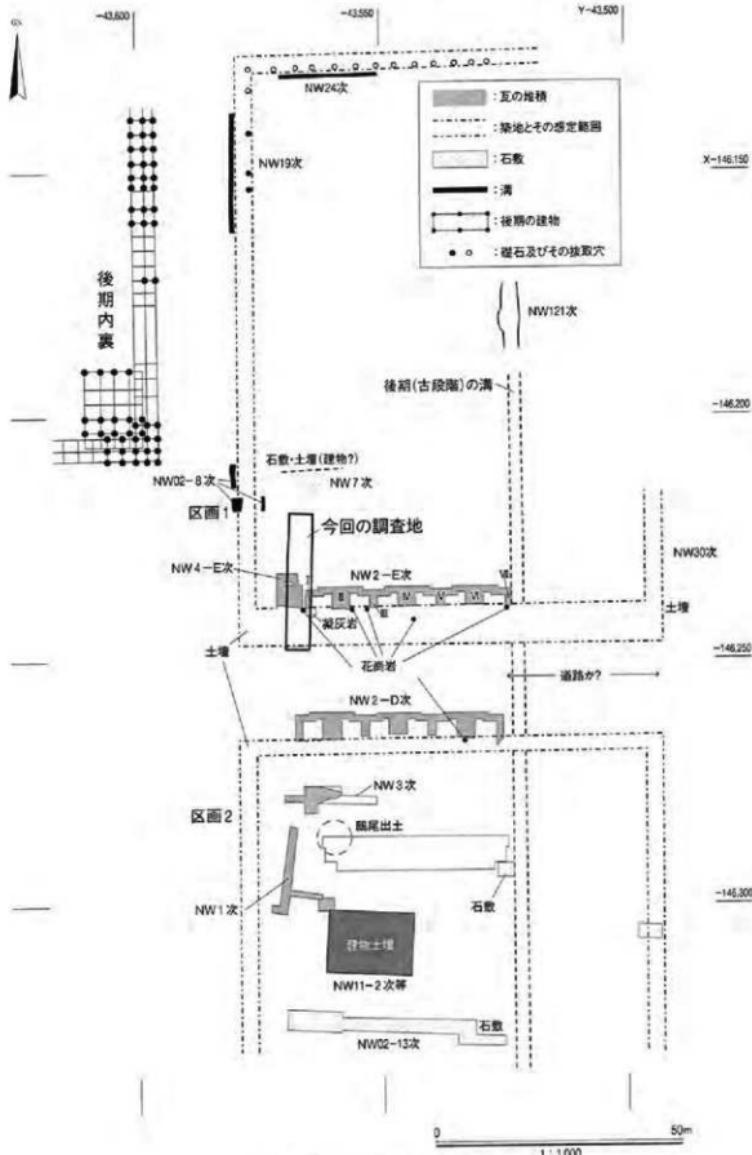


図10 後期難波宮新段階の遺構復元図

建てられており[大阪市文化財協会2005]、依然その可能性は高い。また、NW2-E次調査区では、SC1の土壙をなす赤褐色粘質土に、「一と抱え大」のものを含む凝灰岩片が原位置を保つとは思われない状態で相当数含まれていたと報告されている。凝灰岩片は基壇の化粧に用いられたものであろうし、後期に特有なものとすると、後期段階の建物を壊してSC1が建てられたという状況を示しており、SC1を伴う建物群が後期難波宮の新しい段階のものである可能性は補強されたと考える。

④前期難波宮内裏東面大垣の追及

SP41(NW4-H次の柱穴I)・46が検出された位置は内裏外郭東面区画施設が想定された位置には一致する(図2)。二つの柱穴はNW4-H次の柱穴IIと合わせてみた場合、1棟の建物の北東隅部に当るようにみられた。南への連続は確認できなかったが、北への連続は、柱穴4基分の位置が後世の擾乱によって確認可能な状況(第7層以下が露出)にあったにも係らず検出されなかった。

そもそも、内裏の回廊(複廊)の外側を取り巻く大垣(一本柱塀)の復元は内裏西側の調査成果をもとにされた。宮の中軸から115m西の線上で、朝堂院西面回廊棟通りの柱列(NW14次[難波宮址顕彰会1964]で4基、NW85-22次4区[大阪市文化財協会2005]で2基;ともに建替えの痕跡あり)が一本柱塀となって派生し、北へ連続すると考えたのである。柱穴を確認した二つの地点の間は約100m離れており、この間では柱列の連続は未調査である。つまり、一本柱列ではなく、柱筋をそろえた別個の建物と考えることも可能で、そうした場合、実際NW85-22次4区の柱穴は宮中軸を挟んで東西に対称の位置にあり、(当然ではあるが)今回検出の柱穴が建物である可能性とうまく合致することになる。また、西で復元された大垣を東へ折り返した場合、その線上にはNW121次調査でSB12122の西面庇の柱筋が合致しており、付近には東面大垣に該当しそうな一本柱塀は発見されていない[大阪市文化財協会1981]。

しかし、内裏大垣の存在を否定し、その外側に配された建物群を想定した場合、内裏の外郭が存在せず、内郭の複廊が直接に官衙建物群の中に露出しているということになるので、いかにも奇異に感じられる。内裏大垣の問題はさらなる調査成果の蓄積を待って判断するべきと考える。

以上①-④に加え、想定していなかった難波宮下層遺構や豊臣期の遺構についても重要な発見があったので以下に述べる。

⑤難波宮下層の正方位置構

難波宮下層に2条の溝を検出した。SD42・43で、これらはともには正南北方位をとる。SD42は6世紀後葉～7世紀初頭とみられ、これに切られるSD43は古墳時代のものと考えられた。特にSD43は20m以上に亘って連続し、西方の溝(NW4-H次)とともに何らかの施設を区画する可能性もある。正方位をとるこれらの溝に配置が規制される建物があったとすれば、それは宮殿などであるかもしれない。難波宮下層遺構には、文献史料にみえる安閑朝に始まる「難波屯倉」や、「難波小郡宮・味経宮」など孝徳朝にかかる諸宮・施設が含まれると考えられ、それらとの関係が注目される。

⑥豊臣期の区画施設

SA1は豊臣後期の一本柱塀で、門の位置を推定することができた。東方のNW30次調査やNW04-5・05-9次調査でも同様な区画施設が検出されている。調査地周辺は、豊臣期においては有力な

大名の屋敷が構えられた地域で、区画施設は屋敷地割りに関係するとみられる。これらを総合的に検討すると、屋敷の配置や道路との関係が明らかになる可能性があり、これも今後の課題としたい。

3)まとめ

- ・難波宮下層遺構で正方位をとる溝などが検出され、難波宮造営以前の重要な施設との関係が考えられた。
- ・前期難波宮内裏東面大垣の位置で柱穴を検出したが、これらは堀以外の建造物である可能性が考えられた。
- ・後期難波宮の大規模な区画施設の一部を検出した。これは以前に初期の調査成果をもとに復元した後期難波宮新段階に属する区画の南面部分に当り、南面のみがほかよりも格式が高いものとみられた。構造の把握については不明な点が残った。
- ・豈臣後期の堀などを検出した。

引用文献

- 大阪市教育委員会1969、「昭和43年度(第30次)難波宮跡調査報告書」
大阪市文化財協会1981、「難波宮址の研究」第七
1995、「難波宮址の研究」第十
2004、「難波宮址の研究」第十二
2005、「難波宮址の研究」第十三
2008、「難波宮址の研究」第十五
大阪文化財研究所2010、「平成21年度難波宮跡整備事業にかかる発掘調査(NW09-2)報告書」
2011、「平成22年度難波宮跡整備事業にかかる発掘調査(NW10-6)報告書」
2012、「平成23年度難波宮跡整備事業にかかる発掘調査(NW11-2)報告書」
高橋 工2008、「第Ⅳ章第2節 後期難波宮宮殿東方地域の概観」:「難波宮址の研究」第十五 大阪市文化財協会,
pp.76-86
難波宮址顕彰会1956、「難波宮址の研究」研究像察報告第壹
1958、「難波宮址の研究」研究像察報告第貳
1964、「難波宮址の研究」研究予察報告第五第一部

SC 1 と調査区全貌
(南から)



SC 1 (W西から)

SC 1 北部の断面と礫石
(南西から)



SC 1 南部の瓦出土状況
(北東から)



調査区北部の瓦出土状況
(北から)



第4層上面遺構全景
(南から)



SA 1 門部分
(西から)



SX 6
(東から)



中央区上町17における建設工事に伴う
難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW12-7)報告書

調査個所 大阪市中央区上町17
調査面積 12m²
調査期間 平成24年11月5日～11月6日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、平田洋司

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は難波宮の南西、豊臣期大坂城の三ノ丸西南部に位置する。大阪市域を南北に延びる上町台地の北端部付近に立地し、段丘層が比較的高位で検出される地域である。周辺ではこれまで多くの調査が実施され(図1)、古代から近世の遺構・遺物が確認されている。

今回の調査地では事前に大阪市教育委員会によって行われた試掘調査の結果、現地表下1.1m以下で江戸時代以前に遡る地層と、現地表下1.3mの段丘層にて遺構が確認されたため調査を実施することとなった。11月5日から調査を開始し、敷地西部の南北4m、東西3mの範囲を調査対象とした(図2)。試掘調査の所見から後述の第4層までを重機によって除去し、以下は人力により掘下げを行った。適宜、遺構の検出・記録を行いつつ調査を進め、11月6日に埋戻し作業も含め、現地における調査を完了した。

基準点はmagellan社製Pro Mark 3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高は東京湾平均海面値(T.P.値)であり、本文・挿図中ではTP+○mと略記した。

2) 調査の結果

i) 層序(図4)

現在の地表面はTP+20m付近にあり、ほぼ平坦である。調査で確認された地層を第1層～第6層に区分した。

第1層：煉瓦片・漆喰片・炭・焼土粒を多く含む黒褐色疊混り中粒砂質シルトからなる現代整地層で、層厚は30～40cmである。



図1 調査地位置図



図2 調査区配置図

第2層：炭・桙土粒を多く含む黒褐色シルト質中粒～粗粒砂からなる現代整地層で、層厚は10～20cmである。

第3層：一連の整地層で岩相から第3a層と第3b層に2分した。18世紀前半に位置づけられる

第3a層はシルト偽礫・炭を含む暗褐色(10YR3/3)疊混り中粒砂質シルトからなる整地層で、層厚は30～40cmである。

第3b層は第4～6層に由来する偽礫を多く含むにぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質細粒～中粒砂からなる整地層で、層厚は10～20cmである。後述のSK401の上部を埋めている。

第4層：炭を含む黒褐色(10YR3/2)細粒～中粒砂質シルトからなる整地層で、層厚は20cmである。瓦片のほか遺物は出土しなかったが、上下層の関係から17世紀代に推定できる。

第5層：第6層に由来する偽礫を多く含むにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒～中粒砂質シルトからなる整地層で、層厚は10～30cmである。第6層上面には大小の凹凸が残されていることから、第6層を削

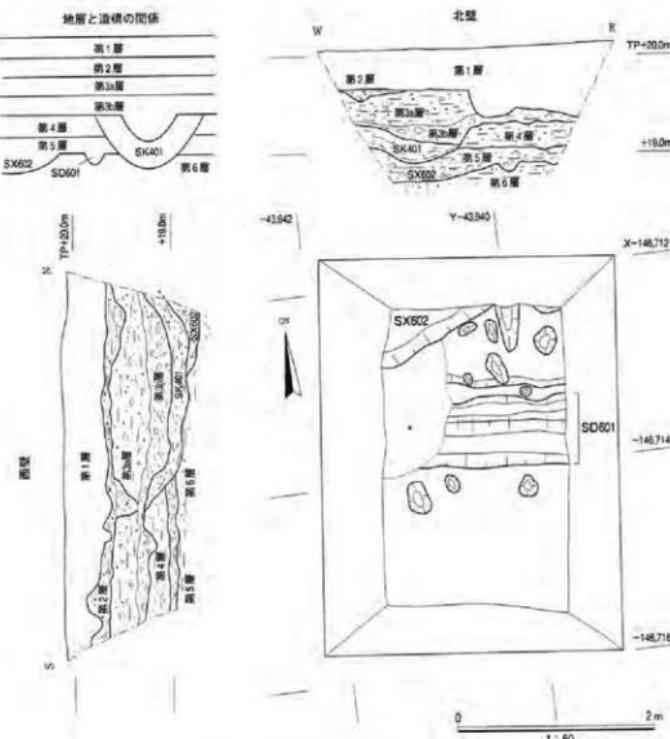


図3 地層断面図および第6層上面の造構

平した際に再堆積したものであろう。なお、凹凸が見られることから淘汰が不良な作土層の可能性も考慮したが、後述の落込みであるSX602の埋土が本層であることなど、作土層とするには疑問点もあることから、整地層と判断した。本層からは、土師器・丹波焼・瀬戸美濃焼志野・瓦片がごく少量出土し、丹波焼大平鉢1のみが図化できた。瀬戸美濃焼志野を含み、肥前磁器を含まないこと、本層には大坂夏ノ陣に由来する焼土粒が認められないことから、豊臣後期に位置づけられよう。

第6層：黄褐色(10YR5/8)疊混り中粒砂質シルト～シルト質中粒砂からなる段丘構成層である。

ii) 遺構と遺物(図3～7)

a. 第6層上面の遺構と遺物(図3～5)

第6層上面ではSD601およびSX602を検出した。

SD601 幅0.7m、深さ0.1mの溝である。方位は東で南に振り、現在の敷地の方向と同じである。掘直しが認められ、最も深い部分で見ると北から南へと0.3～0.4m移動している。埋土は第5層であるが、わずかに炭を含む。第6層上面のようすは、SD601を境として南側が平坦に近く比較的凹凸が少ないのに対し、北側は凹凸が大きいことから、整地を行う際の区画溝としての機能が考えられる。少量の土師器・瓦片が出土したのみである。

試掘調査の際に検出した遺構は当遺構である。

SX602 調査区北西端で検出した落込みである。深さは0.2m以上で調査区外へと続く。検出した範囲では埋土は第5層と区別できない。性格は不明であるが、調査地の北西には龍造寺谷へとつながる南東から北西方向の支谷が推定されていることから(図5)、こうした地形を反映した造成の可能性がある。少量の瓦片が出土した。

これらの遺構の時期を直接決するだけの遺物はないが、第5層の年代観から豊臣後期に位置づけられよう。

b. 第5層上面の遺構と遺物(図6・7)

調査を開始した第5層上面では調査地北西部でSK401を検出した。断面の観察から本来は第4層上面の遺構である。

SK401 南北2.1m以上、東西1.3m以上の土壙である。調査区外に続いた本來の規模や形状は不明であるが、底面の形状や埋土のようすからは、平面形は隅丸方形でさほど大きく延びるものではない。長軸方向の方位は現在の町割りに一致する。深さは0.4～0.5

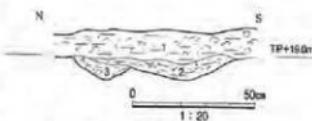


図4 SD601断面図(調査区東壁部分)
 1: 第6層の偽縫多く含むにふい黄褐色(10YR4/3)
 細粒～中粒砂質シルト〔第5層〕
 2: 下部に第6層の偽縫、上部に巣を含むにふい黄褐色
 (10YR4/3)細粒砂質シルト〔SD601〕
 3: 第6層の偽縫多く含むにふい黄褐色(10YR4/3)
 シルト質粘粒質〔SD601〕

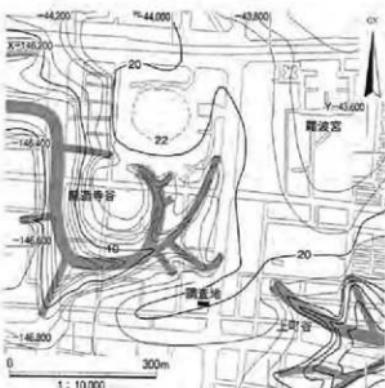


図5 調査地と周辺の谷

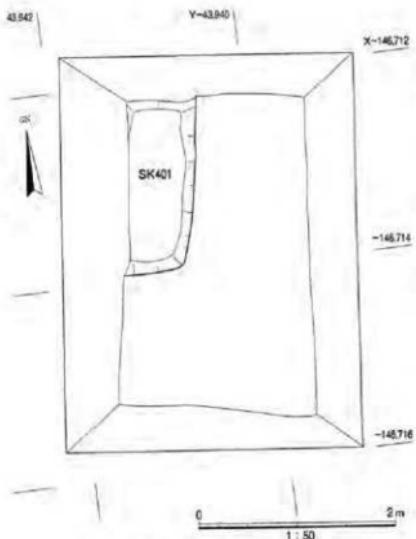


図6 第5層上面の造構

mで、埋土は下部が炭を多量に含む黒褐色(10YR2/3)中粒砂質シルトで、上部は第3b層である。下部を中心に多量の瓦片のほか、土師器・肥前磁器が出土した。2は土師器焰烙で難波分類のD類[難波洋三1992]、3・4は肥前磁器碗である。これらの出土遺物から遺構の時期は18世紀前半に位置づけられる。

3)まとめ

今回の調査では、豊臣後期の整地層や溝・落込みのほか、18世紀前半の土壤などを検出した。現在の町割りの方位が少なくとも豊臣後期に遡ると追認できたことは成果といえよう。一方、調査地の具体的な遺構配置や豊臣期以前の状況については、後世の削平や調査面積が狭いこともあり、今回の調査では明らかにすることができなかつた。今後も継続した周辺の調査が必要である。

引用文献

難波洋三1992、「徳川氏大坂城期の焰烙」：大阪市文化財協会編「難波宮跡の研究」第九、pp.373-400

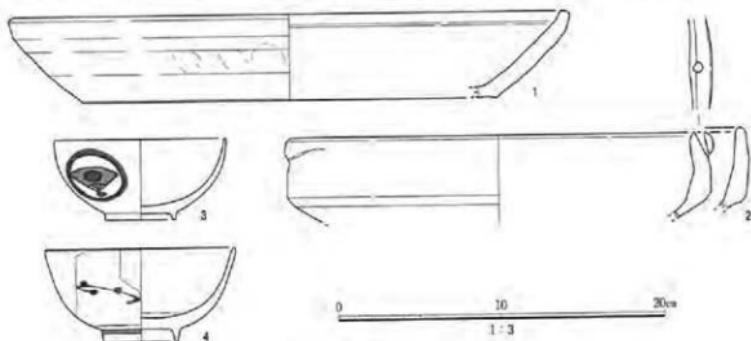


図7 出土遺物実測図
第5層(1)、SK401(2~4)

地層断面
(南東から)



第6層上面の遺構
(北から)



第5層上面の遺構
(北から)



中央区南本町二丁目27-3における建設工事に伴う
大坂城下町跡発掘調査(OJ12-1)報告書

調査個所 大阪市中央区南本町2丁目27-3
調査面積 25m²
調査期間 平成24年5月21日～5月24日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、京嶋覚

1) 調査の経過

調査地は豊臣期の船場城下町の西南部に位置する。調査地の東100mで行われたOJ08-3次調査では、大坂冬ノ陣の焼土層が確認され、豊臣期と徳川期の遺構・遺物が出土し、海成砂層の上部擾乱部から古墳時代前期～古代の土器が出土している[大阪市文化財協会2010]。さらに50m東のOJ95-4次調査では冬ノ陣の焼土層が検出され、豊臣期の厚い整地層と、その下位に湿地性の黒色粘土層が確認されている[大阪市文化財協会2004]。また、北東100mのOJ02-2次調査でも豊臣期から徳川期にかけての土壌などが検出され、海成砂層の上部で弥生時代終末期の土器が出土している[大阪市文化財協会2003]。これらの調査成果から、今回の調査地でも同様の遺構・遺物が検出されると予想された。

大阪市教育委員会が行った事前の試掘調査では、現地表から2.45m下で、豊臣期～徳川期の遺物包含層および遺構面が確認されたため、敷地南側に東西2.5m、南北10mの調査区を設定し、発掘調査を行うことになった。

敷地内は事業者側によって現地表下2.45mまで全体を掘削することになっていたが、立会で遺構面を確認した上で2.15mまでに留めた。5月21日から人力での掘下げを開始し、24日に最終的に記録作業を終え、機材の撤収作業を行って現場作業を完了した。

以下にその結果を報告する。なお、図中の方位は現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。水準値はTP値(東京湾平均海面値)で、図中ではTPと省略した。



図1 調査位置図



図2 調査区位置図

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

調査地の現地表は北側道路面でTP+3.0m、敷地内は若干高くなるが、全体的に掘削されて調査開始面はTP+0.9~1.0mである。

第1層：重機掘削された地層の残りで、17世紀後半以降の整地層であろう。

第2層：褐色(10YR4/4)細粒砂質シルトからなる整地層で、層厚は15~40cmである。上面でいくつかの土塊が検出されたが、上位層から掘り込まれたものも含まれる。



図3 地層と遺構の関係図

第3層：上部は黄褐色(10YR5/6)細粒砂、TP-0.2~0.3m以下は明黄褐色(10YR6/6)粗粒～中粒砂および細礫からなり、上方細粒化する海浜成層である。最上部は薄く擾乱されている。上面で豊臣期の遺物を出土する土塊が検出された。

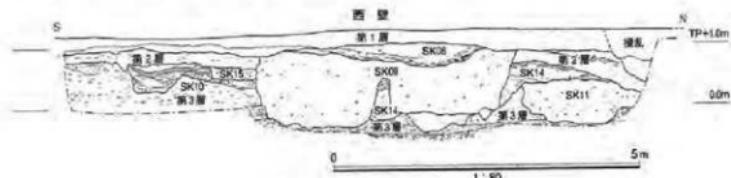


図4 西壁地層断面図

ii) 遺構と遺物

a. 弥生時代終末～古代

第3層の上部から弥生時代後期末の壺底部1・2、飛鳥～奈良時代の土師器鉢3・壺4、須恵器杯蓋5など少量の遺物が出土したが、遺構は検出されなかった。

b. 豊臣期～徳川初期

第3層上面で土塊SK10～17を検出した。

SK10は東西1.5mで円形に近い形状で、深さは最深で0.6mである。土師器小皿8、備前焼注口鉢9、瀬戸美濃燒志野碗、肥前陶器鉢、中国産青花のほか、古墳時代前期の土師器壺7や古代の須恵器壺底部6などが出土している。

SK11は北端部で検出された南北2m以上の土塊で、深さは0.7mである。丹波焼鉢、肥前磁器などが出土した。

SK12は北半部東壁にかかる南北2m以上の土塊で、深さは0.6m、埋土は灰色(5Y4/1)細粒砂質シルトで炭粒を含む。備前焼鉢10が出土した。さらに南にSK13があり、やはり南北2m以上、深さ0.8mで、埋土はSK12と同じである。土師器小皿、肥前陶器碗が出土した。

SK14は中央部西壁にかかる土塊で、南北4.0m、深さ1.0mあるが、底部の形状から2基重なっていたと思われる。この位置には第2層上面からSK09が掘り込まれている。出土遺物には土師器小皿、備前焼小壺、瀬戸美濃燒天目碗のほか、豊臣前期の特徴をもつ軒丸瓦11がある。

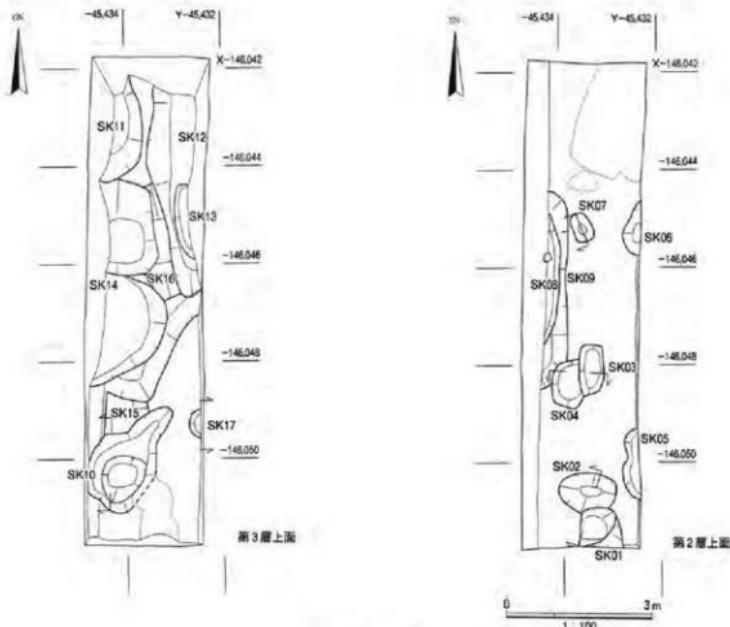


図5 道構平面図



- 1: 始オーリーブ褐色(2SY4/2)シルト質細粒砂岩(灰岩含む)
- 2: 黒褐色(2SY3/2)炭化物質粘土岩、2: 黑褐色(2SY3/1)シルト(炭化物質)
- 3: オリーブ褐色(2SY4/3)シルト質粗粒砂岩
- 4: 黒色(2SY2/1)シルト(炭化物質)
- 5: オリーブ褐色(2SY4/4)細粒砂岩シルト質粗粒砂岩(灰岩含む)
- 6: 黄褐色(2SY3/6)細粒砂岩シルト(第2層)



図6 道構断面図

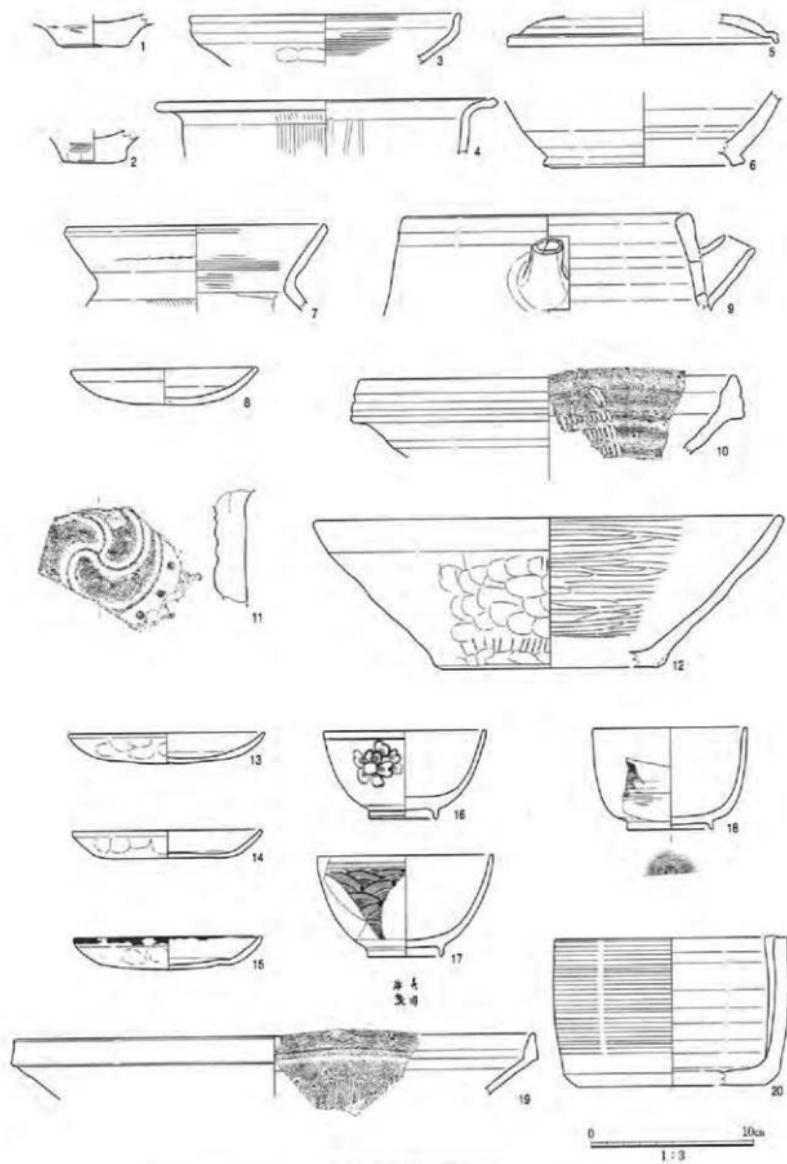


圖7 出土遺物實測圖

第3層(1~5), SK10(6~9), SK12(10), SK16(12)、SK02(13~20)、SK09(11)

SK15は南部西壁にかかる土壌で、南北0.7m以上で、深さ0.2mと浅い。近世の土師器小皿のほか古墳時代～古代の土師器・須恵器が出土した。

SK16はSK13・14に壊されてごく一部遺存する土壌で、南北2.3m、深さ0.5mで、埋土は灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルト～シルト質細粒砂で炭化物層が挟在する。瓦質土器鉢12が出土した。

SK17は南部東壁にかかる円形の土壌で直径0.6m、深さ0.3mである。古代の須恵器片が出土した。

これらのうちSK10・16・17は埋土に炭化物層が挟在する点で共通しており、SK10はSK15に、SK16はSK13・14により壊されているため、他の土壌より先行して構築されたと思われる。出土遺物から豊臣後期前後に構築されたと思われる。SK11～14は規模が類似し、隣接して掘られており、底が第3層下部の中粒～粗粒砂層となることから、第3層上部の細粒砂を対象とする土採り穴と推定される。出土遺物から豊臣後期～徳川初期と考えられる。

c. 徳川期以降

第2層の整地層からは土師器小皿、丹波焼雷鉢、瀬戸美濃焼灰釉丸皿・志野丸皿、肥前磁器染付碗、中国産青花皿などが出土しており、概ね17世紀中葉頃の整地と思われる。したがって、この上面で検出された遺構はそれ以降の時期のものとなる。

SK01・02は調査区南部で検出された。いずれも長軸0.7mほどで、深さは0.5mである。SK02の埋土には炭化物層が挟在する。土師器小皿13～15・焰燈、丹波焼雷鉢19、備前焼鉢20、肥前京焼風陶器碗18、肥前磁器染付碗16・17などが出土した。これらは17世紀後半～末のものである。

SK03・04は南北1mほどで、SK03の深さが0.2m、SK04は0.1mの土壌で、SK03から薬灰釉の肥前陶器や砥石が出土した。

SK05は南部の東壁にかかる土壌で南北1.4m、深さ0.15mである。

SK06は北部の東壁にかかる土壌で南北1.1m、深さ0.35mである。SK05・06の埋土はいずれもにぶい黄橙色(10YR7/2)粗粒～中粒砂で、遺物は出土しなかった。

SK08は西壁にかかる南北2.1m以上、深さ0.4mの浅い土壌である。同じ位置にSK09が掘られており、その埋土の最上層とも考えられる。遺物は出土しなかった。

SK07は0.6m×0.4mの梢円形で、深さ0.2mである。丸・平瓦片のみが出土した。

SK09は南北4.2mで、深さは1.0～1.2mである。2つの土壌に分かれるが、埋土は同じである。肥前陶器碗、瀬戸美濃焼織部向付など細片が出土した。

3)まとめ

今回の調査では、周辺での従来の調査成果と同様に豊臣期～徳川初期の遺構・遺物が検出されたが、当時の屋敷地奥に相当する位置であったためか、建物跡などは検出できなかった。豊臣期以降の城下町の具体的な姿を解明し記録保存していくためには、道路に面した建物部分の調査は不可欠であり、今後の調査成果に期待したい。

引用・参考文献

- 大阪市文化財協会2003、「OJ02-2次調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告書-2001・2002年度-』、pp.83-89
2004、「OJ95-4次および95-8次の調査」：『大阪城下町跡』Ⅱ、pp.337-346
大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「大阪城下町跡発掘調査(OJ08-3)報告書」：『大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.105-114

第3層上面
(南から)



第2層上面
(南から)



西壁断面
(SK10付近)



中央区平野町一丁目38番・40-9番における建設工事に伴う
大坂城下町跡発掘調査(OJ12-2)報告書

調査個所 大阪市中央区平野町1丁目38・40-9
調査面積 40m²
調査期間 平成24年8月6日～8月10日
調査主体 公益財團法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、黒田慶一

1) 調査に至る経緯と経過

今回調査地は大阪城下町跡の東北部に所在し、平野町通と天神橋筋の交差点の東南方である。平野町通北側町の敷地ではOJ92-25・09-2次、一本北の道修町通南側町敷地ではOJ91-11・92-18次などの調査が行われ、豊臣前期には金属生産に係わる職人の居住地(OJ92-18次)であったと推定される。ところが、豊臣後期には城下町の道路が整備がされ、輸入陶磁器も含む茶陶が大量に出土し(OJ91-11・92-25次)、富裕商人の屋敷地となったようである[大阪市文化財協会2004・大阪文化財研究所2010] (図1)。

2012年1月6日に大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、地表下3.35m以下で豊臣～徳川期の遺物包含層と遺構面が検出されたことから、本調査を実施することになった。事業主が土留めなどの付帯工事、および地表下約3.35mまでの機械掘削を行った後の8月6日に調査を開始した。当初、敷地南部に4m×10mの東西方向の調査区を設定する予定であったが、その東半が旧建物の地下室で壊されていることが明らかになったため、敷地南西に南北方向の調査区を設けることになった(図2)。調査は人力によって遺構検出・掘下げ・写真撮影・図面作成などの作業を行い、8月10日に現場作業を完了し、撤収した。

本報告書で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はTP値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

2) 調査の結果

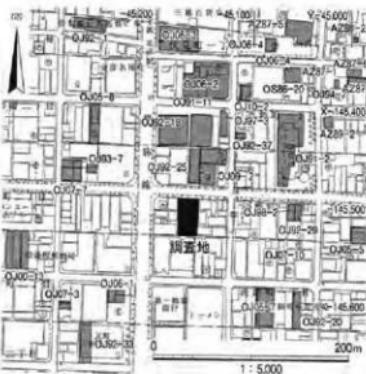


図1 調査位置図



図2 調査区位置図

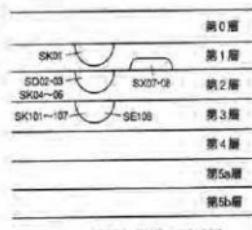


図3 地層と構造の関係図

i) 層序(図3・4)

調査地は、敷地周間に地下連続壁を打設し、一段目の切土を入れ、地表下3.35mまで掘削されていた。ほぼ第1層上面が検出されていたが、上の地層も遺存している状況であった。

第0層：部分的に10~20cm遺存する灰オリーブ(5Y4/2)~オリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒砂質シルトの整地層である。19世紀代の関西系陶器蓋付鉢27が出土した。

第1層：層厚10~20cmの焼土を含む褐色(10YR4/4)粗粒砂質シルト層で、中国産青花碗15・皿19、朝鮮産白磁碗16、肥前陶器鉢14・碗17・18・皿20・壺21、備前焼播鉢26、軒瓦22・23などが出土した。14・20は徳川時代に下る可能性があり、本層は大坂夏ノ陣(1615年)焼土層を母材として客土した盛土と考えられる。

第2層：層厚20~40cmの暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂質シルトなどからなる整地層である。

第3層：層厚20~40cmの灰オリーブ色(5Y4/2)細礫混りシルト質粗粒砂の整地層で、中国産青花皿3・軒瓦4・5が出土し、豊臣後期に比定される。

第4層：層厚40~60cmの暗褐色(10YR3/3)細礫混り粗粒砂質シルトの整地層で、土師器壺1・瀬戸美濃焼皿2が出土した。

第5a層：調査区南端のみに分布する最大層厚40cmのにぶい黄褐色(10YR6/4)中粒砂の自然堆積層である。

第5b層：にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂質粗粒砂の自然堆積層である。

ii) 構造と遺物

豊臣後期[第3層上面]の構造と遺物(図4~6)

SK101 長さ1.2m、幅0.7m、深さ0.2mの土壌で、炭の薄層が挟在するオリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂質シルトを埋土とする。備前焼平鉢12が出土した。

SK102 直径0.8m、深さ0.2mの土壌で、にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂質シルトなどがレンズ状に埋積する。

SK103 直径0.5m、深さ0.2mの小土壌で、暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂質シルトなどで埋まる。

SK104 直径0.3m、深さ0.1mの小土壌で、暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粗粒砂質シルトで埋まる。

SK105 東西2.1m以上、南北1.3m、深さ0.7mの長方形を呈する土壌で、最下層は暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粗粒砂、その上は炭で充満し、丸瓦6・中国産青花碗7・土師器大和型土釜8・瀬戸美濃焼志野織部向付9・中国産青花碗10・備前焼播鉢11のほか、鑄型や鋳型の焼成支脚、砥石、鉄滓など铸造に関係する遺物が出土した。6は凹面に斜めに傾いたコビキB痕と布目痕をもつ。17世紀初頭の土壌である。

SK106 長さ0.4m以上、幅0.5m、深さ0.5mの土壌で、下部は暗褐色(10YR3/3)粗粒砂、上部は浅黄色(5Y7/3)粘土偽疊で埋まる。

SK107 長さ1.2m、幅0.3m以上、深さ0.1mの土壌で、暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂質シルトを埋土

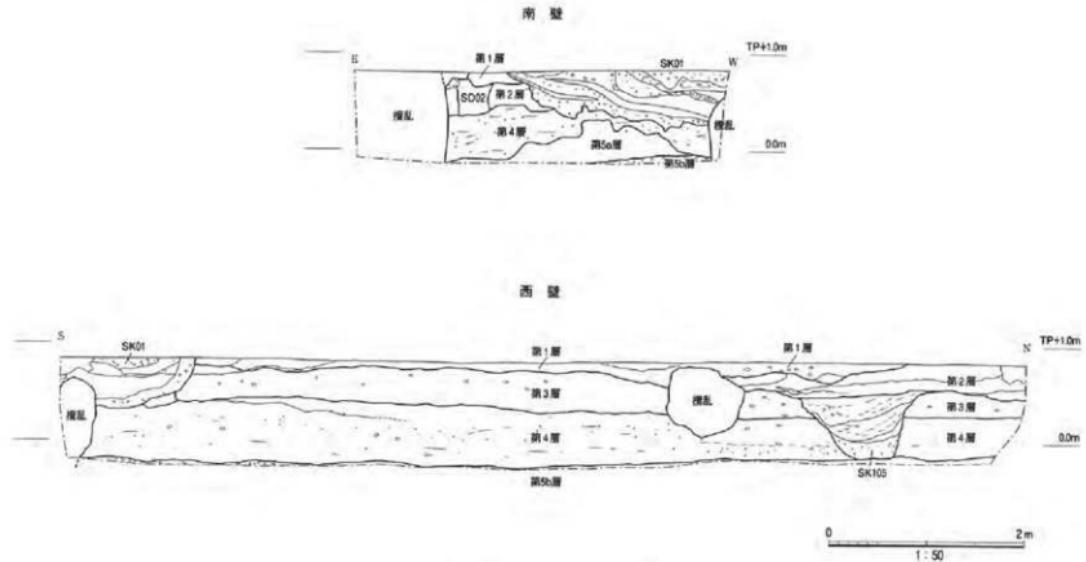


图4 南壁·西壁地层剖面图

とする。

SE108 直径0.9m、深さ0.8mの掘形内に、直径0.8m、高さ0.3mの木製桶を入れて井戸櫛としている。底部に有機物を多く含む黒色(10YR2/1)シルトが堆積する。備前焼鉢13が出土した。

豊臣後期～徳川初期[第2層上面]の遺構と遺物(図4・5・7)

SD02 長さ1.6m以上、幅0.4m、深さ0.4mの南北溝で、焼土を含む褐色(10YR4/4)粗粒砂質シルトで埋まる。

SD03 SD02の北に0.2mの高まりを置いて掘られた長さ3.7m、幅0.4m、深さ0.3mの南北溝で、焼土を含む褐色(10YR4/4)粗粒砂質シルトで埋まる。廐絶後、上部にSX07・08が敷き詰められる。

SK04 長さ1.2m、幅1.0m、深さ0.1mの梢円形を呈する土壤で、暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質粗粒砂を埋土とする。

SK05 長さ1.1m、幅0.9m、深さ0.4mの土壤で、西半に拳大の礫を詰め、焼土を含む暗褐色(10YR3/3)シルトで埋めている。唐草文軒平瓦24が出土した。唐草は巻きが下向きのものが2つ並ぶ。

SK06 一辺0.6m、深さ0.2mの隅丸方形の土壤で、暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質粗粒砂で埋まる。

SX07 一辺0.2～0.7mの自然石を敷き詰めた集石遺構だが、石の上面の高さは描わず、凹凸を見せる。SD03を横断するように施工されている。

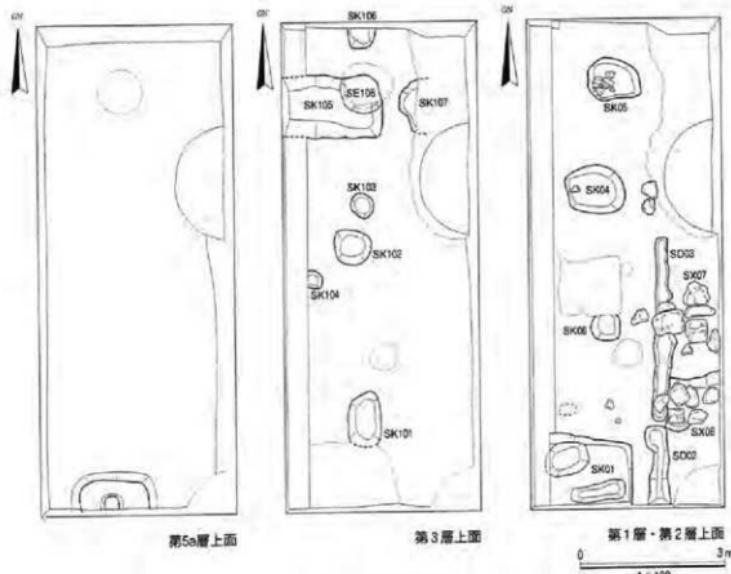


図5 遺構平面図

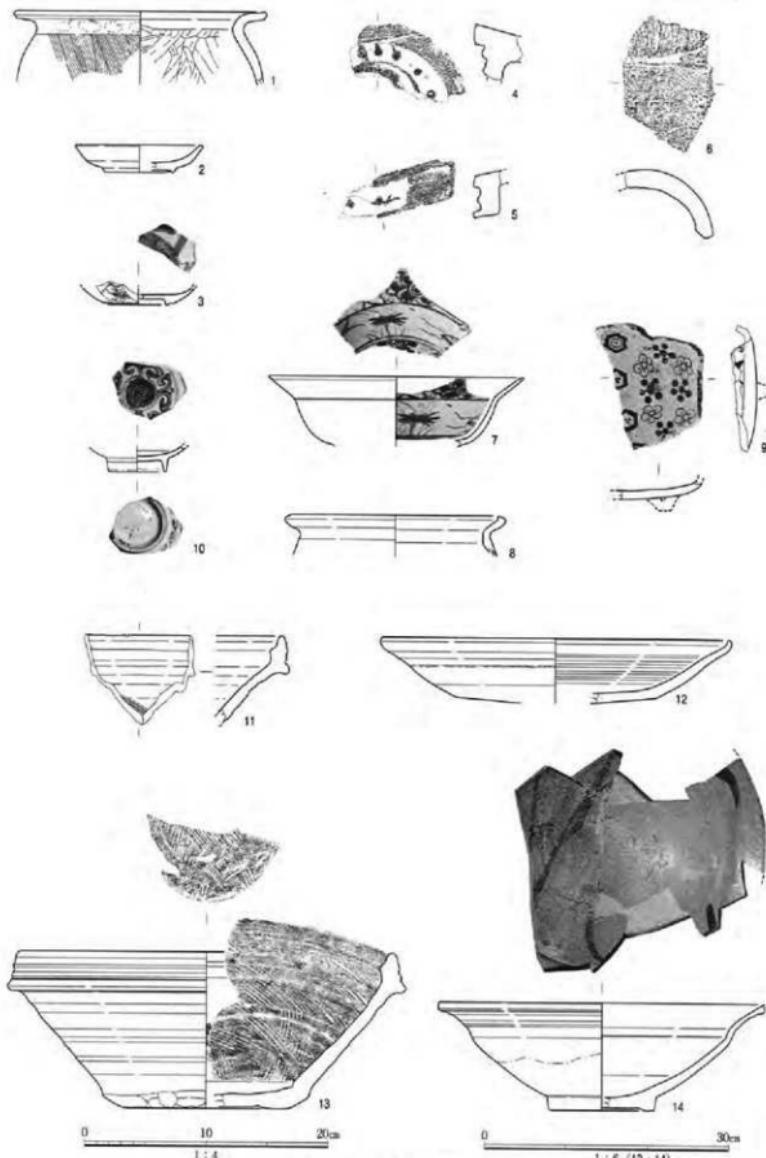


图6 出土遗物实测图(1)

第4层(1~2)、第3层(3~5)、SK105(6~11)、SK101(12)、SE108(13)、第1层(14)

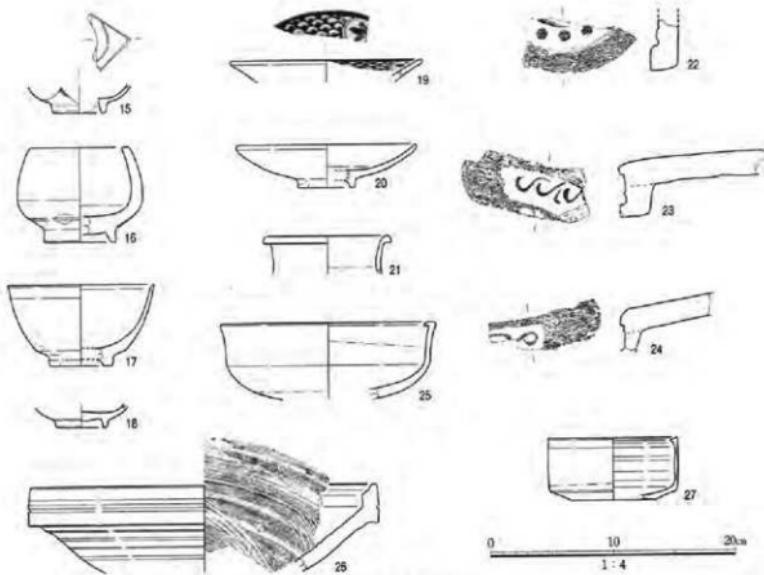


図7 出土遺物実測図(2)
第1層(15~23・26)、SK05(24)、SK01(25)、第0層(27)

SX08 一辺0.3~0.5mの自然石を用いた集石遺構だが、一部、石の上に石が載るように据えられている。

徳川前期(第1層上面)の遺構と遺物(図4・5・7)

SK01 東西2.0m以上、南北1.5m以上、深さ0.6mで、底面に長さ0.9~1.1m、幅0.4~0.7mの浅い土壌状の凹みをもつ。炭を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂などで東側より埋められている。17世紀後半の肥前陶器火入25が出土した。

Ⅲ)各層出土の遺物(図6・7)

第4層出土の土師器甕1は、橙色(5YR6/6)を呈し、体部外面はハケメ調整、内面はヘラケズリを施している。8世紀前半のものである。瀬戸美濃焼丸皿2は16世紀後半である。

第3層出土の中国産青花皿3は高台外周を削り、葵筋底状を呈する。底部外面に型打ち文様がある。左巻き三巴文軒丸瓦4は巴尾が次の巴の胴部に着き圓線状を呈する。珠文帯に范術が目立つ。また珠文の間隔に広狭がある。珠文間が広いところには、直径0.2~0.3cmほどの小突起がある。瓦范作製時には小粒の珠文を密に配していたものを、彫り直して大粒の珠文にした可能性がある。唐草文軒平瓦5は、文様区に尾の長いオタマジャクシ状の唐草と、その外側にV字形の子葉を配する。豊臣後期の遺物である。

第1層からは中国産青花碗15・皿19、朝鮮産白磁碗16、肥前陶器鉢14・碗17・18・皿20・壺21、

備前焼鉢26、左巻き三巴文軒丸瓦22、唐草文軒平瓦23が出土し、16は16世紀後半の慶尚南道産軟質白磁と思われ(註1)、小壺を碗に加工したと見られる。体部下半外面の砂目痕は復元すると8個を数え、口縁端部が無釉であることから、同形のものを重ね焼きしたと見られる。19は芙蓉手である。21は胎土に1~2mmの長石粒が目立ち、灰釉を施しオリーブ褐色(2.5Y4/3)を呈する。22は復元珠文数16個で、23は巻きが上向きの唐草が3本連続し、中間の唐草の枝から子葉が派生する。瓦当は芋接ぎだが堅固で、瓦当左側面から平瓦部側面にかけて一度にハラ切りを施す。23は豊臣期より古い様相だが、他は豊臣後期~徳川初期のものである。

第0層出土の関西系陶器蓋付鉢27は、19世紀のものである。

3)まとめ

第3層上面の豊臣後期の生活面では、鋳造関係の遺物に見られるように、町場の中心地では好まれない火を使う生産が行われていたようであるが(SK105)、遺物に中国産色絵鉢があるなど、富裕層の居住地でもある。第2層上面には夏ノ陣で廃絶する遺構と、徳川初期の集石造構(SX07・08)があり、屋敷地であった可能性が考えられる。豊臣前期およびそれ以前の遺構は見られず、慶長3(1598)年の大坂町中屋敷替えに伴う船場の開発を裏付けている。TP-0.2mで中疊質粗粒砂の自然堆積層に達し、遺物も見られなくなるから、古代~中世遺構は後世に消滅した可能性が高い。

(註)

- (1) 東京芸術大学美術学部片山まび氏の御教示による。氏によると軟質白組小壺を茶碗に加工した祭器や片口は伝世品では伝わっているが、出土品では類例がないらしい。

引用・参考文献

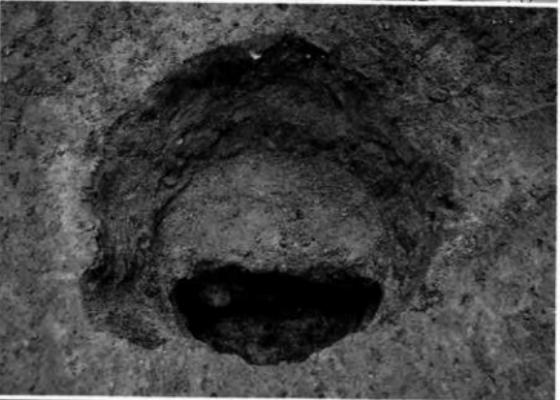
大阪市文化財協会2004、『大坂城下町誌』Ⅱ

大阪文化財研究所2010、『中央区平野町一丁目における建設工事に伴う大坂城下町跡発掘調査(OJ09-2)報告書』

第5b 層上面
(北西から)



SE108
(南から)



南壁地層断面



第3層上面
(南から)



SK105とSE108など
(西から)



第2層上面
(南東から)



中央区今橋三丁目・北浜三丁目における建設工事に伴う
大坂城下町跡発掘調査(OJ12-3)報告書

調査個所 大阪市中央区今橋3丁目1他2筆、北浜3丁目20他18筆
調査面積 約65m²
調査期間 平成24年5月29日～平成24年6月6日
調査主体 公益財團法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、松本啓子

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は船場地域の北部を東西に通る北浜通に面し、三体橋筋と御堂筋の間のはば中間地点に位置する(図1)。豊臣期から北浜通は船場を貫く幹線道路として存在し、この大通りに面した今回の調査地は大阪城下町の中でも重要な場所にあたる。本調査地の東側には、織方洪庵設立の史跡適塾や重要文化財大阪市立愛珠幼稚園がある。

周辺の発掘調査としては、一筋(約100m)南の今橋通にOJ94-15・06-5・11-2次調査があり、これらの調査では船場の城下町開発の前段階から、大阪冬ノ陣を経て、徳川期に至る間の遺構・遺物が検出され、徐々にこの地域の土地利用のようすが明らかになりつつある[大阪市文化財協会2004、大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、大阪文化財研究所2012]。

平成24年4月17日に行った大阪市教育委員会の試掘調査の結果、現地表下約2.1m以下で豊臣期～徳川期の遺物包含層と造構面が見られたため、関係諸機関との協議を経て、この地域の歴史的変遷を復元するための資料を得ることを目的として、遺構・遺物の分布状況やその年代、当時の土地利用のようすを把握する調査を行うことになった。

調査は、平成24年5月28日に現地打合せを行って安全面の諸注意事項などを確認したのち、翌29日から開始した。街区東北部にある調査地に、東西5m、南北13mの調査区を設定した(図2)。現地表下2.1mまでを重機によって掘削し、以下を人力で調査した。遺構面を精査して遺構・遺物の検出を行い、適宜、実測図・写真などの記録を取りながら、現地表下3.2mまで調査した。これより下は湧水のため、平面的な調査は行えず、重機で部分的な深掘りを行って現地表下4.0mまでを確認した。

平成24年6月6日に現地におけるすべての作業を終え、同日、機材を撤収して調査を完了した。



図1 調査地位置図



図2 調査区配置図

なお、本報告に用いた標高はTP値(東京湾平均海面値)で、本文・図中ではTP+○mと表記した。また、方位は現地で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。

2) 調査の結果

調査地における現地表面はほぼ平坦で、標高はおよそTP+2.7mである。

i) 層序(図3~5、図版中段)

第0層：重機で除去した近世後半以降の地層である。

第1層：18世紀代の整地層で、第1a・1b層の2層に細分した。第1a層は褐色(10YR4/4)細粒砂～細粒砂質シルト層で、調査区全域に分布する。層厚は最大10cmある。第1b層は黄褐色(2.5Y5/4)シルト質粗粒砂層が主体の整地層で、炭・焼土や瓦などを含む。古の作土とみられ、調査区北西部から南東部にかけて跡が残っていた。最大層厚25cmである。第1a層は比較的しまりが良く、上面は生活面であったと思われるが、調査範囲内では遺構は見られなかった。

第2層：17世紀後半～18世紀前半の地層で、整地層と火災の焼け跡整理に伴う地層(図では「焼土整理層」と記す)がある。遺構面を手がかりに第2a層と第2b層に分けた。また、第2層は第2a層上面で検出した場所SA250あたりを境に調査区の西半と東半で岩相の差異が見られた。

第2a層は、18世紀前半の整地層である第2ai層と、18世紀前半の火災の焼け跡整理に伴う地層である第2aiii層と、17世紀後半の整地層である第2aiv層に細分した。第2ai層は西半がぶい黄褐色(10YR4/3)シルト～粘土質シルト層で、最大層厚が44cm、東半が炭・焼土・砂を含む褐色(10YR4/4)

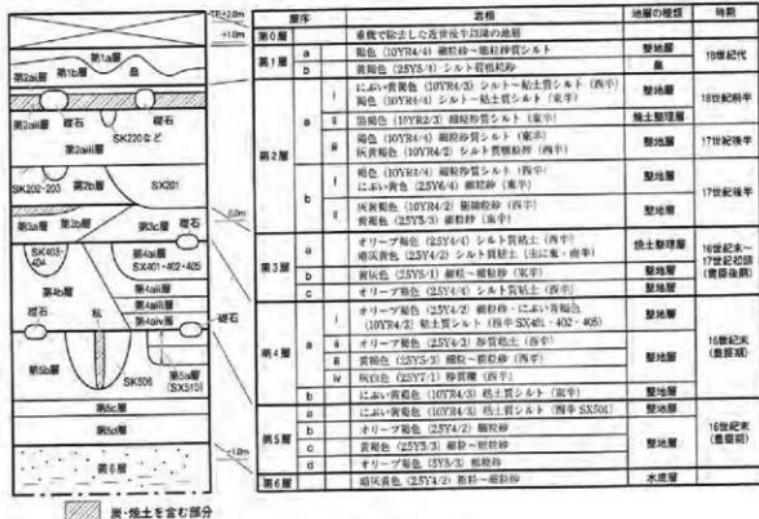


図3 地層と遺構の関係図

シルト～粘土質シルト層で、最大層厚が4cmである。第2aii層は炭や焼土を多く含む黒褐色(10YR2/3)細粒砂質シルト層で、層厚は最大16cmあり、おもに東半で見られた(図8に第2aii層の範囲を示した)。第2aiii層は、西半が灰黄褐色(10YR4/2)シルト質粗粒砂が主体の整地層で、最大層厚は24cm、東半が礫を含む褐色(10YR4/4)細粒砂質シルトが主体の整地層で、最大層厚は15cmである。

第2b層は17世紀後半の整地層で、第2bi・2bii層の上下2層に分かれる。第2bi層も第2a層と同様に岩相が東と西で異なっていた。西半の第2bi層は砾を含む褐色(10YR4/4)細粒砂質シルト層で、最大層厚が30cmあり、東半の第2bi層はにぶい黄色(2.5Y6/4)細粒砂層で粘土を含み、最大層厚が20cmである。第2bii層は、西半がシルトを含む灰黄褐色(10YR4/2)極細粒砂層で、最大層厚が22cmあり、東半が黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂層で粘土を含み、最大層厚が24cmである。遺構は第2bi層上面でSX201・SK202、南壁断面でSK203を検出した。

第3層：16世紀末～17世紀初頭(豊臣後期)の地層で、火災の焼け跡整理に伴う地層である第3a層と、整地層の第3b・3c層に細分した。調査区内では第3a・3b層とも上面に遺構は見つかっていない。

第3a層は東・南半に分布する、大量の炭・焼土を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粘土層で、最大層厚5cmである。西半は炭・焼土を含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質粘土が主体の地層で、層厚は最大18cmになる。

第3b・3c層は上面の高さがほぼ同じであるが、調査区中央部付近で重なりが見られる整地層である。上位にある第3b層は東半に分布し、第3c層は西半に分布する。第3b層は黄灰色(2.5Y5/1)細粒～粗粒砂層、第3c層はオリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質粘土層で、層厚はともに最大12cmである。

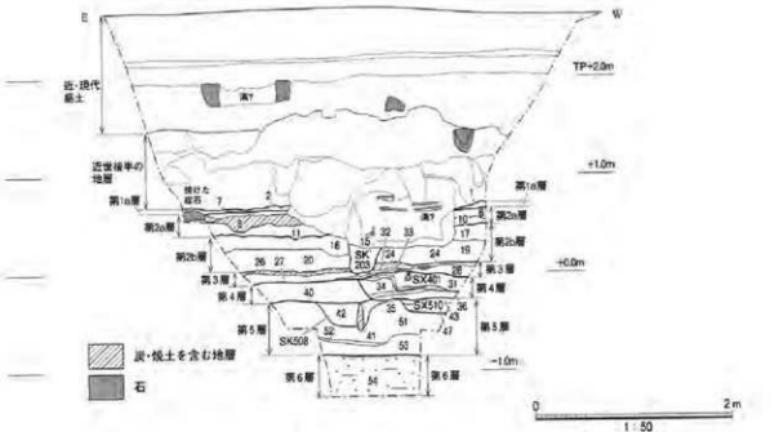
第4層：16世紀末の豊臣期の整地層で、西半の第4a層と東半の第4b層に細分した。第4a層と第4b層の上面の高さはほとんど変わらないが、第4a層は第4b層の後に積まれていた。

第4a層は第4ai～4aiv層に細分できる。第4ai層はSX401・402を埋めた土で、一見、第4aii層を垂直に掘り込んだ長方形の土壌のように見えるが、整地層である。SX405もこれらと同様、第4ai層の整地層と考えられた。岩相はSX401がオリーブ褐色(2.5Y4/2)細粒砂、SX402・405がにぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルトが主体となる。第4aii層はオリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質粘土層、第4aiii層が黄褐色(2.5Y5/3)細粒～粗粒砂層、第4aiv層が灰白色(2.5Y7/1)砂質礫層である。層厚は、第4ai層のSX401が最大18cm、SX402が最大21cm、SX405が最大15cm、第4aii層が最大16cm、第4aiii層が最大5cmで、第4aiv層が最大8cmである。

第4b層は、砂・炭を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト層で、最大層厚は24cmである。本層上面でSK403・404を検出した。

第5層：第5a～5d層の4層に細分した。

第5a層は西半に分布し、にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルトが主体の整地層で、最大層厚は30cmで、南壁断面の観察から、SX401のような整地層と考えた。図6では第5a層の分布範囲をSX510として示した。第5a層の途中で当初予定の掘削深度である現地表下3.2mに到達し、湧水がひどく崩落の危険があったため、これより下位は平面的には調査していない。以下の記述は重機によって深掘りした部分の壁面の観察によるものである。



第1層 1a	1:褐色(10YR4/4)細粒砂質シルト 2:含灰・にい・黄褐色(10YR4/3)細粒砂質シルト	4a 31:オリーブ褐色(25Y4/2)粗粒砂(西半 SX401) 32:含砂 黄褐色(25Y5/3)粘土質シルト(西半 SX401)
1b	3:含瓦・シルト オリーブ褐色(25Y4/4)繊維質 4:含灰・焼灰 黄褐色(25Y5/4)シルト質粗粒砂 5:含砂粒砂 オリーブ褐色(25Y4/4)粘土質シルト 6:にい・黄褐色(10YR4/3)シルト・粘土質シルト (西半)	33:含板粗粒砂 黄褐色(25Y6/1)粘土 34:オリーブ褐色(25Y4/3)砂質粘土 (灰化物・木質を含む) 35:含粘・燒土・燒瓦 黄褐色(25Y5/3)粘粒砂 36:灰白色(25Y7/1)砂質粘土 37:オリーブ褐色(25Y4/2)繊維砂粘土質シルト (SX401)
第2層 2a	7:含灰・燒土・砂 黄褐色(10YR4/4)シルト・ 粘土質シルト(東半) 8:含灰・焼土 黄褐色(10YR2/2)細粒砂質シルト (燒土整理層・東半) 9:にい・黄褐色(10YR4/3)シルト・粘土質シルト 10:含灰・燒土 黄褐色(10YR4/2)シルト質粗粒砂 (西半) 11:含理 黄褐色(10YR4/4)細粒砂質シルト(東半) 12:含瓦 にい・黄褐色(10YR4/3)粗粒砂 13:含シルト 黄褐色(10YR4/6)粗粒砂 SX301 14:含灰・燒土・燒瓦 黑褐色(75Y3/2)膠質 SK203 15:含砂粒砂 底リーブ色(5Y5/3)シルト	38:食器・灰 土 にい・黄褐色(10YR4/3)シルト質 粗粒砂(SX402) 39:含砂・粘土 にい・黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト (SX402-405)
2b	16:含灰・にい・黄色(25Y6/4)粗粒砂(東半) 17:含灰 黄褐色(10YR4/4)細粒砂質シルト(西半) 18:含シルト・粘土 黄褐色(10YR4/4)粗粒砂 19:シルト 黄褐色(10YR4/2)細粒砂質(西半) 20:含粘・燒土 黄褐色(25Y5/3)粗粒砂(東半) 21:褐色(10YR4/4)粘土質シルト	4b 40:含砂・灰 にい・黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト (東半)
第3層 3a	22:含灰・燒土 黄褐色(25Y5/6)粗粒砂質シルト 23:黄褐色(25Y5/6)粗粒砂 24:含灰・燒土 オリーブ褐色(25Y4/4) (燒土整埋層) (西半) 25:含灰・燒土・砂 黑褐色(10YR2/3)シルト (燒土整埋層) 26:含灰・燒土 黑褐色(25Y4/2)シルト質粘土 (燒土整埋層) (東半)	4f 5层 SK508 41:オリーブ褐色(25Y4/3)粗粒砂・粗粒砂 42:含砂・燒土 にい・黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト 5a 43:含灰 にい・黄褐色(10YR4/3)シルト質粗粒砂 (西半 SX510) 44:オリーブ褐色(25Y4/4)粗粒砂・シルト質粗粒砂 (SK511) 45:含砂質 オリーブ褐色(25Y4/4)粗粒砂 (SX510) 46:含粘・燒土 黄褐色(25Y5/4)繊維質 (SX510) 47:含砂・灰 にい・黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト (西半 SX510) 48:貝殻質 オリーブ褐色(25Y4/4)粘土質シルト シルト (SX510) 49:貝殻質 (SX510) 50:含砂・灰 オリーブ褐色(25Y4/4)粘土質シルト (SX510)
3b	27:含粘・烧灰 黄褐色(25Y5/1)細粒・粗粒砂(東半) 3c	5b 51:オリーブ褐色(25Y4/2)粗粒砂 5c 52:含粘・シルト 黄褐色(25Y5/3)細粒・粗粒砂 5d 53:含粘・オリーブ褐色(25Y5/3)粗粒砂 54:暗灰 黄褐色(25Y4/2)粗粒・粗粒砂 (水成層、 上方粗粒化する)
第4層 4a	29:含灰・燒土・砂 黑褐色(10YR2/3)シルト質粘土 (SX401) 30:含砂 にい・黄褐色(10YR4/3)シルト質粘土 (SX401)	第6層

図4 南壁地層断面図



図5 西壁地層断面図

第5b層はオリーブ褐色(2.5Y4/2)細粒砂層で、層厚は最大42cmである。

第5c層は黄褐色(2.5Y5/3)細粒～粗粒砂層で、最大層厚4cmである。

第5d層はオリーブ褐色(5Y5/3)粗粒砂層で、最大層厚は20cmである。

遺構は、第5a・5b層の上面で、SX510の東の縁に沿って南北に並ぶ礎石や土壙が見つかった。

第5b層出土の遺物から本層は豊臣期の整地層と考えられる。

第6層：本層は暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒～細粒砂の水成層で、上方粗粒化する。層厚は45cm以上である。遺物は出土していない。

ii) 遺構と遺物

a) 豊臣期の遺構と遺物(図6・7、図版上段)

第5a・5b層上面(第5層上面)

第5層上面で土壤SK501～509・511と礎石が見つかった。SK501～509は、深さが0.1～0.2m程度のもので、円形・稍円形・隅丸方形などさまざまな平面形があり、径も0.2～0.8mとばらつきがあるが、埋土は比較的よく似ていて、オリーブ褐色～にぶい黄褐色の粘土質シルトで、砂を含む。これらの土壤はSX510の東の縁に沿っては一直線に並ぶ。SK503や断面にかかるSK511の中に礎石が据えられていることや、土壤の形状にばらつきが見られることから、他の土壤も同様に礎石があったものと考えられる。礎石はこの土壤列に沿ったものが4個残っていた。また、土壤列から東と西にそれぞれ0.9mほど離れた位置に、礎石が2個ずつ南北に並んでいた。西側の礎石の1個はSK511である。SX510の東端が整地境界となることも考えあわせると、SK501～509は堀や柵といった敷地境の区画施設を構成するものと考えられる。

遺物はSK504から中国産青花山水文大皿1、SK503から土師器皿8が出土した。これらは豊臣期のものである。

第4a・4b層上面(第4層上面)

第4層上面では土壌SK403・404が見つかった。また、SX405の中に据えられていた礎石5個も図6に示している。

層序でも触れたように、SX401・402・405は整地の一環とみられ、地面を0.2~0.3m掘り込んでそこに土を充填したものである。平面の規模は、SX401が東西1.0m以上、南北4.0m以上で、SX402が東西0.8m以上、南北約4.1m、SX405が東西2.2m以上、南北3.3m以上あり、SX401・402は長方形の平面形と考えられるが、SX405は北端・東端・西端が調査区外のため不明である。遺物はSX402から瀬戸美濃焼陶器絵志野27が出土した。豊臣後期のものである。

SX405内には5個の礎石がコの字状に配置されていて、東辺の長さは約1.9mである。礎石の上面は現状で5個ともほぼ同じ高さで、第4層上面から10cmほど低い位置にある。これらは礎石建物を構成するものとみられ、SX405はこの建物の基礎固めのための整地であった可能性がある。

土壌SK403・404はともにSX401・402の東側、SX405の南側の位置にある。

SK403は南北1.2m、東西0.8m以上、深さ0.2mの土壌で、埋土は炭や焼土を含む褐色シルト質粗粒砂である。SK403から中国産青花小杯2、中国産白磁皿3、肥前陶器鉄釉皿4、土師器焼塙壺蓋7、九瓦6が出土した。これらは豊臣後期のものである。

SK404は南北0.4m、東西0.5m、深さ0.1mほどの土壌で、埋土は砂や多くの炭・焼土を含む暗灰褐色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

b)徳川期の造構と遺物(図8~10、図版下段)

第2b層上面

第2b層上面では、調査区の北端を大きく掘り込んだSX201と土壌SK202・203を検出した。

SX201は、東西2.5m以上、南北4.6m以上、検出面からの深さが約1.5mの掘込みで、後世の第2a層の整地の際に上部が、また、北端は近世後半以降の搅乱によって失われている。埋土は大量の炭・焼土や焼けた壁が混じる黒褐色礎質砂で、大量の遺物が出土した。火災後の整理をした時に掘られた廃棄土壌とみられるものである。SX201から出土した遺物は、16世紀末~17世紀初頭の豊臣期のものと、徳川期に入ってからの17世紀末までのものがあり、後者がSX201の時期を示す(図9・10)。16世紀末~17世紀初頭の遺物は、瀬戸美濃焼陶器灰釉折縁ソギ皿9・鉢11、肥前陶器輪花皿12、朝鮮王朝白磁皿13、中国産青花皿14~17、巴文鳥夷瓦24を、17世紀末までのものとして、瀬戸美濃焼陶器褐釉天目碗10、肥前陶器内野山系折縁大皿19、肥前磁器染付杯18・染付鉢20、ベトナム産陶器長胴瓶21、土師器焼塙壺23・焼塙壺蓋22を示した。

SK202は、直徑約0.2m、深さ約0.03mの、円形の小土壌で、埋土は炭・シルト偽縛を含むにぶい黄褐色細粒~中粒砂である。遺物は出土していない。

SK203は、南壁にかかる土壌で、幅約0.3m、深さ0.3m以上、埋土は細粒砂を含む灰オリーブ色シルトである。出土遺物はない。

SX203の東端とSX201の南肩中間点あたりを結ぶラインが、第2b層のおおよその整地境界となっていた。

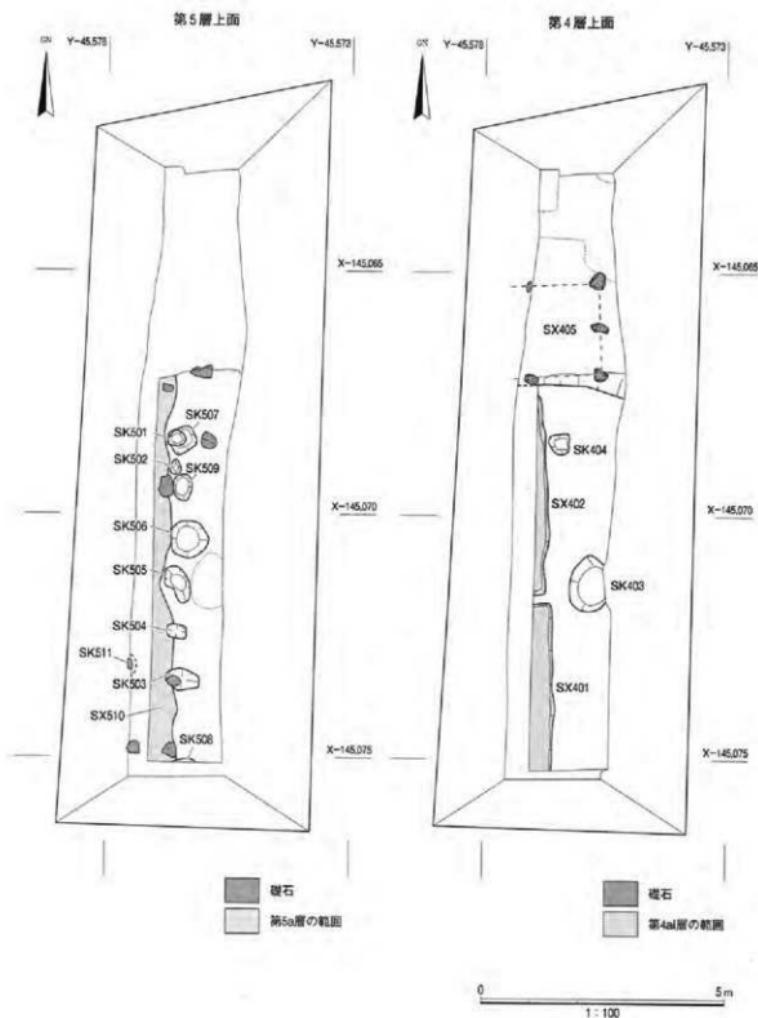


図6 第5層上面・第4層上面の造構

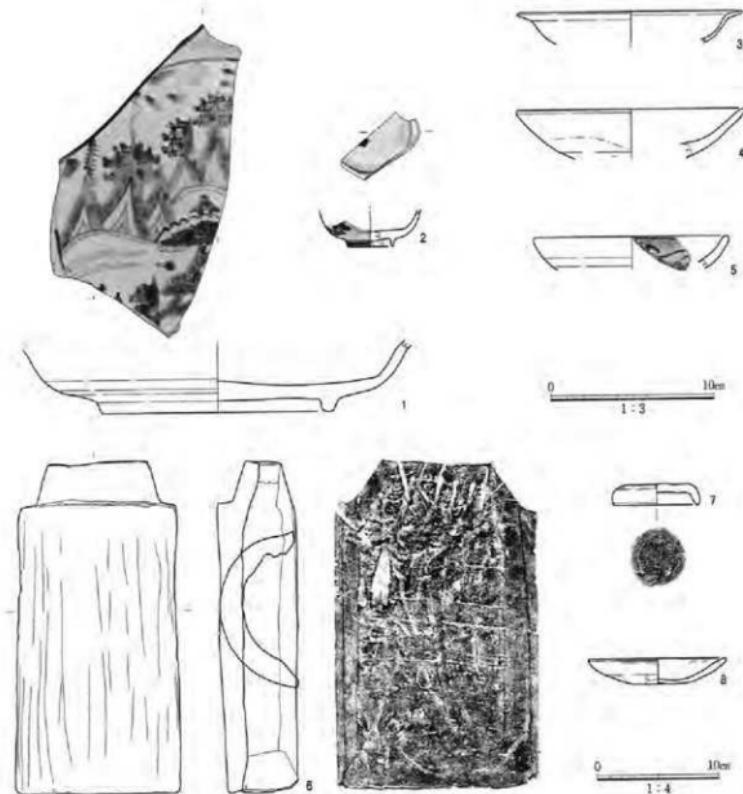


図7 遺構出土の陶磁器
SK503(8)、SK504(1)、SK403(2~4・6・7)、SK220(5)

第2aiii層上面

第2aiii層上面で礎石と土壌が多数見つかった。これらの上に第2aii層の火災後整理の際の炭・焼土が堆積し、さらにその上を第2ai層で整地していた。礎石の中には上面が焼けているものがあり、ここで見つかった遺構は火災で被災したものと考えられる。図8に炭の分布範囲を斜線の網掛けで示した。礎石は長径が0.2~0.5mで、大きさや形状にばらつきがあるが、上面の高さはほぼ同じであった。土壌の形状は平面が円形、椭円形、隅丸長方形、細長い溝状などさまざままで、規模も長径1.4~0.1m、深さが0.1~0.2mとばらつきがあるが、いずれも礎石や石組を据えた穴であったと考えられる。

これらの遺構の配置を見ると、SK220・219・218・216・227・207・208・209・210・224・222がほぼ一列に並び、この線上に5個の礎石が握わっている(SA250)。このような南北の並びは他にも

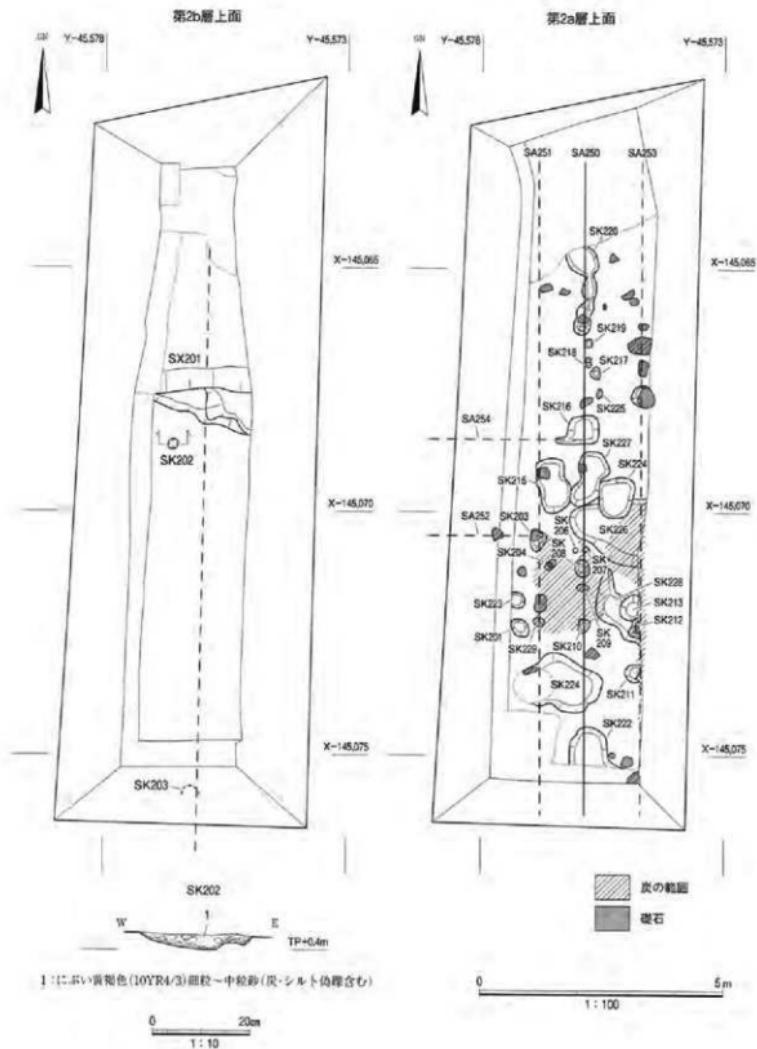


図8 第2a面層上面・第2b層上面の構造とSK202断面図

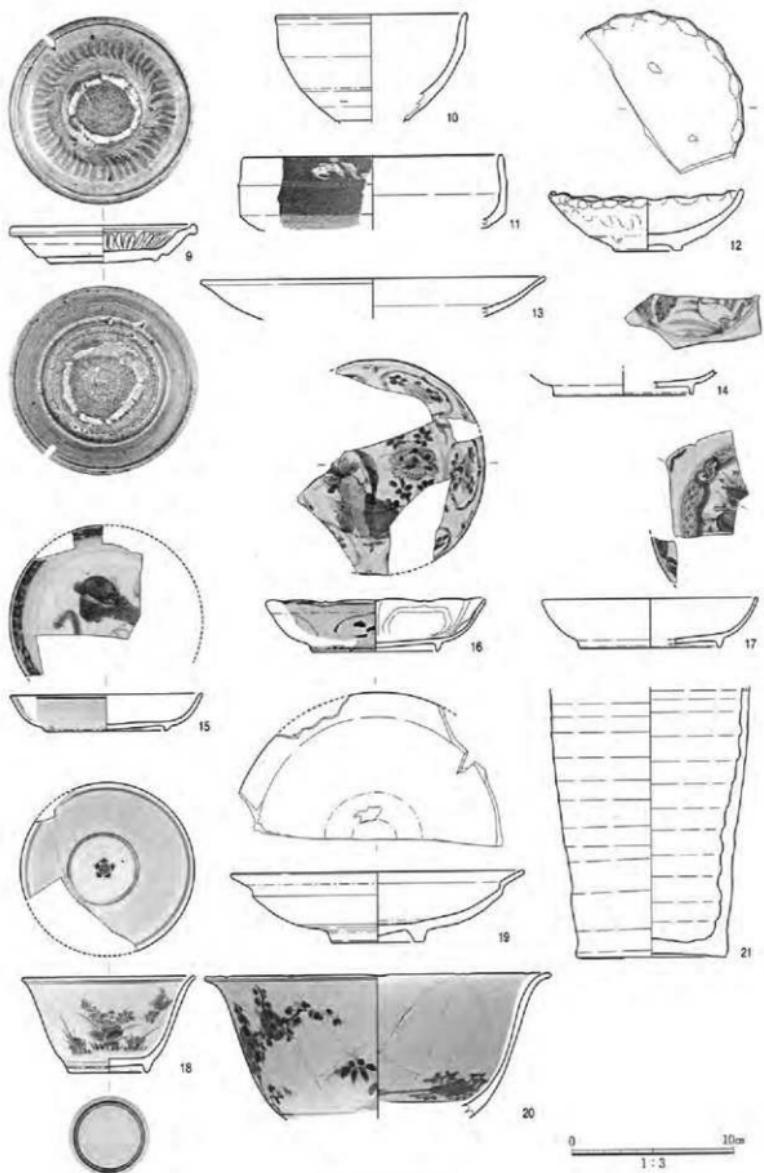


図9 SX201出土の陶器

2列認められる。SA250から西へ約0.9mの位置に、SK215・203・229と5個の礎石で構成されるSA251がある。ただし北壁の礎石は、SK215までの間に現状では遺構がないので、SA251とは別のものであるかもしれない。

このSA251を構成するSK203は礎石が据えられていて、この礎石の西約0.9mの位置に、もうひとつ礎石がある。これらふたつの礎石の中心を通る直線SA252は、SA251と直交しており、SA251の一部とSA252で建物を構成していた可能性がある。

また、SA250から東へ約1.2mの位置に礎石6個とSK226・213・212・211で構成されるSA253がある。ところで、SA250のSK216は方形の平面形であるが、南西隅部分が細い溝状で、SA250と直交方向の西側に飛び出している(図8ではこの方向をSA254と表記)。SA250のSK220も溝状であるが、SA250とはほぼ同じ方向である。SA254やSK220が壁などの痕跡であるなら、SA254とSA250は同じ建物の可能性がある。SA254を延長すると、図5の西壁断面の9の地層の、20cmほど落ち込む部分にある。あるいはSX405のような建物基礎固めの整地がここでも行われていたのかもしれない。

そして順序の項でも述べたように、第2層の整地が東半と西半に分かれ、ちょうどSA250あたりに両整地の境目がくることから、SA250は堀や柵といった敷地境の区画施設の可能性が考えられる。

遺物はSK220から出土した瀬戸美濃焼陶器志野皿5を図示した。17世紀前半のもので、下位層からの混入品であろう。このほか、SK213・228から土師器皿、SK215から轍羽口・鉄釘・近世瓦、SK226から近世瓦、SK216から壁が出土したが、細片のため図化し得なかった。これらの遺物は17世紀後半頃のものと考えられる。

c)各層出土の遺物(図11・12)

第5層は第5b層のみ遺物が出土した。中世末期の軒丸瓦や土師器皿と瓦器、銅錢、中国産青花碗30が出土した。豊臣期のものである。

第4層は豊臣期の遺物が出土した。このうち第4b層出土の中国産白磁型押輪花皿33と中国産青花輪花碗32、第4ai層のSX402から出土した巴文軒丸瓦41を図示した。

第3層の遺物のうち、肥前陶器灰釉碗28、ベトナム産陶器長胴瓶口縁25、中国産青花ひだ皿31・中国産青花模頭碗35を示した。豊臣後期のものである。

第2層のうち、第2b層出土の土師器手捏ね小壺38(俗につけつぼと呼ばれる。〔川村紀子2008〕)と、肥前陶器灰釉滑縁皿26を示した。26は全面に施釉し、見込みと疊付に3個ずつ目跡が残る。これらは17世紀後半までのものである。

第2a層は、土師器焼塩壺39・焰焰40、中国産青花輪花折縁芙蓉手皿29、中国産青花寿字皿34、肥前陶器山水文皿36、肥前磁器染付大皿37を示した。36の高台にはスタンプが押されている。これらは17世紀後半までのものである。

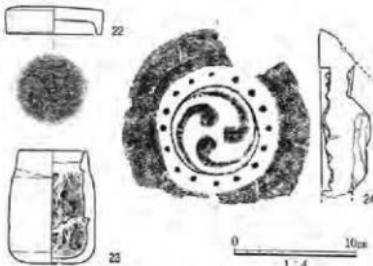


図10 SX201出土の土師器・瓦

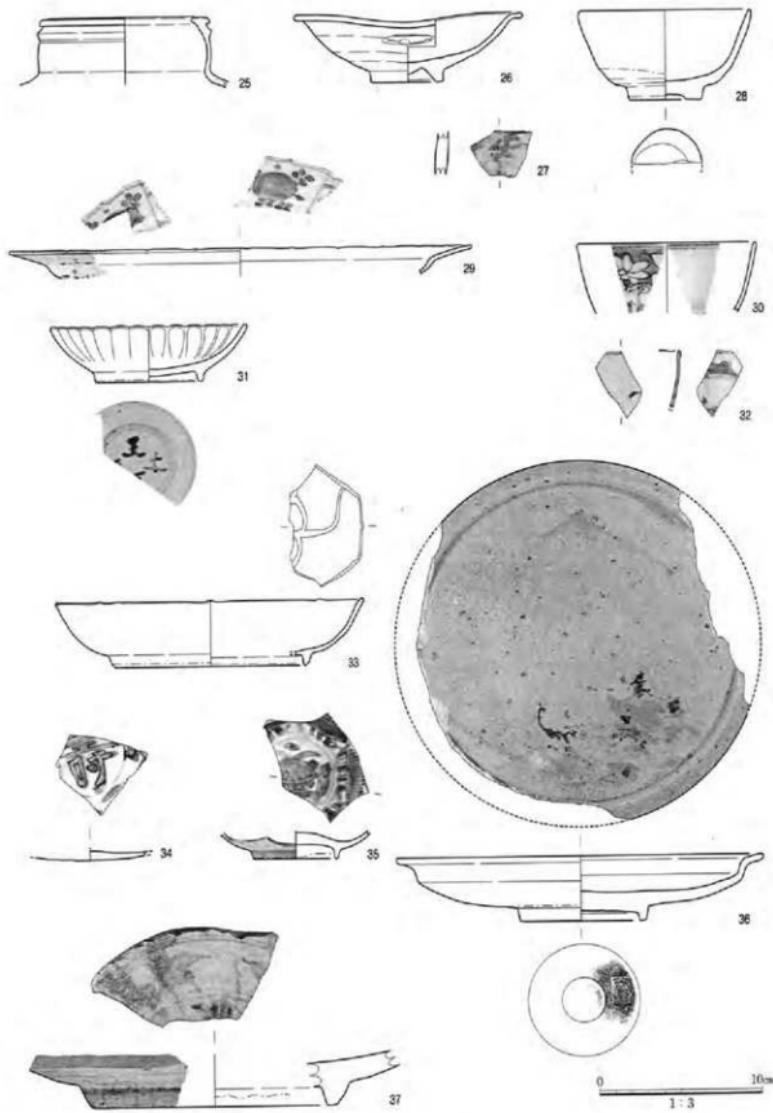


図11 各層出土の陶磁器
第5b層(30)、第4b層(32・33)、第4ai層(27)、第3層(25・28・31・35)、第2b層(26)、第2a層(29・34・36・37)
第5b層(30)、第4b層(32・33)、第4ai層(27)、第3層(25・28・31・35)、第2b層(26)、第2a層(29・34・36・37)

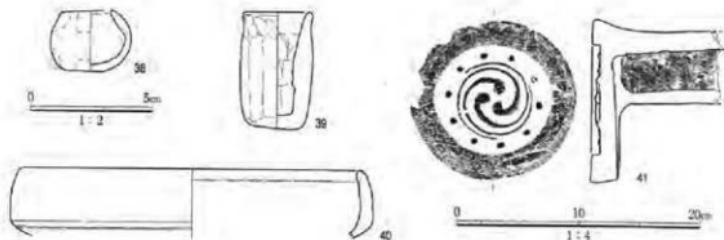


図12 各層出土の土器・瓦
第4a層(41)、第2b層(38)、第2a層(39・40)

iii) 遺構と遺物の検討

今回検出した豊臣期の3面のうち、第3層上面と第4層上面は豊臣後期で、第3層上面では遺構は見られなかったものの被災の痕跡が認められ、第4層上面で建物礎石が見つかった。また、徳川期の2面のうち、第2a層上面は18世紀前半の火災を受けていたことがわかった。これら考古学的に判明した各面の状況を歴史事象と照らし合わせて考えてみると、第2a層上面の焼土が大坂城下町が広範囲にわたって被災したという1724年の妙知焼に、第3層上面の焼土または第4層上面が、1615年の大坂夏ノ陣の被災面、あるいは1614年の大坂冬ノ陣の被災面に相当する可能性がある。

また、第6層の自然堆積層の上に積まれた第5層の整地層と、第5層上面遺構から出土した遺物は、豊臣前期にも後期にも見られるもので、この地の開発の開始が豊臣前期に遡る可能性を示す。

そして、今回の各面で敷地境と考えた整地の境界や区画施設の位置は、ほとんど同じ位置を踏襲しており、また南壁断面を見ると、近世後半の地層や近・現代の地層の中にも南北の区画溝とみられる痕跡が観察できる。さらに図1の調査地周辺の敷地を見ると、第2a層上面のSA250の延長線上に敷地境がのるものも見受けられ、中世末～近世の町割が現代でも引き継がれている可能性が考えられる。

しかし、こういった可能性を証明するには、今回の調査では範囲も狭く、また地層や遺構・出土遺物から得られた限られた情報の中では、決定的な証拠を押さえることができなかった。

3)まとめ

今回の調査では、豊臣期3面と徳川期2面の遺構面を検出し、それぞれの時期の敷地境の痕跡を見つけることができた。こういった情報はこの地域の歴史的景観の復元とその変遷を考える上で重要な資料となる。

今後の周辺の調査成果とあわせてさらなる検討を行いたい。

引用参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「大坂城下町跡発掘調査(OJ06-5)報告書」:『大阪市埋蔵文化財包載

地発掘調査報告書(2006)』pp.229-238

大阪市文化財協会2004、「大坂城下町跡」Ⅱ

大阪文化財研究所2012、「中央区今橋三丁目における建設工事に伴う大坂城下町跡発掘調査(OJ11-2)報告書」

川村紀子2008、「つぼつぼー江戸時代のミニチュアの壺ー」: 大阪市文化財協会編『薪火』135号、pp.6-7

第5層上面(南から)



南壁地層断面
(北から)



第2aⅢ層上面(南から)



中央区北久宝寺町二丁目における建設工事に伴う

大坂城下町跡発掘調査(OJ12-9)報告書

調査個所 大阪市中央区北久宝寺町2丁目5-15
調査面積 24m²
調査期間 平成25年3月8日～平成25年3月13日
調査主体 公益財團法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、松本啓子

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は船場地域を南北に通る三休橋筋に面し、久太郎町と北久宝寺町の通の中間地点に位置する(図1)。豊臣期から三休橋筋は船場を南北に貫く幹線道路として存在し、この通りに面した今回の調査地は大坂城下町の中でも重要な場所にあたる。

本調査地周辺では、OJ05-9・07-8・08-5・09-1・12-4・5次調査などの発掘調査がある。これらの調査によると、この地域で最初に人の活動痕跡が確認できるのは弥生時代末～古墳時代で、各調査で当該期の遺物が散見されたほか、OJ09-1次調査では弥生時代末～古墳時代前期の土壙が見つかった[大阪文化財研究所2009]。その後は、中世末～近世初頭頃から遺構・遺物が多く見られるようになる。豊臣秀吉の大坂城下町に伴い、このあたりも開発されたとみられ、徐々にではあるが、土地利用のようすが明らかになりつつある[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006・2009・2010、大阪文化財研究所2012]。

平成24年12月10日に行われた大阪市教育委員会の試掘調査の結果、現地表下2.45m以下で豊臣期～徳川期の遺物包含層と遺構面が認められた。関係諸機関との協議を経て、遺構・遺物の分布状況やその年代、当時の土地利用のようすを把握する発掘調査を行うことになった。

平成25年3月7日に現地で安全面の諸注意事項などについて打合せを行い、調査地内に東西8m、南北3mの調査区を設定した(図2)。事業者によって調査区を現地表下2.45mまで重機掘削した後、3月8日から調査を開始した。以下、人力で慎重に遺構面を精査して遺構・遺物の検出を行い、適宜、実測図・写真などの記録を取り、現地表下3.1mまでを調査した。これより下は重機で部分的な深掘りを行い、おもに地層の堆積状況について現地表下3.7mまでを確認した。平成25年3月13日に現地に



図1 調査地位置図



図2 調査区配置図

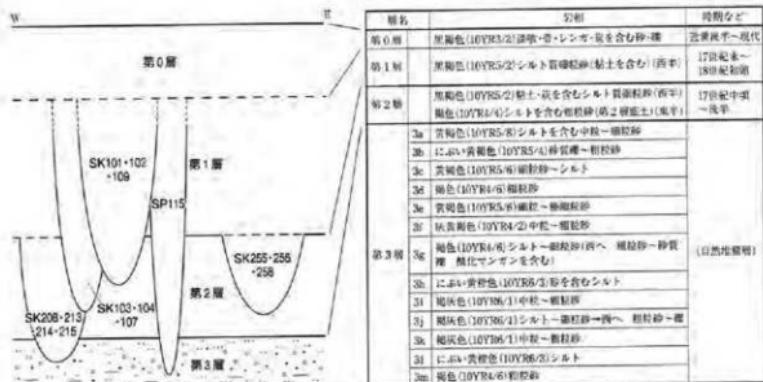


図3 地層と造構の関係図

おけるすべての作業を終え、同日、機材を撤収して調査を完了した。

なお、本報告に用いた標高はTP値(東京湾平均海面値)で、本文・図中ではTP+○mと表記した。また、方位は現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。

2) 調査の結果

調査地における現地表面はほぼ平坦で、標高はおおよそTP+3.4mである。TP+1.0mあたりまでを重機で除去し、これ以下を調査した。

i) 層序(図3・4)

第0層：事業者側によって掘削された近世後半～現代の盛土や擾乱で、層厚は245cm前後である。

第1層：粘土を含む黒褐色(10YR5/2)のシルト質細粒砂層で、層厚は最大75cmある。調査区の南壁中央部と北壁中央の一部で観察を行い、造構の有無を確認した。本層からの出土遺物はないが、本層上面の造構や本層より下位にある造構の時期から、本層は17世紀末～18世紀初頭頃の整地層と考えられる。

第2層：17世紀中頃～後半の整地層で、調査区中央部のSK214付近でいったん途切れ、ここを境に西半と東半で岩相に若干の差異が見られた。後世の削平のため、明確な生活面は認められなかった。

東半の第2層は、シルトを含む褐色(10YR4/4)の粗粒砂層で、最大層厚は20cmある。

西半の第2層は、粘土・炭を含む黒褐色(10YR5/2)のシルト質細粒砂層で、最大層厚は50cmである。

第3層：水成の自然堆積層で、3a～3mの13層に細分した。第3a～3e層は調査区のほぼ全域を掘り下げ、第3e層以下は安全のため、図2に示した深掘りトレンチで確認した。

第3a層はシルトを含む黒褐色(10YR5/8)の中粒～粗粒砂層で、最大層厚は50cmである。第3b層はにかく黄褐色(10YR5/4)の砂質礫～粗粒砂層で、最大層厚は36cmである。第3c層は黄褐色(10YR5/6)

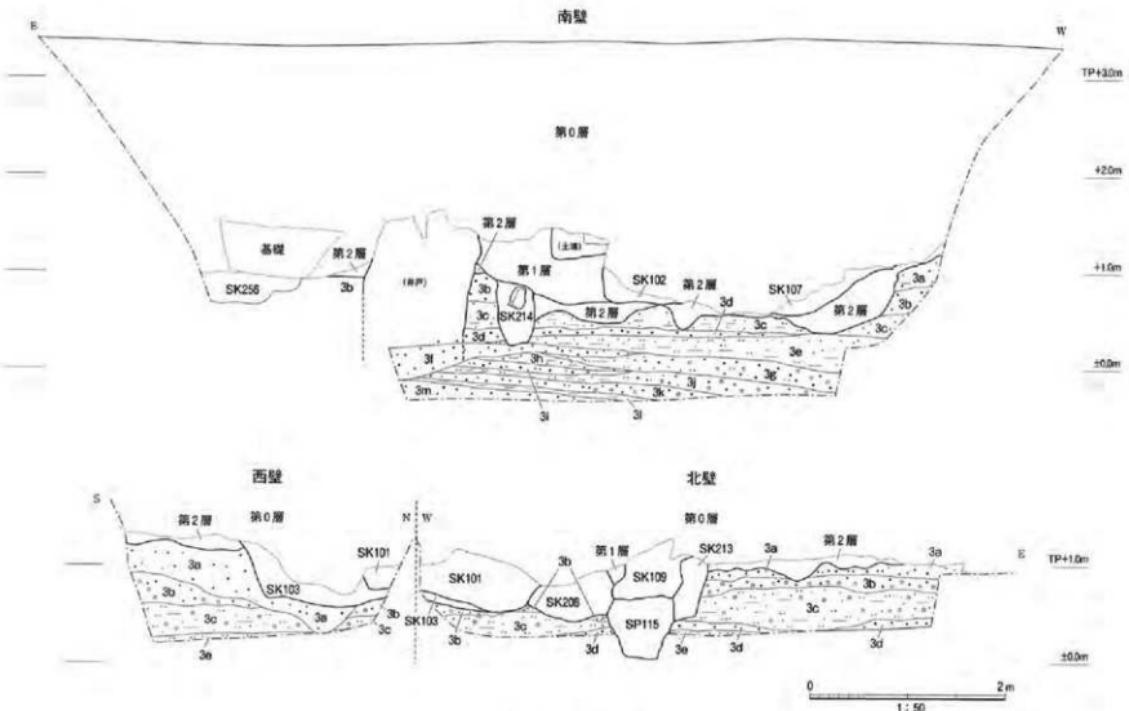


図4 地層断面図

の細粒砂～シルト層で、最大層厚は45cmである。第3d層は褐色(10YR4/6)の粗粒砂層で、最大層厚は14cmである。第3e層は黄褐色(10YR5/6)の細粒～極細粒砂層で、最大層厚は40cmである。第3f層は灰黃褐色(10YR4/2)の中粒～粗粒砂層で、最大層厚は33cmである。第3g層は褐色(10YR4/6)のシルト～細粒砂層で、西方へ向い酸化マンガンが目立つ粗粒砂～砂質礫へと側方変化する。最大層厚は22cmである。第3h層はにぶい黄橙色(10YR6/3)の砂を含むシルト層で、最大層厚は13cmである。第3i層は褐灰色(10YR6/1)の中粒～粗粒砂層で、最大層厚は10cmである。第3j層は褐灰色(10YR6/1)のシルト～細粒砂層で、西方へ向い粗粒砂～礫へと側方変化する。最大層厚は20cmである。第3k層は褐灰色(10YR6/1)の中粒～粗粒砂層で、最大層厚は15cmである。第3l層はにぶい黄橙色(10YR6/3)のシルト層で、最大層厚は6cmである。第3m層は褐色(10YR4/6)の粗粒砂層で、層厚は20cm以上ある。第3層から遺物は出土していない。

ii) 遺構と遺物

a) 17世紀中頃～後半の遺構と遺物(図5、図版1枚目中・下段)

第2層上面で土壌SK208・213～215・255・256・258が見つかった。第2層の岩相の違いを反映して、土壌は大きく2群に分かれて分布し、調査区西半にあるSK208・213～215は、東半にあるSK255・256・258に比べ深く掘り下げられている。

SK208は、東西の幅が1.4m以上、南北が1.5m以上、深さは現状で0.5mの土壌である。SK103によって切られるが、隅丸方形か隅丸長方形の土壌とみられる。埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質砂で、巨礫・炭を含む。遺物は出土していない。

SK213も、SK208とSK103によって切られた土壌である。東西は1.0m以上、南北0.2m以上、深さ1.1mの土壌である。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂で、炭・巨礫・酸化マンガンを含む。肥前磁器染付碗1・2など17世紀中頃～後半の遺物が出土した。

SK214は南壁の中央部にかかる土壌で、東西約0.4m、南北0.3m以上、深さ0.7m以上の土壌である。埋土は黒褐色(10YR3/2)砂質シルト～シルトで、炭を含む。肥前磁器染付碗3など17世紀中頃～後半の遺物とともに土師器焼炉4がほぼ完全な形で出土した。

SK215は擾乱によって大きく削られていたが、平面の痕跡と断面観察から、東西0.3m以上、南北0.8m以上、深さ0.4m以上の規模の土壌とわかった。埋土はにぶい黄橙色(10YR6/4)シルトである。肥前磁器など17世紀後半を中心とした遺物が出土した。

東半のSK255は、SK258によって一部を切られているが、東西約0.9m、南北約1.1m、深さ約0.3mの梢円形の土壌である。埋土はにぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質細粒砂で、炭を含む。肥前磁器や戸内美濃焼、備前焼など17世紀後半の遺物が出土した。

SK256は、東西1.4m以上、南北1.2m以上、深さ約0.3mの円形の土壌である。埋土はにぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質細粒砂で、炭を含む。近世の土師器焼成と古墳時代前期の土師器壺の破片が出土した。

SK258は、東西約0.7m、南北0.6m以上、深さ約0.1mの円形の土壌である。埋土はにぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質細粒砂で、炭を含む。近世の土師器皿が出土した。

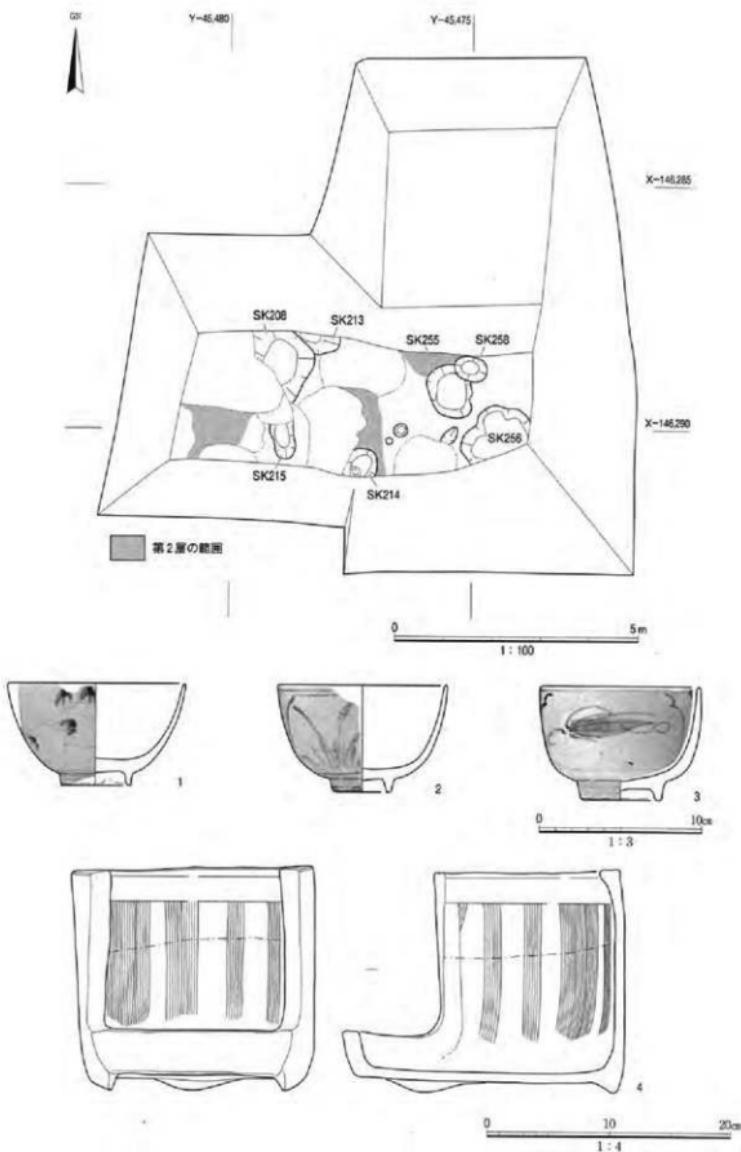


図5 17世紀中頃～後半の造構と遺物
SK213(1・2), SK214(3・4)

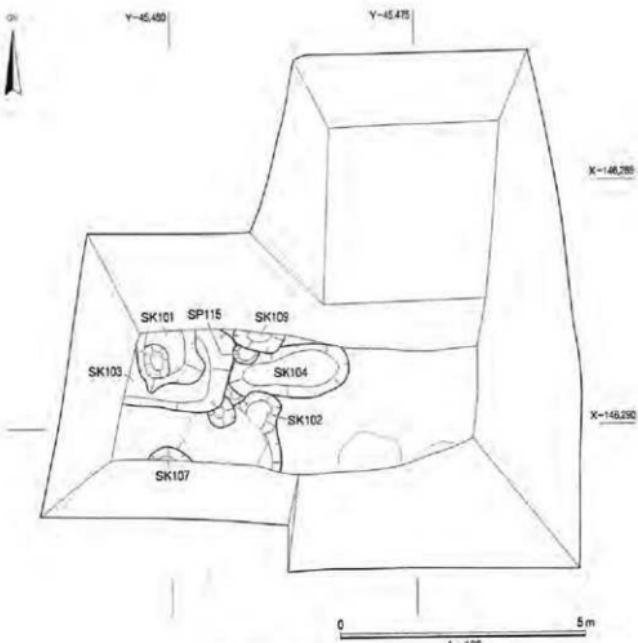


図6 17世紀末～18世紀初頭の遺構

b) 17世紀末～18世紀初頭の遺構と遺物(図6・7、図版1枚目下段、図版2枚目)

遺構は調査区の西半のみに分布し、土壤がいくつも切りあった状態で見つかった。

SK101は、東西約1.5m、南北1.9m以上、深さ0.6m以上の、平面長方形の土壤である。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルトで、礫や大量の加工痕跡のある骨を含む、廃棄土壤とみられる。軟質施釉陶器髪入11や肥前磁器染付碗6など、17世紀末～18世紀初頭頃の遺物が出土した。

SK102は、攤混により西半が切られている土壤で、東西1.0m以上、南北1.7m以上、深さ0.4m以上である。平面は隅丸長方形か隅丸正方形を呈する。埋土はにぶい橙色(7.5YR7/2)シルト～細粒砂で、加工痕跡のある骨を大量に含む。SK101同様、廃棄土壤である。肥前磁器など、17世紀末～18世紀初頭の遺物が出土した。

SK103は、SK101によって北西部が切られている土壤で、東西2.0m以上、南北1.7m以上、深さが0.7m以上、平面は隅丸長方形を呈する。埋土は黒褐色(10YR3/1)シルト～シルト質砂で、礫・炭を含む。土師器培焼14や丹波焼擂鉢13、肥前磁器染付皿12など17世紀末～18世紀初頭の遺物が出土した。12は蛇の目凹形高台をもつ皿の初期のものである。

SK104は、東西約2.5m、南北約1.1m、深さ0.3m以上の、平面が梢円形の土壤である。埋土は黒褐色(10YR3/1)シルト～シルト質砂で、礫・炭を含む。土師器皿9・10、肥前陶器碗8、肥前磁器染付

碗5・白磁碗7などの17世紀末～18世紀初頭の遺物が出土した。

SK107は、平面の痕跡と南壁から確認できた土壤で、東西1.2m以上、南北0.3m以上、深さ0.5m以上である。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト～砂質シルトで、炭・砂を含む。土師器の火鉢や近世瓦が出土した。

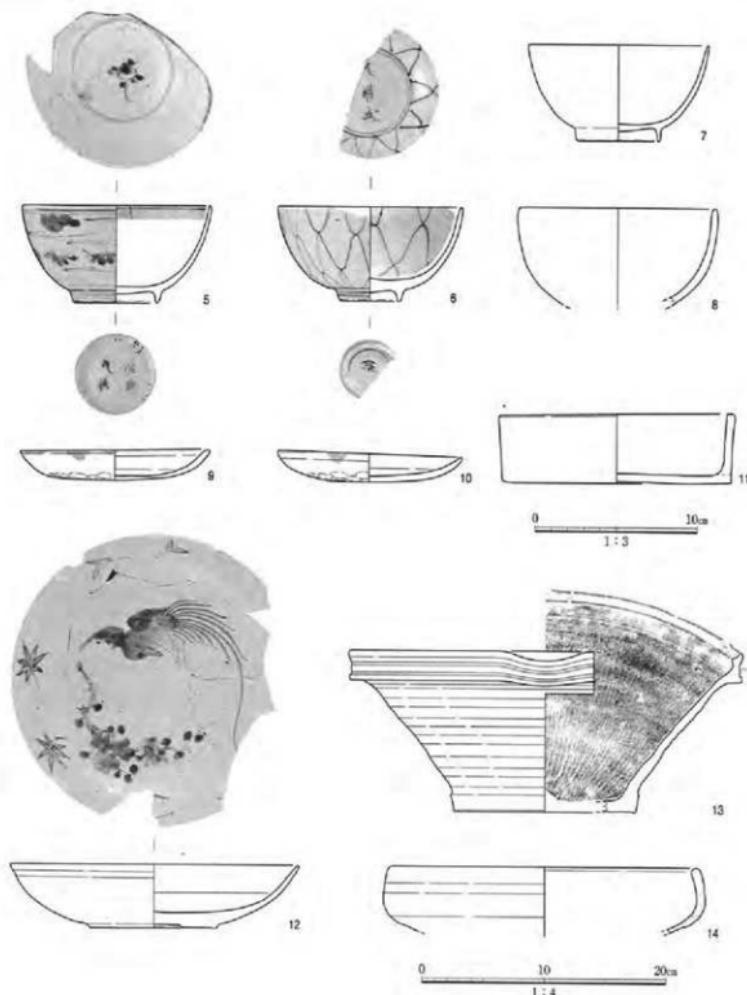


図7 17世紀末～18世紀初頭の遺構出土遺物
SK101(6・11)、SK103(12・14)、SK104(5・7～10)

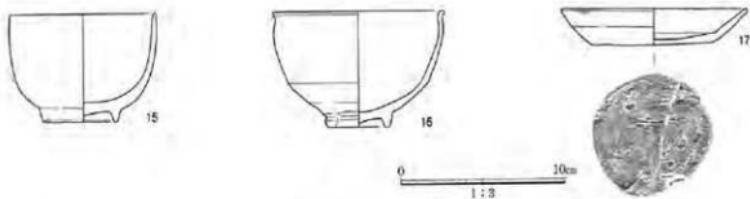


図8 第2層出土遺物

SK109は、東西約1.0m、南北0.4m以上、深さ0.6m以上の、平面長方形の土壙である。埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質砂～砂質シルトで、炭・焼土・礫を含む。近世土師器や備前焼、肥前磁器の破片が出土した。

SP115は、東西約0.5m、南北0.4m以上、深さ0.4m以上的小穴で、埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト～細粒砂で、礫を含む。柱穴とみられるが、調査区内では組み合う柱穴は見つかっていない。近世土師器、備前焼、肥前陶器や肥前磁器といった17世紀末～18世紀代の遺物とともに古代の須恵器の破片が出土した。

c) 第2層出土の遺物(図8)

図8に第2層から出土した肥前磁器白磁碗15、肥前陶器灰釉碗16、土師器皿17を示した。これらは17世紀半ば～後半のもので、第2層の時期を示す。

本調査では第3層から遺物は出土していないが、SK258から古墳時代前期の土師器が出土したことや、周辺の調査でも弥生時代末～古墳時代の土器が散見されることから、第3層がこの時期の可能性がある。

d) SK101・102から出土した骨について(写真1、図版2枚目)

SK101・102から、ウシの骨や角がまとまって出土した。これらの土壙から出土した骨には加工痕が認められるものがあり、この地で骨加工していたことがわかる。

大坂城下町跡では既往の調査でこうした骨加工の廃棄物をまとめて廃棄した土壙が検出されており、豊臣期から骨加工の工房が存在したことが窺える[久保和志1998・1999、大阪市文化財協会2004など]。このうち、OJ11-5次調査では、17世紀代の骨加工の工程が復元できる資料が出土し、原材

料の脛骨から粗材、製品である双六駒までの工程が復元されている[大阪市教育委員会・大阪市博物館協会大阪文化財研究所2013]。今回出土した骨資料は、粗材まで加工が進んだものが大半を占める(図版2枚目)が、僅か1点だが製品を推定できる資料が出土している。ボタン状の未製品である(写真1)。長辺3.3cm、短辺1.2cm、厚さ3.5mmで、2つの未製品を連ねたまま加工している。裏側の穴を加工する際に表側まで穴が貫通してしまった為、廃棄された可能性がある。このようなボタン状の製品加工がわかる資料が大坂城下町跡で出土

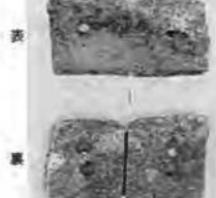


写真1 ボタン状未製品(ほぼ原寸大)

したのは初めてで、18世紀初頭の産業構造を窺い知ることのできる好資料といえよう。

2)まとめ

今回の調査では、豊臣期に形成された地層を確認することはできなかったが、17世紀半ばから18世紀初頭の土壌からボタン状の製品など骨製品作りの加工の過程を示す遺物が出土した。また、古墳時代前期の遺物が出土したこと、周辺の調査で推定されている当該期の集落存在の可能性を後押しする。

このように今回の調査では、この付近の歴史景観を復元する好資料を得た。周辺の調査結果とも合わせてさらなる検討を行いたい。

参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006、「大坂城下町跡(OJ05-9)発掘調査」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2005)』pp.172-192
- 2009、「大坂城下町跡発掘調査(OJ07-8)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)』pp.103-114
- 2010、「大坂城下町跡発掘調査(OJ08-5)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』pp.183-198
- 大阪市教育委員会・大阪市博物館協会・大阪文化財研究所2011、「大坂城下町跡発掘調査(OJ09-1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2009)』pp.47-66
- 2013、「大坂城下町跡発掘調査(OJ11-5)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)』pp.229-248
- 大阪市文化財協会2004、「大坂城下町跡Ⅱ」
- 大阪文化財研究所2012、「中央区北久宝寺二丁目における建設工事に伴う大坂城下町跡発掘調査(OJ12-4)報告書」
- 久保和志1998、「住友銅吹所の動物遺体」:大阪市文化財協会『住友銅吹所発掘調査報告』、pp.339-337
- 1999、「近世大坂の骨細工」:『動物と人間の考古学』、pp.245-262

調査地全景(西から)



17世紀中頃～後半の
土壙群(南から)



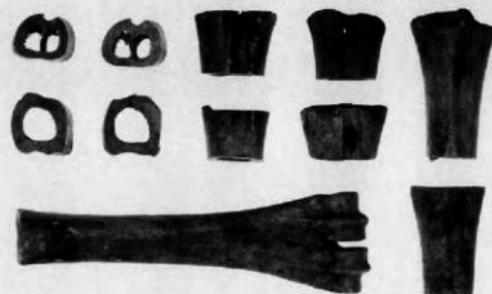
17世紀末～18世紀初頭の
遺構(北西から)



加工痕のあるウシの骨 1



加工痕のあるウシの骨 2



加工痕のあるウシの骨 3



中央区高麗橋一丁目における建設工事に伴う
大坂城下町跡発掘調査(OJ12-10)報告書

調査個所 大阪市中央区高麗橋1丁目16-4・17・21-2
調査面積 約30m²
調査期間 平成25年2月12日～2月16日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、平田洋司

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は高麗橋の西詰、豊臣秀吉が造った城下町船場の北側に位置する(図1)。高麗橋通に面する街区以北は、伏見町・道修町以南に先行して豊臣前期に造られたという考えがある[松尾信裕2004]。

既調査では南北20mのAZ88-2次において、TP+約2.4mで大坂冬ノ陣(1614年)と推定された遺構面、TP+1.8~2.0mで礎石建物が検出された。西30mには、大坂城下町跡における調査研究の二期となったAZ87-5次調査地がある[大阪市文化財協会2004]。AZ87-5次では豊臣前期の堀や溝、豊臣後期の建物群、元和6~7(1620~1621)年頃に廃棄されたと推定される3,000点に及ぶ木簡が出土した土壌などがあった。木簡には魚の名を記したもののが大量にあり、同様の木簡が出土したOS86-20次調査とあわせ、豊臣後期から徳川初期の間、この場所に魚市場があったことがわかった。

今次は、大阪市教育委員会の試掘結果を受け、市教委学芸員の立会いの下、事業者によって地表下1.8~1.7mまで掘り下げた後、本調査に着手した。調査対象は南北10m、東西3mである(図2)。徳川初期の地層から豊臣末期の第6層上面までを平面的に調査し、以下は東壁にトレンチを設けて掘り下げた。実施したGPS測量の成果に不安があるため、本報告では1/2,500大阪市デジタル地図から世界測地系に基づく座標値と座標北を使用した。標高はTP値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

現地表の標高はTP+約4.5mである。すべて整地層である。

第1層：にぶい黄褐色(10YR6/4)中粒砂層で、層厚は8cmである。



図1 調査位置図



図2 調査区位置図

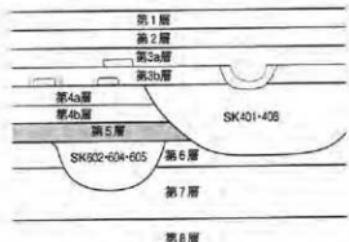


図3 地層と遺構の関係図

第2層：浅黄色(2.5Y7/4)中粒砂層で、層厚は12cmである。肥前磁器白磁皿22は、東壁トレンチの第2層以下の出土である。

第3層：シルト偽礫を多く含む褐色(10YR5/1)粗粒砂層などの第3a層と、にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト偽礫層などの第3b層からなる。第3a層には焼土片が混じる。層厚は第3a層が18cm、第3b層が15cm以下である。第3b層から中国産色絵皿21が出土した。第3層から肥前磁器は出土していない。

各層上面は生活面と推定され、第3b層上面には鉢臼と挽臼が掘えられていた。

第4層：シルト偽礫を含む灰色(5Y4/1)シルト質粗粒砂層などの第4a層と、同様の偽礫を含む灰オリーブ色(5Y4/2)粗粒砂・細礫層などの第4b層からなる。第4a層の上面には炭層がある。層厚は第4a層が12cm以下、第4b層が12~18cmである。第4b層からは、肥前陶器の盃茶碗12と絵唐津皿13が出土した。第4層から肥前磁器は出土していない。

第4a層上面にはSB409やSK401などがあった。

第5層：大坂冬ノ陣の焼土層で、層厚は15~28cmである。第5層からは土師器皿9、備前焼擂鉢11、輪花の肥前陶器皿10が出土した。

第6層：にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト層や中粒砂層から成り、最大層厚40cmである。第6層上端の高さは北西隅でTP+2.25m、東壁中央でTP+2.00mであり、冬ノ陣時の生活面は西側が高かった可能性がある。

第7層：灰オリーブ色(5Y5/3)粗粒砂層で、細礫を含む。層厚は70cmである。第7層からは見込に印花文がある中国産青磁碗6、同青花碗7、肥前陶器碗8が出土した。豊臣後期の盛土である。

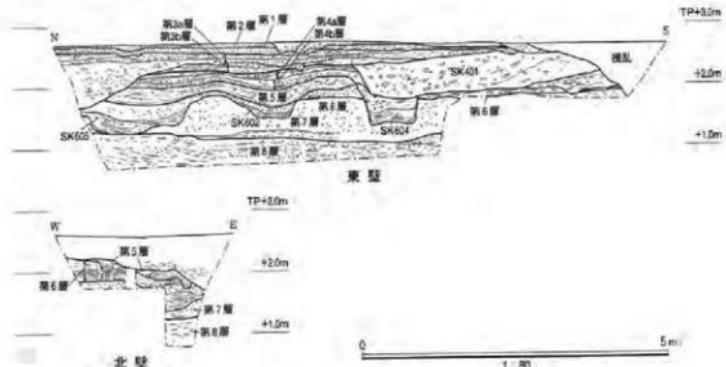


図4 東・北壁地層断面図

第8層：黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粗粒砂層で、細砾を含む。層厚は60cm以上で、下面是TP+0.7~0.8m以下である。土師器の杯1・2、壺3、中国産白磁皿4、瀬戸美濃焼天目碗5が出土した。第8層はAZ87-5次調査の第8層に対比される可能性がある。AZ87-5次調査の第8層は15~16世紀代の遺物が出土し、下面の高さはTP+0.5~0.9m付近であった。

ii) 遺構と遺物(図5~7)

a. 第6層上面(写真上)

第6層上面の遺構にはSK601~606、SD607がある。土壤のうち、SK602・604・605はいわゆるゴミ穴で、埋土に炭の薄層が挟まれる。全形は不明だが、東壁断面からSK602は南北長1.4m・深さ0.4m、SK604は南北長1.0m・深さ0.7m、SK605は南北長1.8m以上・深さ0.5mである。豊臣末期で、いずれも冬ノ陣より前に埋まっている。SD607は調査区南の東西溝で、方向は現在の町割に合っている。幅0.45m、深さ0.2mである。

厚い焼土層に覆われることから近くに建物があったと推測されるが、調査区内では明確な建物跡は検出していない。

b. 第4a層上面(写真中)

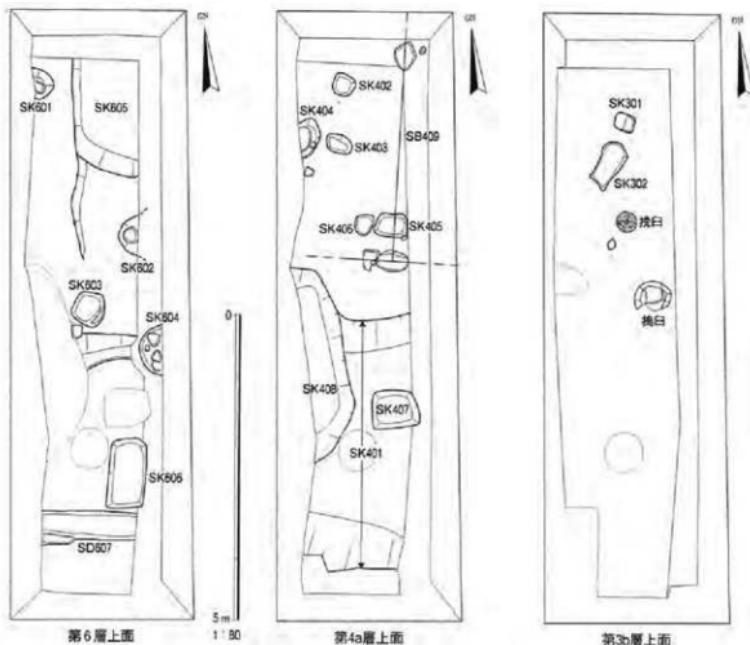


図5 遺構平面図

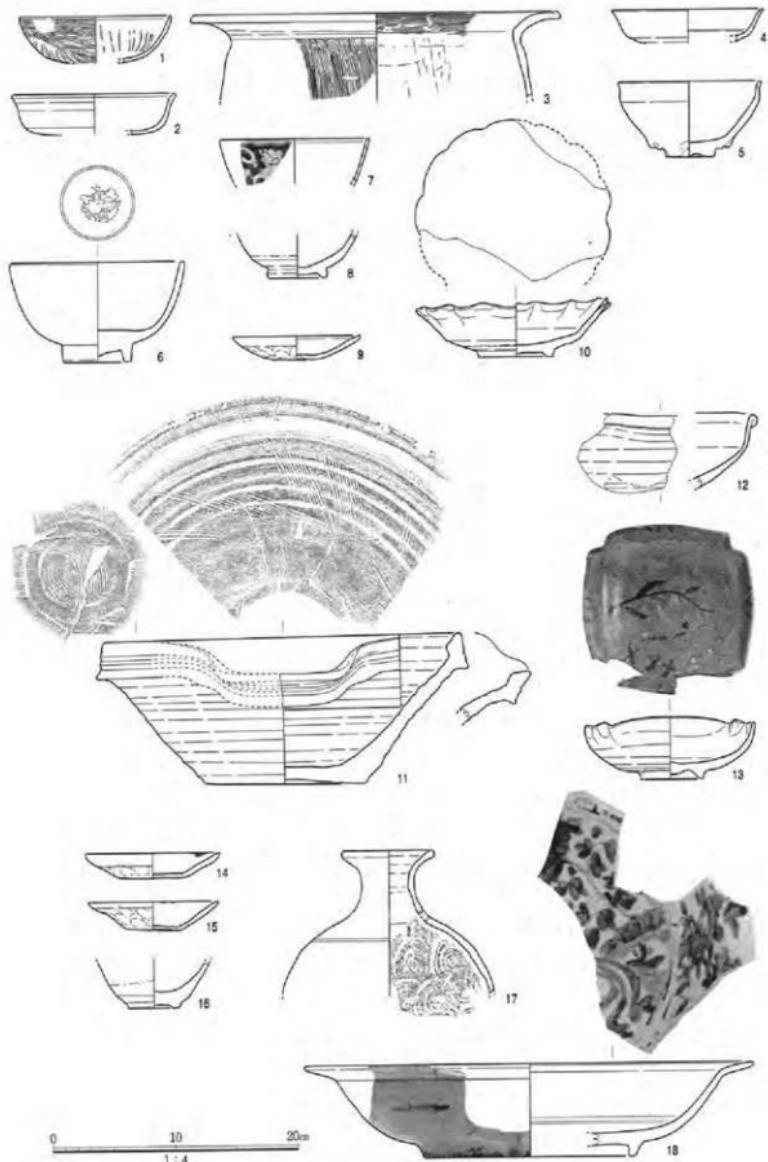


图6 出土遗物实面图(1)

第8层(1~5)、第7层(6~8)、第5层(9~11)、第4b层(12~13)、SK401(14~18)

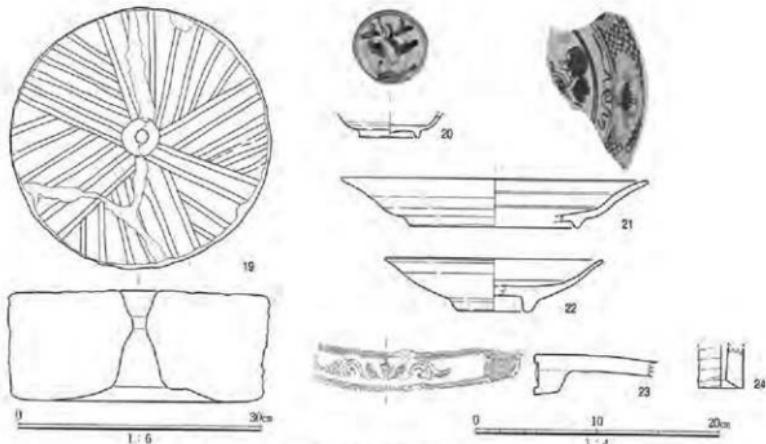


図7 出土遺物実測図(2)

第3a層(19)、第3b層(21)、北・東壁トレーニング(20・22・23)、攪乱(24)

第4a層上面には北側のSB409と、南半を占めるSK401・408などがある。SB409は柱間約3.4mになる。礎石は北側のもので長さ46cm、南側のもので長さ52cmである。SK401は南北長約4.2m、深さ0.6mである。火事後の廃棄土壌で、埋土に大量の焼けた瓦や焼土を含む。SK401からは土師器皿14・15、中国産青花大皿18、肥前陶器の碗16と瓶17が出土した。また西壁際のSK408は南北長3.2m、深さ0.7mである。

c. 第3b層上面(写真下)

第3b層上面には中央部に挽臼の下部と搗臼が据えられているのみで、他に顯著な遺構はない。二つの臼の間隔は0.9mである。挽臼(図7-19)は直径32.2cm、厚さ13.6cmである。搗臼は割れており、縁の一部が欠損している。直径は約60cmである。2種の臼は関係がありそうだが、他の用途に転用された状態の可能性もある。

d. その他の遺物

図7-20の中国産青花碗と23の軒平瓦は、北壁トレーニングからの出土である。また、図示した近代の磚子24は、東京都の旧汐留貨物駅跡地の調査で同形のものが報告されている[東京都埋蔵文化財センター2003]。

3)まとめ

今次の調査では魚市場を想起させる遺物や遺構は出土せず、AZ87-5次調査等の魚市場は当地点までは広がらず、両調査地の間に東限があったと推定される。

豊臣前期と後期の区別は明らかにできなかったが、豊臣期の整地層は船場城下町の中南部に比べて厚く、高麗橋通周辺の特徴と思われる。また、近接のAZ88-2次調査で冬ノ陣時と推定した遺構面

は今次の調査より高く、肥前磁器出現以前の徳川初期の遺構面の可能性がある。

参考文献

大阪市文化財協会2004、「大坂城下町跡」Ⅱ

東京都埋蔵文化財センター2003、「汐留遺跡」Ⅲ(第6分冊)、pp.126-128・249

松尾信裕2004、「大坂城下町の町割」：大阪市文化財協会編「大坂城下町跡」Ⅱ、pp.357-364

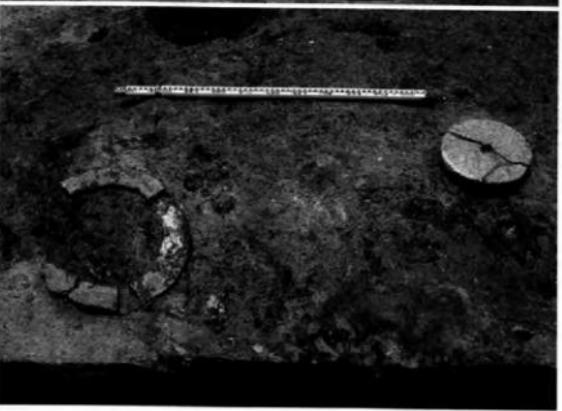
第6層上面
(北から)



第4a層上面
(北から)



第3b層上面
擣臼と挽白
(東から)



中央区淡路町二丁目～瓦町二丁目における建設工事に伴う
大坂城下町跡発掘調査(OJ12-11)報告書

調査個所 大阪市中央区淡路町2丁目14-2～瓦町2丁目71-6
調査面積 35m²
調査期間 平成25年2月27日～3月6日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、清水和明

1) 調査の経過

本調査地は堺筋の西に接する淡路町二丁目の南街区に位置し、大坂城下町跡の中央やや北寄りに当る。付近では比較的多くの調査が行われ、本調査地の西に接する敷地ではOJ07-3次調査地が、南はず向かいに背中合わせで接する敷地ではOJ92-33次調査地が、東50mではOJ06-1次調査地がある。OJ07-3次調査地[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008a]では大坂冬ノ陣の焼土を片付けた整地層(TP-0.2m付近)や17世紀中葉以降に進んだ町屋の開発を示す遺構(TP+0.2m付近)が確認された。OJ92-33次調査地では南部で大坂冬ノ陣の焼土層(TP+0.5m付近)が残るが、北部ではTP-1.0m付近まで近世の遺構や地層が続いている[大阪市文化財協会2004a]。OJ06-1次調査地[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008b]では大坂冬ノ陣の焼土層(TP+0.2m付近)のほか、上位に17世紀中葉から18世紀初頭に及ぶ数次の整地層と各々に伴う遺構を、下位では古代～豊臣後期の各時代の遺構群を検出している。このように、付近は古代から豊臣後期の城下町被災を経て徳川期の復興に至るまで、多くの成果を挙げている地域である。

本調査地では平成24年2月6日に大阪市教育委員会によって試掘調査が行われ、GL-2.5mで中世に遡る可能性のある瓦質土器が出土したことから、中近世の遺構・遺物の調査を主眼として2月27日から本調査を開始した。

試掘調査の結果からGL-2.5mまで重機による機械掘削を行い、以下を人力によって掘削して遺構検出を行い、図面・写真による遺構と遺物の記録作成を行って3月6日に調査区内での作業を終了し撤収した。

以下にその結果を報告する。本報告で示す標高はTP値(東京湾平均海面値)を用い、TP±○mと表



記した。方位は現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づいている。

2) 調査の結果

調査地はTP+3m付近で、ほぼ平坦な地形であるがわずかに南が低くなっている。以下に、調査で確認された地層を記述する。

i) 層序(図3・4)

第0層は現代のアスファルト舗装および整地層で、層厚は200~250cm程度である。

第1層：数次にわたる整地によって形成された地層で、基底の第1B層とその上位の第1A層に大別した。第1A層は上部から暗灰黄色(2.5Y4/2)礫質中粒砂層、オリーブ褐色(2.5Y4/3)極粗粒砂質シルト層、オリーブ黒色(5Y3/2)極粗粒砂層、暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト層、各層厚は10cm程度である。第1B層は黒褐色(2.5Y3/1)シルトを主体とし、基底に粘土偽礫が認められた。層厚は5~10cm程度である。重機では第1A層まで掘削した。第1B層の出土遺物が7世紀後葉であるため、それ以降の整地層である。

第2層：調査区北部では第2層内で検出したSK10の上面を境界として第2A層と第2B層に分けられるが、中央から南部は不明瞭で、全体は一括して掘削した。第2A層は暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒砂～黒褐色(2.5Y3/1)シルト質中粒砂層でシルト・砂の偽礫が多く含む整地層である。下位の第2B層の上面が凹んでいる場所では炭の薄層やシルト偽礫がまとまって堆積している状況がみられた。層

厚は約30cmである。第2B層は黄灰色(2.5Y4/1)中粒

砂質シルト～オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト層で層

厚約20cmの整地層である。下部はSK06の埋土につながっている。出土遺物は第2A・B層で大きな差異はない、17世紀中～後葉に収まる。また、本層上面ないし層内で多くの遺構が検出された。

第3層：黄褐色(2.5Y5/3)極粗粒砂層で、暗灰黄色(2.5Y4/2)極粗粒砂の薄層を繰り返し挟む整地層である。層厚は140cm以上で、基底は確認できなかつた。本層からは墓丘後期～徳川初期の遺物が出土した。また、本層上面で大型の廐棄土壠が検出された。これより下位の地層は未確認である。

ii) 遺構と遺物(図5～10)

a. 17世紀前～中葉の遺構

第3層上面の調査区西南部でSK08・15が検出された。どちらも調査区外へ続くため、長さ、幅などの規模は不明であるが、SK08の深さは1.6m以上、

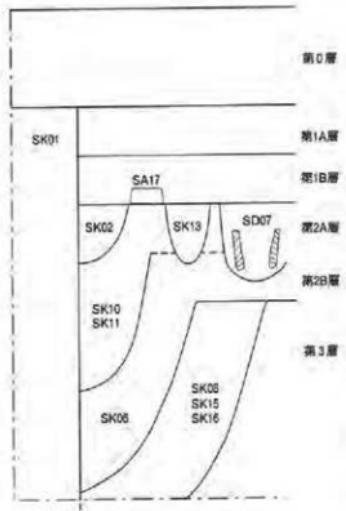


図3 地層と遺構の関係図

SK15は1.3m以上を確認しており、大型の土壌と考えられる。SK08の下部は調査区南端付近でなお南へ低くなっている。基底の堆積状況は不明であるが、下部0.3m程度を除いて上部は偽礫を多く含む埋め土とみられる。出土遺物には肥前青磁染付碗9・肥前白磁皿10、肥前陶器碗6・7、皿4・5、向付8、瀬戸美濃焼志野皿3、信楽焼鉢13、中国産青花碗11のほか、土師器焼塩壺12などがある。11は漳州窯系に属するものであろう。これらは徳川初期から続く17世紀前～中葉に収まる時期のものである。

SK15の埋土は下部0.4m弱に機能時堆積層と考えられる灰色シルトと炭の薄層がみられるほかは、中粒砂の偽礫を多く含む埋め土である。出土遺物はないが下位の第3層に徳川初期まで降る遺物が含まれるため、SK08に先行するが当該時期に属するものであろう。

SK16は調査区北部で検出した。調査区の北側に延びるため、全体の規模は不明であるが、東西で2.4m以上、深さ0.8mが確認できるため、大型の土壌になろう。灰色中粒砂の偽礫を含む黒褐色シルト質中粒砂を主体とする砂層で埋められていた。出土遺物には肥前磁器碗、肥前陶器碗・皿、上野高取焼の可能性のある皿など17世紀中葉のものほか、畿内第V様式の弥生土器甕底部などがある。

b. 17世紀中～後葉の遺構

当該期の遺構には大別して3時期

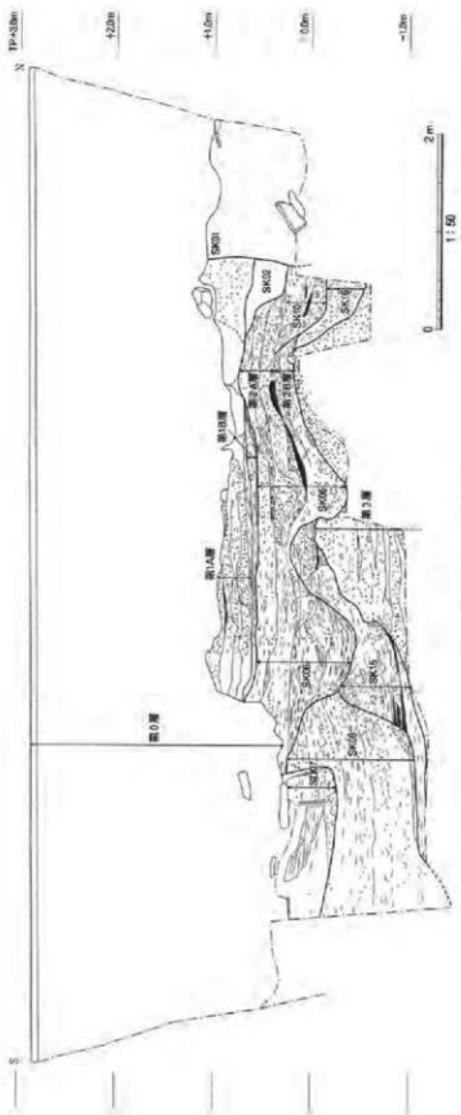


図4 瑞香区西野北側断面図

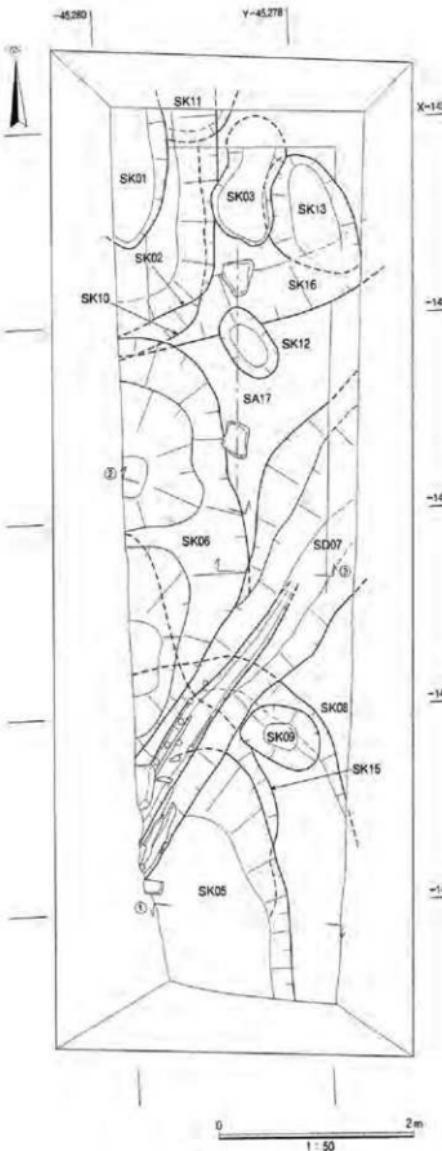


図5 遺構平面図

が認められる。第2B層内の遺構であるSK06が先行し、続いて第2B層上面のSK10・11、最後が第2A層上面のSK02・03・05・09・13・SD07・SA17などである。

これらのうちSK06・SK10・SK11は一連の掘削で同時に発見し、SK06、SK10の重なりは西壁地層断面の観察で確認した。

SK06は調査区西壁に沿って南北4m以上を確認したが、調査区外に延びているため全体の規模は不明である。北部はSK10に、南部はSD07に接続されている。北部西壁付近が0.6m程深くなっている。黄灰色極細粒砂質シルト層を多く含む暗黄灰色シルト混り細粒砂層(第2B層)で埋められていた。機能時堆积層は確認できなかった。この堆みの南側も西壁に沿って0.6m程深くなり、オリーブ黒色シルト質極細粒砂で埋まっていた。一連で掘削したが北側の窓より古い段階で埋まっており、埋土に木屑を多く含むことなどからSK06とは別造構の可能性もある。出土遺物には肥前磁器染付碗14~16、染付皿18、肥前青磁鉢19、肥前陶器皿17、土師器焼壙20、土人形21などがある。20には「天下一ミなと藤左衛門」銘の刻印があり、17世紀中~後葉に見られるものである。21は頭部を欠失するが西行法師を模したものである。これらはおおよそ17世紀中~後葉に収まる時期のものである。



図6 遺構断面図

そのほか、頁岩などを石材とする加工のある石が出土しているが、他の複数の遺構からも出土しており、別項にまとめて記述する。

SK11は調査区北壁にあり、深さ0.4m以上になる。SK01・02に壊されているうえ北側が調査区外に延びているため全体の規模は不明である。埋土は黒褐色シルト質細粒砂で、肥前磁器白磁壺のはか肥前陶器碗、備前焼鉢などが出土した。これらは17世紀中～後葉のものである。

SK10は調査区西壁北部にあるが²、調査区外に広がるため全体の規模は不明である。調査区西壁断面で第2B層上面から掘削されていることを確認した。深さ約0.6mで暗灰黃色粗粒砂の偽礫を多く含む黒褐色シルト質粗粒砂で埋められていた。出土遺物は固化していないが肥前磁器碗、肥前陶器碗・皿・鉢、備前焼壺・壺などがある。

第2A層上面のSK02・03・05・09・13はそれ以前の時期に比して浅く、小型のものが多い。

SK02は調査区北部の西壁に沿ってSK10とほぼ重なる位置にある。調査区外に延びているため全体の規模は不明であるが、埋土は黒褐色シルト質細粒～中粒砂である。出土遺物は肥前磁器染付碗・小杯、備前焼壺・鉢・壺、丹波焼壺など17世紀後葉にかかるものが多い。

SK03は調査区北部にあり、長さ2.6m、幅0.6m、深さ0.1m弱である。埋土は黒褐色シルト質細粒砂で、機能時堆積層は確認できなかった。出土遺物はない。

SK05は調査区南部で南北長約2.5mを確認したが、調査区外に延びるため全体の規模は不明である。深さ0.4mで、埋土上部は黒褐色シルト混り粗粒砂、下部は黒色シルト質粗粒砂で木屑を多量に含んでいた。出土遺物には肥前磁器染付碗・皿、肥前青磁染付、肥前陶器碗・皿、丹波焼壺・鉢、瀬戸美濃焼碗などがあり、17世紀中～後葉のものである。

SK09は調査区南部にあるSD07の南側に接する長さ0.8m、幅0.5mである。深さは0.3mで、埋土は黒色シルト質粗粒砂で、木屑を多く含んでいた。

SK13は調査区北部にあり、長さ1.4m、幅0.8mである。深さは0.6mで、埋土上部は黒褐色シルト質中粒砂、下部はオリーブ黒色シルト質中粒砂で炭を含んでいる。出土遺物には肥前磁器碗・小杯、肥前青磁碗31、肥前白磁皿33、肥前陶器碗・皿・鉢、丹波焼捕鉢36、備前焼壺、中国漳州窯産色絵鉢32などがあり、17世紀中～後葉のものである。

SD07は調査区東壁中央付近から西壁南部へ延びる板組溝である。幅0.8～1.5mの溝を掘形に、内側

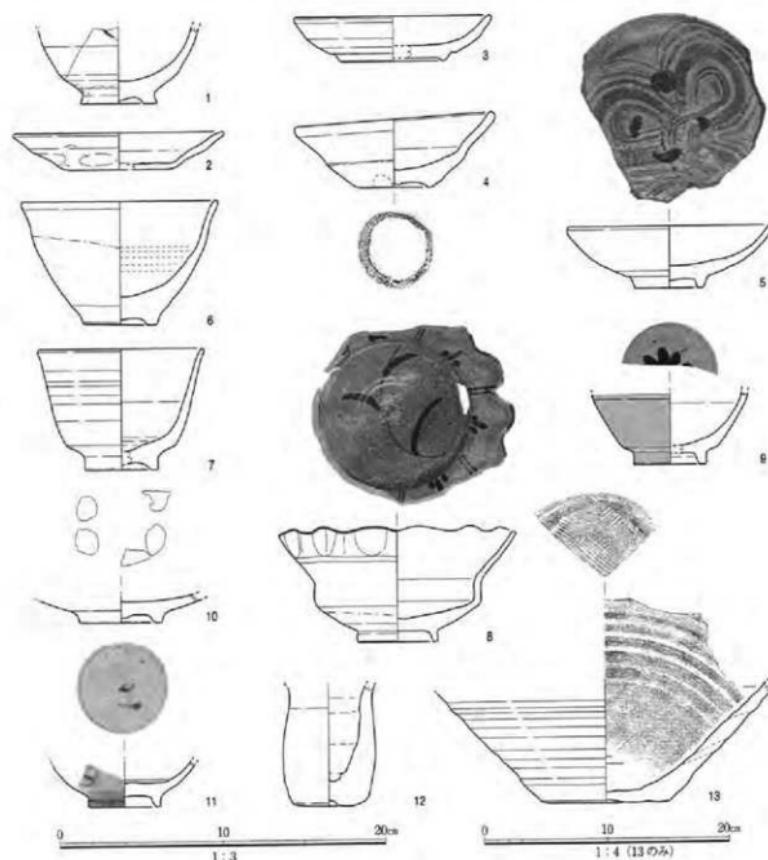


図7 第3層内および第3層上面遺構出土遺物

第3層(1・2)、SK08(3～15)

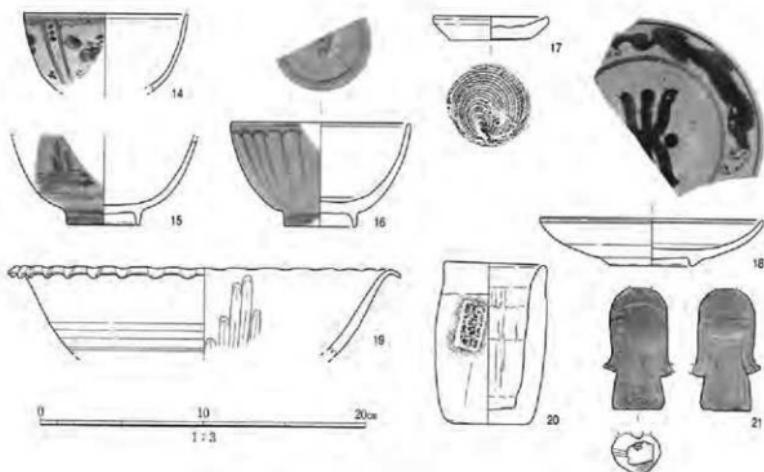


図8 第2B層内遺構出土遺物
SK06(14~21)

に板組の溝を設置している。幅0.3mで板を向かい合わせ、各々の内外面を杭で固定していた。掘形の基底で南北の比高は約0.3mあり、南側へ低くなっている。板組が残存するのは南西側1.5m程度で、北東側は掘形の幅が広くなっている。断面(図5・6③)でも掘形と板組の区別ができるなかったことから、北東側は板を抜き取るため再掘削された可能性もあるが、平面では確認できなかった。敷地西南部に排水する目的の造構と考えられるが、敷地に対して斜行して設置された意図は不明である。掘形からの出土遺物には肥前磁器染付碗25・26・小杯29・皿・瓶、肥前染付青磁、肥前白磁小杯28、肥前陶器皿24、備前焼擂鉢・灯明皿27、丹波焼擂鉢34・鉢・壺、瀬戸美濃焼碗・皿23、中国漳州窯産色絵皿30・青花皿などがあり、17世紀中～後葉のものであろう。ほかに、一石五輪塔片35が出土している。

SA17としたものは調査区北部の中央付近で南北に並んだ2個の石で、礎石の可能性がある。これら以外には連続する石を確認できなかった。石の大きさは25～35cmで、心々間の距離は1.5m、方位は北で東に3°振っている。

以上のように、第2層に関連する造構からは17世紀代の陶磁器が出土しているが、第2B層内造構では17世紀前～中葉の遺物が、後出する第2B層上面および第2A層上面造構では17世紀中～後葉の遺物が出土している。

c. 各地層の遺物

今回の調査で最も古い層序に当る第3層からは肥前陶器碗1や土器皿2などが出土した。肥前磁器は出土していないため、豊臣後期～徳川初期に相当する地層と考えられる。また、第1B層からは第2A層上面造構と同じく17世紀中～後葉の遺物が出土している。

加工のある石製造物

先述したように、本調査地の複数の遺構から加工のある石製造物が多量(コンテナ5箱程度)に出土

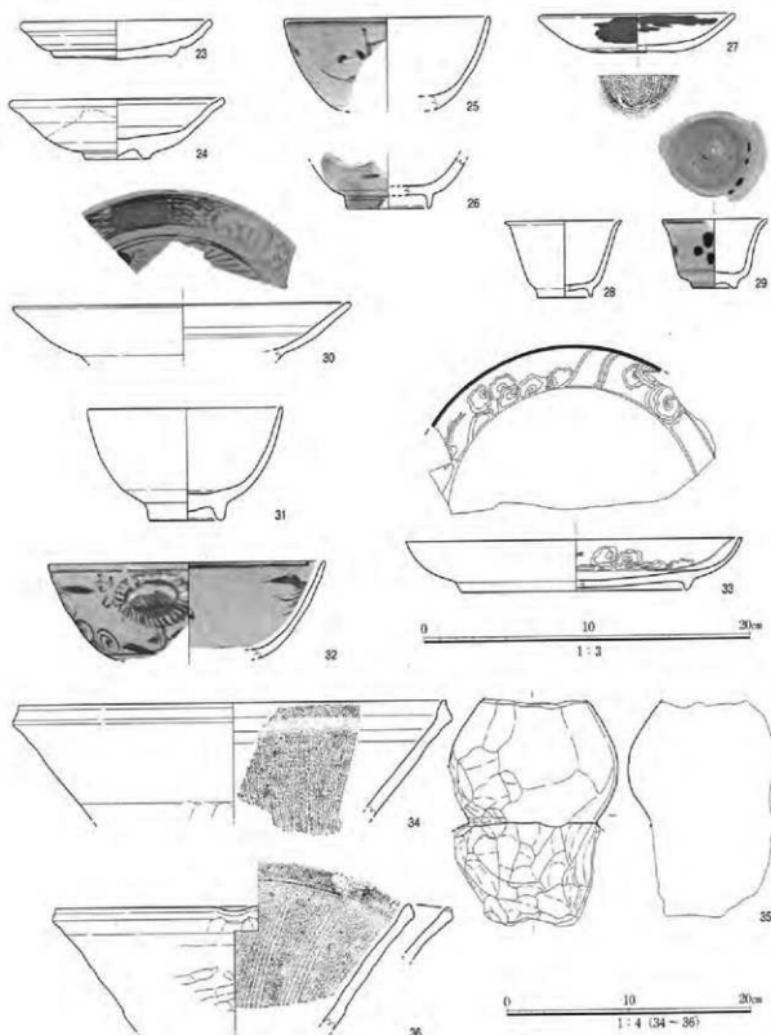


図9 第2A層上面遺構出土遺物
SD07(23~30・34・35)、SK13(31~33・36)

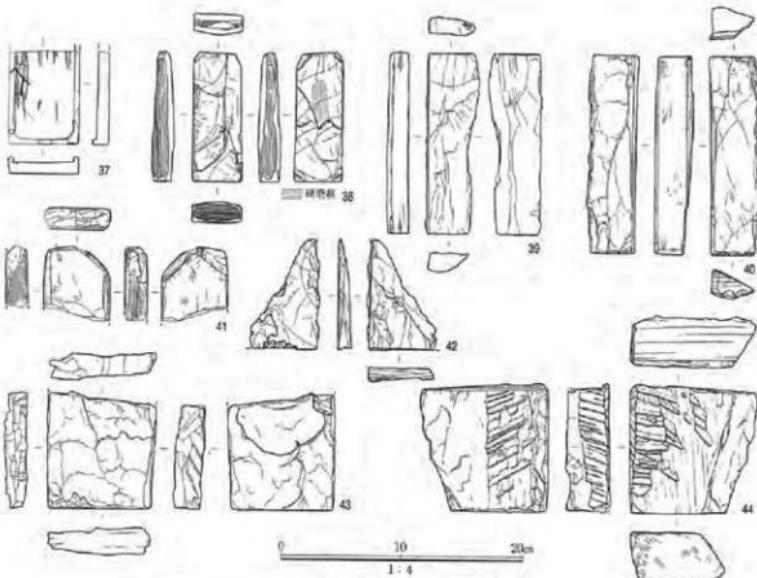


図10 視・砥石と加工途中の石製造物
SK02(38・44)、SK05(40)、SK06(39・43)、SD07(41・42)、重機掘削後検査中(37)

した。出土造構は第3層上面のSK08を嚆矢に、第2B層内のSK06、第2B層上面のSK10、第2A層上面のSK02・05・13・SD07である。第3層内からは出土していない。また、SK08は出土量が少ない。

これらの石製造物の石材鑑定を行った結果は以下のとおりである(註1)。

石材の種類を判定するため、肉眼および実体顕微鏡を用い、鉱物の種類と組成、色とその特徴、形状や大きさに留意して観察を行った。その結果、加工された石製造物の石材は、大部分が頁岩であり、弱い熱変成作用のために再結晶化が見られるものが多く含まれていた。この他に粘板岩(ホルンフェルス化している)、珪質頁岩、砂質準片岩、シルト質泥岩、赤色チャート(弱い熱変成作用のために再結晶化が見られる)、ごくわずかに砂岩がある。また、花崗岩(桃色のカリ長石の目立つ山陽帯の花崗岩と領家帯のものとみられる黒雲母花崗岩)の破片も確認された。掲載した石製造物の石材は、頁岩が39・40・43・44、粘板岩が37・38・42、珪質頁岩が41である。

次に加工痕のある石製造物について述べる。加工痕には次の4種が認められた。

- ①敲打によるとみられる大きな割れ面
- ②鋸などの工具による切断面
- ③盤などの刃器による表面を薄く削った削り面
- ④割れ面などに見られる研磨痕

①は後述するように用いられた石材のほとんどが頁岩ないし粘板岩であり、劈開面に沿って板状に割れやすい性質を利用して、大きく平坦な割れ面を形成しているものとみられる。そのためリングやフィッシャーは打点に取束せず、加筆方向は把握しがたいが、38・43に見られる割れ面などの観察から、上下から対抗する方向で同時に敲打された可能性が高いようである。ただし上下端面に敲打痕ではなく、加筆の後に打面部は切り離されている可能性があるが、割れ面と切断面の新旧関係にはさらに検証が必要である。

②は鋸などによると考えられる平滑な切断面で、37・41・43を除く他の石製遺物には全て2面以上が認められる。切断面には刃を前後に挽く際につけられたとみられる平行ないしわざかに交差した細かい条痕が無数に観察される。これらの切断面のうち、39・40の一方の側面や42の側面、44の上端面では、工具の切断が面全体に及んでおらず、最後の数mmを折って分割している。

③は44の平坦な自然面である表・裏面および一方の側面に明瞭に残されているほか、43の一方の側面にもその可能性のある割り面が認められる。44の場合、割り面から推測すると、使用された工具は刃部長が4.5cm以上の直刃であり、3面とも上方から打ち降ろすように浅く自然面を削っている。

④は38の割れ面中央部に認められる。研磨痕は浅く凹んでおり、擦痕の方向から図の上下方向に研磨したことわかる。

これらの観察から、①・②は製品素材となる粗材を生産するため原材を分割する工程、③は自然面も含めて表面を平坦に調整し粗材に仕上げる工程、④は製品に仕上げる工程で施されたものと想定する。ただし、出土した資料は当時の職人が石製品の生産工程で排出された不要部分として廃棄したものである。そこで、39・40・42は①・②の工程で原材や粗材から余分として除去された部分、または分割時に失敗して廃棄されたものと考えられよう。これらには②の切断面が上下2面ないし側面を加えた3面が含まれていることから、除去される前の材は長方形の板状であったことが想定される。43・44は①や③の工程によって外形を長方形に整え、一部に③の工程を加えて、表面をより平滑に調整したものと考えられる。38は表・裏面が割れ面による平坦な面、上下面・左右側面は切断による平滑な面で、記述した資料中では粗材として最も整った形態である。一方の割れ面の一部が研磨されているのは仕上げ工程に入っていたことを示し、何かの不具合があり廃棄されたものと考えられる。

これらの加工によって生産された製品については2つの可能性が考えられる。一つは現である。37は粘板岩製の硯で、陸の縁の欠損を再加工しようとした痕があり、当地で製作されたものではなく製品が持ち込まれた可能性が高い。同じ石材の38も携帯用など小型硯の粗材としては十分な大きさといえよう。42も粘板岩製で薄く、硯の粗材とすることも可能であろう。一方、固化していない頁岩製の砥石も出土しており、頁岩を石材とする石製遺物の中には砥石の未製品が含まれていた可能性がある。なお、41は凝灰岩の砥石であるが、使用された先端や側面の状況からは、41を消しゴムのように手を持って、対象に擦りつけて研磨したことが窺える。通常の砥石を固定して刃物を前後に動かす使用法とは異なり、むしろ38の研磨面のような使用結果が推測されることから、41は石製品を仕上げるために使用された道具である可能性を考えておく。

このように本調査地は、頁岩や粘板岩を加工し、石材に応じた石製品を作る工房から排出されたゴ

ミを廃棄していたと考えられる。緻密な粘板岩の場合は石硆を、より粗い頁岩では砾石を製品候補として挙げられる。また、出土遺構の時期からは、徳川初期にはまだ石製品製作は行われておらず、SK08のように17世紀前～中葉の遺構からも出土しているものの、17世紀中～後葉以降に活発になると考えられる。

なお、本調査地の付近では、西100mのOJ11-3次調査地[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2013]と北西200mのOJ94-16次調査地[大阪市文化財協会2004b]で視作り工房の存在が推定されている。OJ11-3次調査地では17世紀後半、OJ94-16次調査地では18世紀前半の遺構から、本調査地より工程の進んだ硆の未製品が出土し、OJ11-3次調査地の石材は黒灰色および灰白色の2種類の粘板岩とされている。OJ11-3次調査地は本調査地と同時期であるため、狭い地域で同種の職人工房が集住していたと考えられる。

3)まとめ

- ・徳川初期の厚さ140cm以上の整地層を確認した。
- ・17世紀代に数次にわたる整地とゴミ捨てに使われたとみられる大型の廃棄土壠を確認した。
- ・17世紀後葉には遺構が小型化し、礎石列や板組溝など前代とは異なる利用状況への変化がみられるが、遺構群の拡がりがつかめないため詳細は不明である。
- ・17世紀前葉以降、当該地が石製品工房に係るゴミの廃棄場所になっていたと考えられる。工房の活動は17世紀中葉から後葉にかけて活発化する。
- ・工房の製品は不明だが、硆と砾石が候補に挙げられ、石材に応じて製作したことが考えられる。
- ・付近でも同時期の硆工房の存在が認められ、同種の職人工房が集住していたと考えられる。

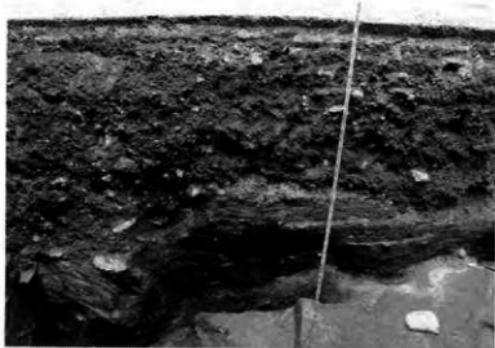
註)

(1) 石材鑑定は大阪市立自然史博物館学芸課長川端清司氏のご教示を得て当研究所学芸員の小倉徹也が行った。

引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008a、「大阪城下町跡発掘調査(OJ07-3)報告書」:『平成19年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.33-36
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008b、「大阪城下町跡発掘調査(OJ06-1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2006)』、pp.171-179
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013、「中央区瓦町二丁目41番における建設工事に伴う大阪城下町跡発掘調査(OJ11-3)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)』、pp.209-218
- 大阪市文化財協会2004a、「OS87-153次およびOS92-33次の調査」:『大阪城下町跡』II、pp.263-280
- 大阪市文化財協会2004b、大阪市文化財協会2004、「OS88-82次およびOJ92-24・92-36・94-16次の調査」:『大阪城下町跡』II、pp.281-314

調査区西壁地層断面
(東から)



第3層上面・第2B層内遺構
(南から)



SK08・15掘削状況
(南東から)



第2B層・第2A層上面遺構
(北から)



SK05・08地層断面
(北から)



SD07板組溝検出状況
(北東から)



中央区徳井町二丁目における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS12-3)報告書

調査個所 大阪市中央区徳井町2丁目43
調査面積 49m²
調査期間 平成24年4月12日～4月21日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、松本啓子

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣期の大坂城跡である東横堀川から東へ約200m、本町通の一筋北の徳井町に位置する。この地は豊臣期は大坂城内、徳川期には大坂城下町となった場所で、徳井町2丁目の通りに面して行ったOS89-41・91-53・04-1・07-14・08-3次の各調査で、継続的に土地開発が行われ、利用されてきたことが判明している[大阪市文化財協会2003・2005・大阪文化財研究所2011a]。また、本調査地の北西約150mでは1724年設置の大坂西町奉行所跡が見つかっており[佐久間貴士ほか1989]、本調査地周辺が近世を通じて重要な場所であったことが窺える(図1)。

平成24年3月8日に大阪市教育委員会が行った試掘調査により、現地表下1.35m以下に豊臣～徳川期の遺物包含層と石組を伴う遺構面などが認められたため、遺構面の年代や遺構・遺物の分布状況、土地利用のようすを探り、この地域の歴史を復元するための基礎資料を得ることを目的として、本調査を行うことになった。調査は関係諸機関との協議を経て、調査地東南部に東西5m、南北8mの調査区を設定し(図2)、平成24年4月12日より開始した。試掘結果に基づき、現地表下1.35mまでを重機によって除去したのち、段丘構成層(現地表下約1.5m)までの間を人力によって慎重に掘り下げ、遺構面の精査・遺構の検出と遺物の採集を行い、適宜、図面・写真などの記録を取った。その後、調査区東北隅を幅約1.2m、長さ約1.7mの範囲で北側に拡張し、試掘時に見られた石組の延長部分のようすを探り、記録を取った。平成24年4月21日にこれら発掘作業を終えて埋戻しを行い、同日、重機・機材・道具などを撤収し、調査を完了した。

なお、本報告に用いた標高はTP値(東京湾平均海面値)で、本文・図中ではTP+○mと表記した。また、方位は現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測

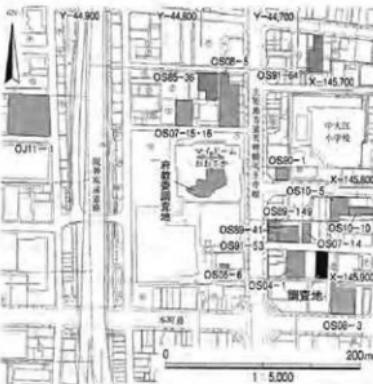


図1 調査地位置図



図2 調査区配置図

地系座標に基づき、座標北を基準にした。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

本調査における基本的な層序は以下のとおりである。

第0層は現地表下約1.2mまでの近代以降の盛土や擾乱などで、重機によって掘削した。

第1層は整地層で、第1a層と第1b層の2層に分けた。

第1a層は褐色(10YR4/4)砂質シルト～シルト、第1b層は暗褐色(10YR3/3)シルト質粘土を主体とする整地層で、第1b層は焼土・壁材・砂を含む。最大層厚は第1a層が9cm、第1b層が35cmあり、第1a層は南部に、第1b層は調査区全域に分布する。第1層は出土遺物から18世紀後葉～末頃の整地と考えられる。第1層上面で埋壺や埋桶、土壙、南北石列などの遺構が見つかった。

第2層は整地層で、第2a層と第2b層の2層に分けた。

第2a層は炭・焼土・壁材を含む暗褐色(10YR3/3)粘土質シルトを主体とする盛土最上部の整地層で、調査区全域に分布する。最大層厚は北半部で15cm、南半部の石組SA216より南側で30cmある。第2層上面の標高もSA216を境に南側が30cmほど高くなっている。第2a層上面は生活面と考えられ、調査区南端と北張張部に東西方向の石組SA216・217が見つかった。それぞれ後述する第3層の石組SA316・317と同じ位置で積み直したものと考えられ、SA216は石の隙間を第2層で埋めていた。

第2b層はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質礫～礫質砂を主体とし、第2b層の層厚は最大25cmである。調査区全域に分布する。焼土や炭を多く含み、火災の後片付けによって堆積した地層と考えられる。

第2層からの遺物はないが、第2a・2b層で理まる土壙SK201～203から炭や焼土とともに18世紀前半までの遺物が出土しており、これが第2層の時期に近いものと考えられる。

第3層も整地層で、盛土最上部の整地層で上面が生活面となる第3a層と、それ以外の盛土の第3b層に分けた。

第3a層は黄褐色(10YR5/6)砂質粘土を主体とし、最大層厚は25cmである。第3a層から17世紀後半の遺物が出土した。第3a層上面は生活面で、東西方向の石組や、東西方向の石組とみられる溝状痕跡、土壙などが見つかった。

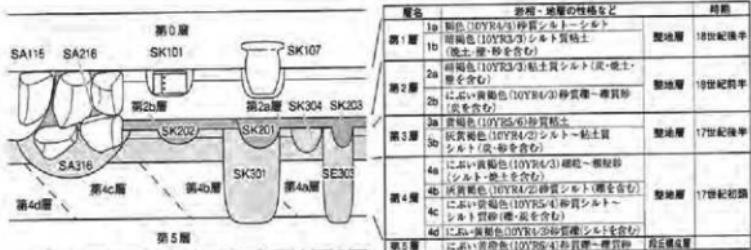
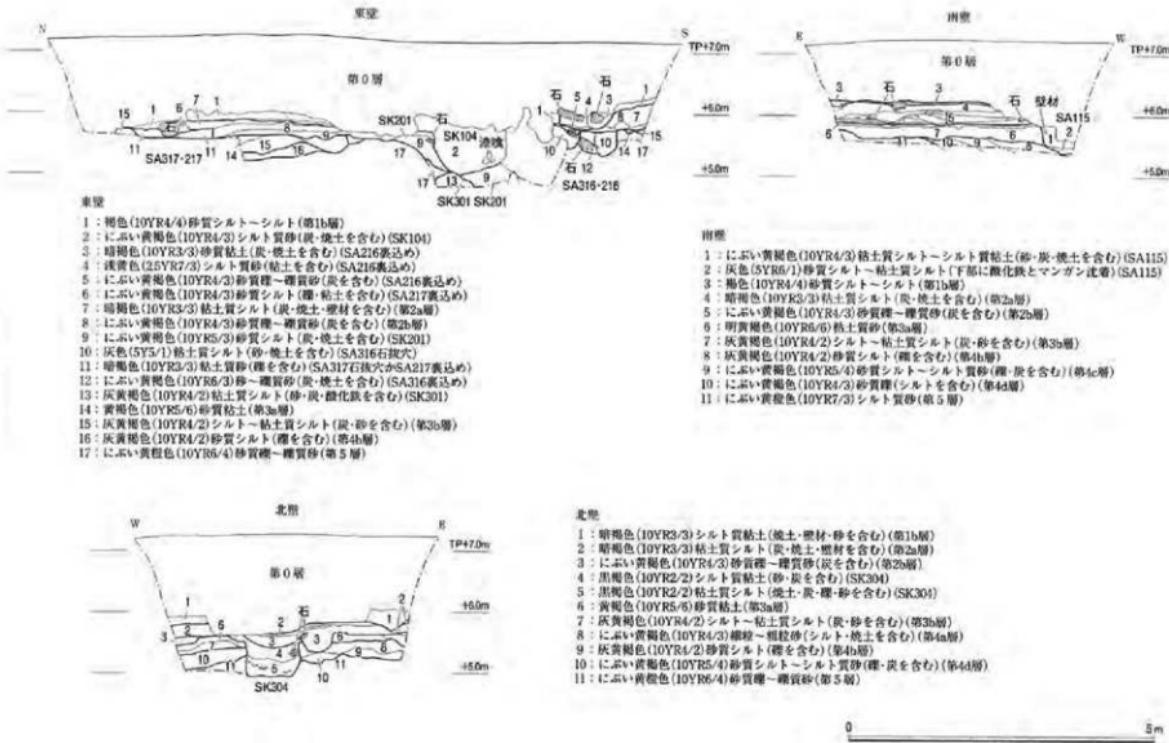


図3 地層と遺構の関係



第3b層は、炭・砂を含む灰黄褐色(10YR4/2)シルト～粘土質シルトを主体とし、最大層厚は30cmである。第3b層の上面・層中・下面に遺構はない。第3b層から16世紀末～17世紀前半の遺物が出土した。

第4層は第5層の段丘構成層の凹凸を埋める整地層である。第4a層はにぶい黄褐色(10YR4/3)細粒～粗粒砂を主体とし、炭や焼土を含む。第4b層は礫を含む灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト、第4c層は礫・炭を含むにぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルト～シルト質砂、第4d層はシルトを含むにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質礫、をそれぞれ主体とする。第4d層から第4a層の順に斜面を埋めて平坦面を形成していたが、本調査区内では上面に遺構は見られなかった。第4層全体で、層厚は最大70cmある。第4層から17世紀初頭の遺物が出土した。

第5層はにぶい黄橙色(10YR6/4)砂質礫～礫質砂層で、段丘構成層(いわゆる地山)である。層厚は120cm以上ある。第5層上面の旧地形は凹凸が顕著で、遺構は見られなかった。第5層から出土した遺物はない。

ii) 遺構と遺物(図5～10)

a. 各層の出土遺物(図7)

第4層は、第4b層のみ遺物が出土した。中世瓦や瓦器、土師器、肥前陶器といった中世末頃の遺物とともに須恵器などの古代の遺物が混る。いずれも細片であるが、須恵器高台1と肥前陶器灰釉鉢2を示した。肥前陶器は17世紀初頭のもので、第4層の時期を示す。

第3層の出土遺物のうち、第3b層出土の中国産青花碗4と、第3a層出土の肥前陶器灰釉碗3、三島手皿9・11、二彩折縁大皿10、肥前磁器染付筒形蓋物7・染付折縁ソギ皿6・染付花弁形皿5を示した。これらは17世紀後半までのもので、第3層の時期を示す。

第2層は、後述の第2a・2b層で埋まるSK201～203以外に遺物は出土していない。これらの土壤の遺物が示す18世紀前半が第2層の時期と考えられる。

第1層は関西系陶器や残瓦などの近世後半の遺物が多く出土し、これらが第1層の時期を示すと考えられる。図7の中国産青花皿8は第1層からの出土だが、16世紀後半～17世紀初頭頃のもので、下位層からの混入と考えられる。

b. 第5層上面の状況(図5)

層序の項でも述べたとおり、第5層上面に遺構はなく、第4層で埋まる第5層上面の旧地形が確認された。およそ西北側が低くなっているが、本調査区内では西南隅と東南隅に向かっても下がっていた。

c. 第3層上面の遺構と遺物(図5・6・8・9)

第3a層上面で東西方向の石組SA316や、東西方向の石組の痕跡とみられるSA317、土壤SK301～305・311～313などが見つかった。以下に主な遺構について記す。

SA316は、第3a層上面から東西に幅約1.0m、深さ約0.4mの溝を掘って、その中に長辺約60cm、短辺約40cm、高さ18cmほどの花崗岩を南北2列に配置して石の隙間を砂やシルト、粘土で埋めながら北側に面をもつように積んだ東西方向の石組である。表面が黒変・赤変した石があり、火を受けたことがわかる。この火災によって被災した石組は第2層の火災整理後に復旧されたため、同じ位置に

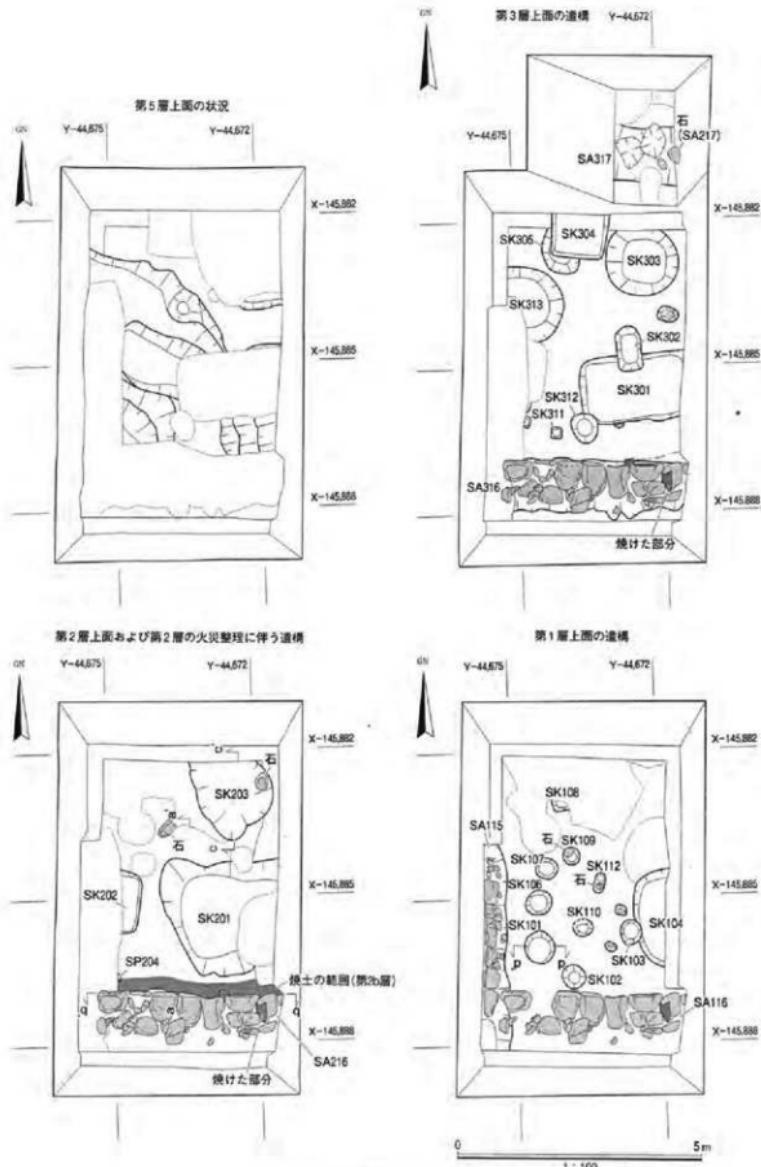
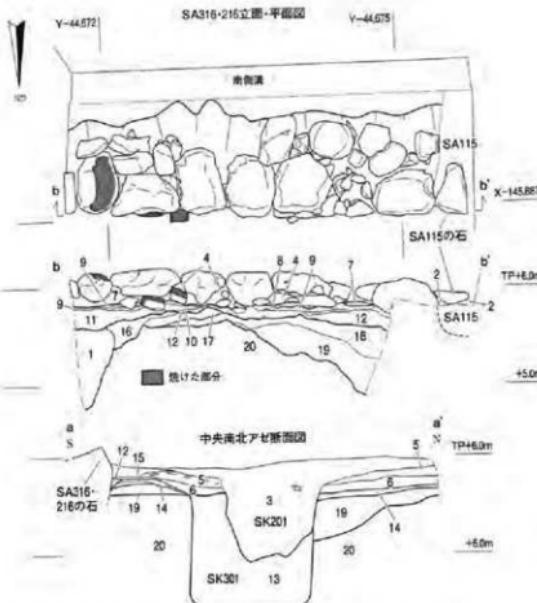


図5 各層の造構平面図



- 1: 灰黄色(25Y4/3)粘土質シルト(砂・泥を含む)(乱れ)
 2: にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト～シルト質粘土
 (SA115裏込め)
 3: にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルト(砂・焼土を含む)(SK201)
 4: オリーブ褐色(25Y4/3)粘土質シルト(砂・焼土を含む)
 (SA216裏込め)
 5: 暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト(砂・焼土・樹木を含む)(第2層)
 6: にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト～繊維質(砂を含む)(第3層)
 7: 暗灰黄色(25Y5/2)シルト質砂(砂を含む)(SA116裏込め)
 8: 灰黄褐色(10YR4/3)シルト質砂(砂・焼土を含む)
 (SA116裏込め)
 9: 褐色(7.5YR4/4)砂～シルト(SA316裏込め)
 10: 黑褐色(10YR3/1)細粒砂(砂を含む)(SA316裏込め)
 11: 灰青褐色(10YR4/2)粘土質砂(砂・粘土・礫を含む)(SA316裏込め)
 12: 灰青褐色(7.5YR4/2)砂質砂(シルトを含む)(SA316裏込め)
 13: 露頭色(10YR3/2)中粒～粗粒砂(SK301)
 14: 貴褐色(10YR5/6)砂質粘土(第3層)
 15: 灰青褐色(10YR4/2)シルト～粘土質シルト(砂・砂を含む)
 (第3層)
 16: にぶい黄褐色(10YR4/2)細粒～粗粒砂(シルト・焼土を含む)
 (第4層)
 17: 灰青褐色(10YR4/2)砂質シルト(砂を含む)(第5層)
 18: にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルト～シルト質砂(砂・灰を含む)
 (第4層)
 19: にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質砂(シルトを含む)(第4層)
 20: にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質砂～繊維質(第5層)

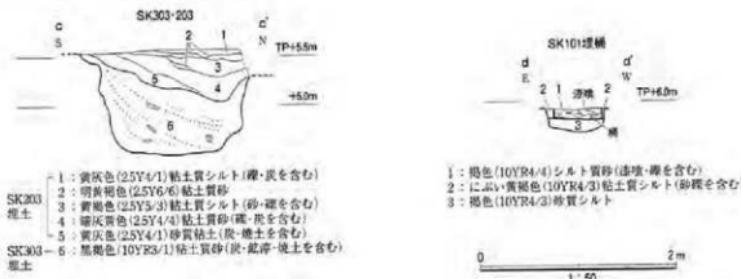


図6 造構新面図・立面図

SA216が設置されている(図6)。調査区東端に上面が火を受けて黒変したSA316の石があり、この石の上面が平坦で、上面の高さが第2層のSA216の上面と変わらないことから、SA316ももともとはSA216とほとんど同じ高さまで積まれていたものと考えられる。SA316の裏込めからの遺物はないが、SA316が設置された時期は、第3層の整地と同じ17世紀後半から、後述のSA216の裏込めの出土遺物が示す18世紀前半までの間と考えられる。

SA317は、大阪市教育委員会が行った試掘調査で、試掘 sondage の東の壁面にSA316の石と同じくらいの大きさの、上面が平坦な石2個が南北に並んで残っていることが確認されたため、この延長線上にある本調査区の北端を拡張して確認した。幅約1.2m、深さ約0.2mの東西方向の溝である。溝内に長径0.6mほどの石の抜けた穴が残っており、炭・焼土を含む暗灰黄色砂質シルトで埋まっていた。東壁には上述のSA316・216と同様に、積み直したとみられる幅約0.4mの花崗岩1個が残っていた。東壁断面で見る限り、SA317の溝状の掘込みの南端が垂直に掘り込まれていて、北端とは様相が異なる。この部分に石が置かれていたとみると、SA317は南に面をもつ石組の可能性を考えられる。また、SA317の石の上面は第2a層の上面とはほぼ同じ高さで、第2層の段階でも機能していたものとみられる。SA317の出土遺物はないが、SA317の上を第2層が覆っているので、SA317もSA316と同じ頃のもの可能性がある。

SK301は南北約1.4m、東西2.1m以上、深さ約1.2mの平面長方形の土壙で、埋土は黒褐色中粒～細粒砂である。17世紀代の遺物が大量に出土した。これらのうち、肥前磁器染付皿22・染付大皿19・青磁大皿25を図8に示した。

SK302は南北約0.9m、東西約0.5m、深さ約0.5mの平面長方形の土壙で、SK301の北端にかかる。埋土は灰褐色砂質様で、17世紀末～18世紀初頭の遺物が出土した。図8と図9に肥前磁器染付草花文碗16・染付草花文瓶27を示した。16の高台には「大明年製」の銘款がある。

SK303は直径約1.5m、深さ約1.0mの円形の土壙で、埋土は黒褐色粘土質砂で、炭や鉱滓、焼土が混じる。17世紀後半までの遺物が出土した。出土遺物のうち、丹波焼水盤30・擂鉢31、中国産青花皿23、肥前陶器薬灰釉碗28、肥前磁器染付碗12・15を図示した。

SK304は南北1.0m以上、東西約1.2m、深さ約0.6mの平面方形の土壙である。埋土は上半部が砂を含む黒褐色シルト質粘土、下半部が炭・礫・砂を多く含む黒褐色粘土質シルトである。17世紀代の遺物が多く出土した。これらのうち、中国産青花碗17、肥前陶器呂器手碗29、肥前磁器染付碗13・色絵蓋物14・青磁輪花皿20・染付皿21・折縁大皿24・白磁籠文盤26を図示した。13は草花文、14は窓に牡丹文、17は外面上半部に走馬文、内面の見込みに花文、内面口縁直下に魚文、21は内面に飛雁文を描く。17は火を受けているため、表面の釉が溶けて流れている。

SK313は南北1.5m以上、東西1.2m以上、深さ約0.2mの円形の土壙で、埋土は灰褐色砂質様で、黄灰色粘土が混じる。17世紀中～後半の遺物が出土した。図8に肥前磁器染付文碗18を示した。

d. 第2層上面の造構および第2層の火災整理に伴う造構(図5・6・10)

第2a層上面で東西方向の石組SA216や、東西方向の石組とみられるSA217、第2層で埋まるSK201～203が見つかった。

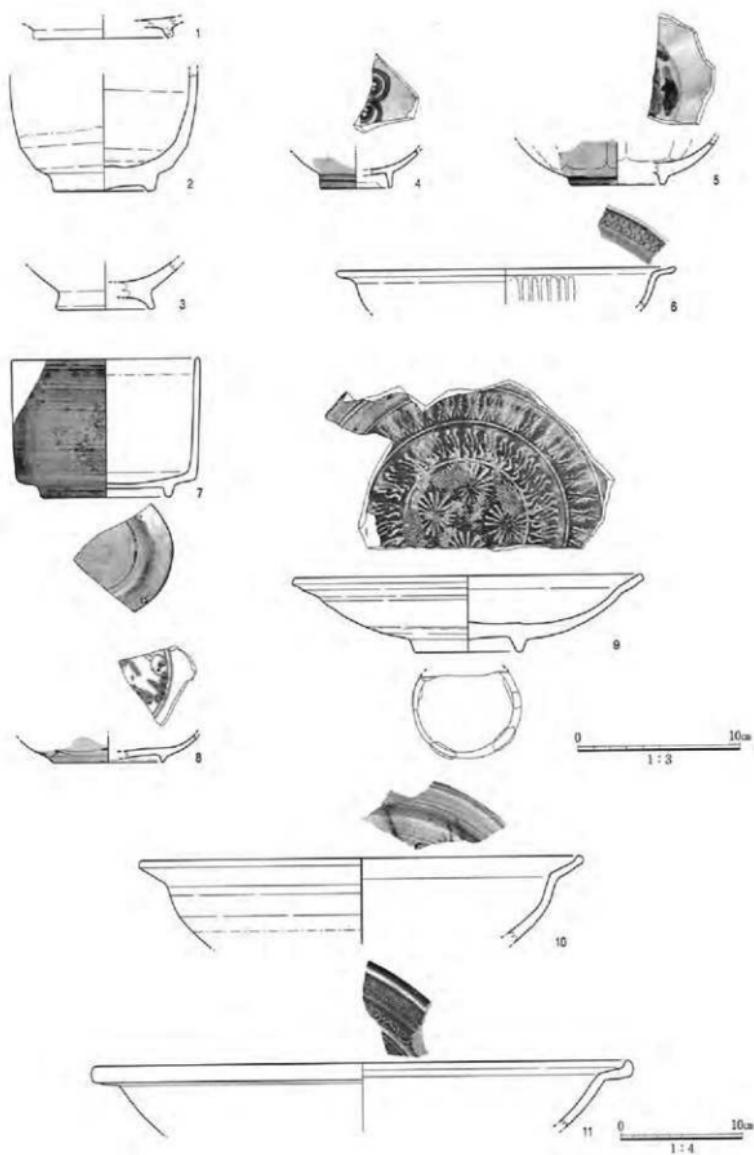


図7 各層の出土遺物
第4層(1・2)、第3b層(4)、第3a層(3・5～7・9～11)、第1層(8)

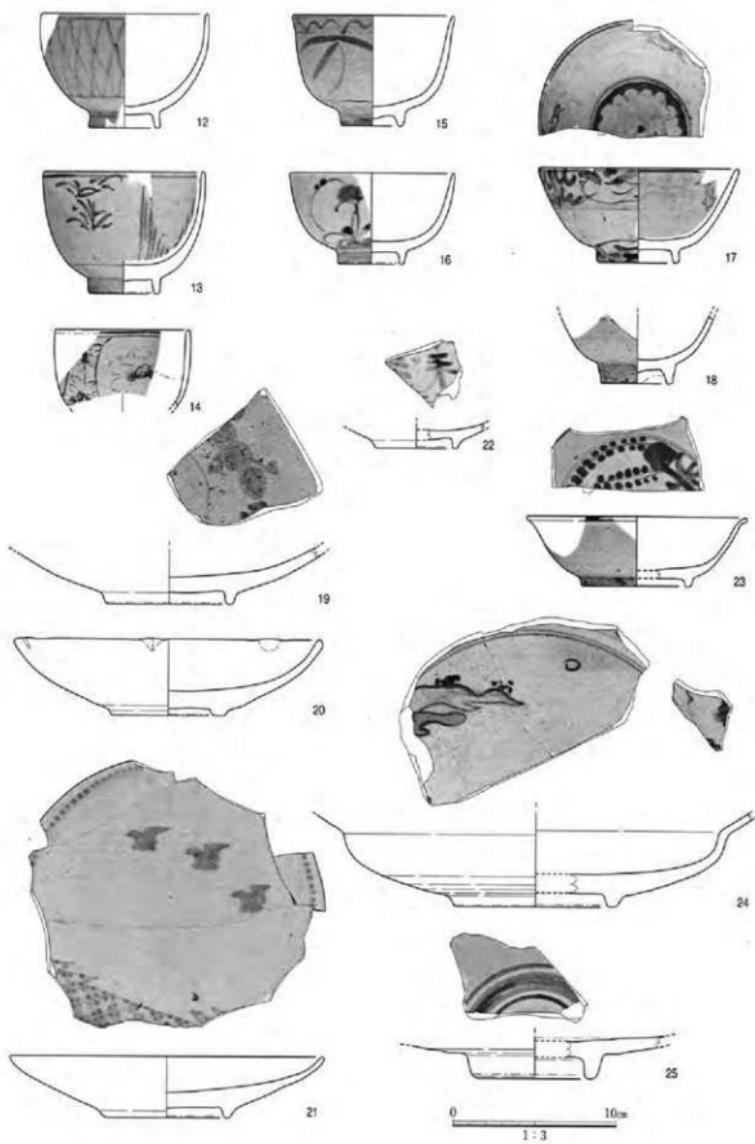


図8 第3層上面の遺構出土遺物(1)
SK301(19・22・25), SK302(16), SK303(12・15・23), SK304(13・14・17・20・21・24), SK313(18)

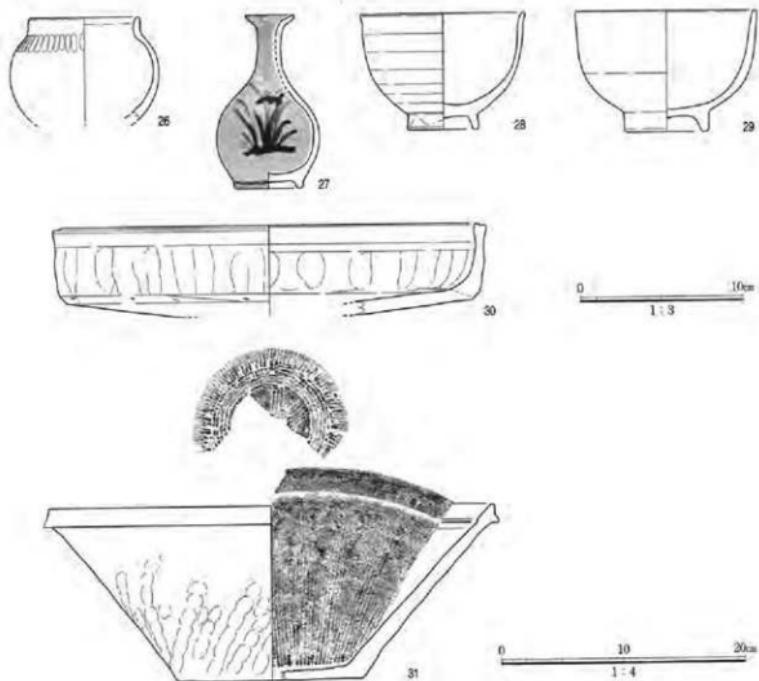


図9 第3層上面の遺構出土遺物(2)
SK302(27)、SK303(28・30・31)、SK304(26・29)

SA216は前出のSA316と同じ位置に積み直したものである。積み直した石の間は、SA316の裏込めとは異なる炭や焼土、砂を多く含むオリーブ褐色粘土質シルトで埋めていた。SA216の西端に第1層段階の石組SA115が配置されているため、SA216・316ともSA115より西に続いているのか、終わるのかは本調査区内では判然としない。SA216の裏込めから肥前強器染付碗37が出土した。コンニャク印判手と呼ばれる染付で、見込みには蛇の目釉剥ぎがある。18世紀前半のもので、SA216構造の時期を示す。

SA217は北拡張部にあって、大阪市教育委員会の試掘時に見られた2個並んだ石に続く東西方向の石組と推定されるものである。東壁にかかるSA317内の石がSA217のもので、第2a層上面から掘り込んだ土壤に、にぶい黄褐色砂質シルトを充填して上面が平坦になるように設置されており、SA216と同様にSA317を積み直したものと考えられる。この石の上面近くまでを第2a層が覆っていて、石の上面と第2a層上面はほぼ同じ高さになっていた。第2a層上面で機能していたものと思われる。SA217から出土した遺物はない。

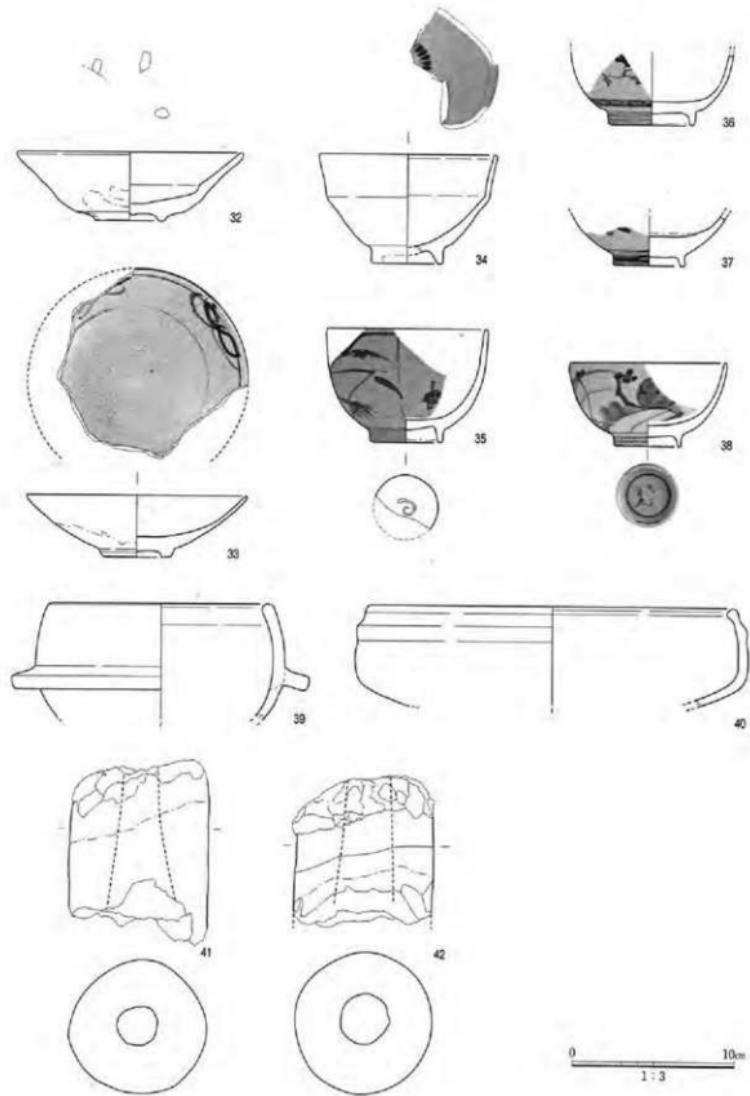


図10 第2層の造構出土遺物
SK202(38)、SK203(32~36・39~42)、SA216表込め(37)

SK201は南北約2.4m、東西2.3m以上、深さ約1.0mの、第2a層で埋まる土壌で、大量の炭や焼土を含む。火災の後片付けに伴う土壌であろう。遺物は18世紀前半までのもので、SK201の埋まつた時期を示す。

SK202も火災後の後片付けに伴う土壌で、南北約1.3m、東西0.4m以上、深さ約1.4m、大量の炭・焼土・焼けた壁材・瓦・陶磁器を含む第2b層に似た黒褐色シルト質砂で埋まっていた。出土した遺物の中には焼けて変形したものも含まれていた。図10に肥前磁器染付碗38を示した。「くらわんか茶碗」と呼ばれる18世紀前半のもので、SK202の時期を示すとともに火災の時期の下限を示す。

SK203はSK303の上に掘られた土壌で、炭・焼土・砂・礫を含む第2a層に似た黄褐色～暗灰黄色の粘土質シルト～砂質粘土で埋まっていた。規模は南北が約1.6m以上、東西が約1.6m、深さは約0.5mある。図10に土師器羽釜39・培培40・輪羽口41・42、肥前陶器灰釉皿32、肥前磁器染付碗34～36・染付皿33を示した。これらは17世紀末頃までのものである。

e. 第1層上面の遺構(図5・6)

第1層上面では埋壺SK107や埋桶SK101・106、石組SA115、土壌などの遺構が見つかった。また、前出の第2層の遺構である石組SA216は、上面の高さが本層のSA115や本層上面の高さに揃っており、第1層の時期でも機能していた可能性があるものである(図5でSA116と表示)。以下におもな遺構について記す。

SA115は調査区西壁際で見つかった南北方向の石列で、SA216・316の西側を壊して設置している。長径約0.6m、短径約0.4m、厚さ0.1～0.2mの花崗岩が西側に面をもつように並んでいる。SA115の掘形は幅0.6m以上、深さ約0.4mで、埋土にはぶい黄褐色粘土質シルト～シルト質粘土が主体で、底部が灰色含鉄シルト～粘土質シルト、最下部には酸化鉄やマンガンが沈着する。後世の擾乱のため西側が失われているが、断面の様子からみて石組構の可能性がある。SA115の石の上面は前出のSA316・216の石の上面(図5ではSA116と表示)の高さとほとんど変わらず、これらSA115・116は同時に存在し、機能していた可能性がある。SA115からの遺物はないが、第1層の時期である18世紀後半かそれより新しい遺構である。

SK101・106は、直径約0.6m、深さ約0.2mの円形土壌に、褐色砂質シルトとぶい黄褐色粘土質シルトを充填して、直径48cmの曲物の桶を設置したもので、SK101・106とも桶の内部から漆喰片、丹波焼、肥前磁器、土師器が出土した。SK101はこれらに加えて近世瓦と銅錢が出土した。どちらも18世紀末～19世紀の埋壺である。

SK107は地面に土壌を掘って丹波焼の大甕を設置したもので、甕の上半部は地面より上にあったものとみられる。第1層上面で、土壌の規模は直径約0.5m、深さ約0.3m、埋土は褐色砂質シルトである。近世瓦や肥前磁器、土師器が出土した。19世紀代の遺構である。

ii) 検出遺構の検討

今回検出した石組SA316・216とSA317・217は、同様の構造とみられ、設置・被災・再構築の時期も同じと考えられる。異なるのは、SA316・216のほうがSA317・217より0.3mほど高い位置に設置されていること、SA316・216が北側に面をもつのに対し、SA317・217が南側に持つ可

能性が高いことである。第5層や現地表の傾斜は、ともに北側・西側が低くなってしまっており、17~18世紀においても同様の傾斜があったものと考えられ、それぞれ水平な地面を造るために設置された石組であろうことは想像に難くない。しかし、SA317・217は南側に面を持つ可能性があり、またSA316・216の北面とSA317・217の南面の距離が5.4mほどしかないこと、そして、間におもだつ遺構もないことから、これらの石組は単に階段状に水平な地面を造り出すためのものや、敷地の区画といったものではないようである。

SA316・216とSA317・217と同様の、石を前後に2個配置して積み上げた石垣状の石組は、大阪市福島区福島蔵屋敷跡に類例がある[大阪文化財研究所2011b]。福島蔵屋敷跡では花崗岩を2~3段に積んだ石垣状の石組がL字状に残っていて、線対称の位置にある逆L字の溝と組み合って建物(土蔵)の土台となっていた。今回のSA316・216とSA317・217も福島蔵屋敷跡の建物土台と同様のもので、SA316・216が南に、またSA317・217は北に抜がる建物の土台であった可能性が考えられる。

3)まとめ

今回の調査は、中世末~近世末の整地や生活面が検出され、近世初頭に設置されて修復使用され続いた石組や、近世後半に新たに設置された石列など、土地利用のようすが見える好資料を得ることができた。限られた面積の中での調査であるため、検出した遺構の全貌は不明な点が多いが、周辺の調査が進むにつれ、より詳細な歴史的景観が復元できるものと思われる。今後の調査成果とあわせてさらなる検討を行いたい。

引用参考文献

大阪市文化財協会2003,『大坂城跡』Ⅳ

2005,『大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・2003・2004)』

大阪文化財研究所2011a,『中央区南新町二丁目における建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS10-10)報告書』

2011b,『大阪市福島区福島蔵屋敷跡発掘調査報告』

佐久間賀士ほか1989,『よみがえる中世2 本願寺~天下へ 大坂』平凡社

調査地全景
(第5層上面、北から)



第3層上面
(北から)



第2層上面
(北から)



第1層上面(北から)



SA216(左)とSA115(右)
(北東から)



SA115(南から)



SA316・216立面
(北から)



中央畦断面
(東から)



拵張区第3層上面
(西から)



中央区森ノ宮中央1丁目における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS12-6)報告書

調査個所 大阪市中央区森ノ宮中央1丁目393-1他
調査面積 約25m²
調査期間 平成24年6月4日～6月8日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、市川創、田中裕子

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地北部の東縁を南北に走る玉造筋と、大坂城惣構の東縁を限る鶴間川の間に位置している(図1)。周辺では多数の調査を行っており、中でも調査地の西方に位置する森の宮遺跡は縄文時代中期から近世まで続く複合遺跡で、縄文時代後期～弥生時代前期に属する西日本最大級の貝塚を検出している[難波宮址顕彰会1972・1978]。また、調査区の南方に位置するOS10-9次調査では、縄文時代から幕末までの地層を確認し、海底から扇状地、湿地、耕作地、沼地、造成地を経て再び耕作地として利用されるという、堆積環境および土地利用の変化を把握した[大阪文化財研究所2011]。

今回の調査では、事前に大阪市教育委員会によって敷地内の試掘調査が行われた。その結果、現地表下1.9m以下で徳川期初頭の遺物包含層や遺構面が確認されたため、発掘調査を実施することになった(図2)。

調査は6月4日より開始し、現地表下約1.9mまで機械による掘削を行った。その後、人力により遺構の検出、掘下げ、記録などの作業を適宜進めていった。6月8日には機材類の撤収を含むすべての作業を完了した。



なお基準点は、magellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はTP値(東京湾平均海面値)を用いTP+○mと表記する。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

調査地は上町台地東側の平坦地に位置し、周辺の標高はTP+3.3~3.8mほどである。今回の調査では現地表下2.5mまでの地層について、現代盛土の下位を第1~6層に区分した。

第1層：暗灰黄色のシルト質砂からなる整地層であり、炭・焼土を含む。層厚は最大22cmであった。時期を特定できる遺物は出土していないが、上下の地層との関係、および炭を多く含むことから第2次世界大戦後の可能性がある。

第2層：オリーブ褐色の炭混りシルト質砂からなる盛土層である。層厚は最大44cmである。上下に2分でき、このうち下層はシルトの偽礫を含んでいた。機械掘削時に磁器製の骨子が出土しているため、地層の時期は近代である。

第3層：第3a~3c層の3層に細分できた。第3a層は明黄褐色砂層とオリーブ褐色シルト層の互層からなる盛土層で、計8枚の薄層が重なっている。第3a層の厚さは最大56cmであった。砂層は粗粒砂を主体として中粒砂~極粗粒砂までを含み分級が悪く、最上位の砂層には大礫およびシルトの偽礫が混っていた。なお、調査区北部では第3a層上面で石列を検出しており、石列より北には第3b層が堆積することから、敷地境として機能していた可能性が高い。第3b層は炭混りの暗灰黄色シルト層で、最大層厚は46cmであり、調査区の北端部でのみ確認した。第3c層は第3a~3b層の下位に存在する炭混りの灰黄褐色シルト層で、最大層厚は30cmである。本層からは徳川期の陶磁器類が出土した。

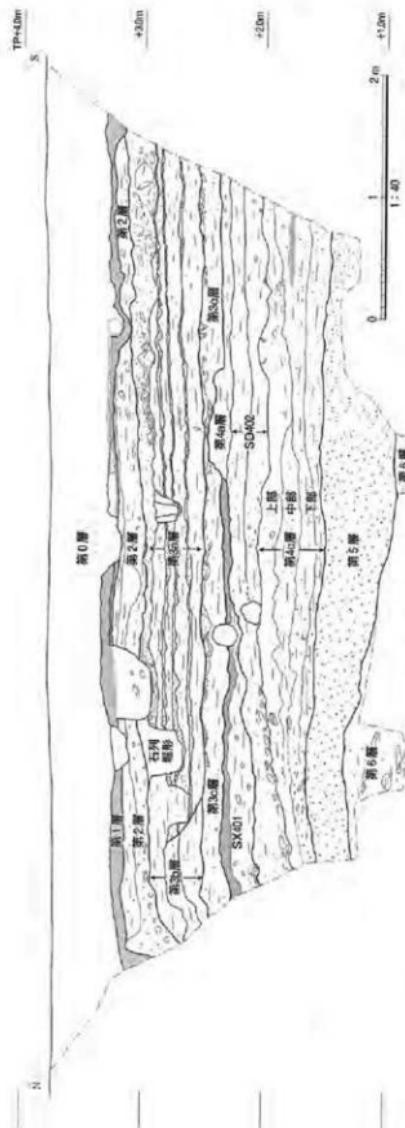
第4層：上位から第4a層、第4b層、第4c層に細分できる。第4a層は黄灰色のシルト質砂からなる作土層で、炭・焼土・中礫が混じる。厚さは最大24cmで、上面ではSX401を検出している。調査区南部では畦畔上の高まりが確認でき、また、岩相からも作土と考えられる。



図3 地層と遺構の関係図

第4b層は暗灰黄色のシルト質砂からなる作土層である。最大層厚は30cmである。17世紀までの肥前磁器・肥前陶器などを含む。本層の上面ではSD402を検出した。

第4c層はオリーブ灰色の砂質シルト層である。最大層厚は54cmで、南側ほど厚く堆積する。第4c層はさらに細分でき、上部層は中部層を耕起した作土であり、炭を含み下面には鉄分が沈着する。中部層は砂を多く含む盛土層である。下部層は細粒~中粒砂質シルトからなり、第5層上面が低くなる調査区南半に分布した。自然堆積層である。第4c層からは土師器や瓦器、徳川期に下る肥前陶器が出土した。



第5層：暗灰黄色の砂層で、層厚は最大42cmである。細粒砂から小礫までを含み分級が悪く、また、堆積構造を持たないため、盛土であるといえる。土師器・瓦器・瓦質土器のほか、大型哺乳類の大腿骨などが出土した。

第6層：暗オリーブ灰色の砂質シルト層で、シルトの偽縞を含む。層厚は50cm以上あり、上面は南に向って低くなる。本層の上面に直接第5層が堆積していることから、第5・6層は連續的に行われた盛土である可能性がある。古代の瓦が出土しており、地層の時期は古代以降である。

ii) 遺構と遺物

a. 第6層上面の検出状況(図5)

先述のとおり、第6層上面は南に向かって傾斜しており、北端はTP+1.36m、南端はTP+0.90mで高低差が0.46mある。本層上面で明確な遺構は検出できなかった。なお第6層と連続して行われた盛土の可能性がある第5層の上面も、高低差が0.26mある。

b. 豊臣～徳川前期の遺構と遺物

第4a層の上面で不正形な落込みSX401、第4b層の上面で溝SD402を検出した(図6)。

SX401 調査区の北部で検出した。遺構の北・東部は調査区外へと拡がる。遺構の規模は南北2.18m以上、東西1.16m以上で、検出面からの深さは0.27mである。埋土は細粒～中粒砂質シルトで、下部には中礫が混る。出土遺物は須恵器のほか、土師器・瓦質土器・瀬戸美濃焼陶器・瓦などがある。このうち図8に示した8は土師器の焙燒で、C類に属する資料であることから[難波洋三1992]、当遺構の時期は17世紀後半以降である。

SD402 調査区の東端を南北に延び、北部はSX401によって破壊されていた。南北長

図4 調査区実際地盤断面図



図5 第6層上面平面図

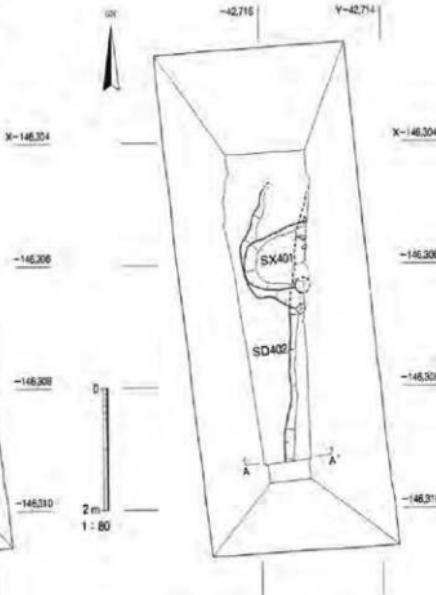


図6 第4層上面遺構平面図

6.00m以上、東西幅0.53m以上、深さ0.34mの規模で、調査区外へと延びる。埋土は上下に2分でき、上層は炭を含む中粒～粗粒砂質シルト層、下層は第4b層由來の偽礫を含む中粒～粗粒砂質シルト層であり、加工時形成層の可能性がある(図7)。当遺構からは、須恵器のほか、土師器・瓦質土器・瀬戸美濃焼陶器・丹波焼・備前焼・肥前陶器・肥前磁器・中国産青花・瓦が出土した。

このうち、肥前磁器碗1・2、肥前陶器皿3・碗4・5、備前焼6、中国産青花7、土師器培壘9・移動式焜炉11、瓦質土器鍋10を図示した(図8)。このうち1は器壁が厚く、圓線の呉須が緑色に発色する。高台端部には融着痕が顕著に確認できる。2は外面に呉須で一重網目文を描き、内面には焼成時の降灰が多く付着する。3は外面の下半を露胎とし、底内面部および高台端部に砂目積の痕跡を



図7 SD402断面図

それぞれ3箇所に有する。また、高台には1箇所切込みが施されている。4・5はともに外面の下半が露胎で、4は高台の端面に糸切り痕を残す。6は壺の底部と考えられる。断面には粘土鉢の単位が確認でき、外面には自然釉が厚く掛かる。また、底面には焼成時の重焼き痕を有する。7は漳州窯産青花の大皿で、口縁部は外折する。口径は31.6cmに復元できる。9は外型作りで口縁部外面に搔上げ痕を有するC類の培壘である。外面には被熱痕、内面底部にはオコゲの痕跡を有する。10は鍋と思われる瓦質土器である。体部は

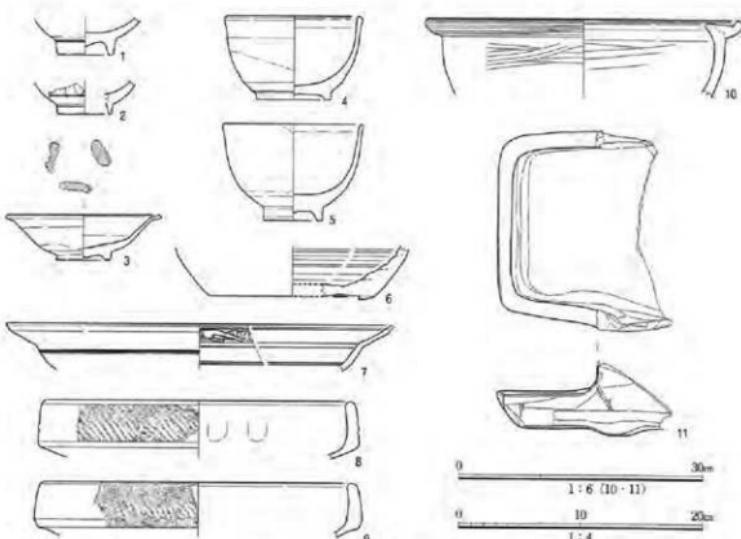


図8 SX401・SD402出土遺物実測図
SX401(8), SD402(1-7・9-11)

湾曲し、口縁部の上面は平坦で端部を上方へ拡張する。調整は内面はヘラナデ、口縁部上面から外面にかけては太い原体によるヘラミガキである。また、全体に強く被熱し表面は剥離が著しい。11は内面をナデ、外面をヘラケズリおよびナデによって調整している。内面には被熱痕を有する。2や9によって、SD402は17世紀後半に位置づけられよう。

c. 各層出土の遺物および遊離資料

各層出土遺物のうち、時期を示す資料、および特徴的な資料を図9に示した。

第4c層出土資料では、須恵器杯B蓋12・杯G蓋13、肥前陶器皿14、埴塙15がある。このうち12・13は時期が遅る遺構が近隣に存在することを想定させる。14は形態から見て德川初期以降に属する資料である。15は砲弾形を呈する小型の埴塙で、内外面とも被熱し、一部が発泡している。赤色を呈する金属が溶着している。16は漳州窯産青花の皿であるが、側溝掘削中に出土した資料であり第4a～4cのいずれの層準に属するものか明確でない。

第5層出土資料では、弥生土器17、土器器皿18、須恵器19を図示した。17は弥生土器の底部で、外面にはわずかにハケメが残る。明確でないが、中期に属する資料か。19は壺の口縁部であり、口縁箇部を内側に肥厚させる。18が出土していることから、第5層の時期は中世以降である。

第6層からは、平瓦20が出土している。凹面に布目痕を残し、凸面にはわずかに斜格子目タタキが観察できる。古代に属する資料であろう。第6層から出土した資料は20のみである。

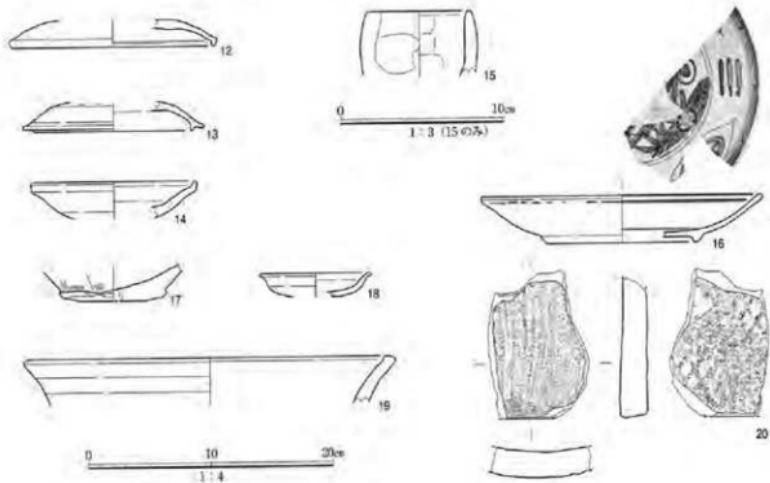


図9 各層出土遺物実測図
第4c層(12~15)、第4層(16)、第5層(17~19)、第6層(20)

3)まとめ

以下、時代ごとに本調査区での調査知見を述べる。

まず今回の調査地周辺では、西方の森の宮貝塚のほか、南方のOS11~5次などでも弥生~古墳時代の地層・造構・遺物を検出している。しかしながら今回の調査区では、調査深度が浅かったこともあり、該期の地層を確認することができなかった。

当地が積極的に開発されるのは、第6・5層による盛土を経て、第4層の段階である。第4層の最下部は自然堆積層(第4c層下部)であり、その上部に盛土(第4c層中部)がなされ、耕起されて(第4c層上部)、以後は少なくとも17世紀後半まで耕作地として利用される(第4a・b層)。第4b層の上面で検出したSD402も、こうした耕作に係わる造構であろう。

このように、大坂城にはほど近い当調査地ではあるが、おそらくは低湿な立地環境により、豈臣期を経て徳川期に至ってもしばらくは耕作地として利用された。居住域として開発されるのは第3層の段階である。時期を明確に示す遺物が出土していないが、それは少なくとも18世紀以降のことである。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2002、「森の宮地区の調査」：『大坂城跡VI』、pp.189~204

大阪文化財研究所2011、「中央区玉造一丁目540-1ほか12筆における建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS10~9次)報告書」

2012、「中央区森ノ宮中央一丁目における建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS11~5)報告書」

雑波宮址歴史会1972、「森の宮遺跡 第1・2次調査報告」

1978、「森の宮遺跡 第3・4次発掘調査報告書」

雑波洋三1993、「第6節 徳川氏大坂城期の炮塔」：『雑波宮跡の研究』第九、pp.373-400

調査地遠景
(北から)



東壁地層断面
(南西から)



第6層上面検出状況
(北から)



中央区内淡路町一丁目16番における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS12-7)報告書

調査個所 大阪市中央区内淡路町1丁目16番
調査面積 44m²
調査期間 平成24年7月6日～7月10日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、黒田慶一

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は現大阪城西外堀の西方500mで豊臣氏大坂城惣構内に位置する。周辺では東方11mのOS93-20次調査で、豊臣～徳川期にかけての遺構・遺物が数多く見つかるとともに、古代に遡る遺構も発見されている。周辺の特筆すべき古代遺構としては、南東約150mのOS91-32次調査、北東約180mのOS90-50次調査で奈良時代の建物群が検出され、また北西約100mのOS90-51次調査では、地表下5mという谷地形の底部からも奈良時代の建物群が見つかっている〔大阪市文化財協会2003〕。

大阪市教育委員会の試掘調査で地表面下2.3mにおいて、近世の遺物包含層と遺構面を確認したことから、本調査を行うこととなった。2012年7月3日に工事側の機械掘削開始時に立会い、地表面下2.3mまでの掘削を指示し、掘削完了時に調査を着手することとした。2012年7月6日より調査を開始し、敷地北東部に南北11.0m×東西4.0mの調査区(図2)を設定した。調査は人力によって遺構検出・掘下げ・写真撮影・図面作成などの作業を行い、7月10日に現場作業を完了し撤収した。

なお、基準点はmagellan社製ProMark 3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はTP値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4・7)

調査開始時は、平坦な市街地の敷地を、調査区周辺のみGL-2.3mまで掘削していた。

第0層：コンクリート片を多く含む層厚25cm以上の砂礫層で、旧建物解体後の整地層である。

第1層：層厚10cmの明黄褐色(2.5Y6/6)粘土質シルトの徳川期の整地層である。



図1 調査地位置図

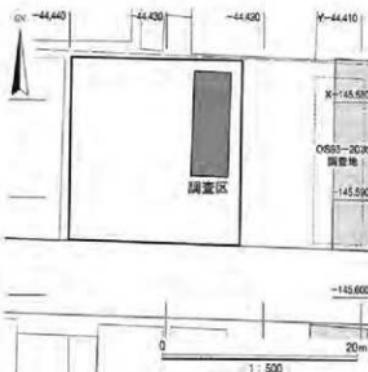


図2 調査区位置図

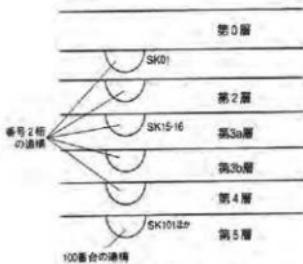


図3 地層と遺構の関係図

代～中世の整地層である。

第5層：層厚40cm以上の明黄褐色(10YR6/6)粘土の地山層である。

ii) 遺構と遺物

遺構はSK01を第1層上面、SK15・16を第3a層上面で検出したほかは、第5層(地山)上面での検出である。古代～中世遺構は遺物と土色・土質で判断した。

古代～中世の遺構[遺構番号100番台] (図4・5・7)

SK101 長さ1.7m以上、幅0.7m、深さ0.3mの南北溝状の土壤で、上部は褐色(10YR4/4)粘土、下部はにぶい黄褐色(10YR5/3)粘土で埋まる。土師器皿5が出土した。14～15世紀前半の遺構と考えられる。

SK102 長さ1.0m、幅0.6m、深さ0.2mの楕円形の土壤で、上部は黄褐色(2.5Y5/3)粗粒砂質粘土、下部は黄褐色(2.5Y5/4)粗粒砂質粘土で埋まる。須恵器有蓋高杯2や土師器片が出土した。2は底部にカキメを有し、6世紀前半のものと思われる。

SK103 長さ0.7m、幅0.6m、深さ0.1mの不整椭円形の土壤で、黄褐色(2.5Y5/3)粗粒砂質粘土で埋まる。土師器・須恵器片が出土した。

SK104 直径0.3m、深さ0.1mの小穴で、オリーブ褐色(2.5Y4/4)粘土質粗粒砂で埋まる。遺物は出土しなかった。

SK105 長さ0.5m、幅0.4m、深さ0.1mの土壤で、オリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒砂質粘土で埋まる。遺物は出土しなかった。

SK106 直径0.3m、深さ0.1mの小穴で、オリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒砂質粘土で埋まる。遺物は出土しなかった。

SK107 直径0.3m、深さ0.3mの小穴で、褐色(10YR4/6)粘土で埋まる。遺物は出土しなかった。
近世の遺構[遺構番号2桁] (図4・6・7、写真1・2)

SA23 東西方向の横列で、SP18・07・20からなる。柱の芯々間は1.8～2.0mで、柱掘形は直径0.3～0.4mである。SA24とは平行で、芯々間は0.7m離れており、2条の横列間には高低差0.3mの段があり、両者は同時に存在した可能性がある。SP07は残存する深さが0.1mで、黄褐色(10YR5/6)粘土質粗粒砂を埋土とし、SP18は深さ0.5mで、褐色(10YR4/6)粘土質粗粒砂を埋土とする。

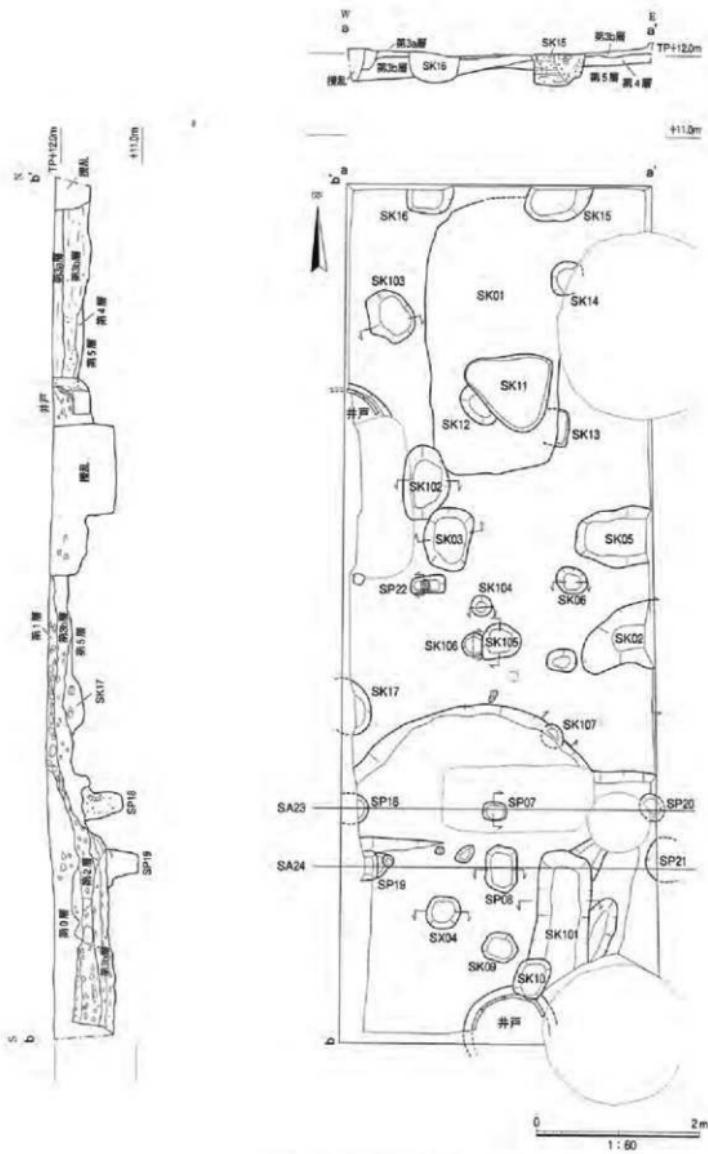


图 4 造桥平面·桥梁断面图



写真1 SK05とSK02断面(西から)

SA24 東西方向の横列で、SP19・08・21からなる。柱の芯間は1.8~2.0mで、柱掘形は方形か円形を呈し、一辺または直径が0.4~0.6mである。SP08は深さ0.4mで、にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土質粗粒砂を埋土とし、SP19は深さ0.4mを測り、にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂質粘土を埋土とする。

SK04 直径0.4m、深さ0.3mの土壤墓で、火葬した壮年男子1体分の人骨(註1)を、にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土質粗粒砂で埋めている。土器などの遺物は出土しなかった。

SK01 南北3.4m、東西1.6m、深さ0.5mの19世紀の瓦溜めで、焼土で埋まる。

SK02 長さ1.0m以上、幅0.8m、深さ0.4mの土壤で、黒漆器碗7と焼け壁が出土した。7は高台が高く、底部内面に朱で草花文を入れる。土壤断面は写真1のようにH鋼を打設した部分は雨水で還元され黄褐色(2.5Y5/4)を呈するが、本来はオリーブ黒色(5Y2/2)粘土質粗粒砂を埋土とした。

SK03 一辺0.6~0.8m、深さ0.1mの土壤で、暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質粗粒砂で埋まる。平瓦が出土した。

SK05 長さ1.0m以上、幅0.8m、深さ0.3mの土壤で、オリーブ黒色(5Y2/2)粘土質粗粒砂で埋まる。土師器片が出土した。

SK06 長径0.4m、短径0.3m、深さ0.5mの土壤で、粗粒砂含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粘土を埋土とする。

SK11 SK01の下層で検出した一辺1.0m、深さ0.1mの三角形の土壤である。灰オリーブ色(5Y6/2)シルト質粗粒砂で埋まる。

SK15 長さ0.8m、幅0.4m以上、深さ0.4mの土壤で、灰オリーブ色(5Y6/2)シルト質粗粒砂で埋まる。

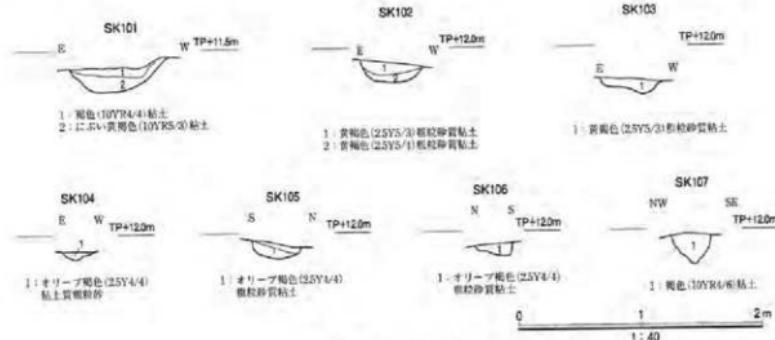


図5 古代遺構断面図

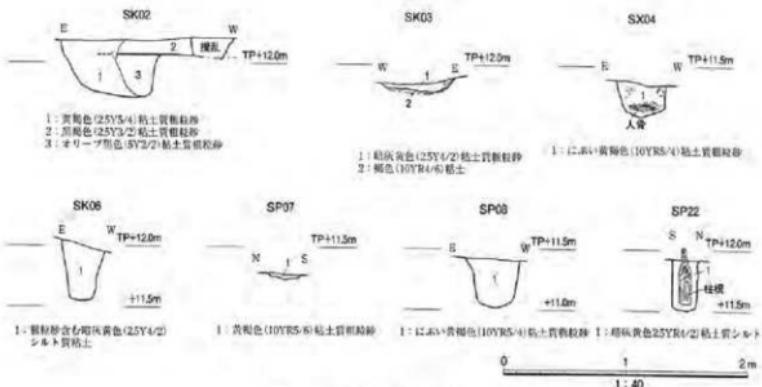


図6 近世遺構(番号2)断面図

SK16 一辺0.6m、深さ0.4mの方形の土壙で、暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂質粘土を埋土とする。

SK17 直径0.7m、深さ0.3mの土壙で、褐色(10YR4/4)粘土で埋まる。

SP22 長さ0.4m、幅0.2m、深さ0.4mの柱穴で、一辺9cmの角材の柱を暗灰黄色(2.5YR4/2)粘土質シルトで埋めている。柱根8が立った状態で出土した。

このほかSK09・10・11・12・13の直径0.4~0.5m、深さ0.1~0.2mのシルト質粗粒砂を埋土とする土壙を検出したが、いずれも遺物はなかった。

Ⅲ 各層出土の遺物(図7)

第3b層出土の須恵器杯身1・蓋3の内、3は口頭部にヘラによるキザミを施し、いずれも6世紀後半に位置付けられる。中国産青磁輪花皿4は口縁部内面に陰刻を施す。15世紀のものと思われる。

第2層出土の中国産青花碗6は、景德鎮製である。

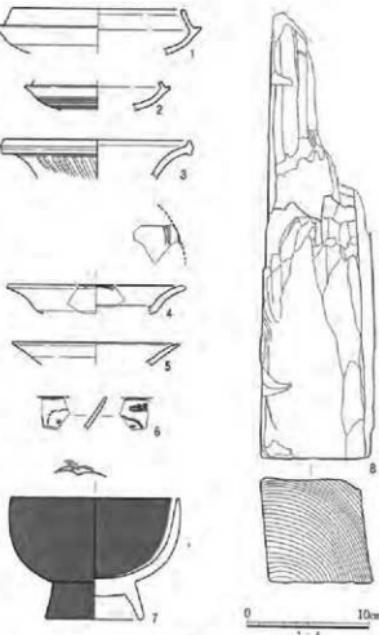


図7 出土遺物実測図

第3b層(1・3・4)、SK102(2)、SK101(5)、

第2層(6)、SK02(7)、SP22(8)

iv) 土壌墓SX04から出土した人骨の肉眼観察による所見(図版2) (註1)

ほぼ全身の骨格が残存しているが、完形で残るものは1つもなく断片状のものや小片になったものばかりである。また、出土した骨はいずれも焼成しており、白色や灰白色に変色し、ねじれや亀裂があり変形が著しい。以下に人骨の残存状況、性別、死亡時の年齢、病変について得られた所見を記す。

① 残存状況

頭蓋骨：前頭骨、頭頂骨、側頭骨、後頭骨など頭蓋冠を形成する部位、上顎骨、下顎骨など顔面部の骨を同定できるが、いずれも断片となって残存している。深い亀裂があり破損し、変形している。歯は1本だけ残存していたが、歯根の先端部分が残っているだけで、歯冠部分は残存していない。歯槽部分の骨が残っており、上顎骨では左中切歯から犬歯まで、下顎骨では右の中切歯から第3大臼歯までと左の中切歯から第2大臼歯もしくは第3大臼歯までを同定できる。同定できた歯の歯槽部分は開放していることから、生前はこれらの歯が顎骨に釘植していた。下顎骨は正中で2つに破損し、左右列は右よりも変形が激しい。

肋骨：2cmから7cmほどの小断片となっているものばかり20点ほどだけしか同定できない。表面が剥離するものや変形するものがあり、白色や灰白色に変色している。

椎骨：頸椎、胸椎、腰椎それぞれの椎体部分周辺の断片が残存している。それぞれ3、4個ずつ確認できるのみで、すべての椎骨は残っていないようである。椎体部分の表面には、細かな亀裂が一面に入っている。

寛骨：腸骨稜、耳状面周辺、恥骨結合、寛骨臼の小さな断片が10数点残存している。深い亀裂や変形が認められる。白色に変色しているが、腸骨稜の断片は灰色がかったり。

四肢長骨：上腕骨、桡骨、尺骨、大腿骨、膝蓋骨、脛骨、腓骨を同定できる。縱方向に割れているものや、長軸横方向に深い亀裂が輪状にいくつも入り断片化しているもの、強くねじれ湾曲しているものばかりである。

手骨・足骨：右の距骨、左右の踵骨、左足の第1基節骨、部位不明の指骨6点が残存する。保存状態の良いものもあるが、いずれも破損して断片状で部分的にしか残っていない。

その他：同定不明の細かな破片が多数残存している。

残存する骨で同定できたものの中には、重複する部位がなかったことから土壌墓には1体分の遺骨が残っていたものと思われる。骨の原型が崩れるほど変形し、完形状態で残るものがないような保存状態であるため、顎かたちや身長など詳細な身体的特徴はわからない。

焼かれた時の状況を骨の状態から推測すると、骨は焼成による変形が著しく、四肢長骨においては縱方向や横方向の亀裂やねじれが認められた。これらの特徴は筋肉などの軟部組織が残った状態で焼かれたときの特徴であることから、死後まもなく茶毬にふされたと推測できる。さらに、多くの骨は焼成により白色に変色しているが、寛骨の腸骨稜の断片や肋骨断片、部位不明の小片で灰白色的ものが確認できる。こうした色調の違いは、部位によって焼け方にむらがあり、灰白色的ものは焼成のときの温度が他よりも低かったと考えられる。また遺骨が白色に変色していることや硬く変質していることから、高温で焼かれたと考えられる。ちなみに、歯の歯冠部分のエナメル質は、焼成温度が500

度を超えると剥離して破損するといわれる。本人骨には歯冠部分は全く残らず、歯根部分が遺存していただけなので、おそらくこの温度以上の高温で火葬されたと考えられる。

②性別

残存する骨は破損が激しく変形も認められるが、性差を強く示す寛骨の恥骨結合部分が残存しており、恥骨体の腹側面や恥骨下肢内側面の特徴からは、男性の遺骨と推定できる。また頭蓋骨の外後頭隆起が強く発達し、最も厚いところで12mmあることや頭蓋冠の内板から外板までの厚さが8mm程度で、いずれも厚みがあることから、焼成で収縮していると仮定しても男性的な特徴があるといえる。

③死亡時の年齢

年齢推定は、寛骨の恥骨結合面の状態と頭蓋骨の縫合の癒着状態から判断できる。恥骨結合面は下部1/3程度が残存しており、その表面は平滑になり、面の縁が明瞭になっている。Toddの分類と比較すると、壮年後半から老年前半の年齢の様相を示している[Whit & Folkens 2005]。また、断片的にしか確認できないが、頭蓋骨の縫合の癒着をみると、矢状縫合やラムダ縫合の内板外板ともに未癒合であるが、冠状縫合の外板が一部癒合しているのを確認できることから、老年に達していたと考えられる。さらに椎骨の椎体の縁の部分がくちばしのように突出してリッピングスが形成されていることも老年の可能性が強い。また、下頸骨の歯槽が生前に吸収されて閉鎖していないことから、老年の域には達していないと考えられる。これらの特徴から判断して、壮年後半から老年で死亡したと推定する。

④病変

椎骨椎体のリッピングスと腰椎上関節突起の関節面に変形が認められ、これらは加齢による病変と思われる。ほかにも、上下に連なる2つの胸椎で、椎体の前方部分に仮骨が形成されて癒着しているのを確認できる。焼成により骨表面が溶けて癒着したような状態ではなく、椎体とは別に骨が形成された状態である。診断はできないが、椎体の腹側に位置する前縦靭帯が骨化した可能性を考えられる。

⑤まとめ

土塚墓より出土した骨は、1体分の火葬された人の遺骸であり、壮年後半から老年の男性のものであると考えられる。身体的特徴は不明であるが、生前には椎骨に病変が生じていた。また、死後もなく火葬されたと推測できる。

3) 考察

今回の調査では、包含層・遺構とも遺物が少なかったので、東隣のOS93-20次調査(図8)をもとに遺構の時期を検討したい。今回の調査は第2層以下では肥前磁器が出土しなかったので、豊臣期以前の遺構群である可能性が高い。またSA24の東西横列とOS93-20次調査のSB101の南桁柱筋は通



写真2 SX04断面・人骨検出状況(北から)

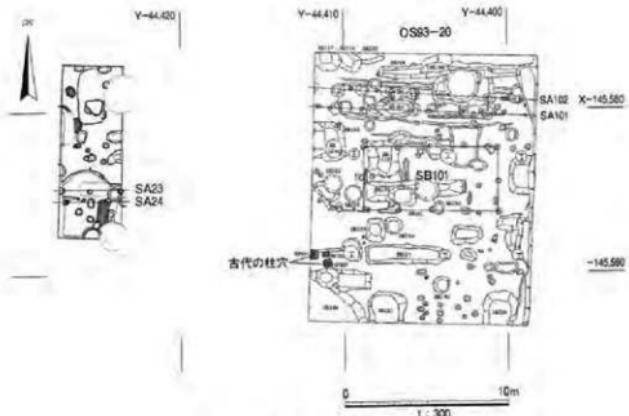


図8 OS93-20次調査との関係図

る可能性が高く、敷地区画は同じ規格で施工されたものと思われる。

OS93-20次調査では豊臣後期・徳川期に地山の削平を伴う整地が行われ、豊臣後期の遺構が主である。同調査地西端から3m強の位置で、SB101の西妻柱筋やゴミ穴と思われる土塊群が留まっていることから、その位置が屋敷境、あるいは屋敷地内での土地利用の境界とされていた可能性が高いと考えられている。

江戸時代の絵図、図9として挙げたのは、享保末(1730)年頃成立したと考えられる『摂津大坂図鑑綱目大成』[玉置豈次郎1980]であるが、今回調査地とOS93-20次調査地との間に南北道があった可能性が考えられる。その道が豊臣後期まで通るか、またこの地に比定できるかは未詳だが、検討の余地はあろう。

もうひとつ、OS93-20次調査では北側で豊臣後期の大規模な柵SA101・102を検出しているが、今回の調査地には続かない。

OS93-20次調査では南西部で、古代に通る柱穴3基を検出したが、今回の調査地でもSK101など古代遺構が見つかった。

土壙墓SX04は、徳川期を通じて当地は町屋で寺院など見られないことから、豊臣期以前のものと考えられる。

4)まとめ

東隣のOS93-20次調査と同様、古代と豊臣期と思われる遺構を検出した。火葬人骨を埋葬した土壙墓



図9 『摂津大坂図鑑綱目大成』での調査地周辺

SX04は当地の変遷を考える上で重要な遺構である。

今後の周辺地の調査で、古代と農耕期の当地の性格を考えていきたい。

註

(1)奈良県立橿原考古学研究所所員の大藪由美子氏に火葬人骨の鑑定をしていただいた。iv)は同氏の玉稿である。記して感謝したい。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2003、「大坂城跡」Ⅳ

主體豊次郎1980、「大阪建設史夜話」、大阪都市協会

White, T. D. and Folkens, P. A. 2005, 「Estimation adult age from the pubic symphyseal surface」『The human bone manual』 Elsevier academic press pp. 374-379

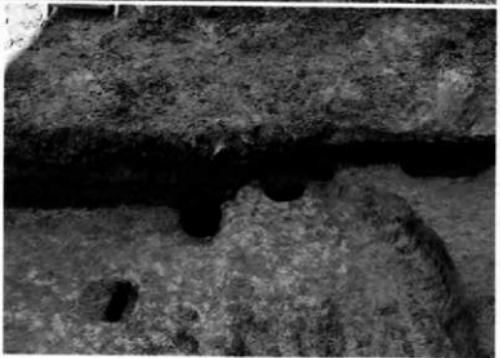
第5層上面
(南から)

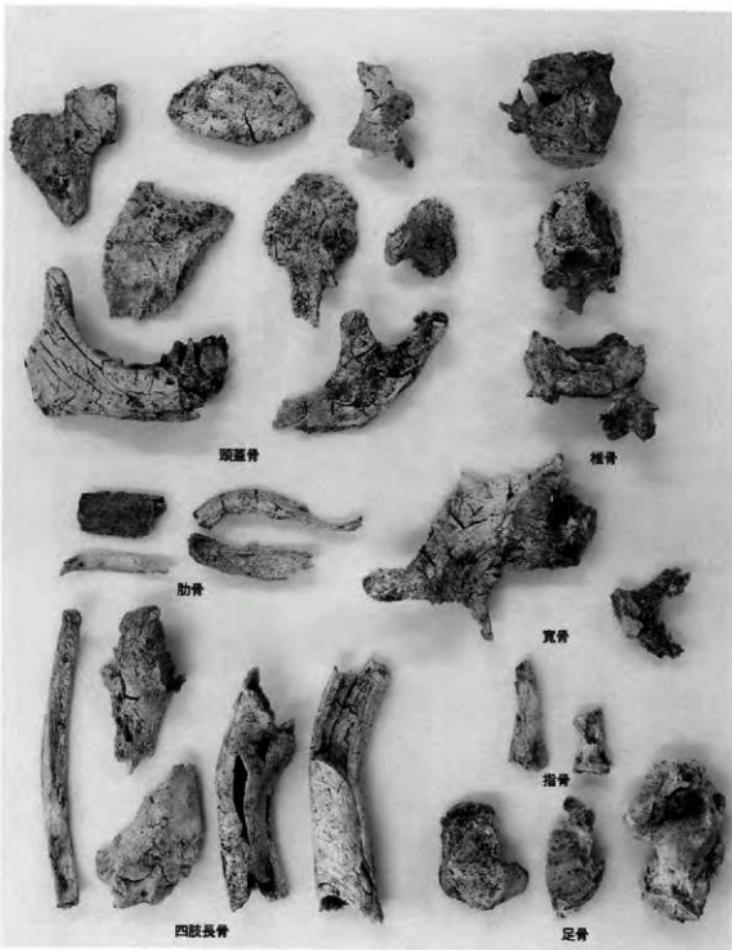


第5層上面
(西から)



西壁地層断面





土塚墓SX04から出土した火葬人骨(大蔵由美子氏撮影)

中央区内本町一丁目における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS12-8)報告書

調査個所 大阪市中央区内本町1丁目10-1・10-2
調査面積 50m²
調査期間 平成24年6月26日～6月29日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、大庭重信

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は、大阪城南西角から西側に直線に延びる本町通の南側に面した敷地で、豊臣後期には三ノ丸の西側に拡がる惣構内に位置する(図1・2)。

周辺では多くの調査が行われており、本調査の西隣ではOS89-6次・91-4次・00-51次の各調査が行われ、古代から近世までの遺構・遺物が確認されている[大阪市文化財協会2002・2003]。

建物建設工事に先だって大阪市教育委員会が4月24日に実施した試掘調査の結果を受け、6月26日より調査を開始した。まず、試掘調査の結果をもとに、事前に事業者側が現地表下1.4mまでを機械で掘削し、その後調査に着手した。平面での遺構検出作業は、調査開始面である豊臣後期の第2層上面と、地山である第4層上面を行った。6月29日にはすべての記録作業を終え、調査を完了した。

本報告書で用いた方位は、現場で作成した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。また水準値は東京湾平均海面値(T.P.値)であり、本文・挿図中ではTP+○mと略記した。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

調査区は東から西に低くなる斜面地に位置しており、調査で確認した地層も東が薄く西が厚く堆積していた。現代の擁乱および盛土である第0層以下、第1~4層に区分した。

第1層：第1a層と第1b層に区分した。第1a層はオリーブ褐色中粒~粗粒砂質シルトからなる整地層で、調査区のはば全域に分布し、層厚は10~30cmある。平面的な調査は行っておらず、調査区壁面で



図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

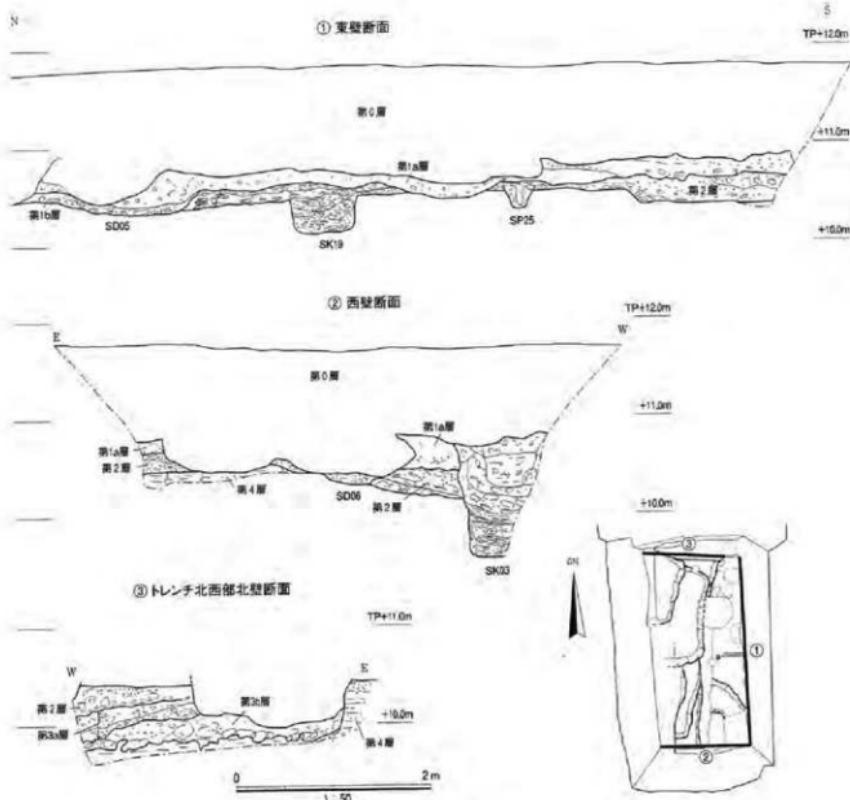


図3 地層断面図

確認した。第1b層は焼土の偽礫層で、調査区北端のSD05の北肩付近に部分的に分布していた。第1b層には豊臣後期の肥前陶器・志野焼・中国青花が伴うことから、本層は大坂夏ノ陣に伴う焼土層と考えられる。また、第1層上面から掘込まれた遺構の中で最も古い時期のものには、17世紀末～18世紀初頭の遺物が含まれることから、第1a層による整地は17世紀代の徳川期に行われたと判断される。

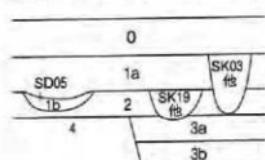


図4 層序と遺構の関係

第2層：地山起源の黄褐色砂質シルト偽礫を含む中～粗粒砂からなる整地層である。調査区全面に分布し、層厚は東半で10cm、西半で30cmある。上面は硬く締まっており、豊臣後期の遺構を確認した。

第3層：調査区北西部の落込み30内に分布しており、第3a層と第3b層に区分した。第3a層は上部が砂質シルトの小偽礫を

含む暗灰黄色細粒～粗粒砂、下部が明黄褐色砂質粘土の偽礫を多く含む暗灰黄色中粒～粗粒砂質シルトからなり、層厚は20～40cmある。第3b層は古土壤起源のにぶい黄褐色細粒～粗粒砂質シルト偽礫を多く含む暗灰黄色細粒砂～粗粒砂からなり、層厚は20～30cmある。第3a・3b層からは古代の須恵器・土師器が出土し、第3b層からは奈良時代の土師器皿1が出土した。このため、古代の地層が遺存していることが期待されたが、第3a・3b層とともに偽礫で構成され、第3b層の下底で明瞭な加工痕が確認された点から、古代の地層を後世に掘削して再堆積したものと判断した。

第4層：にぶい黄褐色中粒砂質シルトからなる地山である。最も高い箇所の標高は、TP+10.6mである。

ii) 遺構と遺物(図5～7)

遺構検出作業は、第2a層上面と第4層上面で行った。このほか、第1a層上面から掘り込まれた遺構を分けると、大きく3時期に区分することができる。

a. 中世～豊臣期(第4層上面)

地山である第4層上面では、調査区北西部で落込み30を検出した。南北4.0m以上、東西2.0m以上、深さ0.6mあり、東から西に2段に下がる。埋土は前述したように、基盤層に由来する偽礫からなる第3a・3b層であり、掘削したのち人為的に埋め立てたものである。第3b層から出土した奈良時代の土師器皿1(図6)が、掘削された基盤層に含まれていたと考えると、遺構が形成されたのは古代以降の、中世～豊臣期の可能性がある。

b. 豊臣後期(第2a層上面)

第2a層上面で、区画溝と考えられる東西方向のSD05とこれに連結する南北方向のSD06、およびこの周囲で土壙・柱穴を検出した。SD05は幅0.9m、深さ0.2m、SD06は幅0.6m、深さ0.1～0.2mあり、SD06を境に西側が一段低くなっていた。SD05の北側にはこれと並行して並ぶ柱穴が2基あり(SP18-27)、SD06の東側にもこれと並行するように柱穴が密集しており、溝に沿って柵があった可能性もある。SD05からは豊臣後期に位置づけられる土師器皿2、瀬戸美濃焼志野大鉢3、肥前陶器碗4が出土した。

SD09は第2a層下面で検出した東西方向の浅い溝で、肥前陶器の破片が出土したことから、時期は豊臣後期である。

SD06の東側には南北約2.7m、東西約0.7mの小判形の浅い凹みSK10があり、床面が熱を受けていた。被熱痕のある床面の上には、他の遺構とは異なる地山起源の砂質シルト偽礫が覆っており、SK10は窯の可能性もある。SK10の南側には部分的に砂利が敷かれていた。SK19はSK10と重複する深さ0.4mの土壤で、埋土中にはSK10に由来するとみられる焼土が含まれていた。

c. 徳川期(第1層上面)

溝(SD02)、土壙(SK01・03・04)を検出した。

SD02は東西方向の小窓模な溝で、肥前陶器の細片が出土した。SK01は焼けた瓦を大量に含む土壤で、19世紀前半代の肥前陶器・肥前磁器・瀬戸美濃焼磁器などが出土した。SK04は調査区北西角で一部を確認した方形土壙で、18世紀後半の肥前陶器が出土した。

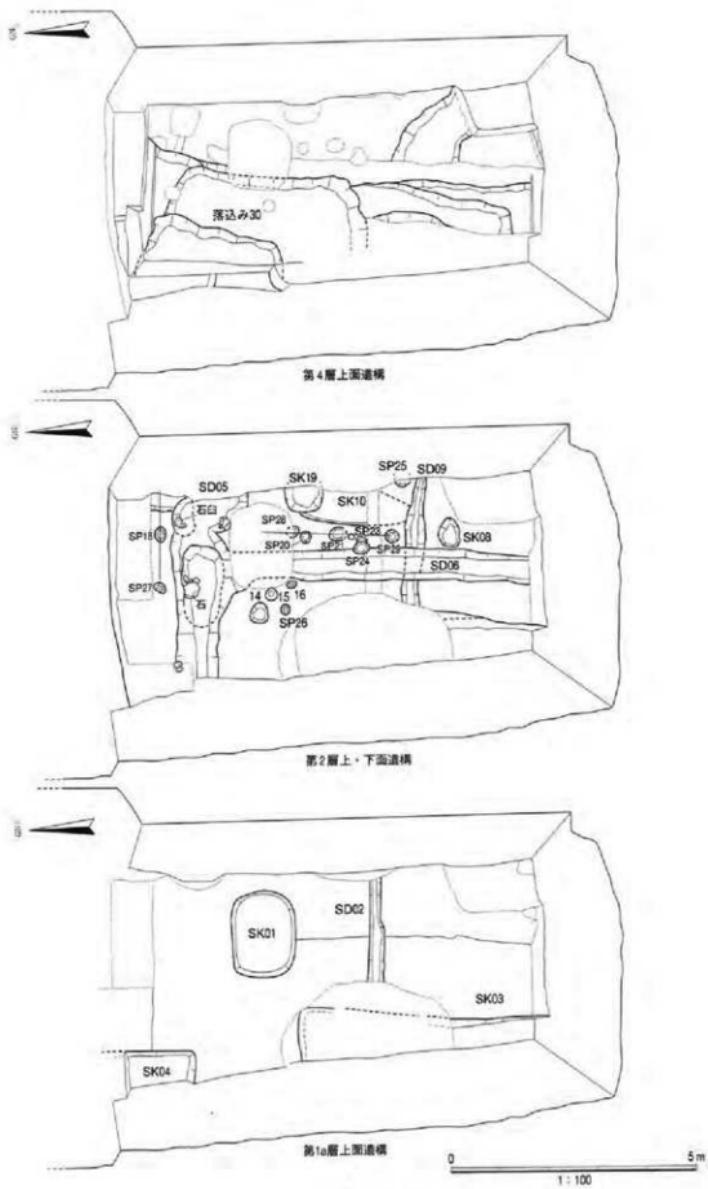


図5 造構平面図

SK03は調査区南西角で東辺を確認した土壌で、第1層上面から1.2mの深さまではほぼ垂直に掘られていた。現代擾乱を挟んだ北側でも同様の埋土の構造が部分的に確認されたことから、南北に細長い大型の土壌と考えられる。下半には木屑や木質遺物が集積しており、上半を偽縛で埋めていた。埋土下半から陶磁器類のほか、木製品が多く出土し、墨書きのあるものも多い。

陶磁器類は代表的な5~8を図化した(図6)。5~7は肥前磁器碗、8は丹波焼摺鉢で、17世紀末~18世紀初頭に位置づけられる。他の陶磁器類もほぼ同時期のものである。

本製品は9~23を図化した(図7)。このうち墨書きのあるものは9~14である。9は木筒と考えられ、片面に「鮑」の文字が読める。10は木札と考えられ、上端中央に小孔を穿つ。片面に3文字、もう片面に4文字が墨書きされている。11は厚さ1.6cmと厚手の板材で、両面に墨で直線・波線が描かれている。12~13は曲物で、高さは12が14.2cm、13が13.5cmで、いずれも桜の皮で縫じ合わせ、内面に黒漆を塗布している。側面に墨書きがあり、12には「馬」の文字が読める。14は板材の木製品で、片面に2文字が墨書きされている。

15は刀子の鞘で下端付近に目釘孔が残る。表面に文字が陰刻され、「作や」(作や/くるまや)と読める。16は刀子などの工具の柄とみられるもので、外面に黒漆を塗布した後、片側に竹もしくは樹皮が巻かれている。一木造りで、断面が1.6cm×2.2cmの長方形の孔が貫通している。17は木籠で、基部に円孔が空けられている。18は運搬材の先端に空けられた棧孔の部分を、不要なものとして加工時に切り落とした鼻縁である。大坂城下では東横堀川沿いのOS08-5次調査で豊臣前期の鼻縁が大量に出

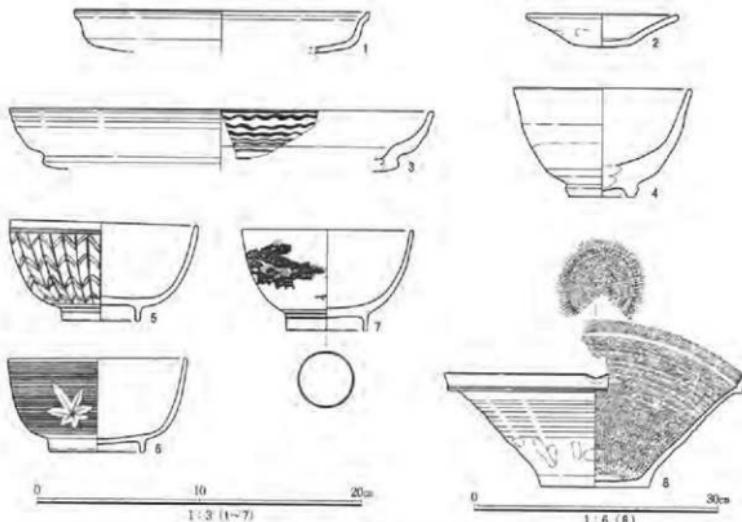


図6 出土遺物実測図(1)
第3b層(1)、SD05(2~4)、SK03(5~8)

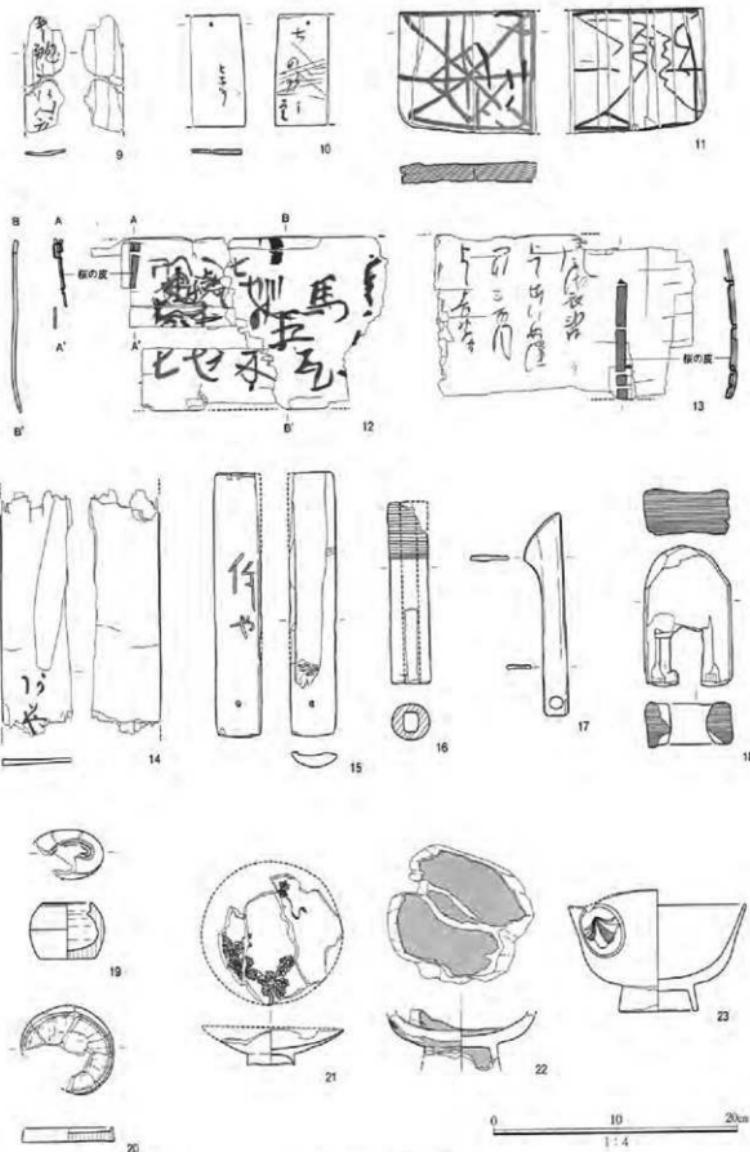


図7 出土遺物実測図(2)
SK03(9~23)

土している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]。鼻継として残された部分の幅と厚さは、流通した材のサイズを反映し、OS08-5次調査の例は幅4.8~6.5cm、厚さ2.0cm前後であるが、今回出土したものは幅7.2cm、厚さ3.8cmとやや大型である。

19は輪樋挽きで製作された木製の小壺で、口縁部の内面に蓋を受けたとみられる段が付く。20は輪切りにした円材の片面を、外縁を残して内側を4mm程削り窪めたもので、容器の一部とみられるが詳細は不明である。21は漆器皿、22・23は漆器碗である。21は内外面に朱漆を塗布したのち、内面に繊細な金蒔絵で草花を描く。22は内外面に朱漆、23は外面に黒漆、内面に朱漆を塗布し、外面に文様がある。

3)まとめ

今回の調査では、豊臣後期の旧地表面が遺存しており、区画施設をみられる溝とこれと関連する遺構を検出した。また、SK03から17世紀末~18世紀初頭の陶磁器類とともに出土した、多数の木製品は注目される。墨書の判読作業は不十分であるが、曲物に墨書された「馬」、刀子鞘に陰刻された「伴や」などは、使用者の生業を示す可能性があり、調査地付近の町屋の住民相を明らかにする上で重要な資料となる。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』

大阪市文化財協会2002、『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1999・2000年度-』

2003、『大坂城跡』Ⅷ

第2層上面遺構検出状況
(南から)



第4層上面遺構検出状況
(南西から)



SK03検出状況
および地層断面
(北から)



中央区大手通三丁目における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS12-9)報告書

調査個所 大阪市中央区大手通3丁目27番1ほか3筆
調査面積 350m²
調査期間 平成24年9月11日～11月13日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、黒田慶一

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地西側縁辺の豊臣氏大阪城懇構内の西部に位置する。周辺で行われた調査でも、豊臣期や徳川期の遺構が検出されている[大阪市文化財協会2003a] (図1)。

大阪市教育委員会が行った試掘調査の結果、地下2.2m以下で、奈良時代から江戸時代にかけて建物などが構築された遺構面の存在が確認されたことから、本調査を実施することになった。事業者側により地下1.7mまでの地層を掘削・除去された段階で調査に入ることになったが、調査区の西半に旧建物の基礎が残っていたため、西半の基礎撤去期間中は、東半の調査を先行して行うこととした(図2)。平成24年9月11日に資材を搬入して東半の調査にかかったが、西半の調査にかかれたのは同月27日からである。地層の掘削は機械と人力を併用しながら、遺構は人力で掘り下げ、遺構の平面図・断面図等の作成、写真撮影で記録保存を行った。調査は11月6日に終了したが、壁面保護のシート養生などが必要であったため、全ての資材の撤収は同月13日である。

また、基準点はMagellan社製ProMark 3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

なお、本文中の遺物に関する記述は学芸員 小田木富慈美が行った。

2) 調査の結果

i) 層序(図3～5)

第0層：層厚70～160cmの現代盛土層である。

第1層：層厚60cmのにぼい黄褐色(10YR5/6)粗粒砂～シルト質中粒砂の盛土層で、17世紀後葉以



図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

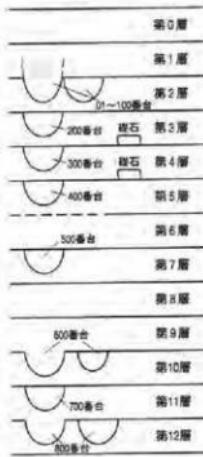


図3 地層と遺構の関係図

前の遺物を含む。

第2層：層厚10~20cmの浅黄色(2.5Y4/4)粘土質粗粒砂の自然堆積層である。徳川初期~17世紀中葉の遺物を含む。

第3層：層厚70~110cmの炭・焼土偽礫を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質粗粒砂の盛土層である。大坂夏ノ陣(1615年)後の施工である。

第4層：層厚10~20cmの夏ノ陣の焼土層で、オリーブ褐色(2.5Y4/6)を呈する。調査区東端では本層を盛り上げて、高さ0.6mの段を造成している。

第5層：層厚10~30cmのにぶい黄色(10YR5/4)粗粒砂質シルトの盛土層で、下層の第6層との境界が一部不明瞭で、土質も似ており、調査区西壁など一部しか遺構も見られないことから、第6層とは同じ盛土作業の工程で造成されたとみられる。大坂町中屋敷替え時(1598年)の盛土層の可能性が高い。

第6層：層厚60~80cmの黄褐色(10YR4/6)シルト質中粒~粗粒砂の盛土層で、大坂町中屋敷替えに伴って造成された。

第7層：5~10cmの灰オリーブ色(5Y3/3)~オリーブ黒色(5Y3/1)の中粒砂や粘土偽礫を含む粗粒砂の薄い整地層が集積した層で、層厚30~70cmを測る。豊臣前期に形成された地層である。複数回に亘り人為的に整地・平坦化されたことが看取される。

第8層：層厚30~60cmの有機物・粘土偽礫・中礫を含む褐灰色(10YR3/1)粗粒砂質細礫の盛土層である。第9層上面の畝間部分は層厚が30cmほど分厚い。

第9層：畠地の作土層で、黒褐色(2.5Y3/1)粗粒砂質シルトからなる。畠の高まりでは層厚40~50cmを測る。本層最上部は厚さ5~10cmにわたって暗灰黄色(2.5Y5/2)に変色している。豊臣前期の遺物を含む。

第10層：層厚10~20cmの暗灰黄色(2.5Y5/2)細礫混り粗粒砂質シルトの人為層である。調査区東端は東西5.5mにわたって層厚50~60cmと分厚くなり、a・b・cの3層に分層される。平安時代後期(12世紀)~大坂本願寺期の遺物を多く含む。

第11層：層厚10~30cmの黒褐色(10Y3/1)細礫混り粗粒砂質シルトの人為層で、SK812・SD813は本層で埋没している。古墳時代後期(6世紀)~大坂本願寺期(16世紀)までの遺物を含む。

第12層：層厚50cm以上の暗褐色(10YR3/4)中粒砂~細礫質粗粒砂の自然堆積層で、葉理が観察される。上面に直径数cmの巣穴が見られる。

ii) 遺構と遺物

第12層上面遺構[飛鳥時代~大坂本願寺期] (図6・7・10)

調査区の東端で古代~中世の柱穴を検出した。SP801は瓦器片が出土しており、平安~鎌倉時代に下るものである。柱穴の多くは柱痕跡の直径が0.15~0.25mで、埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)シル

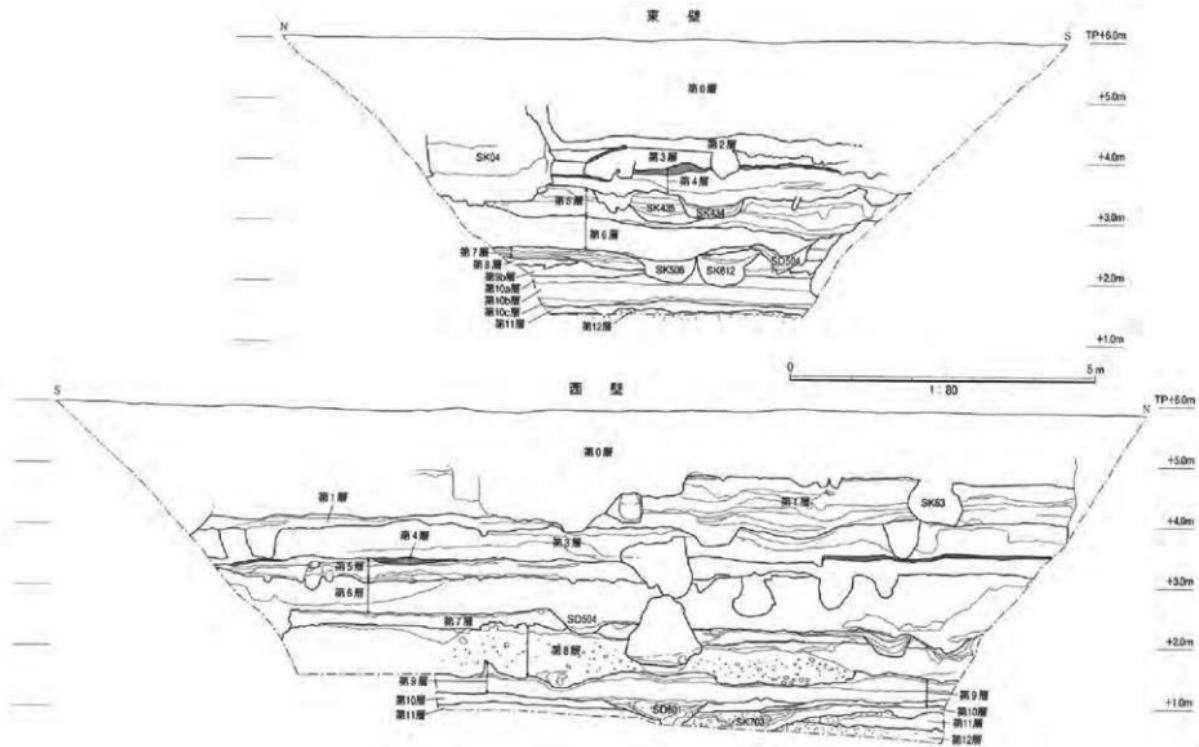


図4 東壁・西壁地層断面図

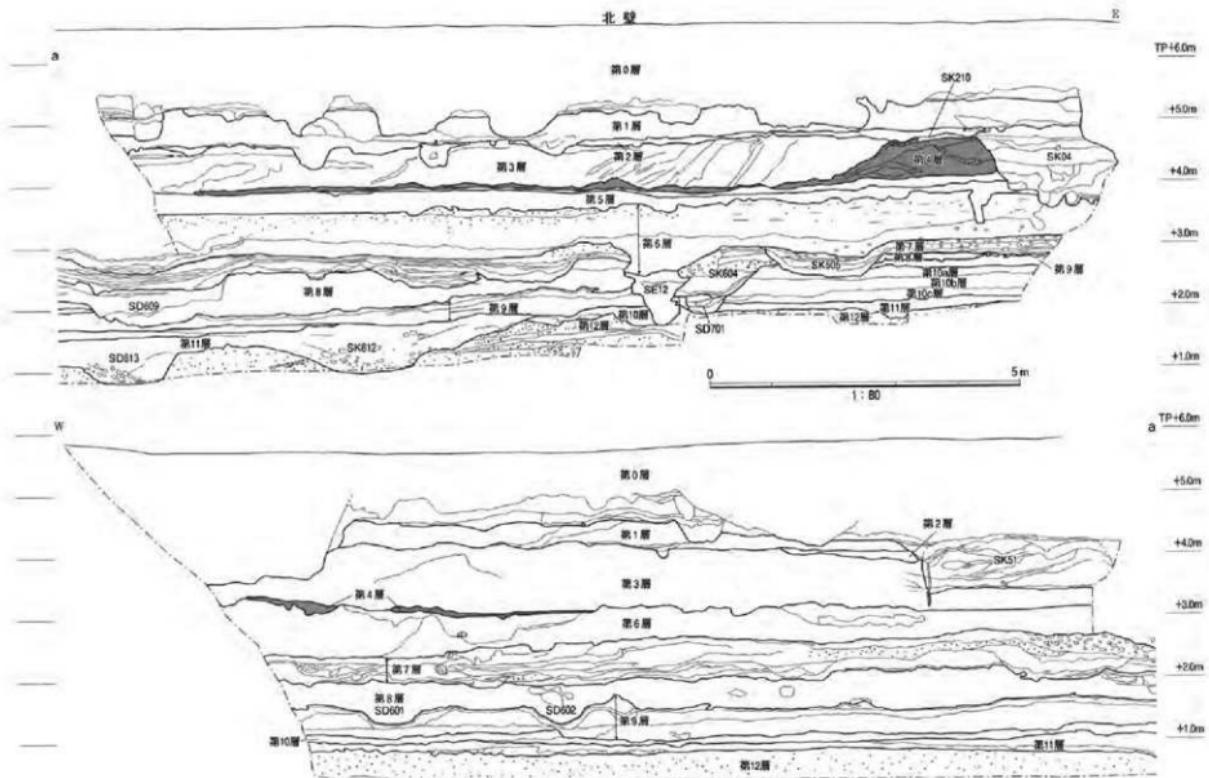


图5 北壁地层断面图

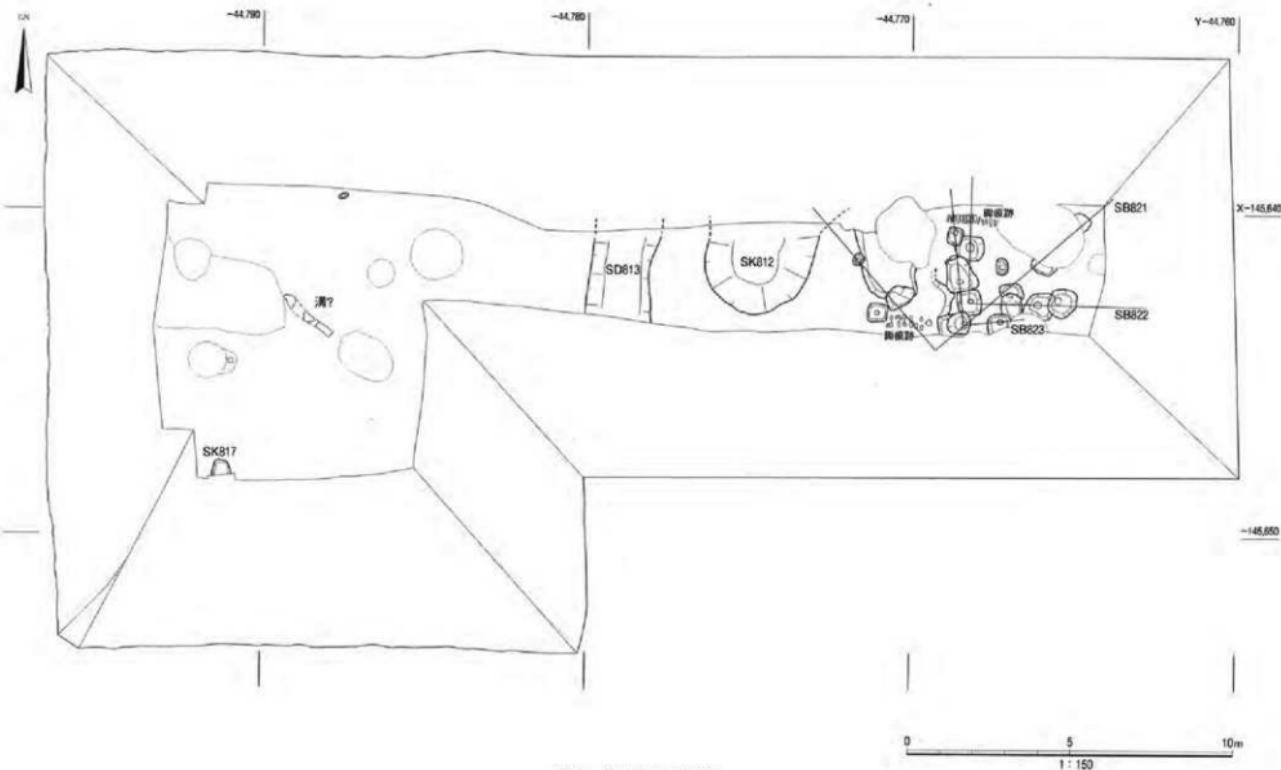


図6 第12層上面平面図

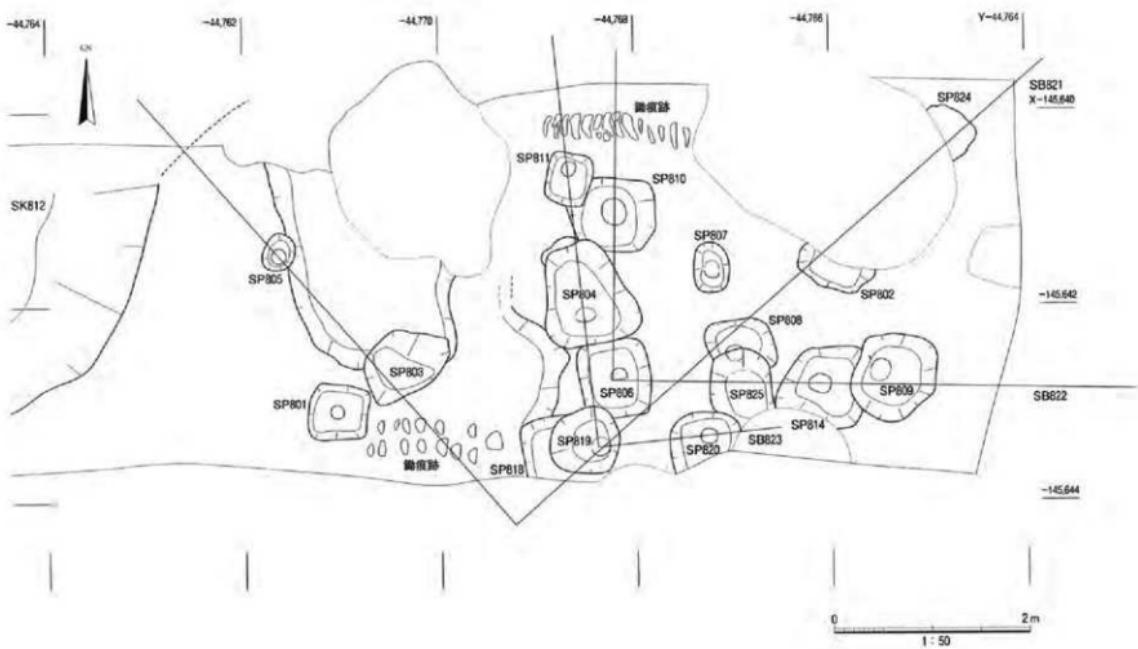


图7 第12层上面掘立柱建物

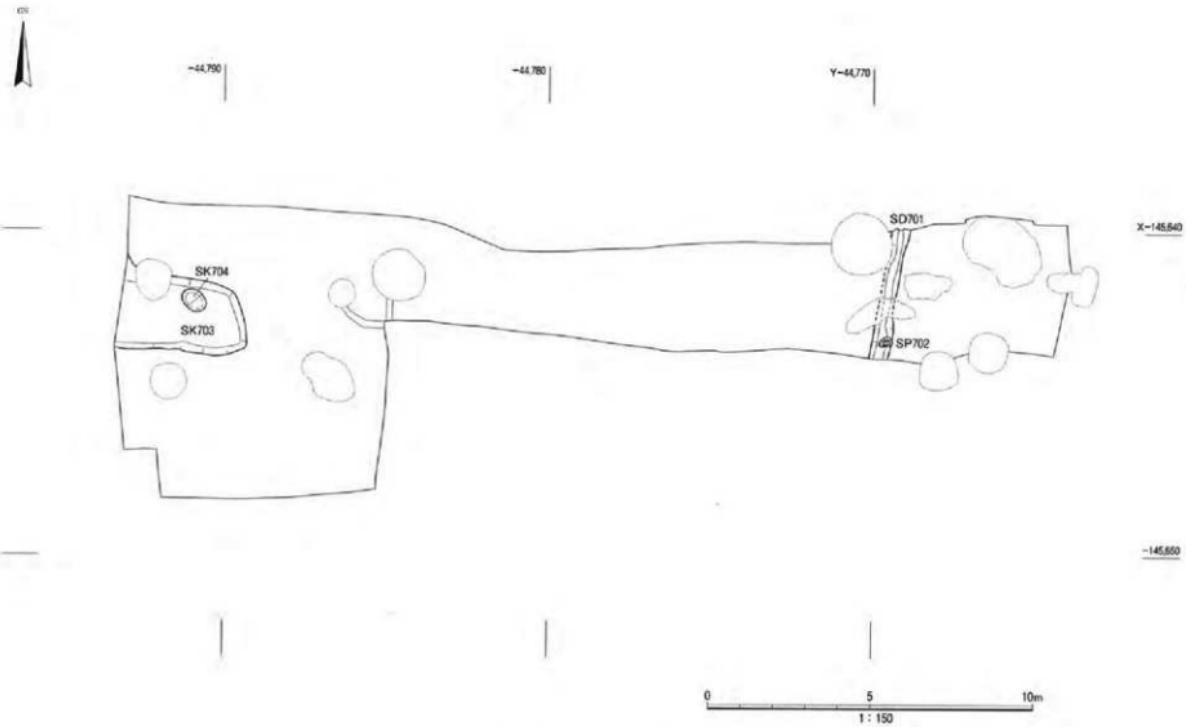


图8 第11层·第10c层上面平面图

ト質粗粒砂、掘形は深さ0.2~0.4mを測り、埋土は黒褐色(10YR3/1)シルト質粗粒砂である。

SB821 北で東に約50度振る梁側3.8m以上×桁側6.0m以上の側柱建物で、柱穴SP802・803・805・808・824で構成し、柱芯々間は梁側1.8m、桁側1.2mである。正方位を取らないことから飛鳥時代の建物と考えられる。

SB822 ほぼ正方位を取る東西棟の建物で、SP806・809・810・825からなり、柱芯々間は梁側1.8m、桁側1.4mを測る。土師器・須恵器が出土し、遺物から奈良時代の建物と考えられる。

SB823 北で西に6度振る建物で、SP804・811・819・820からなり、柱芯々間は梁側1.5m、桁側1.2mである。土師器・須恵器が出土し、遺物から奈良時代の建物と考えられる。

SK812 長さ3.0m以上、幅3.7m、深さ0.5mの土壙で、第10層の黒褐色(10YR3/2)細礫含む粗粒砂質シルトで埋まる。土師器皿1が見つかった。1の口縁部は緩やかに外反し、端部を軽くつまんでいる。16世紀前半の土器である。

SD813 長さ3.6m以上、幅2.1m、深さ0.5mで、第10層の黒褐色(10YR3/2)細礫含む粗粒砂質シルトで埋まる。

SK817 溝査区南西隅で検出した、南北0.6m以上、東西0.6m、深さ0.4mの土壙で、埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)シルト偽縛を含む粗粒砂である。

このほか、東部の柱穴周辺で、長さ0.10~0.30mの三日月~半月形を呈する深さ0.05mほどの浅い小穴群が、列をなしているのが検出された。形状から鉄痕跡と思われ、第11層を作土とした可能性がある。また西部で長さ、幅ともに0.50m、深さ0.05mほどの小穴3基が列をなしたものが検出され、削平された溝の可能性がある。

第11層・第10c層上面遺構〔大坂本願寺期〕(図8)

溝SD701、小穴SP702・SK704、土壙SK703を検出した。

SD701 北で東に10度振る長さ4.2m、幅0.6mの南北溝で、にぶい黄褐色(10YR4/3)シルトなどで埋まる。

SK704 長さ4.0m以上、幅2.3m、深さ0.3m以上の土壙で、第10層で埋没している。

第9層上面遺構〔豈臣前期〕(図9・10)

東部の高まり上の土壙SK604・607・611・612と、細地からなる。戸間601~603・605~609を検出した。戸間溝は幅0.6~1.8m、深さ0.2~0.4mである。

SK612 長さ0.8m以上、幅0.8m、深さ0.2mで、有機物を多く含むオリーブ黒色(5Y3/1)シルトを埋土とする。中国産磁器2~4、備前焼の水差し5、三巴文軒丸瓦6、木筒16・17が出土した。2は白磁皿である。口縁部は外反し、高台には砂が付着する。3・4は青花皿である。いずれも口縁部は内湾し、器壁は薄い。4の高台内には「福」字を有する。16・17はいずれも上部の両端に切込みを入れる。16は下端を尖らせる。切込みより上に符号の「□」を記し、左図はそれ以下に「□□入むろ」、右図は人名の「ふ□志□五□□門」と記す。17は下端を欠損する。左図は切込みより上に符号の「一太」、下に「八十さし入カ以下欠」、右図では符号はなく、切込みより下に人名または地名とみられる「たかはまさ□□以下欠」と記す(註1)。これらは魚類の運搬のための荷札木筒である。以上は豈臣前期に属するもの

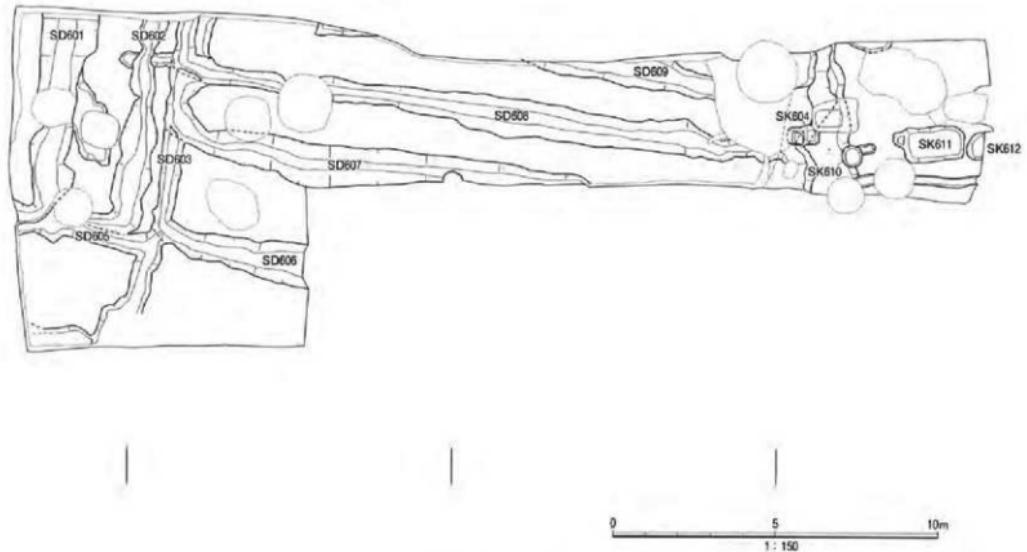


図9 第9層上面平面図

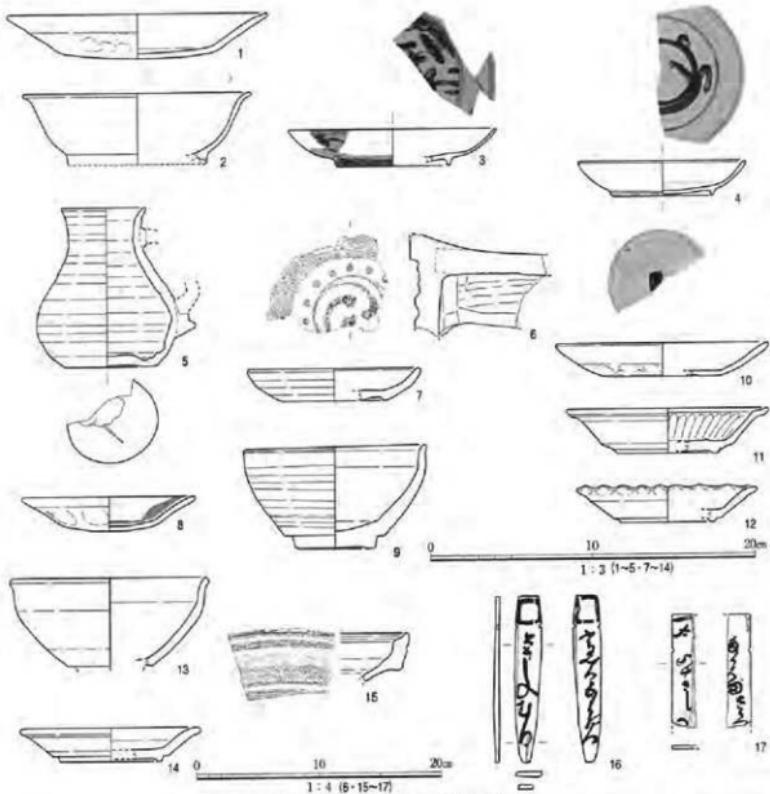


図10 豊臣前前期の遺構出土遺物

SK812(1), SK612(2~6・16・17), SK604(7), SD504(8・9), SK501(10~12), SK506(14・15), SK507(13)

である。調査地の北西300mの地点には豊臣後期から1620年代まで魚市場が存在した[大阪市文化財協会2004]。本例はこれに先行するもので、調査地の北東400mに位置するOS87-78次調査で検出された荷札木筒と同時期の資料となろう[大阪市文化財協会2003b]。

SK604 南北0.6m、東西1.0m、深さ0.3mの長方形の土壇で、褐色(10YR3/1)粗粒砂質シルトを埋土とする。瀬戸美濃焼の内禿皿7が出土した。7は器高・高台がともに低い。

第7層上面遺構[豊臣前期] (図10・11)

土壇SK501~503・505~510、溝SD504を検出した。

SD504 東で北に5度振る木組の東西溝で、長さ31.0m以上、幅0.3~0.6m、深さ0.4mで、第6層土であるにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質粗粒砂で埋没する。土師器の灯明皿8、瀬戸美濃焼の天目碗9が出土した。8の口縁部は外反し、底部は丸みをおびる。9は底部外面に濃い赭色を塗布する。

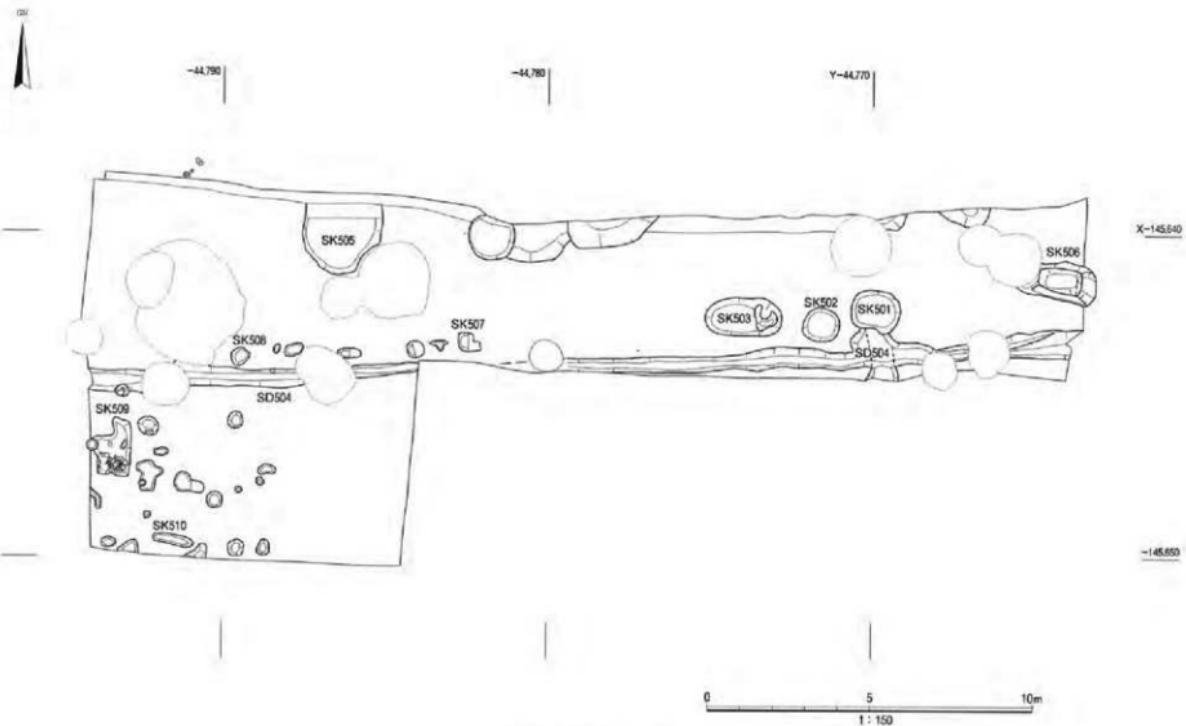


图11 第7层上面平面图

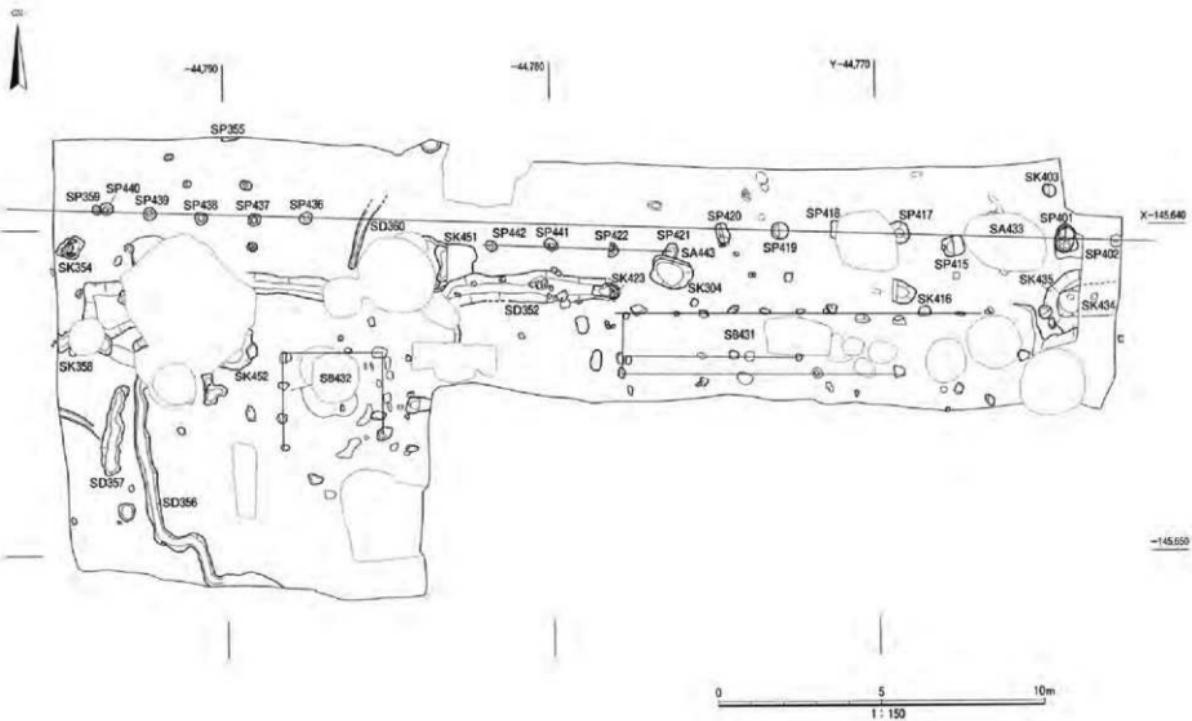


图12 第4·5层上面平面图

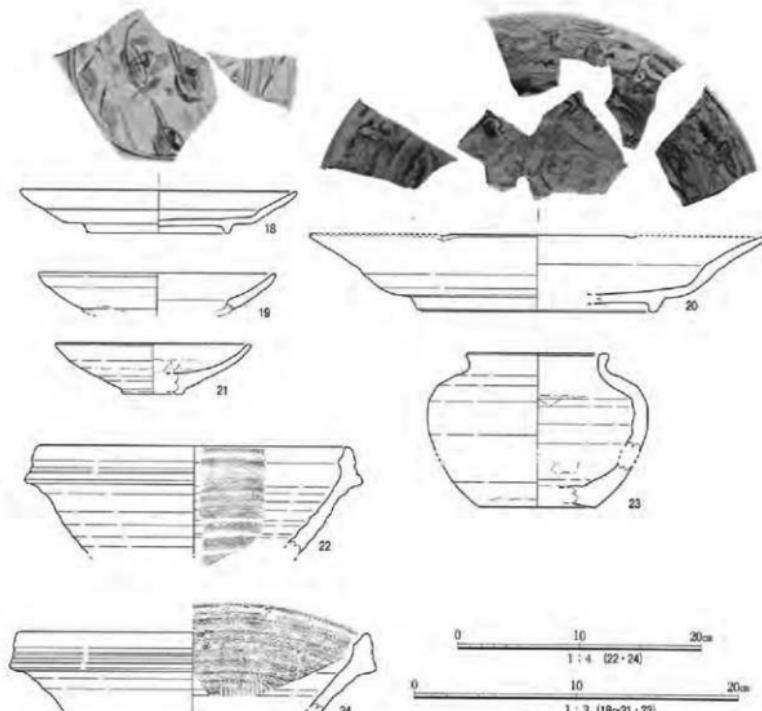


図13 慶川期の遺構出土遺物1
SD356(18・19)、SD352(20~22)、SK210(23・24)

SK501 長軸1.5m、短軸1.2mの楕円形を呈する土壙で、深さ0.3mを測り、灰白色(10Y8/1)粗粒砂で埋まる。土師器皿10、瀬戸美濃焼11・12が見つかった。11は灰釉の折縁ソギ皿で、器高が高い。12は鉄釉のひだ皿である。

SK506 南北1.2m、東西2.3m、深さ0.4mの土壙で、有機物を多く含む灰色(7.5Y4/1)シルトを埋土とする。瀬戸美濃焼の皿14、備前焼の擂鉢15が出土した。14は灰釉を施し、口縁部が端反となる。低い削り出し高台を有する。

SK507 南北、東西ともに0.6m、深さ0.2mの、くの字形を呈する土壙で、灰色(7.5Y4/1)粘土質中粒砂で埋まる。瀬戸美濃焼の天目碗13を含む。

第5層上面遺構〔豈臣後期〕(図12)

礎石建物SB431・432、掘立柱による塀SA433・443、土壙SK416・423・434・435・451・452などがある。

SB431 東西11.3m以上、南北1.9mの東西棟の長屋建物になると思われる。大きな礎石に接して小

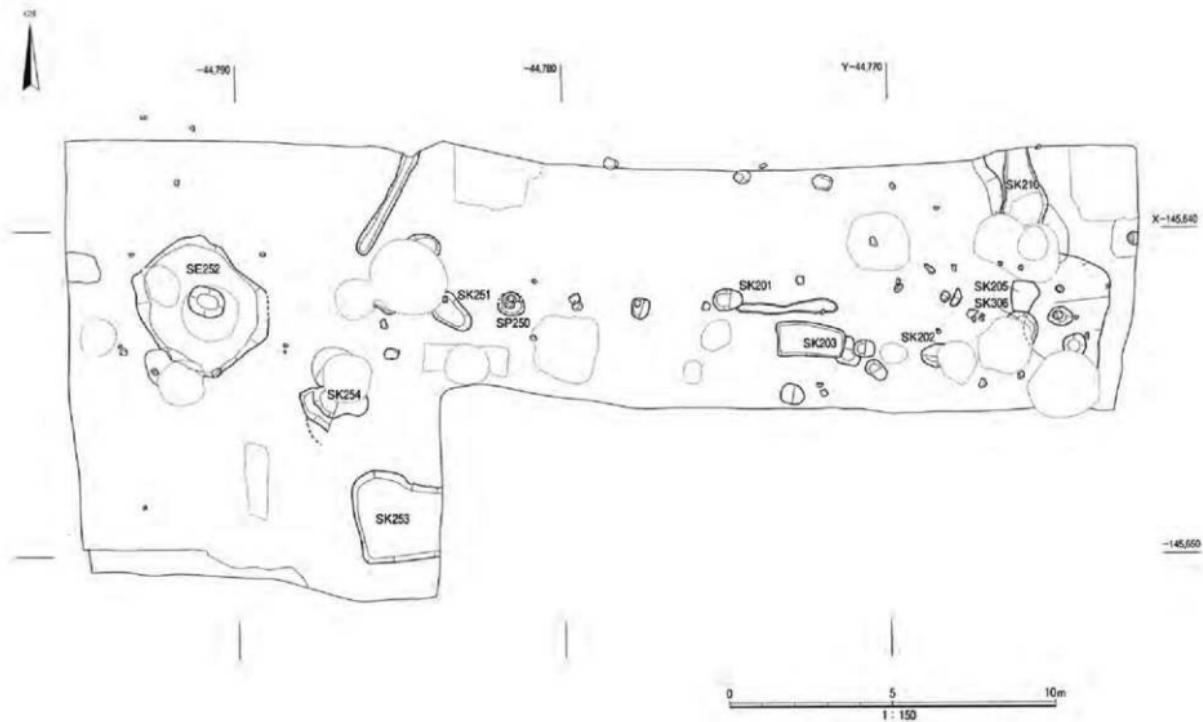


图14 第3层上面平面图

さな礎石が見られることから、前者が柱の礎石で、後者が床束の礎石と見られる。

SB432 南北4.1m、東西4.1mの側柱礎石建物で、梁廻・桁割とともに4間で、芯々間は1.0mである。

SA433 SP401・402・415・417～420・436～440からなる東西塀で、東で南に2度振る。31.2m分確認した。柱痕跡は直径0.10～0.15m、芯々間は1.6～1.8m、掘形埋土は灰黄褐色(10YR5/2)粗粒砂質シルトである。SP420・436間では柱穴は見られないが、南に0.7m離れて東西塀SA434があることから、この部分が出入り口になった可能性が高い。

SA443 SP421・422・441・442からなる東西塀で、SA433と平行で、この部分の北にはSA433の柱穴がないことから、SA433の出入り口の目隠し塀であったと思われる。

第4層上面遺構〔徳川初期〕(図12・13)

溝 SD352・356・357・360、柱穴SP355・359、土壙SK304・354・358などがある。

SD356 調査区南西部でクランク状に折れる溝で、南北6.0m、東西3.8m分を確認した。深さは0.2～0.3mで、埋土は焼土である。中国漳州窯産磁器の色絵皿18、肥前陶器の皿19が見つかった。18の口縁部は一旦屈曲して直線的に聞く。

SD352 長さ5.7m以上、幅0.7～1.0m、深さ0.3mの東西溝で、西方にも溝の痕跡が見られることがから、長さ16.5m以上になる可能性がある。埋土は橙色(2.5YR7/8)粘土質粗粒砂である。中国漳州窯産磁器の色絵皿20、肥前陶器皿21、備前焼擂鉢22が出土した。20は被熱している。

第3層上面遺構〔17世紀前葉〕(図14・15)

井戸 SE252、柱穴SP250、土壙SK201～203・205・210・251・253・254などがある。

SK210 第4層の焼土を盛り上げた東側の段上にあるが、第3層で盛土、嵩上げ後の遺構と見られる。長さ2.6m以上、幅0.6～1.2m、深さ0.2mで、焼土を埋土とする。產地不明陶器壺23、備前焼の擂鉢24が見つかった。23は内外面に黒褐色釉を施し、肩が強く張り、口縁部は短い。中国産の可能性がある。

SK253 南北3.0m、東西1.9m以上、深さ0.3mの土壙で、ぶい褐色(7.5YR7/3)中粒砂を埋土とする。中国産磁器25が出土した。25は内外面に褐色釉を施す碗である。内面には白色釉のイッチンで梅の文様を描く。

SE252 挖形がやや不整円形で、直径4.5mを測り、井戸側の直径が1.0～1.2mの井戸である。瀬戸美濃焼の皿26・27、肥前陶器28・29、瓦質土器の火鉢30が挖形から見つかった。26は折縁皿で、底部内面に菊花文を施す。27は志野の菊皿である。28は碗である。29は皿で、内面に胎土目痕が残る。

SK205 長さ1.2m、幅0.7m、深さ0.3mの土壙で、灰白色(2.5Y8/2)粘土偽環で埋まっている。肥前白磁の皿31、肥前陶器の皿32・33が出土した。いずれも内面に砂目痕を残す。33は底部を糸切りする。

第2層・第1層上面遺構〔17世紀中葉以降〕(図16～20)

17世紀中葉以前～後葉の遺物を含む遺構として、第1層の上面では、SK14・15・17～25・48・54・56・61・64・70～80・84～86・94・95・97、SE58・60・68、SD69が検出された。また、第2層が分布する南東部では、第2層上面で17世紀後葉のSK101・102が検出された。以下でおもなものについてのみ述べる。

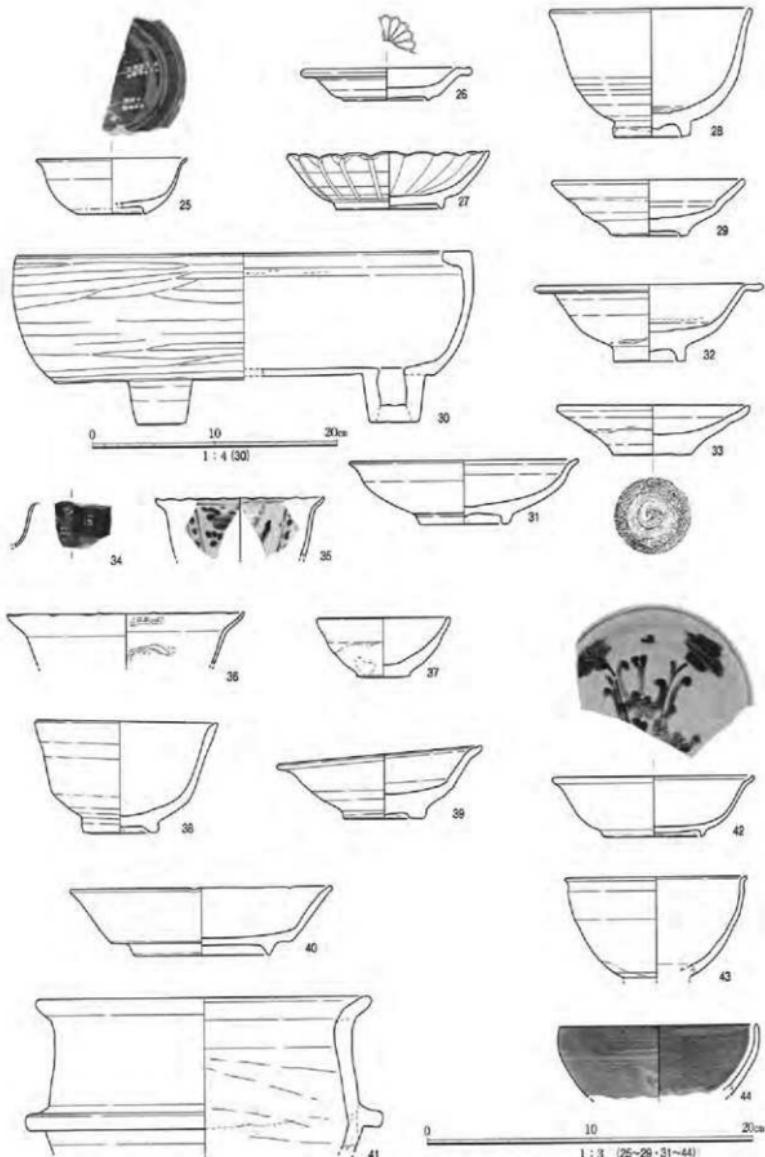


図15 德川期の遺構出土遺物2

SK253(25)、SE252(26~30)、SK205(31~33)、SK85(34~41)、SK79(42~44)

SK102 長さ1.2m、幅0.8m、深さ0.5mの長方形のゴミ穴で、有機物を含む黄灰色(2.5Y5/1)中粒砂質シルトで埋まっている。肥前磁器45~48が出土した。45は青磁の碗である。46は白磁の鉢で、口縁部が輪花となる。47・48は染付である。47は碗で高台内に「大明成化年製」銘を有する。48は芙蓉手の皿である。

SK101 南北4.8m以上、東西9.0m以上、深さ0.3mの土壌で、暗褐色(10YR5/4)シルト質中粒砂を埋土とし、中国産青花49・50、肥前磁器の染付51~55、丹波焼の鉢56、土師器の皿57、土人形58を含む。49は口縁部が外折する小杯である。50は寿字文の皿である。51~54は碗で、52は外面型押し整形である。55は皿で、口縁部を型で整形し、輪花とする。口紅である。56は2箇所に把手を有する。

SK85 長軸3.3m、短軸2.0m、深さ0.3mの梢円形の土壌で、黄褐色(2.5Y5/5)シルト質粗粒砂で埋まる。中国産磁器34、中国産青花35、中国産白磁皿36、肥前陶器37~39、瀬戸美濃焼の皿40、土師器の羽釜41が見つかった。34は外面に褐色釉を施す小杯である。白色釉のイッチャンで梅花文を描く。35は口縁部が輪花となる芙蓉手の碗である。36は内面に型押し文様が見られる。37は小碗、38は碗、39は皿である。41は器壁が厚いことが特徴的で、口縁部は短く外反し、鉤は狭い。

SK79 長さ1.1m、幅0.4m、深さ0.3mの土壌で、暗褐色(10YR3/3)粗粒砂質シルトを埋土とする。中国産青花の皿42、肥前陶器43・44が出土した。42の口縁部は屈曲して外反したのち、端部を内側へつまんでいる。内面に白葉文を施す。43は内野山系の碗である。44は刷毛目碗である。

SK61 直径1.8m、深さ0.5mの擂鉢状の土壌で、褐色(10YR4/4)粗粒砂質シルトを埋土とする。肥前陶器の皿59が見つかった。59は鉄釉を施し、底部内面を蛇の目釉剥ぎする。

SK48 長さ3.0m以上、幅0.9m、深さ0.7mの不整長方形の土壌で、暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粗粒砂で埋まる。肥前磁器66~74、肥前陶器75~76、瓦質土器の火鉢77、土師器78~80が見つかった。66~71は碗である。66は白磁である。67は青磁で、高台は無釉である。68は絵色である。69~71は染付である。72は染付の小杯で、高台内に「宣德年製」銘を有する。73は青磁の香炉である。74は青磁の皿で、底部内面を蛇の目釉剥ぎし、高台は無釉である。75は京焼風陶器の碗で、高台内に「清水」の刻印を有する。76は清縁皿で、底部内面に砂目痕を残す。78は灯明皿である。79は焼塙壺で、長方形一重枠内に「天下一堀ミニなど藤左衛門」の刻印を施す。80は焙培である。

SK99 長さ2.1m、幅1.2m、深さ0.3mの不整梢円形のゴミ穴で、有機物を含む黄灰色(2.5Y4/1)中粒砂質シルトで埋まっている。肥前磁器81~83、肥前陶器84、土師器の焼塙壺85が出土した。81・82は染付の碗と皿である。83は青磁の鉢である。84は碗で、透明釉を施す。85は長方形一重枠内に「天下一御塙壺見なと伊織」の刻印を施す。

SK97 長さ2.7m、幅0.7m、深さ0.3mの不整長方形の土壌で、黄褐色(2.5Y5/5)粗粒砂質シルトで埋まる。肥前磁器の染付碗86~88、肥前陶器の碗89、瓦質土器の火鉢90、土師器91~93、丹波焼の擂鉢94が見つかった。86は器壁が厚く、山水文を施す。87は体部下半に墨書きによる文様を施す。88は草花文を施す。89は透明釉を施す。91・92は皿で、91は灯明皿として使用している。93は口縁部外面に搔上げ痕を残す焰培である。94の口縁部は断面三角形である。

SD69 長さ12.0m、幅0.5~0.7m、深さ0.2mの東西溝である。

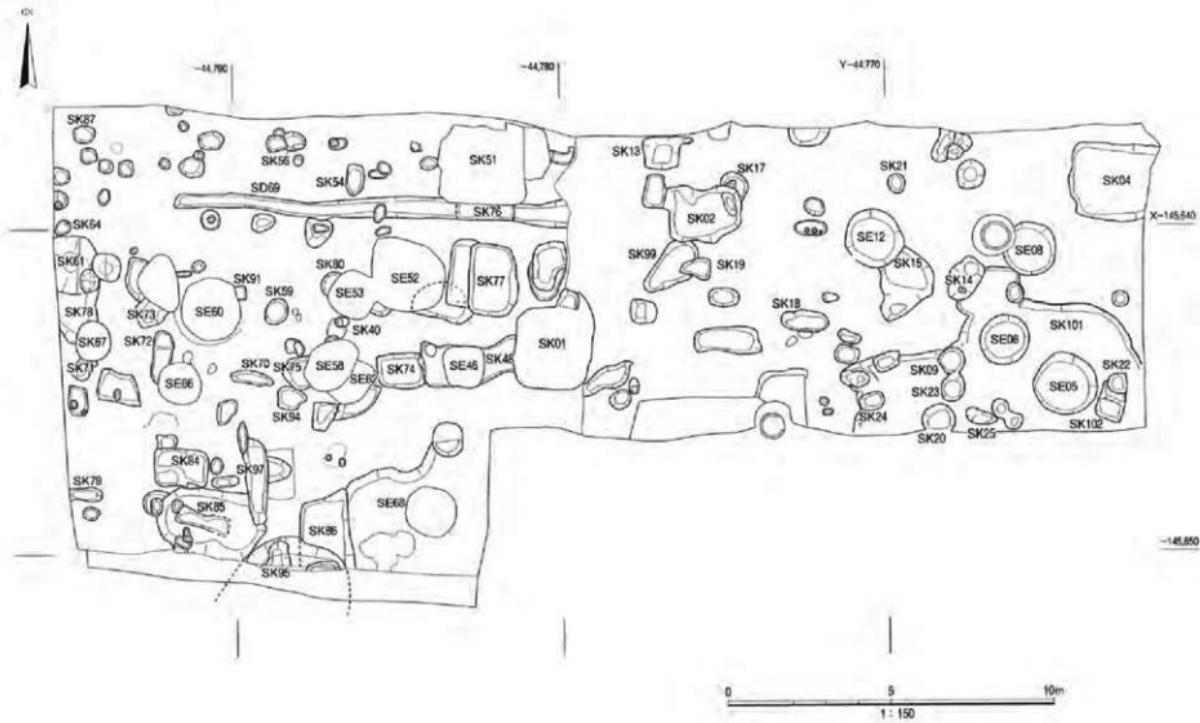


图16 第2层·第1层上面平面图

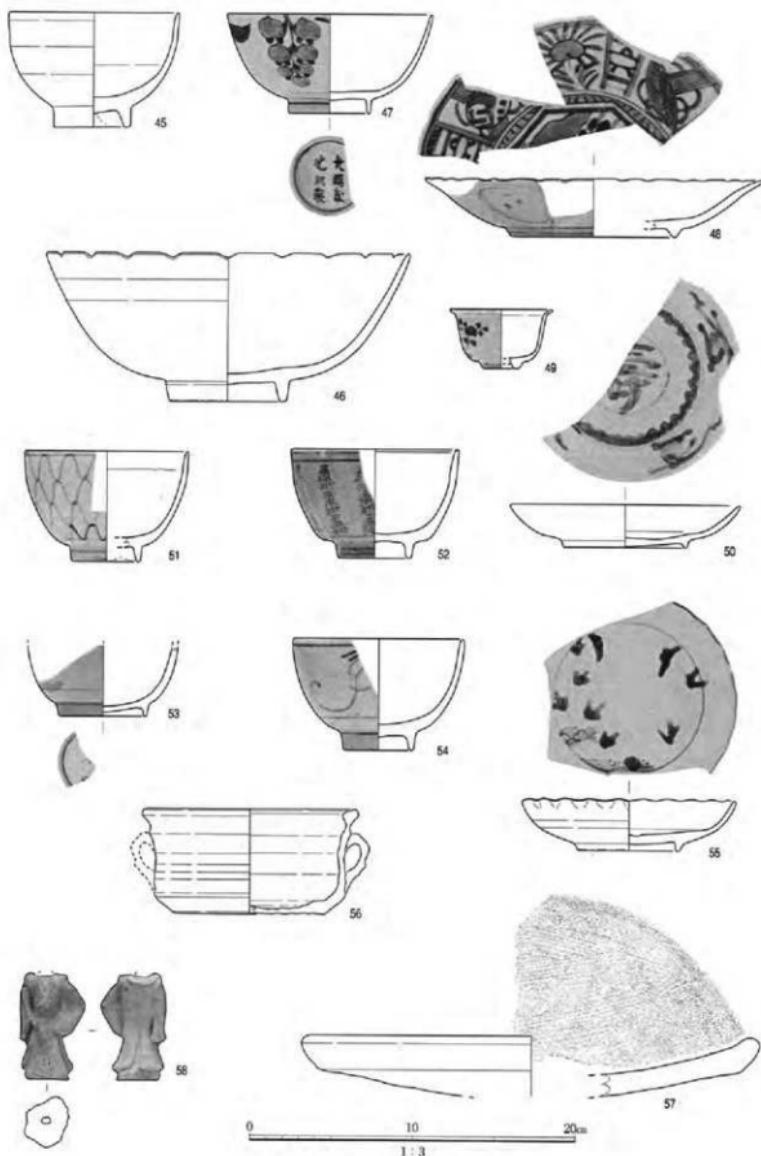


図17 德川期の遺構出土遺物 3
SK102(45~48)、SK101(49~58)

SE60 直径1.8mの掘形をもつ井戸で、灰黄褐色(10YR4/2)シルト質粗粒砂で埋まる。肥前磁器の碗60・61、肥前陶器の碗62・壺63、丹波焼の播鉢64、土師器皿65が出土した。60は色絵、61は白磁である。64の口縁部は直線的に伸び、端部を拡張しない。

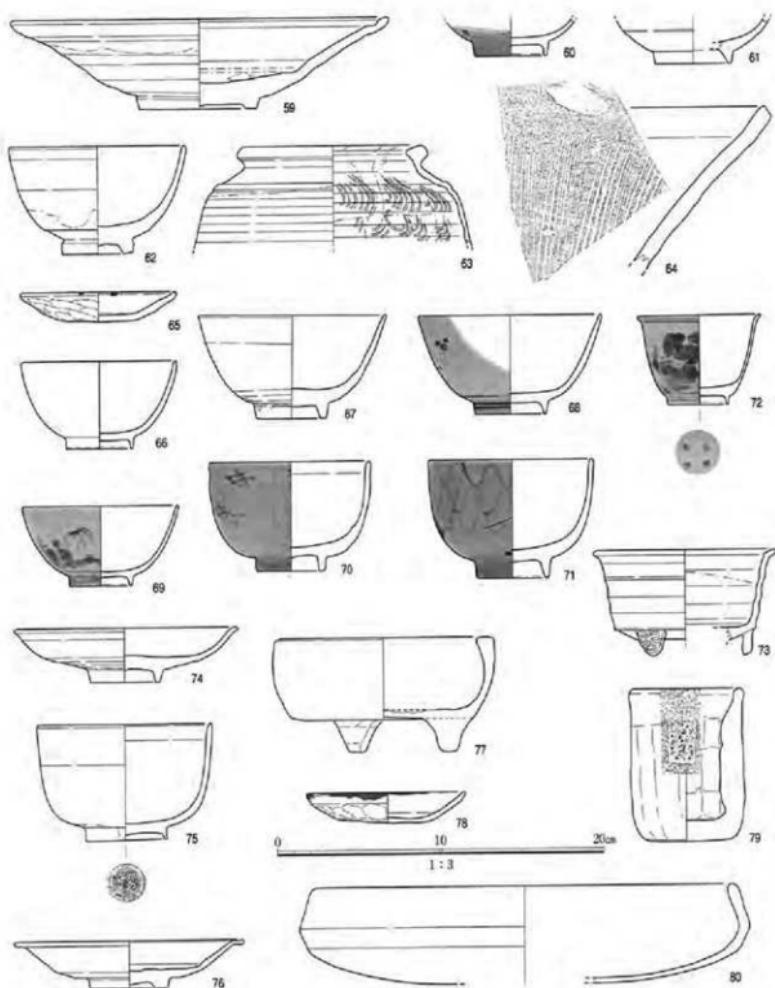


図18 徳川期の遺構出土遺物 4
SK61(59)、SE60(60~65)、SK48(66~80)

以上の遺物は、SK79・85出土遺物のように、17世紀中葉以前に遡る遊離資料を含むものもあるが、他の資料は17世紀中～後葉に属するものである。

次に、17世紀末葉～18世紀末葉までの遺構として、SK01・02・04・09・51、SE05・06・08・12・46・52・53・62・66・67がある。SK01・02は火事場整理の瓦溜で、SK04・51は穴蔵である。

SK04 南北2.3m、東西2.7m以上、深さ1.2mの穴蔵で、壁面に石組を持ち、焼土で埋まる。肥前

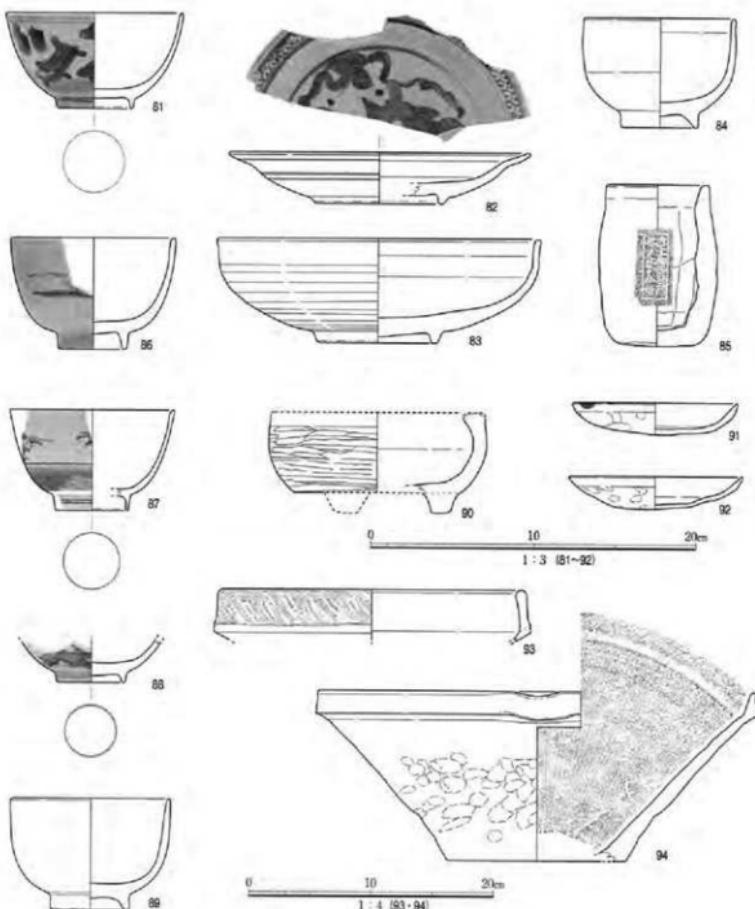


図19 徳川期の遺構出土遺物 5

SE99(81~85)、SK97(86~94)

磁器の染付95~99、瀬戸美濃焼100~101、関西系陶器102、肥前陶器の鉢103、堺鉢104が出土した。95は小杯で、96・97は碗である。96は底部内面を蛇の目釉剥ぎする。98は外青磁の筒茶碗で、口縁部内面に四方櫛文を巡らす。99は皿である。100・101はいずれも灰釉を施し、100は方形の皿である。101は腰折となる碗である。102は丸碗である。103は内外面に刷毛目文を施す。底部外面には鉄釉を掛ける。以上は18世紀中~後葉に属する。

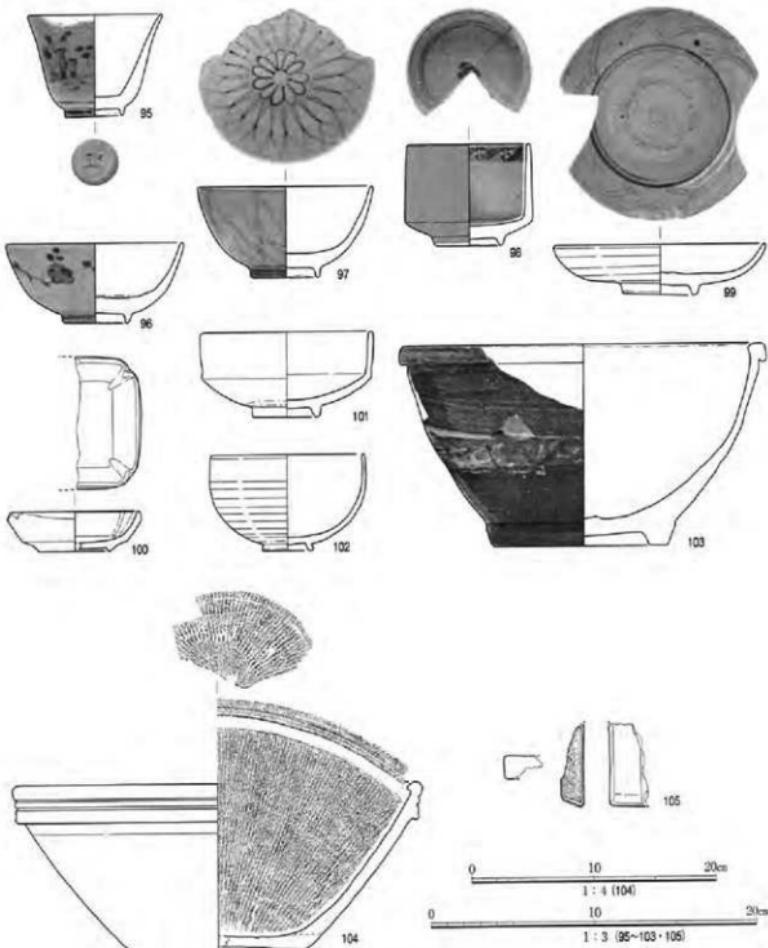


図20 徳川期の遺構出土遺物 6
SK04(95~104)、SE62(105)

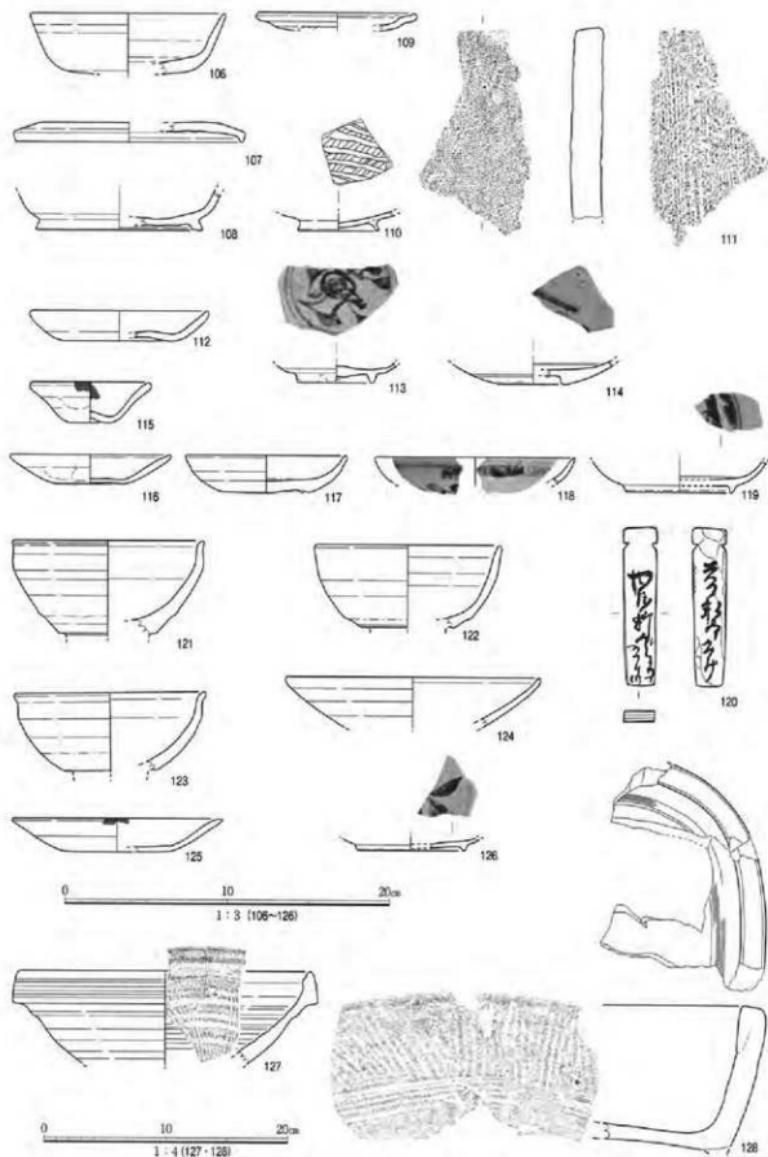


图21 各层出土遗物1

第11层(106~111)、第10层(112~114)、第9层(115~120)、第7层(121~122)、第5~6层(123~128)

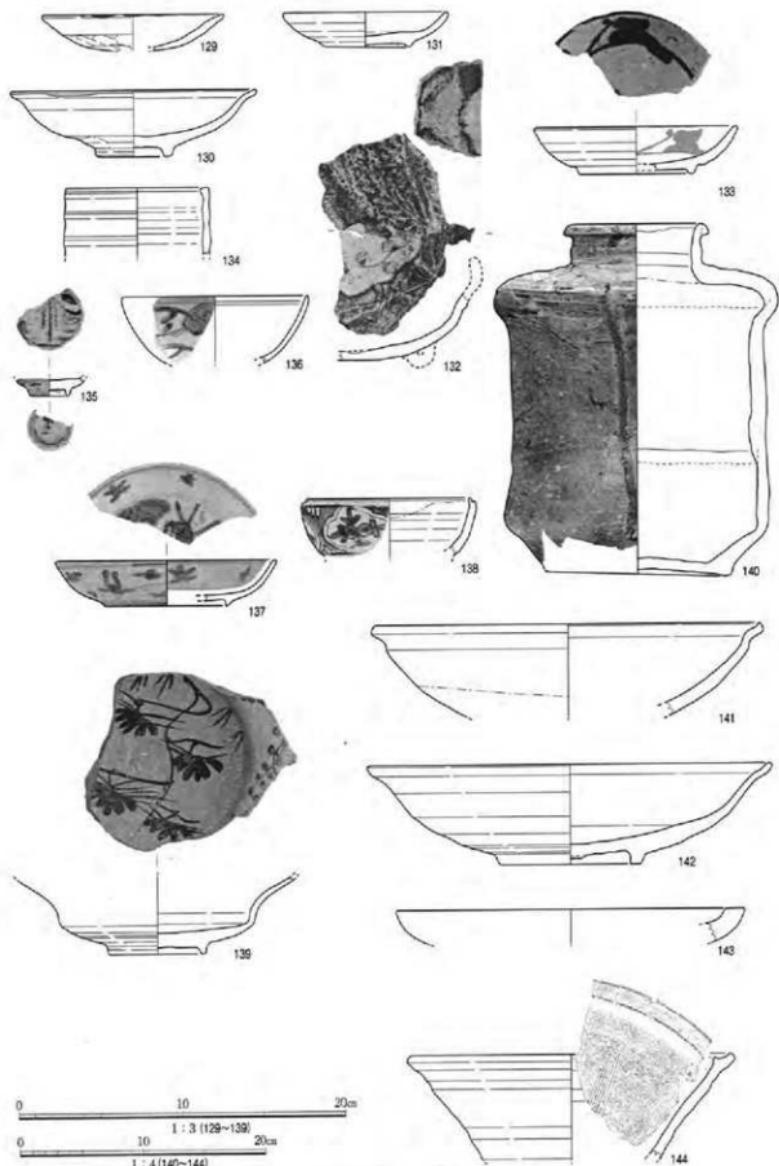


图22 各层出土遗物2

第4层(129~137·140~143)、第3层(138)、第2层(139·144)

SE62 直径1.5m、深さ5.0m以上の井戸で、平瓦105が出土した。105は端面に「南瓦屋町本□□□瓦屋真治郎」の刻印を有する。同時に出土した陶器の年代観から17世紀末～18世紀初頭のものとみられる。「瓦屋真治郎」の名を記す刻印は、大坂城跡の調査でも出土している[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013]。

iii) 各層出土遺物(図21・22)

第11層出土遺物 106～108は須恵器である。106は杯A、107・108は杯Bの蓋と身である。109は土師器皿である。口縁部は「て」字状で、器壁は薄い。110は瓦器碗である。高台は比較的高く、底部内面に斜格子状のヘラミガキを施す。111は凸面に縄目タタキを施す平瓦である。これらは106～108が7～8世紀、109が11世紀、110が12世紀に属するものである。

第10層出土遺物 112は土師器皿である。113・114は中国産青花である。113は碗または皿の底部で中央が分厚く、内面に花の文様を施す。114は蓋箱底の皿である。これらは大坂本願寺期に属するものである。

第9層出土遺物 115・116は土師器皿で、灯明具として使用している。115は底部が大きく窪む。117は瀬戸美濃焼で、灰釉を施す内禿の丸皿である。118・119は中国産青花の皿である。120は木筒である。上部の両端に切込みを入れ、下端は水平である。両面ともに人名を記したもので、右図は「□□新五郎久介」、左図は「□屋新五郎カ 以下2行不明」と判読される。これらは豊臣前期に属するものであろう。

第7層出土遺物 121・122は瀬戸美濃焼である。121は天目碗で、口縁部の屈曲が弱い。122は灰釉の丸碗である。

第5・6層出土遺物 123は瀬戸美濃焼の天目碗である。124は朝鮮白磁碗である。125は土師器皿で、灯明具として使用している。口縁部は外反し、底部は平坦である。126は中国産青花の皿である。高台には砂が付着する。127は備前焼の擂鉢である。128は土師器で、竈ないしは火入れであろう。外面とも被熱により赤変している。外面にはごく粗いハケ調整を施す。

第4層出土遺物 129は土師器の灯明皿である。130および142は肥前陶器の皿で、130は口縁部にのみ茶褐色釉を施す。142は高台内中央に砂が付着する。131～133は瀬戸美濃焼である。131は灰釉を施す内禿皿である。132は志野の鉢である。133は志野の皿で鉄絵を施す。134は中国産青磁の香炉である。135～137は中国産青花である。135は古い形態の小杯で、高台内に「正」銘を有する。136は漳州窯産の碗である。137は皿である。140は信楽焼の壺である。141は上野高取焼の鉢である。表面灰釉を施し、胎土は粗い。143は砂岩製の茶臼である。以上の遺物は豊臣後期の新段階に属する。

第3層出土遺物 138は中国産青花で、漳州窯産の合子である。

第2層出土遺物 139は肥前陶器で、鉄絵を施す鉢である。144は瀬戸美濃焼の擂鉢で、灰釉を施す。

3)まとめ

第12層上面で飛鳥～奈良時代の掘立柱建物3棟を検出したが、同一面の土壌は16世紀前葉の大坂本願寺期に埋没したことがわかった。

第9層の戸をもつ畠は、16世紀前葉～後葉に耕作され、豊臣前期に至って第8層で埋立てられ、第7層の度重なる整地土から、人が集住していたことがわかった。調査区を横断する東西溝SD504は、町屋の敷地境の溝になる可能性がある。

第5・6層は慶長3年の大坂町中屋敷替えに伴う盛土の可能性が高い。

夏ノ陣被災面(第5層上面)では、礎石立ちの長屋建物や一辺4.1m四方の小規模礎石建物があり、北を区画する東西堀は一部開口して、目隠し堀を敷地内側に建てている。

第4層の焼土層上面でも、東西溝や排水のためと思われる溝を掘るが、徳川初期の段階で第3層の層厚70～110cmにも達する盛土を施工して、町造りが行われる。第3層上面では井戸やゴミ穴があり、表通りからは町屋の奥に入った場所の感が強い。

17世紀後葉以前に再度分厚い盛土(第1層)が施工され、この上面は以後100年以上に亘って地表面であったものと考えられる。

大坂本願寺期～徳川期における当地の変遷を把握することができた。中近世の商工業都市大坂の成立史を明らかにするには、これから周辺部の調査に期待がかかる。

註

1)木簡の軒諱は大阪歴史博物館 学芸第1係長 豊谷浩之氏による。

参考文献

大阪市文化財協会2003a、「大坂城跡Ⅶ」

大阪市文化財協会2003b、「OS85-28次および87-78次調査」：「大坂城跡Ⅷ」, pp.38-60

大阪市文化財協会2004、「OS86-20次およびA287-5・90-2次の調査」：「大坂城下町跡Ⅱ」, pp.42-112

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013、「大坂城跡発掘調査(OS11-10)報告書」：「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)」, pp.301-326

第12層上面
(東端、西から)



第12層上面
SP818(右)、SP819(左)
(北から)



第12層上面
SK812
(南東から)



第9層上面全景
(西から)



第5層上面全景
(西から)



第5層上面東半
(東から)



第4層上面東半
(東から)



第1層上面西半
(北から)



地層断面
(西半の東壁、
西から)



中央区釣鐘町二丁目36における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS12-16)報告書

調査個所 大阪市中央区釣鐘町2丁目36
調査面積 200m²
調査期間 平成24年10月19日～11月22日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、村元健一

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は、大坂城跡の西北部に位置する。北250mには大川が、西190mには東横堀川が流れる。東側180mには町名の由来となった釣鐘屋敷がある。調査地は上町台地を西側に降るゆるやかな傾斜地に位置する。周辺では数多くの調査が行われており、豊臣期の大坂町中屋敷替えに伴い、大規模な造成が行われたことが明らかとなっている(図1・2)。また北隣のOS08-1次調査では、豊臣期の遺構のほか、中世の遺構が検出されており、また多量の瓦が出土したことから「渡辺淨土堂」との関連が指摘されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010・黒田慶一-2009]。

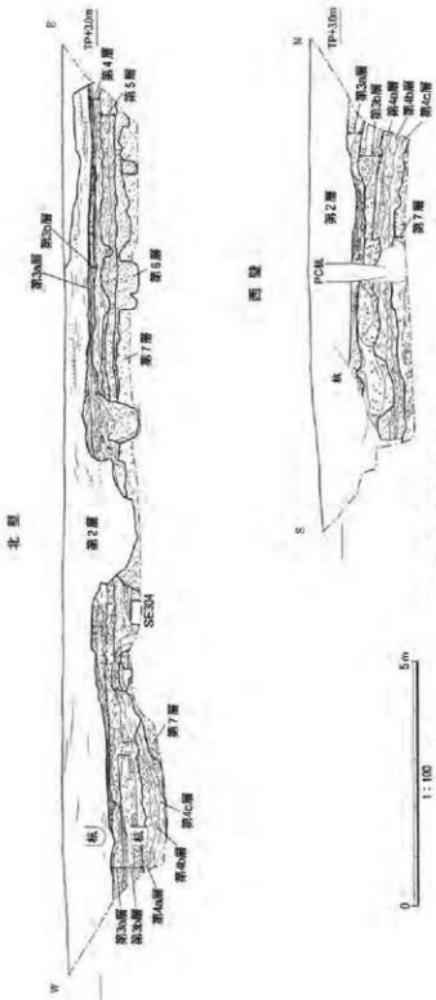
今回の調査地では、大阪市教育委員会により平成23年8月11日に2箇所の試掘が行われた。その結果、現地表下2.3~2.5mで黄褐色砂からなる整地層が見つかったことから、発掘調査を行うことになった。調査区は旧建物の地下構造物による大規模な擾乱を受けている箇所を避け、東西20m、南北10mの規模で設定した。試掘調査で確認された黄褐色砂の整地層までを事業者が重機掘削を行い、その後、10月19日から調査を開始した。遺構の検出を行うとともに、平面・断面図の記録を行い、11月22日に調査を終了し、撤収を行った。

なお、報告用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図を合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にし、標高はTP値(東京湾平均海面値)を用いTP+○mと表記した。

2) 調査の結果

i) 層序(図3)





調査地の現地表はTP+5.8~6.4mであり、南東から北西にゆるやかに下降している。現代の盛土である第0層以下は次のように分層した。

第1層：試掘調査で確認された焼土を含む褐色シルト質中粒砂からなる整地層である。本調査では遺構の埋土として確認された。大坂夏ノ陣の焼土層に由来するものと考えられる。

第2層：均質な明黄褐色中粒砂からなる整地層である。層厚は調査区の東側では50cmだが、西側では100cmに達し、この造成により東から西に下降していた地形を平坦化したと考えられる。周辺で豊臣期の大坂町中廻敷替えに伴うとされている整地層に相当する。本調査地では、第2層の上面までを重機掘削している。上面で土塙や井戸など、複数の時期の遺構を検出した。

第3層：黒褐色のシルトや粗粒砂の偽礫からなる整地層である。本層も第2層と同様に、東側で10cm、西側では70cmと、西で厚みを増している。数枚の薄層からなり、細分が可能である。本層内に薄く第2層と同質の細粒砂層が挟っている。第3a層は黒褐色のシルトと細粒砂からなる盛土である。上面では遺構は検出されなかった。第3b層は暗オリーブ褐色のシルト質細粒砂層であり、層内に生活面があり、鉄造関連の遺物が多量に出土した。

第4層：暗褐色のシルト質細粒砂からなる作土である。調査区の西側で層厚を増し、4a~4cの3層に細分することができた。第4a層下面で耕作溝を検出した。第4a層は豊臣前期まで時期が下る。

第5層：暗褐色の細礫混りのシルト質細粒砂で、作土である。やや暗色化しており、調査区の東半に分布する。2層に細分することができる。

第6層：黒褐色の細粒砂層で、調査区の東半に分布する古土壤である。層内で柱穴、土壙などの13～14世紀を中心とする遺構を検出した。

第7層：調査区の全域に分布するにぶい黄褐色の細粒砂～礫礫からなる河成層である。下面を確認することはできなかったが、層厚は100cm以上である。

ii) 遺構と遺物

a. 中世の遺構と遺物(第6層内：図4～6)

いずれも第6層形成時に掘り込まれたものであるが、掘込み面での検出が困難であったため、第7層上面で検出を行った。溝、土壙と多数の柱穴を検出した。

柱穴は55基確認した。直径は0.3～0.5m程度であり、比較的小型のものが多い。埋土は黒褐色細粒砂であり、柱痕はいずれも明瞭ではなかった。柱穴の分布状況から、複数回の建替えがあったことが想定される。柱穴は総じて南西～北東の方向に並んでおり、SB601・602・603の3棟を復元した。いずれも南東からの北西に下がる自然地形に沿ったものとなっている。SB601は桁行3間以上、梁行2間の建物である。柱穴は直徑0.3mと小型である。SB602は桁行・梁行とも2間で東西に長い建物である。SD604に切られている。柱穴は深さ0.6mほどの深いものもあった。SB603は調査区の北側で一部を検出した。あるいは南東方向に1間分延びる可能性がある。

SD604は調査区のほぼ中央で見つかった幅1.2m、深さ0.3mの南北方向の溝である。北でやや西側に屈曲している。埋土はオリーブ褐色中粒砂であり、水流の痕跡は認められなかった。埋土から2～4が出土した。2は土師器皿である。口縁部外面にヨコナデを施し、底部にはユビオサエ痕が顕著である。3は瓦器碗である。高台ではなく、内面に粗い圓線状ヘラミガキを施す。4は僧前焼擂鉢である。口縁端部上面に沈線が巡る。これらは13世紀後半～末のものであろう。

SD605・606は平行する東西方向の溝であり、いずれもSD604に切られている。幅0.4m、深さ0.1mと規模は小さい。埋土は暗オリーブ褐色シルト質中粒砂で、水流の痕跡はなく、区画溝の可能性がある。次に述べるSA607と並行しており、同時期のものである可能性がある。

SA607は調査区北側で検出した東西方向の素掘りの溝状遺構である。幅1.0m、深さ0.3mで、埋土は暗褐色細粒砂が主であり、第7層起源の極細粒砂の偽礫を含み、人為的に埋められたことが分かる。水流の痕跡は見られない。また底部には1.4mごとに等間隔で幅0.5m、深さ0.3mの掘込みがあった。埋土の状況と形態から、掘込みに柱を立てた布掘りの掘形と考えられる。おそらく東西方向の廓であろう。調査区の西部で第4層の耕作により失われているが、元来は西に延びていたようである。

SK608はSA607を切る形で検出された直徑2.4mの土壙である。深さは0.3mである。埋土は黒褐色シルト質中粒～粗粒砂であり、第7層起源の粗粒砂の偽礫を含み、人為的に埋められていたことが分かる。埋土から5～8が出土した。5は中国白磁皿である。口縁部は外反し、端部を外方へ屈曲させる。口壳である。6は瓦質土器の羽釜である。7は僧前焼の壺である。口縁部は玉縁状を呈する。8は三巴文の軒丸瓦である。これらは14世紀に属するものであろう。

SK609はSA607を切る直徑0.9m、深さ0.2mの土壙である。埋土は黒褐色シルト質粗粒砂である。埋土から9・10が出土した。9は土師器皿である。口縁部は大きく外反し、底部は平坦である。10は

管状土錐である。これらは14~15世紀代のものであろう。

SK610は大きく搅乱された土壤で、わずかに東部を確認したのみである。深さは0.25mである。1の土器高杯が出土した。口縁部は内湾して端部を直立気味におさめ、脚端部はハの字状に開く。杯底部内面には暗文は認められない。7世紀後半のものであろう。遺物の磨滅はほとんどないが、埋土

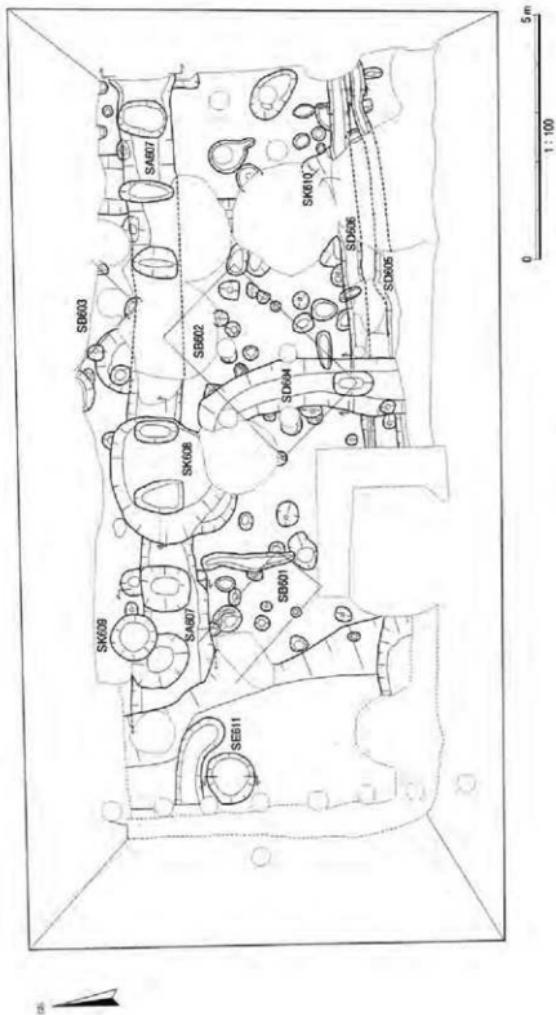


図4 坑610内の遺物

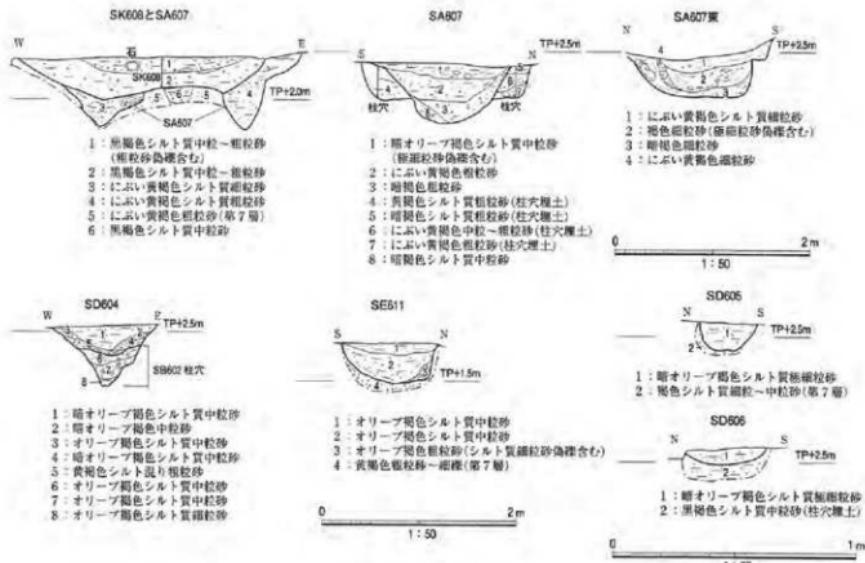


図5 第6層内検出造構断面図

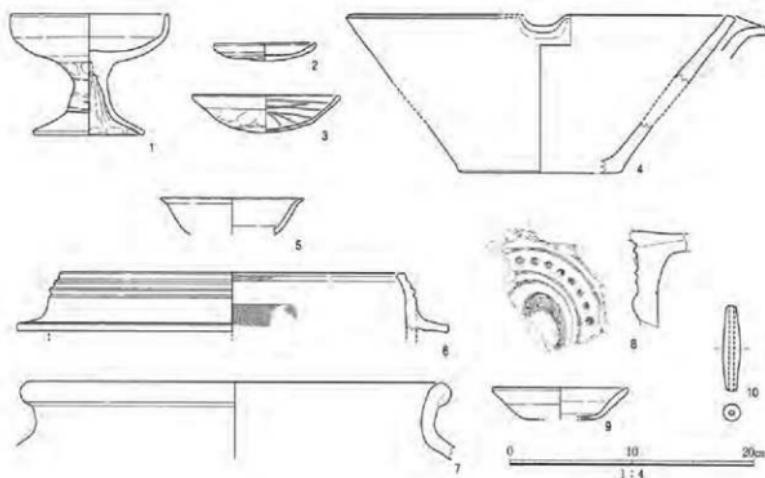


図6 第6層内の造構出土遺物

SK610(1), SD604(2~4), SK608(5~8), SK609(9~10)

の状況から、遺構そのものは中世に属するものと考えられる。

SE611は調査区の西部で検出した素掘りの井戸と考えられる。埋土はオリーブ褐色の粗粒砂である。上部は第3層により破壊され、残存する深さは0.5m、直径は1.0mであり、第7層から取水していた。

b. 豊臣期の遺構(第4a層下面:図7)

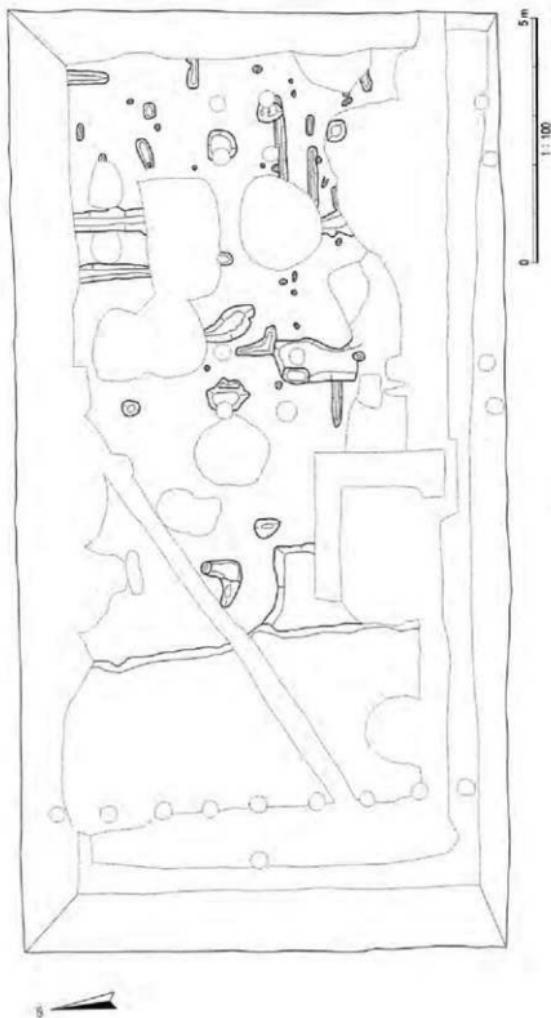


図7 第4a層下面の遺構

第4層は作土であり、調査区西部では層厚を増し、4a～4cの3層に細分される。第4a層下面で東西方向・南北方向の耕作溝と偶蹄類の足跡を確認した。

c. 豊臣期の遺構と遺物(第3b層内: 図8~10)

礎石建ちの建物と、南北方向の堀や土塁を確認した。

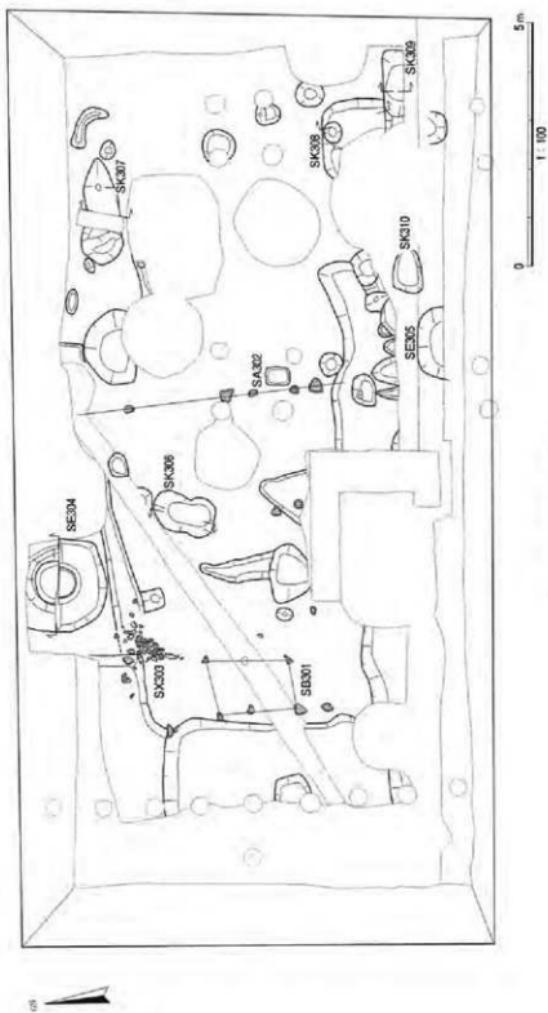


図 8 第3b層内の遺構



写真1 62鋳型出土状況(西から)

SB301は梁行1間、桁行2間の礎石建物である。礎石は長辺20cm程度と小型であり、建物の規模も小さく、平面もやや不定形である。

SA302は南北方向に礎石が並び、堀として復元した。礎石は一辺30cmで上面を平坦に整えていた。この堀を境にして東側の地勢は平坦であるが、西側は西に向かってゆるやかに下降する。

SX303はSB301の北側で検出した集石遺構である。

一辺10cm程度の石が集められているが、明瞭に石を組み上げた痕跡は認められない。ほぼ同じ位置で後述する62の鋳型が出土している(写真1)。

SE304は調査区北端で検出した井戸である。井戸側に铸造用の瓶炉(以下、炉と略記)を用いている。炉は井戸側に転用された際に、上下逆に置かれていた。井戸の深さは1.6m以上である。炉を井戸側に転用する事例として、和歌山県の徳蔵地区遺跡で検出された17世紀初め以降に廃絶した井戸があり、炉を4段分用いて井戸側としている[佐伯也2002a・b、和歌山県文化財センター-2005]。本調査地のものは一段のみのものであるが、使用方法は同じである。遺物は22・26が出土した。22は瀬戸美濃焼の丸碗で、灰釉を施す。26は井戸側に転用されていた炉である。転用された際に上下逆に置かれていたが、以下の叙述では炉本来の天地に基づくことにする。最大径は中央部より下方にあり、外径は

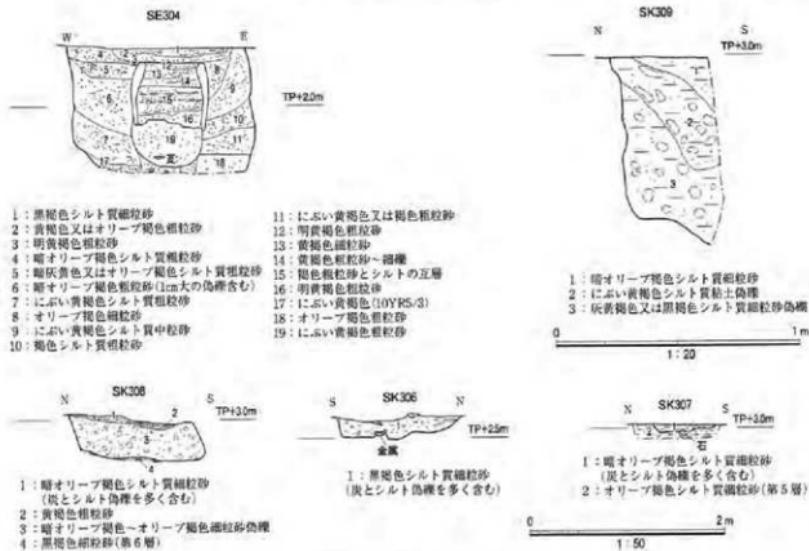


図9 第3b層内の造構断面図

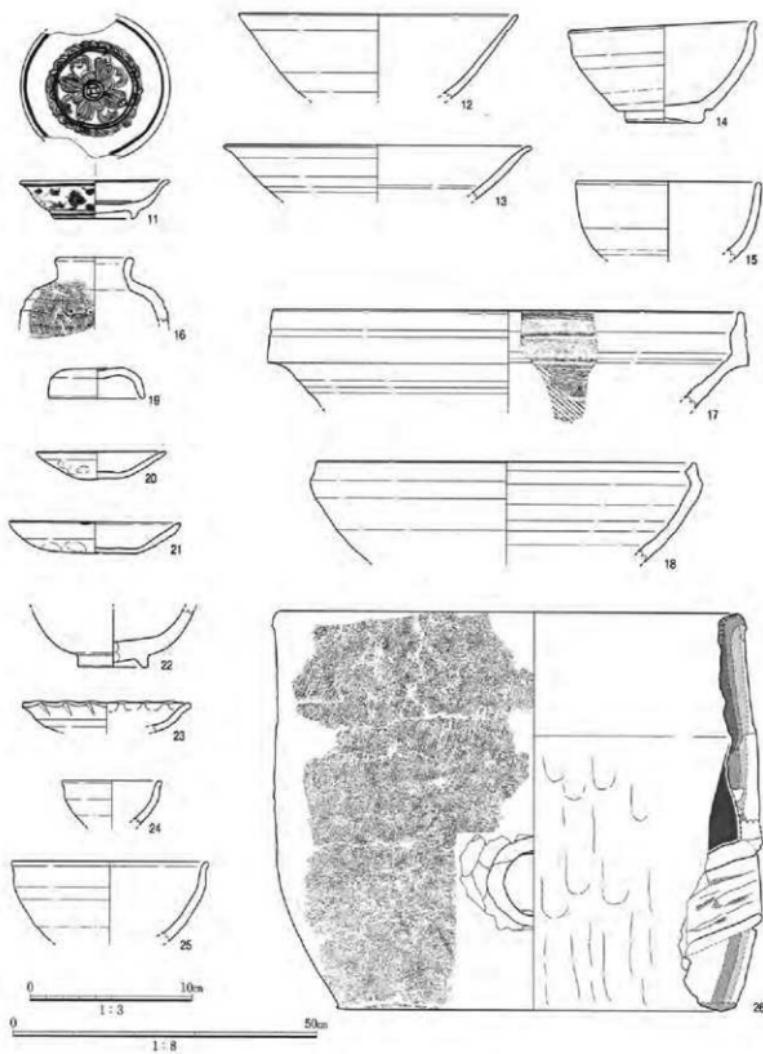


図10 第3b層内の遺構出土遺物
SE304(22・26)、SE305(11～21)、SK306(23)、SK310(24・25)

最大で79cm、上部で75cm、下部65cmであり、高さは69cmである。炉の内側にはガラス質が溶着しており、実際に使用されたものである。下部に輪羽口を差し込んだままとなっており、外側に飛び出した部分については、炉の外壁面にあわせて切断し、そのあとを粘土で整形していた。ただ、輪羽口の孔を開塞した痕跡は認められなかった。輪羽口の外径は15cm、内径は10cmであり、輪羽口の差し込み孔は直径15cmであった。輪羽口の差し込み孔があることから、この部位は溶解した地金の溜る炉の最下部である「ル」よりは上のものである。また、上端部は薄く、やや外反し、端部まで被熱している。蛍光X線による分析の結果、溶解した金属は鉄であることが判明した。このほかにSE304埋土や掘形からは備前焼・瓦質土器が出土し、井戸を埋め戻したシルト層からは肥前陶器片が出土しているが、図示しうるものはなかった。

SE305は調査区の南東で検出した素掘りの井戸である。直径は1.5m、深さは1.5mである。第3a層により埋められている。下部には水成のシルトが堆積していた。通水層は第7層である。埋土からは11~21が出土した。11は中国産青花の皿である。口縁部は外反する。口縁端部に煤が付着することから、灯明皿に転用したものとみられる。12は李朝白磁の碗である。口縁部が斜め上方へ直線的に開く。13は李朝陶器の皿である。口縁端部を軽く外折させる。14・15は瀬戸美濃焼の天目碗と鉄釉を施す丸碗である。16~18は備前焼である。16はお歯黒盃である。肩部に窓印を刻む。17は擂鉢である。18は鉢である。19~21は土師器である。19は焼塙壺の蓋で、器高が高い。20・21は皿である。口縁部は直線的に開き、底部は平坦である。以上は14がやや新しい様相を呈するものの、他は豊臣前期に属するものであろう。

SK306 長軸1.3m、深さ0.3mの不定形な土壙である。炭や鋳型の破片を含んでいる。23の瀬戸美濃焼のひだ皿が出土した。底部から口縁部にかけては一旦内湾し、口縁端部を外反させる。全体に鉄釉を施したのち、口縁部のみに灰釉を流し掛ける。豊臣前期ないしはそれ以前のものであろう。このほかに土師器・瓦器・瓦質土器・備前焼・鋳造炉盤・丸瓦・平瓦が出土した。

SK307は長軸2.2m、深さ0.1~0.3mの不定形な土壙である。炭を含むシルトで埋め戻されていた。

SK308は一辺1.5m、深さ0.5mの土壙である。南側はSK309により切られている。シルトの偽蹠により埋め戻され、埋土の上部には炭が多量に含まれていた。

SK309は深さ0.8mの方形の土壙である。シルトの偽蹠や炭により埋め戻されていた。

SK306~309の土壙はいずれも埋土に炭を含んでいる。とりわけSK306は鋳型片を含んでいたことから、鋳造に関連する土壙である可能性がある。土壙が掘り込まれた第4層は細粒砂であり、炉や鋳型をつくるための土としては不適であり、採土のための土壙ではない。

SK310は東西1.0m、南北0.5mの土壙である。小型の土壙だが、出土する遺物は多かった。埋土から24・25が出土した。24・25は瀬戸美濃焼の小天目碗と天目碗である。いずれも口縁部下端の屈曲は弱く、口縁端部を軽く外上方へつまんで仕上げている。

d. 德川期以降の遺構と遺物(第2層上面: 図11~13)

重機掘削のため、第2層上面で検出した遺構であるが、本来の掘込み面は上位層である可能性がある。井戸のほか、炭の入った土壙が見つかった。徳川初期から現代にかけての複数の時期の遺構が重

なる。

SK201は調査区の西部に位置する直径1.7m、深さ0.7mのやや不定形な土壙である。33～35が出土した。33は肥前磁器染付の蓋付鉢である。口縁部外側には圓線および唐草文を施す。34は丹波焼のお

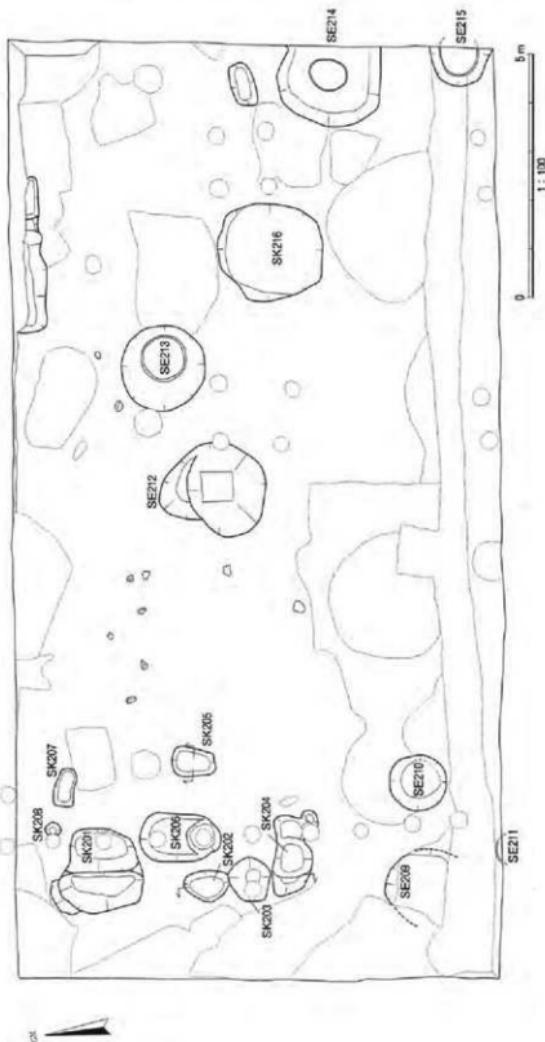


図11 第2層上面の遺構

黒黒壺である。35は肥前陶器の皿である。全体に灰釉を施し、口縁部に黒色釉を施す。以上は17世紀中～後半のものであろう。

SK202～208は深0.4～1.5mの不定形な土壌で、調査区の西部に分布する。埋土には炭や焼土が大量に含まれる。SK204から27～29が出土した。27は中国産青花の碗である。28は瀬戸美濃焼の天目碗で、口縁部の屈曲が弱く、腰高である。29は肥前陶器の皿である。これらは徳川初期のものであろう。

井戸を7基検出した。いずれも第7層以下から取水している。検出した井戸のうち、SE211・213・215は瓦で井戸側をつくっており、近代から現代のものである。

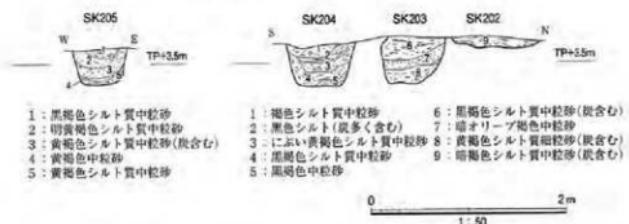


図12 第2層上面の造構断面図

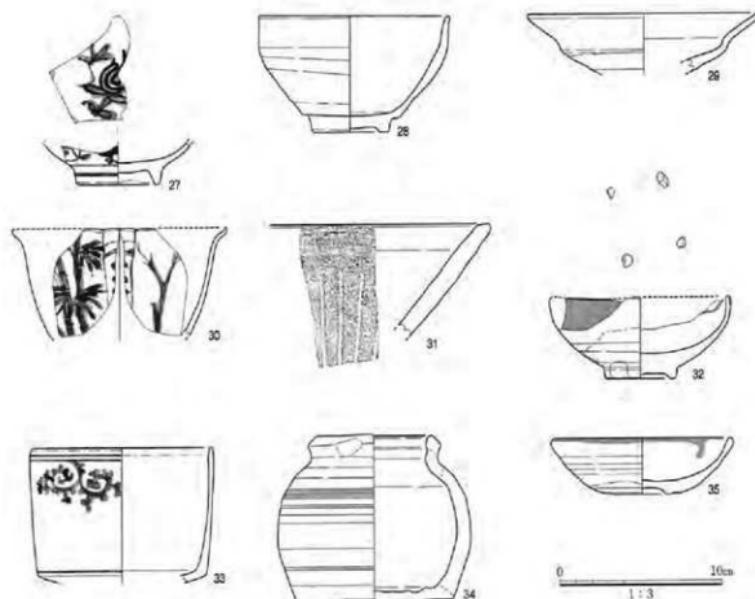


図13 第2層上面の造構出土遺物
SK204(27～29)、SE210(30・31)、SK216(32)、SK201(33～35)

SE209・210は素掘りの井戸である。SE210から30・31が出土した。30は中国産青花の碗で、いわゆる芙蓉手である。31は丹波焼の擂鉢である。徳川初期のものであろう。

SE212・214は木製の井戸網を持つ井戸である。

SK216は直径2.0mの土壙であり、焼けた瓦を廃棄していた。32の肥前陶器の向付が出土した。口縁部に鉄袖を施し、内面には胎土目痕が残る。

e. 各層出土の遺物(図14~16)

第6層からは36~42が出土した。36は瓦器碗である。底部内面に連結輪状のヘラミガキを施す。37は山茶碗である。底部を糸切りしたのち高台を貼り付ける。胎土は精良である。38・39は瓦質土器の壺および羽釜である。40・41は中国産磁器である。40は青白磁で合子の蓋である。頂部に型押し文様が見られる。41は白磁で口禿の皿である。42は管状土錐である。以上は36・37が13世紀、38・39が15世紀、40・41が14~15世紀に属するものであろう。

第4c層からは43の須恵器杯が出土した。口縁部は直線的に開き、高台は底部と体部との境よりも内側に付く。7世紀末~8世紀初頭のものであろう。

第4a層からは44・45が出土した。44は中国南方産とみられる青花の碗である。器高は低く、口縁部は大きく開く。底部内面を蛇の目釉剥ぎし、高台は無釉である。胎土および焼成は陶器に近い。豊臣前期に属するものであろう。45は三巴文軒丸瓦である。

第3b層からは48・51・55・63が出土した。48は漳州産の青花皿で、底部内面を釉剥ぎし、高台は

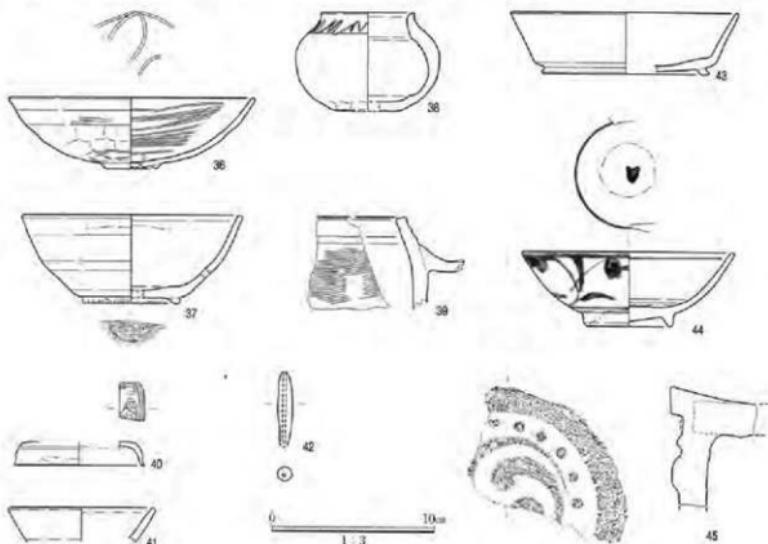


図14 各層出土遺物(1)

第6層(36~42)、第4c層(43)、第4a層(44~45)

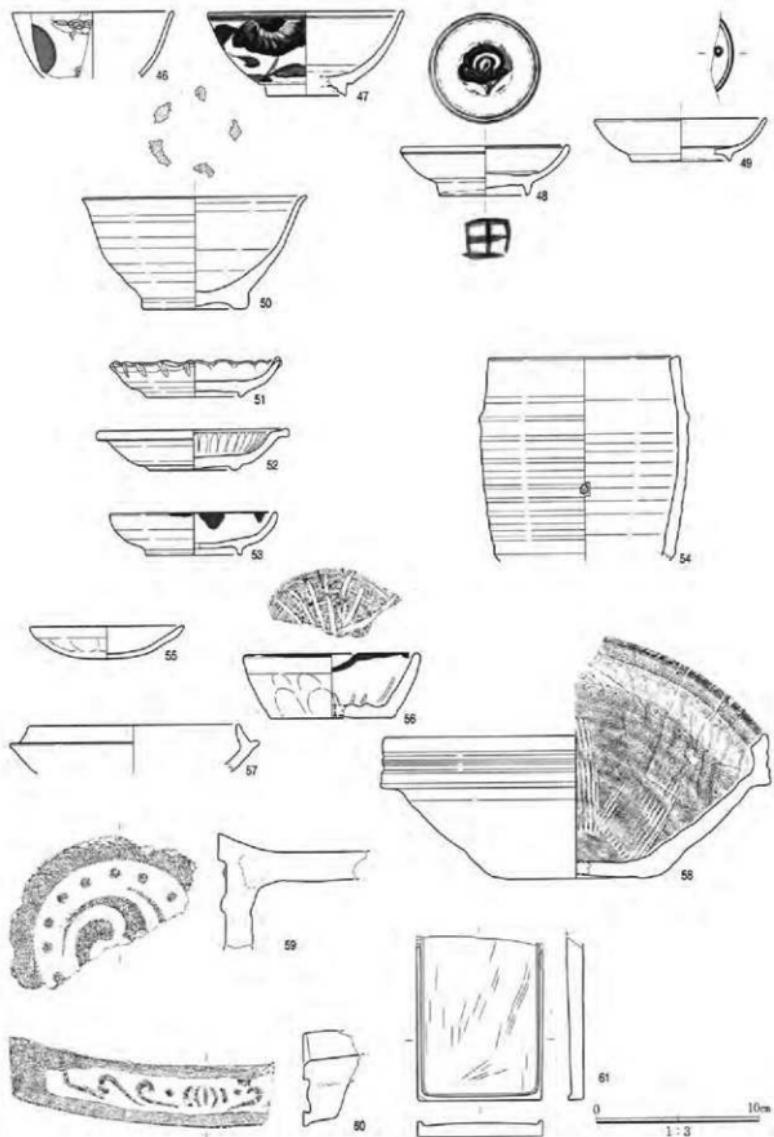


図15 各層出土遺物(2)

第3b層(48・51・55)、第3a層(46・47・49・50・52~54・56~61)

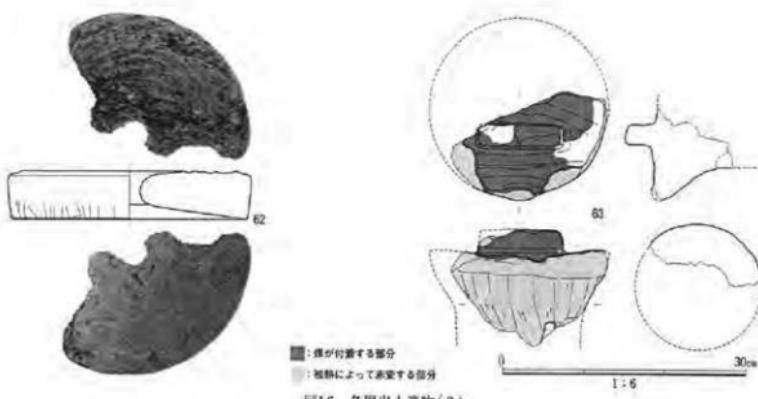


図16 各層出土遺物(3)

第3b層(63)、第3a層(62)

無軸となる。底部外面に「田」の墨書を有する。51は瀬戸美濃焼で鉄釉のひだ皿である。底部内面は無釉で、高台内に輪トチ痕が残る。55は土師器皿である。底部は丸みを帯び、口縁部は体部よりも厚い。63は用途不明の土製品である。現状では正面形は半円形であるが、図の上半を欠損しており、本来は一方が広がる円柱形であったとみられる。図の上端での直径は約22cm、下端での直径は約16cmに復元され、上端面に長さ10cm、幅2cm、高さ4cmの長方形の突起が付く。突起を有する側の面にのみ煤が付着する。胎土には多量の砂砾および鉱滓片を含み、炉などの鋳造関連遺物と類似することから、本土製品も鋳造に伴う遺物と判断した。用途については、形状から円形のものに栓をするようなものである。可能性として考えられるのは、炉の轆羽口の差し込み孔をつくるための型である。炉をつくり上げる際には、粘土を乾燥させつつ積み上げることになるが、あらかじめ轆羽口を差し込む位置に本土製品を埋め込み、炉の焼成後に取り外すことで、炉壁や轆羽口の差し込み孔が壊れることを防ぎ、乾燥後に孔を開ける手間も省き、孔の径を一定にすることも可能となる。また、本土製品の平坦部のみ煤が付着していることも説明できる。類例がなく、あくまで可能性であるが、本調査地で見つかった炉の轆羽口の差し込み孔の径と矛盾がないため、可能性として提示しておく(註1)。以上の遺物は農臣前期に属する。

第3a層からは46・47・49・50・52~54・56~62が出土した。46・47・49は中国産磁器である。46は色絵碗で、外面に大きく赤絵で丸を描くものである。47・49は青花である。47は口縁部が内湾する漳州産の碗である。底部内面を釉剥ぎし、高台は無軸となる。49は景德鎮産の皿である。高台には砂が付着する。50は李朝陶器の碗である。体部から口縁部にかけて内湾し、口縁端部が外反する。底部内面の5箇所に目痕が見られる。器形や胎土からみて上位層からの混入品の可能性がある。52は瀬戸美濃焼で灰釉の折線ソギ皿である。底部内面は無釉で、高台内に輪トチ痕が残る。53・54・58は備前焼である。53は皿で、灯明皿として使用している。54は水指である。全体に火捺が顕著にみられ、体部の1箇所に竈状工具で刺突した跡が残る。58は擂鉢である。擂目は1段である。56は瓦質土器の

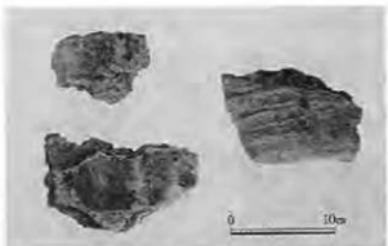


写真2 第3a層出土鋳型
(左2点: 犁先の鋳型、右: 挽型による鋳型)

灯火具である。57は須恵器の杯身で、6世紀のものであろう。下位層から混入したものとみられる。59は三巴文軒丸瓦、60は唐草文軒平瓦である。61は石製の硯である。62は挽型の鋳型に用いる粗型で、円盤状の製品製作に用いたものであろう。胎土には砂礫および粗粒を含む。このほかに第3a層からは、挽型による鋳型や犁先の鋳型が出土している(写真2)。

3)まとめ

中世の遺構はいずれも瓦器を伴う時期のものである。遺構の切りあいなどから、SB601→603→SD604→SD605・606・SA607→SK608となる。注目されるのはSA607である。調査地の周辺は中世の渡辺に当ると考えられており、それに関連する寺院といえば、重源の淨土堂や渡辺氏の氏寺である薬師堂などが想起される。北隣のOS08-1次調査の結果でも鬼瓦や軒瓦などがまとまって出土しており、渡辺淨土堂との関連が指摘されている[黒田慶一2009]。今回見つかった遺構の一部はこうした寺院に関連するものなのだろう。その中でSA607は東西方向の堀と考えられるが、OS08-1次調査の結果を考えると、寺内の区画の南側を画するものであろう。ただ、総じて、本調査地では中世瓦の出土量は少なかった。

豊臣期では前期の遺構が注目される。特にSE304は炉を転用して井戸側にしている。直径が79cmもあり、大型で重量のある炉を遠くへ運ぶとは考えにくいくこと、付近で鋳型片が出土していること、調査区東部で焼土の詰まった土壙が検出されていることから、調査区近辺に鋳造工房があったことが想定され、SB301やSA302も工房に関連する施設の可能性がある。東横堀川と大川が合流し、水運に恵まれた当調査地付近ではこれまで同時期の鋳造遺構や鍛冶遺構が見つかっており[大庭重信2011]、今回の調査結果は既往の成果に沿い、新たな資料を増やしたものといえよう。

以上のように、本調査地では中世から豊臣期にかけて成果を挙げることができた。中世遺構の密な分布は付近一帯が中世渡辺の有力な候補地であるという説を補強するものといえるだろう。

註)

(1) 63の土製品については大阪文化財研究所保存科学室長 伊藤幸司の観察の所見に基づく。

引用・参考文献

- 大庭重信2011、「大坂城・城下町の鍛冶生産—近世初頭の鍛冶遺構調査(NW10-4次)を中心に—」関西近世考古学研究会編「関西近世考古学研究19 中近世都市道路における金属製品の生産と加工」
大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「大坂城跡発掘調査(OS08-1)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)」、pp.153-172

黒田慶一2009、「奈良の“淨土寺”いざこ？」：『草火』第24巻第1号

佐伯和也2002a、「紀伊国日高郡南部吉田村の鉄物師－和歌山县南部町徳蔵地区遺跡－」：鉄造遺跡研究会『鉄造遺跡研究資料2002』

佐伯和也 2002b、「高田土居城跡出土の溶解炉(炉体)転用井戸について」和歌山县文化財センター編『風車』4号

和歌山县文化財センター2005、「徳蔵地区遺跡－近畿自動車道松原那智勝浦線(御坊～南部)建設に伴う発掘調査報告書－』

北壁地層断面
(東部・南東から)



北壁地層断面
(西部・南から)



第6層内の造構完掘状況
(西から)



第6層内の遺構完掘状況
(東部・南から)



第6層内の遺構完掘状況
(西部・南から)



第6層内の遺構完掘状況
(東から)



第3b層内の遺構SB301
(南から)



第3b層内の遺構SA302
(南から)



第3b層内の遺構SE305
(南から)



中央区農人橋二丁目における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS12-19)報告書

調査個所 大阪市中央区農人橋2丁目26・27-1・28-1
調査面積 49m²
調査期間 平成24年11月5日～11月8日
調査主体 公益財團法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、大庭重信

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地西斜面下端の大坂城西部に位置する(図1)。南西側のOS11-11次調査では徳川期の背削下水の調査が行われており、また周辺の調査結果から、調査地周辺は龍造寺谷と農人谷と呼称する2つの埋没谷が隣接する低地な場所で、豊臣期以降の土地開発で谷を埋め立てられていったことが判明している[大阪文化財研究所2012]。

建設工事に先立ち、大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、現地表下2.4m以下で豊臣-徳川期とみられる遺物および遺構面が確認されたことから、発掘調査を実施することとなった。調査範囲は敷地内東市の南北7m×東西7mを対象とし(図2)、事業者側によって現地表下2.4mまで掘削された後、11月5日より調査に着手した。結果、調査範囲は南東から北西に傾斜する谷の斜面に当っており、斜面および谷内には古代～中世の地層が遺存していることが判明した。特に調査区北半では地形が急激に下がり、現地表下4.2mでも底を確認することができず、東半を地層観察用の畦として残し、西半部分のみを調査した。また、敷地内西北部は建設工事のために既に調査開始面以下まで地下げされており、谷内側の状況を把握するために、事業者の許可を得て小規模なトレンチを設定し地層を観察した。11月8日にはすべての記録作業を終え、調査を完了した。

本報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。また、水準値は東京湾平均海面値(T.P.値)で



あり、本文・挿図中ではTP+○mと略記した。

2) 調査の結果

i) 層序(図3～5)

本調査地の標高はTP+6.1m前後あり、事前に事業者側によって除去された地層より下の、TP+4.1m～1.8mまでを第1～4層に大別し、各層をそれぞれ細分した。

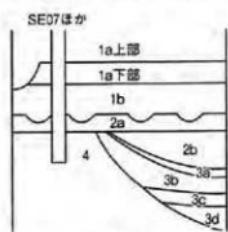


図3 地層と造構の関係図
この造構は地層観察用に設定したトレーニングで破壊され、調査区内には及んでいない。第1a層は出土遺物が出土していないが、豊臣期の可能性がある。

第1層は第1a層と第1b層に区分した。

第1a層：調査区西壁断面でのみ確認した整地層で、第1a層上部と第1a層下部にさらに細分した。第1a層上部は明黄褐色細粒～粗粒砂からなり、層厚は10cm以上ある。上限は重機により除去されたため不明であり、遺物も出土しなかった。調査区西南隅で確認した第1a層下部上面の溝を埋めていた。第1a層下部は暗黄色シルト質中粒～粗粒砂からなり、層厚は10～20cmある。調査区西南隅で本層上面から掘られた南北東～北西方向の溝もしくは土壤の北東肩を確認した。こ

の造構は地層観察用に設定したトレーニングで破壊され、調査区内には及んでいない。第1a層は出土遺物が出土していないが、豊臣期の可能性がある。

第1b層：オリーブ褐色～灰色の細粒～粗粒砂質シルトからなる作土層で、上部がやや泥質である。層厚は40cmある。本層下面で耕作溝を検出した。遺物は土師器・須恵器・青磁・白磁・常滑焼・瀬戸美濃焼・棒状土錐の小片を含み、時期は15世紀代を中心とし、一部16世紀のものを含む。

第2層は第2a層と第2b層に区分した。

第2a層：緑灰色中粒～粗粒砂質シルトからなり、上部にシルト偽縞が点在する。調査区全域に分布

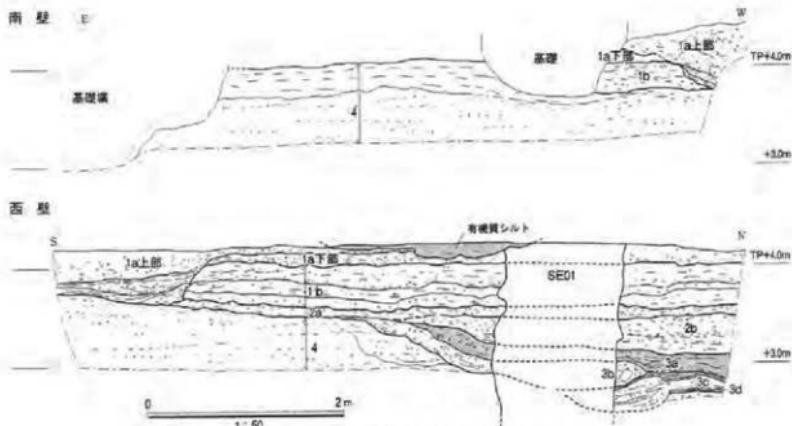


図4 調査区南・西壁地層断面図

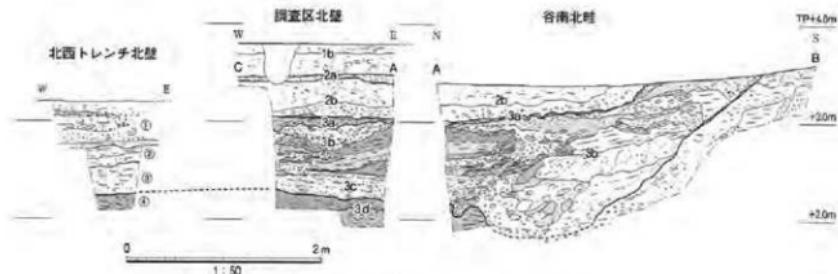


図5 調査区北壁・谷および北西トレーニング断面図

し、層厚は10cmある。土師器・須恵器・瓦器・白磁・管状土錠の小片を含み、時期は13世紀代と考えられる。

第2b層：調査区北半で確認した谷の上半を埋める整地層で、オリーブ灰色シルト偽礫を含む中粒～粗粒砂からなる。層厚は最大で40cmある。古代の土師器・須恵器が出土した。

第3層は谷下半の埋土で、地すべりによって谷内に崩落した堆積物を主体とし、上・下に本来の堆積構造を残す地層が確認されたことから、これらを第3a～3d層に区分した。

第3a層：有機質な黒褐色シルト～黄灰色シルト質粗粒砂からなる自然堆積層で、層厚は5～30cmある。地すべりによる土砂の崩落後に谷内に堆積した地層とみられる。

第3b層：地すべりによって谷内に崩落した地層で、谷の肩付近には斜面に沿ってずり落ちた第4層起源の明緑灰色粘土～暗緑灰色シルト質細粒砂が分布し、側方および上位には第4層や第3c・3d層に由来する有機質に富む黒褐色シルトの偽礫や灰色粗粒砂が堆積していた。

第3c・3d層：地すべり以前に谷内に堆積していたとみられる地層で、谷斜面から離れた調査区北端で一部確認した。第3c層は有機質なシルト～細粒砂薄層を挟む灰白色粗粒砂からなる自然堆積層で、層厚は50cmあった。第3d層は第3c層の下位にある有機質な自然堆積層で、上部が黒褐色シルト質細粒砂、下部が黄灰色シルト質細粒～中粒砂からなる。層厚は上部が30cmあり、下部が30cmまで確認したが、下限は不明である。第3c・3d層からは古代の土師器・須恵器が多く出土した。

第4層：段丘構成層で、層厚は80cmまで確認した。明黄褐色～緑灰色の中粒～粗粒砂からなり、上方へ細粒化する。最も高い調査区南端では、最上部が灰オリーブ色粘土であり、上面の標高はTP+4.1mある。谷の肩付近では第4層自体も地すべりによって斜面に沿ってずり落ちている状況が確認できた。

なお、敷地内西北部のトレーニングでは、TP+3.2m～+2.1mまでの谷の内側に相当する地層を確認した。調査区北端の第3d層とほぼ同じレベルで有機質に富む細粒～中粒砂質シルト層(図5-④)が見られ、両者は対比できる可能性がある。この上には分級の悪い灰色中粒～粗粒砂質シルト(同③)、炭酸第一鉄のノジュールが点在する灰色砂質シルト(同②)、水成のにぶい黄色細粒～粗粒砂(同①)の順で堆積しており、調査区内の層相とは異なっていた。②・③層からは古代とみられる土師器の細片が出土した。

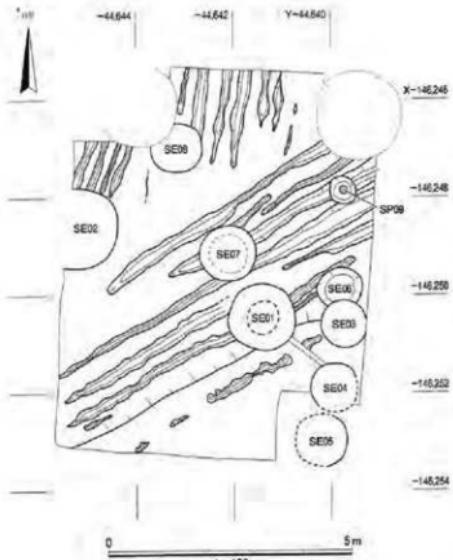


図6 第1a層上位および第1b層下面遺構平面図

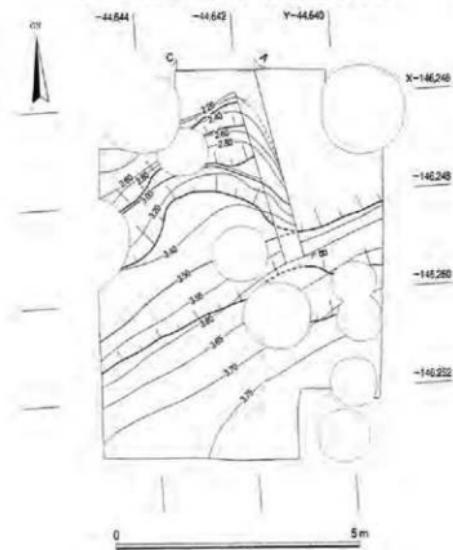


図7 第4層上面遺構平面図

ii) 遺構と遺物

a. 近世以降(図6)

平面調査は第1b層の上半から開始したが、第1a層よりも上から掘り込まれた井戸や柱穴を第1b層下面で記録し、SE01～08、SP09とした。出土遺物から時期が判明する遺構は、SE07が17世紀前半、SE08が17世紀後半、SE03が17世紀末～18世紀初頭、SE02が18世紀後半である。また、SE06はSE03と重複しこれに先行することから、17世紀代と考えられる。なお、SE01は近代以下るもので、調査中も井戸内から水が湧き出していた。SP09は掘形が直径50cmの円形で、中央に直径20cmの柱痕を確認した。これに組み合う柱穴は確認できず、遺物も出土していないことから時期は不明である。

b. 中世(図6)

第1b層下面で耕作溝を検出した。溝の向きは、斜面側の南半では傾斜の方向に平行する北東～南西方向、北半の低くなった平坦部では南北方向である。第1b層および溝出土遺物から、時期は中世後半の15・16世紀代とみられる。

c. 古代(図7・8)

第4層上面で北東～南西方向に延びる谷の南肩を検出した。この谷は農人谷に相当する。南肩付近の谷の埋没過程は、有機質な第3d層、水成の砂層である第3c層、地すべりによる土砂の崩落(第3b層)、有機質な第3a層、整地層である第2b層、の順であった。

谷の肩付近の第4層自体も谷斜面に沿って変形しており、地すべりを引き

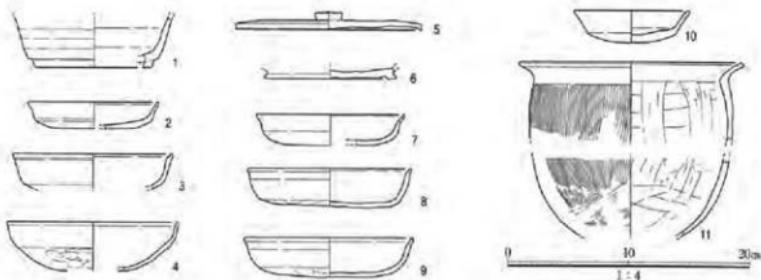


図8 谷出土遺物
第2b層(1~4)、第3c層(5~11)

起こした要因として、地震による強いゆれが想定される。

谷内からは、第3c層を中心いて古代の土器が多く出土し、数は多くないが第2b・3d層からも古代の土器が出土した。

第2b層からは須恵器杯B1、土師器杯2~4が、第3c層からは須恵器杯B蓋5、同杯B6、土師器杯7~10、同甕11が出土した(図8)。土師器杯はいずれも無文で、須恵器杯Bも高台や口縁端部・つまみのつくりが退化しており、おおむね[佐藤隆2000]の難波V中~新段階に相当する8世紀後葉~9世紀初頭のものと考えられる。このことから、地すべりの要因となったとみられる地震の時期も、8世紀後葉~9世紀初頭以降でこれに近い時期の可能性がある。

3)まとめ

今回の調査成果を以下にまとめる。

- ①農人谷の南肩を検出し、周辺の古地形を復元する上で新たな情報を得ることができた。
- ②谷の肩付近には地震によるとみられる地すべりが確認され、この時期は8世紀後葉~9世紀初頭以降、これに近い時期が推定される。
- ③谷内から8世紀後葉~9世紀初頭の遺物がまとまって出土し、付近に後期難波宮でも後半およびそれ以後の時期の遺構が存在したことが予想される。
- ④中世後半に谷斜面部が耕作地として利用されていた。

引用・参考文献

大阪文化財研究所2012、「大坂城跡Ⅹ」

佐藤隆2000、「古代難波地域の土器様相とその歴史的背景」：『難波宮址の研究』第十一、pp.253~264

第1b層下面全景
(南西から)



第4層上面全景
(南から)



谷北・東壁断面
(南西より)



中央区大手通二丁目における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS12-20)報告書

調査個所 大阪市中央区大手通2丁目46・47、内淡路町2丁目9-3
調査面積 80m²
調査期間 平成24年10月12日～10月18日
調査主体 公益財團法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、大庭重信・村元健一

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は、上町台地西斜面に立地し、豊臣氏大坂城の悲構の範囲内に当る(図1・2)。

周辺では多くの調査が行われており、繩文時代から近世までの遺構・遺物が確認されている。特に注目すべき成果として、本調査地に面する大手通を挟んだ南西側で行われたOS91-64次調査では、17世紀中頃～後年にかけての大量の油漬受皿が出土し、検出した悲構からもここに製墨工房跡があつたことが判明した[大阪市文化財協会2003]。また、同調査では、現在の敷地と方位を同じくする豊臣後期の柱列・溝、およびそれ以前の大型の落込みが検出されている。

建物建設工事に先だって、大阪市教育委員会が9月27日に試掘調査を実施した。その結果、現地表下1.2mの深さで大坂城と関連する悲構面・地層・遺物が確認されたことから、10月12日より調査を開始した。まず、敷地内の北半に南北5m、東西16mの調査区を設け、現地表下1.2mまでの近現代の地層を重機で除去したのち、人力掘削を開始した。その結果、調査区のはば中央を境に東から西に低くなる段差があり、東側では地山が高く多数の土壤が存在するのに対し、西側では土蔵の基礎と考えられる礎石列が分布し、さらにその下に分厚い整地層が存在することが判明した。調査では、まず西側の礎石列の記録を行ったのち、全体を地山まで掘り下げ、悲構の検出作業を行った。10月19日にはすべての記録作業を終え、調査を完了した。

本報告書で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。また水準値は東京湾平均海面値(T.P.値)であり、本文・挿図中ではTP+○mと略記した。



2) 調査の結果

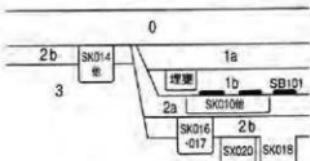
i) 層序(図3・4)

調査地は東から西に低くなる傾斜地に当り、調査区のほぼ中央で近世の敷地境とみられる段差がある。地層は西側で厚く、複数に区分できたのに対し、東側では薄く、上部が削平されていた。現代の擾乱および盛土である第0層以下を第1～3層に区分した。

第1層：調査区西部に分布し、第1a層と第1b層に区分した。

第1a層は上半がにぶい黄褐色細粒砂質シルト、下半がにぶい黄褐色細粒～中粒砂からなる整地層で、漆喰の小片を多く含む。層厚は30cmあった。

第1b層は後述する礎石建物(SB101)を埋める整地層で、炭粒を含む灰黄褐色細粒～中粒砂質シルトからなり、層厚は10cmあった。18世紀後半の陶磁器類を含み、南壁断面で本層上面から掘り込まれた埋甕を確認した。



第2層：第2a層と第2b層に区分した。

第2a層は調査区西部に分布する、SB101構築に伴う整地層である。焼土・炭粒やシルト偽縛を含む細粒砂からなり、層厚は最大で90cmあった。本層の中で焼土を多く含む土壤(SK009・010・012)が掘られており、焼土は共伴遺物から1724(享保9)年の妙知焼のものと考えられる。

第2b層は、調査区西部と東部に分かれて分布する整地層である。西部では炭粒を含むオリーブ褐色細粒砂質シルトからなり、層厚は最大で70cmあった。本層上面でSK016・017を検出したほか、本層で埋まるSK018を検出した。東部ではオリーブ褐色細粒砂～シルト質細粒砂からなり、層厚は20～40cmあった。東部では本層上から掘り込まれた土壤を多数検出した。

第3層：明黄褐色細粒～中粒砂からなる段丘構成層である。本層上面で、SX020を検出した。

ii) 造構と遺物(図4～7)

第2b層および第3層上面で検出した18世紀初頭以前の造構と、調査区西部の第2a層上面および層内で検出した18世紀前葉以降の造構に分けて報告する。

a. 第2b層上面・第3層上面の造構と遺物(図4～7)

近世の土壤・溝・落込みおよび石列を検出した。第2b層は部分的にしか遺存しておらず、多くの造構は第3層上面まで掘り下げて確認した。調査区のほぼ中央で東から西に下がる40cm程の段差があり、段の西面には石段を整っていた(SW022)。同様の石段は調査区東端でも確認され(SW021)、これらは斜面地を雑草状に造成した敷地の境界に当ると考えられる。東側敷地の東西幅は、SW021・022間の約8.5mであろう。また、敷地の表は調査地南側の東西道路に面していたと考えられることから、調査範囲は南北に細長い敷地の奥に当ると想定される。調査区東部ではゴミ穴を中心とした多数の土壤を検出したほか、調査区西部でも土壤・溝を検出した。

SX020 調査区西部で確認した、調査区外北側に向かって下がる大型の落込みである。平面で輪郭を確認したのみであるが、北壁部分で一部深掘りを行い、深さと埋土の特徴を観察した(図4)。深さ

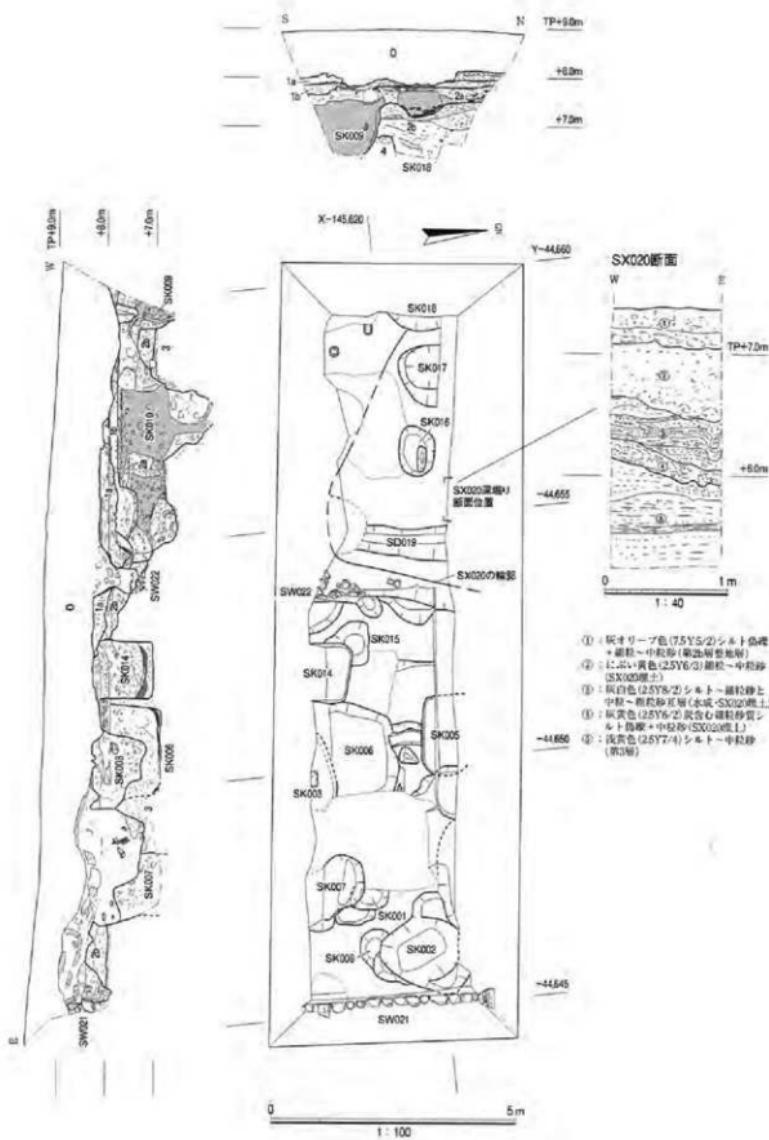


図4 第2b・3層上面検出造構平面図および南・西壁・SX020採掘り地層断面図

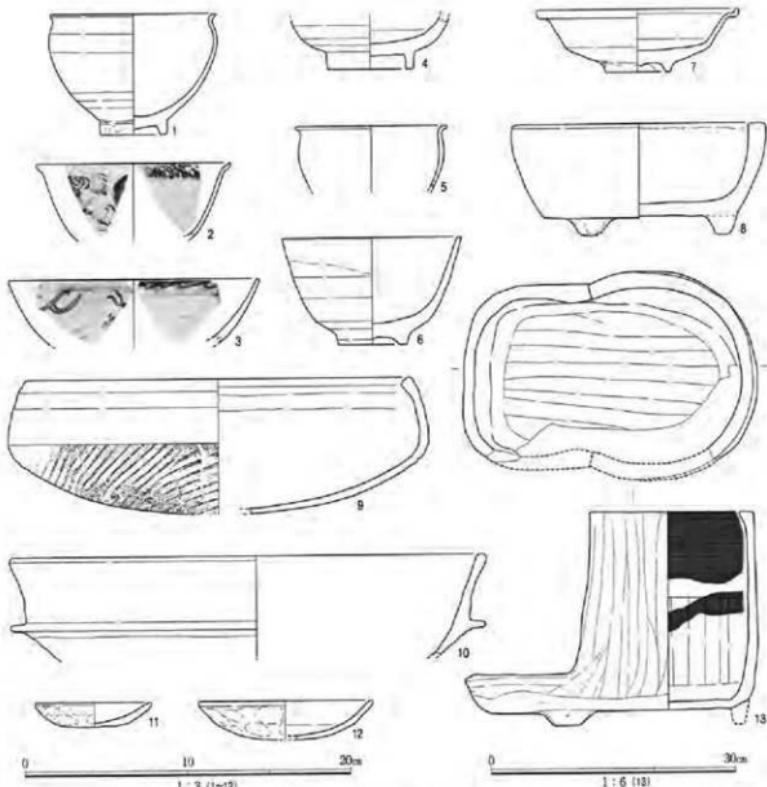


図5 SK016・006出土遺物

SK016(1), SK006(2-13)

は深掘り部分で1.0mあり、最下部に細粒砂質シルトの偽臓が堆積した後、水成のシルト～細粒砂の薄層と中粒～粗粒砂が互層で堆積し、上半は分級の悪い細粒～粗粒砂で覆われていた。遺物は出土していないが、調査地南東のOS91-64次調査でも類似した大型の落込みが検出されており【大阪市文化財協会2003】、豊臣期の可能性がある。

SW021・022 SW021は調査区東端で検出した石段で、南端と北端で3段残っており、高さは0.4mあった。その間は最下段のみが遺存していた。調査区外東側の一段高くなる敷地との境と考えられる。SW022は調査区中央で検出した石段で、南端で一部遺存しており、第2a層上面で同じ場所に掘られたSD011によって破壊されていた。調査区の東西の敷地を分ける境である。

SK016 調査区西部の第2b層上面で検出した長軸1.0m、短軸0.7mの楕円形土壙で、深さ0.5mある。土師器・瓦質土器・肥前陶器・肥前磁器が出土している。図示した1は肥前陶器で、内野山系の碗で

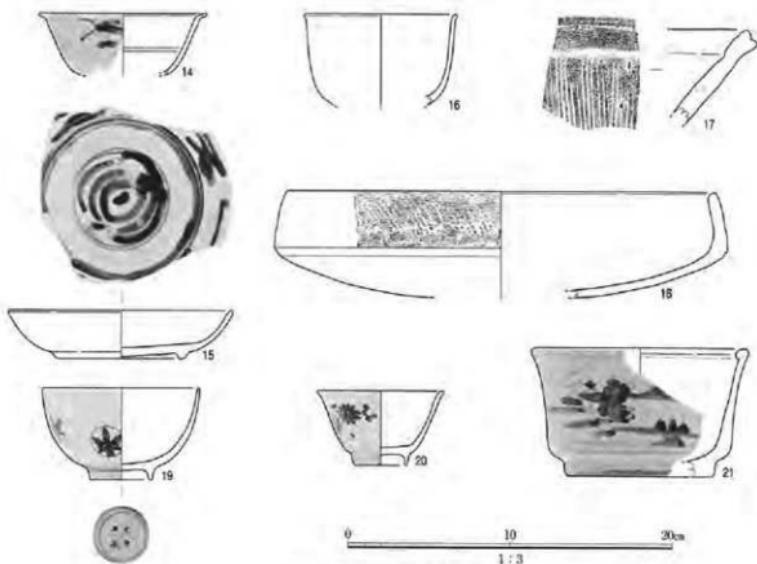


図6 SK001・005出土遺物
SK001(14~18), SK005(19~21)

ある(図5)。17世紀前～中葉のものであろう。

SK017 調査区西部のSK016西側で同一面で南半を検出した直径約1.3mの円形土壙で、深さは0.5mまで掘り下げたが底は確認できなかった。平面形と深さから井戸の可能性もある。17世紀中葉の肥前磁器が出土している。

SK018 調査区西端の第3層上面で東端を検出した土壙で、第2b層によって埋められていた。深さは0.4mまで掘り下げたが、底は確認できなかった。遺物は出土していない。

SD019 調査区西部で検出した東西溝で、幅0.5~0.7m、深さ0.2mと浅い。

SK006 調査区東部で検出した南北約1.5m、東西推定2.0mの方形土壙で、ほぼ垂直に掘り込まれており、深さ1.0mある。底付近に炭層が堆積し、その後ベースの第3層に由来する細粒～中粒砂で埋めていた。出土遺物は2~13を図化した(図5)。2・3は中国産磁器の碗である。2は外表面が色絵で、口縁部内面に四方櫛文の染付が見られる。3は漳州窯産の青花である。4は李朝白磁碗の底部である。5~7は肥前陶器である。5・6は碗である。7は溝縁皿で、内面に砂目痕跡がある。8は瓦質土器火入れである。9~13は土師器である。9・10は培炉で、9は底部外面にタタキ目が認められる。10は口縁部下端に突帯が巡るもので、底部は型作りである。突帯は強く張り出しておらず、大阪で出土するこの形態の培炉としては初見的なものであろう。11・12はユビオサエとナデで整形する皿である。13は移動式の竈で、内面には煤が付着する。13は土壙底付近の炭層中から出土した。このほかにSK006からは多數の土師器皿をはじめ、初期の肥前磁器片や食物残渣が出土している。遺物の時期

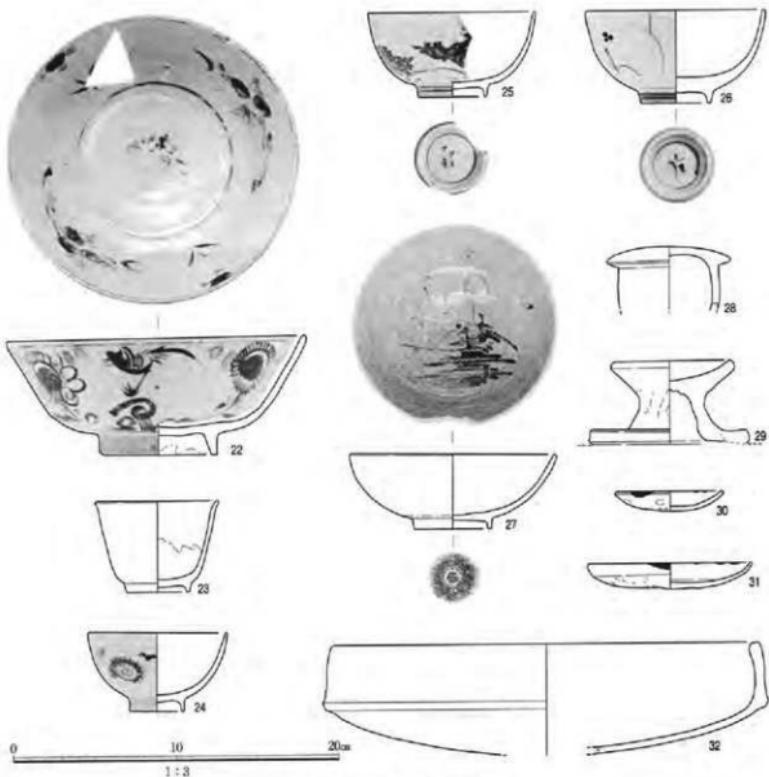


図7 SK002出土遺物実測図

は17世紀前半のものが多いが、最も新しいものは17世紀中葉にかかる。

SK014 SK006の南西隣で検出した東西1.2mの方形土壙で、ほぼ垂直に掘り込まれ、深さ1.0mある。底付近には炭層が堆積しており、遺構の形状と埋土の特徴はSK006と共通する。出土遺物の年代もSK006とはほぼ同じで、共通した目的で掘られたものであろう。

SK001 調査区西部で検出した不整形の土壙で、深さは0.4mある。南側のSK007を切っている。出土遺物は14~18を図化した(図6)。14は中国産青花の小杯で、口縁部は外折する。15は肥前磁器の染付皿である。高台には粉殻が付着する。16は肥前陶器碗である。17は丹波焼播鉢である。18は土師器培塿で、口縁部外面には搔き上げの痕跡を有する。以上の遺物は15~17が古相を呈するが他は17世紀中~後葉のものであろう。

SK005 調査区東部の北壁付近で南端を確認した土壙で、深さは0.6mある。遺物は19~21を図化した。19・20は肥前磁器の染付である。19は碗で、外面にはコンニヤク印判による施文が見られる。

高台内には「太明年製」銘がある。20は小杯で、外面には型紙摺による菊花文を施す。21は肥前陶胎染付の火入れである。これらは17世紀末～18世紀初頭のものであろう。

SK002 調査区東部の北東隅で検出した不整形な土壤で、深さは0.9mある。出土遺物は22～32を図化した(図7)。22は赤絵を施す中国産磁器で、漳州窯産である。23～26は肥前磁器である。23は白磁小杯、24は色絵の小碗である。25・26は染付碗で、いずれも高台内に「大明年製」銘を有する。25の外面にはコンニャク印判と手書きを組み合わせた文様が見られる。27は肥前京焼風陶器の碗である。28は瓦質土器で、蓋とみられる。胎土は精良である。29～32は土師器である。29は瓦当皿の一部分であろう。30・31は灯明皿である。32は培塔である。これらは中国産磁器を除き、17世紀後葉～18世紀初頭に属するものである。このほか、土人形・金属器・動物骨が出土している。

SK017 調査区東部で北半を検出した土壤で、攪乱により遺存状態は悪いが、深さ1.3m以上あり、下半は直径約1.3mの円形になることから、井戸の可能性もある。17世紀中葉の肥前陶器・肥前磁器が出土した。

このほか、SK015はSK014に、SK008はSK002に切られる不整形な土壤で、出土遺物から17世紀前～中葉にかけてのものと考えられる。

b. 第2a層上面・層内の遺構と遺物(図8～10)

第2a層は調査区西部に分布する礎石建物SB101構築に伴う整地層で、上面で蔽とみられる礎石建物SB101と、東側の段差部分に設けられた東西溝SD011を検出した。また、SB101の礎石除去後の第2a層内ではSK009・010・012を検出した。まず、第2a層内で検出した遺構を報告し、次いで第2a層上面で検出したSB101と関連遺構を報告する。

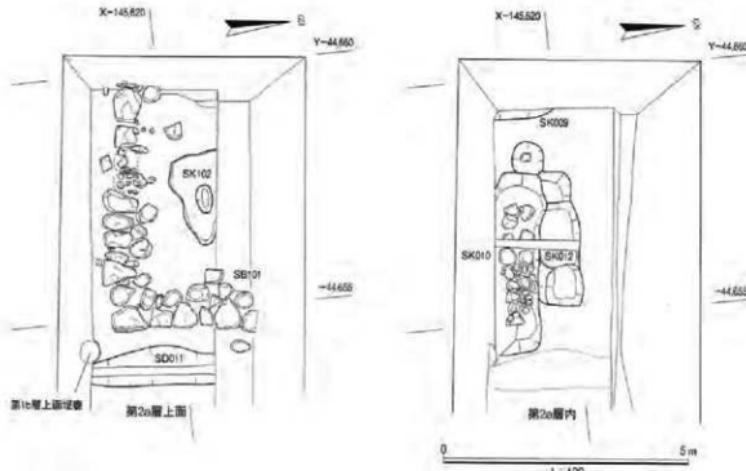


図8 第2a層上面・層内検出遺構平面図

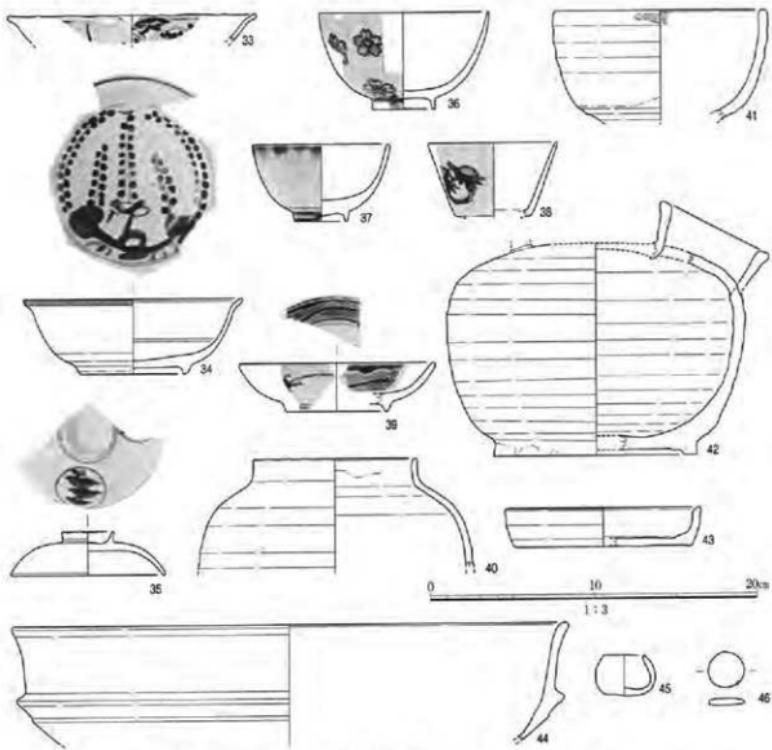


図9 SK010出土遺物実測図(*36・42はSK012・SB101整地層と接合)

SK010 後述するSB101の石列西辺部分で、石列除去後に検出した東西に細長い土壇である。東西3.7m、南北1.0m以上あり、深さは1.0~1.8m以上と深くかつ凹凸が顕著であり、シルト質細砂~中粒砂や炭片を多く含む焼土で下半を埋めたのち、栗石を敷いてその上に石列を並べていた。下半の焼土は拳大の大型の偽礎状のものが多い。後述するように共伴遺物の年代から、焼土は1724(享保9)年の妙知焼に伴う可能性が高く、火災後の片づけのための廃棄土壇を建物の基礎に利用したと推測される。出土遺物は33~46を図化した(図9)。33~35は中国産青花である。33は芙蓉手の輪花皿である。34は深めの皿で、口縁部内外面に圖様を巡らす。底部内面にはかなり崩れた喜鶴登梅文を施す。高台内は無釉で砂が付着する。同一器形・文様の皿が、少なくとも3個体出土している。35は碗の蓋である。36~40は肥前磁器で、36~39は染付である。36~37は碗、38は猪口で、36~38の外側にはコンニャク印判による施文がある。39は皿である。40は白磁の蓋である。41・42は瀬戸美濃焼である。41は碗で口縁部の1箇所に緑色釉を流し掛ける。42は橋状の把手を持つ足瓶である。43は丹波焼の皿である。44は土師器焼物で、口縁部下端に断面三角形の突帯を有する。45は土師器の小蓋で、所謂「つまづけ」

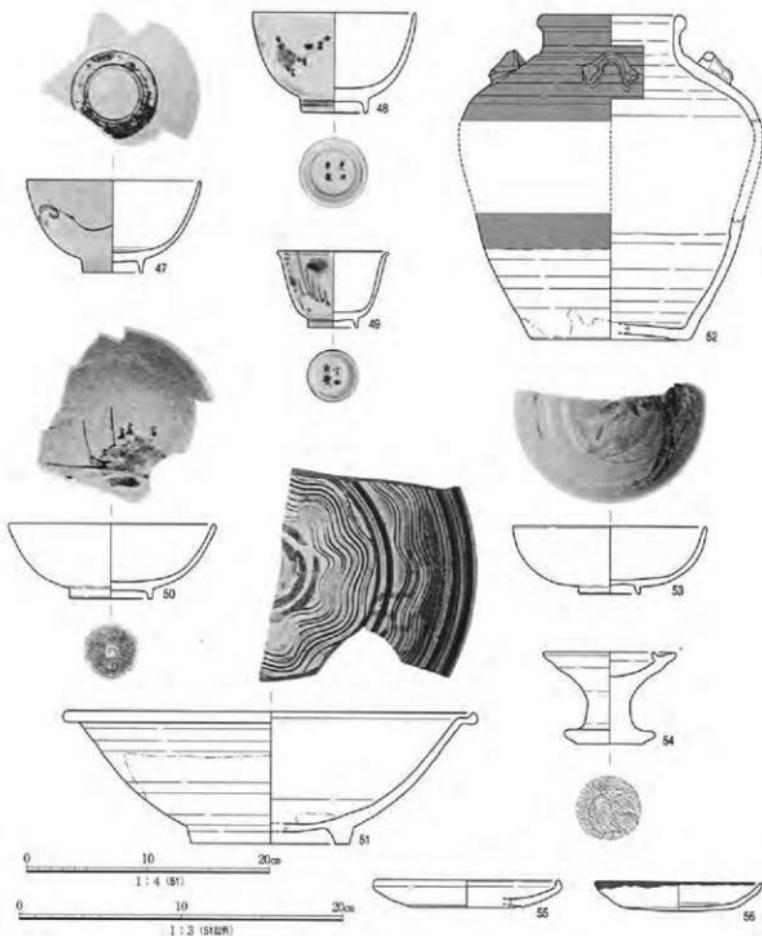


図10 第2a層・第1b層出土遺物実測図
第2a層(47-52・55-56)、第1b層(53-54)

と呼称されるものである。口縁部は内湾してすぼまる形態である。46は黒色の基石である。なお、これらのうち36・42はSK012・SB101整地層の出土遺物と接合している。以上、SD010出土遺物は17世紀末～18世紀前葉のものである。

SK012 SK010の北側に接する東西2.7m、南北0.8mの細長い土壇で、深さは0.3～0.5mと凹凸があり、SK010と同様、焼土と大型の偽縄で埋めていた。SK010の西側にも同様のSK009がある。

SB101 40~70cm程の大型の平石を、礎石建物周囲の基礎部分に運らせたもので、蔵と考えられる。南辺と東辺の一部を確認し、南北3.0m以上、東西5.0m以上ある。

遺物は、SB101構築に伴う第2a層出土の47~52・55・56と、SB101廃絶後の整地層である第1b層出土の53・54を図化した(図10)。47~49は肥前磁器である。47は色絵碗である。48は染付碗で、高台内に「大明年製」銘を有する。49は染付小杯で、高台内に「宣明年製」銘を有する。50・51は肥前陶器で、50は京焼風陶器の碗である。51は刷毛目文を施す鉢である。52は信楽焼の腰白茶壺である。53は関西系陶器の碗で、上絵付けを施す。54は茶碗きの台付灯明受皿である。底部は糸切りしている。55は土師質の皿で、低い高台を有し、橢円形である。二次的に被熱している。56は土師器の灯明皿である。第2a層出土の47~52・55・56は17世紀後葉~18世紀前葉に属し、第1b層出土の53・54は18世紀前~中葉に属し、前者よりもやや降る時期のものである。以上、SB101築造以前の遺物に関して見ると、SK010・102の埋土およびSB101整地層には焼土を含んでおり、遺物の時期が18世紀前葉を下限とすることから、焼土は1724(享保9)年の妙知焼に伴うものと推測される。

SD011 SB101の東側で敷地境の段差部分に掘られた東西溝である。幅0.5~0.8mあり、西側の第2a層上面からの深さは0.2mと浅い。

SK102 SB101内部で検出した不整形の土壤で、SB101廃絶後に掘り込まれたと考えられる。出土遺物は、18世紀前~中葉の陶磁器類が出土している。

3)まとめ

今回の調査では、豊臣期に亘る遺構は、深い落込みのSX020のみであったが、17世紀前葉から18世紀前葉にかけての徳川期の遺構・遺物を多く検出した。17世紀前葉~18世紀初頭の遺構としては、南北方向の石段によって区画された雑居状の敷地内で多数の土壤を検出した。調査地南側の東西道路を敷地の表側とみると、今回の調査地は南北に細長い敷地の奥部分に相当すると考えられる。また、低い西側の敷地では、1724(享保9)年の妙知焼直後に建てられた土蔵と考えられる礎石建物を検出した。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2003、「大坂城跡」Ⅶ

南壁地層断面
(北西から)



遺構完掘状況
(東から)



SB101検出状況
(南東から)



平成24年度特別史跡大坂城跡整備事業にかかる
大坂城跡発掘調査(OS12-29)報告書

調査個所 大阪市中央区大阪城 大阪城公園内
二ノ丸南面東側 一番櫓北

調査面積 43m²

調査期間 平成25年2月4日～2月25日

調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所

調査担当者 次長 南秀雄、市川創、谷崎仁美、池田研

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は特別史跡大坂城跡の二ノ丸南面東端部に位置し、調査地の南には重要文化財である一番櫓が現存する(図1・2)。二ノ丸は内堀と外堀に挟まれた範囲であり、このうち今回調査を行った南面は、1628(寛永5)年～1629(同6)年に実施された大坂城再築第3期工事に伴って築造され、徳川期には、大坂城を警備する大御番頭の長屋などが付近に置かれた(図3-B)。また『大坂城普請丁場割之図』によれば、調査地周辺の丁場の担当は金澤中納言(加賀：前田利常)である。なお、調査地一帯には、豊臣期においては大名屋敷が置かれたと想定でき(図3-A)、近代には陸軍の関係施設が置かれた。その後、1931年の地図では、「衛戍監獄」が存在したことがわかる。

調査地周辺では、石垣の保存修理作業の一環として、平成19年度に玉造枡形でOS07-12次として発掘調査が行われているほか[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009]、大手土橋上で行われたOS83-18・33次や[大阪市文化財協会2002]、南外堀が干上がった機会を捉えての堀底の調査などが行われている[大阪城天守閣1973](図1)。こうしたなか、徳川期大坂城の遺構の状況を明らかにし、

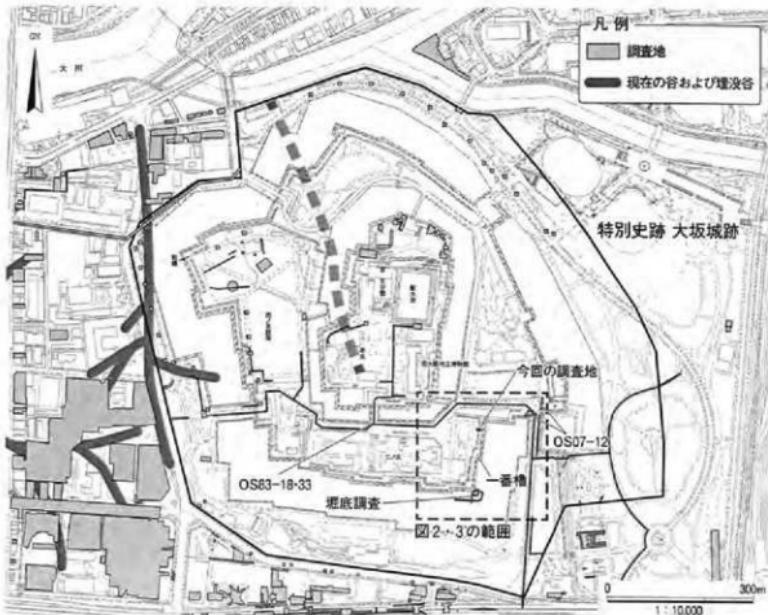


図1 調査地位置図(谷・埋没谷は[遠智浩・清水和明2011]による)

雁木の修復を含めた今後の史跡整備に際しての資料を得ることを目的として、今回の調査を実施した。

調査は2月4日より開始し、重機によって後述する第1層まで掘削を行った。その後、第2層以下の掘下げはすべて人力によって行い、遺構検出・掘下げ・断割り・記録などの作業を適宜行い、調査を進めた。また、埋戻し前には保護砂を遺構面に敷き、遺構の保護に努めた。こうした工程を経て、現場での作業については、2月25日に機材類の撤収を含むすべての工程を完了した。

また、基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP+○mと記した。

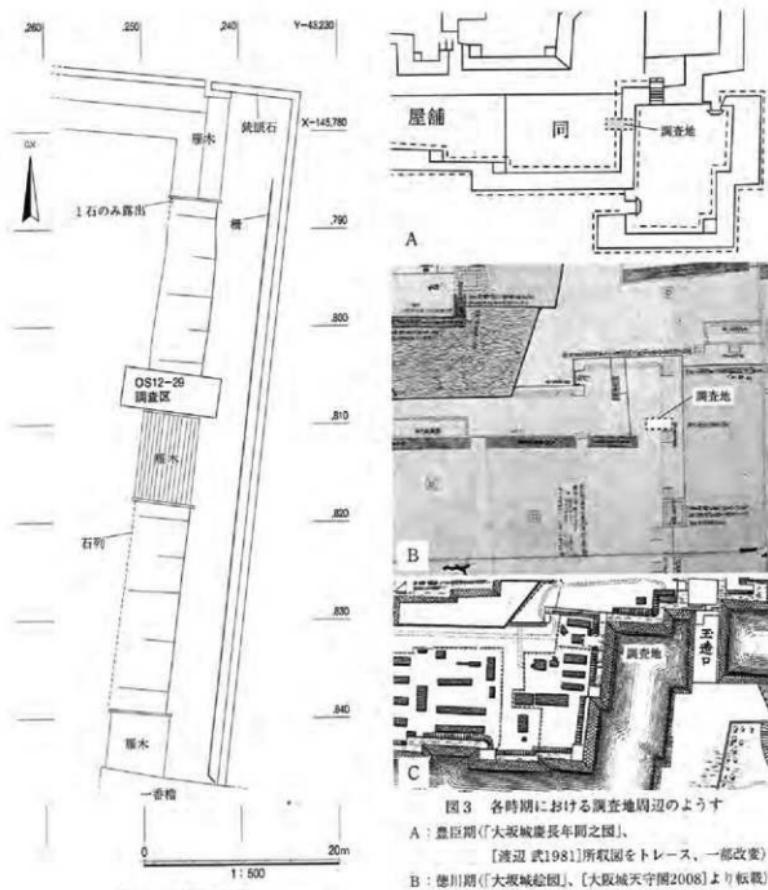


図2 調査区配置図

図3 各時期における調査地周辺のようす
A：豊臣期〔大阪城慶長年間之図〕
〔渡辺 武1981〕所収図をトレース、一部改変)
B：徳川期〔大阪城絵図〕、〔大阪城天守閣2008〕より転載)
C：明治期〔大阪実測図〕より)

2) 調査の結果

i) 層序(図4・5)

調査地周辺の地形は、「上段」・「斜面部」・「下段」に大別できる(図4)。このうち上段および下段はほぼ平坦で、その標高は上段でTP+29.4mほど、下段でTP+25.3mほどと、約4.1mの高低差がある。両者を接続する斜面部は、雁木が存在する部分と存在しない部分があり、後者ではその傾斜角は約55度である。

今回の調査では、現地表下360cmまでの地層を2層に区分した。

第0層：現代盛土、土壤および植物の根などによって擾乱を受けた地層であり、層厚は最大で30cmである。

第1層：近代～現代の盛土層であり、炭・焼土・煉瓦を多く含む黒褐色・黄褐色砂からなる。層厚は最大で135cmであった。

第2層：徳川期の盛土層である。上位から、第2a層～第2e層の5層に細分した。

第2a層は、黄褐色のシルト質砂礫からなり、調査区の全域に分布した。層厚は上段・斜面部で厚く55cm、下段では14cmであった。本層からは土師器・中国産青花・瓦・壁土・動物遺体が出土している。これらのうち瓦には、徳川期に下る可能性が高い資料が含まれており、調査地一帯が徳川期のいずれかの時期に改修を受けた可能性を示している。本層の上面では、SK101～104・106・107およびSX105を検出した。

第2b層は、にぶい黄褐色のシルト質砂礫からなり焼土を含んでいた。斜面部および下段で確認でき、層厚は斜面部で24cm、下段で86cmであった。本層からは瓦が出土した。本層以下では確実に徳川期に下る資料は出土しておらず、大坂城再築に伴う地層である可能性が高い。本層上面では、SX201を検出した。

第2c層は、にぶい黄褐色の膠質シルトからなり、シルトの偽礫を含んでいた。斜面部のみで確認し、層厚は70cm以上ある。本層からは備前焼・瓦・貝類が出土した。

第2d層は、灰オリーブ色の礫混り砂質シルトからなり、シルトの偽礫を含んでいた。下段のみで確認し、層厚は65cmである。本層からは土師器・瓦・貝類が出土した。

第2e層は、緑灰色の細粒～粗粒砂質シルトからなり、滲水性の堆積物に由来するシルトの偽礫および古土壤に由来する砂質シルトの偽礫を含む。本層からは貝類のほか、土師器・瓦が出土している。

ii) 遺構と遺物

a. 徳川期の遺構と遺物

第2b層上面において、SX201を検出した。このほか、徳川期の大坂城に係わる遺構として、裏込め・雁木耳石・根石がある(図7)。

SX201 下段で検出した。根石に沿って南北に延び、長さは3.9m以上、幅は0.4m、検出面からの深さは0.6mである(図5)。埋土は礫混りシルト質細粒～中粒砂である。当遺構から遺物は出土していない。大坂城再築時に第2b層までを盛土したのちに掘削された、根石設置に伴う掘形である。当遺構

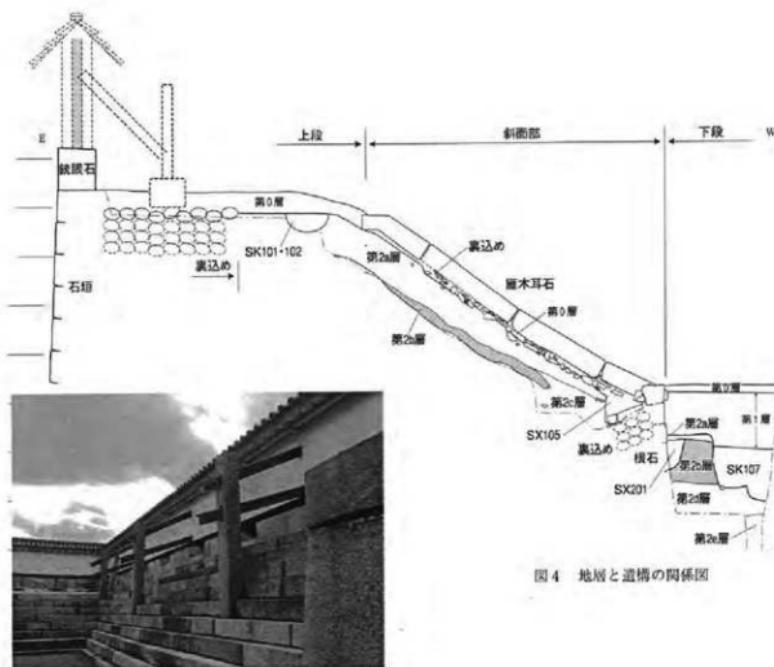


写真1 大手門南側の堀

図4 地層と造構の関係図

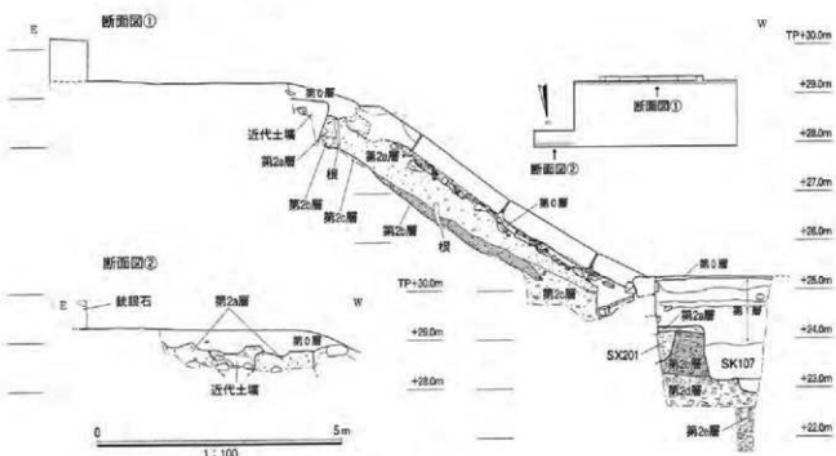


図5 調査区断面図

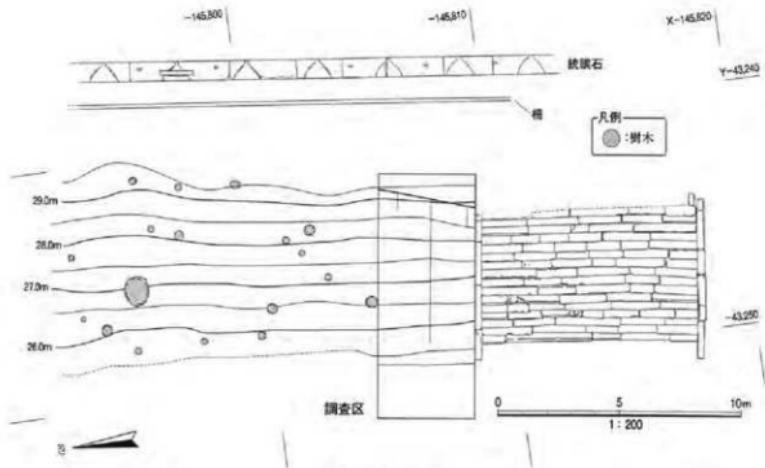


図6 現況平面図

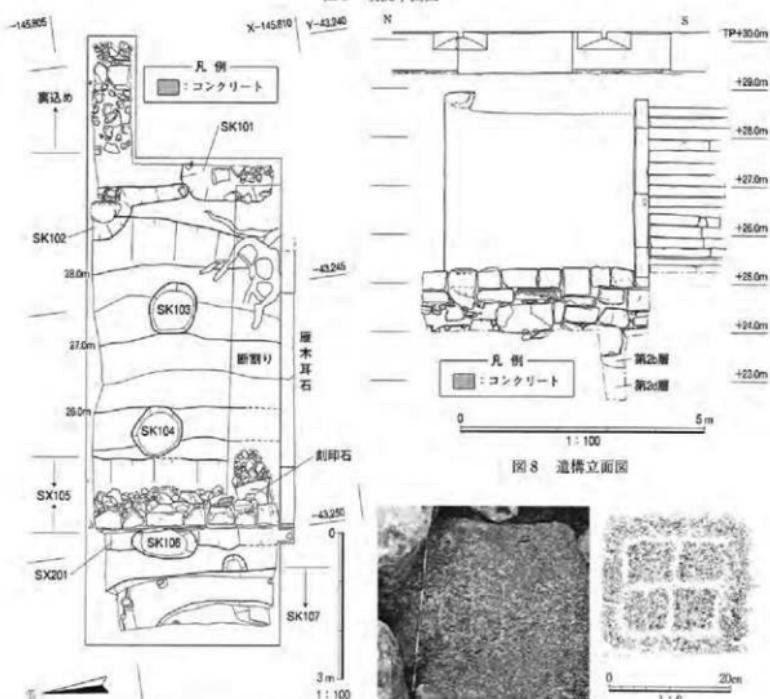


図7 第2b層上面・第2a層上面の造構平面図

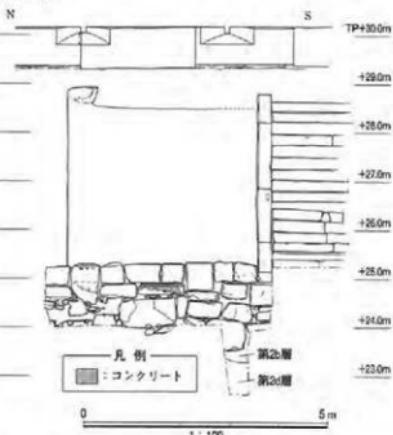


図8 造構立面図

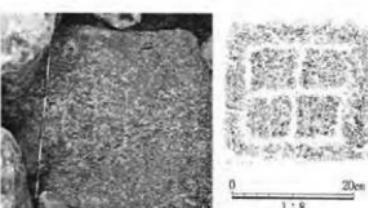


図9 刻印石写真・拓影

と同様の構造を、山里丸で行われたOS11-10次調査でも確認している[大阪文化財研究所2012b]。

裏込め 上段の東端から2.5mの範囲で検出した。調査区東側の石垣に伴う裏込めである。使用されている石材は亜角礫～円礫で、一辺の長さないし直徑は0.1～0.5mであった。

雁木耳石 斜面部で検出した。雁木の補強を目的とした構造で、4石からなり、現状で地上に露出している。このうち石材Bには、Aタイプの矢穴が認められた(注1)(図10～12、表1)。耳石の裏込めには角礫～円礫が使用され、板状に加工された転用石材を含む。裏込めの厚さは0.2mほどであり、山里丸における検出例と比較すれば薄い。また裏込めは第0層相当層に含まれていたが、当該層は樹木の根による擾乱が著しく、耳石全体が大坂城再築後に修繕を受けたかどうかについて、確定することはできなかった。ただし、後述するSX105との重複関係から、最下段の耳石については近代以降に何らかの加工が加えられたことが確実である。裏込めに含まれる転用石材のうち石材Cには、Aタイプの矢穴が認められた(図12・表1)。

なお、雁木耳石北側の斜面部には裏込めは施されておらず、また雁木を据えた痕跡なども認められなかつたため、図3-Bにみえるように、徳川期から土盛りによる斜面であったことがわかる。

根石 上段と下段の境目で検出した。上下4段からなり、南側では雁木部と一連で積まれたことがわかる(図8)。根石のうち上位の2段は、後述するSX105中に含まれること、また石材の表面にコンクリートが付着するものがあることから(図8)、近代以降に積み直されたことが明らかである。石材には、矢穴が認められるものがあった。このうち近代に積み直された石材DはAタイプとCタイプが併存し、石材が転用されたことが推測できる。石材E～Gの矢穴はAタイプである(図12・表1)。また根石に伴う裏込めは、東側約1.2mの範囲に施されていた。裏込めのはほとんどは長径0.3m以下の亜円礫～円礫であるが、一辺0.8m以上の大型石材も使用されていた。この大型石材の上面には「田」の刻印が施されており(図9)、調査区と対応する部分の石垣に施された刻印とよく符合している(図13)。

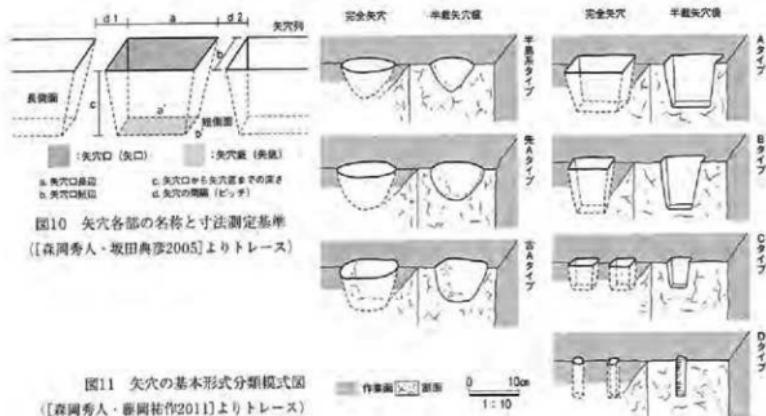


図10 矢穴各部の名称と寸法測定基準
([森岡秀人・坂田典彦2005]よりトレース)

b. 明治期以降の遺構と遺物

第2a層上面において、SK101~104・106・107およびSX105を検出した(図7)。これらの遺構はいずれも第1層を埋土とする。

SK101~104・106 直径2.0m以内の土壤である。深さはSK101・102については掘り下げていないため不明、SK103・104は0.5m以上、SK106は0.2mである。これらの遺構の埋土からは、徳川期の陶磁器類のほか煉瓦・ガラスなどが出土した。このうちSK102には、礎石状の石材Aが含まれており、Cタイプの矢穴が認められた(図12・表1)。

SK107 調査区下段の西端で検出した。南北3.5m以上、東西1.1m以上の規模があり、検出面からの深さは1.0mである。当遺構からは、土師器・瀬戸美濃焼陶器・肥前陶器・関西系陶器・丹波焼・備前焼・堺焼・軟質釉陶器・肥前磁器・肥前陶胎染付・瓦・鉄釘のほか、煉瓦が出土した。出土遺物のはほとんどは徳川期の資料である。このうち、瓦1~3および硯4を図示した(図14)。1は軒棟瓦であるが、軒平部はほとんど残存しない。表面にはぶい黄橙色を呈しており、二次的に被熱した可能性がある。2は菊丸瓦、3は通常の軒平瓦の平瓦部を焼成前に加工した、調唐草瓦である。このうち3は、子葉が下向きで、通常のいわゆる調唐草文とは意匠が異なっている。同様の意匠は、佐賀藩蔵屋敷跡出土資料のうち第2期(18世紀後葉~19世紀初頭)に位置づけられる資料(報告番号43)などに類似がある[大阪文化財研究所2012a]。

また、3は二次的に被熱している。4は裏面および側面に線刻を有し、このうち側面の文字は「天和三□」と読める。天和3年は、西暦では1683年である。そのほか、15は破面が磨滅し平滑化した平瓦であり、転用された可能性があるだろう。同様の資料が、ほかに3個体出土している。

SX105 根石の東側に掘り込まれた溝状の遺構である。長さ3.9m以上、幅1.4mの規模があり、深さは1.0mである。既に述べた根石の状況から、近代以降に行われた積直しの際に掘削されたものと考えられる。なお、当遺構中で検出した根石の裏込めには、コンクリート片が混っている。大阪市内におけるコンクリートの使用は、明治30年代以降のことであり、根石の積直しはこの年代より下る(註2)。

表1 各石材の矢穴直寸法一覧

石材番号 / 列名	矢穴 番号	竪方向 (上端) (a寸法)	竪方向 (下端) (a'寸法)	横方向 (b寸法)	深さ (c寸法)	矢穴開閉 (d寸法)	矢穴 型式	検出 遺構
石材A	①	5.0	4.5	2.5+	3.8		C	SK102
	②	7.1	4.9	2.7+	4.6	3.8		
	③	6.6	4.2	3.4+	5.0	4.5		
	④	6.6	4.0	3.0+	4.8	2.8		
	⑤	12.0	8.5	3.9+	3.8	3.1		
石材B	①	9.4	7.8	4.3+	1.4		A	無木耳石
	②	8.0	7.8	3.5+	1.8	7.3		
	③	7.4	7.2	3.0+	0.8	7.8		
	④	8.0	7.5	2.3+	2.0	8.1		
石材C	①	8.0	6.5	1.8+	4.0		A	無木耳石 裏込め
	②	8.0	6.0	2.3+	4.0	6.0		
石材D-ア列	①	5.5	4.2	0.9+	6.3		C	根石上半 (積直し)
	②	5.5	4.5	1.0+	5.2	5.8		
	③	-	4.0	0.6+	5.3	-		
石材D-イ列	①	9.0	6.2	1.8+	6.0		A	根石下半 (積直し)
	②	8.5+	6.0+	1.7+	4.5	5.8		
石材E	①	11.5	6.5	2.5+	7.5		A	根石下半
	②	9.5	6.0	2.4+	6.5	11.8		
石材F	①	10.8	6.8	3.0+	8.5		A	根石下半
	②	7.5	5.9	1.0+	8.0	8.4		
	③	7.8	5.5	1.4+	6.5	26.0		
石材G	①	10.0	6.2	2.0+	4.0		A	根石上半 (積直し)
	②	8.5-	7.0	1.0+	4.0	4.0		

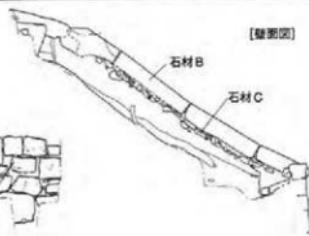
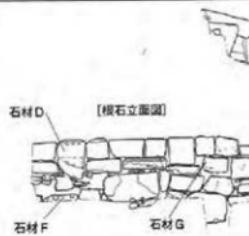
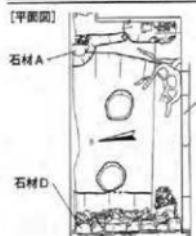
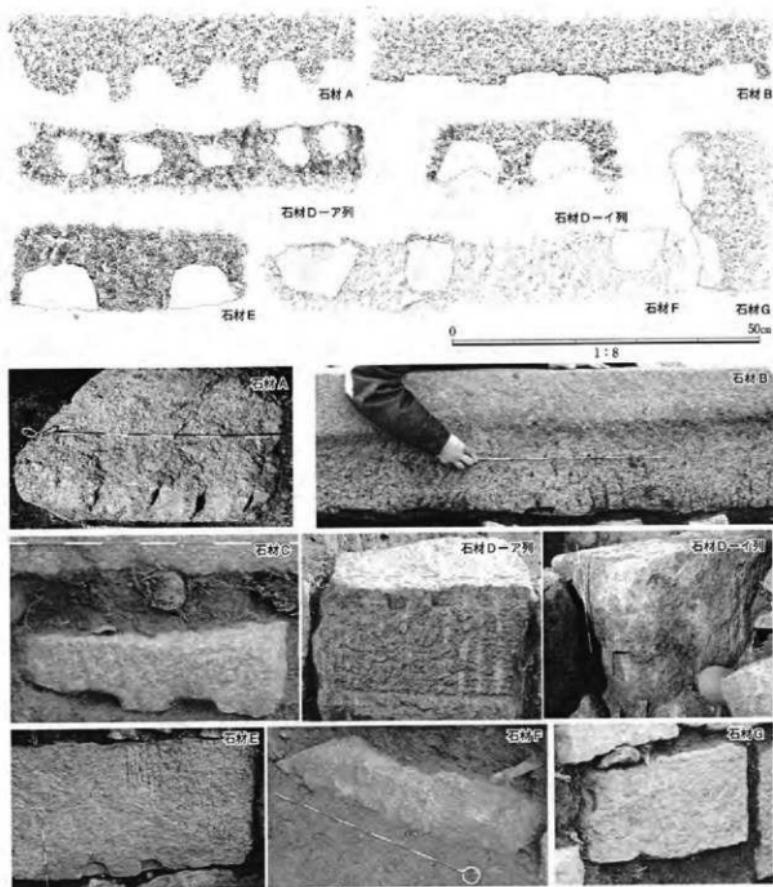


図12 各矢穴の写真および拓影

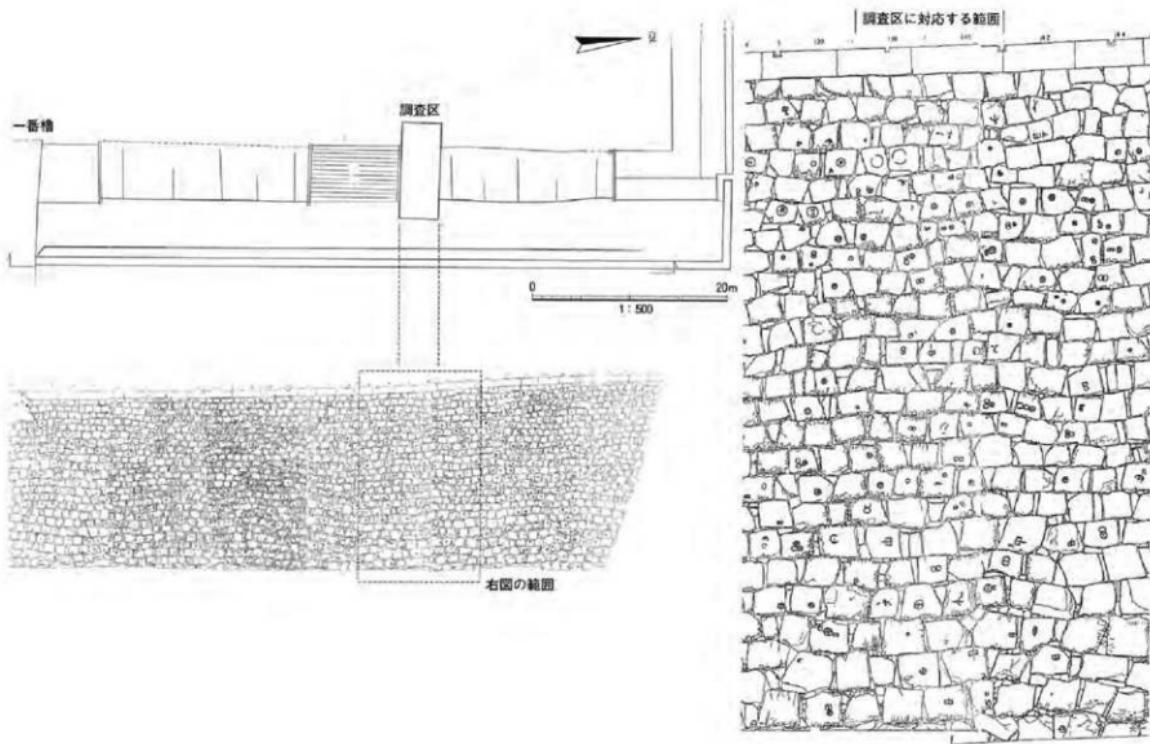


図13 二ノ丸東面石垣の刻印([城城史研究会2006]所収図を加工して使用)

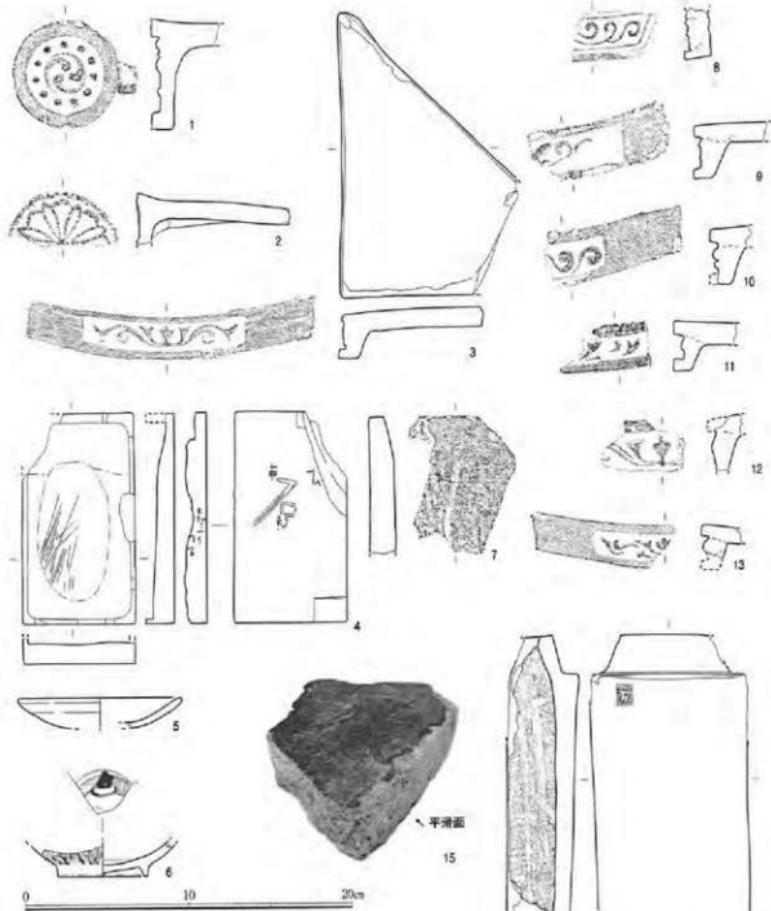


図15 楢唐草文の分類([大阪文化財研究所2012]より)

図14 出土遺物実測図
SK107(1~4・15)、第2e層(7)、第2b層(8)、
第2a層(5・6・9~12)、第0層(13~14)

c. 各層出土遺物(図14・15)

第2e層出土遺物では、丸瓦7を図示した。凹面にコビキBの痕跡を有しているため、1591(天正19)年以降の資料と考えられる[黒田慶一1999]。このことから、第2e層も徳川期の大坂城再築に伴う地層であることがわかる。

第2b層出土資料では、唐草文の軒平瓦8を図示している。

第2a層出土資料では、土師器5、中国産青花6、瓦9~12を図示した。皿5は口縁端部内面に面を持たず、器壁もやや厚いことから、豊臣期の資料である可能性がある[佐藤隆2008]。碗6は粗製で、高台端部を釉剥ぎする。外面には芭蕉葉、底部内面には法螺貝を描く。碗C群の資料であり[小野正敏1982]、大坂本願寺期に位置づけられる。9~12はいずれも唐草文の軒平瓦であるが、11~12は文様の意匠からみて徳川期に下る可能性が高い資料である。

第1層出土資料では、下段から出土した瓦の拓影を示した。22は、「○に庄」、23・24は記号が刻印されている。

第0層から出土した資料では、特徴的な瓦13・14のほか、刻印瓦16~21の拓影を示した。いずれも上段で出土した資料である。このうち13は橋唐草文の軒平瓦で、ba ii類に分類できる(図15)。14はほぼ完形の丸瓦で、表面には漆喰が付着している。また、凸面には刻印「○にキ」が施されている。16は「○にひ」、17は「○に九」、18は「○に市」、19は「○に山」、20は「□に石/□に兵」(か)、21は「□にリ」である。こうした刻印瓦は、これまで特別史跡大坂城跡で行われた各調査で出土しているが、そのほとんどが戊辰戦争に伴うと考えられる焼土と共伴しており、18世紀以前に遡る出土例はない。調査地南方の一番櫓については、第二次世界大戦後に行われた修理の際、「天保三壬辰歳六月吉日、南庵番御構物御修復(後略)」と記された墨銘を検出しており、1832年に解体修理が行われたことがほぼ確実視できる[大阪市1965]。調査地近辺の銅眼石には枘穴が認められるので、上部には柱および壁体を伴つ



図15 出土瓦拓影
上段 第0層(16~21)、下段 第1層(22~24)

たと考えてよい。ただ徳川期の絵図には多門櫓の表現はなされていないことから、大手門南側に現存するような瓦葺きの堀が想定される(図4・写真1)。今回出土した瓦は本来の地層から遊離した資料であるが、一定量が出土していることから、一番櫓に連なったであろう堀についても、1832年の修理と同時ないし前後する時期に修復を受けた可能性が指摘できよう。

d. 貝類

本調査では近代の盛土層である第1層と、徳川期の盛土層である第2層から、計10種の貝類が出土した(表2・3)。同定作業には現生標本と図鑑[吉良哲明1954・波部忠重1961]を利用しており、西宮市貝類館の高田良二氏より貴重なご助言を賜った。個体数に関して腹足綱は殻口数を、二枚貝綱は左右殻数の多数の方を原則として採用している。

本調査で出土した貝類のうち、以下では徳川期の盛土層である第2a～2e層から出土した貝類について報告する。同時期の大坂城・城下町周辺における食糧残滓の貝類は、ハマグリを中心にヤマトシジミやサザエなど多種の鹹水性種から構成されるのが一般的であるが[池田研2005]、本資料ではサルボウとともに、稀少種であるアサリや非食用種であるナミマガシワが高い比率を占めるなど、大きく様相が異なる。ナミマガシワ以外にも、大阪市内の遺跡では初出であるムギガイやヤカドツノガイ、稀少種であるウラカガミなど食用に流通していた可能性の低い種が多く含まれている点も特徴的で、棲息域に関しては基本的に湾奥・中央部の千湯・内湾砂底域群集[富岡直人1999]に属している。また個別の貝種に関しては、ウラカガミが左右の殻が合わさった状態で出土しており、殻の中には結晶状の物質が観察された。

当遺跡では大阪府文化財センターによる03-1次調査やNW10-4次調査などで、本資料と共通した特徴を示す資料が出土している。前者では大坂冬ノ陣後、徳川方に埋立てられた堀83の埋土上部から38個体のナミマガシワと8個体のウラカガミが出土しており、すべてのウラカガミで合わさった左右殻の中にオリーブ黒色の結晶状物質が確認された。これらは海中で自然に死亡した化石貝類である可能性が高く、また堀83埋土の上部のみにこうした特徴が見られることから、大規模な埋立ての進行

表2 出土貝類種名一覧

腹足綱	Gastropoda
サザエ	<i>Turbo (Flatilla) cornutus</i> Solander
アカニシ	<i>Rapana thummiensis</i> (Crosse)
ムギガイ	<i>Misrella bicincta</i> (Gould)

腹足綱 Scaphopoda

ヤカドツノガイ	
<i>Dentalium (Paridentalium) ornatissimum</i> Donovan	

二枚貝綱 Bivalvia

サルボウ	<i>Anadara (Scapharca) sulcicostata</i> (Lischke)
ハマグリ	<i>Meretrix laevia</i> (Gmelin)
ウラカガミ	<i>Doxinia (Doximella) penicillata</i> (Reeve)
アサリ	<i>Tapes (Amynopsis) japonica</i> (Deshayes)
ヤマトシジミ	<i>Cerithidea japonica</i> Prime
ナミマガシワ	<i>Ammonia chinensis</i> Philippi

表3 出土貝類一覧

地層・ 遺構名	時代	殻 ガリ	バ ガリ	サ キミ	ア リ	シ ジミ	ナ ミ	タ カ	リ カ	ム ギ	ウ カ
上・下段 第1層	近代	L1	L1		R1		1				
上段 第2層上部			L1R1								
計面 第2a・b層 科面部 第2c層	17c前半 (大坂城 再興時)	L5R4		L3R5		L3		●	1		
下段 第2d層	L1										
下段 第2e層	L1R1		L1R1	R1		L7		●			
第2f層	●			R1		L2					1

1) ●は既頭・殻口部が出土しておらず個体数は不明であるが、破片から存在が確認されたもの
2) (合)は左右殻が合わさった状態で出土した個体数
3) [時間層の□]○は[○世紀]を指す

とともに不足を来たした土砂を得るため、近隣で掘削したMa12海成粘土層中に含まれていたものと考えられている[池田2006]。なお、今回の調査地から外堀を挟んだ東側で実施したOS81-2次調査では、TP+16.5m以下で検出した海成砂層中に貝類が含まれていた[大阪市文化財協会2002]。

NW10-4次調査で共通する特徴をもつウラカガミ5個体と2個体のナミマガシワが出土した惣川初期の第2-2層や[池田2012]、本調査の第2層がともに盛土層であることは、そうした03-1次調査と同様の経緯によって、化石貝類が層中に包含された可能性を示唆するものと考えられよう。

3)まとめ

以下に、今回の発掘調査成果をまとめる。

- ・寛政期の大坂城絵図にみえる通り、斜面部は雁木などを伴わない土盛りであり、裏込めも施されていなかった。ただし、徳川期に修築を受けた可能性がある。
- ・斜面の根石は4段組みであった。このうち上位の2段は、近代以降に積み直されたものである。
- ・下段では部分的に標高21.7m(現地表下3.5m)まで掘り下げたが、徳川期の盛土層が連続し、豊臣期大坂城の造構面には到達しなかった。また、段丘構成層はそのさらに下位に存在する。桜土橋付近では標高約24.8mで段丘構成層を検出しているが、当調査地までの約210mの間に、3m以上下がることになる。
- ・上段には堀が存在だと推定できる。遺跡資料ではあるが、上段から出土している刻印瓦から、この堀が19世紀に修築を受けた可能性が指摘できる。
- ・第2層から出土した貝類から、大坂城再築時の掘削がMa12海成粘土に及んだことが推定できる。

(註)

- (1)矢穴についての分類と理解は、[森岡秀人・坂田典彦2005]および[森岡秀人・藤岡祐作2008]に拠った。
- (2)大阪市教育委員会生涯学習部文化財保護担当の植木久氏より教示を賜った。

引用文献

- 池田 研2005、「中・近世における大坂城下町出土の貝類について」：大阪大学考古学研究室編『侍豪山考古学論集－都出比呂志先生退任記念－』、pp.859-886
- 2006、「大坂城跡(03-1・OKS99)出土の貝類」：大阪府文化財センター編『大坂城址』Ⅲ、pp.543-552
- 2012、「大坂城跡(NW10-4次)調査出土の貝類」：大阪文化財研究所編『難波宮址の研究』第十八、pp.165-166
- 大阪市1965、「重要文化財大阪城一帯整理工事報告書」
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会
- 2009、「大坂城跡発掘調査(OS07-12)報告書」；「大阪市内埋蔵文化財包装地発掘調査報告書(2007)」、pp.135-149
- 大阪市文化財協会2002、「大坂城跡」VI
- 大阪城天守閣1973、「大阪城南外濠々底遺構発掘調査概報」

- 2008、「描かれた大坂城・写された大阪城」
- 大阪文化財研究所2012a、「瓦」：『佐賀藩蔵屋敷跡発掘調査報告』、pp.114-127
- 2012b、「平成23年度特別史跡大坂城跡整備事業にかかる発掘調査(OS11-10)報告書」
- 小野正敏1982、「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」：『貿易陶磁研究』No.2、pp.71-87
- 吉良哲明1954、「原色日本貝類図鑑」保育社
- 黒田慶一1999、「NW95-24次調査」：大阪市文化財協会「大阪市埋蔵文化財発掘調査報告」1996年度、pp.107-133
- 佐藤 隆2008、「大阪本願寺推定に関する考古学資料－特別史跡大坂城跡における発掘調査から」：『大阪歴史博物館研究紀要』第7号 大阪市文化財協会、pp.31-44
- 築城史研究会2006、「大坂城石垣調査報告書」二
- 道哲済・清水和明2011、「上町大地でも起こっていた歴史時代の地すべり」：大阪文化財研究所「幕火」155号、pp.6
- 8 -
- 富岡直人1999、「貝類」：西本豊弘・松井章編「考古学と動物学」同成社、pp.89-117
- 波部忠重1961、「続原色日本貝類図鑑」保育社
- 森岡秀人・坂田典彦2005、「石切技術をめぐる用語について」：『岩ヶ平石切丁堀跡』(芦屋市文化財調査報告 第60集)
- 芦屋市教育委員会、pp.22-25
- 森岡秀人・藤岡祐作2008、「矢穴の型式学」：『古代学研究』第180号 古代学協会、pp.405-418
- 2011、「矢穴調査報告」：『鶴安寺宝殿印塔修理報告書』(大和郡山市文化財調査報告書 第18集)
- 大和郡山市教育委員会、pp.55-70
- 渡辺 武1981、「豊臣時代大坂城の三の丸と懸構について－『櫛台武庫』所収「大坂冬の陣配陣図」を中心に－」：『難波宮址の研究』第七 論考篇 大阪市文化財協会、pp.137-160



特別史跡大坂城跡全景
(北東から、写真左の白線で囲んだ範囲が今回の調査地)



調査地全景
(北西から、写真右奥は重要文化財 一番櫓)

調査区南壁斜面部地層断面
(北西から)



調査区南壁下段地層断面
(北西から)

第2a 層上面検出状況
(西から)



雁木・耳石・根石の関係
(北西から)



根石検出状況
(西から、上位 2段は近代以降の積直し)



中央区東高麗橋 1-15における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS12-35)報告書

調査個所 大阪市中央区東高麗橋1丁目15
調査面積 60m²
調査期間 平成25年3月11日～25日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、大庭重信

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は大阪城の西北部に位置し、豊臣氏大坂城懸構の西北端に当たる(図1)。周辺では多くの調査が行われており、特に北側のOS86-22・87-40次調査では豊臣後期の大規模な武家屋敷跡が発見されている[大阪市文化財協会2003]。また同地点で行われたOS11-16次調査では、「大坂町中屋敷替」に伴うとみられる大規模な盛土造成工事の様子が明らかになったほか、さらに下層で中世集落や飛鳥・奈良時代の遺物を多く含む東西方向の大溝が検出されており[大阪文化財研究所2012]、文献記録から推定されている古代難波津や中世渡辺津の位置を考古学的に追及する上でも重要な地盤である。

調査地は高麗橋通に面した北側の敷地で、大阪市教育委員会によって行われた試掘調査の結果を受けて、敷地東半の東西6m、南北10mの範囲を対象に発掘調査を実施した(図2)。調査は3月11日より開始し、まず重機掘削を行ったところ、現地表面下0.8mで調査区の中央を南北に縱断する幕末前後の大型の漆喰塗の竪穴造構を確認し、下位の地層がこれによって大きく削平されていることが判明した。そこでまずこの造構の記録を行ったのち、以下の地層を人力で掘り下げ、層位毎に検出した造構を記録し、遺物を採集した。平面調査は現地表下2.5mの豊臣後期の造構面まで行い、以深の地層は調査区北半に設定した深掘りトレンチで記録した。調査の記録作業は3月25日まで行い、その後、埋戻し作業を行った。

本文の図で使用する方位は現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図を合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準とした。標高は、TP値(東京湾平均海面値)を用い、TP+○mと表記する。



2) 調査の結果

1) 層序

調査地の現地表面の標高はTP+5.8m前後であり、以下TP+1.2mまでの厚さ4.6mの地層を第0～7層に区分した(図3・4)。

第0層：調査区北半で確認した焼土層(第1-1層)より上の近現代の地層である。

第1層：調査区中央で検出した大型の堅穴遺構SX01構築に伴う地層から廃絶後に堆積した焼土層までを第1層とし、これを第1-1～第1-3層に区分した。

第1-1層は調査区東北部に分布する焼土層で、層厚約20cmあった。19世紀末頃の陶磁器類を含む。

第1-2層はSX01の埋土で、均質なにぶい黄色細粒～中粒砂からなる。SX01の外ではにぶい黄褐色シルト質細粒～中粒砂からなり、層厚は約20cmあった。19世紀半ばまでの陶磁器類を含む。第1-2層上面には漆喰が貼られており、SX01廃絶後、第1-1層堆積までに一時期生活面があったことが判る。

第1-3層はSX01構築時の埋土で、焼土・炭の偽礫を含む暗褐色シルト質細粒砂～砾からなり、SX01の東側に分布していた。層厚は最大で約40cmあった。

第2層：SX01以前の徳川期の地層であり、調査区東部の地層を基準に第2-1・2-2層に区分した。

第2-1層は調査区東北部に分布する整地層で、黄褐色細粒砂～砾からなる。層厚は50cmあった。層中に長軸1.0m前後の梢円形の窪みの底に瓦を敷き詰めた遺構が並んで検出されたが、性格は不明である。調査区西南部で19世紀代の遺物を含む土壤や井戸を検出した。

第2-2層は調査区全域で確認した下位層に由来する焼土・炭を多く含む整地層で、暗灰黄色シルト質細粒～粗粒砂を主体とする。層厚は約50cmあった。調査区東北部では礎石建物SB16を構築した際の整地層である。焼土偽礫を含むにぶい黄褐色粗粒砂層の上に粘土偽礫と砂の互層堆積が分布し、これを本層に含めた。この地層からは17世紀前半の土器・陶磁器がまとめて出土した。本層上面で礎石建物のほか、18世紀前半の土器・陶磁器類を含むSK07を検出した。また、本層下面でも17世紀前半の遺物を含む土壤を複数検出した。

第3層：調査区東北部で部分的に遺存していた焼土層で、層厚は約5cmあった。中国製青花・白磁・肥前陶器・備前焼・土師器・瓦などを含み、大坂夏ノ陣の焼土層に相当する。

第4層：調査区東北部に分布する農臣後期の整地層で、第4-1・4-2層に区分した。

第4-1層はシルト偽礫を含むオリーブ褐色中粒～粗粒砂からなる整地層で、層厚は約40cmあった。上面で礎石を検出した。農臣後期の土器・陶磁器類を含む。

第4-2層はシルト偽礫を含む暗黄褐色細粒～粗粒砂からなる。

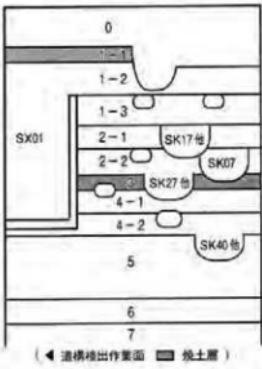


図3 地層と遺構の関係図

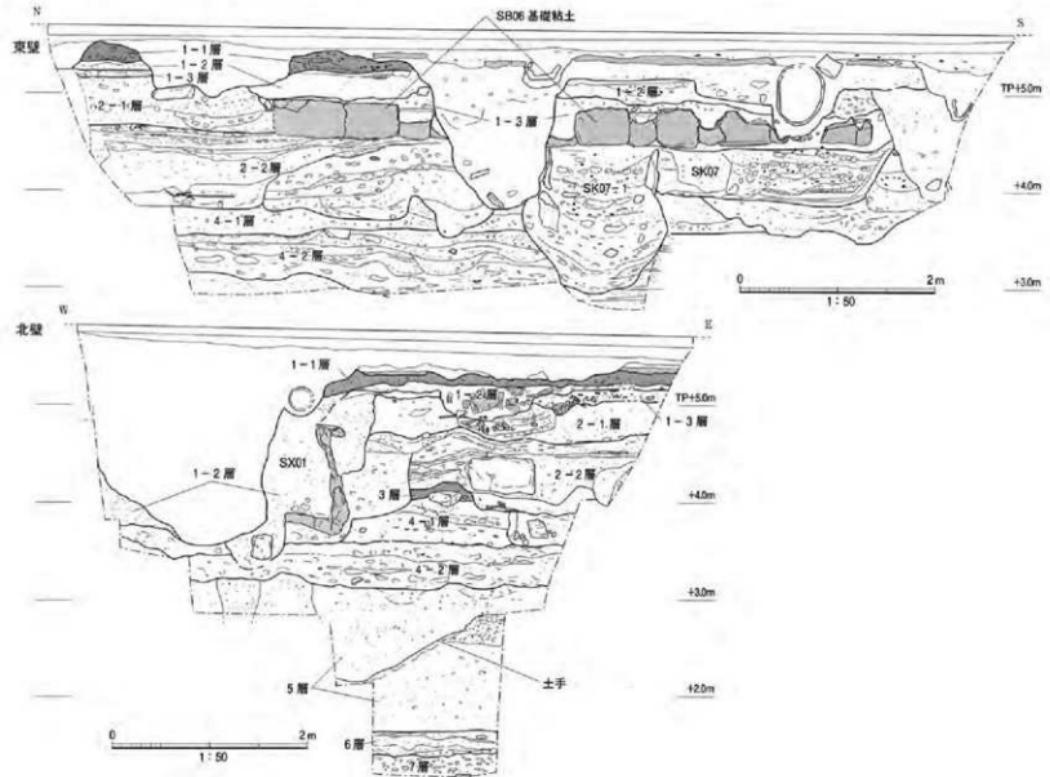


图 4 東・北壁地層断面図

る整地層で、層厚は約40cmあった。豊臣後期の土器・陶磁器類を含む。本層上面で礎石・段を、下面で土壌を検出した。

第5層：「大坂町中屋敷替」に伴う可能性のある大規模な整地層で、層厚は150cmあった。まず、にぶい黄橙色細粒砂層および灰色シルト偽礫で厚さ約120cmの南北方向の土手を築いたのち、西半の低い側をにぶい黄色粗粒砂で埋めていた。このような盛土造成の過程で設置される土手は、調査区北側のOS11-16次調査をはじめ、周辺の複数の調査で確認されている【大阪文化財研究所2012】。

第6層：シルト・細粒砂の薄層を挟む湿地性の堆積層で、炭混り灰黃褐色シルト質細粒～中粒砂からなる。層厚は30cmあった。土師器皿の小片が出土した。上下の地層の年代から時期は豊臣前期と考えられる。

第7層：にぶい黄橙色粗粒砂～疊からなる河成層で、最上部には土壤生成が見られた。層厚は20cmまで確認した。15世紀代の土師器・備前焼・丸瓦片が出土した。

ii) 造構と遺物

a. 豊臣後期の造構・遺物

第4-1層上面および第4-2層上・下面で造構検出作業を行った。

第4-1層上面が遺存していた範囲は調査区東北部に限られ、この範囲で礎石を2点検出した(図

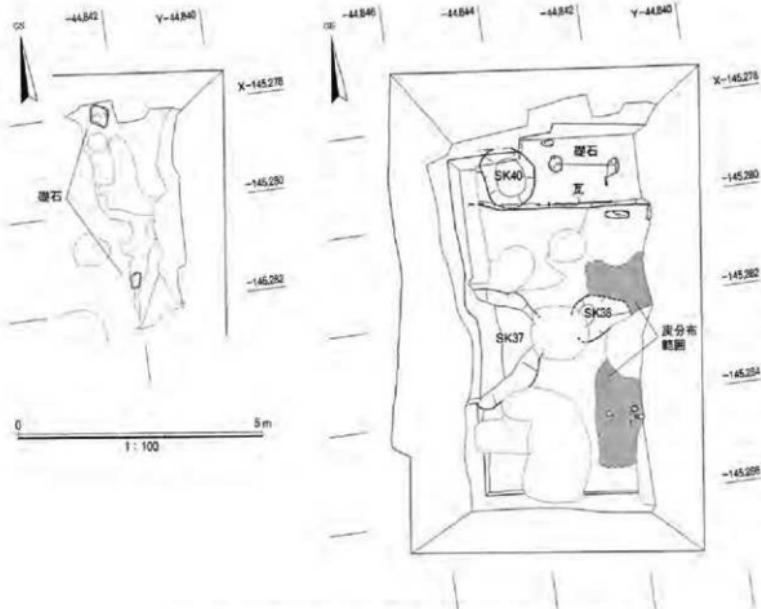


図5 第4-1層上面(左)および第4-2層上面・下面(右)の造構

5左)。ともに大坂夏ノ陣の際の被熱痕が認められた。南北に3.5m離れており、同一の建物に伴うものかは不明である。

第4-2層は調査区のはば全域に遺存しており、上面で東西方向の段・礎石建物、下面で土壙を検出した(図5右)。

第4-2層上面では、調査区北部に東西方向に浅い段差を設け、北側が約10cm低くなっていた。段の下端には平瓦の破片を縱に並べてあり、段の上端には東西に細長い石を据え、東側の壁面でもこれと並ぶ石を確認した。段の北側では東西に約1.2m離れて並ぶ2点の礎石を検出し、ここに礎石建物があったと考えられる。また、調査区東南部では第4-2層上面に炭層が薄く堆積する範囲があり、肥前陶器や土師器の破片が散乱した状態で出土した。

第4-2層下面ではSK37-38-40を検出した。いずれも豊臣後期に位置づけられる陶磁器・土師器・瓦などが出土し、これらを廃棄した土壙と考えられる。

b. 慶川期の遺構・遺物

第2-1層上面、第2-2層上面、第2-2層下面でそれぞれ遺構検出作業を行った。

第2-1層上面の遺構は調査区西部に集中しており、SE08・09、SK10・17・19を検出した(図6)。

SE08・09は後述するSX01と重複しこれ

に先行する井戸で、SE09が古くSE08が新しい。これらの遺構には19世紀半ばまでの土器・陶磁器類が含まれるが、SE08には19世紀後葉に下る瀬戸美濃焼磁器・大谷焼陶器の破片が少量含まれていた。

第2-2層上面の遺構は、調査区東部でSB16・SK07・SK07-1を検出した(図6)。

SB16は調査区東北部で検出した礎石建物で、南北に礎石が約1.5m間隔で並ぶ。礎石はSB16構築時の整地層で埋められており、地下式の構造であったことがわかる。

SK07は調査区南西部で検出した大型の土壙で、南北長4.3m、深さ0.6mあり、西側はSX01によって削平されているが、その外側で西端が確認でき、東西長は3.0m以上に復元される。床および壁面に粘土を貼っており、床面にはその上に砂利を敷いていた。壁面と同質の粘土や焼土

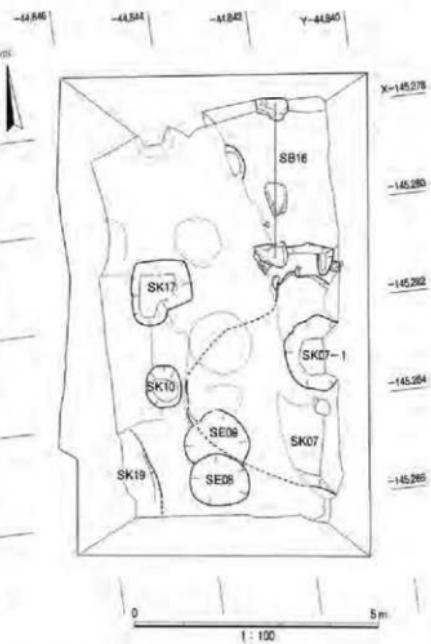


図6 第2-1層上面・第2-2層上面の遺構



図7 第2-2層下面の造構

を多く含む偽縛で埋められていた。中央付近で検出した深い土壤であるSK07-1も一連の土で埋まっていたことから、癡絶時に掘られたものと判断した。埋土からは18世紀前半の肥前磁器などの陶磁器類のほか、土師器・瓦・石臼などが出土した。

第2-2層下面では、SK20-23・25・27・29-33・36、SD28など、多くの遺構を検出した(図7)。第3層に由来する焼土の偽縛を多く含むものが主体を占める。遺物は少なく時期が判明したものは少ないが、SK27からはまとまった遺物が出土しており、1-7を図化した(図8)。

1は肥前陶器で、口縁部に鉄絵を施す皿である。2・3は肥前磁器の染付皿である。2の口縁部は直立気味で、3の口縁部は直線的に開く。4・5は肥前陶器碗である。4は外面にわずかに鉄絵が認められる。5は内野山系で、器壁は薄い。

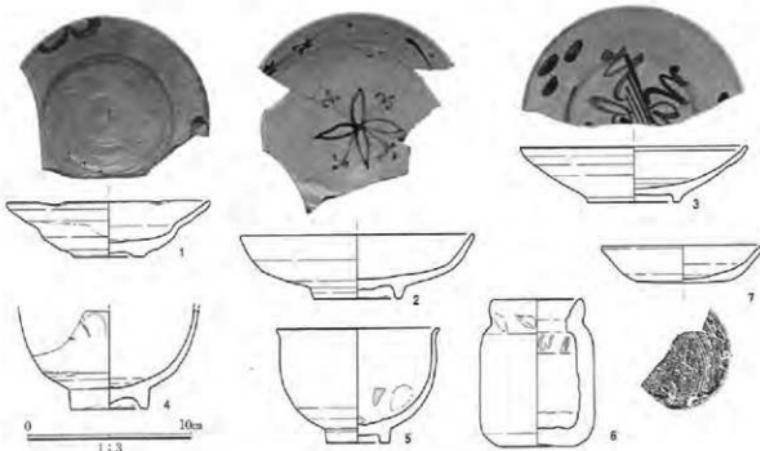


図8 SK27出土遺物

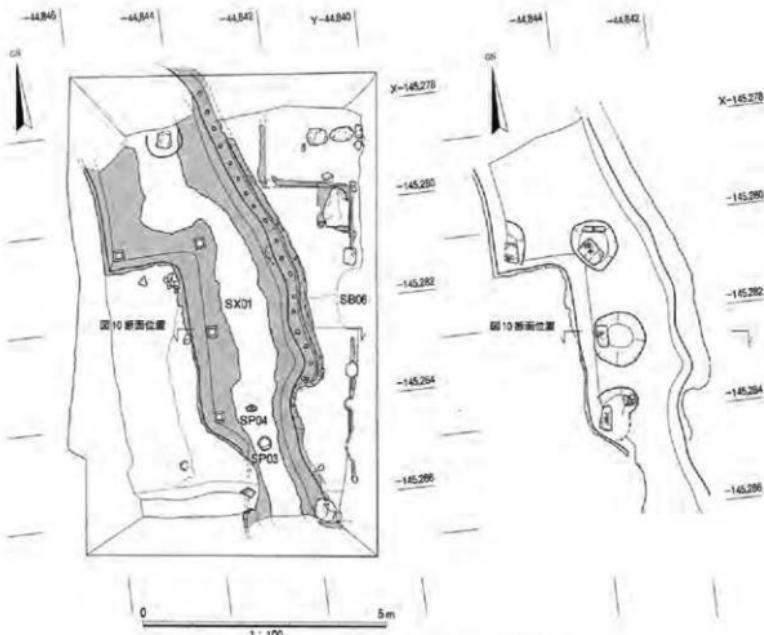


図9 第1～3層上面の遺構(左)およびSX01石柱健石検出状況

6は土師器の焼塙壺である。7は土師器皿で、底部を糸切りする。これらは、17世紀前半に属するものである。

c. 幕末～近代初頭の遺構・遺物

第1～3層上面でSX01とSB06を検出した(図9)。

SX01は調査区中央で検出した、南北長が10.0m以上、東西幅が最大で2.5m、深さが1.0mの縦塗喰の竪穴遺構である。平面形は東西が非対称で、西辺が直線をなしつつ縫の字状に屈曲するに対し、東辺が緩やかな波状を呈する。竪穴の壁面および床面には厚さ10cm前後の漆喰が塗布されている。壁面は垂直ではなくやや外開きで、床面は平坦であるが、中央部分の漆喰は帯状に欠損しており、浅い小穴SP03・04を検出した。欠損部分にはもともと板材や石が敷かれており、竪穴を埋め戻す直前に抜き取った可能性がある。竪穴内は第1～2層に相当する細粒～粗粒砂で一気に埋められていた。

西辺の下端には屈曲する壁面に



図10 SX01断面図

沿って一辺13cmの方形の石柱を1.7~1.8m間隔で立てており、いずれも床面から40cm前後の途中で折られていた。これらの石柱はいずれも床面より約40cm深く埋められており、その下に設置した長軸40~50cmの大型の平石の上に据えられていた(図9右・10)。このことから、これらの石柱が荷重のかかる構造物を支えていたことを示す。

これらの石柱に対応する柱はSX01の東辺では確認できず、東辺では床面から0.8mのところで幅0.2~0.3mのテラスを設け、そこに0.3~0.5m間隔で密に柱を立てた跡があった。柱は漆喰で塗り固められており、その痕跡から太さ10cmの正六角柱に復元できる。これらの柱は壁面に沿って直線的には並ばず、また六角形の柱の一辺を壁面にそろえるという特徴があることから、壁に沿って立てられた柵や手すりのような装飾的なもの可能性がある。

以上のような特徴から、SX01の西側に竪穴内まで張り出す舞台のような施設があり、東側からの視覚を意識していた可能性が考えられる。SX01の西側は攪乱がひどくこのような推測を裏付ける遺構は確認できなかったが、東側ではSX01と関連する礎石建物SB06を検出した。SB06は調査区東壁際で検出した南北方向の礎石列で、基礎部分に高さが35cm、厚さが最大で10cmの帯状の黄色粘土を確認し、基礎の壁面に塗布した可能性がある。長さは7.0mまで確認し、側辺の西側に半円状の張り出しがあり、上半を凹めて礎石を据えていた。礎石の間隔は南半が0.7~0.8mと短いが、北端で1.5mと

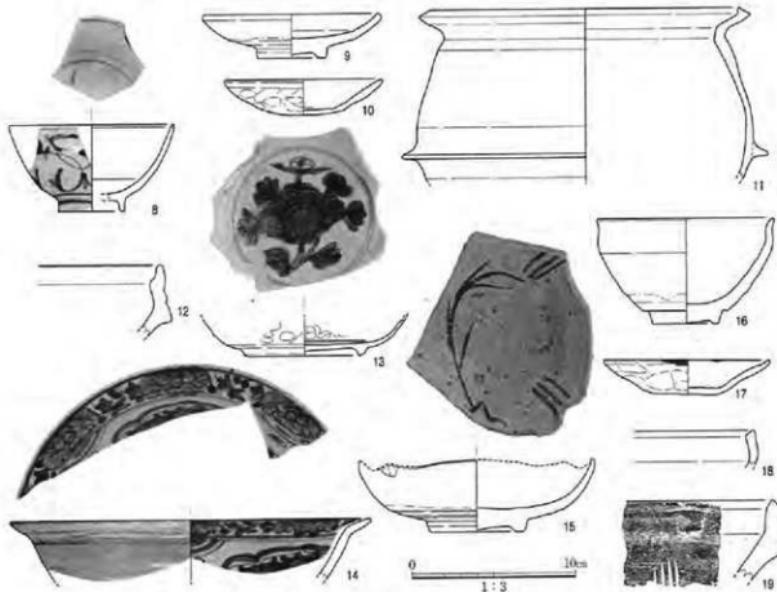


図11 各層出土遺物実測図

第2~2層(8~11)、第3層(12~14)、第4~2層(15~17)、第7層(18~19)

広くなる。粘土帯の下端は西側のSX01構築時に掘り下げたテラス面と一致しており(図10)、これらが一連で構築されたことが判る。また、粘土の西面は平滑に整えられているのに対し、東面は凹凸が顕著であることから、西側から施工したと考えられる。北端にはこれと連結して西側へ張り出す区画があり、南・北辺に砂を多く含む粘土を貼り付けていた。東壁沿いの粘土の帶と張出しとの境には、0.8m×0.5mの平石を据えており、西側面を同様の粘土で固定していた。地層断面の観察から、この張出し部は南側の礎石建物より一段高くなっていたようである。SB06は敷地南側の高麗橋通の方向とはほぼ一致する北でやや東に振る方向をとり、西側のSX01とは異なっていた。両者は同時に構築されており、SB06はSX01を挟んだ西側の舞台を望む建物の可能性がある。

遺構の時期については、上層の第1～1層に近代初頭の遺物が含まれることからこれよりも古く、SB06を埋める第1～2層からは19世紀半ばの陶磁器類が出土し、かつSX01に切られるSE08からは少数ではあるが19世紀後半の陶磁器類が出土していることから、幕末から近代初頭にかけてと考えられる。

d. 各層出土遺物

第2～2・3・4～2・7の各層から出土した遺物を図化した(図11)。

第2～2層からは8～11が出土した。8は中国産青花の碗で、漳州窯のものであろう。9は肥前陶器の皿で、内面に砂目痕が残る。10・11は土師器である。10は皿で、底部内面にはヨコナデによる段を有する。11は大和型の土釜である。これらは17世紀前半に属する。

第3層からは12～14が出土した。12は備前焼の擂鉢である。13・14は中国産青花である。13は景德鎮窯産の皿で、底部内面に花を描き、体部には型押し文様を施す。高台には砂が付着する。14は漳州窯の大皿である。以上は豊臣後期に属するものであるが、13はやや新しい様相がある。

第4～2層からは15～17が出土した。15は肥前陶器の向付である。内面には鉄絵を施す。16は瀬戸美濃焼の天目碗である。底部外側は無釉である。17は土師器の皿で、灯明具として使用している。底部は平底で、口縁端部内面をくぼませる。これらはおもね豊臣後期に属するものである。

第7層からは18・19が出土した。ともに備前焼で、18は壺の口縁部とみられる小片である。19は擂鉢である。これらは15世紀のものであろう。

3)まとめ

今回の調査では、中世以降の地層を確認し、遺構の遺存状態は良好ではなかったものの、豊臣後期から幕末前後までの変遷を把握することができた。第1～3層上面で検出したSX01は調査知見をもとに西側に想定される何らかの舞台に伴う施設の可能性を考えたが、性格については今後文献資料などからも検討していく必要がある。

引用・参考文献

- 大阪市文化財協会2003.『大阪城跡』^{図版}
大阪文化財研究所2012.『大阪城跡』^{図版}

北壁地層断面
(南から)



東壁地層断面
(南西から)



第4-2層上面遺構
検出状況(南から)



第2 - 2層上面遺構
検出状況(南から)



第1 - 3層上面遺構
検出状況(南から)



SX01(北東から)



中央区上汐一丁目における建設工事に伴う
上本町遺跡発掘調査(UH12-3)報告書

調査個所 大阪市中央区上汐1丁目50-1
調査面積 約66m²
調査期間 平成24年6月6日～6月8日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、谷崎仁美

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は、上町台地の稜線近くに立地する上本町遺跡の北部に位置し、古代は難波京、近世では豊臣期の初期に整備された平野町の北端付近に当る。周辺の調査では、南に隣接するUN02-5次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2004]、東方のNW137次調査[大阪市文化財協会1981]・UH94-1次調査・UH11-8次調査[大阪文化財研究所2012]、南東のUH10-1次調査[大阪文化財研究所2010]、北西のTX97-1次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999]では、飛鳥・奈良時代の遺構・遺物が出土しており、さらに、UN02-5次調査、UH98-3・5次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2000a・b]、UN04-1次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005]では豊臣期から徳川期の遺構・遺物が出土するなど、古代難波京および豊臣期の城下町に係わる資料が豊富に分布する地域である(図1)。

大阪市教育委員会が行った試掘調査で、現地表面下1.0m以下に遺物包含層や造構面が検出されたため、調査を実施することとなった。調査区は当初東西12m、南北4.5mを計画した。しかし、UH11-8次調査で検出された鎌倉時代の正方位に沿う大溝の西延長部が、調査区の北端で見つかる可能性があったため、北に東西3.5m、南北1.5mの拡張区を設けた。また、本調査で古代の柱穴が見つかり、それと対になる柱穴を検出するため、南にも東西4.5m、南北1.5mの拡張区を設け、頭書の面積となつた(図2)。調査は、現代盛土層を重機で除去し、以下を人力による掘下げで調査を進めた。層序ごとに遺構検出・掘削・記録などの作業を適宜行い、同年6月8日に埋戻しを含む現地におけるすべての作業を完了した。また、基準点はmagellan社製ProMark 3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系座標に基づく座標北を基準とした。標高はTP値(東京湾平均海面値)でTP+○mと略記した。



図1 調査位置図



図2 調査区位置図

2) 調査の結果

i) 層序(図3)

調査地は上町台地の稜線近くに位置し、西は谷町筋に向って緩やかに下り、北へ緩やかに上る地形となっている。しかし、調査区の現地形はほぼ平坦であった。

調査区の西側では現地表面から約1.0m、東側では約0.7mの深さまで現代の削平が及んでおり、現代盛土を除去するとすぐに地山面(第1層の上面)を検出した。よって、今回の遺構はすべて地山面で検出したものである。

ii) 遺構と遺物

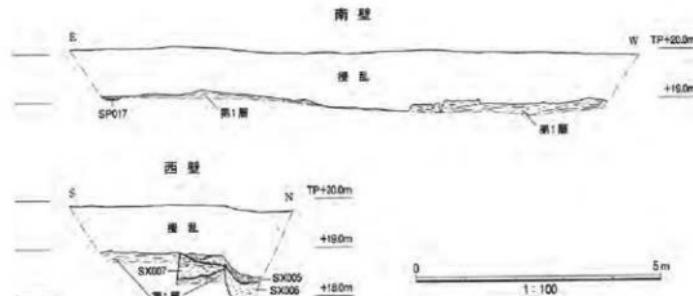


図3 地層断面図

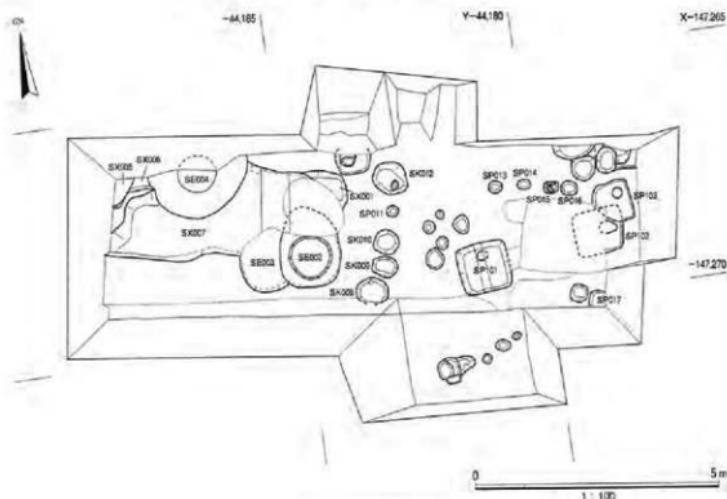


図4 遺構平面図

a. 古代の遺構と遺物(図4・5・図6-1~3)

比較的高地山面が高く残っていた東側で、古代の柱穴SP101・102・103を検出した。

SP101は、平面形が一辺1.05mの方形で、柱痕跡は直径0.18mである。上部は削平されているが、0.44mの深さがあり、底面は平らである。柱痕跡は、掘形の埋土とよく似ている(図5)。SP101から出土した図6-3は、体部内面に2段の放射状暗文を施す土師器杯片である。

SP102は、削平により1/4程度しか残存していないが、SP101とはほぼ同規模と考えられ、平面形は方形で、やや東寄りの部分で、南北長0.23m、東西長0.38m以上の不整形な抜取り穴を確認した。底面のレベルもSP101とはほぼ揃うが、底部は平らではない。図6-2は土師器杯Aの口縁部の細片で、SP102から出土した。7~8世紀のものと考えられる。

SP103は、SP102を切る柱穴で、南北長0.87m、東西長0.83mで不整形である。柱痕跡は直径0.20mで、掘形の埋土とよく似ている。底面のレベルはSP101やSP102と比べて16cmほど高い(図5)。図6-1は須恵器杯Hの身で、SP103から出土した。細片であるため口径は復元できないが、難波II新段階で、6世紀末~7世紀初頭のものであろう[佐藤2003]。

SP101・102は、ほぼ正方位をとり東西に並ぶ。柱間距離は2.70mである。建物の構造を把握するために北・南拡張区などで柱穴の痕跡を探したが、上記の3基以外に柱穴は見つからなかった。よって建物の構造については不明である。

また、SP102を切るSP103から出土した遺物は古いもののみであったが、遺構の切合い関係から、8世紀初頭より新しいものと考えられる。

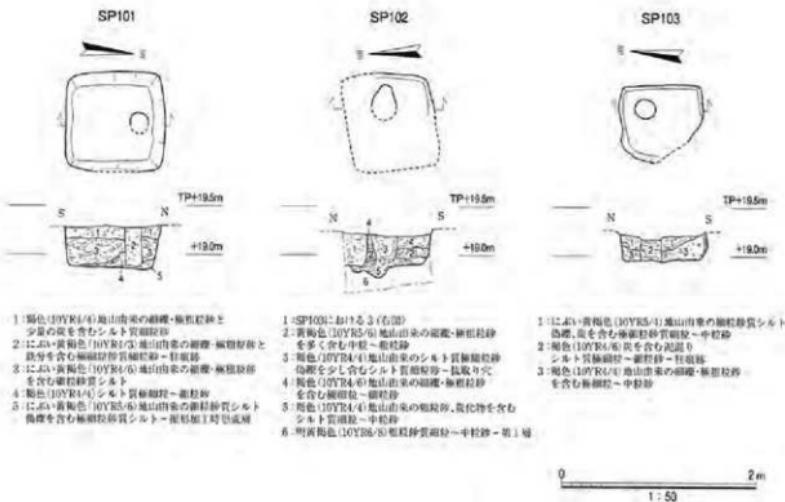


図5 遺構断面図

b. 近世の遺構と遺物(図4・図6-4~6)

井戸SE002~004、性格不明土壌SX001・005~007を検出した。

SE002は、瓦製の井戸側を使用しており、直径0.90mで完掘しなかった。下位にはSE003があり、南北長1.30m、東西長0.84m、深さ0.18mで井戸側の痕跡はなかった。北壁際で検出したSE004は、直径0.80mの素掘りで、完掘しなかった。図6-4は肥前磁器で染付絵の蓋である。SE002から出土した。

SX001は平面の直径が1.40m以上ある円形で、深さは0.36mである。SE002を切っている。調査区の北西隅で検出したSX005は、暗灰黄色(2.5Y4/2)~暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)の地山由来の細礫・極粗粒砂を含むシルト質極細粒~中粒砂で埋り、深さは0.35m以上ある不整形な落込みである。SE004に切られる。SX005の下位には、SX006があり、深さは0.40m以上ある。オリーブ褐色(2.5Y4/3)の炭化物を多く含むシルト質極細粒~細粒砂で埋る。さらにSX006の下位には、SX007があり、東部へ向って溝状に延びる。南北長は最大で1.43mあり、深さは0.70mである。オリーブ褐色(2.5Y4/3)の地山由来の極細粒~細粒砂質シルト偽礫と炭化物を多く含む極細粒~細粒砂で埋る。図6-5・6はSX007から出土した。5は土師器の皿である。内外面ともに全体的にススが付着しており、灯明皿である。口径は9.8cmで、底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、内面にかすかに段がつく。手づくね成形で口縁に沿ってナデを施す。胎土は灰白色を呈する。6は土師器培焼である。積山分類の培焼7群・江戸12段階に比定できる[積山洋1999]。

上記の遺構は、切合い関係から新旧を判断でき、SX007→SX006→SX005・SE004、また、SX007→SE003→SE002の順で新しくなる。しかし、出土遺物はおおむね18世紀中頃~後葉のもので、遺構に大きな時期差は見られない。

このほか、南北に並ぶSK008~110・SP011・SK012、東西に並ぶSP013~016は、橋などの何らかの建物になる可能性がある。出土遺物が無いため、時期は不明であるが、方向がおおむね平野町の地割に沿うため、豊臣期以降のものであると考えられる。

c. 時期不明の遺構

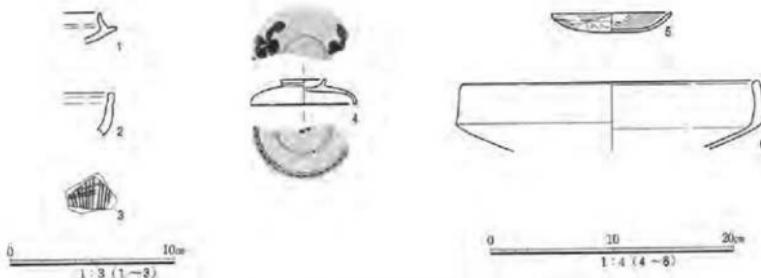


図6 出土遺物実測図
SP103(1)、SP102(2)、SP101(3)、SE002(4)、SX007(5・6)

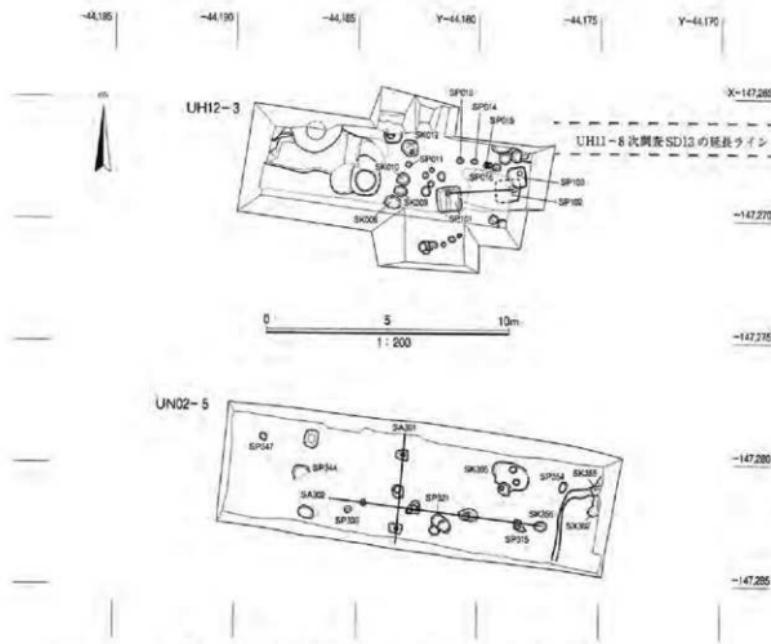


図7 今回検出した柱穴とUN02-5次調査の柱穴との位置関係

上記のはか、性格不明の土壙や小穴を多数検出したが、いずれも出土遺物が無いか土師器の細片が出土するのみであったので、時期は不明である。

3) UH11-8次調査におけるSD13の西延長部の存否について

UH11-8次調査で検出された正方位の東西溝SD13(幅1.2m、深さ0.5m)は、出土遺物から、実年代は12世紀後半に位置付けられ、規模や遺物相から、有力者の屋敷地などの区画溝と推定された[大阪文化財研究所2012]。今回の調査区の北端で、その西延長部が通ると推定されたため、北拡張区を設けて存否を確認した(図7)。

その結果、北拡張区はTP+約18.5mまで近世の遺構によって削平されており、それよりも古い遺構は検出しなかった。SD13の底面がTP+18.8~18.9mなので、それよりも深く削平を受けていることが分かった。また、北拡張区以外でSD13が通ることが推定された地点でSX006を検出したが、これも近世の遺構であることを確認した。

よって、今回の調査区までSD13が延びるかどうかは確認できなかった。

4)まとめ

今回の調査では、古代～近世の遺構・遺物を確認した。

特に、難波京の成立と拡がりの歴史的展開を明らかにすることは、本遺跡における重要な課題のひとつである。この点について、3基の古代の柱穴を検出したことにより、本調査地における難波京内の土地開発の一端を知ることができた。しかし、限られた調査範囲の中で、建物の構造や性格について知ることができなかった。今回の調査区の南に接して行われたUN02-5次調査でも古代と考えられる柱穴が検出されているが、正方位に沿っていないことや、遺構の規模が小さいことから、今回の柱穴とは無関係であると考えられる(図7)。建物の構造や性格については、今後の調査の積み重ねにより明らかにしていきたい。

[引用・参考文献]

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999、「石原商会による建設工事に伴う確認調査(TX97-1)」:『平成9年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.31-39
- 2000a、「友成公氏による建設工事に伴う発掘調査(UH98-3)」:『平成10年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.57-61
- 2000b、「森口氏による建設工事に伴う発掘調査(UH98-5)」:『平成10年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.62-65
- 2004、「上本町北遺跡発掘調査(UN02-5)報告書」:『平成14年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.33-39
- 2005、「上本町北遺跡発掘調査(UN04-1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』、pp.181-190
- 大阪市文化財協会1981、「第137次発掘調査概報」:『難波宮跡研究調査年報』1975-1976.6、pp.181-23
- 大阪文化財研究所2010、「中央区上沙一丁目における上本町遺跡発掘調査(UH10-1)完了報告書」
2012、「中央区東平一丁目における建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査(UH11-8)報告書」
- 佐藤謙2000、「古代難波地域の土器様相とその歴史的背景」:大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第十一、pp.253-265
- 2003、「難波地域の新資料からみた7世紀の須恵器編年-陶邑窯跡編年の再構築に向けて-」:『大阪歴史博物館研究紀要』第2号、pp.3-30
- 積山洋1999、「大阪の土師質土器-主要器種を中心に-」:『関西近世考古学研究』Ⅷ、pp.41-53

調査区全景
(第1層上面、東から)



南拡張区完掘状況
(第1層上面、西から)



西壁地層断面
(東から)



SP101 断面
(北東から)



SP102 断面
(南西から)



SP103 断面
(南西から)



天王寺区堂ヶ芝一丁目における建設工事に伴う
堂ヶ芝廃寺発掘調査(DS12-1)報告書

調査個所 大阪市天王寺区堂ヶ芝一丁目39・97・98
調査面積 216m²
調査期間 平成24年10月29日～平成24年11月6日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、絹川一徳

1) 調査の経過

今回の発掘調査を行った場所は、堂ヶ芝庵寺の伽藍の中心と推定される豊川稲荷(般若寺)の南側に位置する(図1)。堂ヶ芝庵寺は、古くから古代の瓦が多く採集されていることから当該期の寺院があったと考えられている。かつて石田茂作氏は、豊川稲荷の社殿北側に残されていた土壇について言及しており、それを金堂跡とみなして堂ヶ芝庵寺の伽藍配置が法隆寺式である可能性を指摘した[石田茂作1936]。ただし、一帯は第二次大戦前から街区の開発が進み、周辺にはすでに家屋が建ち並んでいたため、あくまでも想定の域を出す、その後、豊川稲荷で行われたDS88-1次調査において、基壇の可能性が指摘されていた推定寺域の北西側の盛土は、近世のものであったことが明らかになっている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1990]。したがって、伽藍配置の詳細は現在も不明のままである。一方、1997年に調査区の北西450mに位置する細谷工道踏跡SD96-1次調査において、奈良～平安時代の井戸から「百濟尼寺」と墨書きされた土器が出土した[大阪市文化財協会1999]ことから、当庵寺を「百濟尼寺」が併属していた「百濟(僧)寺」に比定する説が注目されるようになった。このように、既往の調査では古代寺院に係わる明確な遺構は見つかっていないが、DS87-3・88-1・04-1次調査において7世紀後半～8世紀の瓦が多数出土したことからも、伽藍の中核は調査地一帯にあったと推定されている[大阪市文化財協会1988、大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1990・2005]。なお、近年では、それまで調査が及ばなかった豊川稲荷の東・北側においてDS09-1・09-3次調査が行われたが、いずれも大きく削平を受けていたため、古代寺院に係わる遺構は認められなかった[大阪市文化財協会2010a・b]。

調査地において、大阪市教育委員会により2012年6月4日に1箇所、9月20日に3箇所の試掘調査



図1 調査地位置図



图2 调查区配置图

がそれぞれ行われ、敷地の北と南西側で古代瓦を含む遺物包含層が認められた。これらの遺物包含層の抜がりとその年代、遺構の有無を確認するため、本調査を実施することになった。

発掘調査は10月29日から着手した。敷地の中央東寄りで試掘 sondage を含むように南北20m × 東西10mで200m²の調査区を設定したのち、重機による上掘りを開始した(図2)。その結果、調査区の中央から南東にかけて地山層まで大きく削平されており、かつ擾乱が著しいことが判明したため、大阪市教育委員会と協議の結果、その後の調査は北東と南西側に残存する遺物包含層を重点的に行うこととし、さらに遺物包含層や遺構面の抜がりを確認するため、東北部において北側へ東西5m × 南北2m、南西部において西側へ東西1m × 南北6mの拡張を行うこととなった。以後、人力で地層の掘下げと遺構面を精査するとともに、平面図・断面図の作成、写真撮影により記録保存を行い、11月6日に調査に係わる現場作業を終了して撤収した。

本文で使用する方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図により得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準とした。標高はTP値(東京湾平均海面値)を用い、TP+○mと表記する。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

調査地はほぼ平坦で、標高はTP+10.3m前後であった。現代盛土層を含め以下の第0～4層を確認した。

第0層は現代盛土である。調査区の全域で認められた。層厚は40～70cmであった。旧建物の解体時に形成された地層である。

第1層：調査区の北東と南西側で認められた旧表土層である。灰オリーブ色(5Y5/2)の中粒砂質シ

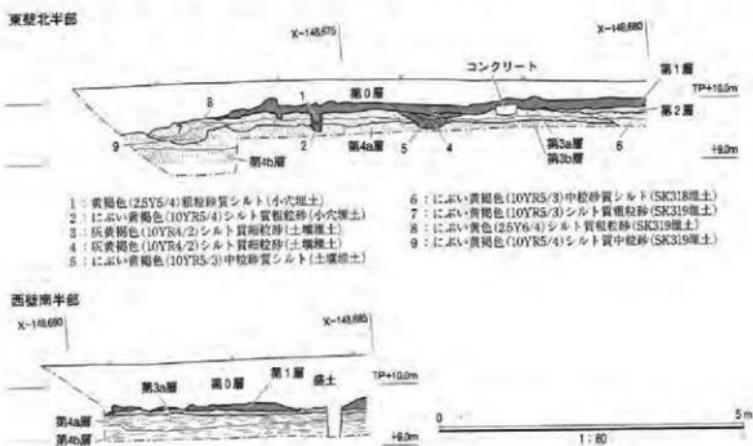


図3 東壁・西壁地層断面図

ルト層の作土で、炭・焼土を多く含む。層厚は10~15cmであった。第二次大戦後に形成された昭和時代の地層である。

第2層：にぶい黄褐色(10YR5/4)の中粒砂質シルト層の作土である。調査区北東側南半で認められ、層厚は10cmほどであった。近代以降に形成された地層とみられる。

第3層：調査区の北東と南西側で認められた

作土層である。第3a・3b層に細分することができた。第3a層は、にぶい黄褐色(10YR5/3)~黄褐色(2.5Y5/3)の中粒砂質シルト層の作土である。層厚は10cmほどであった。本層からは肥前磁器が出土した。第3b層は、調査区の北東側のみで認められた地層で、にぶい黄褐色(10YR5/4)のシルト質細粒~中粒砂層の作土である。上位層とは漸移的でやや不明瞭であるが、下位層との層理面は明瞭であった。第3a・b層からは陶磁器類が出土しており、いずれも近世の地層である。なお、第3b層上面において、小穴・土塊・溝・井戸などを検出した。

第4層：調査区の全域に厚く堆積した水成層で更新世の堆積物である。第4a・4b層に細分することができた。第4a層はにぶい黄色(2.5Y6/4)の粗粒砂~シルト質粗粒砂層で、層厚は約40cmであった。第4b層は、にぶい黄色(2.5Y6/3)~灰黄色(2.5Y6/2)の粗粒砂~シルト質粗粒砂層で、層厚は50cm以上であった。水平ラミナが顕著に認められた。

ii) 遺構と遺物

調査区の北東と南西側の部分的な範囲に第1~3層が堆積していたが、遺構が確認されたのは北東側のみであり、南西側では認められなかった。また、遺構を検出したのは第3b層上面においてのみである。

a. 近世の遺構(図5・6)

土壌SK301・303・304・309・310・312~316、溝SD302・305・306・308・318・319、小穴SP307・311、井戸SE317を検出した。そのうち、SK318・319は東壁断面で確認した。土壌の中でも大型で径が1.0m以上のSK301・314~316は土採り穴とみられる。深さは30~50cmであり、いくつかの土壙の埋土には、地山層に由来する粘土質シルトの偽礫が含まれる。これらの土壙からは古代~中世の瓦とともに近世陶磁器が出土した。溝は幅0.15~0.20m、深さ0.05mほどで、犁溝など耕作に係わるものとみられる。北側の拡張部で検出された井戸SE317は円形で径1.5m、深さ2.5m以上であった。壁面の地層が砂層で脆弱であることから、本来は井戸側があった可能性が高い。井戸側が抜き取られたのちに直ちに埋め戻されたものとみられる。井戸からは古代~中世の瓦とともに近世陶磁器が出土した。

b. 遺物(図7)

1は重圓文軒平瓦である。2・4は平瓦で凹面に布目、凸面には部分的に斜格子目タタキが認めら

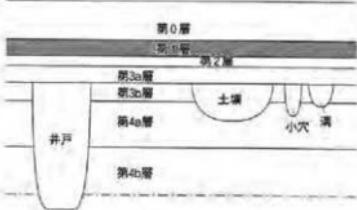


図4 層序模式図

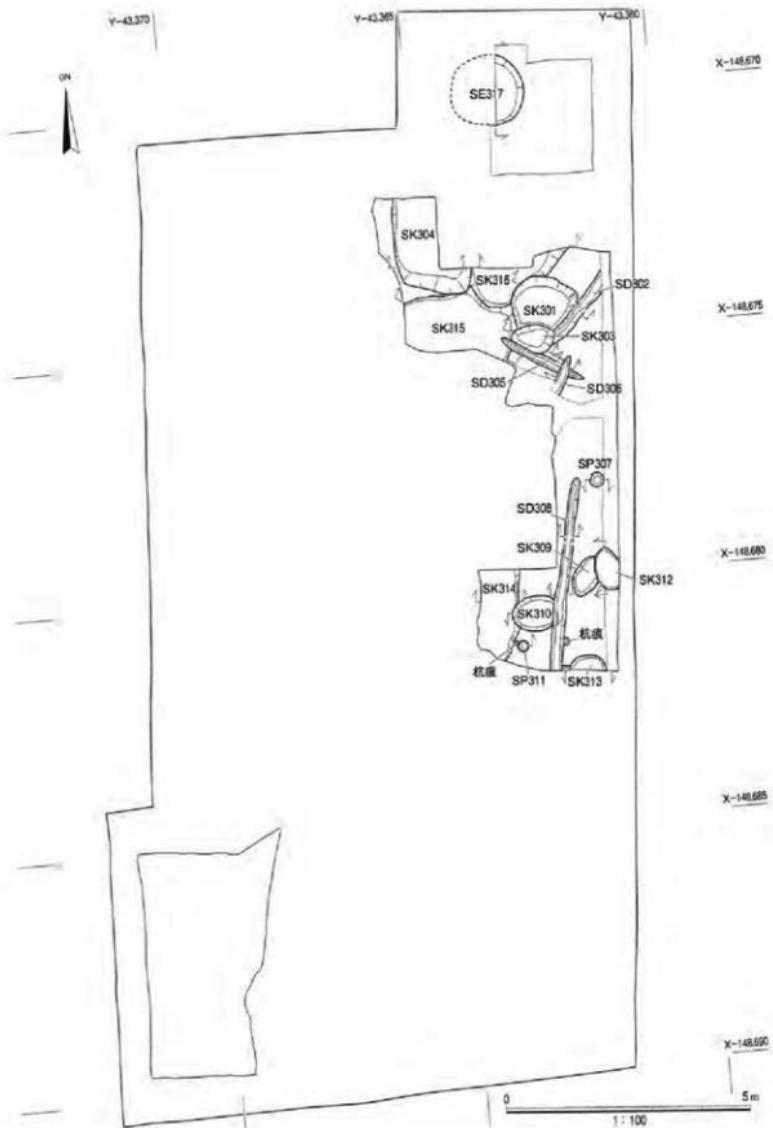


图5 第3b层上面遗物

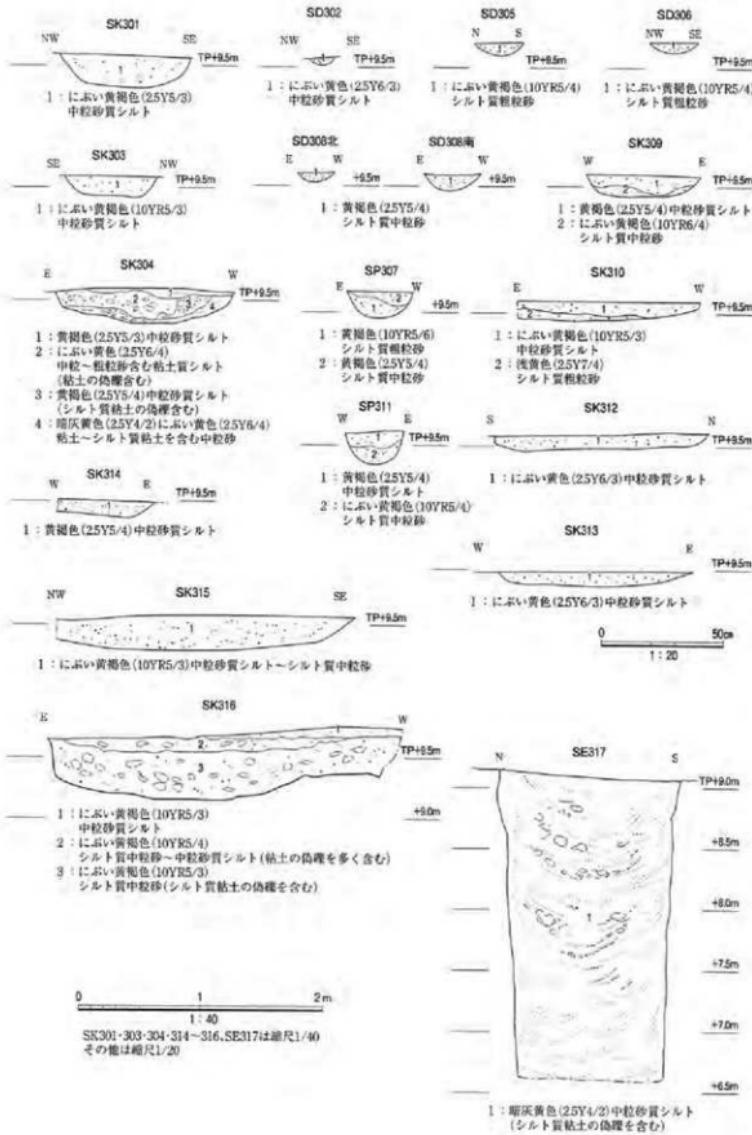


図6 透視断面図

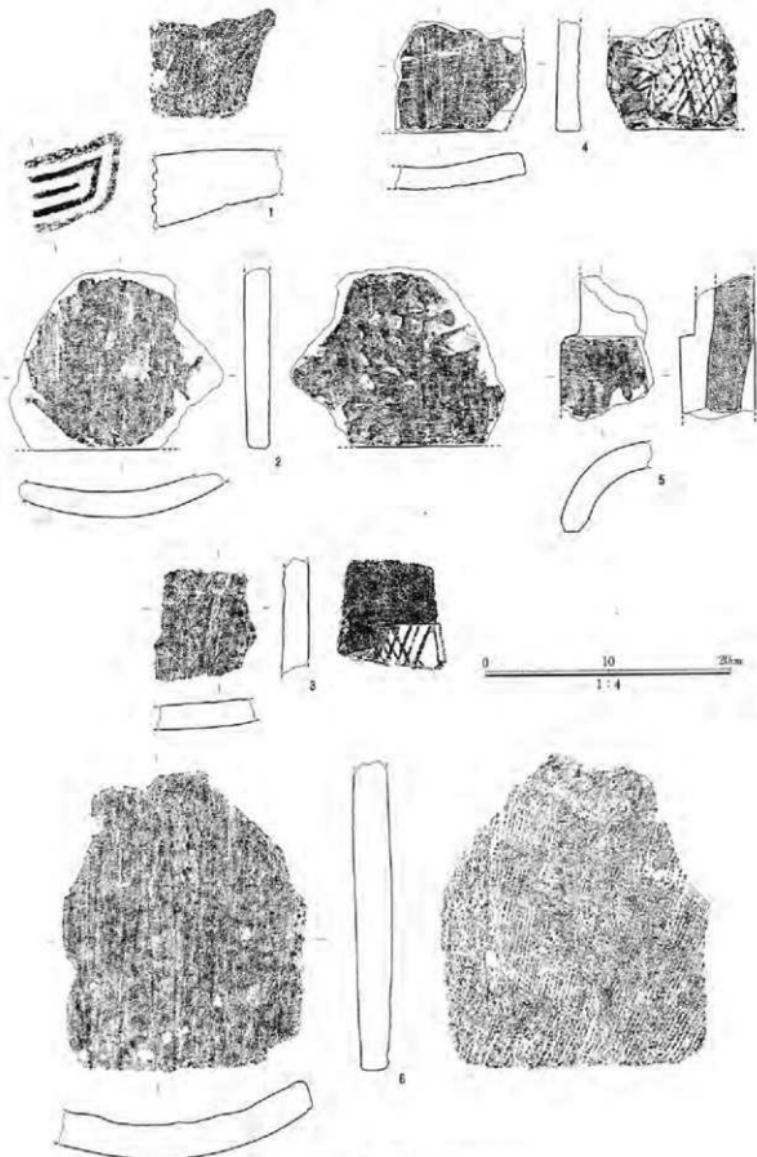


图7 出土遗物实测图
SK301(1~2)、SK315(3)、SK316(4~6)

れる。1・2はSK301、3はSK315から出土した。3は土師質焼成の平瓦で凹面に布目、凸面には部分的に斜格子目タタキが認められる。5は丸瓦で凹面には布目が認められ、凸面をナデにより整えている。6は平瓦で凹面に布目、凸面に縄目タタキが認められる。4～6はSK316から出土した。これらの瓦は古代に属し、出土遺構の年代を代表するものではない。

3)まとめ

本調査地は、古代の瓦が多数出土したDS87-3・88-1次調査地の南側に隣接する場所であったことから、古代寺院に関連した遺構の検出が予想されたが、近世の小穴・土壙・溝・井戸を検出したのみで、古代の遺構は確認できなかった。ただし、7世紀後半～8世紀の平瓦・丸瓦が多数出土した。平瓦には斜格子目タタキや縄目タタキが認められ、これまでDS87-3・88-1次調査地などで出土したものと同様であった。

今回を含めて、調査地一帯からは古代寺院に関係する明確な遺構はいまだ見つかっていないが、堂ヶ芝庵寺の具体的な伽藍配置を今後の発掘調査によって明らかにしていくためには、周辺地形の詳細な復元に加え、古代瓦の出土地点やその多寡にも注目しつつ、今後も地道に調査を重ねていくことが不可欠といえよう。

引用・参考文献

- 石田茂作1936、「堂ヶ芝庵寺」：『飛鳥時代寺院址の研究』 第一書房、pp.543～549
大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1990、「觀音寺本堂の建て替えに伴う堂ヶ芝庵寺発掘調査(DS88-1次)報告」：
「昭和63年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査」、pp.117～126
2005、「堂ヶ芝庵寺発掘調査(DS04-1)報告書」：『平成16年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.29～35
大阪市文化財協会1988、「西村薬品産業(株)による建設工事に伴う堂ヶ芝庵寺発掘調査(DS87-3)略報」
1999、「織工谷遺跡発掘調査報告」
2010a、「天王寺区堂ヶ芝一丁目における建設工事に伴う堂ヶ芝庵寺発掘調査(DS09-1)報告書」
2010b、「天王寺区堂ヶ芝一丁目における建設工事に伴う堂ヶ芝庵寺発掘調査(DS09-3)報告書」

東壁北半地層断面
(南西から)



東壁南半地層断面
(北西から)



第3b層上面遺構
検出状況
(東北部：北から)



第3b層上面検出遺構
(土採り穴)完掘状況
(北から)



SK304・316断面
(北から)



SE317断面
(西から)



天王寺区北河堀町における建設工事に伴う
北河堀町所在遺跡発掘調査(KC12-2)報告書

調査個所 大阪市天王寺区北河堀町54-14
調査面積 40m²
調査期間 平成25年3月4日～3月7日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、高橋工

1) 調査に至る経緯と経過

北河堀町所在遺跡は天王寺区の南部にあって、調査地は四天王寺の南約400mに位置する。地形的には、上町台地の東斜面にあって、東へ緩やかに下がる傾斜地である。また、調査地のすぐ北側は北へ下がる比較的急な斜面であるが、これは古代において、和氣清麻呂が河内川の水を上町台地を越えて直接大阪湾に放流しようとして掘削した水路の名残とされる谷(河底谷と仮称)の南斜面である(図1)。

本遺跡は平成12年度の試掘調査によって発見された。近隣の既往の調査では、北西200mのKC12-1次調査では正方位に配された古代の建物群が発見され、難波京内の貴族の邸宅である可能性が指摘されている。このほか、KC00-1次調査では古代の盛土が発見され、多量の埴輪や古代の土器が出土した[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2002]。KC07-2次調査では、中世後半で、上述の谷に並行する複数の空堀が発見され、KC08-1次調査では近世の道構が見つかっている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008・2010]。

当地においては、建築工事に先立つ大阪市教育委員会による試掘調査によって、地表下0.75mで発掘調査の対象となる造構面・地層が発見されたため本調査が行われることとなった。敷地の東南に調査区を設定し(図2)、表土は重機を用いて除去し、その後、地層の掘下げと造構の検出・掘下げは人力で行い、適宜に実測図の作成や写真撮影によって記録を作成した。

また、基準点はMagellan社製ProMark 3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく



図1 調査地位置図

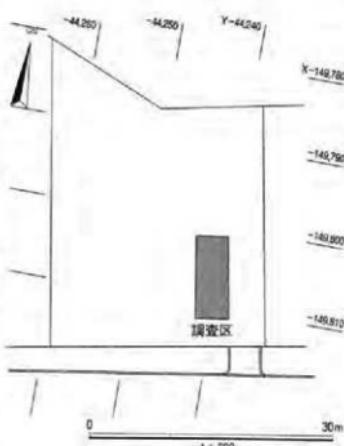


図2 調査区配置図

座標北を基準とした。標高はTP値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

2) 調査の結果

i) 層序(図3~5)

調査地内の現況地形は、ほぼ平坦で、地表面はTP+11.5m前後であった。

第0層：近代以降の人為堆積層で、層厚は約70cmあり、3層に細分された。第0a層は灰色中礫質粗粒砂からなり、現代の整地層である。第0b層は暗灰黄色中礫質砂からなり、南壁地層断面では西に向って急激に層厚を増していた。おそらくは調査地の西にあった深い落込みを埋め立てた近代の客土層である。第0c層は黄褐色粘土(地山層偽礫)からなり、上位層と同様な客土層である。

第1層：暗灰黄色細粒砂からなる客土層で、層厚は約10cmであった。

第2層：中世の作土層で2層に細分された。第2a層は黄褐色細粒質砂からなり、層厚は60cmである。出土した遺物はごく少量で、瓦器片や中国産白磁皿1(図5)など中世に属するものばかりであった。上面でSK2・SD3など近世後半の遺構が検出された。地層の年代は出土遺物から中世と判断したが、近世にまで下がる可能性はある。第2b層は暗黄褐色粗粒砂からなる作土層で層厚は最大15cmであった。遺物は出土しなかった。

第3層：黄色砂礫からなる地山層である。本層上面では遺構は発見されなかった。

ii) 近世の遺構と遺物(図4・5)

第2a層の上面で近世の遺構を検出した。

SK2 東西0.6m、南北1.9m、深さ0.5mを測る土壙である。灰黄褐色細粒～粗粒砂などで埋められていた。関西系陶器蓋2などが出土した。

SD3 幅0.6m、深さ0.3mの溝で、方位はN11°Eである。埋土最下部は灰黄褐色砂質粘土で、流水の痕跡が観察され、その上部は灰黄褐色中粒～粗粒砂や地山層の偽礫などで人为的に埋められていた。農業用水用の溝であろうか。関西系陶器碗3などが出土した。本遺構とSK2は出土遺物からみて18世紀末以降のものである。

SX1・4 いずれもごく一部分のみを検出したもので、全体の形狀は不明である。深さは0.1m未満で、暗灰色細粒砂で埋められていた。時期がわかる遺物は出土しなかった。

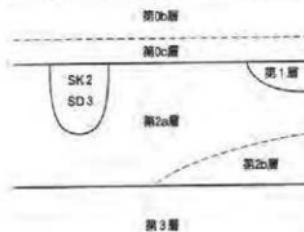


図3 地層と遺構の関係図

3)まとめ

- ・作土層である第2層には中世の遺物が含まれ、当地における農地の開発がこの時代まで遡る可能性が考えられた。
- ・近世後半の溝・土壙を発見した。調査地における遺物の出土量は少少であり、居住地というよりはやはり耕作地と考えた方がよい。溝には水が流れた痕がみられ、農業用水の溝と考えられる。
- ・古代に遡る遺構・遺物は発見されなかった。KC00-1・

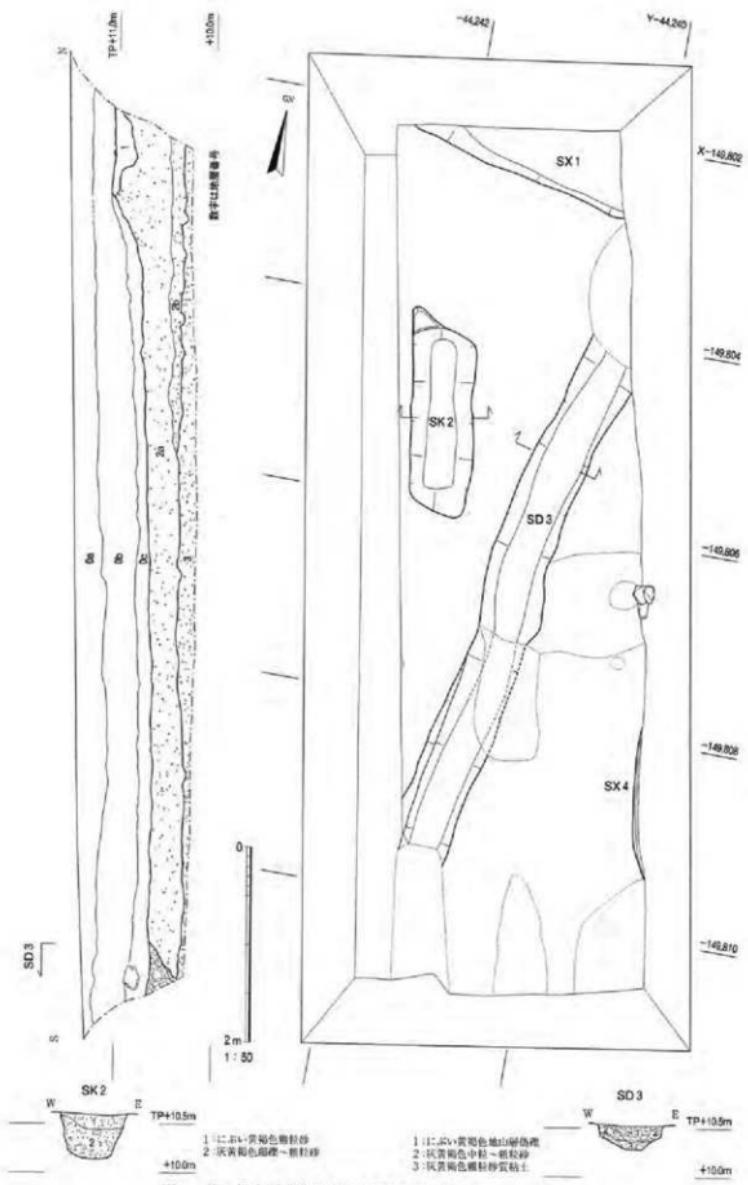


図4 第2a層上面造構平面図および西壁地層断面図、造構断面図



07-2・08-1次の調査成果からもKC12-1次調査地で発見されたような難波宮内の宅地はここまででは拡がらないようである。



引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2002、「住友不動産株式会社による建設工事に伴う北河堀町所在道路発掘調査(KC00-1)報告書」:『平成12年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.61-69

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「北河堀町所在道路発掘調査(KC07-2)報告書」:『平成19年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.51-56

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「北河堀町所在道路発掘調査(KC08-1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.293-297

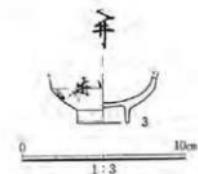


図5 出土遺物実測図
第2a層(1)、SK2(2)、SD3(3)

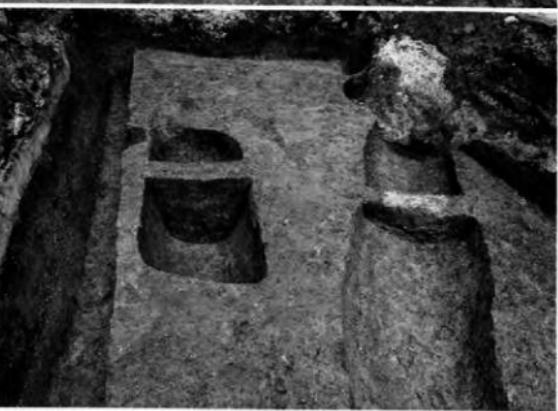
西壁地層断面



第2a層上面の遺構
(北から)



SK 2・SD 3
(南から)



天王寺区逢阪一丁目における建設工事に伴う
伶人町遺跡発掘調査(RJ12-1)報告書

調査個所 大阪市天王寺区逢坂1丁目11-3
調査面積 約40m²
調査期間 平成24年5月21日～5月26日
調査主体 公益財團法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、谷崎仁美

1)調査に至る経緯と経過

調査地は、谷町筋西の伶人町遺跡の範囲内に位置し、谷町筋の東には四天王寺旧境内遺跡がある(図1)。伶人町遺跡は1996年に初めて発掘調査が行われ[大阪市文化財協会1996]、調査地の北250mに位置する星光学院敷地や、調査地の北約100mに位置するRJ05-2次調査では古代に遡る遺構が見つかっている[西近畿文化財調査研究所2006、大阪市文化財協会2005]。調査地北西のRJ02-5次調査では、江戸時代後半の遺構群や、14世紀を中心とする中世の遺構群を検出した。中でも、池とする遺構から完形の土師器皿がまとまって出土し、何らかの儀礼行為を行った可能性が考えられた[大阪市文化財協会2003]。このように、極楽浄土の東門と言われた四天王寺西門に隣接する集落の実態が明らかになりつつある。

調査区は東西8m、南北5mの範囲に設定した(図2)。発掘調査は、建築工事用の土留の設置後、大阪市教育委員会の試掘結果に基づき、重機で現地表面から約0.7m掘削して現代客土を除去した後、以下を人力による掘下げで調査を進めた。現場では層序ごとに遺構検出・掘下げ・記録などの作業を適宜行った。

本報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することで得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準とした。標高はTP値(東京湾平均海面値)でTP+○mとした。

2)調査の結果

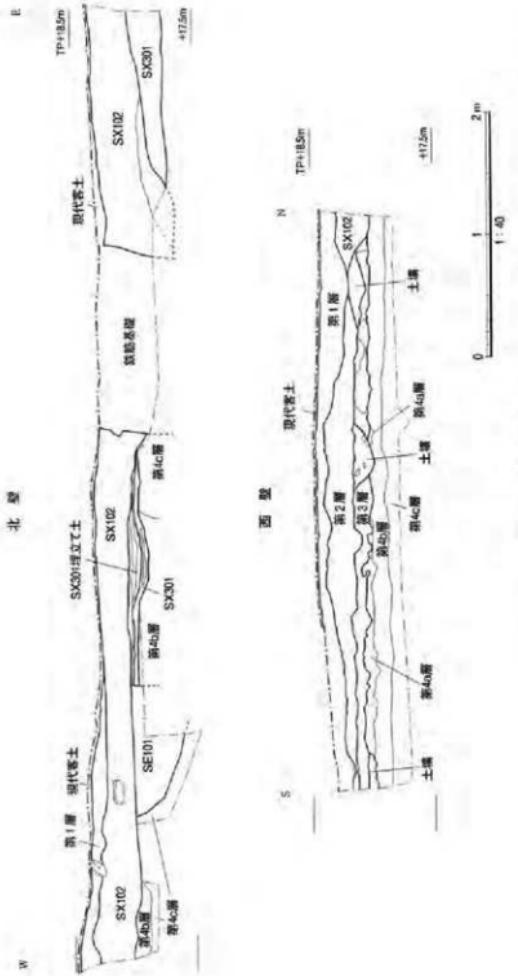
i)層序(図3・4)



図1 調査地位置図



図2 調査区位置図



調査地は上町台地の西端に当り、調査地の南には松屋町筋と谷町筋とを東西に結ぶ達坂(国道25号線)が通る。達坂は「天王寺七坂」の南端の坂で、西の松屋町筋に向かって急激に下がる。しかし調査地内で東西の高低差はほんくなく平坦である(TP+19.00m)。現代客土の下位では南北で土質の異なる堆積が見られた。北は、後述する第2層上面造構のSX102が部分的に露出している状態であつて、南側よりも深く現代の削平を受けていることが分かった。また、東側は鉄筋基礎による搅乱や後述の第1層上面造構のSK004により、第1層より下層の造構は全く残存していなかった。

第1層：近世の盛土である。層厚は12~18cmである。暗褐色(10YR3/4)の第4層由來の細粒砂質シルト偽縞・中縞を含むシルト質粗粒~極細粒砂層である。層内からは17世紀初頭~中頃の肥前陶器・瀬戸美濃焼をはじめ、輸入白磁や古代の灰釉陶器が出土した。ただし、上面造構は18~19世紀が主体である。

第2層：中世後半の盛土である。層厚は25cmである。にぶい黄褐色(10YR4/3)の中縞を含むシルト質粗粒~極細粒砂層で、固く締まる。層内の出土遺物は、土師器・瓦器・古瀬戸・備前焼・丹波焼・銅鏡をはじめ、輸入白磁・須恵器・丸瓦・平瓦が出土した。層内の遺物は12世紀中頃~13世紀のものが主体を占めるが、地層の年代は14世紀に降る。上面で検出したSX102・SE101は、出土遺物から

15世紀中頃～16世紀前半に埋没したと考えられる。その他の造構からは時期を判別できるような遺物は出土しなかった。

第3層：中世の盛土である。層厚は18cmで、灰黄褐色(10YR4/2)～暗灰黄色

(2.5Y4/2)の中～細礫を含むシルト質中粒～極細粒砂層である。上面で柱穴3基(SP201～203)のほか、多くの土塊や小穴を検出した。層内からは、土器・瓦器が出土した。出土遺物は12世紀のものが主体であるが、本層の年代は13世紀以降と考えられる。

第4層：段丘構成層である。a～c層に細分した。第4a層は、層厚10cmで、にぶい黄褐色(10YR5/4)のシルト質極細粒砂層である。上面でSD302、SX301、SP303などを検出した。上面造構からは11世紀後半～13世紀の土器・瓦器・輸入白磁のほか、黒色土器が出土した。第4b層は層厚15cmの極粗粒砂質中～細礫層である。中礫の直径は2～3cmであった。第4c層は層厚15cm以上で、細礫を含む中粒～極細粒砂層である。

ii) 造構と遺物

a. 第4層上面の造構と遺物(図5～7、表1)

SX301は、調査区北東側に拡がる落込みである。南北長1.00m以上、東西長5.50m、深さは東で0.26m、西で0.10mある。造構の中心は調査区外の北側にあるようである。埋土中に、SD302埋土・第4c層を人為的に掘削したことによって形成された偽礫が挟在している(図16の4層)。埋土は黒褐色(10YR3/1)の炭を含む細粒砂混り粘土質シルトで、一気に埋められたのではなく、時間をかけて埋没

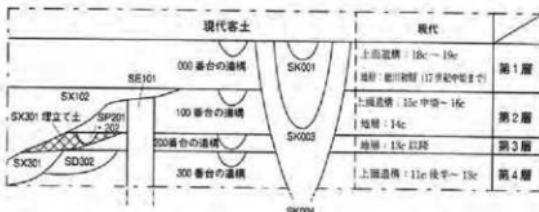


図4 地層と造構の関係図

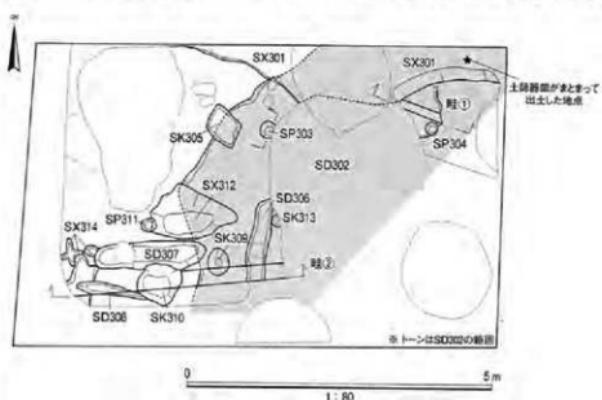


図5 第4層上面造構平面図

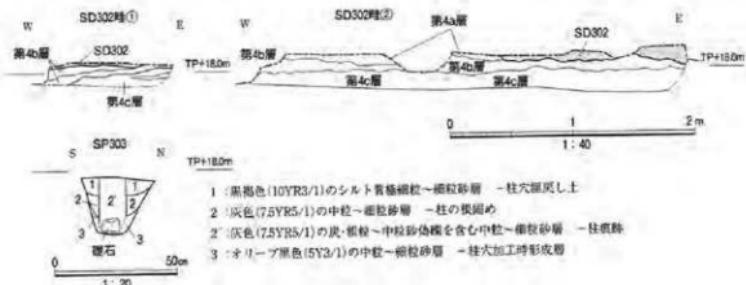


図6 第4層上面造構断面図

していったようである。また、東側(図5の★部分)で土師器皿がまとまって廃棄され出土した。

以下でSX301出土遺物について述べる(図7)。1~4・11・13~16は土師器皿である。口縁をヨコナデし端部を丸くおさめる一群(1~4)は、口径8.4~9.1cm、11.7cm、17.0cmを測るものがあり、口縁端部を外反させる一群(11・13~15)は、口径8.7~10.3cmを測る。いずれも黄褐色を呈する。16は0.9cmの高い高台が貼りつく。他にぶい黄褐色を呈し精緻な胎土であるのに対し、微細な長石や石英を含み、赤褐色を呈する。以上のうち、2・16は、佐藤編年の平安時代Ⅲ期新段階、11・13~15は同平安時代Ⅳ期古~中段階に属する[佐藤隆1992]。17は黒色土器碗のA類である。内外面ともに密にヘラミガキを施すが、表面の磨滅が著しい。口縁部を外反させ、口縁端部は肥厚ぎみである。胎土は土師器皿16に似る。平安時代Ⅲ期古段階に属する[佐藤1992]。22・24・26は瓦器碗である。22・24は、和泉型I~III期に属し、24は見込みに斜格子状の暗文が残る。内面を板ナデしヘラミガキを施す26は、見込みに連続輪状暗文が残る。楠葉型のI期に属する[森島康雄1995]。18・19は輸入白磁の碗で、18は内底付近に段ができる、細い沈線が巡る。19は粘土帯を貼り付けて玉縁状の口縁をなす碗である。18は白磁碗IV類、19はII類に属する[山本信夫1995]。27は、丸瓦である。内面にコピキAと布目压痕が残っている。表面を焼しており、長石・石英を多く含む胎土から古代まで廻ることはないと考えられる。以上の遺物は一部に11世紀中葉以前に廻るものを含むが、おおむね11世紀後半~12世紀前半におさまるものである。

SX301の性格を知るうえで手掛かりになるのが調査地北西のRJ02-5次調査で見つかったSK01・02である。これらの造構は南北長5.50m、東西長6.00mを測る不整形な土壤で、灰色のシルト層の堆積状況から「池」と報告されている。ただし、水を湛えていた痕跡はなく、本報告では長い間開口していたと考えて「落込み」とする。ここから11世紀後半~15世紀前後の遺物とともに完形の土師器皿がまとめて出土している。土師器皿は、数面にわたって複数かたまつて出土する状況で、置かれた時期が複数あったことを示す。報告では、調査地周辺に四天王寺や一心寺が立地する点から、土師器皿を投棄または埋納する何らかの儀礼が行われたとしている[大阪市文化財協会2003]（註1）。SX301の遺物出土状況はこれと類似するものであり、土師器皿を一括投棄した落込みであると解釈する。SK01・02がRJ02-5調査区の南東側に拡がり、SX301が調査区の北東側に拡がることを考え合せる

表1 第4層上面の遺構

遺構	性格	南北長	東西長	深さ (m)	埋土	遺構の切りあいからみた時期	出土遺物からみた時期	参考
SX302	北東～南西方の溝状の窪み	5.00	2.00～3.30	0.05	黒褐色 (BYTR3-2) の粘土中に細粒砂質シルト	最古か	11世紀後半～12世紀前半	
SX301	北東側に弧状の人为的な溝状の窪み	10.00以上	5.50	0.26	黒褐色 (BYTR3-2) の粘土中に細粒砂質シルト	SX302より新しい	11世紀後半～12世紀前半	
SX306	南北方向の跡水性の窪み・溝	1.51	0.33	0.05	土ぶつ・黄褐色 (BYTR3-2) の粘土中に細粒砂質シルト	SX302より新しい	x	
SX307	南北方向の跡水性の窪み・溝	0.44	0.76	0.16	黒褐色 (BYTR3-2) の粘土中に細粒砂質シルト	SX302より新しい	x	
SX308	東西南方の跡水性の窪み・溝	0.2	1.14	0.05	黒褐色 (BYTR3-2) の粘土中に細粒砂質シルト	SX310より古く	x	
SP303	礎石埋立の柱穴	0.28	0.23	0.05	黒褐色 (BYTR3-2) の粘土中に細粒砂質シルト	SX302より新しい	12世紀前半以降	SX313と一連の遺構である可能性あり 瓦器片の遺物のみ出土
SP304	柱落不明の小穴	0.22	0.21	0.07	黒褐色 (BYTR3-2) の粘土中に細粒砂質シルト	SX302より新しい	x	
SP311	柱落不明の小穴	0.22	0.24	0.12	黒褐色 (BYTR3-2) の粘土中に細粒砂質シルト	SX312より新しい	12世紀中期～後期半以降	
SK313	柱落不明の小穴	0.21	0.13	0.11	黒褐色 (BYTR3-2) の粘土中に細粒砂質シルト	SX302より新しい	12世紀中期～後期半以降	
SK305	柱落不明の方面的土塗	0.6	0.57	0.04	黒褐色 (BYTR5-1) の粘土中に細粒砂質シルト	SX302より新しい	12世紀中期～後期半以降	
SK306	柱落不明の方面的土塗	0.45	0.36	0.15	黒褐色 (BY5Y3-2) の粘土中に細粒砂質シルト	SX302より新しい	x	
SK310	柱落不明の方面的土塗	0.68	0.72	0.14	黒褐色 (BY5Y3-2) の粘土中に細粒砂質シルト	SX307・308より新しい	x	
SX312	柱落不明の不整形の窪み	0.92	1.41	0.15	ナリーブ灰 (25Y5/1) ～灰褐色 (BY4/1) の粘土中に細粒砂質シルト	SX302より新しい	12世紀後半以降	瓦器片・底面の繊片出土
SK314	柱落不明の窪み	1.02	0.54	0.13	暗灰褐色 (25Y4/2) の粘土・強粘性の粘土	SX307・308より古い	x	SX307と一連の遺構である可能性あり

表2 第3層上面の遺構

遺構	性格	南北長	東西長	深さ (m)	遺構の切りあいからみた時期	出土遺物
SP201	柱穴	0.44	0.26	0.11	SX301埋め立て後	瓦器片、土師器片
SP202	柱穴	0.42	0.43	0.09	SX301埋め立て後	瓦器片、土師器片
SP203	柱穴か	0.26	0.35	0.23	-	瓦器片
SX204	南北方向の縦溝・溝込み	0.66	0.20	0.21	-	
SX205	鉢貝殻灰	0.53	0.59	0.24	-	瓦器片 (12世紀末～13世紀)
SK206	長方形の土塗 (柱痕はなし)	0.45	0.19	-	SX301埋め立て後、SP202より古い	x
SK207	円形の土塗 (柱痕はなし)	0.29	0.25	-	SX301埋め立て後	x
SK208	不整圓形の土塗 (柱痕はなし)	0.25	0.23	-	SX301埋め立て後	x
SK209	円形の土塗 (柱痕はなし)	0.18	0.22	-	SX301埋め立て後	x
SK210	円形の土塗 (柱痕はなし)	0.40	0.40	0.16	SX301埋め立て後、SK211・212より新しい	壁上、土師器片
SK211	方形の土塗 (柱痕はなし)	0.31	0.30	-	SK210より古く、SK212より新しい	x
SK212	椭円形の土塗	0.51	0.27	0.16	SK210・211より古く	x
SK213	円形の土塗 (柱痕はなし)	0.27	0.33	-	-	x
SK214	不整円形の土塗 (柱痕はなし)	0.23	0.24	-	SK216より新しい	x
SK215	不整円形の土塗 (柱痕はなし)	0.27	0.26	-	-	x
SK216	不整円形の土塗 (柱痕はなし)	0.30	0.30	-	SK214より古い	瓦器片、土師器片
SK217	円形の土塗 (柱痕はなし)	0.33	0.31	-	-	x
SK218	不整圓形の土塗 (柱痕はなし)	0.30	0.26	-	-	x
SK219	不整円形の土塗 (柱痕はなし)	0.25	0.30	-	-	x
SK220	円形の土塗 (柱痕はなし)	0.33	0.33	-	-	土師器 (壹) 片
SK221	不整形な土塗 (柱痕はなし)	0.26	0.19	-	-	x
SK222	不整形な土塗 (柱痕はなし)	0.23	0.32	-	-	x
SK223	不整形な土塗 (柱痕はなし)	0.23	0.41	-	SX301埋め立て後	土師器片

と、出土遺物の年代に差があるものの、これらは一連の遺構である可能性がある。また、後述するが、SX301は13世紀以降に一部埋め立てられて建物が建てられている(第3層)。つまり、この一帯で11世紀後半から12世紀前半を中心として土師器皿の投棄場と利用されていたが、13世紀以降に南側(SX301)のみ一部埋め立てられて別の土地利用がなされ、北側(SK01・02)では15世紀まで投棄場として利用されていたといふことが推定できる。

SX301の下位ではSD302を検出した。南北長5.00m、東西長2.00~3.30m、深さ0.05mの北東-南西方向の溝である。黒褐色(10YR3/2)の極細粒~細粒砂質シルト層で埋没する。搅乱で東側の立ち上がりは検出できなかったが、東壁北隅部の断面でSD302を確認したこと(図15)と、調査区南側でSD302の埋土が残存していたことから、図5のような溝のラインを復元することができた。滞水の痕

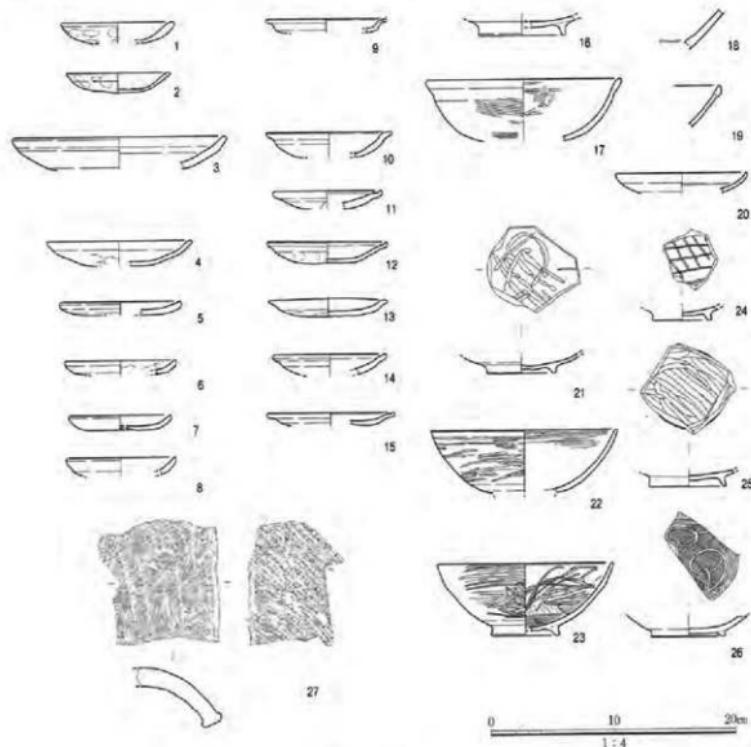


図7 第4層上面遺構・第3層内・第3層上面遺構出土遺物
第4層上面精査中(10・25)、SP311(7・8)、SK305(20)、SX301(1~4・11・13~19・22・24・26・27)、第3層内(6・9・12・21)、第3層上面精査中(5・23)

跡はなく、埋土には偽礫を含まない。また、溝掘削時の加工痕跡は顕著には見られなかった。輸入白磁や古代の土器片の小片が出土した。白磁は碗と考えられ、外面の釉が高台より上方で途切れることから、SX301出土の19(図7)と同形態のものと考えられる。SD302が埋没した時期とSX301が形成された時期はさほど差がないと考えられる。

SP303は、掘立柱建物の根石が置かれた柱穴である。長軸0.28m、短軸0.23mの梢円形で、深さが0.22mある。柱痕跡は直径0.11mである。柱は抜き取られていない(図6の2'層)。底に柱穴加工時形成層が堆積し(図6の3層)、礎石を据えて柱材を建て、根固めして埋められた(図6の1・2層)。対になる柱穴は見つからなかった。SP303からは輸入白磁片や図7-17と同様の黒色土器片が出土したが、SD302などの遺物が混入したものと考えられ、より新しい時期が考えられる。

この他、性格不明の土壙や小穴、落込み、溝などを検出した(表1)。重複関係から本層上面遺構で最古とみられるSD302は、出土遺物から11世紀後半~12世紀前半に埋没したと考えられる。また、SD308やSK310、SX314の時期は出土遺物がなく不明だが、埋土がSD302よりも新しい遺構群のそれとよく似るため、SD302より古くなることはないと推定する。以下でこれらの遺構から出土した遺物について述べる(図7)。7・8はSP311から出土した土器器の皿である。前者は口径8.8cm、後者は口径8.2cmを測る。これらは平安時代Ⅳ期新段階(12世紀中頃~第3四半期)に属する[佐藤1992]。20はSK305から出土した輸入白磁の皿である。内底から上方約3/4の部分に細い沈線が巡り、そこから口縁にむかってほぼ直立して立ち上がる。大宰府編年では12世紀中頃までにおさまるものであるが[森本朝子1990]、畿内では13世紀代の遺物に伴う出土例が多い。

b. 第3層上面の遺構と遺物(図8・9・表2)

第3層を盛土して整地する際に、下層のSX301の西側に当る部分では、灰色(7.5Y5/1)の粘土質シルトで埋めており(図3・4・図8のトーン部分)、その上でSP201・202を検出した。

SP201は、南北長0.44m、東西長0.26m、深さ0.11mの不整形な柱穴である。直径0.18mの柱痕跡には木材の細片がわずかに残っていた(図9の1層)。SP202は、一辺0.43m、深さ0.09mの方形の柱穴である。SP201・202の柱の芯々距離は1.25mで、対になりそうな柱穴は見つからなかった。両者は層序から考えて13世紀代におさまるものと考えられる。SX301上部の整地と建物を関連付ければ、SX301上部の整地が北側に拡がるようなので、建物も北側に展開する可能性がある。

SP203は、南北長0.26m、東西長0.35m、深さ0.23mの不整形円形の小穴である。炭がまとまって出土している。瓦器碗や土器器の細片が出土したのみで、詳細な年代は不明である。

このほかにも第3層上面では多くの小穴や土壙を検出した(表2)。

c. 第2層上面の遺構と遺物(図10~12)

SE101は直径2.00mを測る素掘りの井戸である(図11)。近現代の擾乱とSX102によって約2/3が壊されていた。検出面からの深さは1.70mある。底面から約0.35mの高さまで第4c層由来のシルト質粗粒~細粒砂偽礫を含む中粒~極細粒砂層(図11の7層)と極細粒~細粒砂層(図11-第8層)が堆積しており、これらは井戸機能時の崩落土だと考えられる。この部分の第4c層は顕著に粗粒化しており(図11の9層)、井戸側面が大きくオーバーハングしてフラスコのような形状をしていることからも、

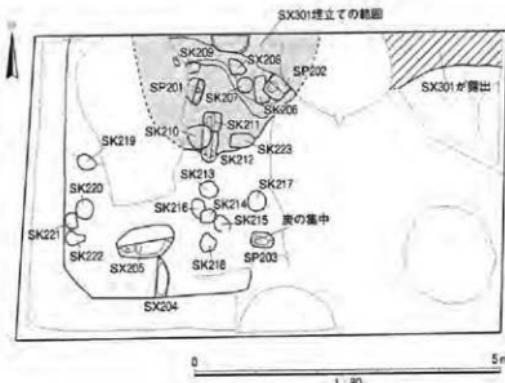


図8 第3層上面造構平面図

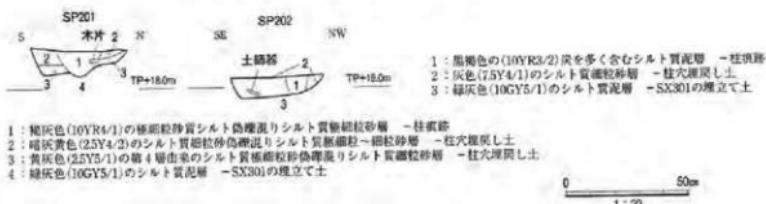


図9 第3層上面造構断面図

この部分から地下水を得ていたのだろう。廃絶後は人為的に埋め戻されている(図11の3～5層)。機能時の堆積層から常滑焼の壺の体部細片が出土した。体部の斜格子タタキメの擦り消しを省き、調整技法が粗いことや、タタキメの間隔が密ではないことから、13世紀後半の可能性がある。13世紀中頃の輸入白磁片が出土していることからも、機能時の年代が第2層の上限年代である14世紀まで遡る可能性は十分ある。出土遺物の大半は廃絶後の埋土からで、15世紀中頃までの遺物が出土している。

32・38・40・41はSE101廃絶後の埋土から出土した(図12)。38・40は備前焼の擂鉢である。41は輪入白磁の碗である。38は擂目5条以上1单位で、口縁部のやや下から始まっている。小片のため推定の域を出ないが、外側が丸みを帯びず直に立ち上がる形状から、15世紀中頃くらいの年代が与えられる。瓦質土器の羽釜32もこれと同様の時期のものであろう。40は、擂目9条以上1单位をなし、擂目の始まりも38と同様であるが、口縁部の形状から14世紀末～15世紀初頭の年代が与えられる。41は白磁碗IX類に属し、13世紀中頃～14世紀初頭の年代が与えられる[山本1995]。

SX102は北に拡がる大きな落込みである(図10・15)。埋土に第2層の加工時形成層が見られなかつたこと、多種多様な遺物が出土したことから、最初、土採り目的で掘削され、のちに廃棄物とともに埋め戻されたと考えられる。出土遺物には、瀬戸美濃焼・輸入青白磁・瓦質土器・瓦器・備前焼のほか、

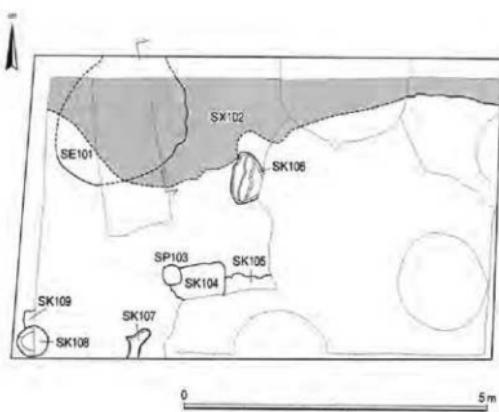
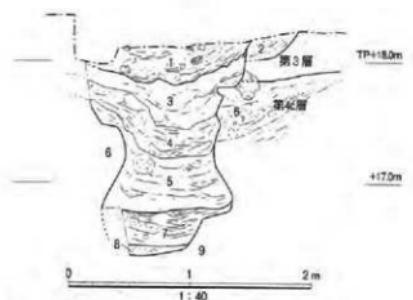


図10 第2層上面遺構平面図

N SE101 S



- 1 : オーブル黒色(5Y3/2)遺物・石柱・瓦を含むシルト質中粒～細粒砂 -SX102埋土
- 2 : 黒褐色(2.5Y3/2)～黄灰色(2.5Y5/1)細粒砂質シルト -SE101復元時の埋戻し土
- 3 : オーブル黒色(5YR2/2)細粒砂質シルトを含む粘土質シルト
- 4 : 黄褐色(2.5Y4/1)中粒砂混りシルト質細粒砂
- 5 : 黑褐色(2.5Y3/1)中粒砂混りシルト質細粒砂 -SE101復元時の埋戻し土
- 6 : 緑灰色(7.5GY6/1)板状砂 -粗粒砂混り細粒砂 -泥灰砂 -第4c層
- 7 : 黑褐色(2.5Y3/1)板状砂 -黄褐色(2.5Y4/1)シルト質細粒砂 -細粒砂塊を含む中粒～細粒砂
- 8 : 緑灰色(7.5GY5/1)種粗粒砂 -細粒砂
- 9 : オーブル灰褐色(5GY6/1)種粗粒砂 -粗粒砂混り板状砂 -細粒砂 -第4c層

図11 SE101断面図

瓦や石材片も出土している。

28~31・33~37・39・42~44はSX102から出土した(図12)。28は瀬戸美濃焼の天目碗である。体部の約3/4までにぶい黄褐色～黒色の釉薬をかけ、露胎の部分は濃い鉄錆を塗布する。外反する口縁端部の器壁は薄く、高台から斜め上方にまっすぐに立ち上がって口縁にいたる形状から、15世紀末～16世紀初頭のものと思われる[瀬戸市史編纂委員会1993]。29・30は、龍泉窯系の青磁碗である。釉が

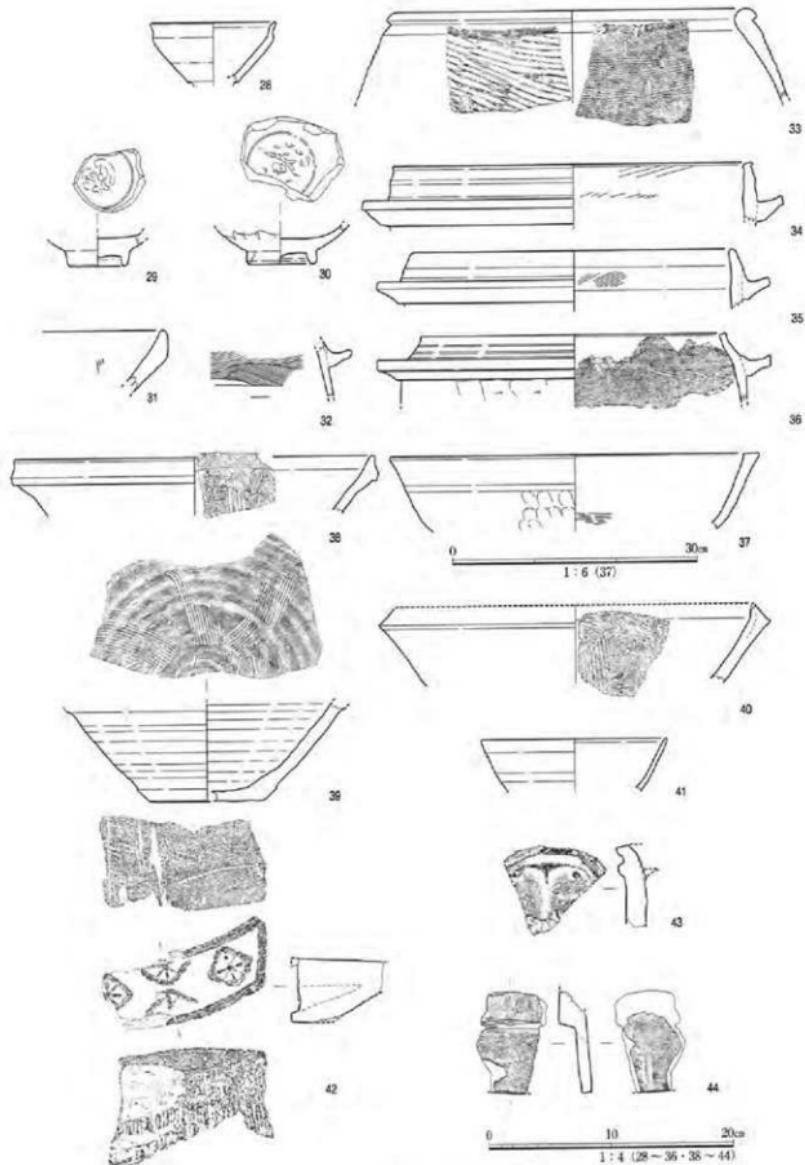


図12 第2層上面構造の出土遺物
SX102 (28-31・33-37・39・42-44)、SE101 (32・38・40・41)

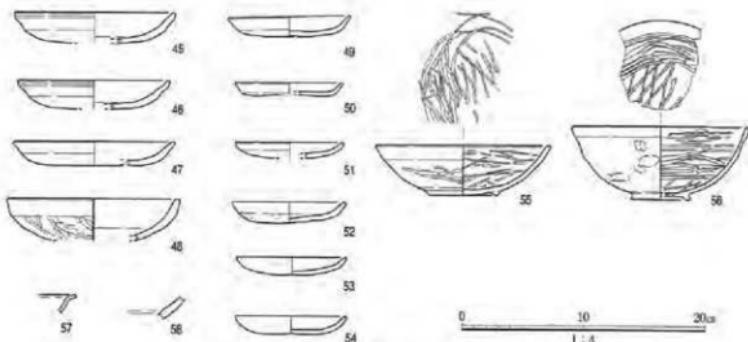


図13 第2層の出土遺物
第2層層内(45~56)、第2層上面精査中(57・58)

疊付の内面の途中まで及び、削り取りを行っていない。15世紀の年代が与えられる[上田秀夫1990]。31~33は瓦質土器である。31は擂鉢、33は壺、34~36は羽釜、37は鉢である。堺環濠都市遺跡SKT202地点の出土資料を参考にすると、第6次整地層のものに類似する。よって15世紀第3四半期のものと考えられる[犠作一郎1989]。39は僧前焼の擂鉢である。擂目11条1単位で体部は底部からほぼ直に斜め上方に向かって立ち上がる。立ち上がり方にやや丸みを残すところがより古い様相であると見られ、16世紀でも初めの頃の年代が与えられる。42は、花菱文軒平瓦である。四天王寺出土資料で中門東北から出土している423によく似る[四天王寺文化財管理室1986]。同範関係は検討していない。粘土板を貼り付けることによって縫い段頭を形成している。頭面には縦方向の繩タキメが密に残る。平安時代後期のものである。43は四天王寺創建瓦であるIA型式と同範の素弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当裏面の回転ナデと、丸瓦先端を深く削って瓦当裏面に差し込む「片はぞ技法」の痕跡がよく残る。44は丸瓦である。玉縁部は凹凸面ともに密にヘラケズリを施すことによって断面が薄くなる。玉縁接合技法はa手法か。四天王寺IA型式に伴う丸瓦である。

このほか、性格不明の土壙や小穴が多数見つかった。SP103は直径0.35m、深さ0.10mの円形の小穴で、SK104を切る。シルト質極細粒砂で埋る。SK104は、南北長0.55m、東西長0.85m、深さ0.21mの不整形な土壙で、炭を含むシルト質細粒砂で埋る。SK105は南北長0.34m、東西長0.84m、深さ0.22mの不整形な土壙で鉄分を多く含み、中稼・極粗粒砂混りの細粒~極細粒砂で埋る。SK106は中央部が窪む稍円形の土壙で、南北長1.02m、東西長0.39m、深さ0.03mを測る。粘土質シルト偽縛を含む中粒~極細粒砂で埋る。SK107は不整形な土壙で南北長0.52m、東西長0.31m、深さ0.09mを測る。シルト質極細粒砂で埋る。SK108は直径0.50m、深さ0.07mの円形の土壙でシルト質極細粒~細粒砂で埋る。これに切られるSK109は、南北長0.30m、東西長0.10mの不整形な土壙で、完掘しなかったため深さは不明である。細粒~極細粒砂で埋る。これらは、いずれも人為的に埋め戻されていた。出土遺物は、SK106から和泉型II-2期と思われる12世紀後半~13世紀初頭の瓦器輪が出土したほかは[森島1995]、土師器の細片が出土するのみであった。

d. 第1層上面の遺構と遺物(図14~16)

西側では第1層上面の遺構は見つからなかったが、東側では、多数の遺構の重複が見られた(図14)。これらは18世紀以降のものである。

SK001は、南北長0.92m、東西長0.86m、深さ0.04mの不整円形の土壙である(図16)。埋土は、木炭・焼土塊を多く含む中粒～細粒砂で、特に、上部は南側に木炭が塊になって帯状に入り、西側に焼土塊は集中していた。これらは二次的に客土されたものである。中央に一辺5cmの木杭が立てられており、そのまわりに埴輪・土器器皿・軟質施釉陶器の灯明皿が埋まっていた。

以下ではSK001の遺物出土状況および個々の遺物について見ていく(図16)。

まず、出土状況について述べる。木杭の北および東では59~64、北西では73~76が出土した。土器器皿59・60は土圧によって潰れた状態で出土したが、合わせ口にして置かれていた。土器器皿61



図14 第1層上面遺構平面図

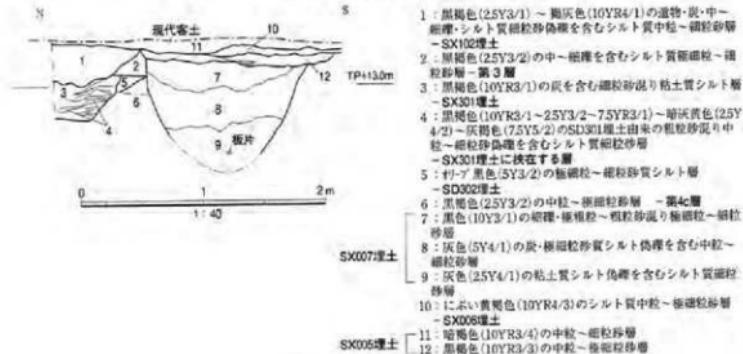


図15 東側北隅地盤断面図

は、焰烙上に底面を上にして伏せ置かれた状態で出土し、土圧で粉々の状態だった。土師器皿62は、59・60のすぐ東側で内面を上にした状態で見つかった。焰烙の西側では軟質施釉陶器73・74、土師器皿75・76が出土した。73が74の上に重なっており、どちらも伏せ置かれた状態であった。その下には75・76が置かれていた。軟質施釉陶器72は木杭に接して、内面を上にした状態で出土した。

木杭の南側で認められたのは65～71である。土師器皿65が底面を上にして伏せ置かれており、その下に軟質施釉陶器66が置かれていた。68は内面を上にした状態で、69は底面を上にして伏せ置かれた状態で出土した。これらより少し離れて軟質施釉陶器70が内面を上にして置かれており、その下に土師器皿71が置かれていた。

次に、遺物について述べる。59～62・65・71・75・76は土師器である。59・60は焰烙で、内外面ともに橙色を呈する。内面にコゲおよびスス、外面の底部にススが付着し、使用済のものである。61・62・65・71・75・76は皿である。61は口径10.0cmを測り橙色を呈する。62は61と同様の規格、調整技法である。65は口径10.0cmを測る。61・62以外の土師器皿はいずれも口縁部にススが付着する。63は肥前磁器の丸碗である。外面にコンニャク印判による染付文様を施す。67は肥前磁器で染付端反碗の口縁部である。64は瀬戸美濃焼陶器の碗である。灰釉の上に鉄釉を施し、鉄釉は疊付内面まで及ぶが、疊付の上面は露胎である。66・68～70・72～74は軟質施釉陶器である。66・73・74は灯明皿で、いずれも両者は口縁部にススが付着しており、使用されたものである。68・69・70・72は灯明受皿である。以上の遺物は土師器が積山分類の江戸11～13段階でおおむね18世紀後半～19世紀初頭に属し[積山洋1999]、肥前磁器のうち67は19世紀初頭のものである。

さて、既存の調査で焰烙を合わせ口にして埋納された例はいくつか確認されている(註2)。しかし、いずれも未使用の焰烙を用い、埋める土器のサイズに見合う規模の整った土壙であった。SK001は規模が大きく不整形で、出土焰烙は使用済のものである。よって、SK001は埋納遺構ではなく、灯明皿や焰烙を一括投棄した土壙であると推定される。

SK004・SX007は、他の上面遺構の中で最も先行して形成された遺構である。SK004は、南北・東西長2.50m以上ある大きな廃棄土壙で、第4層よりさらに深く掘られており、完掘することはできなかった。出土遺物は、江戸時代の燃瓦が主体を占める中で、土師器皿や12世紀の瓦器輪・土師器皿が含まれていた。82は底部糸切りの土師器皿である(図17)。積山分類の江戸11段階・皿5群に属する[積山1999]。SX007は全容は明らかではないが、直径1.30m、深さ0.90m以上の円形の土壙である。出土遺物が極めて少なかったが、図15の8層から灯火具の蓋が出土した。83はSX007から出土した瀬戸美濃焼の灯火具の蓋で、18世紀以降のものである(図17)。

SK003はSK004が埋められた後に形成された土壙で、南北長1.86m、東西長3.65m、深さ0.88mを測る。埋土は木炭と直径10cm以上ある粘土偽礫、由来不明の混入物を非常に多く含む中粒～細粒砂で非常に汚かったため、廃棄土壙だと考えられる。84～93はSK003から出土した(図17)。84は硯である。外面に「上上士…」と判読できる文字が刻まれている。85は肥前磁器の青磁染付碗の蓋である。86・87はコンニャク印判で若松を描いた肥前磁器の丸碗である。これらは18世紀後半のものである。88～92は関西系陶器である。88は土瓶である。絵絵で松が描かれている。「S」字状の注口から18世紀中頃

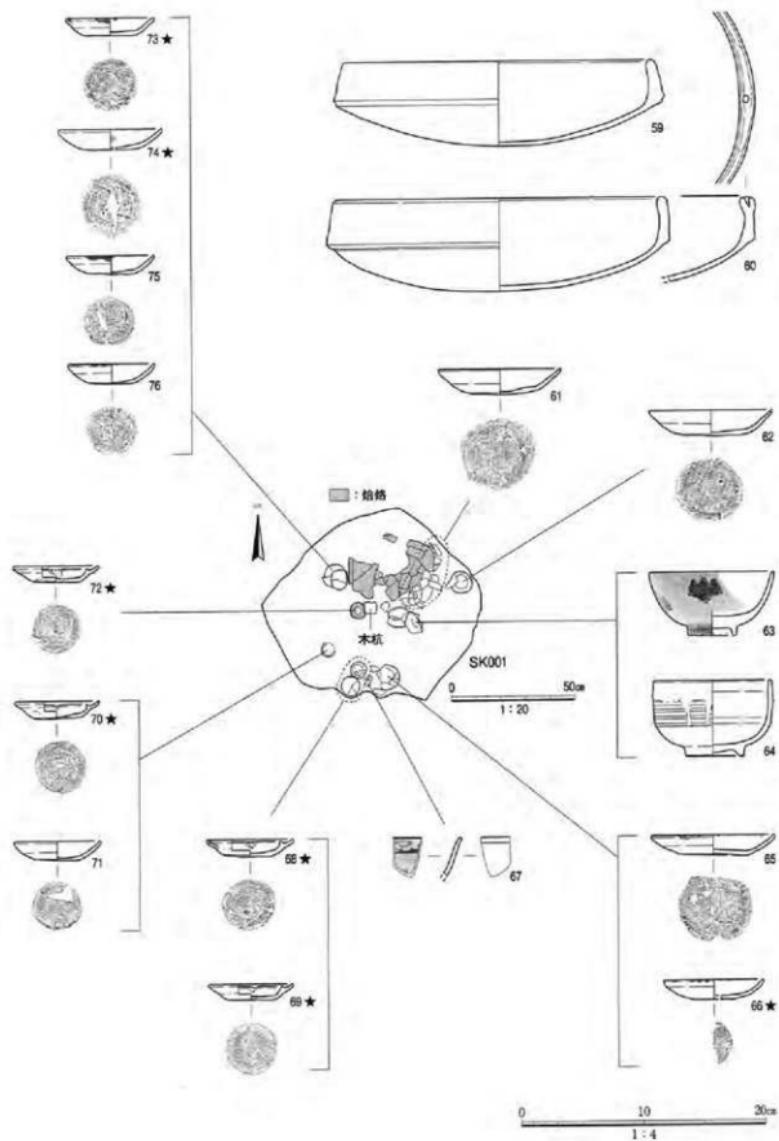


図16 SK001遺物出土状況・遺物実測図

(★は軟質粘土器)

～後半までにおさまるものである。89～91も同様の時期で、色絵で竹を描いた丸碗である〔渡邊晴香2006〕。92は高台裏に刻印のある筒形碗で、内外面ともに浅黄色の釉を施し、高台部分は露胎である。93は骨製の玉である。

このほか、SK002やSX005・006を検出した。SK002はSK003が埋め立てられた後に形成された性格不明の方形の土壙で、南北長0.46m、東西長0.80m、深さ0.10mを測る。SX005・006はSX007の上部に形成された落込みで性格は不明である。いずれも造構の時期を示すような出土遺物はなかった。

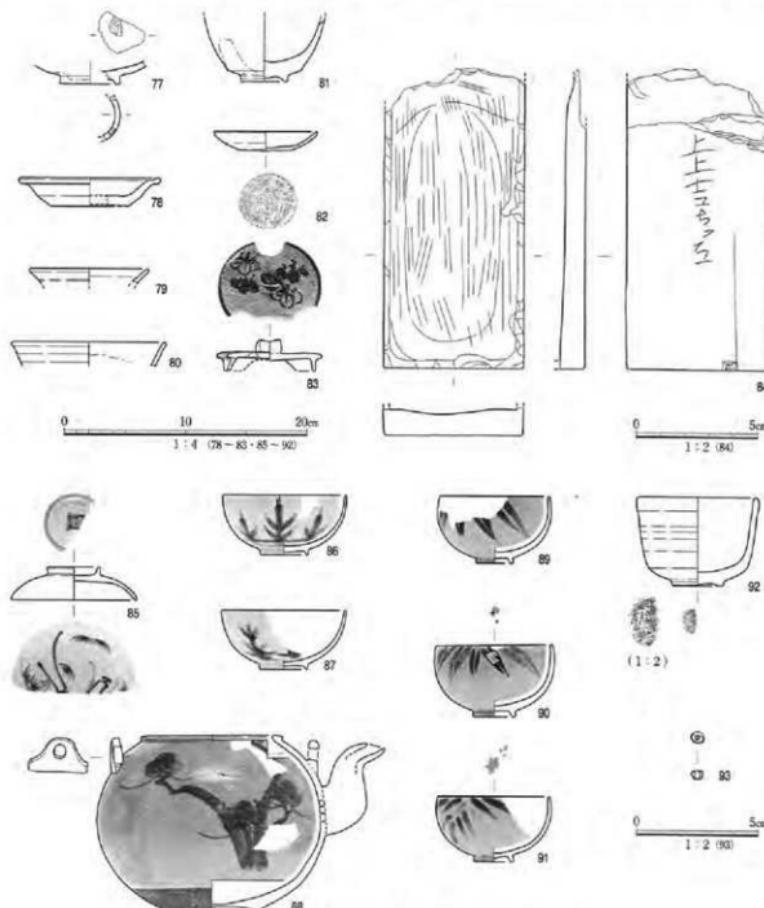


図17 第1層層内出土遺物・第1層上面造構出土遺物
第1層内(77～81)、SK004(82)、SX007(83)、SK003(84～93)

e. 各層の出土遺物(図7・13・17)

第4層上面精査中に出土した遺物は10・25がある(図7)。10は土師器皿で、口径10.2cmを測る。25は瓦器椀である。内外面ともに密にヘラミガキを施し、断面台形のしっかりとした高台が付く。和泉型I-2期に属し、11世紀後葉~末の年代が与えられる。10と同じ年代觀である。

第3層から出土した遺物は土師器皿5~9・12、和泉型瓦器椀23・21がある(図7)。6は内面を粗くヘラケズリしたのちに軽くヨコナデを施している。5・6は、7・8と同時期である。9はいわゆる逆「て」の字口縁の皿で、調整の省略がみられること、高さが1cm強で低いこと、器壁にやや厚みがあることなどから、2・16と同時期のものと考えられる。21・23は、和泉型の瓦器椀である。内外面ともに密なヘラミガキを施し、22・24・25と同時期である。

第2層からは以下の遺物が出土した(図13)。45~54は土師器の皿である。第2層層内から出土した。45~48は口径12.3~13.9cmを測り、49は口径10.1cm、50・51は口径8.8cm、52~54は口径9.0~9.3cmを測る。54が灰白色を呈する以外はすべてにぶい黄橙色を呈する。45・46は佐藤編年のIV期中段階のおわりから新段階に属するもので、12世紀後半のものである。47は伊野分類のJaタイプ、48はGaタイプに属し、いずれも口縁部がやや外反することから14世紀まで下る可能性がある[伊野近富1995]。莊厳津寺境内遺跡の出土資料と比較しても同様のことがいえる[大阪市文化財協会2004]。48の外面はナデを施した後、一部ヘラミガキをしている。49~54も、器形や調整技法の類似する点が多いことから、13世紀~14世紀のものであると考えられる。55・56は和泉型の瓦器椀である。両者は、ヘラミガキを密に施すものの貼り付け高台の縮小化、断面三角形化が進んでいる。55はII-1期に属するが、56はII-2~3期まで降ると考えられる。57・58は上面精査中に出土した。輸入白磁の碗である。57は口縁部を外へ折り返すが端部は薄くならない。白磁碗V類に属するものと考えられる。58は、18と同様に内底付近に段ができ細い沈線を造らすが、18よりも外面がやや丸く立ち上がる形状から、18よりも時期がやや降るものと考えられる。よって40と同様に白磁碗V類に属すると考えられ、12世紀中頃~後半の年代が与えられる。以上のように、第2層層内および上面精査中には13~14世紀のものを主体として、12世紀中頃以降~14世紀の遺物が出土した。

第1層からは以下の遺物が出土した(図17)。81は肥前陶器の碗、77は肥前陶器の皿である。両者は内外面ともに灰オリーブ色の釉を施し、高台は露胎である。77は見込みと高台に砂目痕が残る。両者は徳川期でも初頭から17世紀中頃までの年代が与えられるが、77は高台の高さや形状などから17世紀初頭のものであろう[盛峰雄2000]。78は瀬戸美濃焼の灰釉折縁皿である。豊臣後期のものである。79は輸入白磁の碗もしくは皿である。80は灰釉陶器である。口縁は外反せずやや肥厚ぎみで、施釉方法はツケガケである。H72窯式(10世紀後半~11世紀初頭)と考えられるが[山下峰司1995]、口縁部のみの残存のため詳細は不明である。このように、第1層層内出土遺物は徳川期の中で初め頃の年代が考えられる。

3)まとめ

今回の調査では、11世紀後半から19世紀までの遺物、遺構を確認した。主な成果として、2時代の

特徴的な遺構を検出したことが挙げられる。

1. 11世紀後半～12世紀を中心に、調査区北側の落込み(SX301)で土師器皿を一括投棄していた。北西のRJ02-5次調査では15世紀までそのような行為があったようである。また、本調査地では13世紀に落込みの一部を整地して、建物を建てていることが分かった。
2. 焰烙・土師器皿・灯明皿・灯明受皿を一括投棄したSK001が見つかった(18世紀中頃～19世紀)。灯明皿がまとまって出土したこと、焰烙が合わせ口になっていたことは、何らかの儀礼の痕跡であることも示唆するが、その可能性は低く、一括投棄されたものと推定される。

註)

- (1) 本報告では「埋納」の可能性は除く。なぜなら、土器埋納遺構の定義についてまとめた櫻井の研究[櫻井久之 1993]を参考にすると、①完形またはそれに近い土器がある、②土器に意図的な配置が認められる、③外部から遮断される(人の手に触れられない状態となる)。うち、①は当てはまるが、②については、「土師器皿が集中していた」という点だけで当てはめることはできない。また、③については、SX301が長い間開口していたという見解によって当てはまらない。
- (2) 近隣では大阪城跡の発掘調査(国立病院敷地内(NW93-4・12次)や大阪市立中央体育館地域の発掘調査)で見られる[大阪市文化財協会2000・1992]。NW93-4・12次調査では、徳川期の整地層の上面で50基の墓を検出した。このうち焰烙が火葬骨容器として使用されていたのは7基で、未使用の焰烙ばかりで中には枚方塗のものが含まれていた。そして、いずれも他の墓とは違って副葬品を伴っていない。中央体育館での調査では、徳川期の埴跡から9基の胎衣埋納遺構が見つかり、うち2基が焰烙を合わせ口にしたものであった。上下それぞれの焰烙の底部外面に墨で「十二文」と書かれたものがあり、胎衣に添える品として「錢12文」があることから、錢の代わりに墨書きされたものと考えられている[大阪市文化財協会1992]。NW93-4・12次調査と同じく、焰烙は未使用品で、枚方塗のものもあった。

主な引用・参考文献

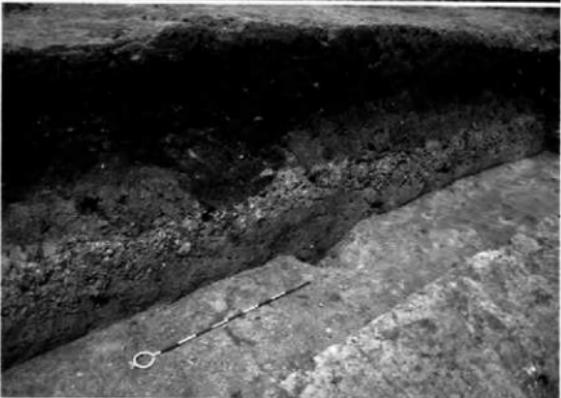
- 大阪市文化財協会1992、「宮殿西方地域の調査 NW93-4・12次およびその周辺の調査」：『難波宮址の研究』第九、pp.240-245、pp.272-273
- 2000、「宮殿西方地域の調査 NW93-4・12次およびその周辺の調査」：『難波宮址の研究』第十二、pp.95-118
- 2004、「大阪市住吉区莊嚴寺境内遺跡発掘調査報告」、pp.15-32
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998、「大阪平福田通記秘書専門学校による建設工事に伴う俗人町遺跡発掘調査(RJ96-2)略報」：『平成8年大阪市内明治文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 2003、「宗教法人一心寺による建設工事に伴う俗人町遺跡発掘調査(RJ02-5)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 四天王寺文化財管理室1986、「四天王寺古瓦聚成」
- 瀬戸市史編纂委員会1989、「瀬戸市史 陶磁史編 四」

- 西近畿文化財調査研究所2006、「伶人町遺跡発掘調査概要報告書」
- 伊野近富1995、「土師器Ⅲ」：『概説中世の土器・陶磁器』、中世土器研究会、pp.225-244
- 森島康雄1995、「瓦器椀」：『概説中世の土器・陶磁器』、中世土器研究会、pp.315-337
- 山下峰司1995、「灰釉陶器・山茶碗」：『概説中世の土器・陶磁器』、中世土器研究会、pp.279-286
- 山下信夫1995、「中世前期の貿易陶磁器」：『概説中世の土器・陶磁器』、中世土器研究会、pp.470-484
- 上田秀夫1990、「14~16世紀の青磁碗の分類」：『中近世土器の基礎研究』VI、日本中世土器研究会、pp.55-70
- 森田勉1990、「14~16世紀の白磁の型式分類と編年」：『中近世土器の基礎研究』VI、日本中世土器研究会、pp.47-54
- 森本朝子1990、「輸入陶磁－第三期の推移を中心に－」：『中近世土器の基礎研究』VI、日本中世土器研究会、pp.272-281
- 木下忠1981、「えなおさむる所」：『堀委－古代の出産習俗』考古学選書18、pp.115-126
- 櫻井久之1993、「長原遺跡の土器埋納遺構－飛鳥～平安時代－」：『大阪市平野区長原・瓜破遺跡発掘調査報告書』VI、大阪市文化財協会
- 佐藤隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」：『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告書』V、大阪市文化財協会、pp.102-118
- 織伸一郎1989、「堺環濠都市遺跡発掘調査報告書SKT202地点－堺市車之町西1丁6番－」、堺市教育委員会
- 積山洋1999、「大阪の土師質土器－主要器種を中心に－」：『関西近世考古学研究』VII、関西近世考古学研究会、pp.41-53
- 中野高久1999、「近世遺跡の胎衣窓納遺構－検出状況にみる土地利用の復元－」：『関西近世考古学研究』VIII、関西近世考古学研究会、pp.109-118
- 盛峰雄2000、「碗・皿」：『九州陶磁の編年』、九州近世陶磁学会、pp.10-33
- 横田賢次郎・森田勉1978、「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心にして－」：『九州歴史資料館研究論集』、pp.1-10
- 渡邊晴香2006、「西日本出土の京焼」：『京焼の成立と展開－押小路、栗田口、御室－研究集会資料集』、関西陶磁研究会、pp.49-68

調査区全景
(第4層上面、南から)



西壁地層断面
(南東から)



註② 地層断面
(第4層上面、南東から)



SP303 磚石
(第4層上面、東から)



SE101 断面
(第2層上面、西から)



SK001 遺物出土状況
(第1層上面、南から)



浪速区元町一丁目における建設工事に伴う
浪速元町遺跡発掘調査(NK12-1)報告書

調査個所 大阪市浪速区元町1丁目14-8
調査面積 90m²
調査期間 平成24年6月11日～6月22日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、京嶋覺

1) 調査の経過

調査地は中世の「難波荘」があったとされる地域に位置している。「難波荘」は1154(仁平4)年に阿闍梨教智により京都の成勝寺に寄進された荘園として初めて登場する。その後、1337(延元2)年、後醍醐天皇によって渡辺照に勳功の賞としてこの地の地頭職が与えられ、渡辺一族が当地を支配したとされる[大阪市1988]。

調査地の周辺ではこれまで3箇所で発掘調査が行われている(図1)。西50mではNK01-1次調査が行われ、現地表下約3m以下で12~13世紀の遺物が出土する海や河川の影響を受けて形成された地層が確認されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003]。また、東南60mの地点のNK96-1次調査でも12~14世紀の柱穴・溝や土壙、17~18世紀の土壙・落込みなどが検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998]。

当地において大阪市教育委員会が行った事前の試掘調査では、現地表下1.0~1.7mの間に中世の遺物を含む地層が確認されたため、東西5m、南北18mの調査区を設定し、発掘調査を行うことになった。

6月11日から重機により現地表下1.0mまで掘削し、それ以下を、順次人力で掘り下げていき、遺構検出および掘削、記録作業を行った。22日に最終的にすべての掘下げと記録作業を終え、機材の撤収作業を行って現場作業を完了した。

以下にその結果を報告する。なお、基準点測量はmagellan社製ProMark 3を使用したスタティック測量により、図中の方位は座標北を基準にする。水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、図中ではTPと省略した。



図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

2) 調査の結果

1) 層序(図3・4・7)

調査地の現地表はTP+2.0mで、ほぼ平坦な地形をなしている。

第1層：近代以降の整地層および擾乱である。

第2層：炭粒を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)細礫混り細粒砂質シルトの整地層で、層厚は最大で40cmである。

本層からは17世紀後半の肥前陶器が出土する。

第3層：灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルトの整地層で、黄灰色シルトの偽礫を含む。北部で検出された竪遺構は本層上面から構築されている。

本層からは土師器小皿・鉢、瓦器椀、瓦質土器壺、羽釜、備前焼擂鉢、肥前陶器碗、中國青磁碗、凹面に布目のある丸瓦など、いずれも細片であるが豊臣期以前の遺物が出土する。したがって、本層はNK96-1次調査の上面で17世紀前半から後半の遺構が検出された第3層に相当すると思われる。

第4層：にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒一粗粒砂質シルトの整地層である。上面で小型の礫石や土壌SK10~12・25が検出された。

土師器皿、瓦器椀、瓦質土器鉢、羽釜、壺のほか、瓦質土器三足釜のミニチュア8、土師質のイイダコ壺9など室町時代までの遺物が出



図4 東豊山町整地層断面図



図3 地層と遺構の関係図

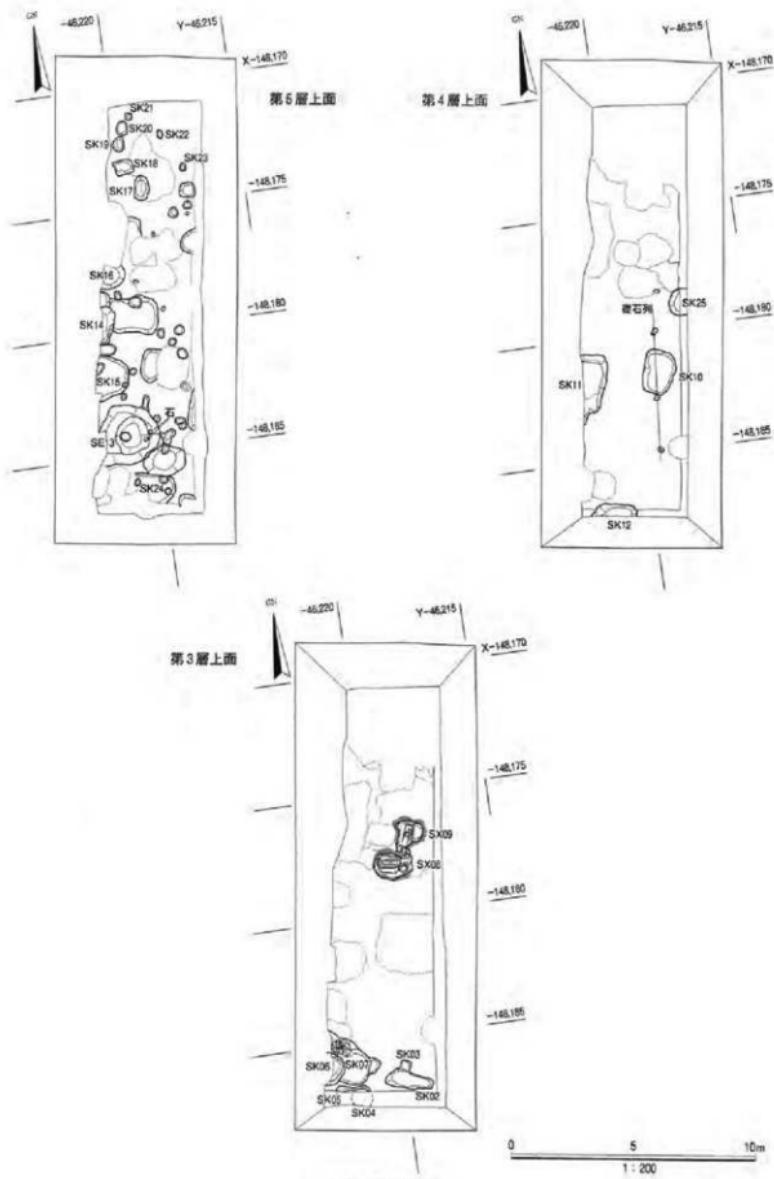


图 5 造構平面图

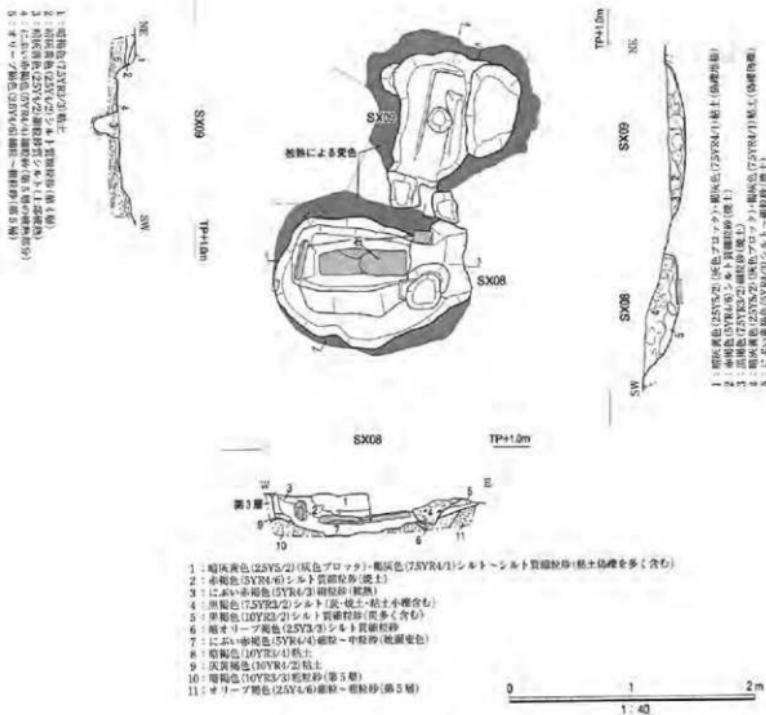


図6 SX08・09遺構平面・断面図

土している。

第5層：にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒～粗粒砂の水成層である。上面で井戸や多数の土壤が検出された。

ii) 遺構と遺物(図5～7)

a. 鎌倉時代(図5左上)

第5層の上面で井戸SE13ほかSK14～24など多数の土壤を検出した。土壤は第5層上面の自然の疊みと思われるものが含まれる。

SE13は調査区南部で検出された掘形が直径2.5mの井戸で、深さは1.3mで最下部に直径0.7mの曲物が2段に重ねられていた。曲物内の井戸底には粒径1～2cmの玉砂利が敷かれていた。東側の掘形上面付近に踏み石と見られる2個の石や完形に近い瓦器碗10～12が出土している。地盤が砂層であるため、歓弱かつ溝水が激しく十分な記録を取ることができなかった。

出土遺物には土師器皿3～5、瓦器碗10～12・皿6、小型管状土錐のほか、古墳時代末の須恵器杯

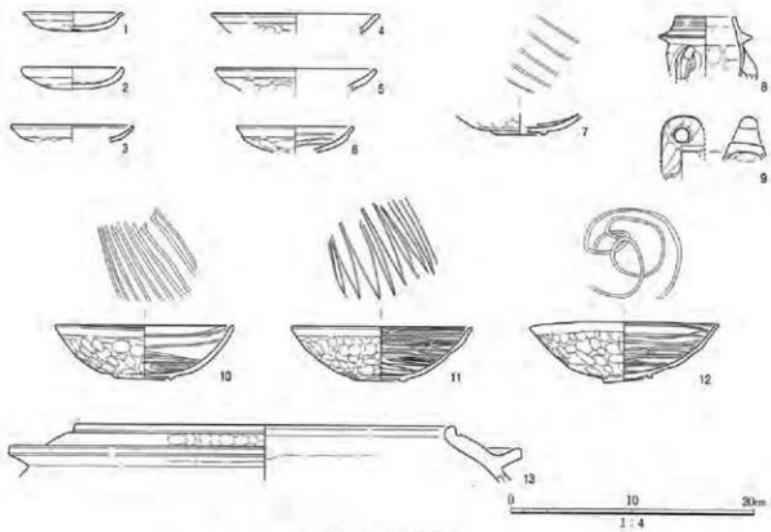


図7 出土遺物実測図

SE13(3~5・10~12)、SK16(1・2・7・13)、第4層(8・9)

片などがある。瓦器碗はいずれも和泉型で内底面に輪状ないし平行暗文を施す。12世紀末～13世紀前半に位置づけられる。

土壤からの出土遺物ではSK16から土師器皿1・2・羽釜13、瓦器碗7があり、SE13とはほぼ同時期である。

NK96-1次調査では中世層第4・5層の下面で12～14世紀の遺構が検出されている。遺構面の高さは約TP+0.5～0.8mであり、今回の調査地の第5層上面に近いため、上記の遺構はNK96-1次調査の中世遺構と一連のものと考えられる。

b. 中世末～鎌倉期(図5右上)

第4層上面では南北に小型の礎石が3個並んで検出された。間隔は約2.5mで、正南北より北で東にやや振る方位をとっている。前述の第4層の出土遺物から礎石建物は中世末～鎌倉期と推定される。

SK10～12・25は長軸1.0～2.2m、深さ0.2～0.5mの土壤で、SK10・11から瓦器碗・土師器皿の細片が出土している。

c. 徳川初期～17世紀後半(図5下)

第3層上面で土壤SK02～07、竈SX08・09を検出した。

SX08は東に焚口がある竈で、東西1.6m、南北1.0mの掘形内に0.7m×0.2mの板石を敷き、奥壁にも板石を立てていた。焚口の北側に角石が立てられており、南側には石材の抜き穴が残る。SX09はSX08の北側の竈で南に焚口がある。南北1.3m、東西1.0mで、燃焼部中央にSX08の敷き石と同じ大

きさで床面の削り出しがあり、焚口両側に角石の抜き穴が検出された。このことから、最初にSX09が構築され、その石材を用いて隣接してSX08が焚口の方向を変えて造り替えられたと推定される。遺物は土器器小皿細片が出土したのみである。

SX02～07は調査区南部に分布する土壤群である。出土遺物は少ないが、土器器皿、備前焼壺、肥前陶器皿・碗、肥前磁器染付皿・碗、瀬戸美濃焼志野碗などの細片が見られる。

これらの遺構は第3層および第2層の遺物も考慮すれば、徳川初期～17世紀後半と考えられる。

3)まとめ

今回の調査では、難波荘の初見時期である12世紀代に近い時期の井戸や土塙などが検出され、NK96-1次調査地の第4・5層下面遺構に統く難波荘の一角とみられる。絵図や明治時代の地図によれば、調査地は近世難波村の西端に位置しており、NK01-1次調査地が集落からはずれていることから、12世紀以降、当該地の東側に難波荘の中心があると推定される。難波荘の成立と渡辺一族による統治を経て発展した当該地域の歴史を解明する緒をなす成果があったといえよう。

引用・参考文献

- 大阪市1988、「新修大阪市史」第2巻
大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998、「浪速元町計画による建設工事に伴う発掘調査(NK96-1)」：「平成8年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.91-100
2003、「浪速元町遺跡B地点発掘調査(NK01-1)報告書」：「平成13年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.53-57

東壁地層断面



第5層上面全景
(南から)



SE13(東から)



SE13曲物
検出状況



第4層上面全景
(南から)



SX08・09
(南から)



浪速区桜川二丁目における建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(SL12-1)報告書

調査個所　浪速区桜川2丁目7・3・4・5・12
調査面積　32m²
調査期間　平成24年4月17日～4月20日
調査主体　公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、趙哲済

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は千日前筋より南にあって、なにわ筋に面している。東方には難波1丁目所在遺跡、浪速元町遺跡がある。両遺跡は長柄砂州の上で営まれた集落を中心とする平安時代～江戸時代の複合遺跡である。調査地の近隣での調査事例はなかったが、平成23年6月10日に大阪市教育委員会により試掘調査が実施されたところ、敷地中央付近の地表下1.80～1.95mの深さに古墳時代の土師器・須恵器の包含層が見つかった。そこで、遺構・遺物の遺存状況や地層の堆積状況の知見を得ることを目的として、本調査を実施することになった。

調査は本体工事業者による土留め・杭工事と、その後の重機掘削により1.8mまで掘り下げられた状態から着手した。調査区は切梁との関係で32nfで実施した。当初、南北4m・東西8mの設定であったが、調査効率を優先して、面積を変えず、形状を南北6.4m・東西5mに変更して実施した。調査では、地表下2.3mまでの近代～中世の3造構面を検出した。検出状況の写真撮影、造構の掘下げ、掘下げ後の遺構写真撮影、調査区の平面図・断面図の作成を順次行った。調査区面積の6割程度が現代に擾乱されていたため、予定より早く4月20日に現場調査を終了した。

調査地の基準点はmagellan社製ProMark 3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP±○mと記した。



図1 調査地位図



図2 調査区位置図

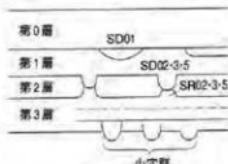
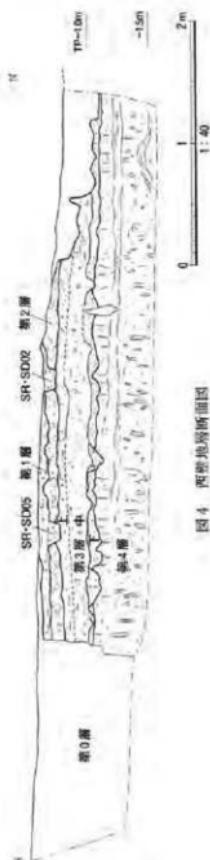


図3 地形と遺構の関係図



2) 調査の結果

本調査地の標高はTP+1.0m前後であり、周辺道路がTP+0.5~0.9mであるのに対して0.1~0.5m高く盛土されているが、試掘調査時よりは若干低いようである。

i) 層序

第0層は重機により除去された黒褐色を主たる土色とする現代盛土・旧建物基礎・搅乱埋土などを一括して呼ぶ。TP+1.0~0.6mに厚く分布した。

第1層は炭片を含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒中疊混りシルト質粗粒~極細粒砂からなる畠作土層である。19世紀代以前の土師器、陶磁器などの小片が出土した。上面でSD01、下面でSD02・03・05を検出した。

第2層は灰オリーブ褐色(5Y4/2)で、第4層に由来する中粒~細粒砂主体の細疊~極細粒砂とシルト質砂偽疊からなる客土層である。層厚は約10cmであった。18世紀以前の土師器・瓦器・陶磁器などの小片が出土した。

第3層はオリーブから褐色を主な土色とする畠作土層であり、上部・中部・下部の3層に区分できる。全層厚は40cm前後である。

第3層上部は灰オリーブ色細粒中疊~細疊混りシルト質砂の畠作土層で、砂は中粒砂主体の粗粒~細粒砂である。層厚は10cm強であったが、下限は不明瞭である。17世紀末以前の土師器・須恵器・瓦器・陶磁器などの小片が出土した。

第3層中部はオリーブ褐色(2.5Y4/3)中疊混りシルト質粗粒~細粒砂からなる畠作土層である。下限は比較的明瞭で、層厚は10~20cmであった。中世の土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器などの小片が出土した。瓦器は13~14世紀のものである。また、中国産の青磁・白磁・東濃系と思われる山茶碗も出土している。

第3層下部は黄褐色(2.5Y5/3)中疊~細疊混りシルト質細粒砂からなる畠作土層である。層厚は10cm以下であった。中世の土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器などの小片が出土した。その中の東播系の須恵器は12世紀末~13世紀初頭のものである。

第4層は黄褐色(2.5Y5/4)シルト質粗粒砂層である。上限から15cm前後に下に層厚5~8cmの中粒砂薄層を挟んでいる。上半部には上限から下に細い根痕が多く伸びていた。また、下半部には直径2~4cmの巣穴化石が多数認められた。調査地ではTP-1.6m付近までしか確認

していないが、本体工事側の地層断面でも本層は確認でき、TP-2m付近の砂層には黒色の植物遺体碎片が含まれている。

ii) 造構と遺物

a. 古代の砂州の形成について

現場のボーリング資料では、第4層に当る砂層の層厚は4.75mあり、TP-5.5m以深は海成砂質泥層である。この海成泥層は縄文時代前期の縄文海進最高潮位期の下部外浜堆積層と考えられる。したがって、第4層は後に長柄砂州となる前浜～上部外浜の堆積層とみられ、その堆積は縄文海進後の海退が始まる縄文時代中期以降と推定される。また、試掘調査では古墳時代遺物が見つかったというが、第3層の出土遺物に古墳時代や飛鳥・奈良時代の遺物が含まれないことからみて、当該地が離水するのは古代後半以降の可能性が高い。

b. 中世の造構(図5)

第3層下面で一面に橢円～亜円形の小穴を検出した。断面で確認したところ、これらは第3層下部上面・内・下面の小穴であった。記録したものは59個あり、最大は長径32cm・短径16cm、最小は長径8cm・短径7cm、平均は14cm・11cmであり、深さは1～8cmであった。穴の形状から性格は特定できないが、耕起痕や作物の根の掘起し痕などの耕作に係わるものであろうと思われる。

SK06も第3層下面の浅い土壤である。調査区東部を東に緩傾斜するが、全容は不明である。埋土は第3層下部で13世紀末ごろの瓦器碗の口縁部1(図6)が出土した。

細分層準は不明であるが、第3層内から北宋錢が出土している。元祐通宝2(図6)は1086年初鑄であり、日本では12世紀後半以降に流通している。

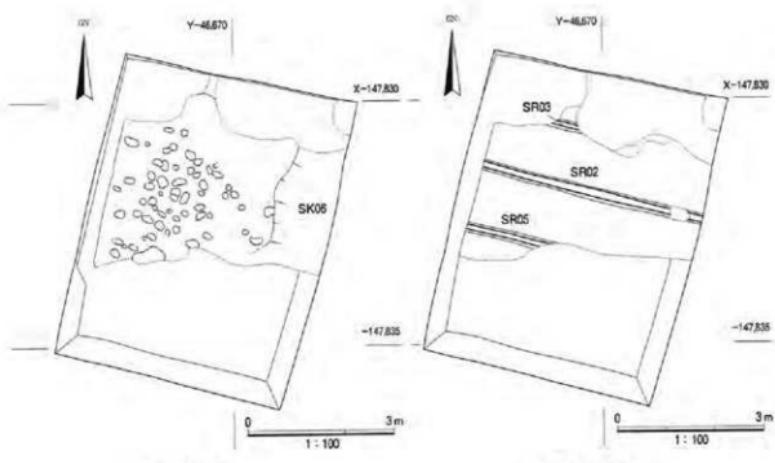
c. 近世の造構(図5)

SR02・03・05は第3層上面で検出した畝状に東西に延びる3筋の高まりである。3筋の各間隔は約1.2mである。3筋とも狭く低く、上端で0.15m前後、下端で0.25m前後、高さ0.04～0.08mである。性格は定かでないが、第3層上部の作土を転地客土する際の掘分けの目印として残された高まりではないかと想像される。しかし、後述するように、第1層下面のSD02・03・05の位置がほぼ完全に一致しており、別な性格の造構であったとも考えられる。また、層厚10cm前後の第2層客土後でも位置が確認できる程度に高かったと推定される。

第1層の下面でSD02・03・05を検出した。上述のとおり、第3層上面のSR02・03・05と位置が一致しており、これらの直上に計画的に掘られたようみえる。しかし、視点を変えれば、畝状高まり群と溝群は一体のもので、図7に示すように、根菜類のような作物の作付から収穫までの過程で作られたのではないかとも考えられる。ただし、図7のアイデアには、二段階の嵩上げの意図や作付け回数の問題などがあり、今後、畠作物の情報を集める必要がある。

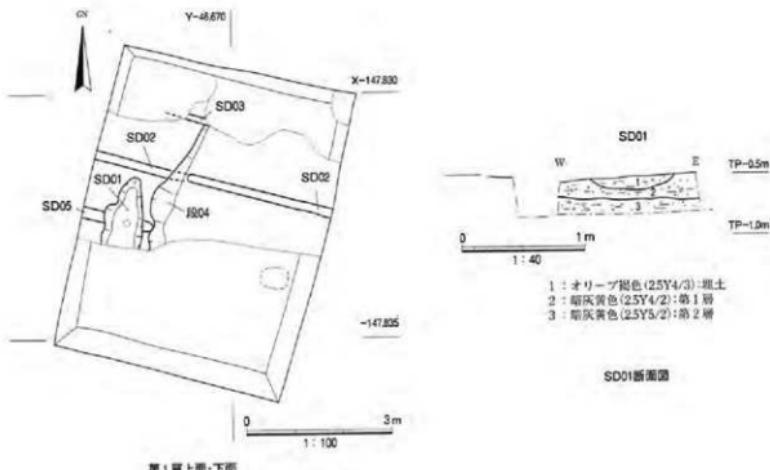
SD01は第1層上面で検出した溝状の凹みである。幅0.69m、深さ0.12mで断面形は浅い鍋底形で丸く、調査区内に北端があり南へ延びている。埋土はオリーブ褐色細礫混り粗粒砂質シルトの客土である。この客土は第1層上面を広く埋め立てている。

段04も第1層上面で検出した。東に落ちる段であり、ほぼ南北に延びる。比高は最大で0.2mであった。



第3層下部下面

第3層上部上面



第1層上面・下面

SD01断面図

図5 遺構平面・断面図

耕地区画に係わるものであろう。

3)まとめ

当該地は集落遺跡といわれる難波1丁目所在遺跡や難波元町遺跡の西側に続く砂州上で営まれた遺跡であり、本調査により次の諸点が明らかとなった。

(1)当該地の砂州は、古代後半に離水したと考えられる。

(2)当該地は中世～近世を通して耕地であり、畠が耕されていた。

(3)畠の耕作に係わって、畔状高まりと溝が重なる遺構が見つかった。類例はないが、図7に形成過程の復元を試みた。

当該地東側にある難波1丁目所在遺跡や難波元町遺跡などの集落遺跡との関係を明らかにすることが、今後の課題として浮かび上がってくる。



図6 出土遺物実測図・拓本

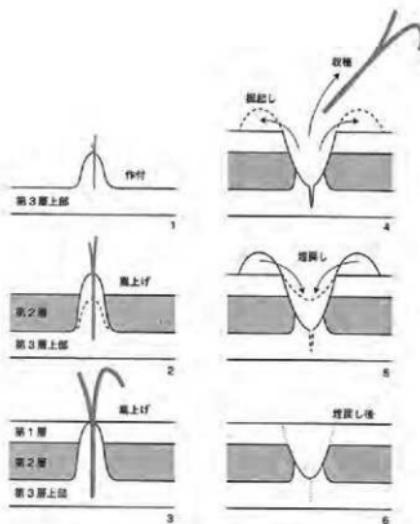


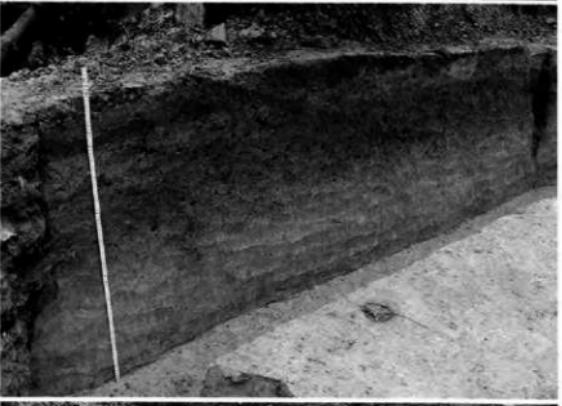
図7 畦状高まり群と溝群の形成に関わるひとつのアイデア

1. 畦状高まりの形成と作付
2. 作物の成長に伴う嵩上げ(第2層の客土)
3. 同上(第1層の客土)
4. 作物周囲の掘下げと掘上げ土の仮置き、及び取種
5. 仮置き土の埋廻し
6. 埋廻し後、同質の作土であるため、第1層の客土と埋廻し土との識別が困難

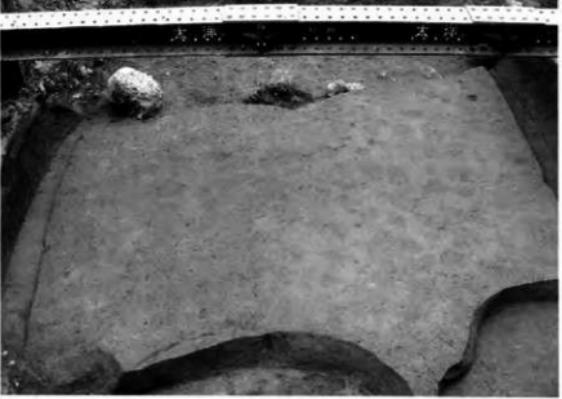
作業風景
(南西から)



西壁地層断面
(南東から)



第3層下面
小穴群
(北から)



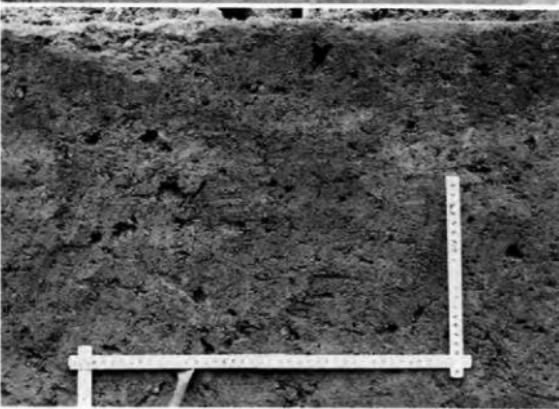
第3層上面
(北東から)



第1層上面・下面
(北から)



SR・SD05断面
(東から)



東淀川区大隅二丁目における建設工事に伴う
三宝寺跡伝承地発掘調査(SP12-1)報告書

調査個所 大阪市東淀川区大隅2丁目15-1・15-2
調査面積 130m²
調査期間 平成24年9月19日～10月5日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、村元健一

1) 試掘調査の経過

調査地は、淀川低地と大阪海岸低地に挟まれた吹田砂堆上に立地し、東と南を淀川、北を神崎川に囲まれた三宝寺跡伝承地のほぼ中央に位置する。三宝寺は現存せず、わずかに小字名などにその名を残すだけであるが、文治年間(1185~1189)に大日坊熊忍により開基された堂塔を備えた大寺院であり、周辺の「大道」という地名も同寺の大道が縱横に通じていたことによるものとされる[井上正雄1922]。また崇禪寺文書によると、周辺には属坊として妙觀院、弥勒院など25寺があり、その寺域の広大な様子をうかがうことができる。その後、室町時代大永~享禄年間(1521~1531)頃に寺院は戦火により失われたと推測され[西岡秀爾2007]、現在では寺域も明らかでない。

周辺では大阪経済大学のキャンパス内を中心にこれまで9次の調査が行われた(図1)。特にSP10-1次調査では、中世の井戸の他に、焼けた中世の瓦がまとまって見つかっていることから、伽藍に近いことが推定される[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012]。この成果をうけ、周辺の古地形の復元と土地利用の違いが明らかにされるなど[大庭重信2012]、寺院に係わる資料は着実に増えている。

今回の調査は大阪経済大学のキャンパス内であり、先のSP10-1次調査地の東側に位置する(図2)。7月25日の大阪市教育委員会による試掘の結果、現地表下0.6~0.8mに瓦を含む暗褐色シルト質極細粒~細粒砂が見つかったことから調査を行うことになった。試掘結果に基づき、敷地西南隅に97mの1区、その北東35mに33mの2区を設定した。事前に事業者が現代盛土を除去したのち、9月19日から調査を開始した。遺構の検出を行うとともに、断面の記録をとり、10月5日には埋戻しを含むすべての作業を終了し、調査を完了した。



図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

なお、本報告書の平面図のうち、図1・2は座標北、それ以外は磁北を基準とし、標高はTP.値(東京湾平均海面値)を用いTP+○mと表記した。

2) 試掘調査の結果

i) 層序(図3)

調査地周辺は北から南にゆるやかに下降する地形であるが、調査地は大阪経済大学構内に位置し、ほぼ平坦化されている。現代の盛土である層厚20~60cmの第0層以下は次のように分層した。

第1層：2区で確認した。層厚10cmの黄灰色の粗粒～極粗粒砂からなる現代の整地層である。

第2層：1区で確認した。層厚20cmの暗オリーブ褐色の細粒～粗粒砂からなる現代の作土層である。

第3層：2区で確認した。層厚25cmの黒褐色の細粒～中粒砂からなる近世末～近代の整地層であるが、後述するように中世の遺物を多量に含む。2層に細分することが可能である。

第4層：1区の西半と2区の北西部の一部で確認した黄褐色中粒砂からなる中世の古土壤である。2区では、本層上面で南北方向の溝SD301と土壤SK302を検出した。また、1区では本層内でSD401と小穴を検出した。

第5層：1・2区で確認した層厚100cm以上の黄褐色粗粒～極粗粒砂層であり、吹田砂堆を構成する砂層である。分級は良好だがラミナは明瞭でない。

ii) 遺構と遺物(図4～6)

a. 中世の遺構

SD401は1区で検出した幅1.5m、深さ0.3mの南北方向の溝である。埋土は褐色細粒～中粒砂であり、水流の痕跡はなく、区画を目的としたものと考えられる。時期を特定できる遺物は出土しなかったが、後述するように、周辺調査で見つかる中世の同様の溝と平行もしくは直交することから、同時期の遺構と考えられる。

溝のほか、小穴が6基見つかっている。直径は0.5～0.8mであり、柱痕は確認できなかった。遺物は出土しなかった。

b. 近世の遺構

SD301は2区で検出した幅5.5m、深さ0.9mの北東～南西方向の溝である。機能時の堆積層はシルトと細粒砂の互層であり、水流のあったことが確認できる。埋戻し時の地層からは多量の瓦が出土しており、中世に遡るものも見られた。出土した遺物から、18世紀後葉に掘削され、19世紀中葉には埋められたと考えられる。

出土した遺物には土師器壺格6と肥前磁器碗7・11・12・13・14、皿10、関西系磁器の碗蓋8、関西系陶器の碗15、行平鍋蓋17、瀬戸美濃焼磁器碗9・16がある。いずれも18世紀末～19世紀第2四半期のものである。このほか、周囲に珠文を配した三巴文軒丸瓦22・23、軒平瓦25・26・30、格子タタキメを有する平瓦33・34・37・38が出土した。平瓦はいずれも被熱しており、37・38には「〇」「十」の刻印がある。32は鬼瓦の一部と思われる。

SK302は2区の西側で検出した南北1.2mの不定形な土壤である。深さは0.3mである。

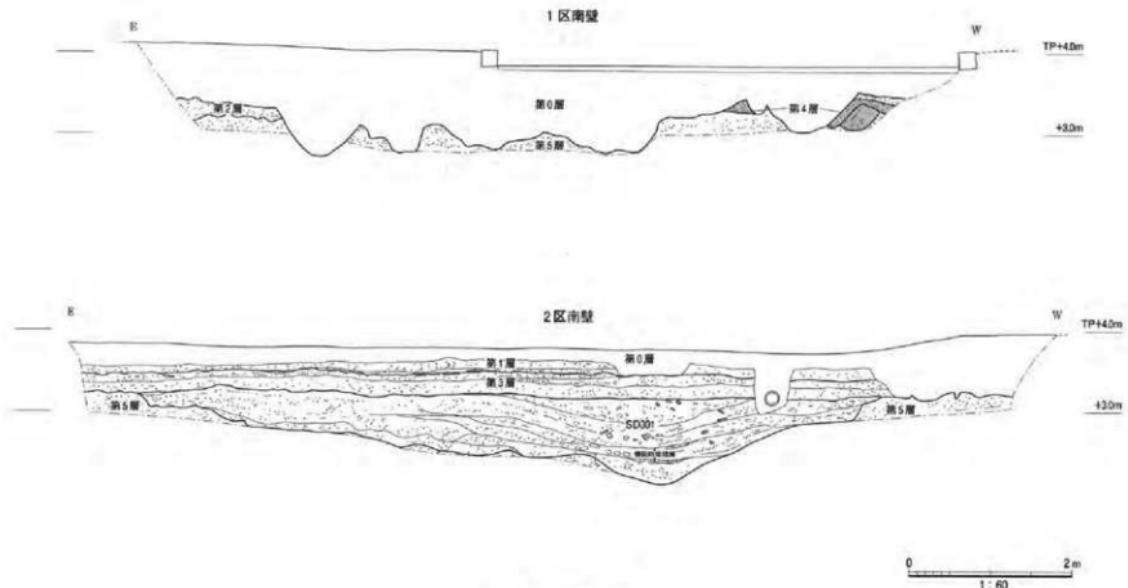


図3 地層断面図

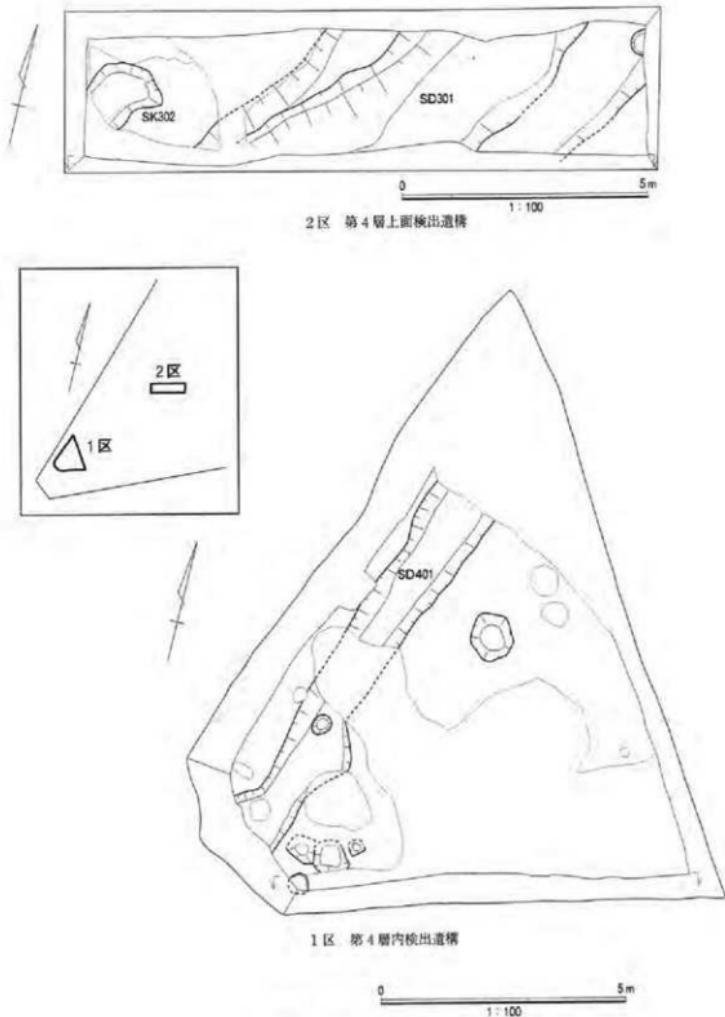


図4 1区・2区遺構平面図

c. 各層出土の遺物

第3層には中国産青磁碗1・2、瓦器柄3、瓦質土器、土師質の羽釜4、三足羽釜脚部5など15世紀を中心とする中世の遺物が多く含まれていた。同層からは、近世の遺物として立像の土人形18、瓦質火鉢の脚部19が出土している。また三巴文軒丸瓦20・21、唐草文軒平瓦24・27・28・29、軒平瓦

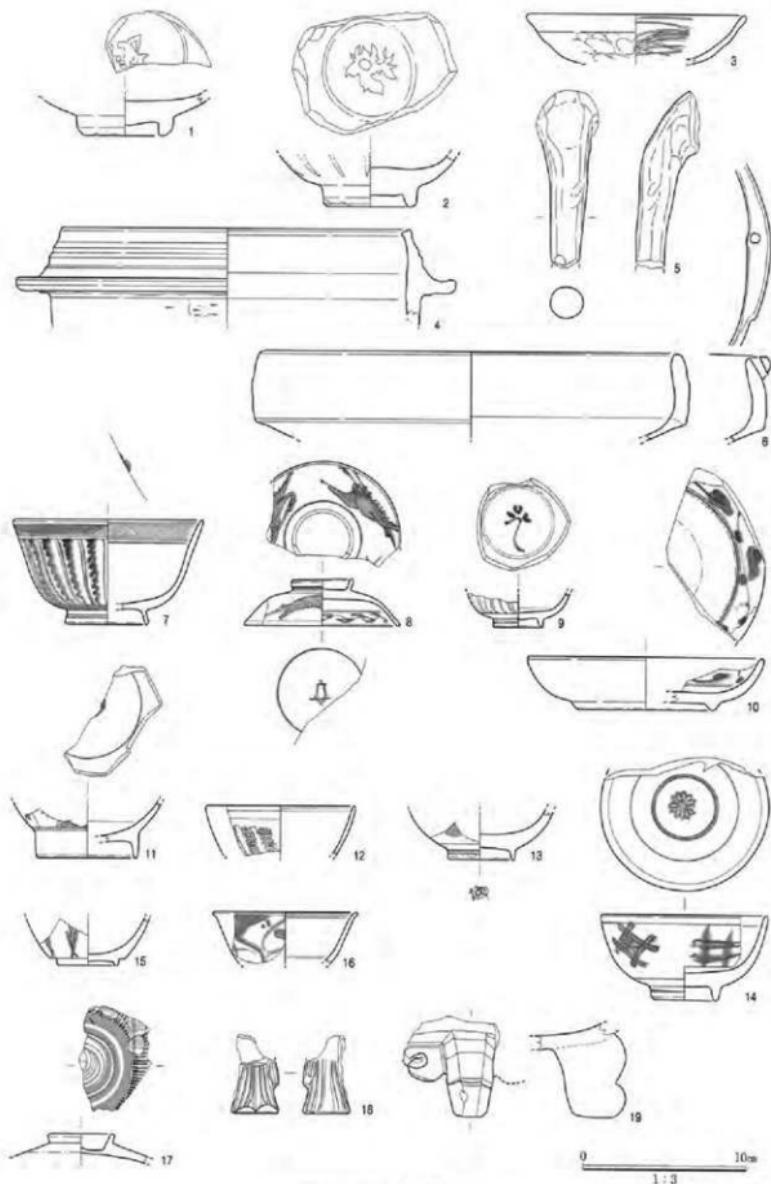


图5 出土遗物实测图(1)
第3层(1~5·18·19)、SD301(6~17)

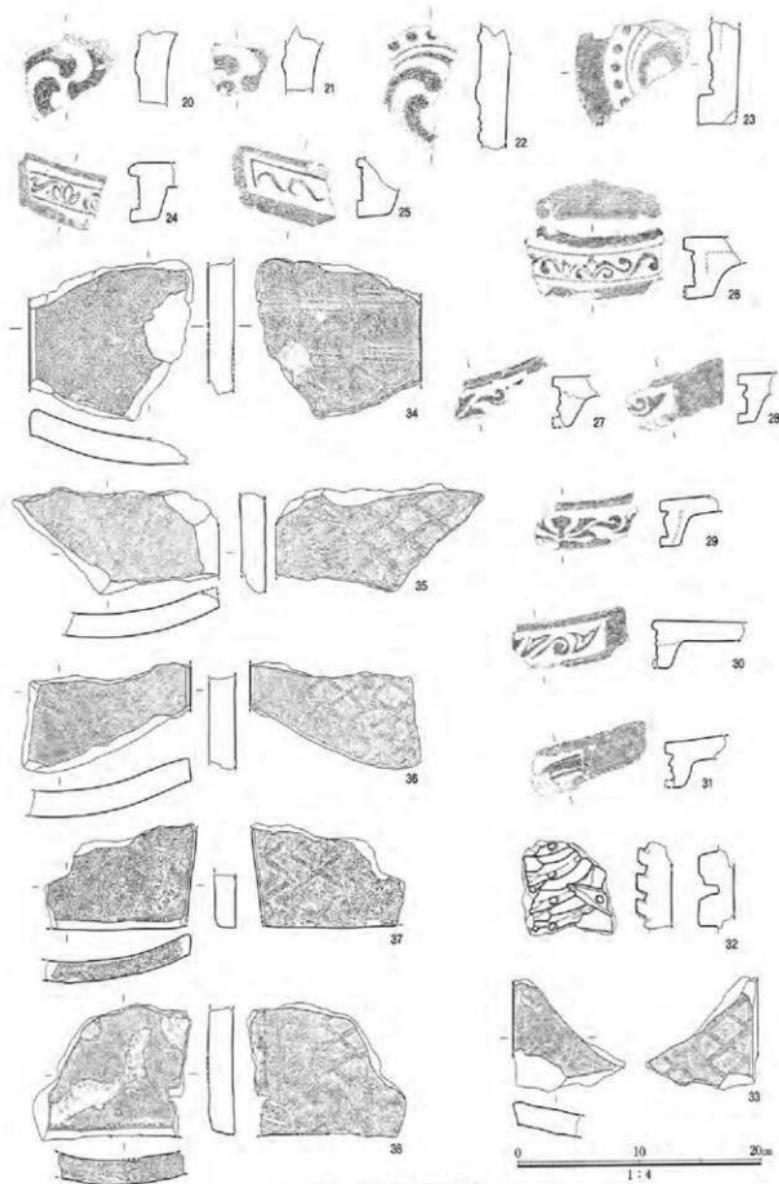


图6 出土遗物实测图(2)

第3层(20·21·24·27~29·31·35·36), SD301(22·23·25·26·30·32~34·37·38)

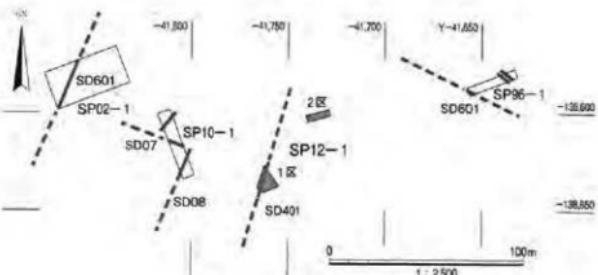


図7 調査区周辺の中世の溝

31が出土している。軒丸瓦20は須恵質の硬質な焼き上がりであり、21は被熱している。橋唐草文軒平瓦27~29は同一の文様のものであり、中心飾下部の萼の先端が二叉にわかれており、近世のものである。軒平瓦31は文様は不明だが、近世のものであろう。それ以外の軒平瓦および軒丸瓦は、中世のものである。ほかに、格子タタキメを持つ平瓦35・36が出土しており、同様のものがSP10-1次調査でも見つかっている〔大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012〕。いずれも被熱している。

iii) 遺構と遺物の検討

1区で検出したSD401の方位は隣接するSP96-1次調査のSD601〔大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998〕、SP02-1次調査のSD601〔大阪市文化財協会2003〕、SP10-1次調査のSD07・SD08〔大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012〕の中世の溝と平行もしくは直交しており(図7)、寺内の建物の方位と関連する可能性が指摘されている〔大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012〕。

また、2区のSD301やその直上の第3層からは多量の中世の瓦や土器が出土しているが、1区では中世の遺物がほとんど見つかっておらず、南北に設定された1・2区のうち、北側の2区が、より寺域の中枢に近いと考えることができ、SP10-1次調査と本調査地の2区から北西に寺域の中心があるのであろう。これは北西から南東に下降する旧地形上でTP+3m以上に寺域が想定されるという指摘〔大庭重信2012〕に沿ったものである。

3)まとめ

今回の調査では、1区で検出されたSD401の方位が、これまでの調査で見つかっている中世の溝と同じ方位であり、旧地形の傾斜に沿った地割が改めて確認された。また、2区では軒瓦や青磁などの中世の遺物がまとまって出土していることから、寺域の中心に近いことが想定された。

遺物では、中世の瓦の資料の増加を挙げることができる。新たに軒丸瓦が出土したほか、軒平瓦もこれまで未出の文様のものであり、三宝寺の研究に新たな資料を加えることができたといえる。

参考文献

井上正雄1922,『大阪府全志』

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998、「大阪経済大学による建設工事に伴う発掘調査(SP96-1)」:『平成8年

度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.3-9

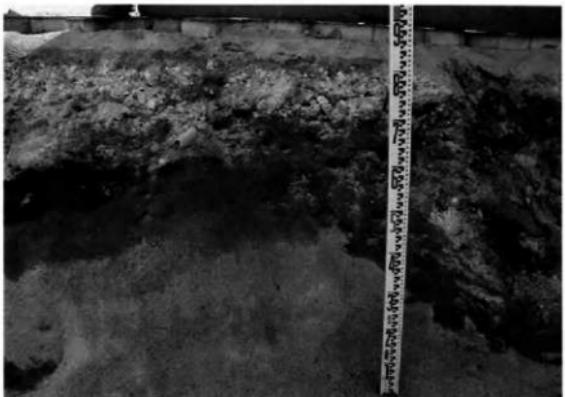
大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012、「東淀川区大隅二丁目における建設工事に伴う三宝寺跡伝承地発掘調査
〔SP10-1〕報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
〔2010〕』、pp.345-352

大阪市文化財協会2003、「三宝寺跡伝承地の調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告—2001・2002年度一』、pp.131
-136

大庭重信2012、「幻の中世寺院三宝寺に迫る」：『葬火』156号

西岡秀爾2007、「摂津中嶋三宝寺とその周辺」：『印度仏教学研究』第55巻 第2号

1区南壁地層断面
(北から)



1区SD401
(北から)



2区SD301
(南西から)



住吉区南住吉一丁目における建設工事に伴う
南住吉遺跡発掘調査(MN12-1)報告書

調査個所 大阪市住吉区南住吉1丁目96-2・96-7・96-8・
96-9・97-1・98-1・98-4
調査面積 280m²
調査期間 平成24年11月28日～12月14日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、村元健一

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は南住吉遺跡の東北部に位置し、南は長居公園通りに面している(図1)。北隣のMN85-37次調査地では飛鳥時代の建物群や帶金具が見つかっており、古代の豪族の居館ないし官衙と考えられている[大阪市文化財協会1998]。本調査地では大阪市教育委員会により10月22日に試掘が行われたところ、現地表下80~90cmに土師器や須恵器を含む遺構の埋土と思われる地層が確認されたことから、発掘調査を行うことになった。調査区は、敷地北側に東西30m、南北4mの調査区(第1区)とその西端に取りつく東西4m、南北10mの第2区を設定し、敷地南側には東西30m、南北4mの第3区を設定した(図2)。11月28日から重機を用いて現代耕作土を除去し、以下を人力で掘り下げ、遺構の検出を行うとともに、平面・断面図の記録を行った。12月10日には調査を終了し、14日には埋戻しを含むすべての作業を終了した。

なお、報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図と合成することにより得た世界測地系座標に基いて極北を基準にした。標高はTP値(東京湾平均海面値)を用いTP+○mと表記した。

2) 調査の結果

i) 層序(図3)

調査地の現地表はTP+4.5m前後で、ほぼ平坦である。現代の盛土である第0層以下は次のように分層した。

第1層：層厚20cmのオリーブ黒色のシルト質中粒砂からなる現代作土である。全区で確認した。



図1 調査地位図



図2 調査区位置図

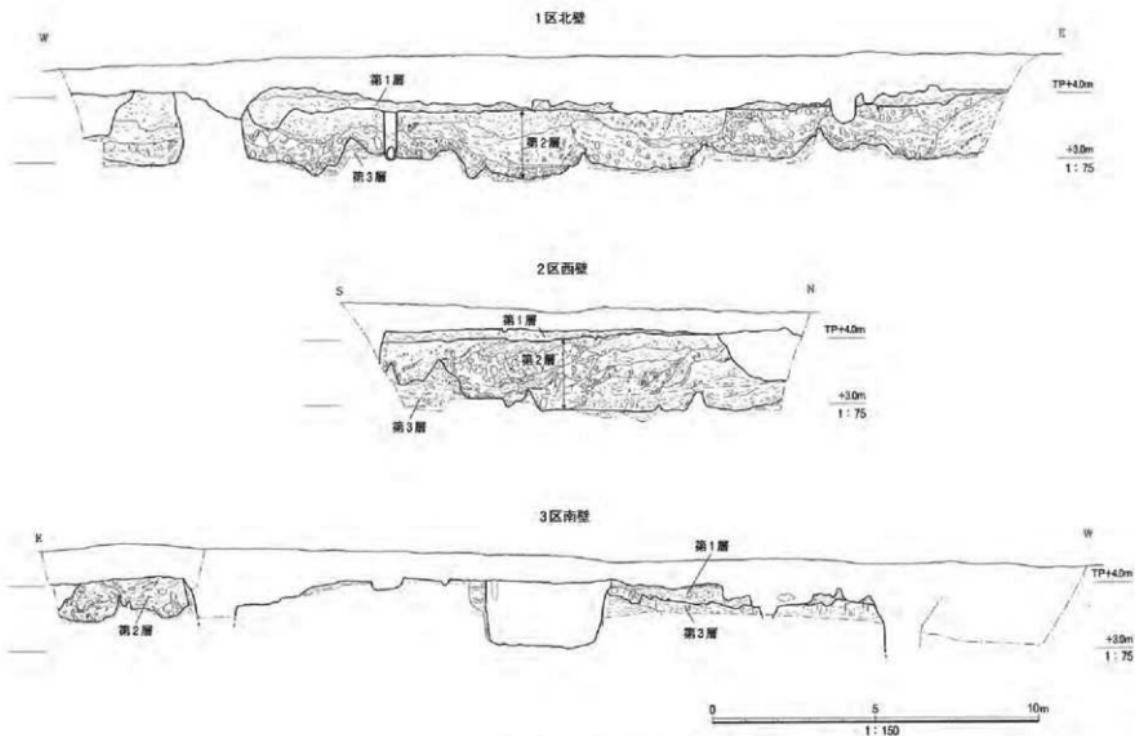


图3 1~3区地层断面图

第2層：第1・2区および第3区の東端で検出した土採り穴の埋土である。層厚は第1・2区で100cm、第3区では50cmであった。埋土は地山起源の明黄褐色の砂礫や粘土の偽礫のはか、褐色シルト質細粒砂の偽礫からなり、後者には土師器や須恵器の細片が含まれていた。これらの遺物は元来、調査区にあつた古代の包含層に起源すると考えられる。出土した遺物から、本層の年代は近世末である。

第3層：段丘構成層でにぶい黄褐色シルト～粘土質細粒で構成される。粘土からシルトの部分は大部分が第2層により削平されており、第3区でわずかにシルトの部分を認めることができた。

ii) 遺構と遺物(図3～5)

a. 近世の遺構

土採り穴は第2層を埋土とし、全調査区で検出した。特に、第1・2区は調査区の全域が土採り穴であつた。深さは第1・2区では1m程度、底部の標高はTP+3mとほぼ一定しており、粘土だけではなく、粘土質の細礫まで採掘している。第3区では東端で確認されたが、深さは50cmとやや浅い。

SK301は第3区の第3層上面で検出した東西3.2m、南北2m以上のやや不定形な土壠である。次に述べるSE302に切られていた。

SE302は第3区で検出した井戸で、SK301を切っている。直径1.0mの素掘りの井戸であり、第3層起源の暗灰黄色の細礫で埋め戻されている。検出面から-1.3m、TP+2.7mまで掘削したが、湧水が激しかため、それ以上の掘削は行わなかった。遺物は出土しなかった。

b. 遺構出土の遺物

1～4はいずれも第2区の土採り穴から出土したものである。1は瓦質土器の擂鉢の口縁部である。端部の断面は三角形で、下端部が明瞭であり、内面に擂目がある。直径は復元できなかった。15世紀のものであろう。2は須恵器杯Bの底部である。3・4

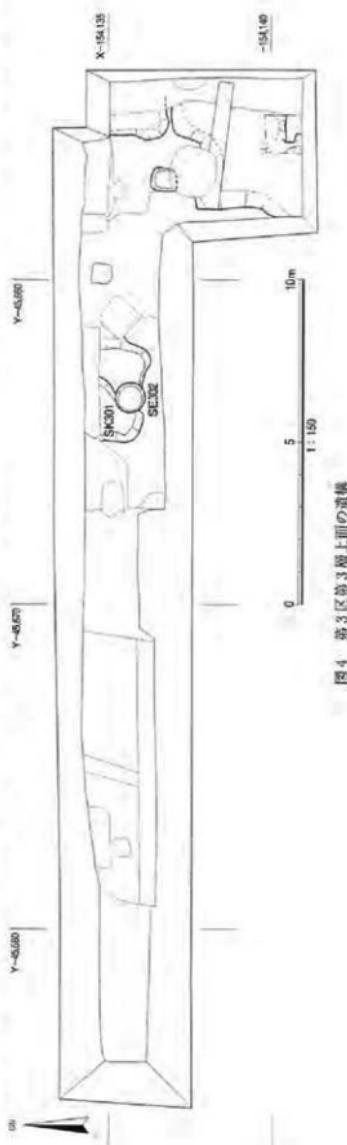


図4 第3区第3層上面の遺構

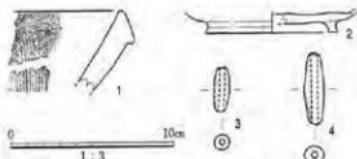


図5 近世の遺構出土遺物
土採り穴(1~4)

は管状土錐であり、胎土は精良である。中世のものである。いずれも付近の調査で出土しており、調査地にかつては古代・中世の遺構が存在したことを示すものである。

3)まとめ

今回の調査区は古代の建物群が見つかった

MN85-37次調査地に隣接するため、一連の建物群の検出が期待されたが、土採りによる擾乱のため、建物の検出には至らなかった。だが、土採り穴の埋土に古代の遺物が含まれていたことから、調査地にも元来は古代の遺構があったと想定される。一方で、調査地の南端で長居公園通りに近い第3区では段丘構成層である第3層がTP+3.6~4.0mで検出されたが、上面は後世に削られていたようであり、ここでも古代の遺構を検出することはできなかった。

調査地周辺は土採りによる削平を受けているが、第3区のように部分的に地山が削り残された箇所もあることから、古代の遺構の検出の可能性もあると思われる。

参考文献

大阪市文化財協会1998、『南住吉遺跡発掘調査報告』

第1区北壁地層断面
(南東から)



第2区西壁地層断面
(南東から)



SE302(北から)



東住吉区中野三丁目における建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(CN12-1)報告書

調査個所 大阪市東住吉区中野3丁目2-3
調査面積 144m²
調査期間 平成24年8月9日～8月29日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、市川創

1) 調査に至る経緯と経過

本調査地は大阪市東住吉区の東部にあって、大阪市を南北に延びる上町台地東側の沖積平野に位置する(図1)。調査地の西側には、近世には櫛の名所として著名であった今川が北流している。調査地西方の上町台地東斜面では、弥生時代および古代の重要な発掘調査成果が得られている桑津遺跡のほか[大阪市文化財協会1998ほか]、田辺4丁目所在遺跡では古墳時代後期の土壙を検出している[大阪市文化財協会1996]。また酒君塚古墳では、上部の盛土が近世のものであることを確認しているほか[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003]、その周辺の調査では弥生時代前期中～新段階の土壙・柱穴に加え、古墳時代後期の堅穴建物を検出している[大阪文化財研究所2012]。

当該地において建築工事が計画され、大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、古代～中世にかけてのものと思われる地層が発見されたため、これ以下の地層を対象に本調査が行われることとなった(図2)。調査は8月9日に着手し、後述する第4層までを重機を用いて掘削した。その後、第

5層以下の地層については人力によって掘削し、適宜記録作業を行いつつ、遺構・遺物の検出に注意しながら調査を進めた。なお、重機掘削の過程で調査区中央に旧建物の基礎が存在することが明らかとなつたが、撤去が不可能であったため、協議のうえ、この部分については調査を行わなかった。また、基準点はmagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。



図1 調査地位置図



図2 調査区配置図

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4、写真1~3)

調査地周辺はおおむね平坦で、標高はTP+3.8mほどである。今回の調査では、現地表下295cmまでの地層を8層に区分した。



図3 地層と遺構の関係図

第0層：現代盛土であり、層厚は最大で100cmである。

第1層：近～現代の作土層であり、にぶい黄褐色シルト質細粒砂からなる。調査区の南部に分布し、北部では第0層によつて削剥されていた。層厚は最大で28cmであった。

第2層：近世の作土層であり、オリーブ褐色シルト質細粒砂からなる。第1層と同様に調査区の南部に分布し、北部では第0層によつて削剥されていた。層厚は最大で26cmであった。肥前陶器のはか、遊離資料であるが須恵器が出土した。

第3層：古墳時代以降の作土層である。暗オリーブ灰色粘土質シルトからなり、上面には一部で中粒～粗粒砂が分布する。また、地層の上半にはマンガン・酸化鉄の結核を産する。層厚は最大で25cmであった。土師器・須恵器が出土しているが、時



写真1 第6a層のフォアセット・ラミナ(北から)

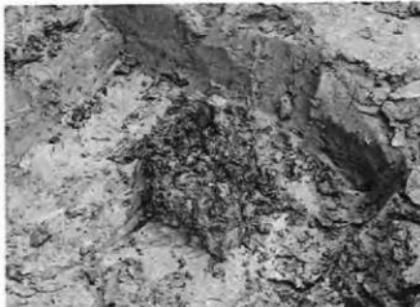
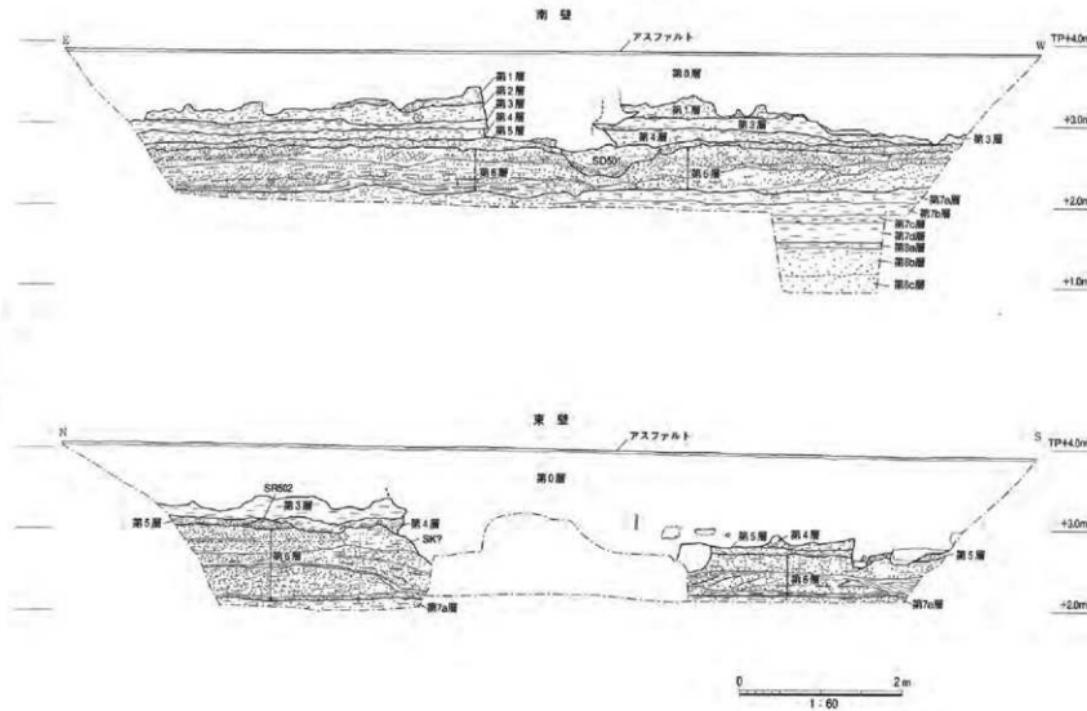


写真2 第7層出土の株



写真3 深掘り部南壁断面(北から)

図4 地盤構造断面図



期を特定できる資料はない。

第4層：古墳時代以降の作土層である。褐色の細粒砂質シルトからなり、酸化鉄の結核を産する。層厚は10cmであった。本層の上面でSR401を検出した。図8に示した須恵器2などが出土している。

第5層：古墳時代以降の作土層であり、黄褐色細粒砂質シルトからなる。層厚は13cmであった。本層の上面ではSK503、層内ではSD501、下面ではSK603・604を検出した。土師器・須恵器・サヌカイト剥片が出土した。

第6層：時期不詳の自然堆積層であり、層厚は50cmであった。第6a～6c層の3層に細分できる。第6a層は灰黄色の細粒砂～細礫からなり、部分的に西→東への古流向を示すフォアセット・ラミナが観察できた(写真1)。第6b層は、灰オリーブ色の植物遺体を多く含むシルト層と細粒砂層が互層をなす。第6c層は植物遺体を多く含む灰色シルトからなり、細粒～中粒砂の薄層が挟在する。本層の上面でSK601・602を検出した。本層から遺物は出土していない。

第7層：時期不詳の自然堆積層であり、第7a～7d層の4層に細分できる。層厚は65cmであった。なお、第7c層以下は深掘り部分でのみ確認した(写真3)。第7a層は植物遺体・昆虫遺体を含む灰色極細粒砂質シルトからなる。上面でSX701を検出した。第7b層は灰色粘土質シルトからなり、植物遺体・昆虫遺体を含む。第7c層は植物遺体を多く含む黄灰色粘土質シルトからなる。第7d層は黄灰色粘土質シルトからなる。第7層から土器類は出土していないが、原位置を保って埋没したと思われる木本植物の株を検出した(写真2)。

第8層：縄文時代後期以降の自然堆積層であり、第8a～8c層の3層に細分できる。層厚は55cm以上ある。第8a層は黒色細粒砂質シルトからなり、水平方向に延びる直径1～2cmのシルトが観察できた。ヨシなどの地下茎の痕跡、ないしは動物の巣穴化石であろう。第8b層はオリーブ黒色中粒～細粒砂からなり、上方へわずかに細粒化している。第8c層は灰色中粒～粗粒砂からなる。深掘りは安全確保の観点から重機により行ったため、第8a～8c層のいずれに帰属するものか明確ではないが、図8に示した縄文土器1のほか、弥生時代中期の土器が出土している。

ii) 遺構と遺物

a. 第7層上面の遺構(図5)

調査区南半の中央部分で、第6層で埋る不定形な落込みSX701を検出した。SX701は東西1.5m、南北1.1mの規模があり、検出面からの深さは0.1mである。加工痕や加工時形成層は確認できなかった。遺物は出土していない。

b. 第6層上面・第5層下面の遺構(図6)

第6層の上面で土壌SK601・602を、第5層の下面で土壌SK603・604を検出した。

SK601 調査区南半の中央部で検出した。東西1.1m、南北1.3mの規模があり、検出面からの深さは0.3mであった。埋土は第5層由来の偽礫を多く含む細粒砂である。また、当遺構の南側には幅0.1m、深さ0.1mの溝が取付いていた。当遺構からはサスカイトおよび土師器が出土した。

SK602 調査区の西北隅で検出した。東西3.8m以上、南北1.1m以上の規模があり、遺構の西・北

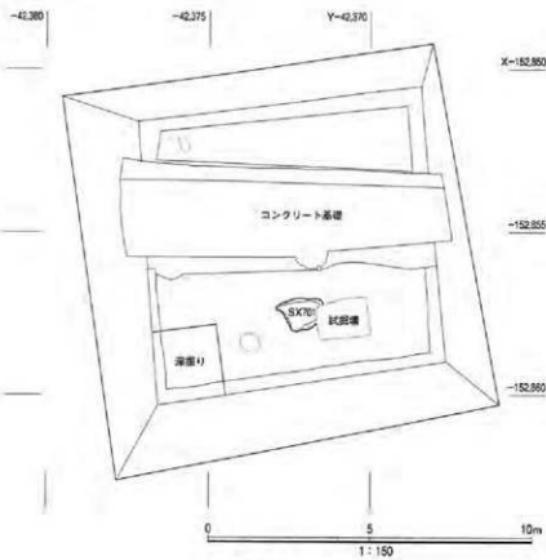


図5 第7層上面造構平面図

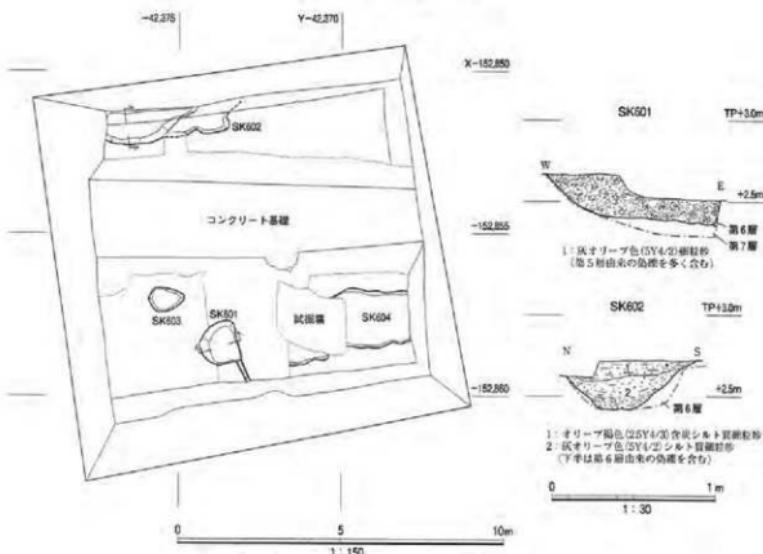


図6 第6層上面・第5層下面造構平面図・断面図

は調査区外へと延びる。検出面からの深さは0.3mであった。埋土は下半が第6層由來の偽縛を多く含むシルト質細粒砂、上半が炭を含むシルト質細粒砂である。当遺構から遺物は出土していない。

SK603 調査区南半の西部で検出した。東西1.1m、南北0.8mの規模がある。検出面からの深さは0.1mであり、第5層を埋土とする。当遺構から遺物は出土していない。

SK604 調査区の東南部で検出した。東西3.8m以上、南北1.8mで、遺構の東端は調査区外へと続き、西端は擾乱によって破壊されていた。検出面からの深さは0.1mであり、第5層を埋土とする。当遺構から遺物は出土していない。

c. 第5層上面・層内・第4層上面遺構平面図・断面図

第5層の上面で土壤SK503を、層内でSD501を検出した。また第4層上面で畦畔SR401を検出した。

SK503 調査区南半の中央部で検出した。平面形は橢円形を呈し、長径0.6m、短径0.3mで、検出面からの深さは0.1mであった。当遺構から遺物は出土していない。

SD501 調査区南半の中央部で検出した。第5層の層内で検出したが、第5層が作土であることから、本来は上面の遺構であった可能性がある。南北に延び、長さは3.3m以上、幅は1.7mある。遺構の北・東側は擾乱によって破壊され、南側は調査区外へと続く。埋土は下半が第6層由來の偽縛を含む細粒砂質シルト、上半はシルト質細粒砂である。当遺構からは土師器が出土した。

SR401 調査区の東北部で検出した。第5層を盛り上げて形成された残存高0.1m未溝の畦畔であ

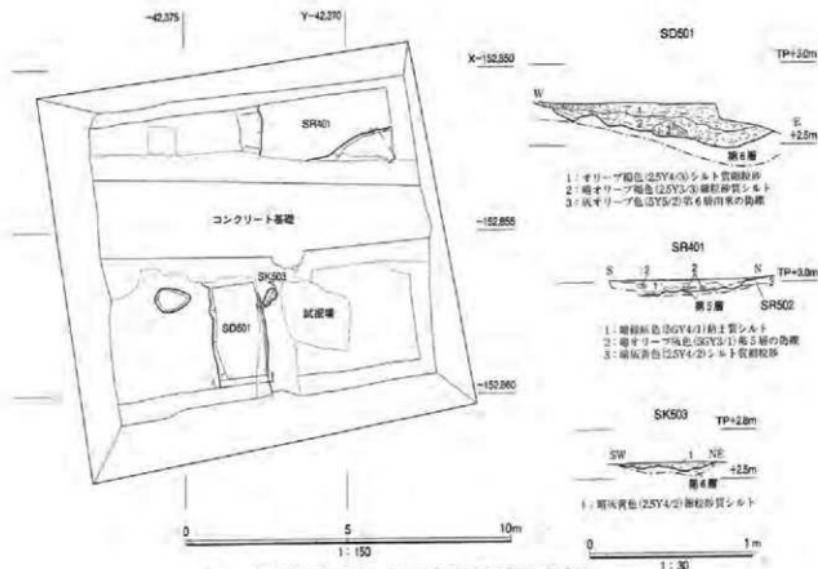


図7 第5層上面・層内、第4層上面遺構平面図・断面図



図8 出土遺物実測図

第8層(1)、第4層(2)

り、本遺構に伴う作土は第4層である。南北1.8m分を検出し、北側は調査区外へと延び、南側は擾乱によって破壊されていた。東西幅は検出範囲の北端で4.1m、南端で1.5mであった。

d. 出土遺物(図8)

第8層から出土した縄文土器1および第4層から出土した須恵器2を図示した。

1は浅鉢の体部と考えられる。内面・外面とも巻貝による条痕調整を施し、外面には巻貝による沈線を3条巡らせる。形態・調整・施文の特徴から、縄文時代後中期の宮流式、ないし晩期前半の滋賀里式に属する資料であろう[戸沢充則編1994]。

2は壺の体部である。外面には平行タタキ痕、内面には同心円状の当て具痕を有する。

3)まとめ

以下に、今回の発掘調査成果をまとめる。

- 少なくとも弥生時代まで、当地は湿地であった(第8層)。第8層から縄文時代後期ないし晩期の土器、および弥生時代中期の土器が出土していることから、周辺に該期の居住域などが存在した可能性がある。

- その後、調査地は氾濫原となる(第7・6層)。このうち第6層では、部分的に西→東への流向を示すフォアセット・ラミナが観察できた。

- 古墳時代以降のある時期に、こうした湿润な環境を利用して、調査地は水田として開発される(第5層)。こうした耕作地としての利用は、以後、現代まで継続した。

このうち第8層から縄文土器・弥生土器が出土したことは、該期の遺跡が近隣に存在したことを示すとりわけ重要な成果であり、今後、周辺地域での調査の進展が期待される。

引用文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003、「酒呑塚古墳発掘調査(SA01-2)報告書」:「平成13年度 大阪市内掘立文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.113-118
- 大阪市文化財協会1996、「田辺4丁目における遺跡所在を確認調査(TQ95-1)略報」
- 大阪市文化財協会1998、「奈津遺跡発掘調査報告」
- 大阪文化財研究所2012、「東住吉区鷹合二丁目における建設工事に伴う酒呑塚古墳発掘調査(SA11-1)報告書」
- 戸沢充則編1994、「縄文時代研究事典」東京堂出版

南壁地層断面
(北西から)



第7層上面検出状況
(北から)



第6層上面検出状況
(北西から)



東住吉区杭全二丁目における建設工事に伴う
杭全遺跡発掘調査(KP12-1)報告書

調査個所 大阪市東住吉区杭全2丁目4-1ほか2筆
調査面積 19m²
調査期間 平成24年4月4日～4月5日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、高橋工

1) 調査に至る経緯と経過

杭全遺跡は桑津遺跡の東に隣接し、上町台地の東斜面が沖積平野に埋没する地域に立地する。

桑津遺跡が立地する上町台地は東に向って高度を減じ、KW86-2次調査地のあたりから氾濫性堆積物が見られるようになり、駒川と今川の間では完全に沖積平野の下に没するものとみられる[大阪市文化財協会1992・1998](図1)。桑津遺跡は縄文時代から近世にかけての複合遺跡であるが、1937年の京都帝国大学と大阪府の発掘調査以来、弥生時代中期の標識的な遺跡として夙に有名であった[小林行雄1942]。弥生時代中期の遺構は台地高所を中心に分布し、住居や墳墓、集落を画するとみられる大型の溝なども発見されている。いっぽう、沖積平野側の杭全遺跡は1994年に発見され、KW94-16次として行われた発掘調査で、弥生時代前期末の落込みや集落の区画とも関係しそうな大溝、古代の水田などが発見され、杭全遺跡として認識されるようになった[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1996a]。また、台地上の集落に伴う水田などの農業生産地は沖積平野側の杭全遺跡に展開することも想定されてきた[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1996b]。

当該地においては、建築工事に先立って大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、地表下1.9m以下で弥生時代とみられる遺物包含層や遺構面が確認されたため、本調査が行われることとなった。調査は、敷地の東寄りにトレーンチを設定して行ったが、表土層の崩落を防ぐために法面を確保したため、調査面積は予定より広く19m²となった(図2)。掘削方法は、表土については機械掘削、それ以下



図1 調査位置図



図2 調査区位置図

の地層や遺構の掘下げについては人力によった。掘下げ時は遺物の捕集に努め、適宜に写真撮影・実測を行って記録を作成した。また、本報告書で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。また水準値は東京湾平均海面値(TP.0)であり、本文・挿図中ではTP+○mと略記した。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

現在の地形では、調査地およびその周辺で地形の起伏はほとんどなく、平坦である。ただし、調査地が沖積平野に当ることは前述の通りで、地山層の標高は東に向って下がるものとみられる。建物の解体工事に伴う碎石やコンクリート般を多量に含む表土の下位に以下の7層を確認した。なお、調査区内は現代の土木工事による擾乱が激しく、以下の層序が遺存していたのは西南部のごく一部のみであった(図2)。

第1層：暗オリーブ灰色粘土質シルトからなる作土層で、層厚は10cmであった。遺物は出土しなかった。

第2層：暗オリーブ灰色細粒砂質粘土からなる作土層で、層厚は15cmであった。遺物は出土しなかった。

第3層：暗オリーブ灰色中粒砂質シルトからなる作土層で、層厚は20cmであった。遺物は出土しなかった。

第4層：灰色砂からなる河成堆積層で層厚は30cmであった。狭い範囲での観察ではあるが、ラミナの傾斜からは南西から北東への方向で堆積したものとみられた。この方向は駒川谷[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1996b]の方向に一致し(図1)、同谷から供給された堆積物であるかもしれない。遺物は出土しなかった。

図3 地層と遺構の関係図

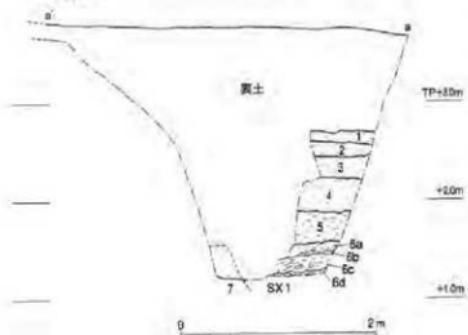


図4 地層断面図

第5層：灰色細粒砂質粘土からなる作土層で、層厚は30cmであった。庄内式の古式土器壺底部の破片1が出土した。

第6層：本層は土壤状の遺構とみられるSX1の埋土で、第6a～6d層の4層に細分された。第6a層は黒色細粒砂質粘土からなる自然堆積層で、遺構が埋没する最終段階に堆積した泥である。第6b層はオリーブ灰色粘土偽礫からなり、第6c・6d層とともにSX1内を人為的に埋めた際の堆積

物である。第6c層は地山偽礫質黒色粘土、第6d層は地山偽礫質黄灰色粘土からなる。

第7層：灰オリーブ色シルト質粘土からなる地山層である。遺存する部分で、本層上面の最高標高値はTP+1.2mであったが、この部分は現代に破壊されており、本来はSX1（第6a層）の上端と同じTP+1.5mほどであったものと考えられる。

ii) 遺構と遺物(図5・6)

第7層上面で土壤状の遺構SX1を検出した。

SX1 東西1m以上、南北1m以上、深さ0.3m以上で、平面形は東に膨らむ孤を呈しており、土壤状である。埋土は上述の第6a～6b層で、大部分を人為的に埋めたものとみられる。おもに第6a・6c層から庄内式古式土器2～4が出土した。2は壺ないし鉢の口部、3は山陰系の鼓形器台、4は壺口縁部で口縁端部を上方へつまみ上げる。これらは弥生時代後期末～古墳時代初頭のものである。

3)まとめ

今回の調査では、時期は不明ながら沖積平野に営まれた水田と弥生時代末～古墳時代初頭の遺構を発見することができた。台地側の桑津遺跡で発見されている主要な遺構の時代は、弥生時代中・後期、古墳時代中期、飛鳥・奈良時代で、弥生時代末～古墳時代初頭のものは未発見である。KW94-16次調査の弥生時代前期の遺構も台地側では未発見で、台地と沖積平野の間を時代によって居住地が移動した可能性を考えることができ、台地側に居住地があった時代の農業生産地が沖積平野に展開したともみることもできる。いずれにしても、集落の空間利用のあり方、その変遷を考える上で桑津遺跡と本遺跡をセットとしてとらえることが重要で、特に沖積地帯に当る杭全遺跡での調査例が増えることが期待される。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1996a、「上町商事(株)による発掘調査(KW94-16)」:『平成6年度大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、p83-96

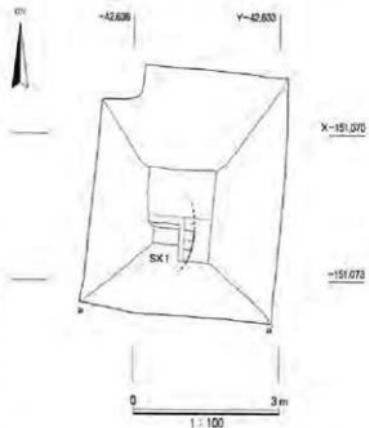


図5 遺構平面図

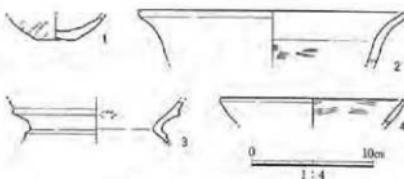


図6 出土遺物実測図

第5層(1)、SX1(2～4)

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1996b、「西井邸建築に伴う発掘調査(KW94-23)」:『平成6年度大阪市内文化財包蔵地発掘調査報告書』、p97-104

大阪市文化財協会1992、「ジャパンビルダーによる建設工事に伴う桑津遺跡発掘調査(KW91-8)略報』

大阪文化財研究所1998、「桑津遺跡発掘調査報告』

小林行雄1942、「大阪市住吉区桑津町跡生式遺跡」:『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』第12輯

調査状況(北東から)



層序(北東から)



SX 1(北から)



平野区喜連西一丁目における建設工事にかかる
喜連西遺跡C地点発掘調査(KR12-4)報告書

調査個所 大阪市平野区喜連西一丁目1052-1
調査面積 499m²
調査期間 平成24年11月15日～12月21日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、岩本正二、小倉徹也

1) 調査にいたる経緯と経過(図1・2)

喜連西遺跡は大阪市域の東南部、平野区喜連西一丁目～四丁目一带に位置する弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。調査件数が少なく、遺跡の範囲や実態については明らかでない部分が多い。2010年に実施されたKR10-1次調査では、後期旧石器時代から弥生時代にかけての遺物のはほか、弥生時代末の墳丘墓・土壙、室町時代の掘立柱建物・堀溝群、近世後半の水田畦畔などの遺構が確認されている〔大阪文化財研究所2012a〕。また、2012年に実施されたKR12-1次調査では、弥生時代中期後半・後期後半の土器が出土し、中世以降、現代にいたるまでの作土層が確認されており、中世以後に土地開発が進んだことが明らかとなっている〔大阪文化財研究所2012b〕。

住宅建設予定地の3箇所で実施された大阪市教育委員会による試掘調査で、現地表下約1.1mにおいて、古代から近世にかけての遺物と遺構面の存在を確認したため、本格的な発掘調査を実施することになった。

調査区は南北2箇所を設定した。北区は東西10m×南北20m、南区は東西20m×南北10mである。なお、南区については調査区西側で検出した島畠状遺構の広がりと、南側で検出した井戸の深さを確認する必要が生じたため、調査の後半において西側と南側を幅3m拡張し、最終的には東西13m×南北23mとなった。調査は11月15日より着手し、重機で盛土層(第0層)と現代水田作土(第1層)を除去した後、人力による掘下げを行った。遺構の検出・実測・撮影など必要な記録作業を行い、12月21日までに埋戻し、機材の撤収など、現地におけるすべての作業を完了した。



図1 調査地の位置図

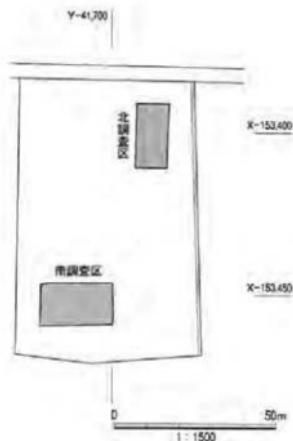


图 2 调查区位置图

なお、基準点は専門業者がスタティック測量で測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

調査地周辺は平坦で、およそTP+4.95mである。現地表下約3.8m(TP+1.1m)までの地層を観察し、その結果に基づいて本調査地の層序を組み立てた。以下に各層の層相や特徴を記し、地層と遺構の関係図を図3、地層断面図を図4に示す。

第0層：現代の盛土層で、解体時の整地土である。層厚50~60cmである。

第1層：暗オリーブ灰色極細粒砂質シルトからなる作土層(旧表土)で、層厚は北区で約10cm、南区で約20cmである。

第2層：シルトを主体とする作土層で、第2a・2b層の2層に細分された。第2a層は暗オリーブ灰色ないしオリーブ黒色の細粒砂質シルトからなり、層厚は北区で10~15cm、南区で約10cmである。第2b層は暗オリーブ灰色ないしオリーブ黒色のわずかに細粒砂シルトからなり、層厚は北区で約20cm、南区で約10cmである。北区では18~19世紀の陶磁器、南区では18世紀前葉頃の肥前磁器が出土した。

第3層：砂質シルトを主体とする作土層で、第3a~c層の3層に細分された。第3a・3b層は両調査区に、第3c層は北区にのみ分布する。第3a層は灰オリーブ色ないしオリーブ黒色の細粒砂質シルトからなる。層厚は北区で約20cm、南区で約15cmである。第3b層は灰オリーブ色ないしオリーブ黒色の極細粒~細粒砂質シルトからなる。層厚は北区で約20cm、南区で約10cmである。第3c層はオリーブ褐色極細

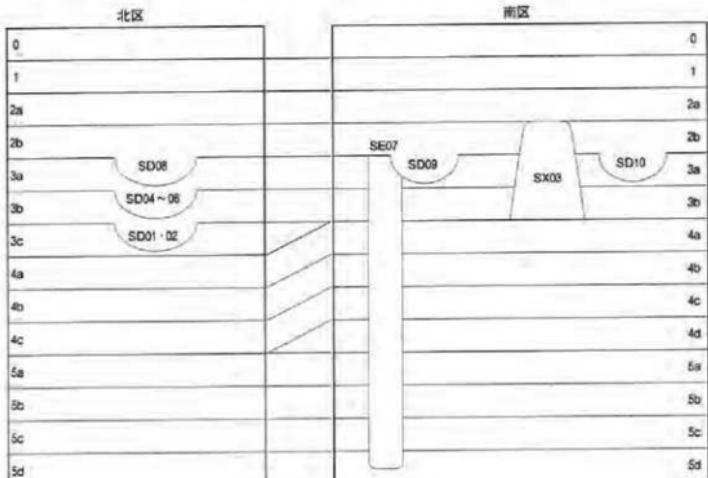


図3 地層と遺構の関係図

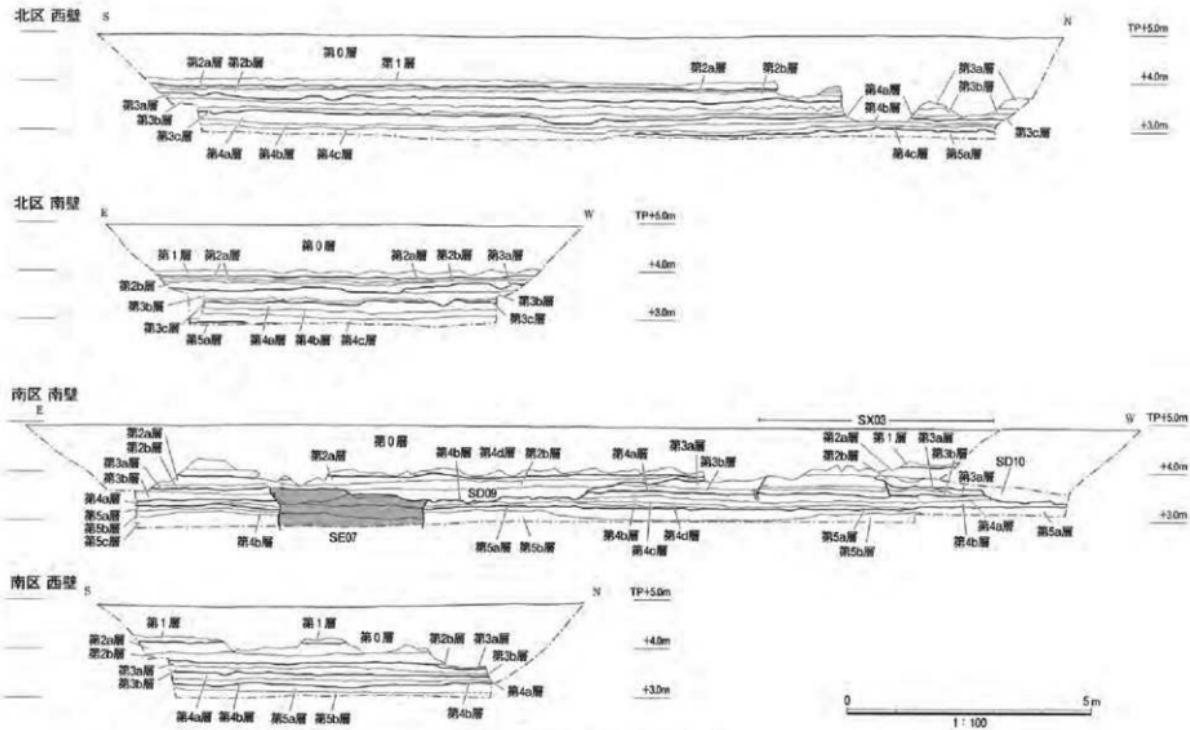


图4 南·北区南壁·西壁地层断面图

粒砂質シルトからなり、層厚約10cmである。第3a・3b層からは18世紀代の遺物、第3c層からは土師器(古代以前)が出土した。

第4層：砂質シルトを主体とし、第4a～d層の4層に細分された。第4a～c層は両調査区に、第4d層は南区にのみ分布する。第4a層は北区ではオリーブ褐色極細粒砂質シルトからなり、黄灰色極細粒砂の薄層を複数枚挟んでいたことから、たびたび洪水による氾濫の影響を受けていると考えられた。南区では暗オリーブ灰色細粒砂質シルトからなる。層厚は北区で約20cm、南区で10～15cmである。第4b層は北区では暗灰黄色極細粒砂質シルト～シルトからなり、南区では灰色細粒砂質シルトからなる。層厚は北区で約10cm、南区で10～15cmである。第4c層は北区では褐色極細粒砂質シルト～シルトからなり、植物の根の痕跡が顕著に見られた。南区では暗灰黄色細粒砂質シルトからなり、層中に灰色細粒砂の薄層を挟んでいた。層厚は両調査区ともに約10cmである。第4d層は灰色細粒砂質シルトで、層厚約10cmである。調査区中央部に認められた。なお、第4a～c層にいずれも擾乱が認められ、作土層の可能性はあるが、遺構は確認できなかった。第4a層からは6世紀後半、第4b層からは古代以前の土師器が出土している。

第5層：河川の氾濫堆積層および湿地の堆積層で、第5a～d層の4層に細分された。第5a・5b層は両調査区で、第5c・5d層はおもに南調査区で確認した。第5a層は灰色ないし暗オリーブ灰色、黒褐色シルトからなり、植物遺体のラミナが目立った。層厚は北区で約30cm、南区で約15cmである。第5b層は北区では灰色極細粒砂と灰色ないし暗オリーブ灰色の極細粒砂質シルトの互層からなり、植物遺体のラミナが目立った。層厚は北区で約45cm、南区で30cm以上である。第5c層は灰色極細粒砂～粗粒砂からなり、層厚約55cmである。第5d層は灰色極細粒砂と灰色ないし暗オリーブ灰色の極細粒砂質シルトの互層からなり、植物遺体のラミナがめだつ。層厚約50cm以上である。なお、第5層から遺物は出土しなかった。

ii) 近世の遺構と遺物

a. 第4a層上面・第3b層上面および下面の遺構(図5・6・11)

北区の第3b層下面においてSD01・02を、南区の第3b層上面においてSX03を検出した。

SD01 中央部で検出した南北方向の掘溝である。長さ12.5m以上、幅0.6m、深さ0.1mで、埋土は灰オリーブ色シルトである。

SD02 中央部で検出した南北方向の掘溝で、SD05の東1.5mの位置にある。長さ11.0m以上、幅0.5m、深さ0.1mで、埋土は灰オリーブ色シルトである。

SX03 西部で検出した南北方向の島畠状の遺構で、長さ8.5m以上、上端幅3.8m・下端幅4.2m、高さ0.2mである。オリーブ褐色細粒砂質シルトからなる。後の第2b層の耕起によって削剥されるまで存続していた。

土師器、須恵器杯3・1、須恵器壺(古墳時代後半～古代)、黒色土器、瓦器碗2、瓦器皿5、束縛系須恵器鉢4、中国産白磁など複数の時期の遺物が出土した。3は須恵器杯Bで、8世紀中頃であろう。1は須恵器杯G蓋で、天井部はヘラケズリされている。7世紀末である。2の高台は貼付けで、断面は台形である。11世紀後半～12世紀初頭頃である。5は口径10.9cm、高さ2.3cm、内面には円弧状の

暗文がある。12~13世紀であろう。4は13世紀前半のものである。

b. 第3a層上面および下面の遺構(図7・8・11)

北区の第3a層下面においてSD04~06を、南区の第3a層上面においてSE07を検出した。

SD04 調査区中央部で検出した南北方向の鋤溝である。長さ12.5m以上、幅0.6m、深さ0.1~0.2mで、埋土はオリーブ褐色のわずかに細粒砂質シルトである。

SD05 調査区東部で検出した南北方向の鋤溝である。長さ13.0m以上、幅0.6m、深さ0.2mで、埋土はオリーブ褐色細粒砂質シルトである。

SD06 調査区西部で検出した南北方向の鋤溝である。長さ9.0m以上、幅0.8m、深さ0.2mで、埋土はオリーブ褐色細粒砂質シルトである。

SE07 東西長3.2m、南北長2.7m、深さ約2.3mの楕円形井戸である。井戸の埋土は灰色細粒砂質シルトないし灰オリーブ色シルトで、シルトや砂の偽縛を含む。

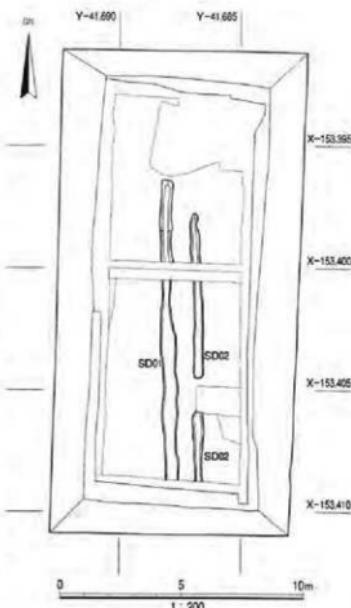


図5 北区第3b層下面遺構平面図

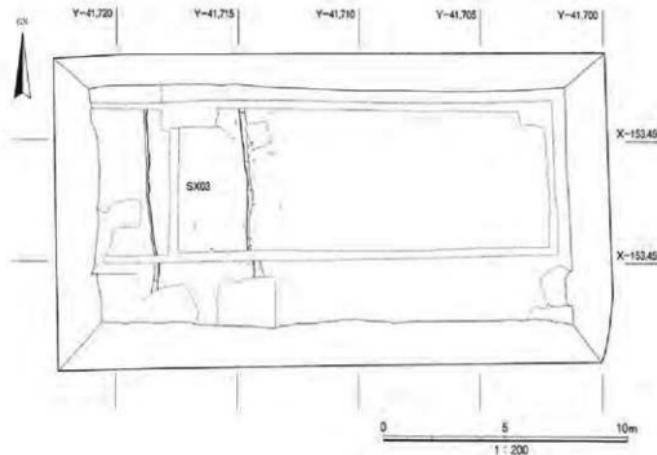


図6 南区第4a層上面遺構平面図

埋土上部から17世紀初頭の肥前陶器碗、土師器
壺10、井戸瓦11、古代以前の土師器・須恵器な
ど複数の時期の遺物が出土した。10は底部と体部
の境に面取りを行う。11は長さ29.6cm、幅24.2cm、
厚さ2.7cm、凸面に刻み目は施されていない。現状
では素掘り井戸であるが、井戸瓦11が出土してお
り、当初は瓦を使用した井戸側が存在した可能性
がある。耕作に関係する井戸であろう。

また、前述のSX03を検出した。上端幅2.0m、下
端幅2.5mと幅を狭めていた。

c. 第2b層下面の遺構(図9~11)

北区でSD08、南区でSD09・10を第2b層下面で
検出した。

SD08 北区西部で検出した南北方向の鶴溝である。
長さ17.0m以上、幅0.7m、深さ0.1mで、埋土
は灰色シルトである。古代以前とみられる土師器
が出土した。

SD09 南区中央部で検出した南北方向の鶴溝
で、長さ8.5m以上、幅2.4~4.4m、深さ0.2mで、

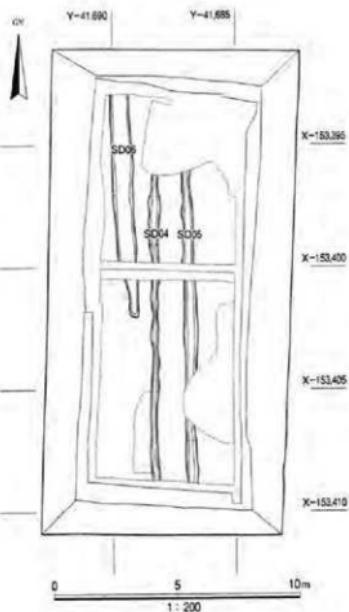


図7 北区第3a層下面遺構平面図

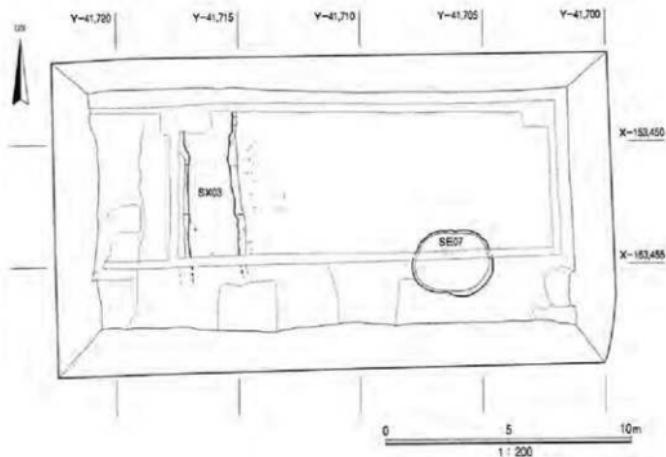


図8 南区第3a層上面遺構平面図

南側では幅が狭くなっている。埋土は灰色シルトである。溝下底では中央部が2条の溝状を呈し、一部北側では、偶蹄類の踏み痕跡がみつかった。

古代以前の土師器・須恵器、中世の焼締陶器から近世まで複数の時期の遺物が出土した。6は肥前陶器鉢で、内面は刷毛目による波文状、外面は上半部を薄く施釉する。17世紀末～18世紀初頭頃であろう。

SD10 南区西部で検出した南北方向の鋤溝で、長さ9.00m以上、幅1.20m以上、深さ0.15mで、埋土は暗オリーブ灰色シルトである。溝下底は溝状にさらに一段下がる。

古代以前の須恵器杯・甕、土師器、肥前陶器碗7・8、18世紀代の肥前磁器碗が出土した。8は京焼風陶器碗で、高台内の割りは深い。7は呉器手鏡で、置付けは軸刺ぎである。7・8は17世紀末～18世紀初頭であろう。

Ⅲ) 各層出土遺物(図11)

第3b層から出土した肥前陶器灰釉碗9は、見込みに胎土目が残り、17世紀初頭のものである。

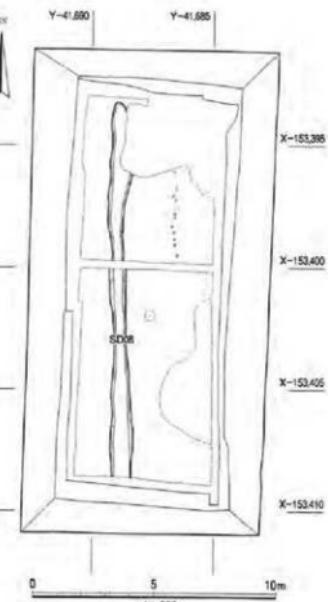


図9 北区第2b層下面遺構平面図

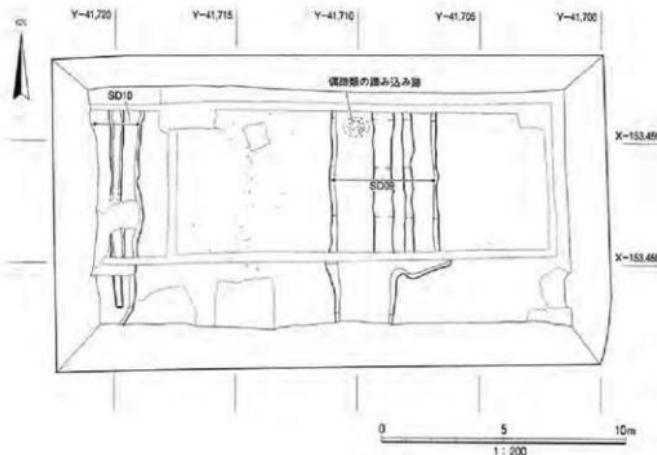


図10 南区第25層上面・下面遺構平面図

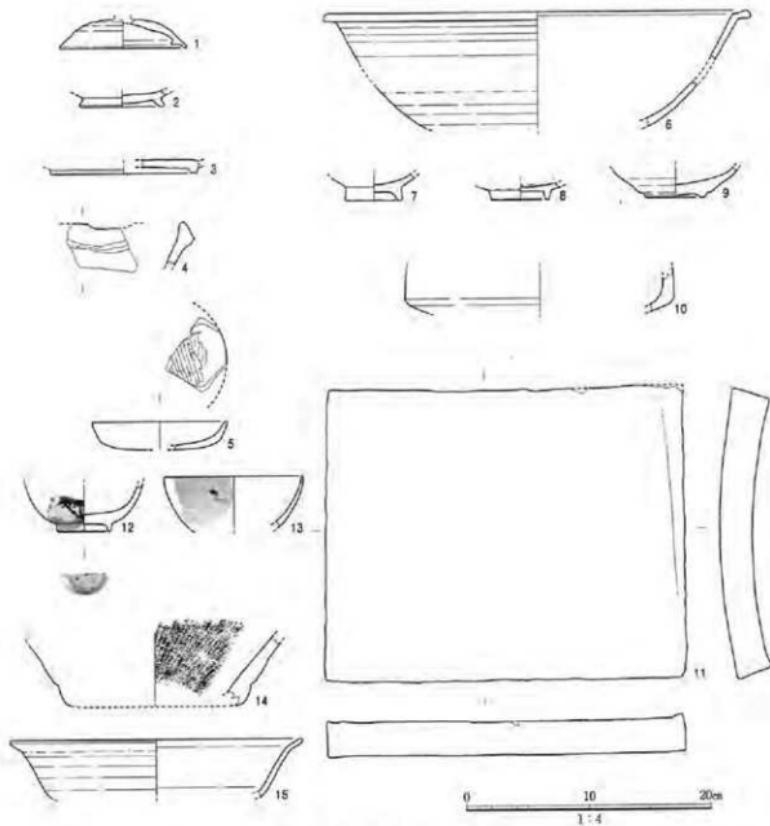


図11 出土遺物実測図

SX03(1～5)、SD09(6)、SD10(7・8)、SE07(10・11)、第2b層(12・15)、第3a層(13・14)、第3b層(9)

第3a層からは丹波焼描鉢14と肥前磁器染付碗13などが出土した。14は楕描きにより描目を施し、17世紀後半～18世紀初頭頃のものである。

第2b層からは肥前陶器皿15や肥前磁器染付碗12などが出土した。15は内面を銅緑釉、外面を灰釉に掛け分ける。12は高台内に銘が描かれる。18世紀前葉のものである。

3)まとめ

調査地の地形区分は氾濫平野に分類されており[建設省国土地理院1965]、住宅地になる以前の水田面は標高約4.4mである。また、1887年の地図では、北調査区の北側約5mと南約150mにおいて、北

西へ流下する小河川がそれぞれ存在しており〔参謀本部陸軍部測量局1887〕、河川の氾濫を受け易い場所であった。

この地が開発された時期を確定するのはむずかしいが、おそらく中世に遡ると考えられる。ただし、洪水をたびたび受けしており、安定した耕作地形成には至らなかったと思われる。

近世になると本格的に開発されている事は今回の調査において確認できた。おそらく、水田開発と考えられる。また、近世の井戸を検出しており、灌漑に利用していたのであろう。まだまだ当地周辺を知るには資料も少なく、今後も周辺地の調査事例を積み重ねていくことが望まれる。

引用・参考文献

大阪文化財研究所2012a、『喜連西遺跡発掘調査報告』

2012b、『喜連西遺跡発掘調査報告』II

亀井聰2002、「池島・福万寺遺跡における近現代の井戸」『大阪文化財論集』II、財團法人大阪府文化財センター、pp.297-316

建設省国土地理院1965、「土地条件調査報告書(大阪平野)」

参謀本部陸軍部測量局1887、「京阪地方仮製二万分の一地形図」明治20年測量

北区 第3b層下面全景
(北から)



北区 第3a層下面全景
(南から)



北区 第2b層下面全景
(北西から)



南区 第4a層上面全景
(西から)



南区 第3a層上面遺構
(SE07：東から)



南区 第2b層下面遺構
(SD09・10：西から)



平野区長吉出戸四丁目における建設工事に伴う
長原遺跡発掘調査(NG12-4)報告書

調査個所 大阪市平野区長吉出戸 4 丁目436- 8
調査面積 56m²
調査期間 平成24年11月29日～平成24年12月 5 日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
調査担当者 次長 南秀雄、小倉徹也

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は長原遺跡の西北部に位置し、近隣ではこれまで多くの調査が行われている(図1)。北西50m地点のDD1次調査では古墳時代中期の方墳5基をはじめ、近世にかけての造構と遺物が発見されている。調査地西側から北側にかけての道路で行ったDD82-1次調査では鎌倉~室町時代の井戸・溝・土壙・柱穴を確認している[大阪市文化財協会2006]。西80m地点で行ったDD84-1次調査地では古墳時代中期の古墳2基、奈良時代の水田跡、平安~室町時代の掘立柱建物や井戸を検出している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1986]。東80m地点で行ったNG87-43次調査では室町時代の掘立柱建物を、北西150m地点で行ったNG91-16次調査では奈良時代の用・排水路とみられる溝、鎌倉時代の耕作痕跡を検出している[大阪市文化財協会2006]。

地籍図(図3)では、調査地は小字「清水浦」に当り、近辺に「清水」の字名の多いことから水の豊富な地帯であることが想定され、隣接するDD82-1次調査の結果を考え合わせて井戸の検出が推定された。西に接して「寺山」、「山王」といった寺院に関する地名が認められる。このことから、寺院に関連する遺構の発見も推測された。

当該地において大阪市教育委員会による試掘調査が2012年11月1日に実施され、現地表下1.2mで中世以前の造構が検出された。この結果を受け、建設工事に先立って発掘調査を行うことになった。

敷地内のはば中央部に南北7m×東西8mの調査区を設定し、2012年11月29日から調査を開始した(図2)。造構や遺物の検出に努めながら人力で慎重に掘り下げ、平面図や断面図の作成、写真撮影などの記録作業を行ったのち、12月5日に現地における作業を完了した。

以下、本文および挿図に示す標高はTP値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。方位は現場





図3 調査地周辺の字名

図4 地層と遺構の関係図

で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。

2)調査の結果

i)層序

調査地における現地表の標高は敷地北部でTP+10.9m、南部でTP+10.6mとやや南の道路側へ傾斜していた。現地表下2.4m(TP+8.5m)までの地層を観察した結果に基づいて、調査地の層序を組み立てた。以下に各層の岩相や特徴を記し、地層と遺構の関係図を図4、北壁・西壁・南壁地層断面図を図5~7に示す。

第0層：現代の盛土層および擾乱で、層厚は90~100cmである。長原0層に対比される。

第1層：第1a・1b層に区分できる近現代の作土層である。第1a層は黒褐色のわずかに細礫混りシルト質粗粒～中粒砂、第1b層は暗オリーブ褐色のわずかに細礫混りシルト質中粒～粗粒砂からなる。層厚は第1a層が10~20cm、第1b層が10cm以下である。第1a・1b層は長原1層に対比される。

第2層：第2a～2c層に区分できる中世の作土層である。第2a層は暗オリーブ褐色のわずかに中～細礫質中粒～粗粒砂、第2b層は暗オリーブ褐色のわずかに細～中礫質中粒～細粒砂、第2c層はオリーブ褐色のわずかに細～中礫質細粒～中粒砂からなる。第2a～2c層は淘汰が悪く、こなれた作土ではなかった。層厚は第2a・2b層がそれぞれ5~20cm、第2c層が40cm以下である。第2a～2b層は調査区全域に、第2c層は調査区北部、後述するSD08上に分布する。北壁断面で第2c層内に砂脈が観察され、第2b層によって切られていた。第2b層上面には乾痕が目立って観察された。第2a層上面で戸井SE01、小穴SP02~05を検出した。第2b・2c層から15世紀代の遺物が出土しており、第2a～2c層は長原3層に対比される。

第3層：第3a・3b層に区分した。第3a層は灰オリーブ色のわずかにシルト質中粒砂～中礫、第3b層は灰オリーブ色ないしオリーブ褐色の中粒砂～中礫からなる。第3a層は第3b層を母材とした盛土を

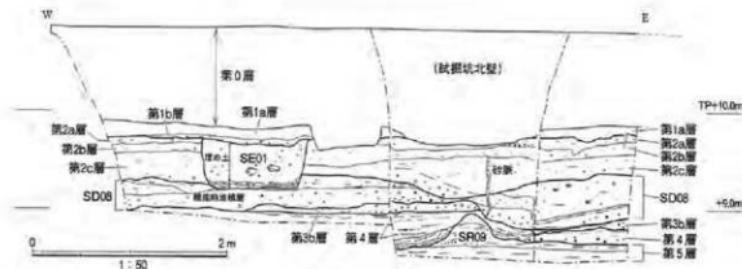


図5 北壁地層断面

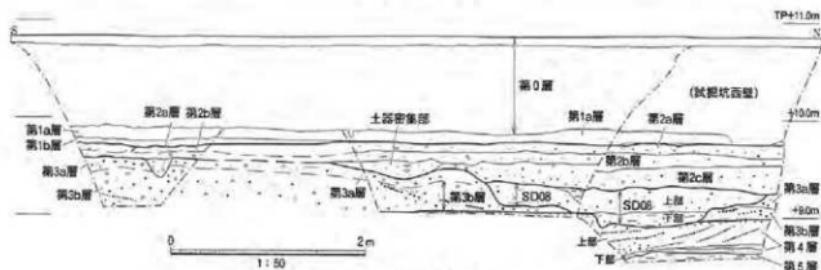


図6 西壁地層断面

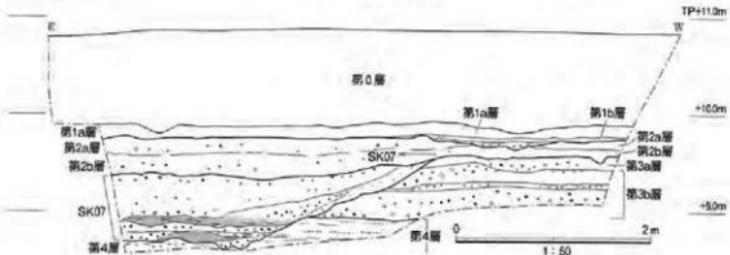


図7 南壁地層断面

耕作したものである。第3b層はトラフ型斜交ラミナの観察される河川の氾濫堆積層である。層厚は第3a層が20cm以下、第3b層が30cm以下である。第3a・3b層は調査区全域に分布し、第3a層上面で畦畔状の高まり SX06 と土壤 SK07、溝 SD08 を検出した。第3a・3b層は長原3層に対比される。

第4層：上部がオリーブ褐色ないし黄褐色の中粒～粗粒砂、下部が黄褐色ないし灰オリーブ色の極細粒砂からなる、ともに河川の氾濫堆積層である。上部にはトラフ型斜交ラミナが、下部には平行ラミナが観察された。層厚は上部が30～45cm、下部が5～15cmである。周辺の調査結果を考え合わせて、上部が長原5A層、下部が長原5B層に対比されると考えられる。

第5層：灰オリーブ色ないし暗緑灰色の細粒～極細粒砂質シルトからなる作土層である。層厚は20cm以上である。上面で畦畔 SR09 と偶蹄類の足跡を検出した。周辺の調査結果を考え合わせて、長原

6A層に対比されると考えられる。

ii) 造構と遺物

a) 飛鳥～奈良時代の造構(図5・8)

第5層上面で畦畔SR09と足跡を検出した。

SR09は北北西～南南東方向で、確認した延長は2.1mであった。幅は上端が0.1～0.3m、基底が0.4～0.6mであった。基底からの高さは西側が0.2～0.3m、東側が約0.2mであった。SR09を挟んで東西に偶蹄類の足跡が認められた。

b) 鎌倉～室町時代の造構と遺物(図5～7・9～12)

第3a層上面において畦畔状の高まり SX06と土壙SK07、溝SD08を検出した。第2a層下底付近で土器が密集して出土した(以下、土器密集部といふ)。

SX06は東北東～西南西方向および、これに直行する北北西～南南東方向の「L」字状の高まりで、西部分は調査範囲外となり詳細は不明である。検出した幅は上端で0.3～0.9m、下端で0.8～1.2mで、高さは0.2～0.3mであった。

SK07は検出した南北長が4.0m、東西長は3.9m、深さは0.6mであった。埋土の上部はオリーブ褐色粗粒砂～細砾、下部は黒褐色シルト質粗粒砂～細粒砂質シルトと黒褐色細粒～粗粒砂との互層からなる。全体の中の西北部分を検出したと考えた。

SK07からは土師器皿1～8、東播系須恵器鉢9、瓦器輪11・12・皿10、瓦質土器羽釜13などが出土した(註1)。土師器皿1は口径7.4cmで、胎土には雲母を多く含む。皿2・3は口縁端部を僅かにつまみ上げる。2は口径10.6cm、3は10.9cmで、2には口縁部に灯芯痕が残る。4はいわゆるコースター

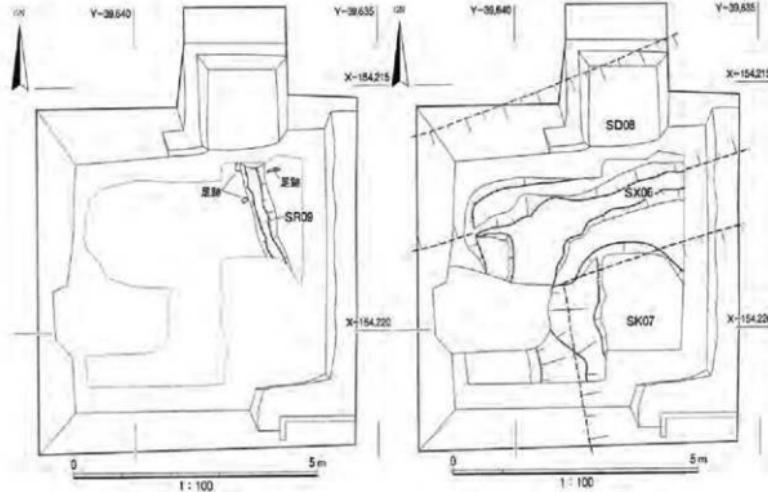


図8 第5層上面造構平面図

図9 第3a層上面造構平面図

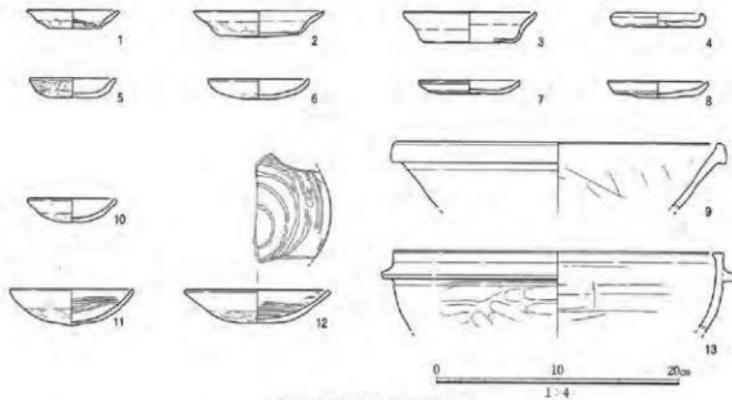


图10 SK07出土遗物实测图

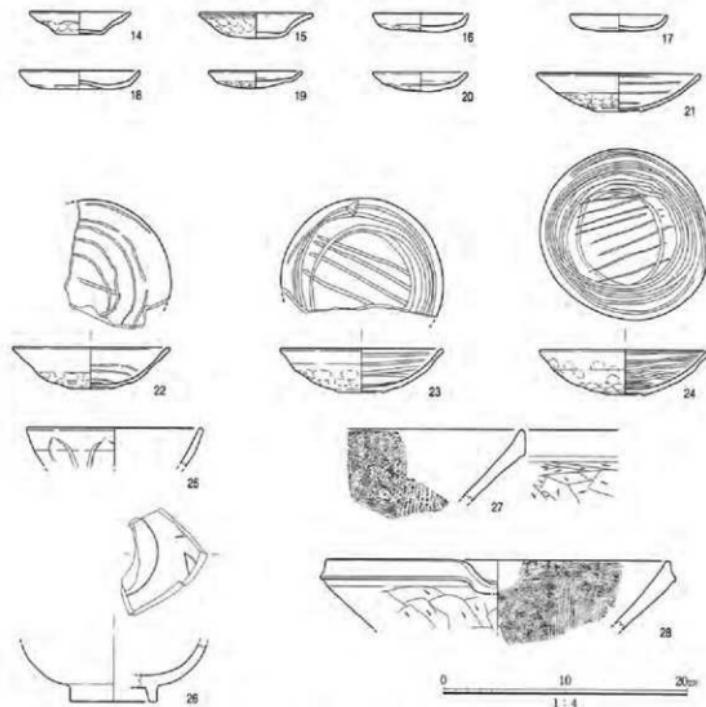


图11 第2a~2c层出土遗物实测图

第2c层(14·16·21)、第2b层(15·25~28)、第2a层(17~20、22~24)

形の皿で、口径7.0cmである。皿5は口径7.0cmで、口縁部に灯芯痕が残る。皿6は口径8.2cmで、内面にナデ、外面は未調整である。皿7・8は、体部に強いヨコナデを施す。7は口径8.2cm、8は8.1cmである。東播系須恵器鉢9は口縁部外面が下方へ拡張する。内面は櫛目状のヘラ描きが施される。瓦器皿10は口径7.2cmで、内外面共にミガキは施されていない。碗11は口径10.1cm、器高3.0cmで、高台は持たない。碗12は痕跡器官としてわずかに高台が残る。口径11.7cm、器高2.7cmである。羽釜13は瓦器羽釜を模倣した瓦質土器の羽釜である。

SK07から出土した遺物の多くは13世紀後葉～14世紀前葉を中心としているが、土師器皿1が15世紀に入る特徴をもつことから、15世紀前葉までの遺物群であると考えられる。

SD08は東北東～西南西方向の溝で、検出した幅は2.5m、深さは0.4～0.5mであった。埋土の上部は灰オリーブ色のわずかにシルト質中粒～細粒砂からなり、炭を含む。下部は黒褐色のシルト質中粒～粗粒砂で、シルト質細粒砂の偽礫を含む。

調査面積が狭く、全体を捉えることはできなかったが、盛土の後に作土化した第3a層の駐畔状の高まりSX06が、鳥状に残されたように、SK07とSD08が位置していることから、これらは島畠の一部の状況を示していると考えられた。

第2a層下底付近で検出した土器密集部では、土師器皿、瓦器鉢、須恵器鉢などがまとまって出土した。完形の遺物も含まれていたため、構造の埋土ではないかと考えられたが、掘形などを見つけることができなかった。

第2a～2c層から出土した遺物には年代差が認められず、遺物は一括して報告する。なお、第2a層から出土した遺物は、上述の土器密集部およびその周辺から出土したものである。

土師器皿14は体部下半部のユビオサエが顕著に残り、口径8.2cmである。皿15の口縁部は大きく外反し、口縁端部には灯芯痕が残る。皿16・17は口縁部のヨコナデが強く、共に口径7.8cmである。皿18は16・17より一回り大きく、口径9.8cmである。瓦器皿19・20は口縁部に強いヨコナデを施し、19は口径7.5cm、20は7.6cmである。碗23・24は体部内面のミガキを疊らにする。23は口径13.2cm、24は13.8cmである。22は23・24と比べてさらに内面のミガキが形骸化し、口径12.8cmである。瓦質土器描鉢27・28は、口縁端部外面に面を持ち、体部内面には櫛描きによる櫛目を施す。中国産青磁碗25は外面に片切彫りによる蓮弁文を施すが、粗雑である。碗26は内面に片切彫りにより文様を施す。高台内は軸

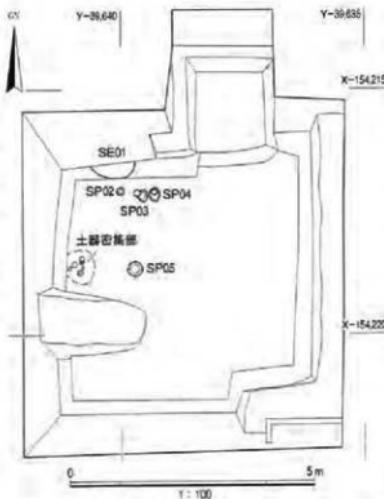


図12 第2a層上面遺構および下底の遺物出土状況平面図

を試っている。

第2a～2c層から出土した遺物の多くは13世紀後葉～14世紀前葉のものであるが、図示した土師器Ⅲ14や瓦質土器捕鉢27・28、中国産青磁碗25・26などの年代から、15世紀代に廃棄されたものであると考えられる。第2a～2c層は前述のように淘汰不良の作土層である。出土した遺物は破片ではなく、残りの良いもののが多かった。これらのことから、頗る耕作されていなかったと考えられた。

c) 近世の遺構(図5・6・12)

第2a層上面で井戸SE01、小穴SP02～05を検出した。

SE01は北壁断面および北側溝で確認した。北壁で確認した幅は1.1m、深さは0.4～0.5mであった。埋土の上部は暗オリーブ褐色の中粒～粗粒砂からなる埋戻し土で、下部は上半が灰色粗粒～中粒砂、下半が灰色のわずかにシルト質細粒砂からなる機能堆積層である。

SP02～04はいずれも円形の小穴で、直径0.15～0.16m、深さ0.1～0.2mであった。埋土は灰色のわずかにシルト質細粒～中粒砂からなる。

SP05は円形で直径0.21m、深さ0.2m、埋土は灰色のわずかにシルト質中粒～細粒砂であった。

d) 本調査地およびDD82-1次調査で検出された遺構の比較(図13)

本調査地では第3a層上面において、畦畔状の高まりSX06と土塁SK07、溝SD08の室町時代の遺構

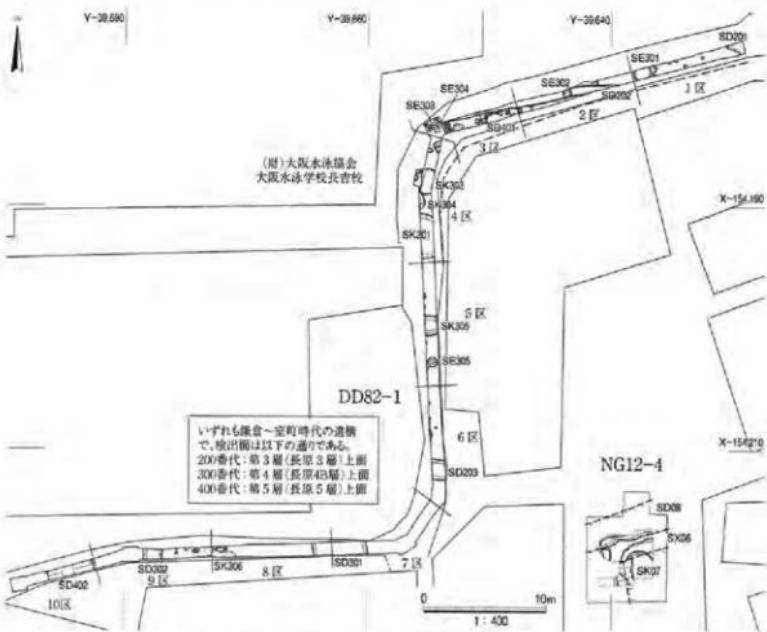


図13 DD82-1次調査地と今回の調査地の遺構配置図

を検出した。近接するDD82-1次調査地でも鎌倉-室町時代の遺構が多数検出されており、対応する遺構がないか比較したが、対応する遺構は確認できなかった。参考として、図13に両調査地の遺構配置図を掲載しておく。

3)まとめ

今回の調査では飛鳥～奈良時代の畦畔、島畠の一部とみられる室町時代の畦畔状高まりと溝・土壤、近世の井戸と小穴を検出した。また、近世以前の地層が良好に残っていることを確認した。冒頭でも述べたように、本地域周辺は地層の残存状況も良く、古墳時代以降の遺構も検出されているが、調査例はまだ少なく、変遷について不明な点もまだある。今回の調査結果を含め、今後行われる調査を合わせて検討していくことが必要である。

註)

1)本報告における遺物に関する記載および執筆は同研究所学芸員の渡邊晴香によるものである。

引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1986、「萩野貞一氏による共同住宅建設工事に伴う出戸4丁目所在遺跡発掘調査(DD84-1)略報」:『昭和59年度大阪市内埋蔵文化財発掘調査報告書』、pp.22-29
大阪市文化財協会2006、『長原遺跡発掘調査報告』XV

調査地全景
(北から)



東壁地層断面
(西から)



南壁地層断面
(北から)



SR09検出状況
(第5層上面: 南から)



第3a層上面検出状況
(北東から)



第2a層下底の
遺物出土状況
(土器密集部: 東から)



大 阪 市 内 埋 藏 文 化 財 包 藏 地
発 挖 調 査 報 告 書 (2012)

発行日 平成26年3月31日

発 行 大阪市教育委員会

(公財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所

編 集 大阪市教育委員会文化財保護担当
(大阪市北区中之島1-3-20)

印 刷 株式会社フォーラムK
